熊本県文化財調査報告第144集

ワクド石遺跡

熊本県菊池台地における縄文時代後期集落の調査

県営畑地帯総合土地改良事業に伴う文化財調査

1994

熊本県教育委員会編

遺 跡 空 中 写 真（南より）

遺 跡 空 中 写 真（南より）

縄文時代１号住居跡（東より）

1

2

3

4

5

1．ワクド石遺跡採集勾玉
（川上コレクション）
2．Ａ調査区柱穴群出土十字形石製品
3．ワクド石遺跡採集籾痕跡のある土器
（川上コレクション）
4．埋鉢２
5．埋鉢３

遺跡出土玉類（原石・剥片・未製品・完成品など）

遺跡出土土偶

遺跡出土彩色土器片

遺跡出土粘土塊

打製石斧石材

玄武岩質安山岩

角閃石安山岩

流紋岩質安山岩

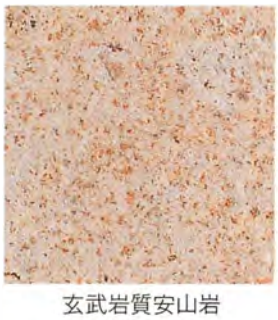
緑色片岩

緑色片岩

石英雲母片岩

珪質頁岩

磨製石斧石材


玄武岩質安山岩

角閃片岩

粘 板 岩

輝石安山岩

蛇 紋 岩

剥片石器石材

黒曜石(腰岳産)

黒曜石(姫島産)

安山岩(サヌカイト)

頁　　岩

チャート

遺 跡 出 土 石 器 石 材

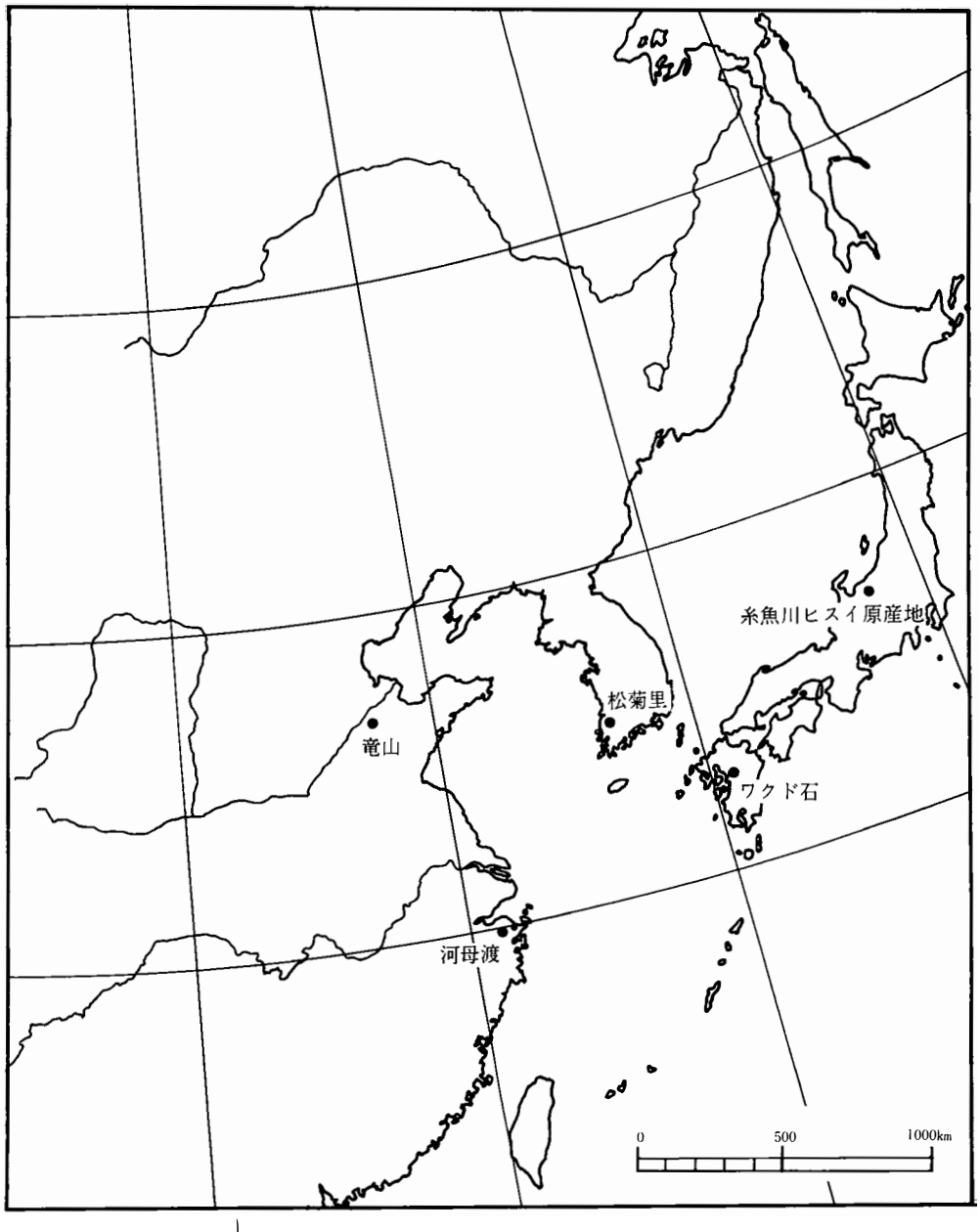
E 調査区北壁土層

A 調査区西側深掘り土層

熊本県文化財調査報告第144集

ワクド石遺跡

熊本県菊池郡大津町杉水所在



熊本県教育委員会

序　　文

熊本県には豊かな自然や歴史、風土のなかで培われてきた多彩な地域の文化が数多く残されています。埋蔵文化財もその中の一つになります。大地のなかで悠久の時を経た遺構、遺物が現代の我々にその姿を現したとき、私たちは自分たちの来し方行く末を如実に脳裏に焼き付けることができます。文化的な充足感を求めてやまない現代の私たち人間にとって貴重なものと考えます。ただ、埋蔵文化財は開発に伴い発見され、調査される場合が多く、今後開発との円滑な調整がますます必要になってくると思います。

本書は菊池郡大津町の県営畑地帯総合土地改良事業（護川地区）に先行して行ったワクド石遺跡の発掘調査の報告です。遺跡のある地域は一般に菊池台地と呼ばれる火山灰が厚く堆積した地帯で、水を大量に使う作物は育たず、昔から作付けされる作物は限られていたと聞きます。しかし、農民の英知はこの悪条件のもと「大津からいも」という全国的に有名なサツマイモのブランドを作り上げてきました。このフロンティア精神はいまからさかのぼること3000年も前の縄文時代後期から始まるようなのです。ちょうどワクド石遺跡に大津町の祖先が住んでいたころです。

このワクド石遺跡は考古学の研究者により籾痕のついた縄文土器の破片が採集されたことで有名になったと聞きます。歴史の通説では米作りが始まるのは弥生時代になってからのことですから、日本列島のなかでもいち早く米作りが行われた可能性があるわけです。しかも、この米作りは水が少なくても育成できる陸稲だったのではないかといわれています。実に夢のある物語で、この地域の住民だけでなく、広く県民はこの古代人の英知を受け継いでいる誇りを感じることができると思います。

そして、今後この報告書が熊本県の歴史を学ぶ上で、また埋蔵文化財をより深く理解していただくために活用していただければ幸いです。

最後に、調査の円滑な実施に御理解と御協力をいただいた地元の方々、並びに関係機関、そして調査に対する指導、助言をいただいた諸先生方に対して厚くお礼申し上げます。

平成６年３月31日

熊本県教育長　　道　越　　温

例　　言

1．本書は、1991年７月～1992年５月にかけて実施した、熊本県菊池郡大津町大字杉水字小林小名東原に所在するワクド石遺跡の発掘調査報告書であり、熊本県文化財調査報告第144集である。

2．調査は、平成３年度県営圃場整備事業（大津護川地区）に伴う緊急調査として事業の事前に実施した。

3．調査は、熊本県農政部の依頼を受け、熊本県文化課が国庫補助を受け実施した。

4．整理・報告は、平成５年度（1993年）に行なった。

5．出土遺物は、熊本県文化財収蔵庫（熊本市渡鹿３丁目15-12）に搬入して整理作業を行った。

6．発掘現場での実測及び写真撮影は調査員及び椎葉博昭、山田大輔、水上　浩で行った。

7．遺物の実測は主に古森政次、木下俊恵、徳永みどり、冨永圭子、大塚磯子、山田大輔が行い、一部をサポートシステム株式会社（堤　圭子、野田典子、福田京子）に委託した。また、土器拓影及び断面実測は整理作業員19名（氏名は調査組織に列記）であたった。遺構製図及び遺物製図は藤原ゆり子、丹生英里、冨永圭子が中心となって行った。グラビア撮影、遺物写真撮影及び遺構・遺物写真焼き付けは山田大輔が行った。

8．本書に用いた高度は標高を示し、方位は磁北で示した。

9．石器石材の肉眼鑑定では、熊本市立博物館嘱託永井　剛氏の鑑定結果を用いた。

10．出土玉類石材及び採集勾玉の石材原産地同定は、京都大学原子炉実験所藁科哲男氏に依頼した。

11．遺構内土壌の珪酸体分析は、古環境研究所の杉山真一氏に委託した。

12．遺物観察表は主に古森が作成し、主に藤原ゆり子が編集した。

13．写真図版に掲載した遺物の縮尺はまちまちであり、実測図を参照されたい。

14．本書には、川上勇輝氏の御好意により、川上コレクションのワクド石遺跡採集の浅鉢形土器実測図及び写真の掲載、また、ワクド石遺跡採集の勾玉の写真掲載及び分析の許可をいただいた。

15．本書の執筆は、第Ⅰ章を島津義昭、第Ⅴ章第３節(4)ｂの土偶を富田紘一氏に依頼した。その他は古森が執筆した。

16．本書の編集は古森があたり、校正に際しては、木下俊恵、冨永圭子が補助した。

17．出土遺物は、熊本県文化財収蔵庫に保管している。

本 文 目 次

口絵（カラー）
序文
例言
第Ⅰ章　遺跡の発見と調査に至る経緯
第１節　遺跡の発見……1
第２節　調査に至る経緯……2
第Ⅱ章　位置と環境
第１節　地質……3
第２節　地形……4
第３節　歴史的環境……4
第Ⅲ章　調査の方法と経過
第１節　調査の方法……17
第２節　調査の経過……18
第Ⅳ章　層序と遺構・遺物の検出状況
第１節　層序……20
第２節　遺構・遺物の検出状況……23
第Ⅴ章　遺構と遺物
第１節　縄文時代早期の遺構と遺物……26
第２節　縄文時代前期から後期前半にかけての遺物……28
第３節　縄文時代後期から晩期の遺構と遺物……33
(1)　住居跡……33
(2)　埋鉢……45
(3)　十字形石製品出土の柱穴……51
(4)　柱穴群……51
(5)　縄文階段状落ち込み……53
(6)　縄文時代後期後半から晩期の土器……55
a　土器の分類……55
b　土器形式について……57
c　各調査区出土土器……65
(7)　各調査区出土の僅少遺物……108
a　玉類……108
b　土偶……110
c　注口土器注口部・高坏形土器・土製品など……114
d　焼成土塊……116
e　組織痕土器……116

第４節　縄文時代の石器…… 117
(1)　打製石斧…… 117
(2)　磨製石斧…… 142
(3)　石鏃…… 146
(4)　クサビ形石器…… 147
(5)　ドリル・スクレイパー…… 154
(6)　使用痕のある剝片…… 154
(7)　石核…… 159
(8)　石錘…… 164
(9)　砥石…… 164
(10)　磨石…… 168
(11)　石皿…… 169
(12)　石製品…… 169
第５節　弥生時代の遺物…… 169
第６節　古墳時代の遺構と遺物…… 170
第７節　奈良時代から平安時代にかけての遺構と遺物…… 190
(1)　住居跡…… 190
(2)　掘立建物…… 198
(3)　溝…… 200
節８節　中世以降の以降と遺物…… 204
(1)　道路遺構…… 204
(2)　鍛冶遺構…… 204
(3)　小溝及びイモ穴…… 206
第Ⅵ章　自然科学的分析
1　ワクド石遺跡出土の硬玉製勾玉の産地分析…… 208
2　ワクド石遺跡出土の玉材石片の産地分析…… 216
3　ワクド石遺跡の植物珪酸体分析…… 224
第Ⅶ章　総括 …… 230

主要参考文献一覧…… 239
菊池川流域遺跡地名表・土器観察表・石器計測表…… 240
あとがき…… 293
写真図版…… 295

表　目　次

第１表　周辺遺跡地名表……13
第Ⅵ章１表１　ヒスイ製遺物の原産地の判定基準(1)…… 210
第Ⅵ章１表２　ヒスイ製遺物の原産地の判定基準(2)…… 211
第Ⅵ章１表３　硬玉製勾玉の元素分析値の比量と比重…… 214
第Ⅵ章２表３　分析遺物の特徴…… 216
第Ⅵ章２表１　各碧玉の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値… 219
第Ⅵ章２表２　ワクド石遺跡出土の玉材石片の分析結果…… 221
第Ⅵ章３表１　ワクド石遺跡植物珪酸体分析結果…… 226
第Ⅵ章３表２　植物珪酸体の顕微鏡写真一覧表…… 226
第２表　菊池川流域遺跡地名表…… 240
第３表　ワクド石遺跡出土土器観察表…… 253
第４表　ワクド石遺跡出土石器計測表…… 284

挿図目次

第１図　ワクド石遺跡採集の籾痕のある土器実測図…1
第２図　遺跡周辺地質図……3
第３図　遺跡周辺地形図（事業前）……5
第４図　遺跡周辺地形図（事業後）……6
第５図　菊池川流域遺跡分布図（縄文時代早期）……7
第６図　菊池川流域遺跡分布図
（縄文時代前期～晩期）……8
第７図　菊池川流域遺跡分布図（弥生時代～中世）…9
第８図　ワクド石遺跡周辺遺跡地図……12
第９図　調査区グリッド設定図……17
第10図　遺跡層序図……20
第11図　遺跡各地点の土層図……22
第12図　柱穴検出状況図……24
第13図　土器底部出土頻度図……25
第14図　集石遺構実測図……26
第15図　縄文時代早期土坑実測図……26
第16図　縄文時代早期礫群出土状況図（Ｅ調査区）…27
第17図　縄文時代早期礫群出土状況図（Ｃ調査区）…27
第18図　縄文時代早期から後期前半にかけての
各調査区出土土器(1)……29
第19図　縄文時代早期から後期前半にかけての
各調査区出土土器(2)……30
第20図　縄文時代早期から後期前半にかけての
各調査区出土土器(3)……31
第21図　縄文時代遺構配置図……32
第22図　縄文時代１号住居跡実測図……33
第23図　縄文時代１号住居跡出土遺物……34
第24図　縄文時代２号住居跡実測図……35
第25図　縄文時代３号住居跡実測図……35
第26図　縄文時代３号住居跡出土土器(1)……36
第27図　縄文時代３号住居跡出土土器(2)……37
第28図　縄文３号住居跡内置鉢実測図……37
第29図　縄文時代４号住居跡実測図……38
第30図　縄文時代５号住居跡実測図……39
第31図　縄文時代４・５号住居跡出土遺物……40
第32図　縄文時代５号住居跡出土土器……41
第33図　縄文時代６号住居跡実測図……41
第34図　縄文時代６号住居跡内置鉢実測図……42
第35図　縄文時代７・８・９号住居跡実測図……43
第36図　縄文時代10号住居跡実測図……44
第37図　縄文時代６･10号住居跡出土土器……46
第38図　１号埋鉢出土状態図……47
第39図　２号埋鉢出土状態図……48
第40図　３号埋鉢出土状態図……48
第41図　埋鉢実測図（１・３号）……49
第42図　埋鉢実測図（２号）……50
第43図　十字形石製品出土状況図……51
第44図　Ｄ調査区縄文時代柱穴検出状況図……53
第45図　Ｅ調査区縄文時代柱穴検出状況図……54
第46図　縄文時代後期から晩期の
深鉢形土器器形分類図……64
第47図　縄文時代後期から晩期の
浅鉢形土器器形分類図……65
第48図　Ａ調査区出土土器(1)……67
第49図　Ａ調査区出土土器(2)……68
第50図　Ａ調査区出土土器(3)……69
第51図　Ａ調査区出土土器(4)……70
第52図　Ｂ調査区出土土器(1)……71
第53図　Ｂ調査区出土土器(2)……72
第54図　Ｃ調査区出土土器(1)……74
第55図　Ｃ調査区出土土器(2)……75
第56図　Ｃ調査区出土土器(3)……76
第57図　Ｃ調査区出土土器(4)……77
第58図　Ｃ調査区出土土器(5)……78
第59図　Ｃ調査区出土土器(6)……79
第60図　Ｃ調査区出土土器(7)……80
第61図　Ｃ調査区出土土器(8)……81
第62図　Ｃ調査区出土土器(9)……82
第63図　Ｃ調査区出土土器(10)……83
第64図　Ｃ・Ｄ調査区出土土器(11)……84
第65図　Ｄ調査区出土土器(1)……85
第66図　Ｄ調査区出土土器(2)……86

第67図　Ｄ調査区出土土器(3) ……87
第68図　Ｄ調査区出土土器(4) ……88
第69図　Ｄ調査区出土土器(5) ……
第70図　Ｄ調査区出土土器(6) ……90
第71図　Ｅ調査区出土土器(1) ……92
第72図　Ｅ調査区出土土器(2) ……93
第73図　Ｅ調査区出土土器(3) ……94
第74図　Ｅ調査区出土土器(4) ……95
第75図　Ｅ調査区出土土器(5) ……96
第76図　Ｅ調査区出土土器(6) ……
第77図　Ｅ調査区出土土器(7) ……
第78図　Ｅ調査区出土土器(8) ……99
第79図　Ｅ調査区出土土器(9) …… 100
第80図　Ｅ調査区出土土器(10) …… 101
第81図　Ｅ調査区出土土器(11) …… 102
第82図　Ｅ調査区出土土器(12) …… 103
第83図　Ｅ調査区出土土器(13) …… 104
第84図　Ｅ調査区出土土器(14) …… 105
第85図　Ｅ調査区出土土器(15) …… 106
第86図　Ｅ調査区出土土器(16) …… 107
第87図　玉類出土分布図（グリッド別）…… 109
第88図　各調査区出土玉類…… 110
第89図　土偶出土分布図（グリッド別）…… 111
第90図　各調査区出土土偶(1) …… 112
第91図　各調査区出土土偶(2) …… 113
第92図　各調査区出土注口土器（注口部）
　　・高坏形土器・土製品…… 115
第93図　各調査区出土組織痕土器…… 116
第94図　打製石斧出土点数（グリッド別）…… 117
第95図　各調査区出土打製石斧(1) …… 118
第96図　各調査区出土打製石斧(2) …… 119
第97図　各調査区出土打製石斧(3) …… 120
第98図　各調査区出土打製石斧(4) …… 121
第99図　各調査区出土打製石斧(5) …… 122
第100図　各調査区出土打製石斧(6) …… 123
第101図　各調査区出土打製石斧(7) …… 124
第102図　各調査区出土打製石斧(8) …… 125
第103図　各調査区出土打製石斧(9) …… 126
第104図　各調査区出土打製石斧(10) …… 127
第105図　各調査区出土打製石斧(11) …… 128
第106図　各調査区出土打製石斧(12) …… 129
第107図　各調査区出土打製石斧(13) …… 130
第108図　各調査区出土打製石斧(14) …… 131
第109図　各調査区出土打製石斧(15) …… 132
第110図　各調査区出土打製石斧(16) …… 133
第111図　各調査区出土打製石斧(17) …… 134
第112図　各調査区出土打製石斧(18) …… 135
第113図　各調査区出土打製石斧(19) …… 136
第114図　各調査区出土打製石斧(20) …… 137
第115図　各調査区出土打製石斧(21) …… 138
第116図　各調査区出土打製石斧(22) …… 139
第117図　各調査区出土打製石斧(23) …… 140
第118図　各調査区出土打製石斧(24) …… 141
第119図　各調査区出土磨製石斧(1) …… 143
第120図　各調査区出土磨製石斧(2) …… 144
第121図　各調査区出土磨製石斧(3) …… 145
第122図　各調査区出土磨製石斧及び磨製石器(4) … 146
第123図　各調査区出土石鏃(1) …… 148
第124図　各調査区出土石鏃(2) …… 149
第125図　各調査区出土石鏃(3) …… 150
第126図　各調査区出土石鏃(4) …… 151
第127図　各調査区出土クサビ形石器(1) …… 152
第128図　各調査区出土クサビ形石器(2) …… 153
第129図　各調査区出土ドリル・スクレイパー(1)…… 155
第130図　各調査区出土スクレイパー(2)
　　・使用痕のある剥片(1)…… 156
第131図　各調査区出土使用痕のある剥片(2) …… 157
第132図　各調査区出土使用痕のある剥片(3) …… 158
第133図　各調査区出土使用痕のある剥片(4) …… 159
第134図　各調査区出土石核(1) …… 160
第135図　各調査区出土石核(2) …… 161
第136図　各調査区出土石核(3) …… 162
第137図　各調査区出土石錘…… 163
第138図　各調査区出土有溝砥石…… 164
第139図　各調査区出土磨石(1) …… 165
第140図　各調査区出土磨石(2) …… 166
第141図　各調査区出土石皿…… 167
第142図　各調査区出土石製品…… 168
第143図　弥生時代の遺物…… 170
第144図　古墳時代住居跡配置図…… 171

第145図　7号住居跡実測図…… 172
第146図　8号住居跡実測図…… 172
第147図　8号住居跡出土土器…… 174
第148図　9号住居跡実測図…… 175
第149図 10号住居跡実測図…… 176
第150図 12号住居跡実測図…… 176
第151図 14号住居跡実測図…… 178
第152図 15号住居跡実測図…… 178
第153図　9・12・13・14号住居跡出土土器 …… 179
第154図 16号住居跡実測図…… 181
第155図 19号住居跡実測図…… 182
第156図 20号住居跡実測図…… 183
第157図 21号住居跡実測図…… 184
第158図 23号住居跡実測図…… 184
第159図 15・16・19・21・23号住居跡出土遺物…… 185
第160図 24号住居跡実測図…… 186
第161図 25号住居跡実測図…… 187
第162図 26号住居跡実測図…… 188
第163図 24・25・26・27・28号住居跡出土土器…… 189
第164図 27号住居跡実測図…… 190
第165図 28号住居跡実測図…… 190
第166図 奈良時代から平安時代にかけての
遺構配置図および溝（SX 01）断面図… 191
第167図　1号住居跡実測図…… 192
第168図　2号住居跡実測図…… 193
第169図　3・4号住居跡実測図 …… 194
第170図　1・2・4号住居跡出土土器…… 195
第171図 17号住居跡実測図…… 196
第172図 22号住居跡実測図…… 197
第173図 17・22号住居跡出土土器 …… 198
第174図　1号掘立建物跡実測図…… 199
第175図　2号掘立建物跡実測図…… 200
第176図　B-14区溝底部甕形土器出土状態図 …… 201
第177図 溝（SX 01）出土土器…… 202
第178図 溝（SX 01）および道路遺構出土土器…… 203
第179図 中世以降の遺構（道路遺構・イモ穴・小溝）
配置図…… 205
第180図 鍛冶遺構1実測図…… 206
第181図 鍛冶遺構2実測図…… 206
第182図 各土器型式の分布範囲…… 233
第Ⅵ章1第1図　ヒ
第Ⅵ章1第2図　ヒ
対Sr／Feの分布および分布範囲 …… 212
第Ⅵ章1第3図　ヒ
対Sr／Feの分布および分布範囲 …… 212
第Ⅵ章1第4図　ヒ
対Mg／Siの分布および分布範囲…… 213
第Ⅵ章1第5図　硬玉製勾玉の（33418）の
蛍光X線スペクトル…… 214
第Ⅵ章1第6図　硬玉製勾玉のZr／Sr
対Sr／Feの分布 …… 214
第Ⅵ章1第7図　硬玉製勾玉のCa／Si
対Sr／Feの分布 …… 215
第Ⅵ章1第8図　硬玉製勾玉のNa／Si
対Mg／Siの分布…… 215
第Ⅵ章2第1図　花仙山産碧玉原石の
蛍光X線スペクトル…… 217
第Ⅵ章2第2図　碧玉の原産地および
碧玉のような緑色の石の産地…… 217
第Ⅵ章2第3図　玉材石片分析番号34700の
蛍光X線スペクトル…… 220
第Ⅵ章2第4図　玉材石片分析番号34701の
蛍光X線スペクトル…… 220
第Ⅵ章2第5図　玉材石片分析番号34702の
蛍光X線スペクトル…… 220
第Ⅵ章2第6図　玉材石片分析番号34703の
蛍光X線スペクトル…… 220
第Ⅵ章2第7図　玉材石片分析番号34704の
蛍光X線スペクトル…… 220
第Ⅵ章2第8図　玉材石片分析番号34705の
蛍光X線スペクトル…… 220
第Ⅵ章2第9図　碧玉原石のESRスペクトル …… 222
第Ⅵ章2第10図(1)　碧玉原石の信号Ⅲの
ERSスペクトル …… 222
第Ⅵ章2第10図(2)　碧玉原石の信号Ⅲの
ERSスペクトル …… 222
第Ⅵ章2第11図　玉材石片の信号Ⅲの
ERSスペクトル …… 223

写 真 目 次

第Ⅵ章　3　プラントオパール顕微鏡写真(1)……
第Ⅵ章　3　プラントオパール顕微鏡写真(2)…… 228
第Ⅵ章　3　プラントオパール顕微鏡写真(3)…… 229
ＰＬ１　縄文時代早期礫群
ＰＬ２　縄文早期集石
ＰＬ３　縄文時代早期土坑
ＰＬ４　縄文時代１号住居跡
ＰＬ５　縄文時代２号住居跡
ＰＬ６　縄文時代３号住居跡
ＰＬ７　縄文時代３号住居跡
ＰＬ８　縄文時代４・５号住居跡
ＰＬ９　縄文時代６号住居跡 置鉢
ＰＬ10　縄文時代10号住居跡 遺物出土状態
ＰＬ11　埋　鉢１
ＰＬ12　埋　鉢２
ＰＬ13　埋　鉢３
ＰＬ14　縄文時代階段状落ち込み
ＰＬ15　十字形石製品出土状態
ＰＬ16　７・８号住居跡（古墳時代）
ＰＬ17　８号住居跡（古墳時代）
ＰＬ18　９号住居跡(上)・10号住居跡(下)（古墳時代）
ＰＬ19　12号住居跡（古墳時代）
ＰＬ20　13号住居跡(上)・14号住居跡(下)（古墳時代）
ＰＬ21　15号住居跡（古墳時代）
ＰＬ22　15号住居跡出土遺物（古墳時代）
ＰＬ23　16号住居跡(上)・19号住居跡(中･下)（古墳時代）
ＰＬ24　20号住居跡(上)・21号住居跡(下)（古墳時代）
ＰＬ25　23号住居跡（古墳時代）
ＰＬ26　24号住居跡（古墳時代）
ＰＬ27　25号住居跡(上)・26号住居跡(下)（古墳時代）
ＰＬ28　27号住居跡（古墳時代）
ＰＬ29　28号住居跡（古墳時代）
ＰＬ30　１号住居跡（奈良時代）
ＰＬ31　２号住居跡(上)・3･４号住居跡(下)（奈良時代）
ＰＬ32　３・４号住居跡(下)（奈良時代）
ＰＬ33　17号住居跡(上)・22号住居跡(中･下)（奈良時代）
ＰＬ34　掘立柱建物１号
ＰＬ35　掘立柱建物２号

ＰＬ36　溝（ＳＸ01）
ＰＬ37　溝（ＳＸ01）出土土器
ＰＬ38　道路遺構
ＰＬ39　鍛冶遺構１（上）・２（下）
ＰＬ40　縄文時代早期土器
ＰＬ41　縄文時代早期～後期の土器
ＰＬ42　縄文時代住居出土遺物及び埋鉢
ＰＬ43　Ａ・Ｂ・Ｅ調査区出土土器（縄文時代後期～晩期）
ＰＬ44　Ａ調査区 縄文時代後期～晩期の土器（反転復原分）
ＰＬ45　Ｃ調査区 縄文時代後期～晩期の土器（反転復原分）
ＰＬ46　Ｃ調査区 縄文時代後期～晩期の土器（反転復原分）
ＰＬ47　Ｃ調査区（上）・Ｄ調査区（下）縄文時代後期～晩期の土器（反転復原分）
ＰＬ48　Ｄ調査区（上）・Ｅ調査区（下）縄文時代後期～晩期の土器（反転復原分）
ＰＬ49　Ｅ調査区（下）縄文時代後期～晩期の土器（反転復原分）
ＰＬ50　Ｅ調査区（下）縄文時代後期～晩期の土器（反転復原分）
ＰＬ51　Ｅ調査区（下）縄文時代後期～晩期の土器（反転復原分）
ＰＬ52　Ａ調査区 縄文時代後期～晩期の土器
ＰＬ53　Ｃ調査区 縄文時代後期～晩期の土器
ＰＬ54　Ｃ調査区・Ｄ調査区 縄文時代後期～晩期の土器
ＰＬ55　Ｃ調査区住居跡出土 縄文時代後期～晩期の土器
ＰＬ56　Ａ・Ｂ・Ｃ調査区イモ穴（上）及びＤ調査区（下）縄文時代後期～晩期の土器
ＰＬ57　Ｄ・Ｅ調査区（上）及びＤ・Ｅ調査区住居跡（下）出土 縄文時代後期～晩期の土器
ＰＬ58　Ｅ調査区 縄文時代後期～晩期の土器
ＰＬ59　Ｅ調査区 縄文時代後期～晩期の土器
ＰＬ60　Ｅ調査区 縄文時代後期～晩期の土器
ＰＬ61　Ｅ調査区住居跡（上）出土 縄文時代後期～晩期の土器及び組織痕土器（下）
ＰＬ62　各調査区出土 打製石斧
ＰＬ63　各調査区出土 打製石斧
ＰＬ64　各調査区出土 打製石斧（上）及び磨製石斧（下）
ＰＬ65　各調査区出土 石鏃
ＰＬ66　各調査区出土 クサビ形石器
ＰＬ67　各調査区出土 使用痕のある剝片及びスクレイパー
ＰＬ68　各調査区出土 黒曜石原石（上）及び石皿（下）
ＰＬ69　各調査区出土 石皿（上）及び磨石（下）
ＰＬ70　各調査区出土 磨石（上）及び有溝砥石（下）
ＰＬ71　各調査区出土 石製品（上）及び注口土器、高坏、土製品（下）
ＰＬ72　弥生時代の遺物
ＰＬ73　８・９・12・13号住居跡（古墳時代）出土土器
ＰＬ74　14～16・19・21・23号住居跡（古墳時代）出土土器
ＰＬ75　24～27号住居跡（古墳時代）及び溝（ＳＸ01）出土土器
ＰＬ76　４・14号住居跡及び溝（ＳＸ01）出土土器

第Ⅰ章　遺跡の発見と調査に至る経緯

第１節　遺跡の発見

ワクド石遺跡の発見の経緯については、坂本経堯氏の野帳に詳しい。近年とり纏められた『肥後上代文化資料集成』は、富田紘一氏の編集によるもので、熊本県内の主要な遺跡の発見や昭和20（1945）年までの菊池郡を中心とする遺跡・遺物の紹介がなされ、すこぶる有益な資料集となっている。この本からワクド石遺跡についての発見・研究史を抜粋してみる。

ワクド石遺跡の発見については、坂本先生の野帳部「考古」11に「ワクド石も其の一遺跡で昨年十月護川西部小学校松永訓導の発見通報により、数度これを調査し、一大縄文弥生式併出遺跡たることを認めた」とあり、昭和６年10月に松永慧氏によって発見されたことが知られる。本図収録の６年10月のものが、この発見時のものと見られる。その後、松永慧氏はこの遺跡をフィールドとし、坂本先生も度々踏査、調査されている。

坂本先生は昭和７年３月25日と27日に、本山彦一翁の援助による発掘調査を実施されている。野帳「考古」11には、この発掘を次のように記してある。

ワクド石発掘

松永氏生徒五名を引率して参加す。最高地より南斜面に至らんとする麦畑の空地を掘る。約６坪、正則の発掘ではない。深度と包含の状態を見るに留めた。

イ、縄文第三類、表下一尺三寸ニ底アリ、正シク臥シテ埋ル。

ロ、縄文第四類、口縁部ヲヤヤ北ニ傾イテ打チブセシ連続破片アリ。

ハ、打製石斧、表下一尺一寸。

ニ、蛇文岩磨製石斧（刃部欠）表下一尺、其ノ上層部ニ焼土層状ヲ呈ス。

ホ、粘板岩ヲ径二尺五分位ノ四角塊状ヲナシヨク研磨サル。

ヘ、第四類質ノ土器、両面及側面、端部ニ、五個ノ凹穴ヲ有ス。其ノ他発掘物

一、石器、皮剝、石包丁（打製）、打製石斧欠損部円盤石。

二、土器、底部、第四類ニ属スル多数ノ破片。

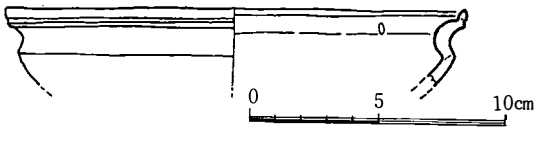
◎イ、縄文第三（或ハ四類）類ニ属スル、径七寸位ノ美事ナル小壺ガ口縁部欠ノママ、正位ヲ保ッテ出土シタ事ハ、熊本ニ今ダカッテ例ナキ事デ究史上特筆スベキ事デアル。口縁部ヲ欠グハ縁部ノミヲ欠取リテ、而シテ何ラカノ用途ニ使用シタモノト考エラレル。

春陽温泉岳に夕つきてより作業を終り、小学校へ引上ぐ。祝杯をあげて、后九時帰宅す。遺物は学校に預け置く。

以上が昭和７年の発掘の様子である。この他にも野帳には多くの踏査記事が載せられている。また、出土遺物のスケッチもあるが今回は収録しなかった。

戦後、ワクド石遺跡は熊本地方の代表的な縄文期の遺跡として、概論に名前があげられることはあったがその名前を一躍高からしめたのは川上勇輝氏の報告によってである。氏の「米の圧痕をもつ縄文末期の土器―菊池ワクド石出土の土器報告―」は昭和７年最初の坂本経堯氏の発掘から、程とおくない頃、桑園の根掘取り作業中出土した浅鉢型の土器の内面に籾のスタンプがあることを報じたものである。土器について以下のように紹介している。

土器は御領式薄手の破片で、黒褐色を呈し、表面を研磨し、表裏とも一条の沈線がある。巾三、二糎、長さ六、九糎、厚さ〇、三～〇、七糎である。痕は裏面のほぼ中央（口縁部の下一糎）にあり長さ〇、五糎、巾〇、二糎であって玄米である。



第１図　ワクド石遺跡採集の籾痕のある土器実測図

と、具体的に報告し、その写真も発表された。すでにこの時、この圧痕が間違いなく稲であることは九州大学農学部作物学研究室により同定されていた。この報告により、ワクド石遺跡は広く学会にその名前を知られることとなった。

第２節　調査に至る経緯

この地区に総合畑地帯土地整備事業の計画がなされたのは昭和53年のことである。畑地帯土地整備事は基幹事業の農業用用排水、農道と併せて行う農用地造成、区画整理などからなる通常受益面積が100*ha*以上に及ぶ土地の改良事業である。ワクド石遺跡を含む事業も関係市町村が泗水町、旭志村、大津町の三町村にわたり、受益地が実に337*ha*に及んでいる。

多くの遺跡が存在することが予想されたので、文化課では計画の当初より、事業予定地区内の試掘を行い、とくに事業内に含まれる周知の遺跡については工法の変更を農政部局に協議し、遺跡の保存に努めてきたところであった。ワクド石遺跡についても、重要遺跡であるので試掘の結果をもって計画の変更をふくむ工法の変更を申入れ、やむを得ない部分の調査を実施する事とした。協議の結果、ワクド石遺跡の名称のもとになった大石のある部分は盛土および現状維持とした。今回の調査区はワクド石遺跡のなかでは東側に相当する。

第３節　調査の組織

調査責任者	文化課長	大塚　正信
	教育審議員	隈　　昭志
	課長補佐	松崎　厚生
発掘総括	調査第１係長	島津　義昭
試掘担当	学 芸 員	高木　正文
本調査担当	文化財保護主事	古森　政次
	嘱　託	吉本　智明
	嘱　託	吉田　正一
	嘱　託	山隈　　誠
調査事務担当	主幹・経理係長	木下　英治
	参　事	高浜　保子

発掘作業　本田　悦子　合志百合子　本田　　中
合志千恵子　合志スミ子　西山　　勉
本田ケイ子　菊地キミ子　右田　　潤
合志ヌイ子　宮崎　義幸　本田　睦男
芹川ユイ子　豊岡　申記　本田　重光
合志　成子　豊岡ミツル　松原リヨ子
豊岡　富夫　中野タツ子　池田　尚子
合志タキ子　合志　羊子　坂本　兼子
豊岡キヨ子　豊岡　堅雄　坂本ハル子
高村　雄一　本田チズ子　坂本　保人
本田　義臣　本田はる子　村上　新一
本田とみ子　中野エイ子　豊岡　一敏
池田ちえ子　青木　伸二　椎葉　博昭
坂本　兼男　菊地　鶴男　清水　敏子
坂本　力也　本田　堅二　坂本　末徳
永広　大勝　山田　大輔　水上　　浩
河津　豊子　下田　良吉　下田　清子
荅　ヨシメ

報告書総括	調査第１係長	島津　義昭
報告書担当	文化財保護主事	古森　政次
	嘱　託	木下　俊恵
	嘱　託	丹生　英里
	嘱　託	冨永　圭子
	嘱　託	藤原ゆり子
	嘱　託	山田　大輔

整理作業　塚本　博子　後藤　直美　河野　智子
村山　紀子　井手田敦子　山内　洋子
勝田　智子　大塚　磯子　江島　園子
徳永みどり　武石久美子　安田　京子
工藤　孝子　後藤ちず子　小山　正子
山本　友子　水本寿美子　荒牧　陽子
宇野　玲子　水上　　浩

調査指導・助言および協力者（順不同、敬称略）

川上　勇蔵　富田　紘一　和田　好史
東　　和幸　佐藤　伸二　上村　俊雄
清田　純一　網田　龍正　金田　一精
美濃口雅朗　緒方　　勉　稲津　暢洋
坂本　嘉弘　渡辺　　誠　勢田　広行
麻柄　一志　水ノ江和同　下村　　智
飯富　英博　鶴嶋　俊彦　大塚　達朗
甲元　真之　松藤　和人

第Ⅱ章　位置と環境

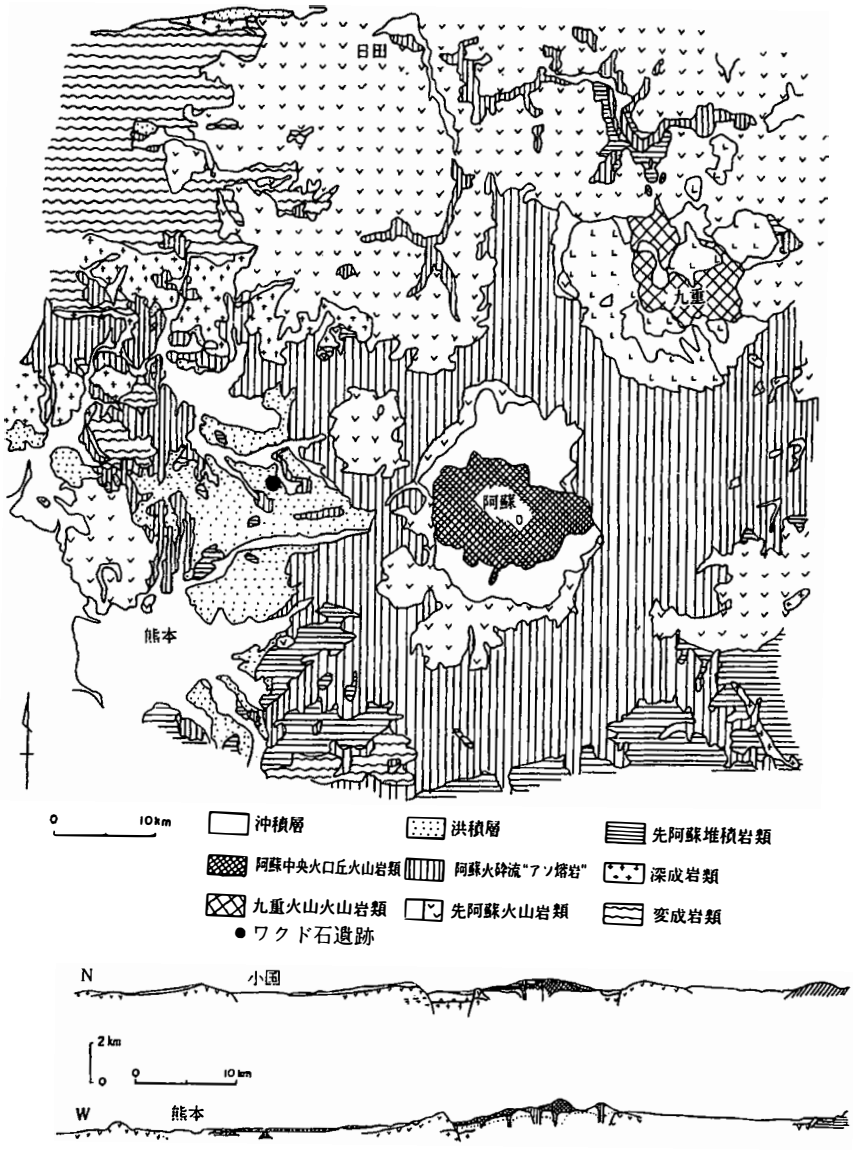
第１節　地　　質

遺跡を中心とする地域は一般に菊池台地と呼ばれている。この台地は阿蘇火山の爆発によって噴出した阿蘇火砕流によって形成された基盤の上に阿蘇火山及び雲仙火山からの火山灰が厚くおおっている。

この阿蘇火砕流は一時に流出したのではなく、大きく４期に分けられている。その絶対年代は阿蘇火砕流１が今から26～37万年前、阿蘇火砕流２が15万年前、阿蘇火砕流３が10万年前、阿蘇火砕流４が５～８万年前という分析結果が出されている。

阿蘇火砕流１の下位には湖成層が広がっており、豊富な水が貯蔵されている。また、熊本市に近づくと阿蘇火砕流１と２のあいだには地下水を帯水する溶岩層がある。この両層は熊本市への飲料水や農業用水としてくみ上げられ、利用されている。なお、この阿蘇火砕流１と２には黒曜石がレンズ状にはさみこまれており、崖面などから採取され石器の素材として利用されている。

阿蘇火砕流４は、その噴火活動の規模が最も大きく、現在の阿蘇火山のカルデラを形成したものと考えられており、佐賀平野や天草下島、球磨盆地までも広がっている。角閃石を含み、上部は粘土化し、いわゆる八女粘土層になっている。



第２図　遺跡周辺地質図　（籾倉 博恭『九州・沖縄の地下水』より）

この阿蘇火砕流堆積物の上にはその後引き続き火山灰が堆積している。火山灰は九州各地の火山にその源があるが、詳細は層序の項にゆずることにする。

さて、この地域の基盤を形作っている阿蘇火砕流堆積物はその後の人類の生活や風土に多大の影響を与えたと考えられる。つまり、4回の大爆発の際に流れだした阿蘇火砕流はそれ以前の河川の水資源を覆いつくしてしまったのである。その後、新たな浸食作用により、河川ができ水は流れるようになったが、火砕流堆積物そのものが火山灰であるため雨水は地面にしみ込んでしまい台地の浸食が進まず、広い平坦面を今でも形成することになった。すなわち、この広大な台地は水の湧き出る地点が少なく、しかも河川の流域に限られることになった。この地質的また地形的特色はその後の人類活動にさまざまな制約をもたらした。しかし、現在に至る連続した人類の活動の営みの痕跡は人が自然条件と折り合いを付けながら繁栄を勝ち取ってきた証拠であり、それこそ人類の英知と言える。

とくに農業においては、今でこそ地下水を吸い上げて水田化されたところが多いが、それまでは天水だけで作物を育成する畑作地帯であった。陸稲、大豆、ヒエ、アワ、トウモロコシなどこの地方に特有の作物はその育成にあたって最適種が選ばれ、さまざまな育成上の工夫が取り入れられているものと思われる。

第2節　地　　形

菊池台地は北を菊池川、南を白川によって大きく浸食されており、それを南北の境界としている洪積台地である。菊池川、白川の流れはそれぞれ菊池平野、白川流域平野を作り上げており、地味豊かな沖積平野となっており、台地地形とは全く違った景観を見せている。また台地は鞍岳を中心とする阿蘇外輪山西麓に続いて西へ20kmほどゆるやかに低くなりながら伸びており、金峰山塊に続いている。言うまでもなく阿蘇火砕流が流れた跡にあたる。

この菊池台地の地形的特色は広い平坦な台地が続くことであり、河川による浸食は少なく、それらは菊池台地北側を東西に流れる合志川流域か、菊池台地西側の金峰山塊からの河川によるものに集中している。しかも水量は少なく、雨水は火山灰土壌のため地中深く浸透していくことがわかる。

この地域を流れる河川は合志川が中心となり、いくつかの支流が流れ込んでいる。支流は阿蘇外輪山に源を発するものと、塩浸川のように台地の中央部にある湧泉から発するものとがあり、いずれも北西方向に流れて合志川と合流している。ワクド石遺跡は阿蘇外輪山に源を発する峠川の流域に位置する。

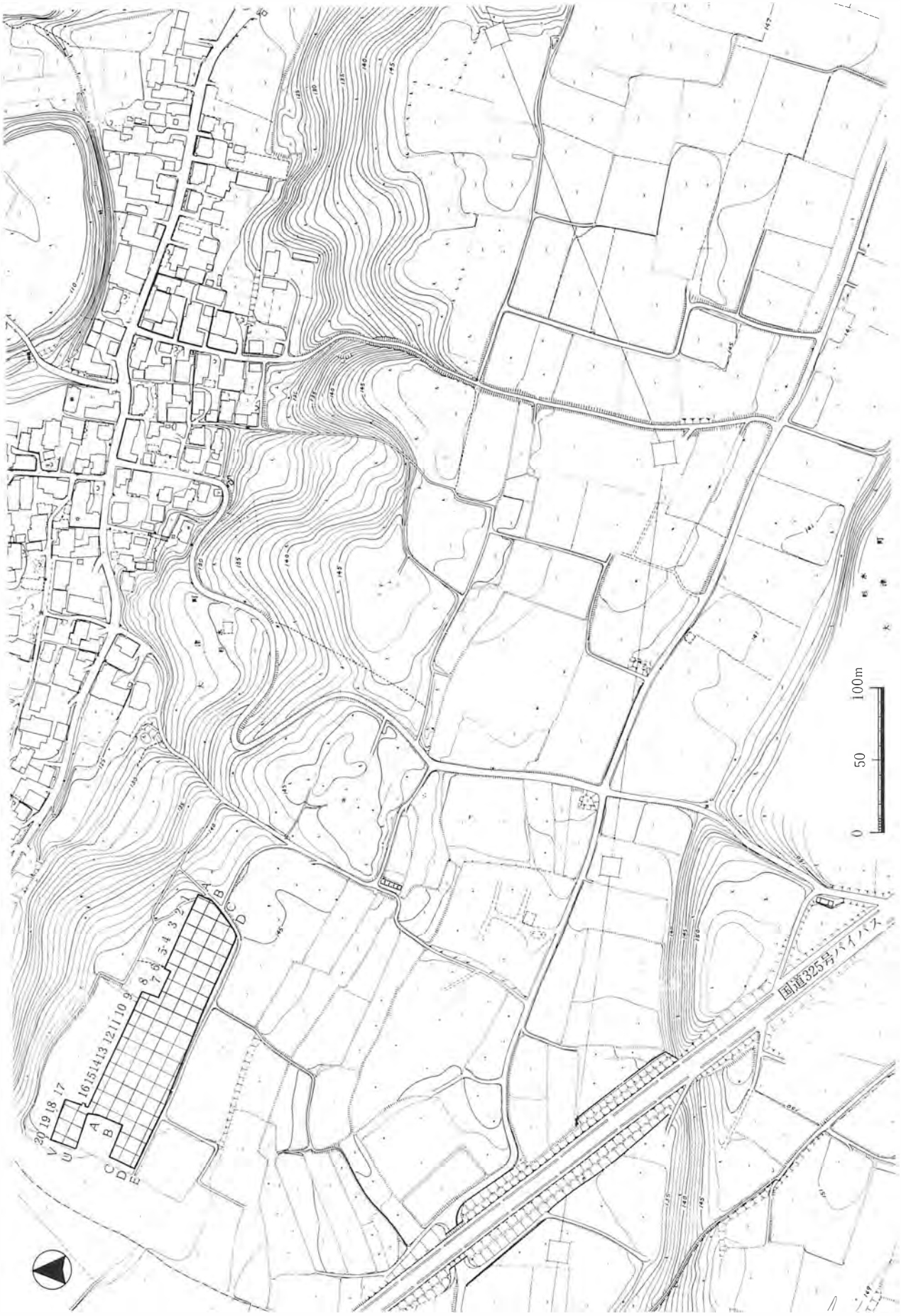
峠川はこの地域の他の河川と同様に、川が流れる沖積面と台地上の洪積面との間に20～30mの比高差のある崖を形作っており、深い浸食谷となっている。このため、現在の集落は水の便がよく、しかも台風など風からの影響を防ぐためか、この台地上ではなく谷部にそった沖積面に集中している。ただ、崖崩れや、鉄砲水などの水害には弱く、しかも日当たりは決して良いとは言えない。また、道路は集落が集中する谷部を走っているが、見通しが悪く地図がなければ位置を確認することは困難である。ただ、台地上に立つと見晴らしがよく遠景との関係で容易に位置を確認することができる。

また、谷部は沖積面とはいっても耕作可能な土地は少なく、台地上が主要な農業生産地となっている。

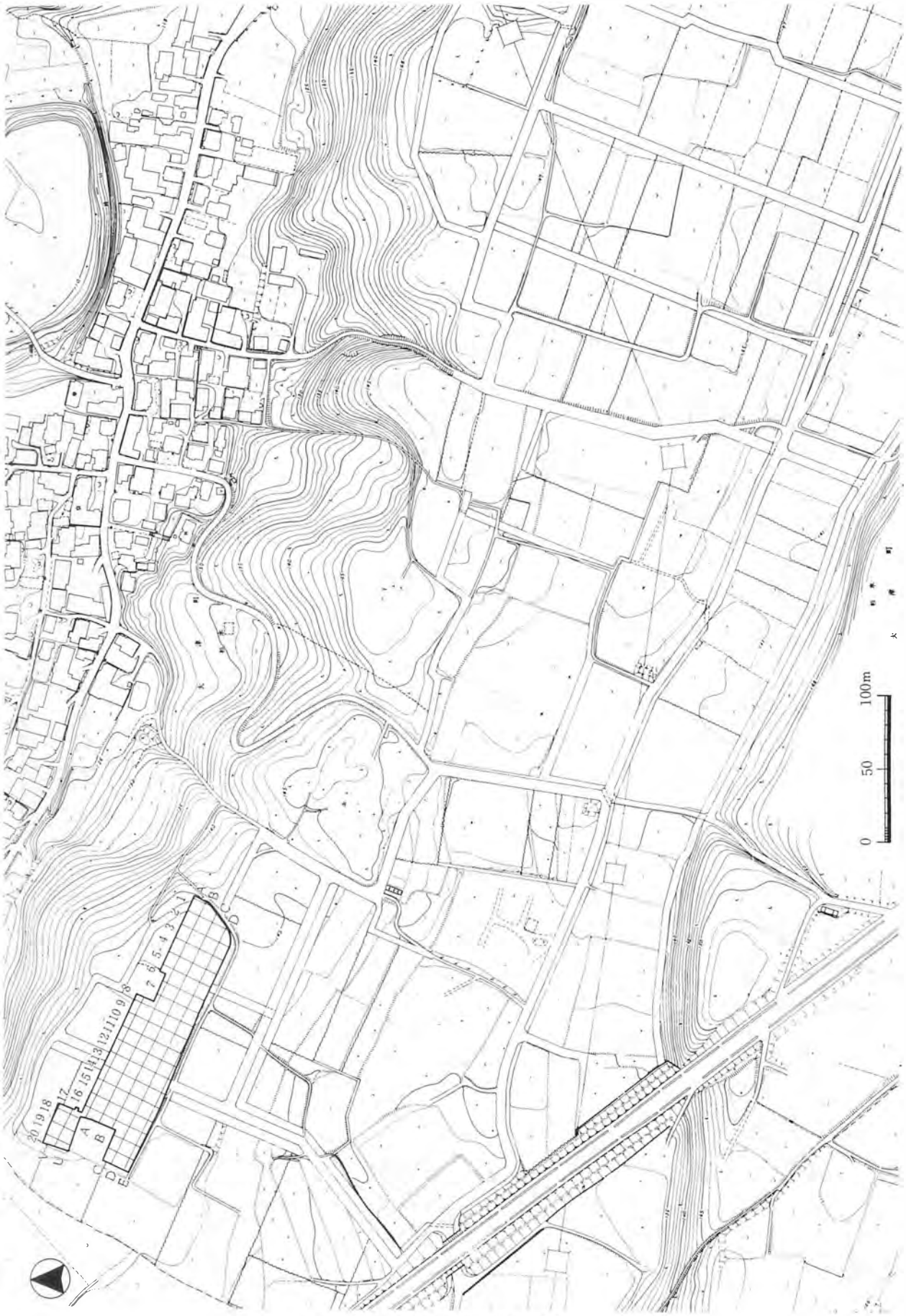
ワクド石遺跡は峠川の下流域の左岸の台地上にあり、第4図からもわかるように台地と谷部の境界である崖のふちまでも広がっている。台地上には当然のことながら湧水地はなく畑が広がっている。
ただ、遺跡に接して西側から始まる浅い谷地形が北西方向に伸びている。この地形がどのようにしてできたのかははっきりとしない。湧水点が遺跡に接してあり、そこから流れだしていた小河川が浸食した谷である可能性も否定できない。

第3節　歴史的環境

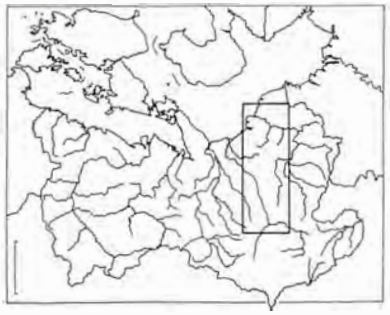
人類の足跡は偶然に発見されることが多く、しかも思いもかけない場所から顔を出すことが多い。畑、崖面、山林、河床などありとあらゆる場所にその痕跡がある。それらを集めていくと次第に時代ごとの



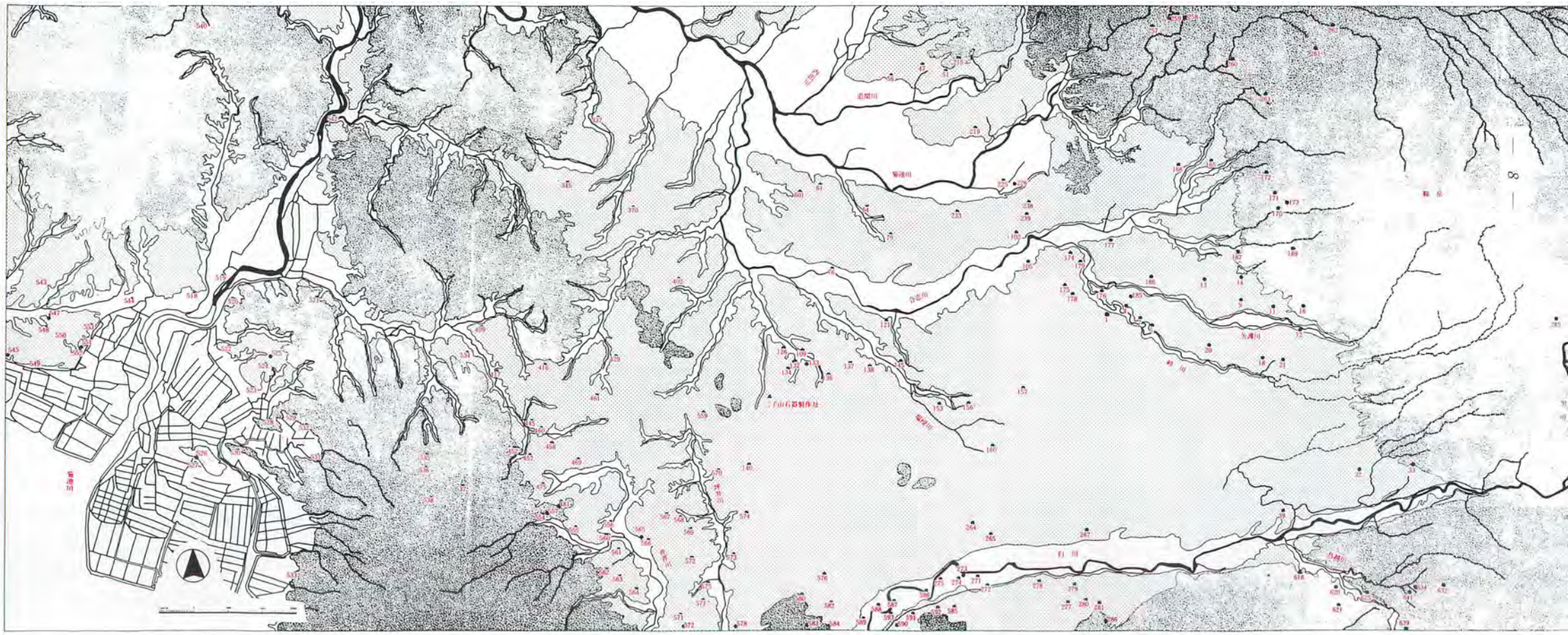
第３図　遺跡周辺地形図（事業前）



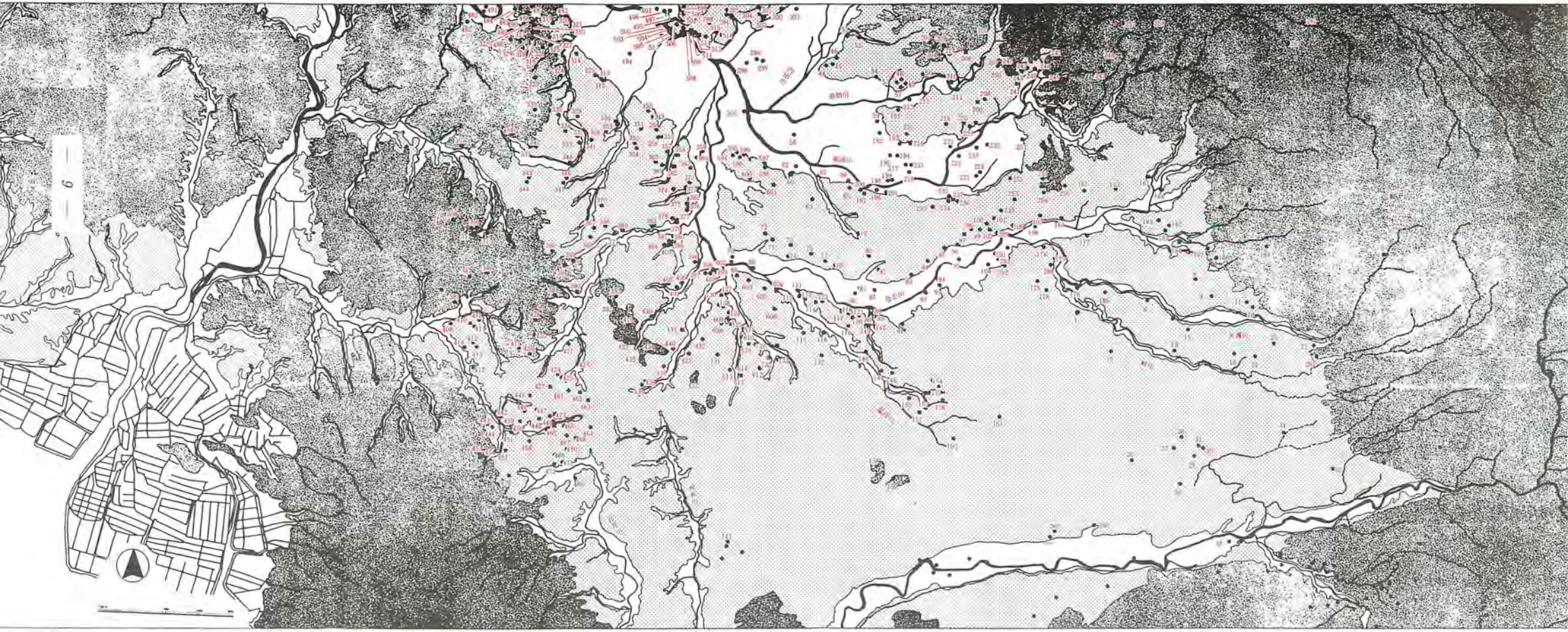
第4図　遺跡周辺地形図（事業後）



第５図　菊池川流域遺跡分布図（縄文時代早期）



第６図　菊池川流域遺跡分布図（縄文時代前期～晩期）



第７図　菊池川流域遺跡分布図（弥生時代～中世）

人類の行動に特色のあることがわかってくる。ここでは地図上において遺跡の時代ごとの分布を見ながら、その特色についてわかるところを述べてみたい。

旧石器時代

旧石器時代の遺跡はナイフ形石器、三稜尖頭器が採集されている旭志村湯舟原遺跡、三稜尖頭器が採集されている弓立遺跡など阿蘇外輪西麓を中心として遺跡が分布しているようだ。遺跡数が少ないので当時の人類がどのような生活圏をもって行動していたのかはまだよくわからないところである。ただ、白川以南の阿蘇西麓から南麓にかけての旧石器時代の遺跡分布から当地域から阿蘇北麓にかけて遺跡が広がっていることが推察できる。

もうすこし具体的に言えば、合志川上流域及び北方の菊池川本流の上流域に遺跡の集中が見られるものと考えられる。

縄文時代

縄文時代になると旧石器時代とちがって、菊池台地の中まで遺跡の分布が見られるようになる。これは地質学的に洪積世から沖積世に変化し、気候の変化に伴って植生が変化し、それに伴って動物相も変化する。この大きな意味での環境の変化は当然のことながら人間の暮らしにも変化をもたらしたことを表しているようだ。

ただ、縄文時代といってもその各々の時期によって遺跡の分布には違いが認められる。その特色を見ていくことにする。

縄文時代早期の遺跡は旧石器時代の遺跡数よりも多くなっていることは明らかであるが、遺跡の立地はそれほど変化しているとは思われない。縄文早期の遺跡として、大津町瀬田裏遺跡、同中後迫遺跡、旭志村無田原遺跡が代表としてあげられる。いずれも押型文土器を中心として出土する遺跡として県内ではよく知られている。瀬田裏遺跡では自然礫を用いた円形や方形の配石遺構や集石遺構が数多く発見されており、おそらくその時期と同時代と考えられる押型文注口土器も出土している。また、無田原遺跡では押型文土器の時代と考えられる県内では唯一のストーンサークル遺構や特異な岩偶が発見されている。中後迫遺跡でも多量の押型文土器や集石遺構が発見されている。

このように主に押型文土器を中心とて大量の早期土器を出土する遺跡はワクド石遺跡より東、合志川上流域を中心として高い密度で集中するようである。各遺跡からの貴重な出土品の数々をみてもこの時期にこの地域を中心として高い文化がさかえ、この地域が文化情報の発信地帯になっていたのではないかとの期待を十分に感じさせてくれる。

遺跡における土層の項でも触れたが、縄文時代早期と前期を分ける層として第Ⅱ層黄褐色土をあげた。この層は今から約6000年前に降り積もった火山灰土層であるが、その劇的な火砕流の状況とともに忘れてならないのがその当時の気候の現在との違いである。

いわゆる縄文海進と呼ばれる内陸への海の進出は気候の温暖化とともに起きた現象であった。この海進のピーク時にちょうど遺跡第Ⅱ層である鹿児島鬼界カルデラの大爆発によるアカホヤ火山灰（熊本県球磨地方以南ではシラスと呼ばれる火砕流堆積層となっている。）の降灰があったのである。

このアカホヤ火山灰の降灰は当時の人類の活動にかなりの影響をもたらしたと考えて間違いない。まず球磨地方以南の人々にはほぼ絶滅をもたらしただろうし、現在の熊本県や大分県、宮崎県に住んでいた人々にとっても少なくともそのまま住みつづける環境を提供しなかったと容易に想像できるのである。このような状態はかなり長く続いたものと考えられる。

当地においてこのアカホヤ火山灰降灰後始めてその姿を現したのは縄文時代前期、土器形式で言えば曽畑式土器を携えた人々であった。遺跡としてはそれほど多くはなく、大津町中後迫遺跡、日向遺跡、白川の南、西原村の桑鶴土橋遺跡などで出土している。すでにこの火山灰降灰以前において、押型文土器文化から南九州に中心を置く塞ノ神式土器文化に変わっていた。おそらくそれは気候の温暖化に伴って徐々に変化したのであり、アカホヤ火山灰降灰後の土器出現ほど劇的ではなかった。いわば曽畑式土器を携えた人々は無人の地に踏み入れるわくわくする感動があったと思われる。一般に曽畑式土器は海

洋性をもった土器文化と言われる。その分布が朝鮮半島から沖縄地方まで東シナ海を交通の道とするような範囲の中にあるからである。ただ、当遺跡においてもそうなのだが、海洋性の強い土器文化とは呼ばれるが確実に内陸においても曽畑式土器は発見される。このことは彼らの活動範囲が内陸まで及んでいたことを物語っている。このような現象は縄文時代中期、曽畑式土器文化と同じく海洋性の土器文化と考えられている阿高式土器及び阿高系土器にも同様のことが言えるものと考えられる。この土器を出土する遺跡としてはワクド石遺跡の他大津町日向遺跡、中後迫遺跡、七野尾遺跡などがある。

県内でこの阿高系土器としばしば同じ遺跡内から出土する土器に竹崎式土器と呼ばれる土器がある。表面に荒い縄文文様を施すことを特徴としている。この土器は同時期の阿高式土器とは似てもにつかない形式であるため、他地域からもたらされた土器と考えられている。事実この形式の土器は瀬戸内地方に広く分布する縄文時代中期の船元式土器と共通している。当地方でもワクド石遺跡の他、合志町御手洗遺跡、西原村桑鶴遺跡などから出土しており、瀬戸内地方からもたらされた可能性がある。なお、桑鶴遺跡では富山県糸魚川産という分析結果を得た翡翠製の大珠が発見されている。そして、近年、菊池平野の北辺にある七城町岡田遺跡ではこの竹崎式土器が大量に出土し、あるいは瀬戸内から直接人々がやって来て土器作りを行っていたのではないかという期待を抱かせる。

このように縄文時代早期から中期にかけての当地方は南九州からの文化の伝播、東シナ海を中心とした海からの文化の伝播、それに対立するように瀬戸内を中心とする東からの文化の伝播が入り組んだ状態で見られる。このことは縄文文化が定住生活を基本としながらも、この時期の気候の変化がもたらした植生の変化や動物相の変化に合わせて人類が活動の場所をかなりの遠距離で移動していたのではないかという想像をかきたててくれる。

そして、菊池台地において遺跡数が飛躍的に増加するのが縄文時代後期になってからのことである。第６図に示した縄文前期以降の遺跡分布図で前期、中期の遺跡数は少なく、ほとんどが後期、晩期の遺跡にあたる。これらの遺跡はいくつかの群にまとまるようだ。大まかではあるが当ワクド石遺跡を中心とした合志川上流域の一群、三万田遺跡・大久保遺跡を中心とした花房台地の一群、中心遺跡は明確でないが合志川の支流である塩浸川・合生川流域の一群、太郎迫遺跡・四方寄遺跡を中心とした井芹川・坪井川上流域の一群、そして上南部遺跡を中心とした白川中流域の一群が認められる。

この時期における遺跡数の増加は菊地台地のみで見られるのではなく、県下各地で認められるのであろうが、現状では特に菊地台地及び白川をはさんで南に接している託麻台地で顕著であるようだ。この託麻台地で遺跡がまとまる一群がある。熊本市上ノ原遺跡を中心とした江津湖周辺の一群である。上ノ原遺跡は炭化米を出土した遺跡として知られている。

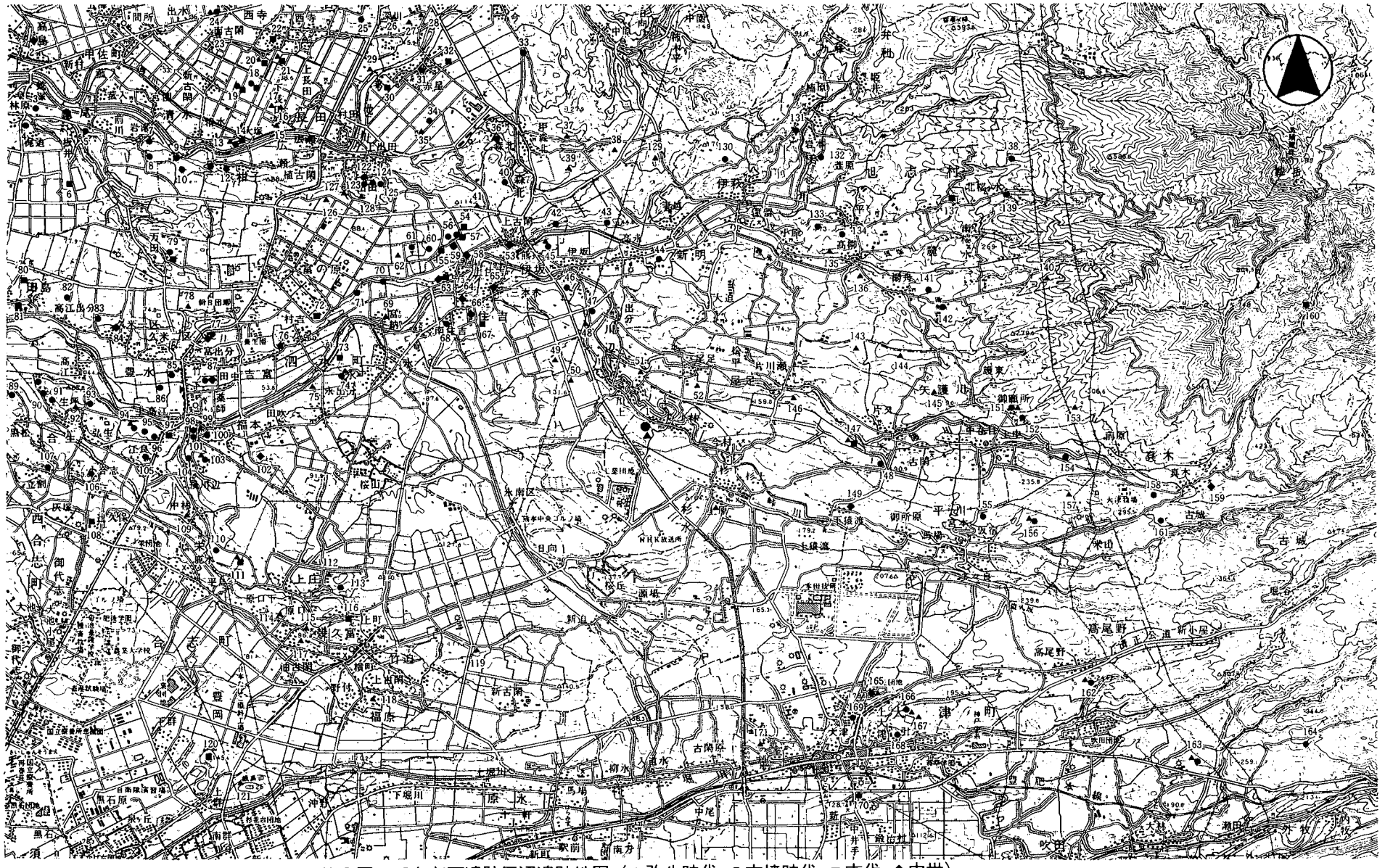
これらの群の中心となる遺跡は共通性が認められる。第一に大規模な集落遺跡であること。土偶、玉類が製作されていること。また、土器製作の跡を示すものと考えられる焼粘土塊が出土していること。土器棺と考えられる埋甕（埋鉢）がまとまってあること。最後に土器形式が数形式連続して認められ、長期間にわたって集落が継続していることなどである。

ワクド石遺跡を中心とする一群でワクド石遺跡に近接した旭志村伊坂上ノ原遺跡の調査では多量の土器に伴って住居跡数軒が発見されたが、土偶や玉類は出土していない。このことは菊池市天城遺跡の調査においても同様のことが言えるようだ。

このように後期以降の遺跡数の増加は当然のことながらその背景として人口の増加を考慮しなくてはならないであろう。その人口の増加を維持した食料はどのようなものであったのか興味が尽きないところである。第７図に示したように弥生時代以降の遺跡が沖積平野に対して目が向いているのに対して、この時期の遺跡は台地に目が向いているようだ。この違いはおそらく食料獲得の違いが表れているものと理解できる。

弥生時代

第７図に示したように弥生時代の遺跡はワクド石



第８図　ワクド石遺跡周辺遺跡地図（▲弥生時代　●古墳時代　■古代　◆中世）

第１表　ワクド石遺跡周辺遺跡地名表

縄―縄文（早―早期　前―前期　中―中期　後―後期　晩―晩期）
弥―弥生　古―古墳　奈―奈良　平―平安　中―中世

番号	遺跡名	所在地	時代	備考
1	ワクド石遺跡	菊池郡大津町杉水	縄(早･前･中･後･晩)弥･古	籾跡ある土器
2	加恵城跡(正光寺跡)	菊池郡七城町加恵	中	中世丘城　菊池18外城の一つ
3	蛇塚古墳	〃　亀尾	古	前方後円墳　古墳の上に馬渡城あり
4	長明寺坂古墳群	〃　林原	古	円墳３基
5	亀尾横穴	〃　亀尾	古	
6	上鶴頭遺跡	〃　上鶴頭	平	官衛跡
7	岩瀬横穴群	〃　亀尾	古	横穴数基　須恵器一括
8	岩瀬チョウ塚古墳	〃　〃	古	小円墳　近くに円墳あり
9	木柑寺船形石棺	菊池市木柑子	古	段丘　崖突出部に露出
10	木柑寺フタツカ古墳	〃	古	西向前方後円墳　石人立つ
11	木柑寺横穴群	〃	古	菊池川南岸　数十基　普通型　風化
12	東浦田平横穴	〃	古	
13	大塚遺跡	菊池市長田	弥・古	弥生後期土器・土師器
14	大塚古墳	〃	古	前方後円形　後円部に金比羅社建つ
15	外園遺跡	〃	弥	竪穴　弥生期　土器・石器多数　貨泉出土
16	長田狐塚遺跡	〃	弥	黒髪式甕棺
17	長田遺跡	〃	弥	弥生期
18	狐塚遺跡	〃	古・平	土師器
19	水町遺跡	菊池市西寺	古・平	土師器
20	西寺辻遺跡	〃	弥・平	弥生期　住居跡　土師器包含
21	西寺辻遺跡	〃	弥・平	弥生式土器・土師器片散布
22	南園遺跡	〃	奈・平	布目瓦　土師器
23	南古閑遺跡	〃	弥	弥生期
24	新古閑遺跡	菊池郡七城町新古閑	弥・古	野辺田式土器・土師器　磨製石斧
25	深川遺跡	菊池市深川	縄(後)・古	条痕文・御領式・野辺田式土器・土師器出土
26	観音ノ本遺跡	〃	弥	弥生期
27	菊の池遺跡	〃	弥	城跡全域　弥生期　土師器片包含
28	北宮遺跡	菊池市北宮	弥	弥生期
29	深川古屋敷遺跡	菊池市深川	弥	弥生期
30	赤星宮の前遺跡	菊池市赤星	平	土師器
31	赤星ヤンボシ塚古墳	〃	古	現在墳丘なし　横穴複式　同所に
32	赤星福土・水溜遺跡	〃	平	
33	マユミノ横穴	菊池市今	古	
34	天城神社古墳	菊池市赤星	古	円墳
35	天城遺跡	〃	縄(晩)・弥	縄文・弥生式土器
36	妙見後田横穴群	菊池市森北	古	須恵器一括出土
37	妙見後田横穴群	〃	弥	須恵器一群出土
38	モトドリ山横穴群	〃	弥	横穴４基
39	立石支石墓	〃	弥	支石墓
40	森北落水古墳	〃	古	小円墳　石槌あり　勾玉出土
41	城山遺跡	菊池市赤星	縄・弥	縄文・弥生期を含む
42	平町横穴群	菊池郡泗水町住吉	古	横穴群
43	土平横穴群	菊池郡旭志村辨利	古	
44	高永遺跡	〃　新明	縄(後)・古	縄文・古墳期　御領式土器・須恵器
45	南住吉遺跡	菊池郡泗水町住吉	弥・古	遠賀川式・須玖式甕棺　野辺田式土器・土師器
46	伊坂上の原遺跡	菊池郡旭志村伊坂	縄(後)・古	縄文・弥生期　御領式・野辺田式土器
47	西原遺跡	〃　川辺	縄(前・中)・古	縄文期　曽畑式・阿高式土器・須恵器
48	西原銅鉾出土地	〃　〃	弥	
49	ヒララ石遺跡	〃　〃	縄(後)・弥	縄文・弥生期　摺消・縄文式土器　支石墓　石斧
50	柏木遺跡	〃　〃	縄(後)・弥	縄文・弥生期　摺消・縄文式・御領式土器
51	四郎丸遺跡	〃　〃	縄(後)・弥	縄文・弥生期　御領式・野辺田式土器
52	尾足原遺跡	〃　尾足	縄(後)・弥	縄文・弥生期　御領式・野辺田式土器
53	飛熊遺跡	菊池郡泗水町住吉	中	経筒
54	城山遺跡	〃　〃	平	蔵骨器
55	城山Ａ遺跡	〃　〃	縄(後)・平	西平式・御領式・野辺田式土器・土師器・須恵器
56	長塚古墳	〃　〃	古	
57	城山Ｂ遺跡	〃　〃	古・平	土師器・須恵器

第１表　ワクド石遺跡周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地		時代	備考
58	飛熊城跡	菊池郡泗水町	住吉	中	
59	城山Ｃ遺跡	〃	〃	縄(後)・中	条痕文・御領式土器・土師器・青磁器
60	備後塚古墳	〃	〃	古	
61	狐塚古墳	〃	〃	古	
62	下峯遺跡	〃	〃	弥	黒髪式・野辺田式土器　石包丁
63	住吉日吉神社遺跡	〃	〃	奈・平・中	須恵器・土師器　滑石釜　円面鏡
64	池上城跡	〃	〃	中	
65	日頭山宣頓寺跡･合志家の墓	〃	〃	中	
66	山王宮跡	〃	〃	中	
67	東駄飼城蔵骨器	〃	〃	奈・平	
68	南住吉古墳	〃	〃	古	石棺
69	富納遺跡	〃	富納	弥	須玖式・黒髪式土器　磨製石斧
70	硯町横穴群	〃	住吉	古	須恵器
71	今寺横穴群	〃	富納	古	横穴群
72	村吉遺跡	〃	吉富	平	蔵骨器　須恵器
73	鬼木製鉄跡	〃	永	平	鉱滓
74	福原遺跡	〃	〃	弥・古	野辺田式土器・土師器
75	藤巻遺跡	〃	〃	弥	甕棺
76	村吉古墳	〃	吉富	古	石棺
77	牛畑遺跡	〃	〃	古・中	須恵器・土師器・青磁器
78	古閑原遺跡	〃	〃	弥	須玖式・黒髪式土器　磨製石斧
79	三万田東原遺跡	〃	亀尾	古・奈・平	土師器
80	田島廃寺跡	〃	田島	奈・平	土師器・須恵器
81	陣塚遺跡	〃	〃	平	蔵骨器　須恵器
82	高江出分塚山古墳	〃	豊水	古	家形石棺
83	久米若宮古墳	〃	〃	古	
84	安国寺遺跡	〃	〃	中	瓦器　青磁器
85	富出分古墳	〃	吉富	古	箱式石棺
86	麦田遺跡	〃	豊水	古	土師器(野辺田式土器)
87	平町遺跡	〃	吉富	古・中	土師器　滑石釜
88	生坪塚山古墳	菊池郡西合志町	合生	古	前方後円墳　長さ60cm　竪穴石室
89	塚口横穴群	〃	〃	古	
90	生坪古墳	〃	〃	古	箱式石棺を容する円墳
91	生坪石立(こくりゅう)古墳	〃	〃	古	小型家形石棺　朱三角文　女人骨　櫛
92	八反田遺跡	〃	〃	弥	甕棺　壺　坩　磨製石斧
93	八反田遺跡	〃	〃	古	
94	弘生原遺跡	〃	〃	弥・古	弥生期　野辺田式土器・土師器・須恵器
95	迫原ハヤマ古墳	〃	〃	古	円墳　箱式石棺　鉄鎌　文字ある土師器
96	迫原長塚(ちょうづか)古墳	〃	〃	古	箱式石棺
97	高木原遺跡	〃	〃	縄(後)・奈	広範囲　縄文後期より奈良時代に及ぶ　出土品大量
98	西谷古墳	菊池郡泗水町	福本	古	
99	福本遺跡	〃	〃	弥	八幡北側　重弧文土器
100	南原第１号古墳	〃	〃	古	箱式石棺
101	南原第２号古墳	〃	〃	古	
102	中林山遺跡	〃	〃	中	古塔碑群
103	後川辺(権現山)遺跡	菊池郡合志町	栄	弥・古	野辺田式土器
104	ヤンボシ塚古墳	〃	〃	古	
105	江良遺跡	菊池郡西合志町	合生	古	野辺田式土器・土師器・須恵器片多数出土
106	小合志古墳	〃	〃	古	円墳　巨石横穴石室　副葬品多数
107	立割横穴群	〃	〃	古	横穴数基から成る
108	小合志原(おごうしばる)遺跡	〃	〃	縄(後)・平	縄文後期・土師器
109	中林西原遺跡	菊池郡合志町	栄	弥	弥生期　須玖式土器
110	中林古墳	〃	〃	古	円墳２基
111	千経塚遺跡	〃	上庄	弥・平	弥生期　土師器・須恵器等
112	木瀬遺跡	〃	〃	弥	重弧文土器　石包丁
113	虚空蔵横穴	〃	〃	古	横穴
114	小園遺跡	〃	豊岡	縄(後)・弥	御領式・弥生式土器石器
115	宮の前遺跡	〃	上庄	弥	弥生期　須玖式・黒髪式土器・土師器
116	御手洗遺跡	〃	幾久富	縄(後)・平	縄文後期土器・御手洗式土器・土師器石器

番号	遺跡名	所在地	時代	備考
117	陣の内遺跡	菊池郡合志町幾久富	弥	須玖式・野辺田式土器　石包丁
118	野付(のつき)遺跡	〃　福原	縄(早)・弥	押型文・黒髪式甕棺
119	轟遺跡	〃　豊岡	弥	黒髪式甕棺
120	群山遺跡	〃　〃	平	蔵骨器
121	飯高山遺跡	〃　槍原	弥	弥生期
122	鬼石古墳	菊池市出田	古	
123	堂坂横穴群	〃	古	数基は一群の須恵器を出土　22基
124	古池域跡古墳	〃	古	横穴石室
125	亀の甲古墳	〃	古	石棺あり　土師器片多数出土
126	医者どん坂遺跡A	〃	縄・弥	縄文・弥生期を含む
127	医者どん坂遺跡B	〃	縄・弥	縄文・弥生期を含む
128	医者どん坂遺跡C	〃	縄・弥	縄文・弥生期を含む
129	小川遺跡	菊池郡旭志村辨利	縄(早)・弥	縄文・弥生期 押型文土器 石斧・石鏃・石匙 甕棺
130	松尾横穴群	〃　伊荻	古	約60穴　須恵器
131	岩下横穴群	〃　辨利	古	鉄鏃　刀子　環　土器
132	鶴ノ宮遺跡	〃　〃	古	土師器
133	平山古墳	〃　麓	古	箱式石棺
134	北受遺跡	〃　〃	縄(早)・古	縄文・古墳期　押型文土器　箱式石棺
135	高柳遺跡	〃　〃	弥	弥生期　須玖式土器　甕棺
136	湯船原遺跡	〃　〃	弥	弥生期　黒髪式石棺　須玖式土器
137	狐塚遺跡	〃　〃	平	歴史蔵骨品　鉄鏃
138	たばこ石遺跡	〃　〃	縄(後)・古	縄文・弥生・古墳期 御領式・野辺田式土器・土師器
139	桜ケ水遺跡	〃　〃	縄(前)・古	縄文・弥生・古墳期 曽畑式土器 石斧・石刃 槍 鉄
140	南桜ケ水遺跡	〃　〃	縄(前・中)・弥	縄文・弥生・古墳期　曽畑式・阿高式土器 石斧・石刃　槍
141	五十町遺跡	〃　〃	縄(後)・古	縄文・古墳期　御領式・野辺田式土器 箱式石棺　石刃
142	横道石棺群	〃　〃	古	
143	立石遺跡	菊池郡大津町矢護川	縄(後)・弥	積石塚6　石器
144	牟田原遺跡	〃　〃	縄(早)・弥	縄文早期　押型文・条痕文土器　黒ノ目玉石片
145	御領原遺跡	〃　〃	縄(後・晩)・弥	縄文後期　西平式・御領式・野辺田式土器
146	カメキュウラ遺跡	菊池郡旭志村尾足	弥	野辺田式土器
147	面の平遺跡	〃　〃	弥・平	弥生期　土師器　車路跡
148	一尾刎(いちおばる)2地点	菊池郡大津町矢護川	古(後)	
149	猿渡六地蔵	〃　平川	中	
150	杉水上ノ原矢鉾遺跡	〃　杉水	縄(後)・弥	土師器・須恵器　石器
151	七野尾遺跡	〃　矢護川	縄(早・中・後・晩)・弥・古	縄文早～中～後晩・弥生期 土師器・須恵器 石器
152	馬糞塚古墳群	〃　〃	古	小円墳数基　人骨
153	向原遺跡	〃　真木	縄(前)・弥	石刀　野辺田式土器・土師器・須恵器
154	真木(祝屋敷)遺跡	〃　〃	縄・古	銅鉾2本出土(中細)　野辺田式土器供伴
155	ナギナタ遺跡	〃　平川	縄(後)・古	条痕文・御領式・野辺田式土器
156	水ノ山遺跡	〃　矢護川	縄(早・後)・弥・古	押型文・御領式・黒髪式・野辺田式土器 磨製石斧　支石墓
157	日向遺跡	〃　〃	弥	弥生中・後期　土器片
158	真木古墳	〃　真木	古	円墳
159	合志一族墓	〃　〃	中	
160	弥護山無動寺跡	〃　〃	平	平安前期創建の説　粘板岩円面硯片出土
161	人塚古墳	〃　古城	古	円墳
162	高尾野遺跡	〃　高尾野	弥・古	野辺田式土器包含
163	瀬田雨留尾遺跡	〃　瀬田	縄・弥・古	縄文・弥生・古墳期　寺跡(屋敷跡)
164	瀬田裏遺跡	〃　〃	縄(早・前)・古	縄文・古墳期
165	西弥護免遺跡	〃　大津	弥・古	弥生～古墳期
166	西嶽遺跡	〃　〃	弥・古	野辺田式土器包含　台付壺出土
167	大松山遺跡	〃　〃	弥	銅鉾2本出土(中広)
168	後迫横穴群	〃　〃	古	コの字型床・奥床を備える
169	中町横穴群	〃　〃	古	基数不明　形跡を留める程度
170	大津高校グランド遺跡	〃　〃	縄(早)・古	縄文期　大石鏃・石槍　土師器片少数
171	大津産業高実習地(南出口)遺跡	〃　室	弥	弥生式土器片(細)

遺跡周辺地域では少ない。それは食料生産基盤が水稲に変化した弥生時代において、水田として利用できる土地が極めて限定され、しかもせまい当地域では当然の結果と考えられる。ただ、県内の弥生文化を考える上では重要な地域と考えられる。その一つは大津町水の山遺跡や旭志村藤尾支石墓群などの支石墓の問題である。通常支石墓は縄文時代晩期から弥生時代前期にかけて見られる墓制であるが、当地域では水の山遺跡が縄文時代晩期の夜臼式土器を埋納した支石墓である他は、弥生時代中期から後期に属している。県下の支石墓のほとんどが当地域に集中している事実とも合わせて考えると、どのような歴史的背景が存在するのか興味がある。また、もう一つは後期における集落遺跡の増加である。近年の緊急調査においてかなりの後期集落遺跡が発掘されている。代表的な遺跡が西弥護免遺跡であり、二重の環壕をめぐらした集落である。いわゆる「倭国大乱」に関係する集落と考えられている。このような目立った遺跡とは別に、実は水田経営には不向きな合志川上流域の台地上に集落がかなり出現してくる。それらの集落は短期間で廃絶されているようである。このような集落の出自や食料生産の問題が今後論議されるものと思われる。

古墳時代

この時期も弥生時代と同じく当地域では遺跡数が少ない。古墳そのものも少なく、円墳のみで前方後円墳は今のところ存在しない。集落についても少なく、おそらくこのころから現在の集落と重なっていると考えられるところである。ただ、ワクド石遺跡で検出されたような非常に限られた時期に集落が営まれ、廃棄された状態は、大津町日向遺跡においても発見されており、このような集落の性格がどのようなものか興味がもたれる。

歴史時代

この時期の当地域の最大の歴史的解明は二重の牧の所在地と実像の解明である。その断片的な遺跡は次第に数が増えつつあるようだ。旭志村湯舟遺跡では石製の帯金具が出土しており官牧の役所の存在が有力視される。この時期の集落を中心とした遺跡はまだ少ないが今後かなり発見されてくるものと思われる。

第Ⅲ章　調査の方法と経過

第１節　調査の方法

調査面積が約8000㎡

方法の検討に入った。調査対象地は分散しておらず１ヵ所としてまとまっているため調査は順調に進められるものと考えられた。以下、次の方法で調査を実施した。

(1)　表土剝ぎ

調査面積が広いため手掘りによる表土剝ぎは困難であり、重機を使用することにした。しかも、調査が長い期間になるため、表土を剝いだ後の遺構面の悪化が心配されるため５回に分けて表土剝ぎを行うことにした。

(2)　調査区の設定

上記(1)の表土剝ぎの地区にあわせてＡ～Ｅの大調査区を設けた。さらに実測、測量及び遺物取り上げのためにより小さな調査区である一辺が10ｍの正方形のグリッドを調査区全体に網の目のように設定した。グリッドは南北方向をアルファベット、東西方向をアラビア数字で示した。グリッド配置とグリッド名は**第９図**のとおりである。さらに一つのグリッドを一辺が１ｍの正方形が100個入るような網の目をつくり、北西隅から横方向に番号を付した。

これは遺物を一辺が１ｍの正方形の升でまとめて取り上げるためのもので、いわゆる包含層対策である。この包含層を呼ばれるものは土器や石器が広い範囲に層として堆積しているもので、その名のとおり足のふみばもないほどに多量の遺物が層をなしている。これらの遺物を一点一点位置を書き込みながら取り上げるのは膨大な時間を要することになる。

(3)　実測の方法

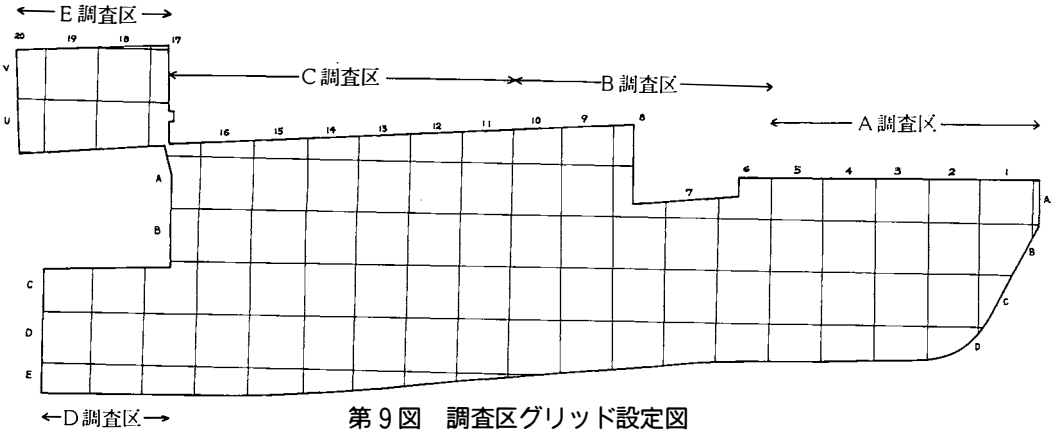
調査区にかかる全てのグリッドを１／20の縮尺で実測することを基本とした。ただし、遺構によって縮尺を変えることもあるが、その場合には実測基準点を１／20の図面に書き入れることにした。

当初、ワクド石遺跡は縄文後晩期の集落跡ということから住居跡に関しては円形を想定しグリッドによる実測を考えた。しかし、調査開始後歴史時代および古墳時代の方形の住居跡の発見があり、住居跡に関しては住居跡の主軸にあわせて任意に実測軸を設定することにした。

なお、１／20以上の大きな縮尺での実測については平板測量でおこなうことにし、測量基準点はグリッド杭を用いることにした。

(4)　住居跡の発掘方法

縄文時代早期については住居跡を検出することができなかった。また、後晩期の住居跡は竪穴住居ではあるが後世における削平および整地によって破壊されており、かろうじで床硬化面が確認されたのは３基にとどまり、実測方法を考えるまでにいたらな



第９図　調査区グリッド設定図

かった。

古墳時代の住居跡は方形の平面形をしており、深さも20～50cm程になる。まず、住居跡の側辺にあわせて南北方向と東西方向が直角に交差する主軸を設定した。その主軸にあわせて十字の畦を住居内に埋まった土層の観察用に残しながら発掘を進めていき、床面まで到達したところで土層が分かれてこない場合には野帳に土層の色、特徴などを記入した後で畦を取り去ることにした。分かれた場合には土層を実測したあとで取り去った。

遺物は実測に耐えうる遺物は残し、小さな破片は一括して取り上げた。特に床面上あるいは床面直上に残された遺物は小さな破片であろうと残し実測することにした。なお、一括した遺物は土層が分かれる場合は土層ごとに取り上げ、分かれない場合はまとめて取り上げた。

奈良時代の住居跡にはすべてカマドが備えられていた。住居跡の深さが20～30cm程しかなくかなり削平されている。そのためカマドの残りも悪くカマド壁体が床面に接した一部が残っている状態であった。このため土層断面よりも構造把握に重点を置く調査を実施することにし、カマドによっては土層断面図が作成できないものもあった。

⑸　柱穴群の発掘方法

今回の調査で発掘の中心となったのは柱穴の発掘であった。柱穴とする認定基準はかなりあいまいであるが、平たい底部があり多方向に枝分かれしたような状態でないものを柱穴とし、いわゆる樹根と区別した。さらに埋土の色、質により柱穴の時代による相違を明らかにするように努めたが明確な違いがなく結局明らかにできなかった。

第２節　調査の経過

1991年７月から1992年４月にかけて調査は行われ、Ａ調査区から着手し、Ｂ、Ｃ、Ｄ、Ｅ調査区の順に進行した。以下、月ごとに主要な出来事を記す。

【７月】

梅雨明けが遅く、ほとんど調査は進行しなかった。ただ、遺跡の土壌は水はけが良く、雨天日の翌日でも調査はスムーズに行えた。

【８月】

この年の夏の暑さは例年以上で、しかもＢ調査区東端の杉林の伐採が10月にずれ込んだため風が通らず、その暑さは尋常なものではなかった。この年の台風はひどく県内各地の文化課調査現場のプレハブは吹き飛んだものがおおかったが、ワクド遺跡の現場事務所は林に守られ、無事であった。この月、十字形石製品、および10号縄文住居跡内で立った深鉢形土器が発見された。なお、菊池高校の学生がアルバイトで現場へ参加。若い力に期待した。

【９月】

懸案であったＢ調査区東端の杉林の伐採が一向に行われないため、調査が一時中止せざるを得なくなった。鹿児島女子大学の上村俊雄教授が来跡し、十字形石製品について詳しい教示をいただいた。

【10月】

やっとＢ調査区東端の杉林の伐採が終わり、Ｂ調査区の表土剝ぎをおこなった。この調査区から奈良時代の竈付きの住居跡がまとまって検出され、またＳＸ01が西に伸びることが確認された。肝心の縄文時代の住居跡が明確な堀り込みをもって検出されず、柱穴ばかりが無数に発見されるため、やや調査の士気が低下気味であった。

【11月】

早々にＣ調査区の表土剝ぎを行った。その結果、散在するものの住居跡らしき遺構の輪郭を検出面で確認し、また、入り込んでいる多くの土器が縄文土器であったことから、縄文時代の住居跡であろうと思われた。その後、古墳時代の住居跡であることが判明した。夢はこの遺跡の上によく現れた竜巻のように砂塵とともに遠くへ運ばれてしまったかにみえた。

この月、地元の護川小学校の６年生が山本先生に引率されて体験発掘の学習に来跡した。Ｂ-14区のＳＸ01の発掘に参加してもらった。参加して何もでなかったらと心配したが、子供たちの願いが通じたのかワクド石遺跡でも貴重な玉類の発見が相次いだ。

【12月】

Ｃ調査区の発掘が進むにつれ、しだいにこの遺跡の構造がわかってきた。無数に発見される柱穴はその数の多さのとおり、縄文時代の住居跡の多さを物語っていることが納得できた。それは遺構検出面で確認した縄文住居跡の硬化面の存在からであり、もう一つは古墳時代の住居跡の深さが保たれていることからであった。

玉類、土偶が多く発見され、みな興奮する。なお、この月、大津町文化財保護審議会の委員一行が遺跡見学に訪れる。また、読売新聞の記者が取材に来たが、記事にはならなかった。

この月より椎葉、水上、山田の強力助っ人若手青年組が調査に参加。

【１月】

Ｃ調査区西側の発掘が進むにつれ、柱穴が異常に密集した状態で検出され、土偶類が集中していることがわかった。遺跡の中心部になりそうである。

この月、２人の作業員さんが柱穴に足をとられ、捻挫するという労働災害が発生した。それほど柱穴の数が多かったと言える。

月の終わりにＤ、Ｅ調査区の表土剝ぎを行う。

【２月】

古墳時代の住居跡調査と縄文時代住居跡の調査が平行し、調査が佳境に入る。古森中国行き。

遺構実測がはかどらない。休日出勤が常態となる。新しい遺構として埋鉢が見つかる。

【３月】

Ｄ、Ｅ調査区の発掘進む。Ｅ調査区の整地層中の遺物に貴重なものが多量に含まれていることが判明した。整地層で無かったらと無念の感慨を深くする。北側崖面に伸びるように縄文時代の道路上の落ち込みが発見された。

発掘はほとんど終了する。

４月まで延長を決定。

【４月】

図面作成に全力を挙げる。１月以来休日がなく、いささか疲れる。ただ、若手３人組の元気な姿と話題に疲れも癒される。

連休明けの５月10日、調査終了。すぐにブルドーザーが入り一瞬のうちに遺跡が消えた。持ちかえった図面写真類は貴重である。

【1993年４月～1994年３月】

1993年度報告書作成を行う。１年間の期間を設定させてもらった。

休息時の様子

護川小学校体験発掘

第Ⅳ章　層序と遺構・遺物の検出状況

第1節　層　　序

(1)　層序区分

先述したように菊地台地の基盤を形作っているのは阿蘇山の大爆発による火災流堆積物である阿蘇溶結凝灰岩である。重機による深掘りによれば現地表面から4ｍで阿蘇溶結凝灰岩の風化堆積層である鳥栖ロームに達することから、6ｍ程で基盤の阿蘇溶結凝灰岩になるものと考えられる。

この火災流堆積物の後、阿蘇山を中心とする火山の爆発による火山灰の降灰によって数メートルの土層の堆積が認められる。しかし、この地に始めて人類の足跡を残した面は現地表面から50cmにも満たないものである。このように遺跡の最初の形成から現在までの堆積はかなり浅いものであるが、後述するようにワクド石遺跡の内容を考える上では層序はかなり重要な意味を持つ。ここでは、遺跡内部の層序と広範囲の地域からみた土層の関連を見てみることにする。

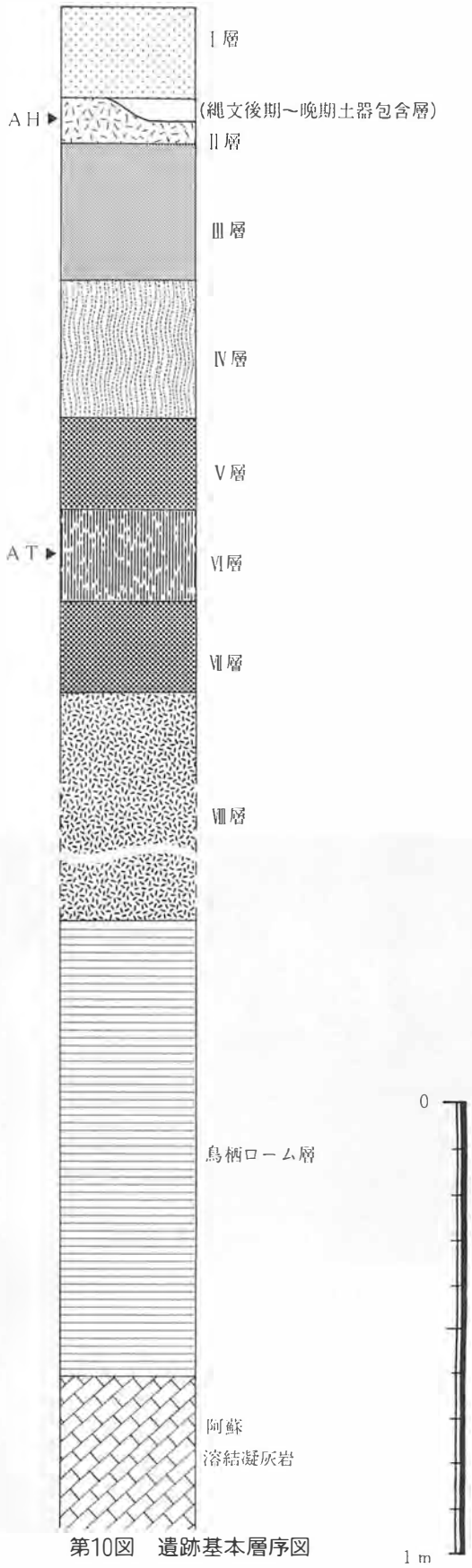
なお、重機による深掘り地点は梅雨による豪雨のため埋まり、また壁が崩れる危険性があったのでやむなく埋め戻した。そのため深い部分の土層観察はできていない。幸い遺跡での最も古い人類の足跡は深さ50cmほどであるため、その後設定した深さ1ｍほどの土層観察用トレンチでの観察で十分であると判断した。ここでは深さ1ｍほどまでの土層観察を行うことにする。

(2)　遺跡の層序　（第10図）

重機による深掘りと調査終盤に設置した3ヵ所の層序観察用のトレンチから遺跡全体を見通した層序を観察した。まず遺跡の基本層序を示しておく。

Ⅰ層

灰褐色をしており、小石まじりのいわゆる耕作土である。地点によって厚さは変わるがほぼ10～20cmを測る。



第10図　遺跡基本層序図

Ⅱ層

黄褐色をしており砂質である。この層にはところどころに火山の爆発によって飛ばされた黄色をした軽石（いわゆる鹿沼土）が拳大の塊として認められる。この軽石には火山の爆発によってできた特徴的なガラスが含まれており、鹿児島県鬼界島を中央火口丘とする鬼界カルデラを形成した際の大爆発によって運ばれてきたものと考えられており、アカホヤ火山灰と呼ばれている。Ⅱ層はこのアカホヤ火山灰が雨風によって流され再度堆積したものと考えられている。この層も地点によって厚さが違い５～10cmを測る。

Ⅲ層

暗褐色をしており粘質である。Ⅰ・Ⅱ層に比べ土の密度が高くしまっている。この層には縄文時代早期の押型文土器や塞ノ神式土器が包含されており、ワクド石遺跡の最初の人類の足跡が見られる層である。この層は比較的層の厚さが安定しており25～30cmの厚さが均等に見られる。

Ⅳ層

褐色をした固い層で、縦横に亀裂が広がっている。この層からⅦ層まで当地域で苦土と呼び習わされている。雨水の浸透が早く、また、耕しても拳大の塊より細かく分離せず農家を困らせるためつけられた名だという。厚さは遺跡のほぼ全域で30cmを測る。

Ⅴ層

黒褐色をしており、Ⅳ層と同じく苦土である。この層には白色砂粒状の火山灰が含まれているがその産出火山は今のところ不明である。Ⅳ層よりも粘質が強く、いわゆる暗色帯と呼ばれる層と共通する。遺跡全域で厚さはほぼ均等であり、15～20cmを測る。

Ⅵ層

暗褐色をしており、苦土である。層の質はⅤ層と同じであり、白色砂粒状の火山灰も同様に含まれている。さらに特徴的なものとして黄色パミスの細粒子と火山ガラスが大量に含まれている。この黄色パミスと火山ガラスは、Ⅱ層のアカホヤ火山灰と似ており、蛤良Ｔｎ火山灰と呼ばれる鹿児島湾の蛤良カルデラを起源とする火山灰であろう。ちなみに蛤良カルデラを形成した際の大爆発によって流れ出した火砕流は熊本県人吉盆地で止まっている。それ以北の地域にはパミスや火山ガラスを大量に含んだ火山灰を降下させている。遺跡全域で厚さはほぼ均等であり、20cmを測る。

Ⅶ層

色調、質ともⅤ層と同一である。ただ、Ⅴ層に含まれている白色砂粒状の火山灰は含まれていない。また、Ⅵ層の蛤良Ｔｎ火山灰も含まれていない。遺跡全域で厚さはほぼ均等であり、20cmを測る。

Ⅷ層

黄褐色ローム層である。粘性があり、いわゆる関東ローム層に似ている。当地域では阿蘇山の大爆発後に堆積した火山灰層とされており新期ロームと呼ばれている。この層は厚く堆積しており、基本的には基盤である阿蘇溶結凝灰岩の上に堆積している層になる。ただ、その中には何層かのパミスや火砕流堆積物を含んでいる。

これらの基本層序は、ほぼ、遺跡全域を見通した上で決定したものであるが、遺跡の変遷によっては欠如したり、付け加わった層がある。各時代ごとにそのあり方を見ていくことにする。

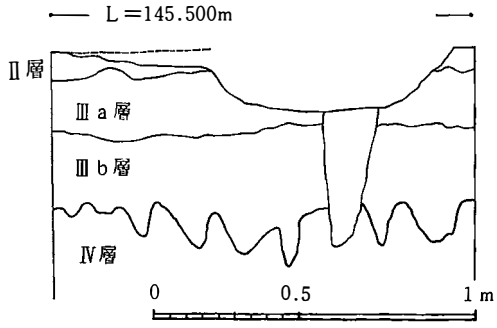
ワクド石遺跡に最初に足跡を記した時期は、先述したように縄文時代早期である。この縄文時代早期の土器を包含しているのが遺跡第Ⅲ層である。Ⅲ層はＤ区を除くＡ～Ｅ調査区から検出される。Ｄ区での未検出は後述するように古墳時代（５世紀前半）かそれ以前にⅢ層まで削り取られる何らかの作用が働いたためと考えられる。

第Ⅱ層は先述したようにアカホヤ火山灰と呼ばれる広域火山灰であり、無遺物層である。Ⅱ層はＤ区、Ｅ区西半部及びＡ区の北半部で欠如している。

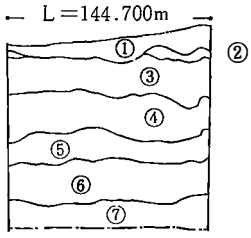
Ｄ区での欠如はⅢ層が存在しないのと同様の原因によるものと考えられる。

Ｅ区ではほぼ調査区を二分して西側にはⅡ層がない。それに変わって炭化物や縄文時代の土器片を多数含む第Ⅱ層の二次堆積土になっている。第11図から見てもわかるように遺跡第Ⅲ層の上にはⅡ層はなく、この二次堆積土が重なっていることになる。

遺跡Ⅲ層までの削平がいつ行われたかはっきりと



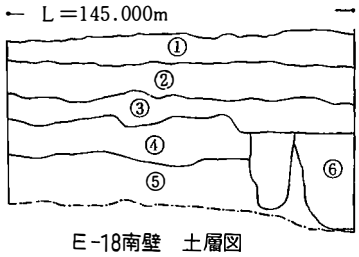
6号住置鉢の断面図



V-15北壁　土層図

0　0.5　1m

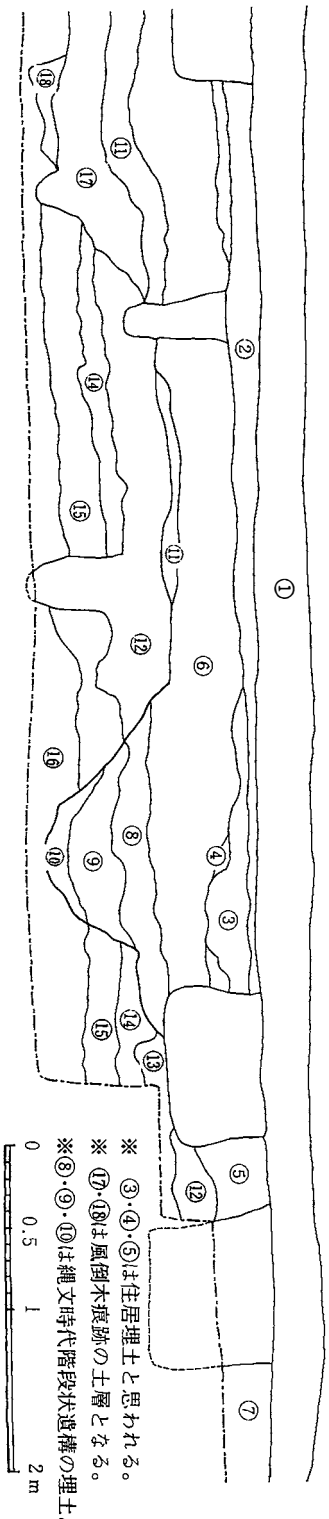
① 灰褐色土（耕作土）
② Ⅱ層　黄褐色土　A・H　2次堆積土
③ Ⅲ層　暗褐色粘質土（しまっている）押型文出土
④ Ⅳ層　褐色苦土（クラック）
⑤ Ⅴ層　黒褐色苦土（クラック及び白色砂粒子火山灰含む）
（いわゆる暗色帯）
⑥ Ⅵ層　黄褐色苦土 } 混在（クラック、白色及びガラス火山灰、
黄褐色苦土 }　黄色パミス多量含む）
⑦ Ⅶ層　⑤に同じ　ただ白色・ガラス火山灰を含まない
（いわゆる暗色帯）



E-18南壁　土層図

0　0.5　1m

① 灰褐色土（小石混り）耕作土
② 褐色土（しまる）
③ 暗褐色土（やわらかい）土器片含む
④ 暗褐色土（黄味がかる）土器片・小石を
多数含みやわらかい
⑤ Ⅴ層
⑥ 23号住居跡埋土



① 灰褐色土（耕作土）
② 褐色土（しまる）
③ 暗褐色土（住居跡、埋土か？）
④ 褐色土（③より明るい）
⑤ 焼土を含む暗褐色土
⑥ 黄褐色土（フカフカ、土器・炭化物を多量に含む）
⑦ Ⅱ層黄褐色土　A H 2次堆積土
⑧ 暗褐色土　粘質土（炭化物・黄褐色土の細粒を含む）
⑨ 暗褐色土　粘質土（炭化物・黄褐色土を斑点状に含む）
⑩ 暗褐色土　粘質土（⑯をブロック状に含む）
⑪ 黄褐色土・暗褐色土混在層
⑫ Ⅲ層
⑬ Ⅳ層
⑭ Ⅴ層
⑮ Ⅵ層
⑯ Ⅶ層
⑰ 暗褐色土　粘質土
⑱ 褐色土（⑯をブロック状に含む）

※ ③・④・⑤は住居埋土と思われる。
※ ⑰・⑱は風倒木痕跡の土層となる。
※⑧・⑨・⑩は縄文時代階段状遺構の埋土。

E調査北壁土層図

第11図　遺跡各地点の土層図

はしない。またそれが人為的なものであるかも定かではない。ただ、この二次的な堆積がD区と同様に古墳時代かそれ以前に人為的に行われた可能性は強い。

A区による欠如は原因が確かではないが、調査区の北部に寺院があったという伝承があることから、寺院を造営する際の整地によりⅡ層まで削平された可能性がある。

縄文時代早期以後に当遺跡に集落を築いたのは、縄文時代後期及び晩期、弥生時代、古墳時代、奈良時代である。さらに、集落ではないが道路遺構と鍛冶遺構がある。実はこの縄文時代早期以降の六つの時代の地表面にあたる層は当遺跡には存在しない。なぜならば、Ⅱ層より上位には現在の耕作土が直接乗っているからである。縄文時代早期以降の各期の当時の地表面はどこにいってしまったのであろうか。

遺跡周辺の地層の観察から推定すれば、当遺跡の第Ⅰ層（耕作土）と第Ⅱ層との間に黒色土（黒ボク）が存在したことが推測される。この黒色土は遺跡のいずれの地点を観察しても発見することはできなかった。ただ、本来、この黒色土が存在しないのではないようだ。遺構の埋土には汚れた黒色土が入っており、本来、黒色土は存在するが、その厚さがそれほど厚くないために耕作によって削り取られてしまったと予測される。

(3) 遺跡周辺の地層

遺跡の層序で明らかになったように、当遺跡での縄文時代前期以降の地表面がどの層準にあったかを明らかにするために、遺跡周辺の地層を観察することとする。観察地点は、瀬田裏遺跡（遺跡地図No.164）、大津町高尾野地点（遺跡地図No.162）、矢護川日向遺跡（遺跡地図No.157）、中後迫遺跡（遺跡地図No.153）の層序である。

これらの地点の観察結果から、以下のことが予測される。そして、周辺地域の森林地帯や原野においてはさきの黒色土がⅡ層の上に存在していることがわかった。そして、その直上は現在の草木の腐食土になっている。このことから、縄文時代前期から現在までこの黒色土が各地代の地表面になっているものと考えられる。

第2節　遺構・遺物の検出状況

(1) 遺構の検出状況

遺構の検出は、本来的にはそれぞれの時代の地表面での掘り込みを探す事になる。しかし、今回の調査は期間と予算の制約があり、完全な調査の実行ができなかった。特に縄文時代早期の遺構検出は不十分に終わった。

一つには試掘段階で早期の土器の出土がなかったこと。さらに付け加えるならば、早期の地表面がある第Ⅲ層が暗褐色をしており、掘り込みを埋めた埋土との識別が困難であったことによる。

縄文前期以降の遺構の検出に関しては、第Ⅱ層上面で行い、ほぼ、完全な把握ができたものと考えられる。先述したようにⅡ層は耕作土直下の黄褐色土であり、遺構が明確に識別できること。また、縄文前期以降の地表面があったと思われる黒色土が削られてしまっていると予想されることから、Ⅱ層上面での検出が最終的な検出面になることなどによる。

(2) 土器の出土状況

ワクド石遺跡での土器の出土状況には4つのタイプが認められる。

①遺構に伴って遺構の中から出土するもの。

②当時の地表面にあったものがそのまま出土しているもの。

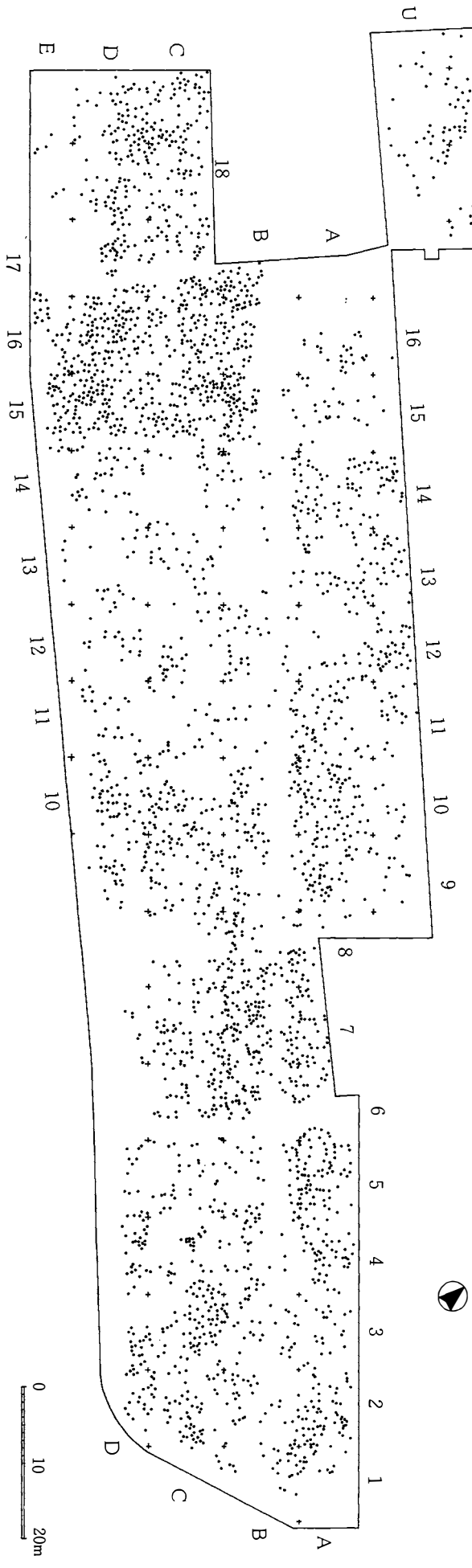
③土器片が多数含まれ、層として出土するもの。

④整地層の中に含まれて出土するもの。

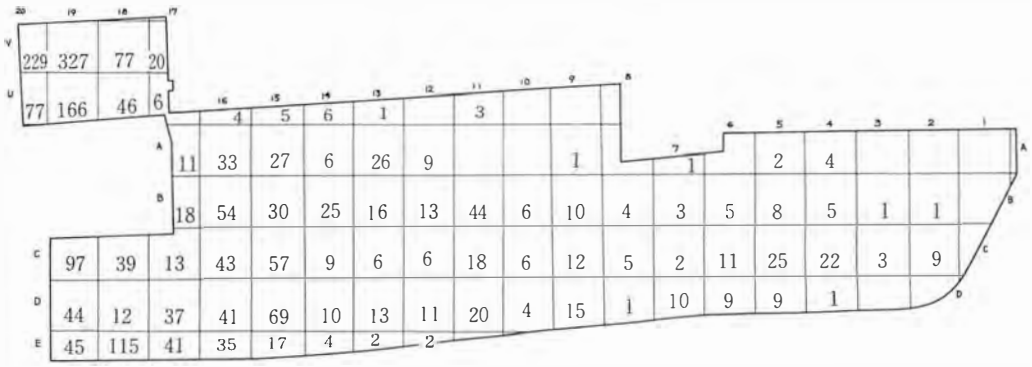
これらの状況は各時代によって異なった様相を見せている。

ワクド石遺跡の主要な時期である縄文時代後期～晩期の土器はそのほとんどが③の出土状況を見せている。いわゆる包含層といわれるものでワクド石遺跡では厚いところで約10cmを計る。この包含層はⅠ層（耕作土）とⅡ層の間に存在し、褐色の崩れやすい土のなかに土器が含まれている。場所によっては土器の割合のほうが高い場合もあった。

また、その厚さは縄文時代後期～晩期の時期と想



第12図　柱穴検出状況図



第13図　土器底部出土頻度図(グリッド別点数)

定できる柱穴群の濃密な地区ほど厚くなる傾向にある。また、含まれている土器は角が取れた磨滅したものではなく、割れ口は鋭い。さらに、土器が水平堆積を示さず、突き刺さった状態で出土する土器も多数存在する。

これらのことから、この包含層中にある土器は当時の地表面に敷きつめられたり、捨てられたりしたものではなく、縄文時代後期～晩期にかけての住居が後の時代の耕作によって破壊され、そう離れない範囲で住居内の土器が散らばった結果であると考えられる。この事は後述するように縄文時代後期～晩期にかけての住居跡の床面がⅡ層上面で発見されることと無縁ではない。住居の破壊が床面あるいはその下位まで及んでいることを表しており、住居内の土器はほとんどその周辺に破壊のため散らばったと思われ、その土器の量は膨大なものになっている。

①の出土状況は主に古墳時代や奈良時代の住居跡や溝からの出土である。特に古墳時代の住居跡は竪穴の深さが深かったためか、住居跡の中に土器がまとまって発見された。

②の出土状況はワクド石遺跡では縄文時代早期の塞ノ神式土器にのみ見られた。Ⅱ層とⅢ層の境に現位置を保って発見された土器が数点あった。

③の出土状況は、先述したようにD調査区及びE調査区において見られた。この二つの調査区には斜面部があり、整地する必要があったのかもしれない。整地された面に古墳時代の竪穴住居が建てられており、古墳時代の集落を当地に造営する際に整地したか、あるいは少なくとも古墳時代以前に何らかの理由で整地が行われたことは明らかである。

整地層のなかに含まれている土器はほとんどが縄文時代後期～晩期にかけての土器である。

縄文時代柱穴検出状況

第Ⅴ章　遺構と遺物

第１節　縄文時代早期の遺構と遺物

ワクド石遺跡における縄文時代早期の地表面は、遺跡第Ⅲ層が形成される時期であった。すなわち、第Ⅲ層に早期の遺物が包含されている。ただ、火山灰の降下により、地表面は徐々に上位に上がっていったのであろうが、それを詳細につかむことはできなかった。そのなかで、遺跡第Ⅱ層であるアカホヤ火山灰降下直前の地表面で塞ノ神式土器が現位置を保って発見された。またその層準において土坑を検出することができた。

(1)　遺物の出土状況

遺物として土器と石器があげられる。ただ、現位置を保って検出されたのは塞ノ神式土器の一部であり、他の遺物はいずれも後世の遺構の中からの出土であった。土器は押型文土器が主体を占めた。ただ、その出土層準は確認できなかった。

(2)　遺　　構

a　集石遺構（第14図）

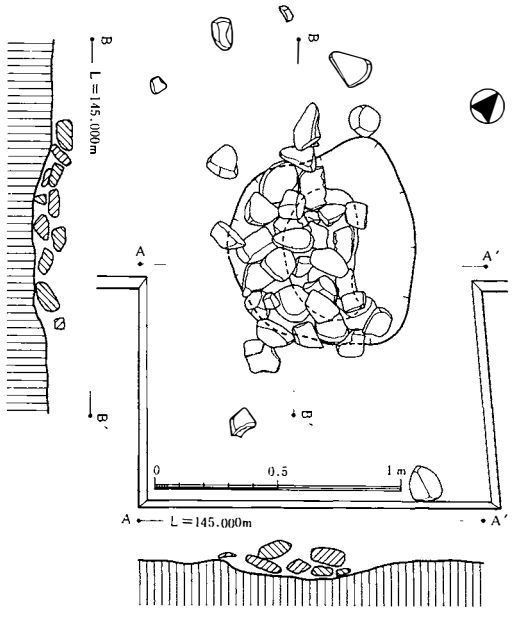
Ｅ調査区，Ｕ-18グリッドにおいて第Ⅱ層直下、Ⅲ層に掘り込まれる状態で発見された。浅い皿状の窪みをつくり、その内面に沿って偏平なこぶし大の河原礫を敷きつめている。平面形は楕円形を呈し、窪みの深さは現状で約５㎝を計る。

敷きつめた面の上には焼けた礫が落ち込んだ状態で出土している。この集石遺構は有名なニューギニア高地地方の民族例である蒸し焼き料理の調理法と同じものと考えられる。

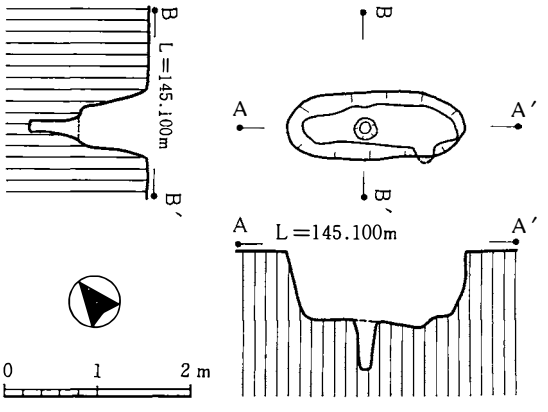
b　礫群遺構（第16･17図）

焼けたこぶし大の礫が散らばった状態で検出されたもので、Ａ-17・18、Ｕ-18区から北東に広がっているようだ。その中には集石遺構も含まれている。Ⅰ層である耕作土の直下のためか、耕作による攪乱が激しく、本来の姿をかなり失っているものと思われる。そのため、集石などの人為的な構造物と判断するのが困難な遺構である。ここで遺構としたのは、礫群の中にやや礫がまとまった部分が２か所ほどあり、本来そこにまとめて山積みにされていたものが散らばった可能性があるためである。

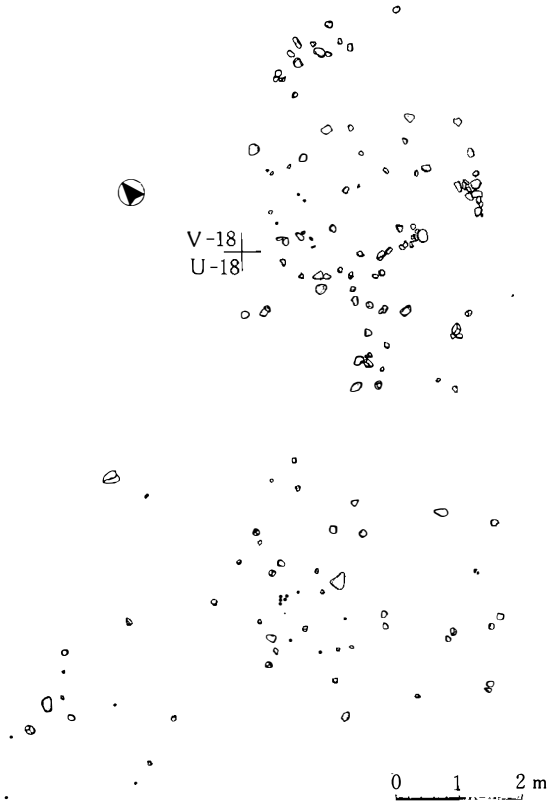
すなわち、これらの礫は、集石遺構に使用されていたかぶさって焼けた礫の役割を果たすものと考えられるのである。つまり、集石遺構はそのもので機能するのではなく、これらの多数の礫と、礫を焼くための施設とともに機能を果たすものと考えなくてはならない。



第14図　集石遺構実測図



第15図　縄文時代早期土坑実測図



第16図　縄文時代早期礫群出土状況図（E調査区）

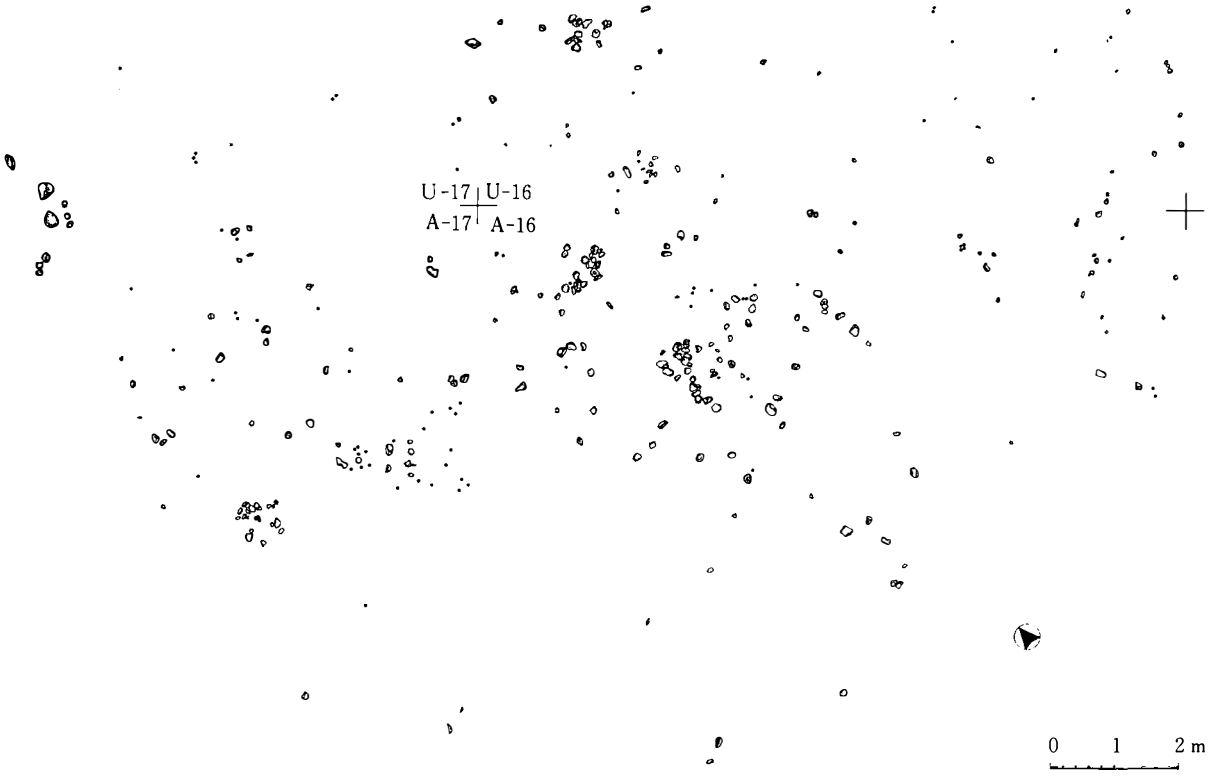
c　土　　坑（第15図）

長軸方向1.9m、短軸方向0.7m、深さが底部まで0.7mを測り、平面形は長楕円形をしている。底部の中央に直径25cm、深さ50cmの穴が設けてある。断面形を見てもわかるように、この小穴が遺構検出面から掘られていたとすれば1.2mもの深さになり、周囲の縄文時代の柱穴群のそれとは違いすぎている。このことからこの小穴は土坑の施設の一部である可能性が強い。

土層図は発掘調査の際の指示の行き違いから作成していないが、メモから説明すると、上層に遺跡第Ⅱ層が堆積し、下層には灰褐色土が堆積していた。このことから、この土坑は第Ⅱ層以前の遺構と考えられることから、早期に属するものとした。また、現在のところこの種の遺構は人吉市大丸・藤ノ迫遺跡を代表とする早期の遺跡において検出される事が多い。

(3) 遺　　物

縄文時代早期の遺物には土器、石器を中心にいろいろな遺物が見られるが、ここでははっきり認定できる土器について取り上げることにする。



第17図　縄文時代早期礫群出土状況図（C調査区）

早期の遺物で、出土する土層が明確で当時の地面にそのまま置き去りにされたものと考えられる遺物は極めて少なく、Ｂ区北側から散在して発見された土器３点だけである。この土器は塞ノ神式土器で、出土層位は遺跡第Ⅲ層上部であり、Ⅱ層をめくるとすぐ顔を出す状況であった。さらに集石遺構の周囲及び礫群遺構の間からも出土している。これらから出土した土器は押型文土器である。出土層準はやはり遺跡第Ⅲ層上部にあたる。

これ以外の土器はすべて遺構の埋土のなかからの出土であり、縄文時代早期以降の住居や柱穴、溝などの遺構の造成によって、早期の土器が破壊されもともとあった地点から離れ、後世の遺構に入り込んだと理解される。

ワクド石遺跡から出土した縄文時代早期の土器は従来の形式名で言えば、押型文土器（楕円文、山形文）、手向山式土器、条痕文土器、撚糸文土器、そして塞ノ神式土器である。これらの土器の分布は遺跡内において違いが見いだせる。押型文土器はＣ区及びＤ区から広く出土しているが特に礫群遺構のあるＵ・Ａ・Ｂ-14・15・16・17、Ｕ・Ｖ-18区からはよりまとまって出土している。ただ、押型文土器でも山形の押型文土器は礫群遺構から離れたＣ区南部及びＤ区から出土しており、楕円文押型文土器の分布と一線を画している。手向山式土器、条痕文土器、撚糸文土器は数も少なく分布に一定の傾向は認められないが、ほぼ押型文土器の分布範囲と重なっている。

数は少ないものの押型文土器の分布と際立った分布を見せているのが塞ノ神式土器である。Ｂ-８・９区を中心とてＢ区中央部とＤ区に分布している。

第18図１～34は押型文土器でも器形のよく分かるもの、文様がはっきりしているものを選んで掲載した。すべて小破片であるため全体の器形はわかりにくいが、口縁部及び底部近くの資料からから推測すれば、平底か平丸底の底部を持ち、やや立ち気味の胴部が続き、口縁部近くで急に外反するものが多いようだ。この外反の状態は内面口縁部に原体条痕文を施したものほど「く」の字形に強く外反しているようだ。

文様の組み合わせは、小破片がほとんどのため確率は低くなるが、以下の組み合わせが見られる。外面楕円押型文に内面口縁原体条痕文。さらにこれらの土器の口縁端部に原体条痕文を施すもの。外面楕円押型文に内面口縁山形文。外面楕円押型文に内面口縁部に横方向の撚糸文。なお、底部には尖底が１点ある。押型文は施されておらず、外内面とも丁寧な磨きが見られる。

第18図35・104～第19図37まではいわゆる手向山式土器と呼ばれているものである。35のように撚糸文を縦横に施したものや、37のように山形の押型文の上から条痕文を重ねたものもある。

第19図38～41までは条痕文土器である。しかも貝殻を用いた施文のようだ。

第19図42～44までは撚糸文土器である。わりと細い撚糸を使っている。

第19図45～62までは塞ノ神式土器である。59～61の資料が現位置で出土したものである。全体の器形は平底円筒形をし、口縁部で「く」の字形にはっきりと折れ曲がる独特の器形をしている。胴部の文様は幾何学的な沈線文様の内部を撚糸文で埋めている。口縁部は沈線とそれに沿った刺突文とそれに撚糸が加わったものもある。

第20図95～103は厳密にはどの時期に属するのか不明であったが、103の資料は地に撚糸文が確認された。そしてその上に同心円の沈線とそれに平行するような刺突文が組み合わせられる文様から、平栫式土器の範疇でとらえられることが可能である。そのため103の文様に似ている他の土器をここでは一応平栫式土器として早期の土器として考えておく。

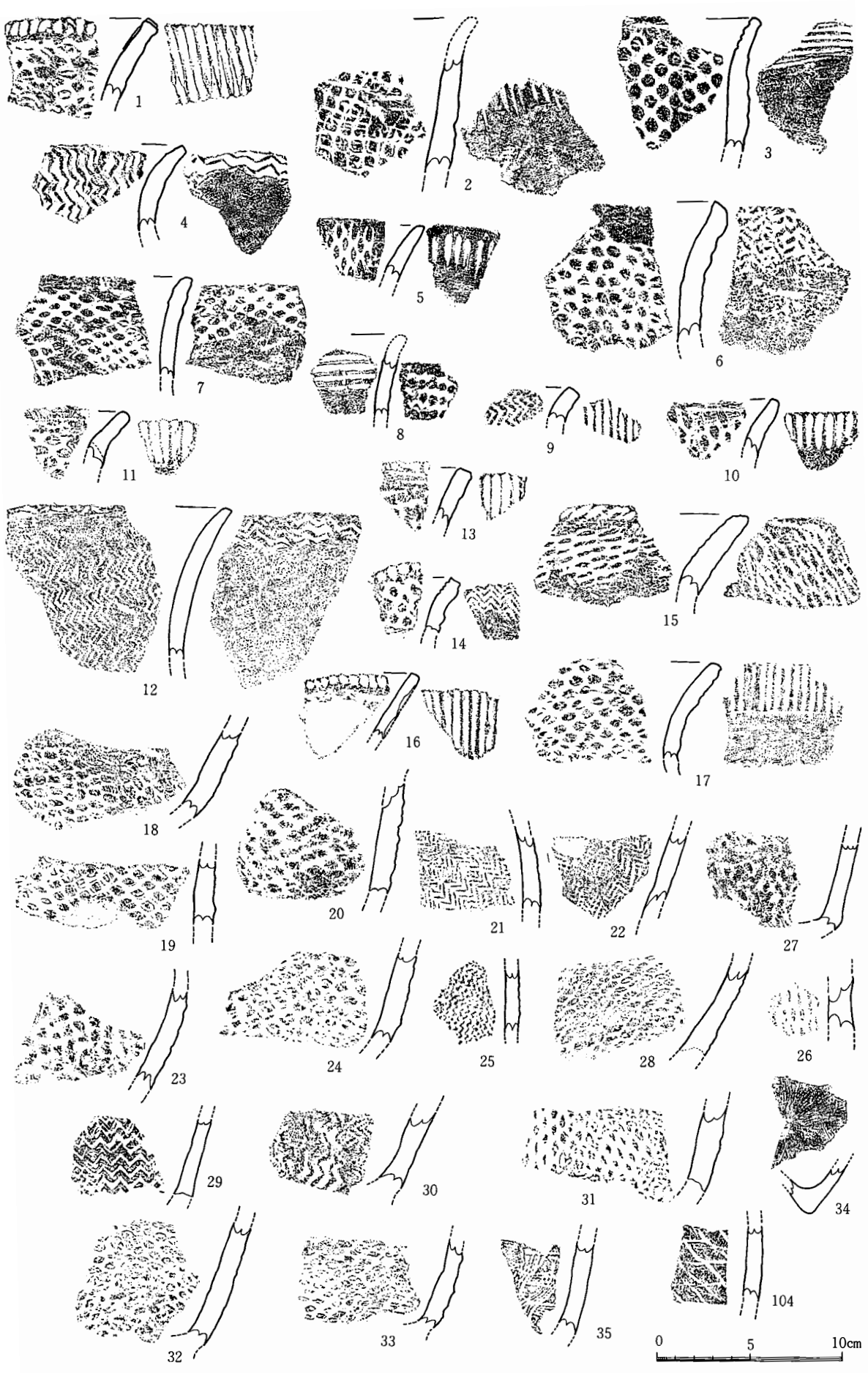
第２節　縄文時代前期から後期前半にかけての遺物

(1)　縄文時代前期の遺物

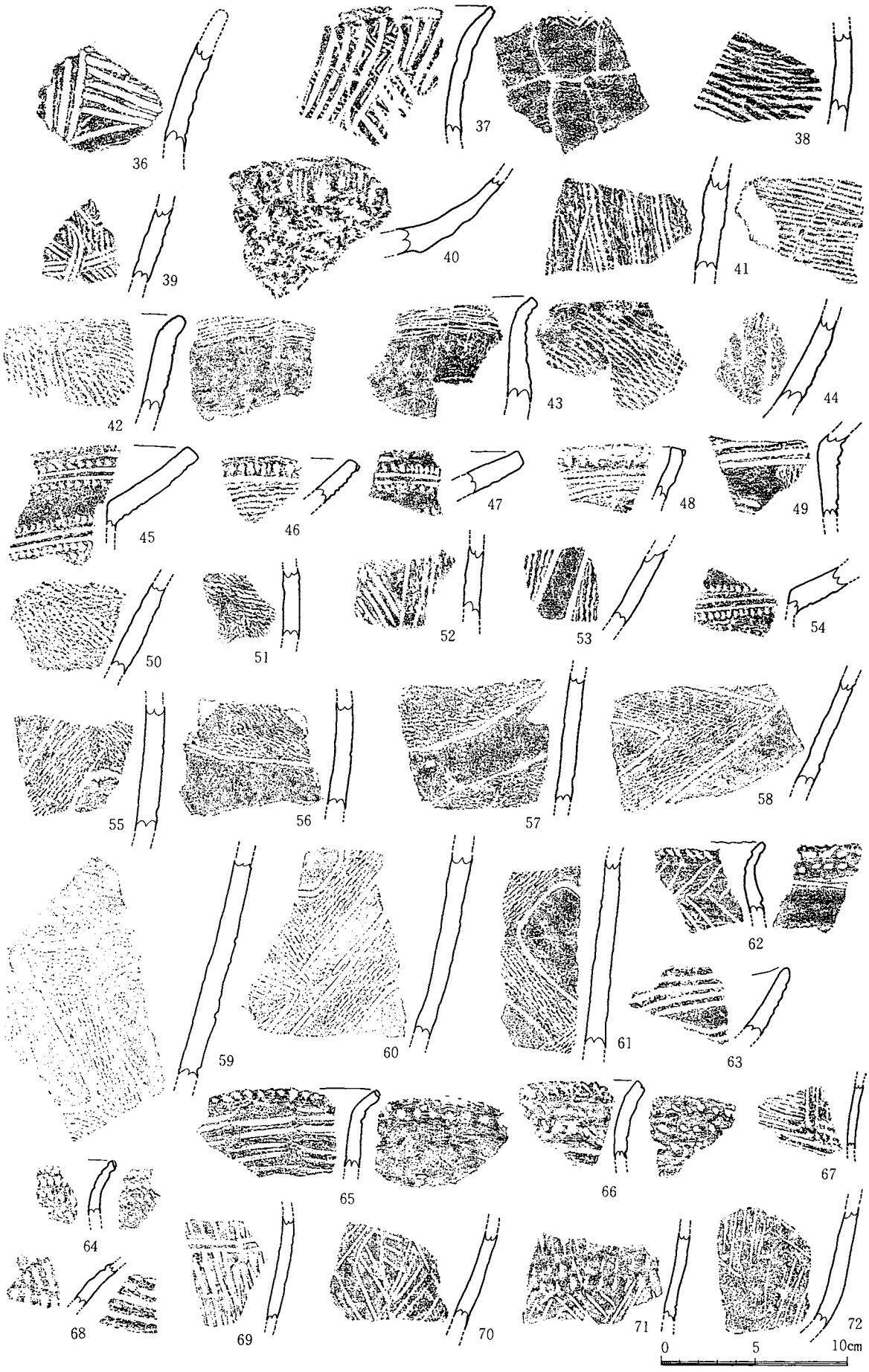
すべての遺物が現位置を離れ、新しい時期の遺構及び第Ⅰ層下のいわゆる包含層からの出土である。

この時期の遺物はすべて曽畑式土器で第19図63～76に示した。

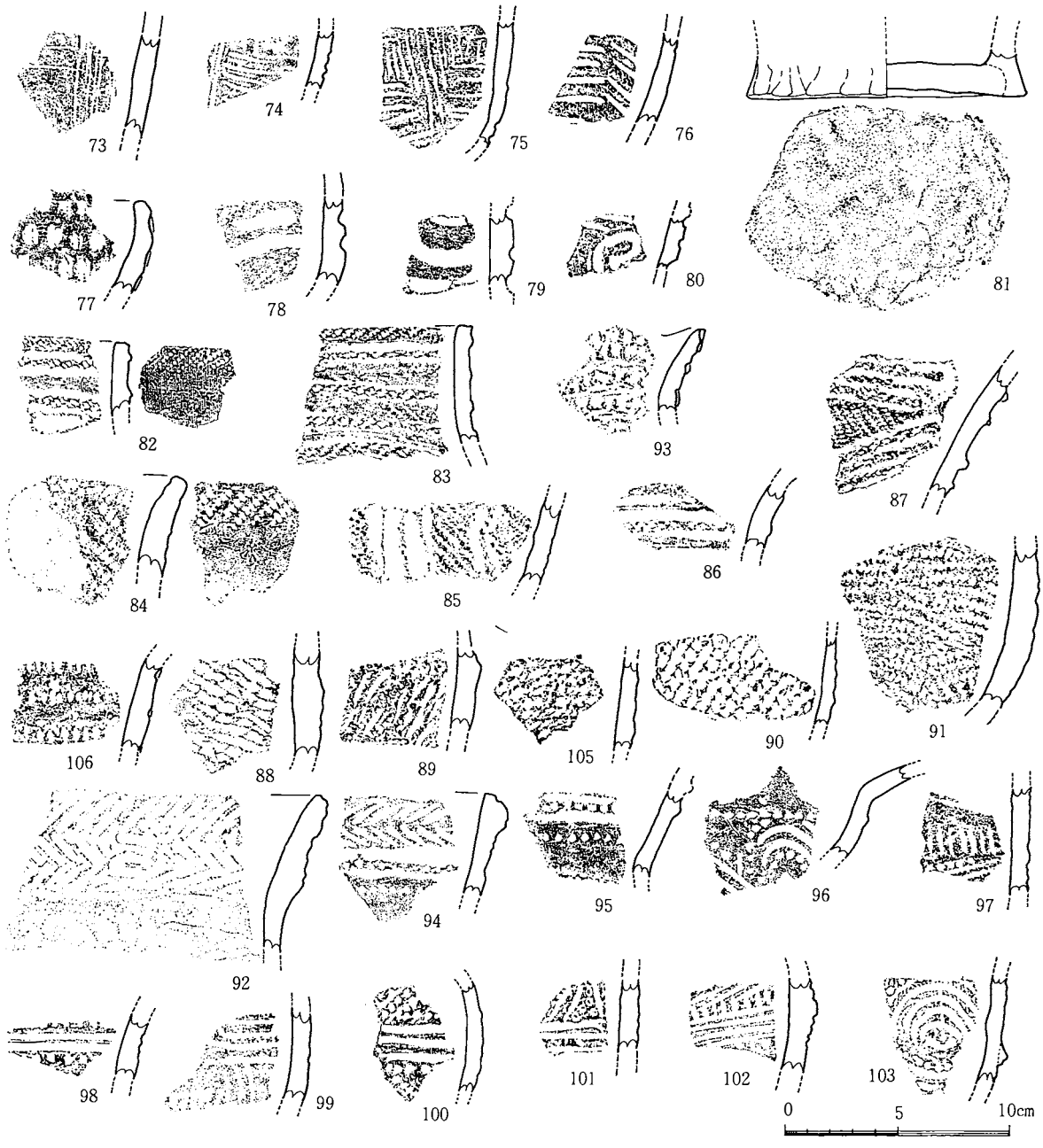
63～66は口縁部で口縁端部で強く外反している。



第18図　縄文時代早期から後期前半にかけての各調査区出土土器(1)



第19図　縄文時代早期から後期前半にかけての各調査区出土土器 (2)



第20図　縄文時代早期から後期前半にかけての各調査区出土土器(3)

口縁内外面に刺突文を多用しており、口縁端部には刺突文や沈線文を施している。

胴部外面の文様は小破片のためか横方向あるいは縦方向に文様を区画するような沈線文を持つものは少ない。底部資料はないが底部に近いものから見ると丸底であるようだ。

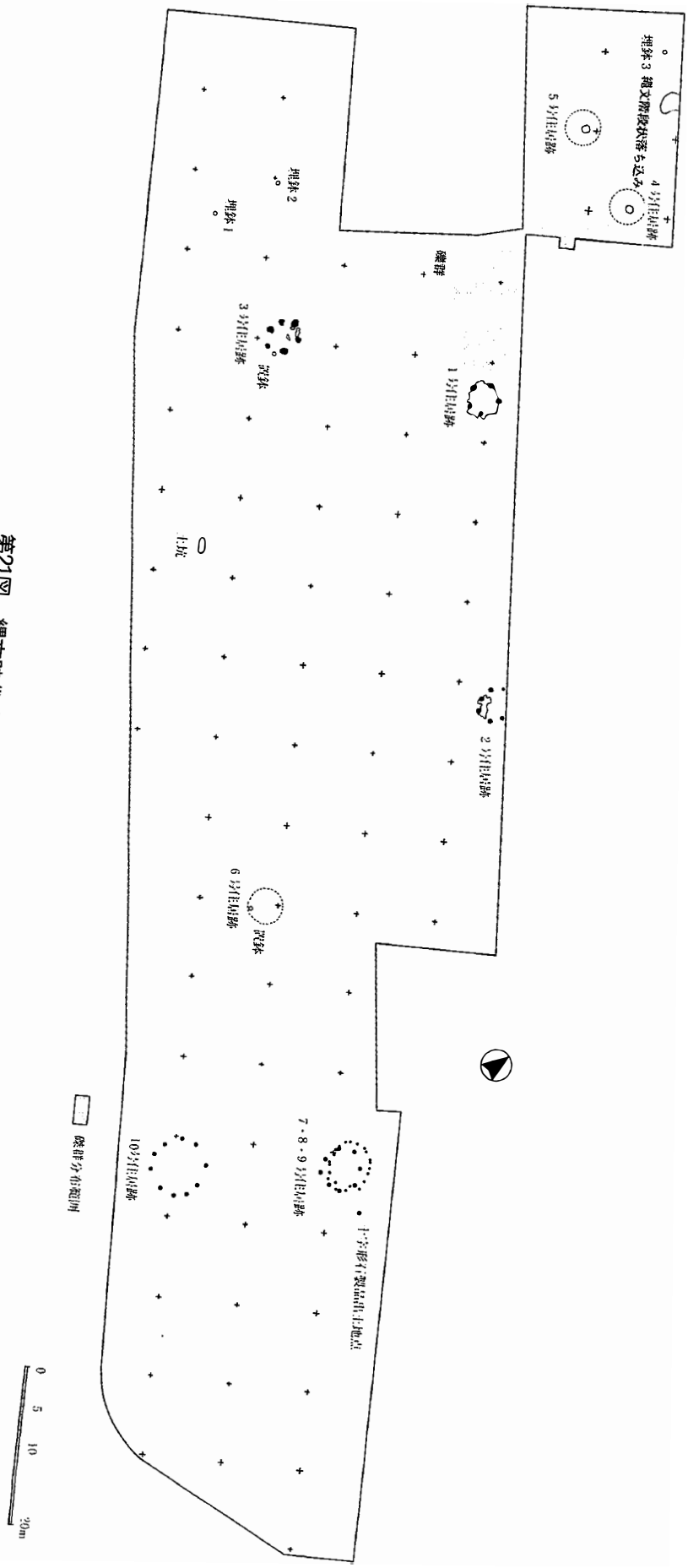
82～91・105は当初竹崎式土器としてとらえ縄文時代中期としていたが、器形の特徴や隆帯をめぐらすことなど前期的な部分が多いため前期として報告しておく。

82・83の口縁部や口縁近くと考えられる資料から見ると、直立するか、開き気味にやや外反する器形をしているようだ。そして口縁近くに断面三角形の隆帯粘土紐を縦、横方向あるいは斜め方向に張り付け、その上から縄文を施している。地は基本的に縄文を施している。なお、この縄文の原体は2段ＬＲがほとんどを占めている。

(2)　縄文時代中期の遺物

この期の遺物もすべて現位置を離れ、新しい時期の遺構及び第Ⅰ層下のいわゆる包含層からの出土である。

第20図77～81・106に示した土器がこの期にあたり、土器形式で言えば阿高系土器、御手洗式土器になる。



第21図　縄文時代遺構配置図

阿高系土器として示したものは77～80でいずれも小破片であり、文様の特徴や器形は不明な点が多い。77は唯一の口縁部でボール型の器形をしており、横に連続した指頭列点を施している。その際爪の圧痕を残している。なお、81は底部のみの資料であり、文様は施されないが、おそらくその器形から見て阿高系土器の底部と考えられる。

106は御手洗Ａ式土器と考えられる。刺突文が横方向に平行して施されている。

(3) 縄文時代後期前半の遺物

92に示した１点のみであるが、北久根山式土器と考えられる。口縁部に文様帯が限られるようで、そこに明瞭な沈線で羽状文を施し、中央に逆Ｓ字を書いている。器面は粗いが磨きを施している。

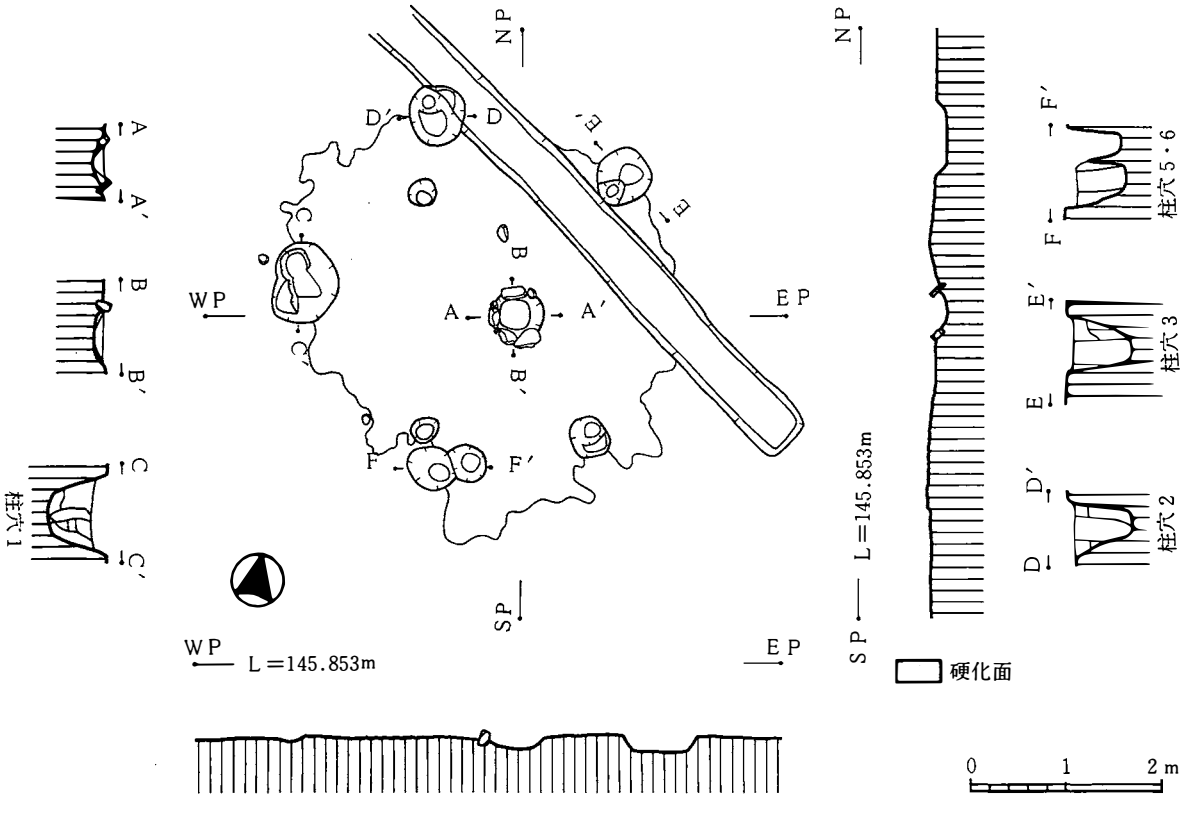
第３節　縄文時代後・晩期の遺構と遺物

この期の遺構と遺物がワクド石遺跡の大部分の遺構、遺物を構成している。検出された遺構(第21図)は、住居跡、埋甕、柱穴群などである。特に柱穴群は多数検出され、今回の調査の特徴でもある。この柱穴群は住居の柱穴と思われるが、第Ⅳ章でも述べたように当期の住居の床面が第Ⅰ層である耕作土直下でかろうじて検出される状況であるため、住居跡としての掘り込みが確認されないばかりか、ほとんどの場合床面下位まで削平されていると推測された。このため、住居跡の検出・認定は困難をきわめ、住居跡として認定したのはわずかに10棟であった。

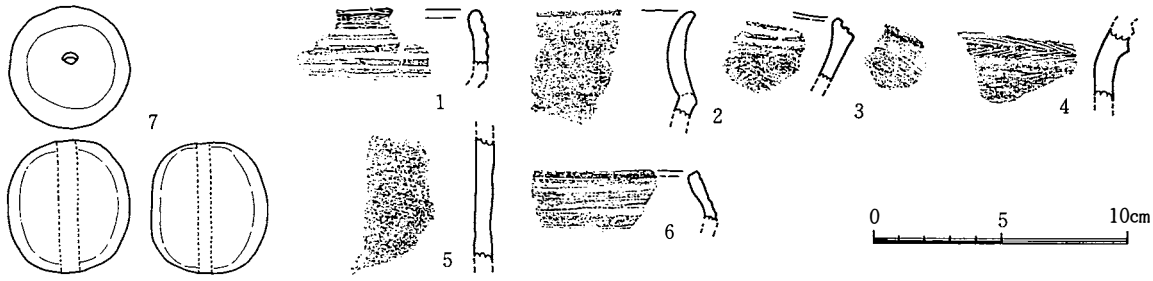
遺物としては土器、石器を中心として大量に発見された。ただ、先述したように住居跡に伴って出土したものは少なく、いわゆる包含層からの出土である。以下、検出遺構ごとに詳細を記述する。

(1) 住 居 跡

ワクド石遺跡では表土直下に床硬化面及び炉跡が現れた住居跡が５基確認された。いずれもＣ区北半部からＥ区にかけて検出された。後世の削平や攪乱から辛うじて逃れた部分かもしれない。また、住居跡内に置かれたと考えられる鉢の出土から住居跡と思われる２基、及び柱穴の配列から住居跡と考えられる３基を加えた。



第22図　縄文時代１号住居跡実測図



第23図　縄文時代１号住居跡出土遺物

１号住居跡（第22図）

遺跡北西部は後世の削平が激しかったのか、厚さ30cmの表土を剝がすとすぐⅡ層が現れる。１号住居跡の床硬化面はこのⅡ層上面で検出された。そのため、住居跡の側壁はすでに削平によって失われていた。ただ、硬化面は著しく硬化しており、その広がりも明確に確認することができる。硬化面の範囲は南北約４ｍ、東西約４ｍでほぼ円形になっている。そして、この硬化面の広がりの周囲に沿うように住居の柱穴が並んでいる。柱穴は合計５地点10本が確認された。配置から見て、基本的には５本柱であり、柱の建て替えが随時行われたようだ。なお、柱穴からは柱痕跡が発見された。

また、**柱穴２**と**柱穴６**を結ぶ線上に小さな柱穴が２ヵ所検出されている。この柱穴の埋土は他の柱穴と同じであり、同時に存在したものと考えられる。おそらく、屋内の施設を支える補助柱として使用されたものであろう。

当住居跡で特筆されるものが硬化面中央やや東寄りに位置する石囲い炉である。やや偏平な砂岩と安山岩の河原石を利用している。石は浅い皿状の掘り込みを長方形に囲むように据え付けられており、南東側には石を置かず開いている。また、いずれの石もかなりの火熱を受けたと考えられ、とくに砂岩は手で触ると崩壊するような状態であった。炉の内側には全面に焼土が堆積していた。焼土はレンズ状の堆積を見せ、最大の深さは約12cmある。焼土そのものは暗褐色土を若干含むものの、後世に攪乱を受けた様子は見られず、固くしまっている。

なお、この焼土の底部近くの土をサンプルとしてプラントオパール分析を行い、第Ⅵ章にその結果を掲載している。

【遺物】（第23図）

耕作土直下に床面が検出されたためか、遺物の出土状況は悪く、土器は小破片のみであった。ただ、遺物は床面に食い込んだ状況で発見されている。なお、4の土器は**柱穴５**からの出土である。

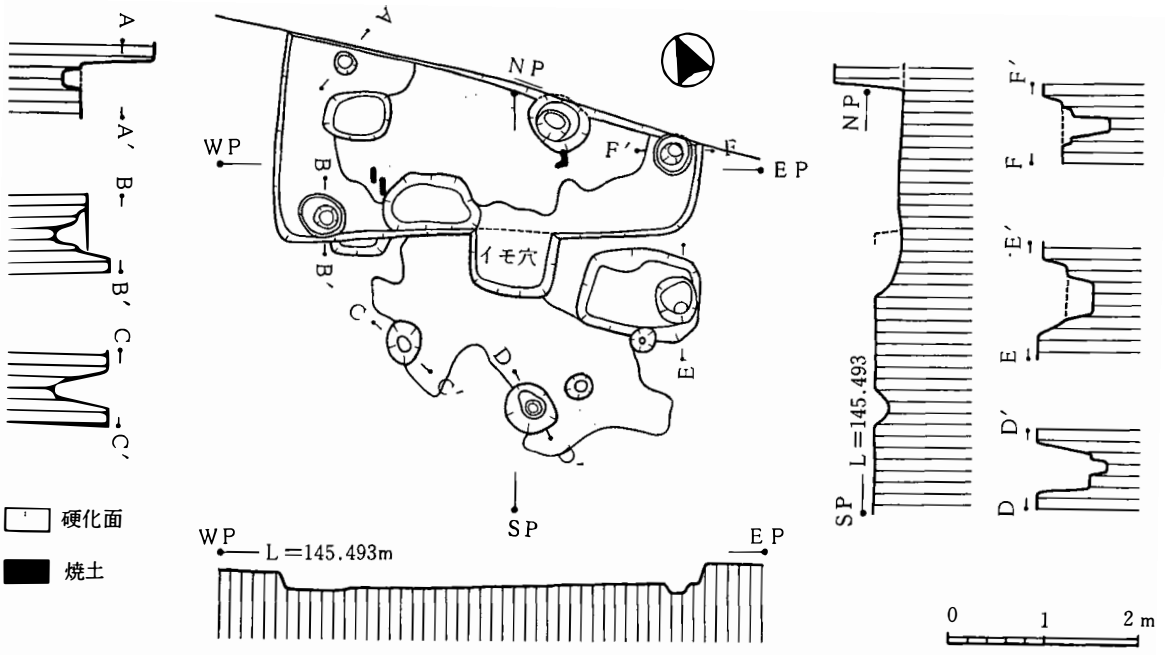
１・６は深鉢口縁部の破片と思われ、やや内傾する短い口縁部から内側に屈折しながら頸部となるものと考えられる。２点とも内外面を磨いており、特に６はそれが顕著である。２は無文の口縁部から胴部にかけての浅鉢の破片であり、内外面とも粗い調整である。３は２本の沈線が刻まれた波状の口縁部の破片である。内外面に磨きが施されているが丁寧なものではない。４は胴部から頸部への境に幅広い凹線をめぐらし、その上に細かな細線羽状文を刻んだ浅鉢の胴部から頸部にかけての破片である。外面には丁寧な磨きが施されているが内面は粗い。

７は焼き上げられた球状の土製品で、中央に上下に貫く孔が焼成前にあけられている。この孔は断面が円形ではなく、菱形に近い。また、焼きは中まで焼き上がっておらず、内部は崩れやすい。有孔土製品と呼んでおきたい。

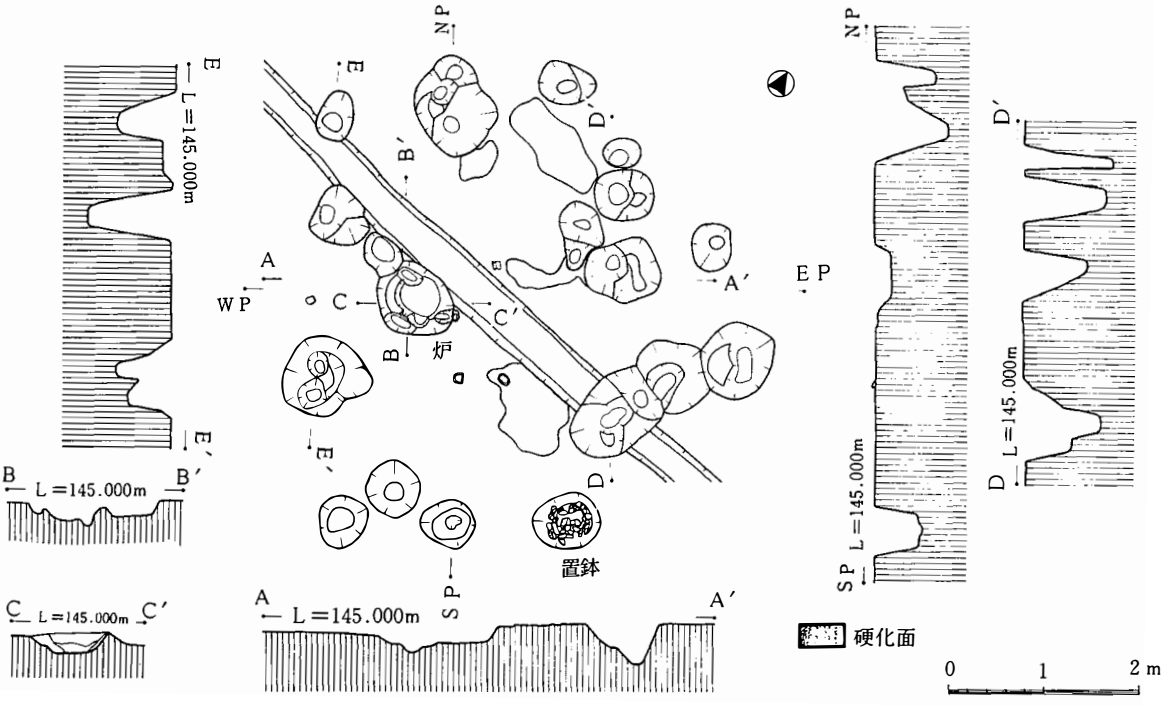
２号住居跡（第24図）

１号住居跡と同じように表土を剝ぐとすぐに著しく固い床硬化面が現れた。しかし、側壁は確認できなかった。また、残念なことに古墳時代の13号住居および近代のイモ穴が作られたため、その３分の２が破壊されている。このため、炉の存在は確かめられなかった。

この２号住居跡の柱穴と考えられる柱穴が６個発見された。そのうち２個は床硬化面に沿う位置にあり、他の４個は古墳時代の住居及びイモ穴から検出



第24図　縄文時代２号住居跡実測図



第25図　縄文時代３号住居跡実測図

された。柱穴はほぼ楕円形に並んでおり、配置から考えて８本の柱が本来立てられていたものと思われる。柱穴の内、５つから柱痕跡が見つかっている。

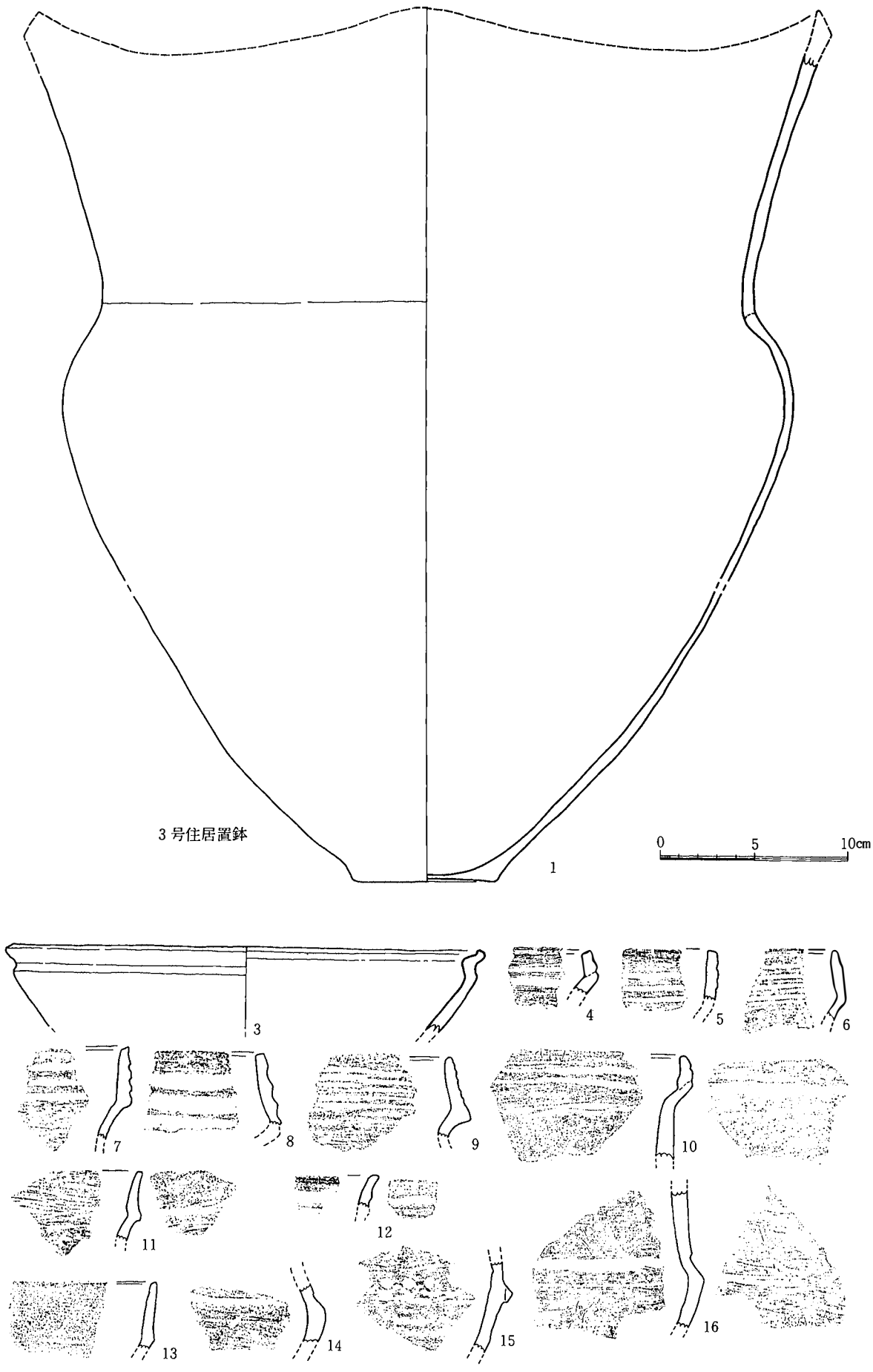
【遺物】

住居跡に伴うと考えられる遺物は発見できなかった。２号住居跡のある調査区はU-11区であるが、このグリッドからは土器はほとんど出土していない。

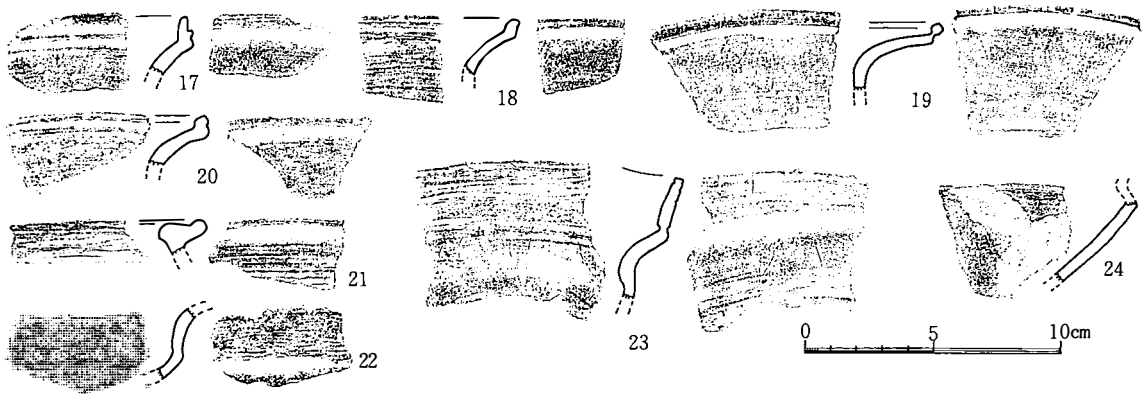
３号住居跡（第25図）

１号住居跡と同じように後世の削平により側壁がなくなっている。床硬化面は１号住ほどはっきりとした広がりはなく、部分的に残存していた。しかし、硬化面そのものは厚くしっかりしている。この硬化面の広がりとそれを取りまく柱穴の配置からこの住居跡の構造を推察すれば、平面プランは楕円形になり、柱の数は６本になりそうである。

楕円形の平面プランをとるものとすれば、その中央部西寄りに炉が検出された。一部は近世の溝によって壊されてはいるが、残りは良好であった。石そのものは発見されなかったが、抜き取り痕跡があり、



第26図　縄文時代３号住居跡出土土器(1)



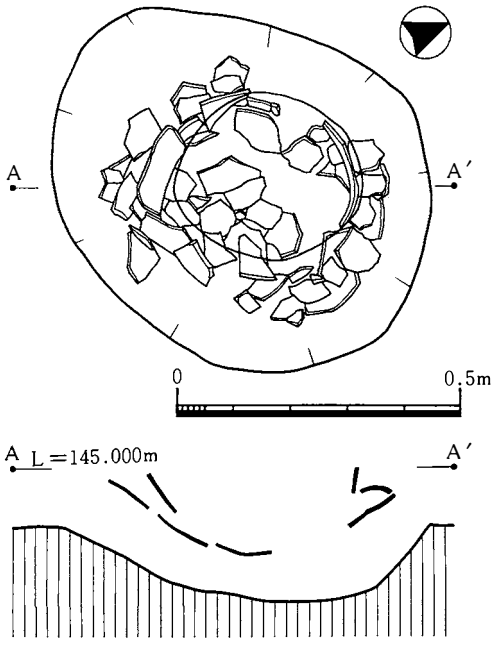
第27図　縄文時代３号住居跡出土土器(2)

石囲い炉であったことがわかる。抜き取り痕跡は３辺には確認されたが、残る１辺には確認されなかった。このことからおそらく、炉は南東側に開いていたようだ。これは１号住居の石囲い炉の開く方向と同じになる。

なお、住居跡南側から、当初埋鉢かと思われる深鉢が発見されたが､深鉢底部のレベルは床面から10cmほど深いだけであり、床に据えつけられた状態であろうと思われた。

【遺物】(第26図，第27図)

遺物として土器を24点あげているが、出土状況はまちまちである。１の深鉢は先述したように住居の南側側壁近くに据えつけられていたと考えられる。その他の土器は床面、柱穴及び炉跡からの出土である。

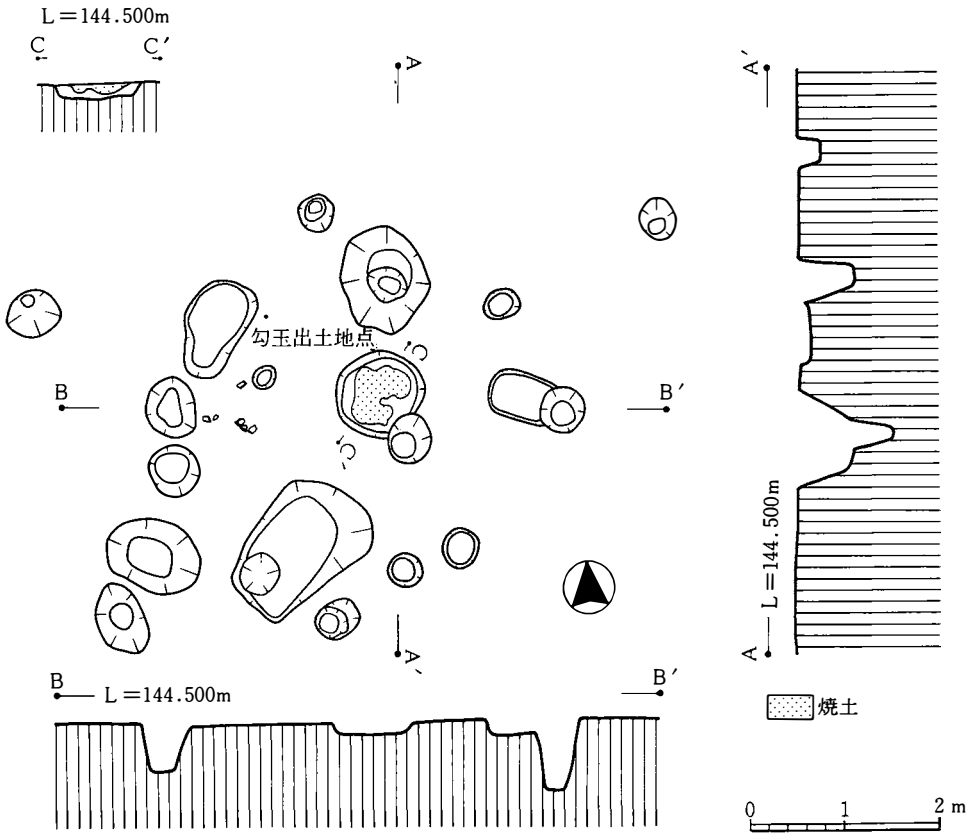


第28図　縄文３号住居跡内置鉢実測図

１は波状の口縁をしており、口縁部は短く無文である。頸部はやや外反気味に立ち上がっている。頸部から胴部への屈折はきつい「く」の字ではなく、なめらかである。そして、最大胴部がかなり上位にあり、底部にかけてはややふくらみながらも直線的である。底部はそれほど段がつかず、うすい。やや上げ底である。全体のプロポーションは頸部が短く最大胴部が上位にあるためか重心が上位にあり、スマートな感じがする。内外面とも磨かれている。

４は炉跡からの出土で深鉢口縁部の小破片である。口縁部がやや内傾し、２本の沈線が刻まれており、口縁端部は明瞭な平坦面に仕上げている。

７、10、12、14、16、17、22～24は床面上層からの出土であり、床に貼り付いたものではない。７、10は深鉢口縁部小破片で口縁部に２から３本の沈線を引き、頸部から屈折してほぼ垂直に立ち上がっている。口縁端部は明瞭ではないが平坦である。14、16は深鉢胴部破片である。頸部から胴部への境にあたっている。いずれも境に段が削りだされている。２点ともややふくらみのある胴部から屈折してほぼまっすぐ立ち上がる頸部になっている。17、22～24はいずれも浅鉢の小破片であり、22、23からわかるようにきつく外反する頸部にから口縁部がほぼ垂直に立ち上がっている。17は口縁部に２本の沈線を刻んでいる口縁部破片である。沈線と沈線の間は盛り上がり突帯のようである。23は口縁端部に山形の突起を全周の４か所に持つものと考えられる浅鉢口縁部破片である。浅い沈線が３本刻まれており、上の２本は山形の突起の部分で突起と平行に山形になる。22、24はいずれも浅鉢頸部から胴部にかけての破片



第29図　縄文時代４号住居跡実測図

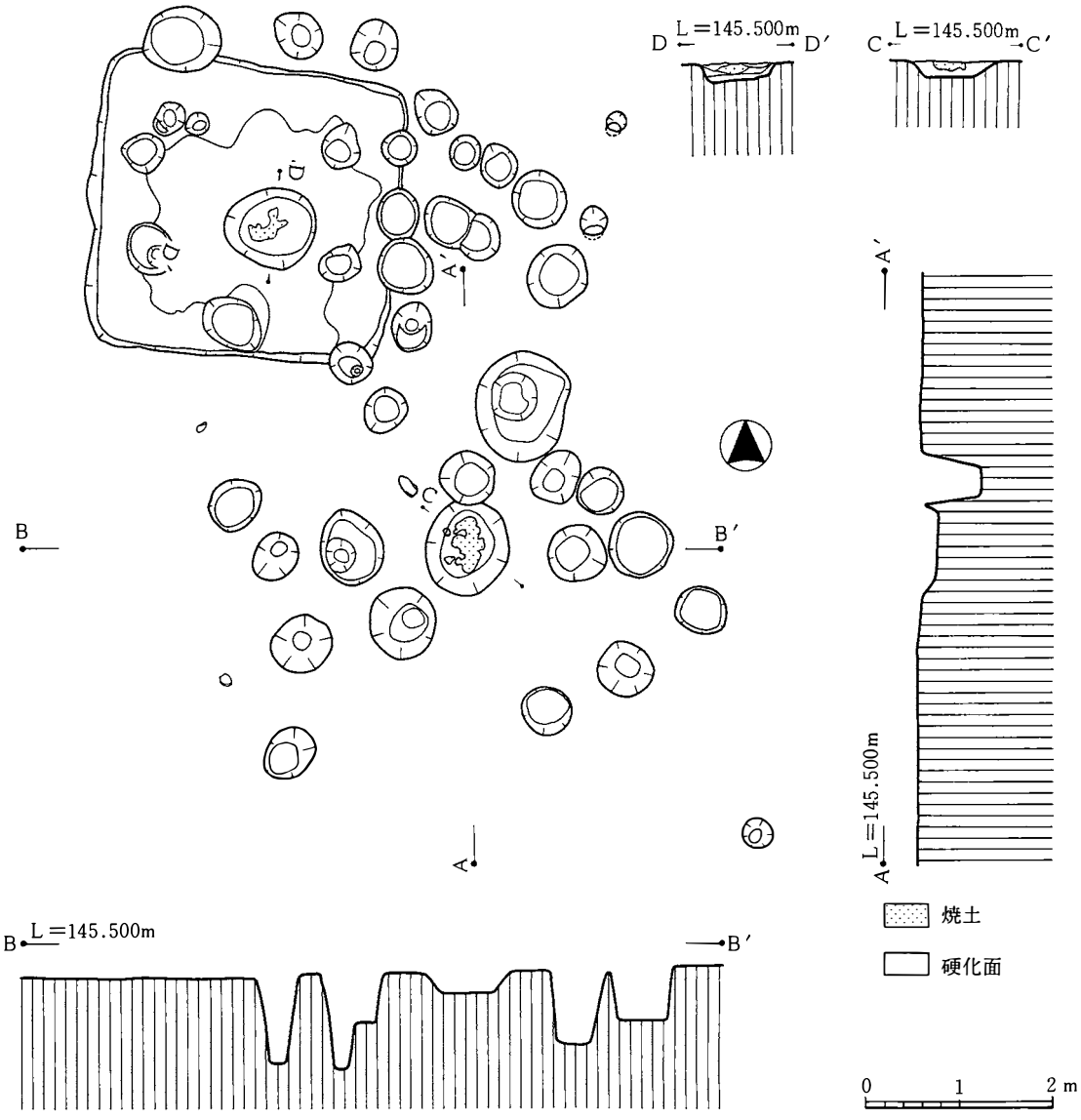
である。12は口縁部外面に幅広い凹線を連続して引いた文様を持つ浅鉢口縁部破片である。胴部の屈折から外反した口縁部が続いているようだ。浅鉢は全般に内外面とも丁寧な磨きが施されている。

３、５、６、８、９、13、15、18～21は柱穴からの出土である。５、６は深鉢口縁部破片であり、２点とも口縁部外面に３、４本の沈線を刻んでいる。一本づつ手で刻んでいるようだ。また、口縁端部は明瞭ではないが平坦に仕上げている。９、11は同じく深鉢口縁部破片である。口縁部外面には沈線らしい条線が見られるが、これはおそらく貝殻による条痕であり、文様を付ける際の方法が基本的に沈線とは異なっている。口縁端部は丸みを持つ。13は頸部から口縁部にかけて屈折が弱い深鉢口縁部破片であり、内外面とも無文である。８も深鉢と考えられるが小破片のため明確ではない。口縁部外面に幅広の凹線を連続させており、おそらく３条になるものと思われる。口縁端部は平坦に仕上げている。15は深鉢胴部破片であるが、おそらく胴部と頸部との境と思われる部分に粘土紐をはりつけ、断面三角形の突帯を作りだしており、突帯の上に刻目を連続して刻んでいる。この土器の表面は内外面とも調整が粗い。18～21はいずれも浅鉢口縁部破片である。18～20は強く外反する頸部を持つが、21は頸部が口縁部と一体になっている。18～21とも口縁部は細い粘土紐を１本頸部の上に乗せて接合しており、高さはなく飾り程度になっている。

４号住居跡（第29図）

Ｅ区は当期の住居跡床面が形成されるⅡ層まで削平されているため、床硬化面の確認はむずかしい。ただ、炉跡は辛うじて残されているため、住居跡であろうという推測が可能である。４号住居跡も床硬化面は検出できなかったものの炉跡と若干の遺物が発見された。

炉跡はほぼ円形をしており、直径は90cmと大きい。焼土は固くしまっている。炉跡の回りに柱穴がかなりの数確認されたが、住居跡の柱穴がどれにあたるのかは断定できなかった。なお、炉跡は現状では地床炉のように見えるが、上部が既に破壊されているため、石囲い炉であった可能性も高いと言える。



第30図　縄文時代５号住居跡実測図

【遺物】（第31図）

当住居跡は側壁も床面も検出されていない。そのため住居跡に伴う遺物として蓋然性の高いものは掲載できなかった。ここに掲載した遺物は炉跡の近くや当住居跡の柱穴と思われる柱穴群の内側から出土した遺物を選んだ。

１は、褐石製の勾玉である。本来この住居に伴うものか判断に苦しむが、炉跡の近くであること、硬化面直下と予想されるレベルから出土していること、さらに、後期～晩期の包含層が上層にないことなどから、当住居の遺物とした。

２～４は深鉢口縁部破片である。波状の口縁になるものでいずれも口縁部は短く、内傾していない。３のみが無文で２、４は口縁部外面に２本の沈線を刻んでいる。

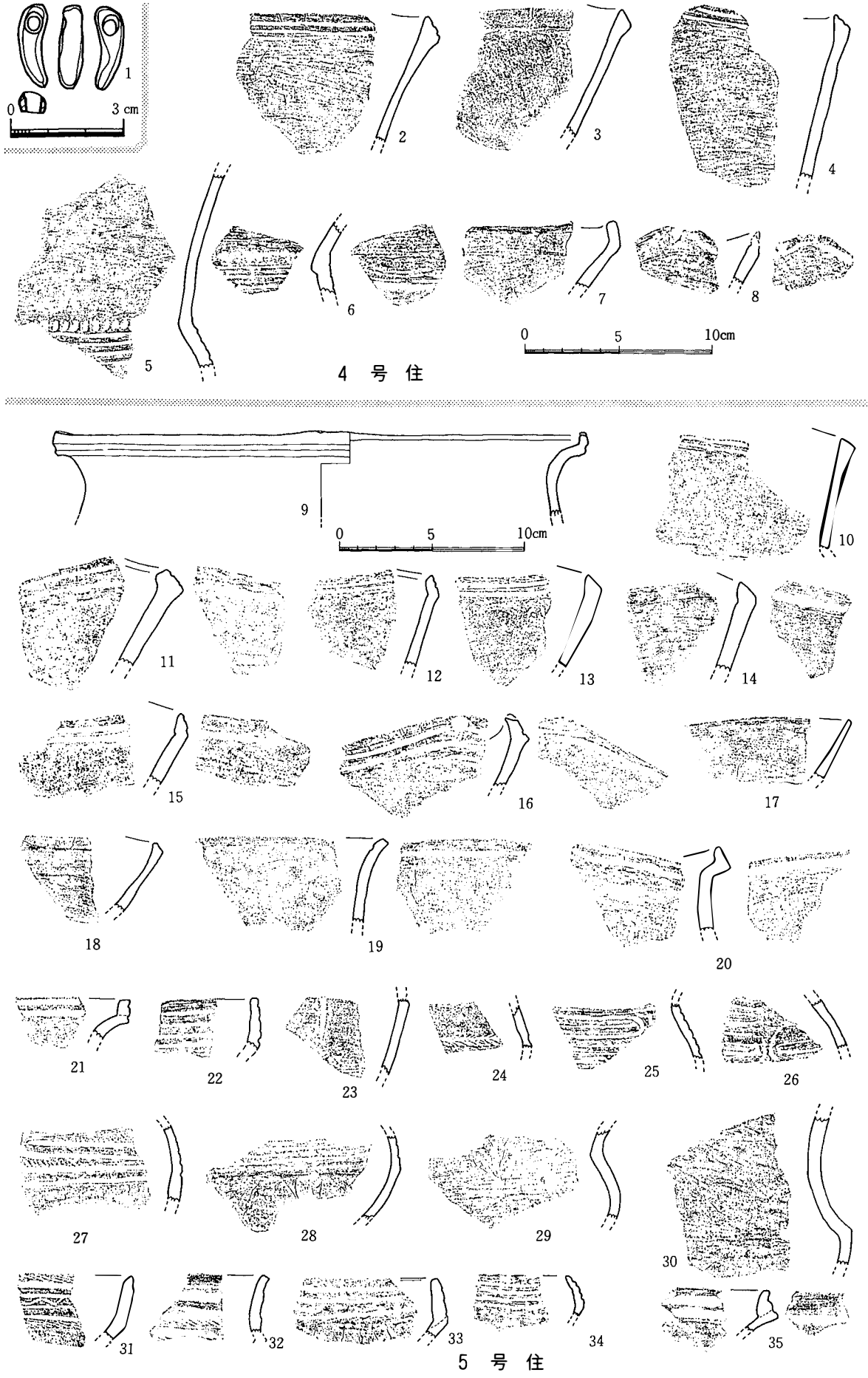
５、６は深鉢の頸部から胴部にかけての破片である。頸部と胴部の境には竹を縦に割ったような道具の小口を使って、粘土をかきとるような列点文様を施しており、胴部には平行な沈線を何本か引いている。頸部から胴部にかけての屈折は明瞭になっている。

７は山形の突起が口縁端部に見られる深鉢の破片である。口縁部外面には沈線はなく無文である。

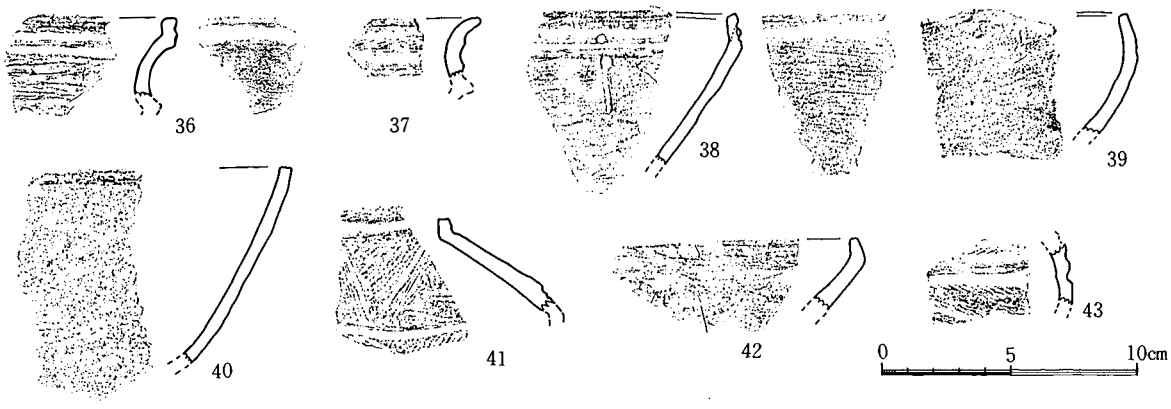
８は深い波状の口縁をした小型の深鉢の口縁部の破片である。口縁部外面には浅いが２本の沈線が引かれており、上の１本は波状口縁の最高部にある刻目につながっている。また、内面にも１本の沈線が口縁に平行して引かれている。

５号住居跡（第30図）

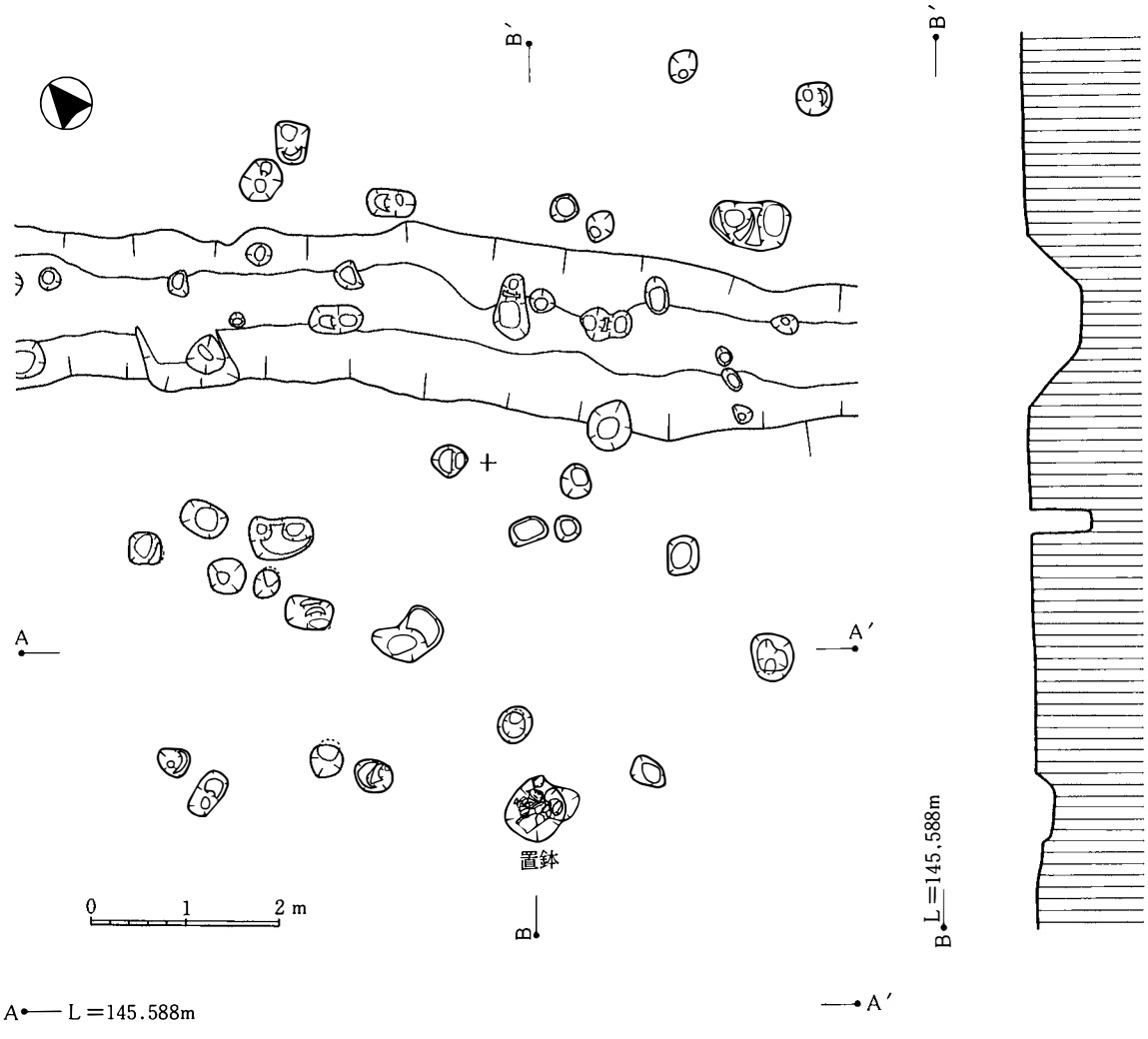
４号住居跡と近接して同じような検出状態であった。炉跡はほぼ円形をしており、直径１ｍと大きい。



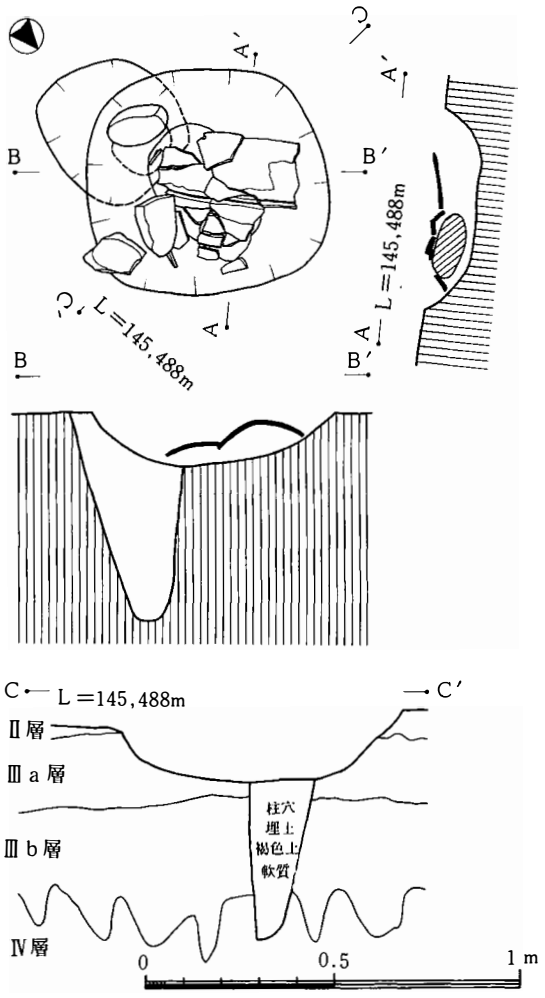
第31図　縄文時代４・５号住居跡出土遺物



第32図　縄文時代５号住居跡出土土器



第33図　縄文時代６号住居跡実測図



第34図　縄文時代６号住居跡内置鉢実測図

焼土は固くしまっている。柱穴は炉跡の周りに多数検出されたが住居跡に伴う柱穴の同定はできなかった。また、住居跡に伴う遺物は出土していない。

【遺物】（第31図，第32図）

住居跡に伴う遺物ではないが、住居跡に上に堆積している二次堆積土層の中に包含されていた土器を掲載した。その下位のものは住居跡に伴う可能性はあるが一括して取り上げているのではっきりしない。土器そのものにはここでは触れず、土器型式について若干触れる。総じて見ると、太郎迫式と見られる波状口縁の深鉢口縁部・胴部が多く、次に細線羽状文を多用する三万田式土器や鳥井原式土器、さらに文様がほとんどなくなる御領式土器が見られる。なお、41は短い頸部がそのまま口縁になった鉢で口縁端面に縄目文を付けている。全体はどうか不明であるが、胴部が屈折した上半部には地に縄文を付けている。また、屈折した胴部上半部を２本の横方向の沈線で区切り、沈線と沈線の間を三角形になるように、より小さな２本の沈線で区割りをしている。この型式は富田氏の提唱する辛川式に相当している。

６号住居跡（第33図）

硬化床面や炉跡は検出できなかったが、住居跡内に置かれたと考えられる鉢が出土したので、住居跡とした。鉢は浅い皿状の落ち込み内に押しつぶされた状態で検出され、同時に数個の河原石も発見された。この河原石は落ち込みの壁ぎわに置かれていたことから鉢を支えるためのものと思われる。鉢をすえたと考えられる落ち込みはⅢ層上部でとどまっている。１号住居跡でも述べたように縄文時代の住居跡の床面はⅡ層上面にあると考えられることから、この落ち込みは鉢を埋めてしまうには浅すぎ、３号住居跡例と同様に住居内に置かれていたものと考えられる。なお、この住居跡の中にあったと思われる遺物の確認はできなかった。

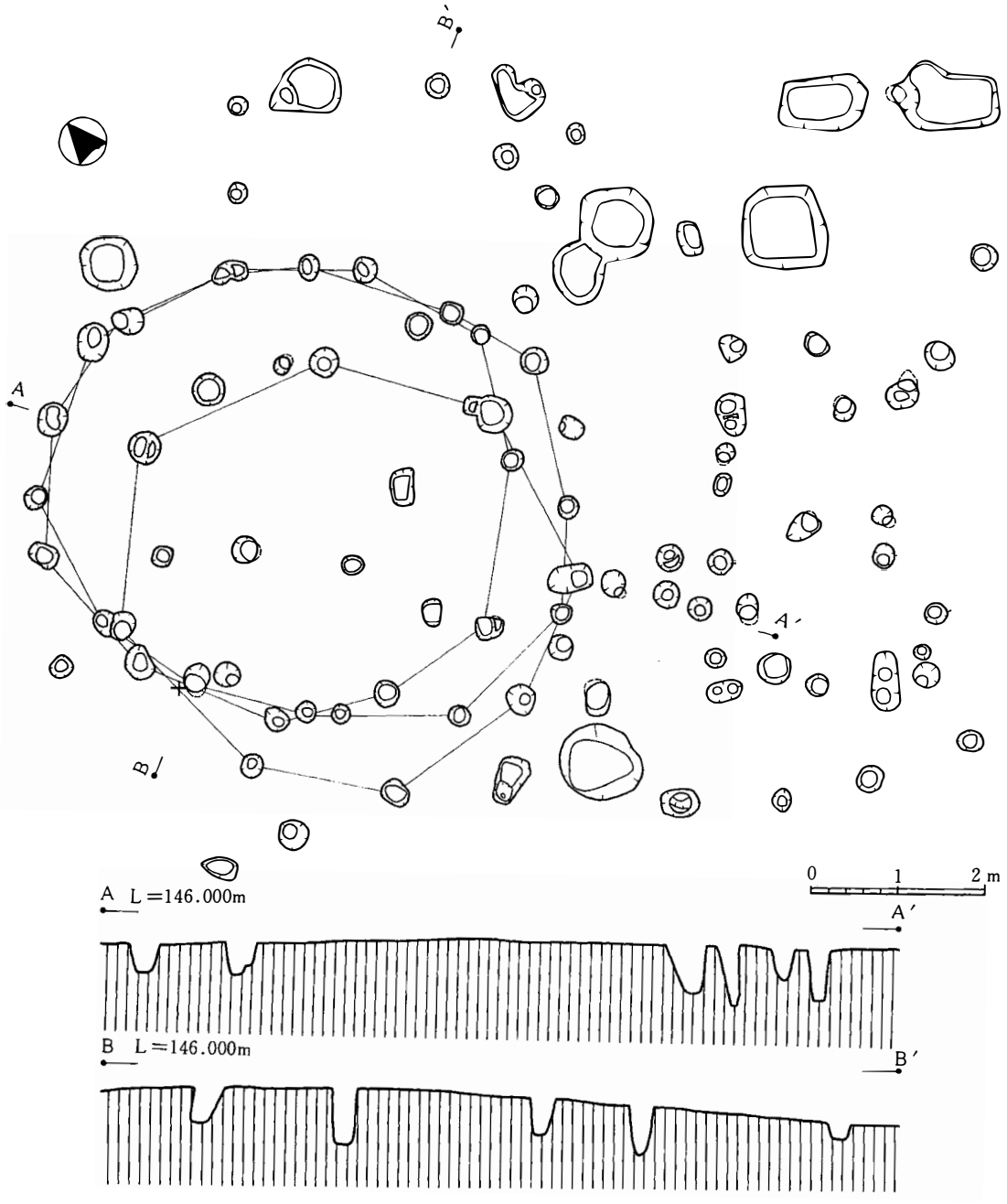
【遺物】（第37図１）

ここでは住居内に置かれていたと考えられる深鉢について記述する。口縁部を持たず、頸部端部を口縁部とする深鉢で口径は最大胴部より小さくなっている。頸部は胴部との境で急にすぼまりほぼ直立して口縁に至っている。胴部はやや丸みを持ちながら底部に至るようだ。胴部と頸部の境には１条の沈線を巡らしている。口縁端部は平坦に仕上げている。表面の調整は丁寧なものではなく、部分的に磨きが見られる程度である。

７・８・９号住居跡（第35図）

６号住居跡までのように住居跡として蓋然性のある根拠は少なく、柱穴の整然とした配列から住居跡として認定した。表土を剝ぐとすでにⅢ層中部が現れる状態であることから、床硬化面だけでなく炉跡まで削平されていることがわかる。

柱穴は直径25～40cmといままでの柱穴と比べて小さく、深さは現状で40～70cmある。Ⅱ層上面に縄文時代の住居跡の床面が作られていることから、約30cmほど削平されていると考えられる。このことから、当時の柱穴の深さは70～100cmとなり、かなりの深



第35図　縄文時代７・８・９号住居跡実測図

さになる。

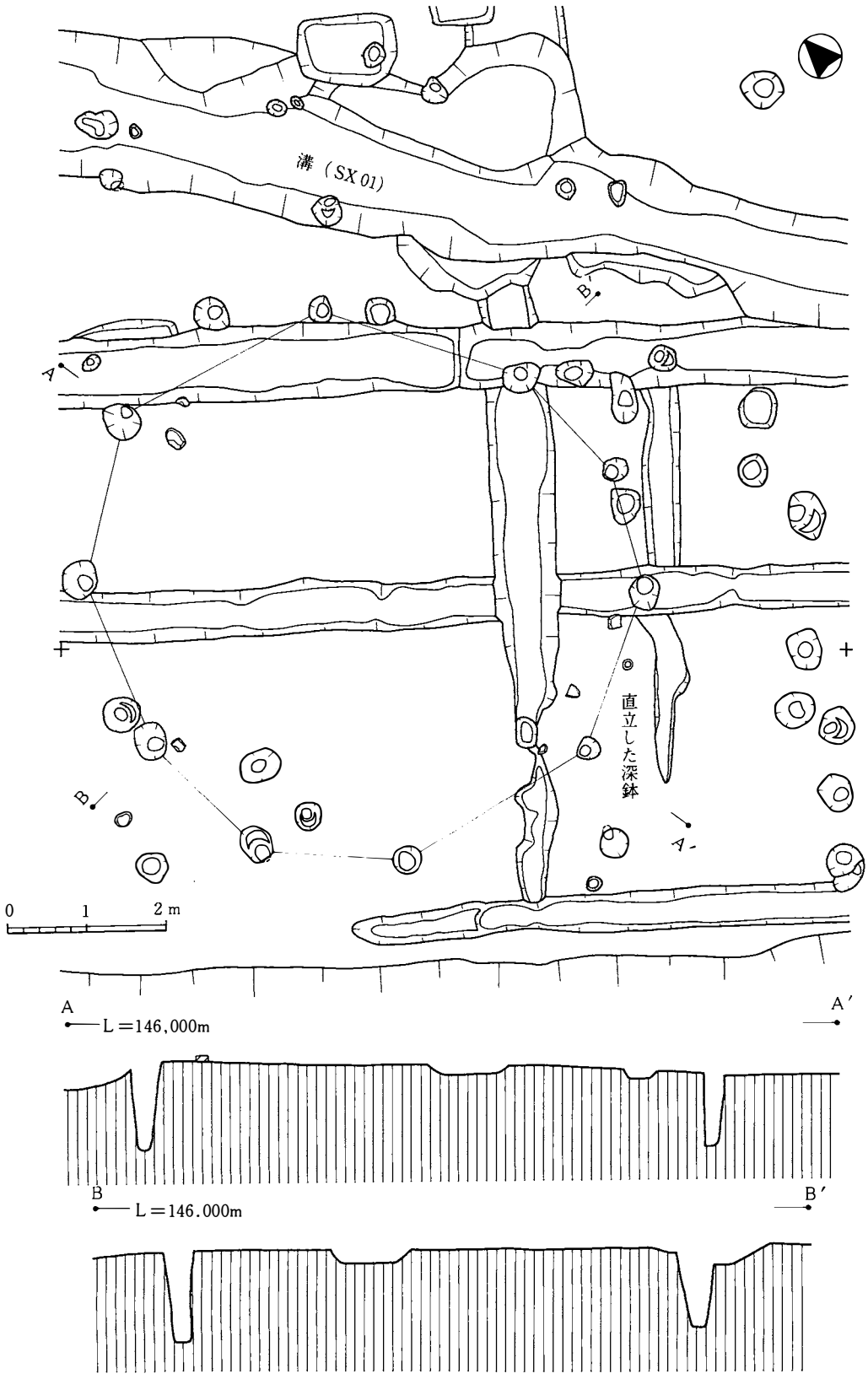
また、柱穴の配列は、いままでの住居跡のそれとことなり、いずれも直径５～６ｍほどの円形や楕円形に沿うように並んでいる。７号住居跡では11個で円形に、８号住居跡では12個で楕円形に、９号住居跡では８個で円形に柱穴が並んでいる。その間隔は７・９号住居跡がほぼ等間隔に並んでおり、それぞれ１ｍ50cm、２ｍ前後を測る。８号住居跡はやや不規則ではあるが楕円形の線上にのっている。柱間隔は１ｍから１ｍ80cmの間にある。

なお、７・８・９号の新旧関係は平面での切り合い観察ができないので不明であるが、７・８号はほぼ重なっており、９号はやや南側にずれているだけであり、それほどの時期差を置かずに建て替えられたものと考えられる。

遺物はすでにⅢ層中まで削平されていたこともあって、この住居跡に伴うと思われるものは発見できなかった。

10号住居跡（第36図）

７・８・９号住居跡と同様に柱穴の配列から住居跡と認定した。ただ、７・８・９号住居跡のように



第36図　縄文時代10号住居跡実測図

Ⅲ層中部まで削平された状態ではなくⅡ層が残っている状態であった。このⅡ層は純粋のそれではなく、やや黒みを帯びており、しかも、周辺より硬化していた。これはおそらく床硬化面の下部にあたるものと考えられ、直上に床面が存在したようだ。これを裏付けるように住居跡南側に頸部から口縁部を欠いた深鉢が直立した状態で出土した。これは床面からそう深くない皿状のくぼみに置かれた深鉢が削平に

よって口縁部と頸部が失われたものと考えられ、床面が近かったことがわかる。また、台石と考えられる自然石が柱穴列の内側にまとまって現位置を保って発見されていることからも床面の直下であることを裏付けている。

柱穴は直径が40～60cmの大きさであり、深さは現状で50～100cmある。直径７ｍほどの円形に配列されている。柱穴の数は円形の線上に14本が確認されるが、その間隔から考えて11本が基本であろう。柱穴の間隔は２～2.5m ある。柱穴の大きさ及び円形配列の規模などから、かなり大きな住居跡を想像することができそうである。

【遺物】（第37図２～９）

ここでは９点の土器を掲載した。ただ、これらの土器は10号住居跡において床面直下と考えられる硬化した面を検出した際に残した土器であり、その上位に堆積していたいわゆる包含層中の遺物の中に当住居跡に伴うと考えられる遺物が含まれている可能性がある。そのため、Ａ調査区出土の遺物でＣ・Ｄ-４・５区から出土している土器は当住居跡に伴う可能性がある。

２は頸部から口縁部にかけて欠けている深鉢である。住居跡内に直立して発見された。おそらく浅い皿上の小穴に置かれていたものと考えられる。胴部以下は完全に残っていたため、胴部上半に残された文様帯が明確に観察できる。文様帯は大きな「Ｘ」状の沈線文（以下「Ｘ」文という）によって大きく４分割されており、この「Ｘ」文と「Ｘ」文の中間に小さな「Ｘ」文を配している。

この文様の描き方を憶測も交えて復原してみる。まず、胴部上半の文様帯部分に縄文を施す。次に文様帯を４分割する場所に印をつける。なお、この印は今のところ見つけられない。次に文様帯を巡らす６本の沈線をほぼ等間隔に引く。この際、上から４本目の沈線は４分割する場所で山形に盛り上げるように引いている。この盛り上がったところを目安に大きな「Ｘ」文を上から２本目と４本目の沈線を結ぶように引く。そのあと、この大きな「Ｘ」文と「Ｘ」文との中間に、上から３本目と４本目の沈線を結ぶように小さな「Ｘ」文を引く。そして、最後に上から１本目と２本目の沈線の間と５本目と６本目の沈線の間の縄文を磨り消すことになる。したがって、この文様は１本の沈線がつながって引かれたものではなく、６本の平行沈線を基本として「Ｘ」文によって分割された文様と言える。なお、磨きはそれほど丁寧なものではない。

３は大きさのわりには器壁のうすい精緻なつくりの深鉢であり、口縁部と胴部上半部の２か所に文様帯がある。この土器の特徴は口縁部にある。通常は波状の口縁形をしているが、この土器は波状の高まり部分が方形の突起となっており、そこ以外は水平な口縁となっている。口縁部幅も他のものに比べてやや広く、口縁部に沿って平行な２本の沈線を引く。さらに突起部ではその上位にさらに２本の平行な沈線を引いており、突起部では４本の平行で等間隔の沈線が並ぶことになる。そして、突起部の中央で上から２本目と３本目の沈線を「Ｘ」文で結んでいり、２本目と３本目の沈線の間、及び４本目の沈線と口縁部下端の間に縄文を残している。なお、突起部の１本目と２本目の沈線は両端で結ばれているものと考えられる。

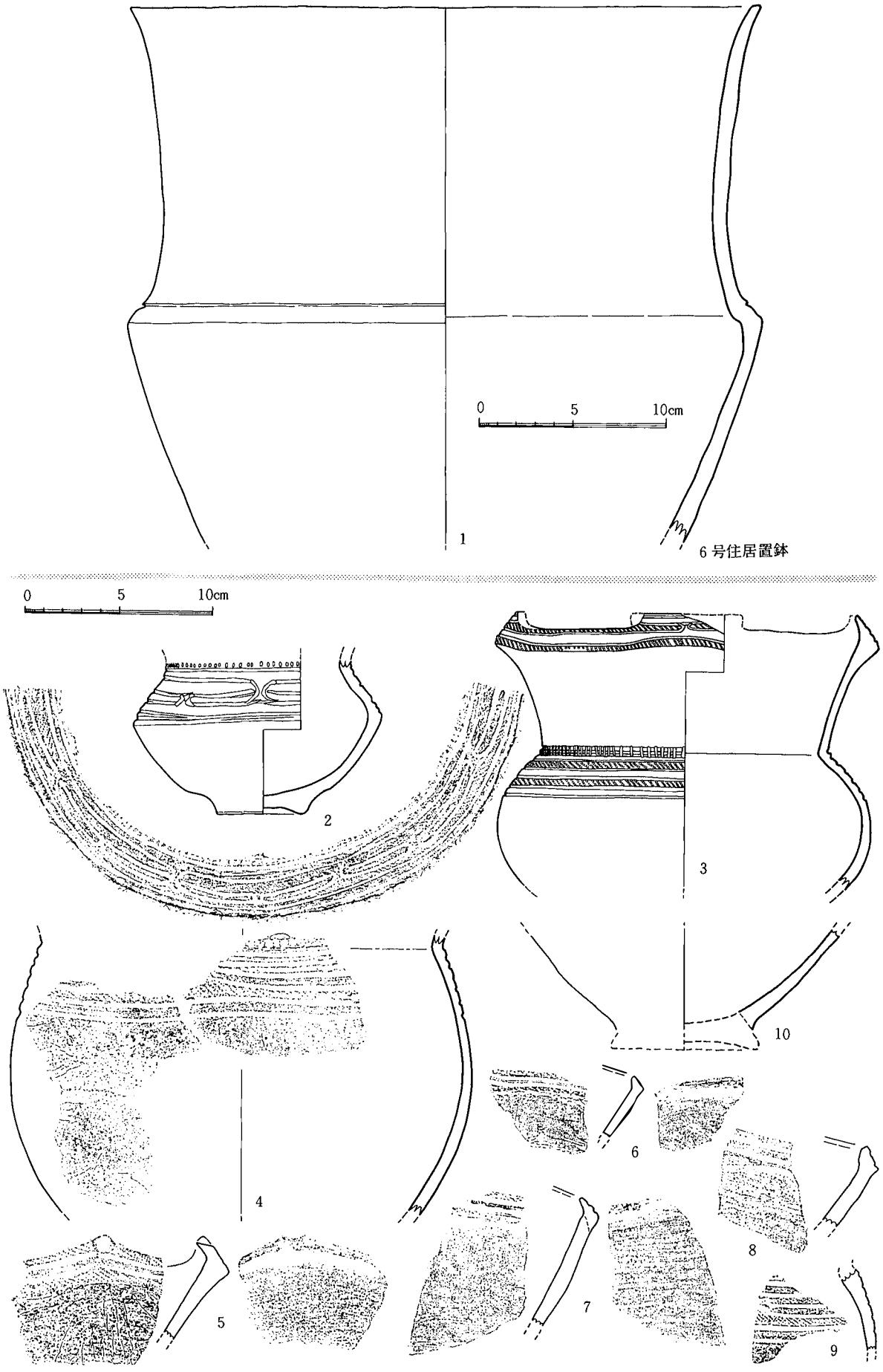
胴部上半部の文様帯は器形上の境はなく、６本の平行沈線とその間に残された縄文によって組み立てられている。この文様帯には「Ｘ」文が見られないのが特徴となっている。なお、縄文が残される部分は２本目と３本目の沈線の間と、４本目と５本目の沈線の間であり、２の土器と一致する。なお、縄文が施されたくぼみには赤色顔料が塗られているのが観察できる。

４はやや胴が長い深鉢である。文様帯と胴部の境に器形上の境はない。文様構成は２と同じと思われる。

５～９はいずれも深鉢の口縁部及び胴部の破片である。口縁部はいずれも波状口縁であり、縄文を残すものと消し去ってしまうものとがある。

(2) 埋　　鉢

ここでいう埋鉢とは蓋を含めた深鉢を地表または住居の床面より下に埋めるものである。したがって、埋める地点にはその埋鉢の高さと同じか、それより



第37図　縄文時代６・10号住居跡出土土器

深い穴を掘り埋鉢を据えることになる。今回の調査では３基が発見された。いずれもＤ・Ｅ区と調査範囲の西側に発見された。発見された地点は縄文時代の住居跡の床面がつくられる遺跡Ⅱ層よりはるかに深い遺跡Ⅳ層まで削平を受けていた。そのため埋められた場所が住居の中なのか、外なのかを明らかにすることはできなかった。ただ、発掘された状況から推定すると、埋鉢が集落の周辺に分布していると考えられるため、屋外に埋められた可能性が強いものと考えられる。

なお、縄文時代３号及び６号住居跡で発見された浅い掘り込みをもつ同様の深鉢は床面よりも上に姿を現しており、住居内に置かれた状態であったとすることができる。そのため、ここでは埋鉢とはしない。

１号埋鉢

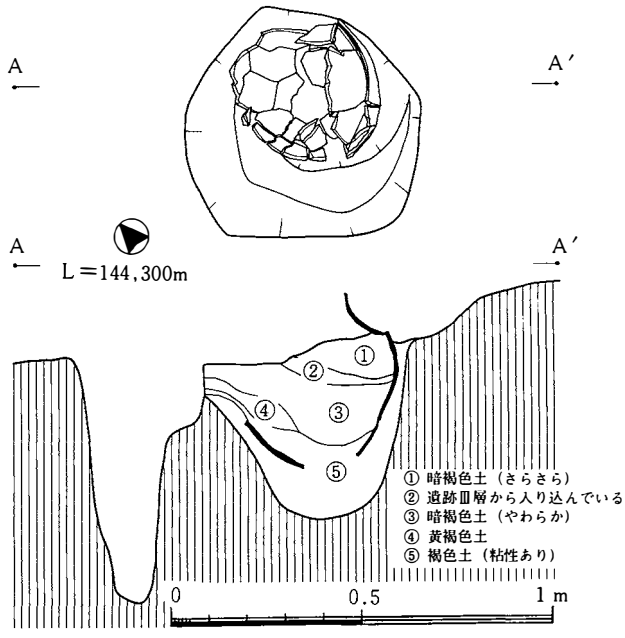
【出土状態】（第38図）

古墳時代の21号住居跡の南西隅で出土した。ちょうど21号住居跡の側壁の直下にあたり、南北方向に深鉢の北半分が21号住居跡を造る際に肩部まで破壊されていた。このため埋鉢に蓋が存在したのか、しなかったのか不明である。

さらにこの鉢は底部が検出されなかった。古墳時代以降にこの埋鉢の底部付近が攪乱された形跡はないことから本来底部を壊して設置された可能性が強い。

この地点は遺跡Ⅳ層上部まで削平されているため、鉢を据える母坑の形状の全体を復原することはむずかしい。残っている部分から推定すると底部から深鉢の肩部まではほぼ深鉢の胴部に合わせてすきまなく掘られているが肩部から上にかけてはかなり広めに掘られていたことがうかがえる。検出面で直径60cmの平面形である。

母坑の深さは底が遺跡Ⅴ層上部まで達していることから考えると当時の地表面から約80cm近く掘られていることになる。ただ埋鉢が住居の内にあった可能性も残されている。それは縄文時代３号住居跡の床面からでも約50cm近く掘られていることになり、十分鉢を埋めるだけの深さになるからである。



第38図　１号埋鉢出土状態図

【遺物】（第41図２）

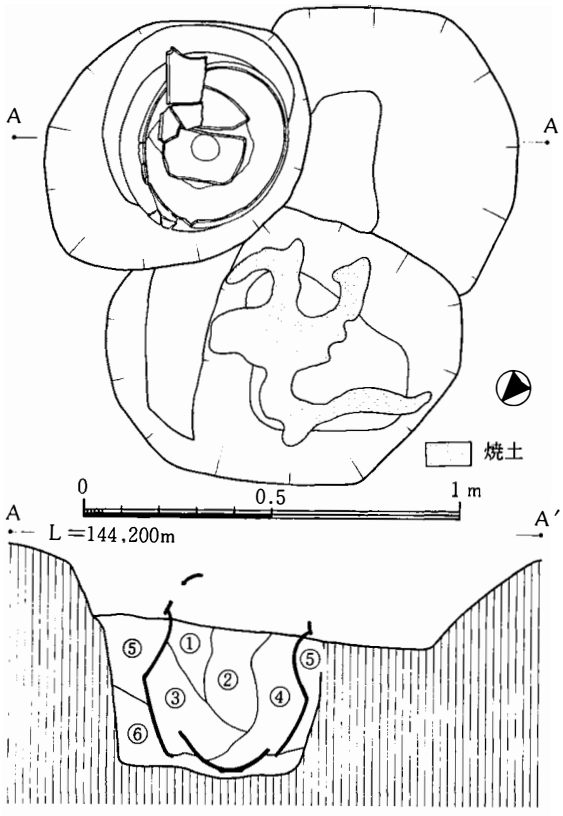
口縁部はないが、この深鉢の最大径は口縁部になるようで、胴の張りが少ない。また、全体に占める頸部の割合は小さく、重心は上位にある。頸部は口縁部からややきつく屈折し、ほぼ直立しながら胴部との境につながっている。胴部との境は明瞭な段や張り出しはなく、なめらかに胴部とつながる。その境には１条の幅広い凹線が外面にめぐっており、境を意識させているようだ。胴部から底部にかけてはややふくらんでいる。土器表面の調整は内外面とも、頸部は横方向の磨きであるのに対して、胴部は縦方向の磨きが多用されている。

２号埋鉢

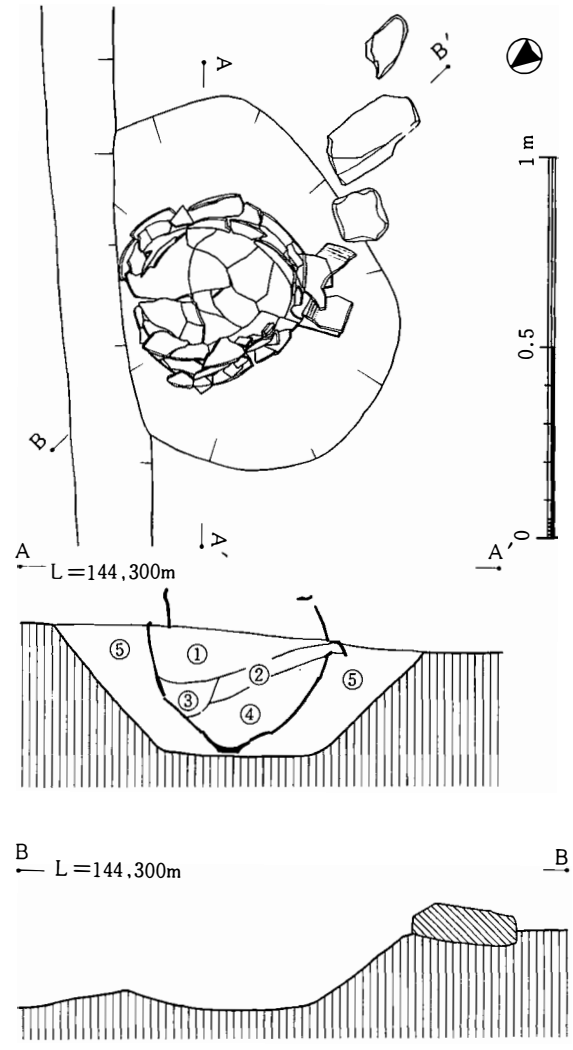
【出土状態】（第39図）

１号埋鉢の北７ｍの地点で発見された。埋鉢の残りはよく底部が粘土継ぎ目からはずれているのみであった。

埋鉢を納める母坑の大きさは検出面で長径80cm短径60cmの楕円形を示し、深さは検出面から60cmを測る。この地点も１号埋鉢と同じくⅣ層上部まで削平されており、母坑の全体の形状を知ることはむずかしい。残された部分から推定すると母坑底部から据えられた深鉢の口縁部下までは箱形にほられており、底部は平である。口縁部から上にかけてはやや広め



第39図　２号埋鉢出土状態図



第40図　３号埋鉢出土状態図

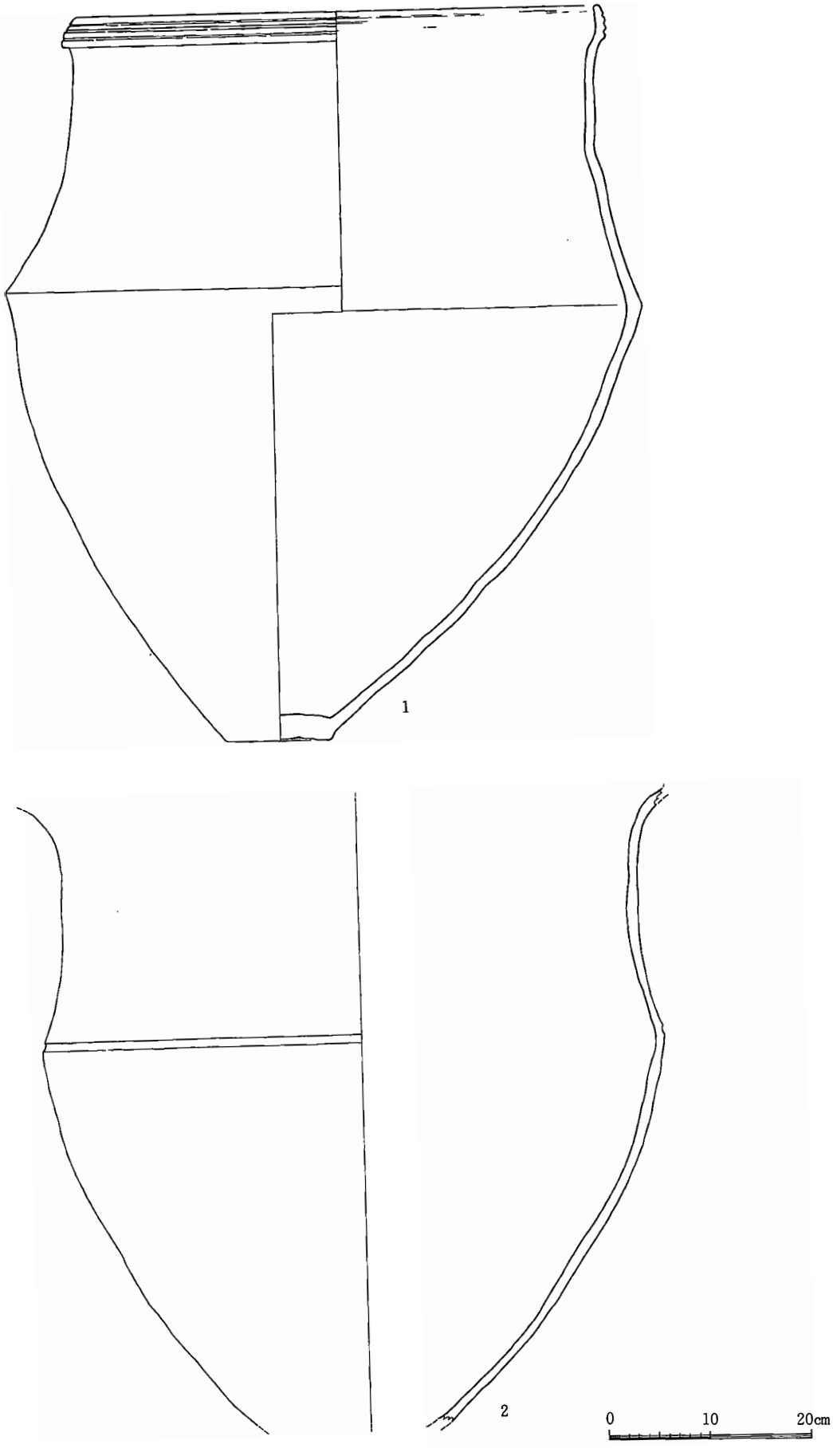
に掘られているようで１号埋鉢と同じような母坑の形状になるものと考えられる。

この鉢の胴部下部から底部にかけての部分は粘土の継ぎ目からはずれ、鉢の内側に入り込んでいた。鉢内への土砂の流入による圧力によりはずれたものかもしれない。なお、この埋鉢には蓋と思われる浅鉢の破片が深鉢の上に出土した。確実に伴うとは断定できないが可能性は高いものと考えられる。

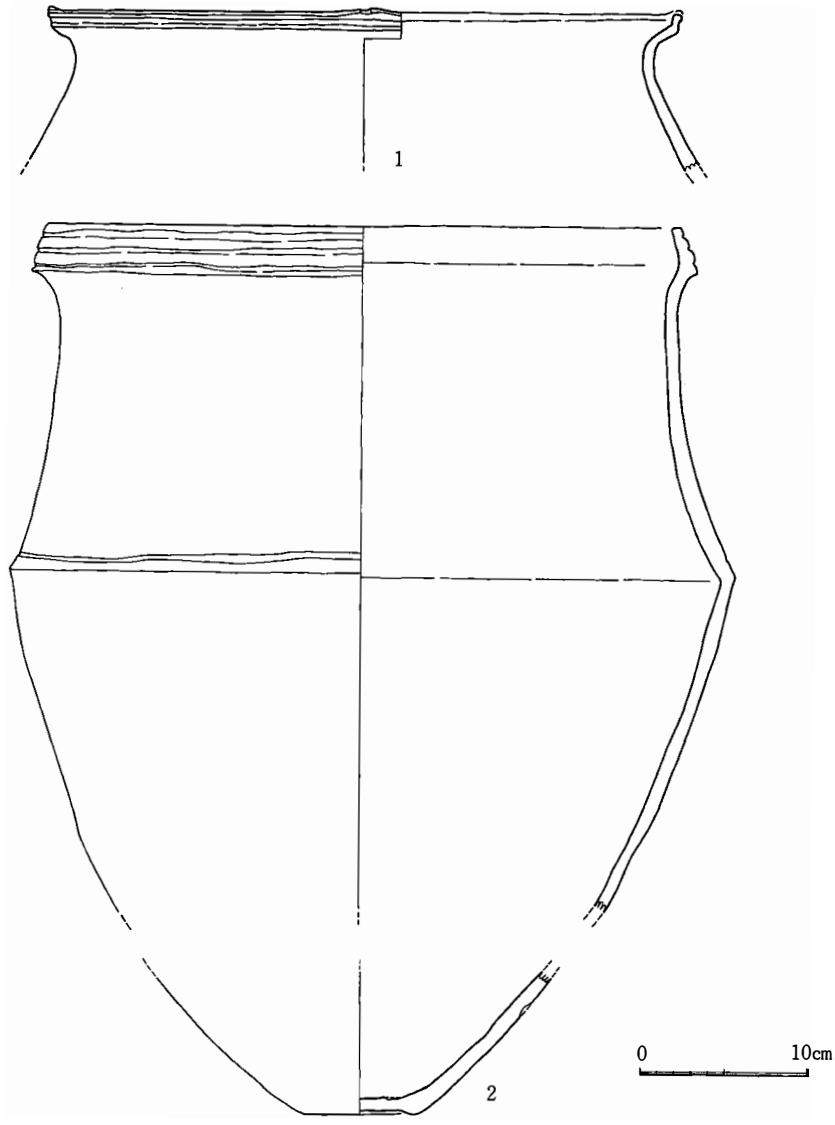
【遺物】（第42図１，２）

３が埋鉢の本体で、土器の最大径が頸部と胴部の境にある深鉢である。この深鉢も全体に占める頸部の割合は小さく重心は上位にある。底部は段がつかない上げ底になっている。胴部はややふくらみながら頸部につながっている。頸部との境には段や張り出しはなく、折れ曲がるのみである。その外面には１条の沈線を巡らしている。頸部はやや内傾しながら立ち上がり、わずかに外に屈折して口縁部につながっている。口縁部はやや内傾しており、端部は平坦に仕上げている。文様帯は口縁部に限られており、平行する沈線を３本引いている。この沈線は沈線を引く工具を土器の器面に対して垂直方向に当てるのではなく、下位から斜めに当てているため、沈線の上部が深くえぐりこんでいる。かなり特徴的である。器面の調整は内外面では違っている。外面は、頸部より上位が基本的になでの後横方向の磨きが施されるのに対して、胴部から底部にかけてはけずりの後縦方向の磨きを施している。内面は頸部より上位で横方向の磨き、胴部から底部にかけてなでが施されている。なお、磨きは粗く、部分的である。

２は蓋と考えられる浅鉢である。浅鉢にしては器高が高いが、器面の調整は浅鉢と共通し、内外面とも丁寧な横方向の磨きになっている。口縁には４か所に山形の突起があり、頂部に刻みを入れている。



第41図　埋鉢実測図（3・1号）



第42図　埋鉢実測図（２号）

３号埋鉢

【出土状態】（第40図）

Ｅ区Ｖ-20グリッド北西隅から発見された。Ｅ区は第Ⅳ章でも述べたように古墳時代の整地によって縄文時代の遺構が破壊されている。ただ、この３号埋鉢が発見された地点は斜面部にあたっており、大幅な破壊からまぬがれている。そのためか埋められた深鉢は口縁部まで完全に残っていた。

検出面は遺跡Ⅱ層下部にあたる。その上層は縄文時代の土器や石器を多量に含んだ灰黄褐色整地土層になっている。検出面での埋鉢の母坑の大きさは長径１ｍ短径85cmの楕円形をしており、検出面からの深さはほぼ45cmである。母坑の形状は平たい底部からそのまま直線的に開く形になっており、１・２号とは形状が異なっている。

３号埋鉢の母坑の本来の深さを推定すると、Ⅱ層上部からみると65cm程になる。もし深鉢のみの埋鉢であれば、この深さはⅡ層上部からの掘り込みとして妥当なものと考えられる。ただ、周辺の発掘状況からすると住居跡の存在は想定できないようだ。

【遺物】（第41図１）

器形、文様は１、２号埋鉢とほぼ同様である。ただ、底部はやや段がつき、若干上げ底になっている。また、器面の調整は内面の胴部以下に貝殻条痕調整が見られる。

(3) 十字形石製品出土のピット（第43図）

Ａ調査区Ａ－５区内で検出されたピットを発掘中、十字形石製品がほぼ水平に置かれたような状態で出土した。出土したピットは２つのピットが切りあった状態で存在し、その切られたほうのピットからの出土である。

十字形石製品が発見された場所はちょうど層と層の境に当たり、それ以下の層は２層に分かれており、いずれも黒褐色をしており、やわらかいのが特徴である。それ以上の層はやはり２層の分かれており、いずれも黒褐色をしており、しまっていることが特徴である。

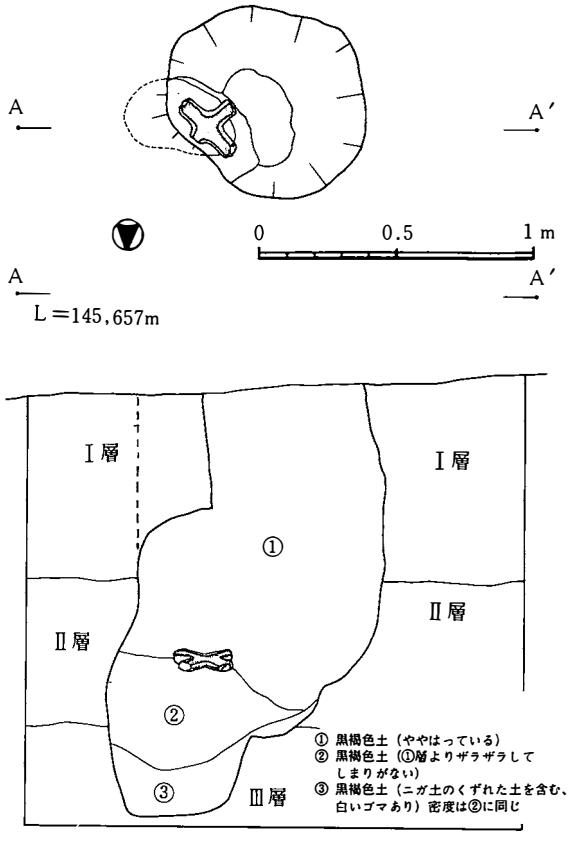
この十字形石製品のあるピットをきってやや浅いピットが西側に掘られている。このピットの埋土は３層に分かれており、いずれも十字形石製品を出土したピットの埋土と類似している。

このことは両者のピットは時間的に隔たった時期のものではなく、近接した時期、あるいはほぼ同時に掘られた可能性が強い。すなわち想像をたくましくすれば、ピットを掘り、十字形石製品を納め、そのすぐ横に新たなピットを掘ったように思える。この新たなピットが柱穴とすれば、その祭祀とも考えられる。なお、このグリッドの遺構検出面は遺跡第Ⅳ層上面まで達する部分がある。その検出面から約70cmの深さであるから、当時の地表面からの深さを想定すれば1.5m ほどになる。かなり深い柱穴と思われる。

【遺物】（第141図１）

阿蘇溶凝灰岩を使用した十字形の石製品である。形状は十字形石斧に類似するが、石斧のように刃部を作り出すような加工ではなく、しかも石材が通常では用いられない凝灰岩を使っていることから十字形石製品とした。

両面中央に粗加工の際の削り痕跡が残されている。特に図右面には鋭い工具で連続して削り、形を整えた痕跡が明瞭に観察できる。おそらくこの工具には小型の磨製石斧が使用され、おおまかな十字形の形を作り上げたのであろう。その後、４つの突起部を中心に磨き上げられている。突起部は先端に行くほど断面が正方形に仕上げられている。突起部と突起部の間はなめらかに湾曲するように磨かれている。ただ、先述したように両面の中央部は粗加工の跡が残されていることが不可解であり、面的に磨き上げることよりも、形を整えること、とくに突起部を整えることに主眼が置かれた結果かと思われる。



第43図　十字形石製品出土状況図

(4) 柱 穴 群

【Ａ調査区】（付図１）

先述したようにＡ調査区では縄文時代の住居跡として、７・８・９号住及び10号住が確認されている。そして、確認の根拠としては柱穴の配列および遺物の出土状況、それに床面の状況であった。

しかし、付図１をよく見るとわかるように、柱穴は数カ所にまとまって存在していることがわかる。Ａ－２区に一群。Ａ－４区に一群。Ｃ－２区に一群。Ｃ－３区に一群。Ｄ－２区とＤ－３区にまたがった一群。Ｄ－４区に一群。これらの柱穴のまとまりは住居跡である蓋然性が強い。それは７～10号住での説明でも触れたが、後世の攪乱が炉跡までも削平してしまっているため、床面の検出が困難であった。そのため、住居跡の確認には柱の配列が最大の根拠になっ

た。７～10号住のように柱が多数で円形に配列する住居跡であれば確認しやすい。ところが、柱が少ない住居跡になると確定に慎重にならざるをえない。ただ、柱穴そのものは、確定した住居跡のものと何ら変わるところがない。ここでは柱穴のまとまりを積極的に評価して、住居跡の可能性が強いものと考えておきたい。

柱穴の大きさは南西に行くほど大きくなっている。それはＡ区南西部の削平の程度が一番浅く抑えられているためで、Ａ調査区北側はすでに遺跡第Ⅳ層上面まで削平されており、柱穴の大きさも小さく、深さも南側ほど深くなく30～60cm程である。

これに比べ、南側のそれは平面形が直径40～60cm、深さ１ｍ前後になる。

先の柱穴のまとまりを住居跡として想定し、確認された住居跡を含めて、その配置を復原すると、東西に碁盤の目にように規則正しく並ぶようだ。

なお、十字形石製品を出土した柱穴はＡ－５区の７・８・９号住のすぐ東に位置しており、また柱の配列から見ると住居跡の柱穴と断定することはできない。

なお、Ｃ－４区中央部に柱穴が11個すき間なく寄り集まっている部分がある。当初たんなる柱穴の切り合ったものと考えていたが、その後、このような柱穴の集合する地点は発見されておらず、柱を一時期に集合させた遺構と考えたほうが良さそうである。柱穴そのものは、非常に深く１ｍを越えている。また、柱の穴の底も検出面から垂直に位置している。今後、このような遺構の類例の増加を待ちたい。

【Ｂ調査区】（付図２）

当調査区でも柱穴が多数検出された。ここでも柱穴がまとまっている地点が見られるようだ。ただ、Ａ調査区ほどのまとまりではない。

当調査区では縄文住居跡の６号住がＢ・Ｃ－８・９区の境で確認されている。認定の根拠は住居に置かれたと考えられる鉢が浅い窪みに据えつけられる状態で検出されたことからである。認定の根拠としてはやや心もとないが、この鉢の北側において柱穴が円形に並んでいる様子がうかがわれることも根拠を補強している。

ここでも住居跡として想定できる柱穴群の地点をあげておく。Ａ－７区とＢ－７区にまたがって見られる一群。Ａ－８区とＢ－８区にまたがって見られる一群。Ａ－９区中央に見られる一群。Ａ-10区東側と西側に見られる二群。Ｂ－７区中央に見られる一群。Ｂ-10区南東に見られる一群。Ｃ－６区南東に見られる一群。Ｃ－９区南西かＣ-10区南東にかけて見られる一群。Ｄ-10区中央に見られる一群の10群である。

Ｂ調査区ではＣ・Ｄ－７・８・９区には柱穴が少なく、その周りを取り囲むように柱穴が広がっているようで住居跡が想定される柱穴群もそれに沿っているようだ。

柱穴そのものの状態はＡ調査区と同様に北側に行くほど大きさは小さくなり、南側ほど大きくなっている。

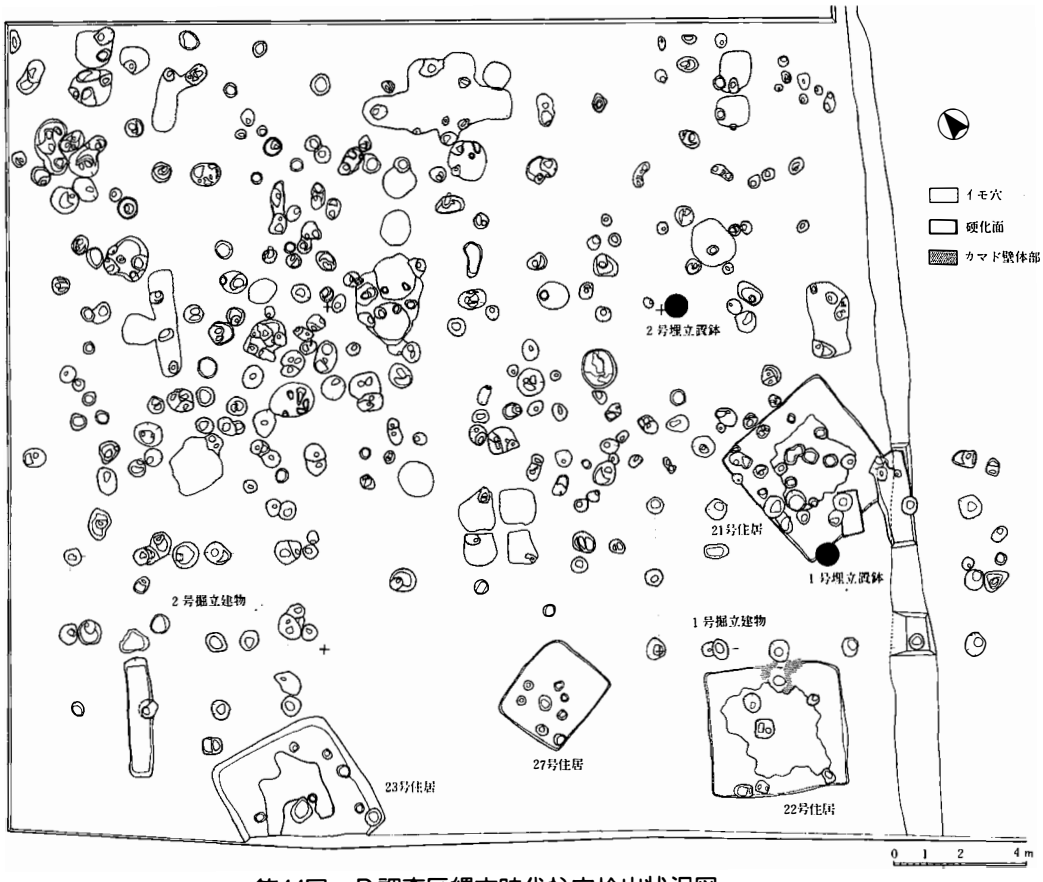
【Ｃ調査区】（付図３・４）

当調査区においてもかなりの柱穴が発見された。特にＣ・Ｄ-15・16区では足の踏み場もない状況であった。しかも、この地域は柱穴が他の地域に比べて大きい。現在のところ住居跡は縄文時代３号住が確認されているが、当然のことながらかなりの数の住居があったと考えられる。

このＣ・Ｄ-15・16区を中心とした地域以外の柱穴の分布はあまり密ではない。特にＢ・Ｃ・Ｄ-11・12・13区はその傾向が強い。

Ｃ調査区には縄文時代１・２・３号住が確認された。いずれも床面を確認しており、また、１・３号においては石囲いの炉を検出している。そして、柱穴の数は５本、６本、８本と数はまちまちであり、しかも柱の配置もそれほど定型的なものではない。すなわち、確認された住居跡の柱穴の配列をもとにして床面や炉跡を削平された住居跡を想定しようとしても困難であることがわかる。

このため、やはり柱穴の集合をもって住居跡の想定をするしかないようだ。Ａ-11区南に広がる一群。Ａ-14区からＵ-14区にかけての一群。それにＣ・Ｄ-15・16区を中心とした柱穴の密集する地帯に住居跡を想定することができそうだ。



第44図　Ｄ調査区縄文時代柱穴検出状況図

柱穴そのものの大きさは当調査区においては北側においても南側においても変わりはない。それはＣ区がＡおよびＢ調査区に比べ傾斜が小さいためだと考えられる。

なお、Ｃ調査区においては柱穴およびいも穴それに溝遺構（ＳＸ01）の中から土偶を出土しているものが多い。

【Ｄ調査区】（第44図）

当調査区の面積は小さいが柱穴はＣ・Ｄ-15・16区にみられるようにかなり密集している。そして、南側にはほとんど柱穴が存在しないことがわかる。

当調査区は先述したようにすでに遺跡第Ⅲ層まで削平されていることがわかっている。すなわち、遺構検出面は他の調査区に比べ低くなっている。それにしては検出面における柱穴の大きさが大きいものが多く、当初はかなり大きな柱穴であったことが予想される。

柱穴の集中はＤ-18区東寄りの一群。Ｄ-19区北東の一群などがある。ただ、当調査区は柱穴が密集することからより多くの住居跡が存在するものと考えられる。

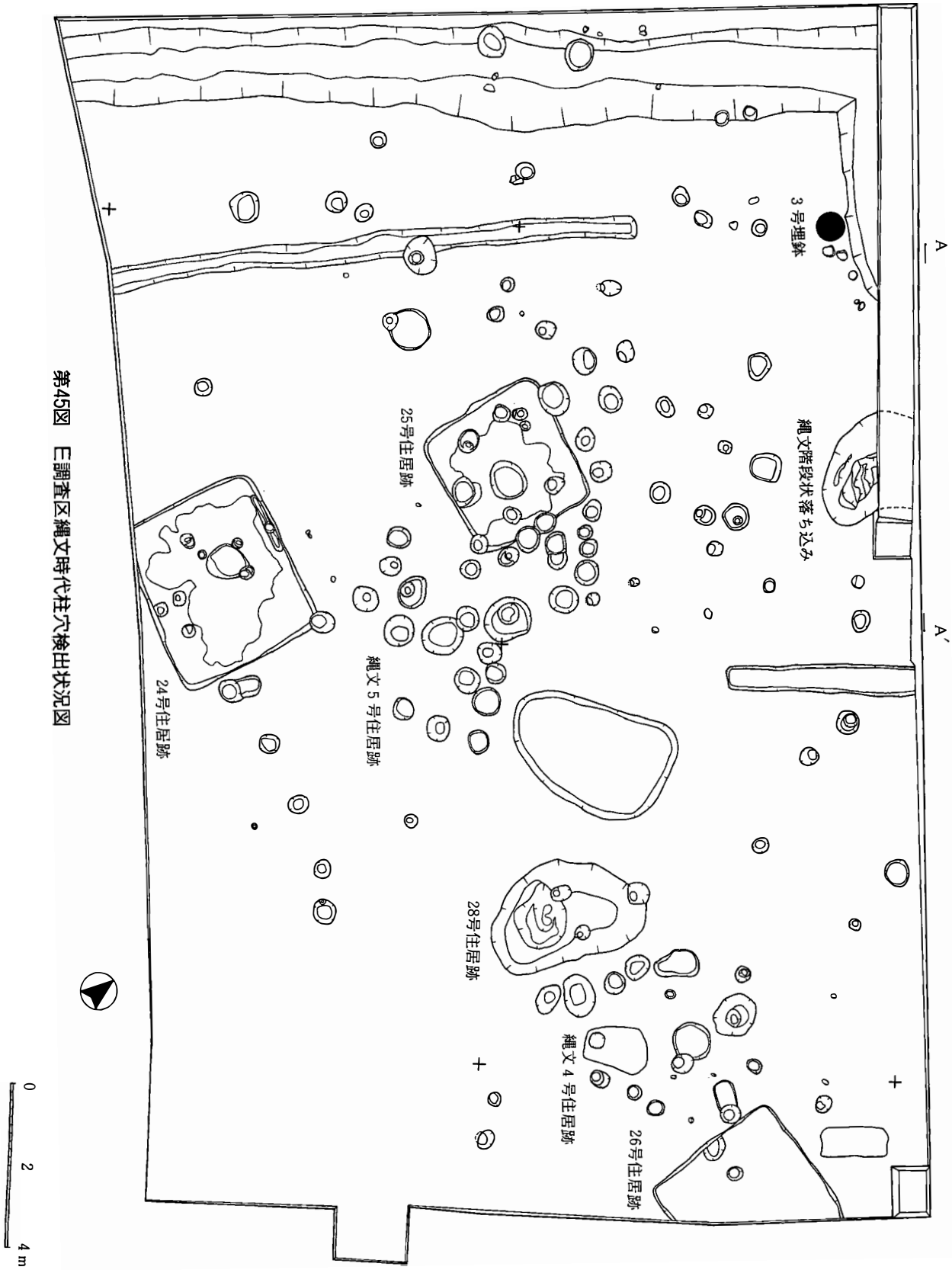
【Ｅ調査区】（第45図）

当調査区は柱穴の数は少ない。縄文時代後期、晩期の遺物量の多さに比べると対照的である。この調査区では４号、５号の縄文住居跡が確認されている。いずれも炉跡が検出され、周りに柱穴が集中していたためであり、柱の配置に一定の定型を見いだしたからではない。したがって柱の本数がいくつになるかは明らかではない。

そのようにみると、Ｅ調査区には２つの住居跡の他にＶ-19南側に集中する柱穴群をもう一つの住居跡と想定することもできる。

(5)　縄文階段状落ち込み

土層断面作成のためのトレンチ掘削の際に発見されたもので、第45図および第11図に平面及び断面を



第45図　E調査区縄文時代柱穴検出状況図

示した。この遺構はＥ調査区北西の壁際にあり、北側に向けて階段状に落ち込んでいる。北側は台地と谷部を分ける崖が至近距離にある。この遺構の機能として台地上の集落と谷部をつなぐ道の可能性が指摘できる。

また、この遺構が造営された時期は明確ではない。ただ遺構を覆うように縄文土器を多量に含んだ整地層が堆積していることから、少なくとも古墳時代以前に造られているものと考えられる。なお、遺構内からは、縄文時代後期～晩期の土器片が出土している。

⑹　縄文時代後期後半から晩期の土器

a　土器の分類

ワクド石遺跡出土の土器はそのほとんどが包含層出土のものである。そのため、土器片の大きさはちいさく、全体の器形を判断できるものは少ない。また、文様も限られた部分しか見ることができず、その特徴を十分に明らかにすることはできない状況にある。

このため、土器を記述するに当たっては従来からの土器形式に見られる器形や文様に当てはめて記述する。なお、器形については現在まで報告されている器形を第46図および第47図のように分類し、記述する。なお、器形は深鉢形、浅鉢形、椀形、高坏形、注口形の４つに大別した。

①深鉢形土器

【Ａ類】

土器が基本的に口縁部、頸部、胴部、底部の４つの部分からなっている。

Ａ－１類は口縁部断面が逆「く」の字状に折れ曲がり、口縁端部が波状をしているものである。この波の高まりは基本的に４ヵ所でみられる。また、後述するが、この波状の部分が方形の高まりになり、その他の口縁部は水平なままのものもあるようだ。

Ａ－２類は口縁端部が波状をしているが、口縁部というより頸部の先端を口縁部にしている。ただ、先端の断面は三角形になっており、外に対して１条の帯となるような面をつくっており、そこを口縁部及び口縁部文様帯として利用しているものもある。

Ａ－３類はＡ－２類の口縁端部が水平になったものである。

Ａ－４類は口縁端部が水平になり、口縁部幅も広くなるものである。頸部と口縁部との屈折の仕方で二つに細分することができる。頸部上端が外反し、口縁部が内傾または直立するものと、頸部から単に折れ曲がるだけで、口縁部も真っ直ぐ外傾しているものがある。Ａ－４－ａ、Ａ－４－ｂ類とする。

Ａ－５類はＡ－４類の口縁端部の４ヵ所に山形の小さな突起が付けられたもので基本的に水平な口縁となっている。

【Ｂ類】

土器が基本的に頸部、胴部、底部の３つの部分からなっているもので、頸端部がそのまま口縁端部として機能しているものである。なお、記述の都合上、頸部上端を口縁部として記述する。

Ｂ－１類は水平な口縁端部のもの。

Ｂ－２類は口縁端部が波状になったもの。

【Ｃ類】

土器が基本的に胴部と底部の２つからなっているもので、胴端部がそのまま口縁端部として機能しているものである。なお、記述の都合上、胴部上端を口縁部として記述する。

Ｃ－１類は土器の最大径が口縁端部になるものである。

Ｃ－２類は口縁端部近くが外湾し、口縁端部が土器の内側に倒れている。

【Ｄ類】

土器が基本的に口縁部、胴部、底部の３つの部分からなっているもので、口縁部の形状か３つに分けられる。

Ｄ－１類は胴部が口縁部近くで強く外反したもので、いわゆる甕形といえる。

Ｄ－２類は口縁端部外面に粘土紐を張りつけたもので、口縁部というのは飛躍かもしれないが分類上ここに入れた。いわゆる突帯文土器である。

②浅鉢形土器

【Ａ類】

土器が基本的に胴部と底部からなっているもので、胴端部がそのまま口縁端部として機能しているものである。なお、記述の都合上、胴部上端を口縁部として記述する。

Ａ－１類は深鉢Ｂ－２類を浅鉢にしたものと考えてよい。

Ａ－２類は椀形と考えても差し支えないが、土器の最大径と器高の割合から見ると浅鉢になろう。

【Ｂ類】

土器が基本的に口縁部、胴部、底部の３つ部分からなるもので、口縁部の形状で２つに分けられる。

Ｂ－１類は口縁部が外湾ぎみに直立するか内側に傾いている。

Ｂ－２類は口縁部が内湾して直立するか外反している。

【Ｃ類】

土器が基本的に頸部、胴部、底部の３つの部分からなっている。この類の頸部は口縁部と見ることも可能であるが、もし口縁部とすれば、口縁部幅の器高に対する割合がほぼ半分以上になるようで頸部と呼んだほうが妥当と思われる。また、この類の底部はいわゆる丸底で底部と胴部の境が明瞭でない。

【Ｄ類】

土器が基本的に口縁部、頸部、胴部、底部の４つの部分からなっている。Ｂ－２類の胴部をさらに頸部と胴部に分けたような器形になっており、内湾しながら外反する頸部と口縁部が連続する特徴的な形をしている。

【Ｅ類】

基本的には口縁部、頸部、胴部、底部の４つの部分からなることはＤ類と変わりはないが、底部と胴部の境は明瞭ではなく、いわゆる丸底の形状をしている。ただ、この類は器高に対する口径の割合の大小で２つに分けることができそうであるが、そのうち、口径の割合が小さいものの中には底部が明瞭なものが存在する。

Ｅ－１類は胴部から内湾しながら強く外反する頸部から口縁部が直立している。口縁部幅の器高に対する割合は小さい。水平な口縁端部である。この類は器高に対する口径の割合の大小で２つに分けることができる。Ｅ－１－ａ、Ｅ－１－ｂ類とする。

Ｅ－２類はＤ－２類の口縁端部に４つの小さな山形の突起を付けたものである。この類も器高に対する口径の割合の大小で２つに分けることができる。Ｅ－２－ａ、Ｅ－２－ｂ類とする。

Ｅ－３類は口縁部が形骸化しており、頸端部をわずかにつまみ上げたと思われるほどになっている。また、頸部の割合が相対的に大きくなり、頸部が長く伸びた形状になっている。そして、頸部の外反がそれほどでもなくなり、直線に近くなり、口縁部近くでは外湾ぎみになっている。

Ｅ－４類は口縁部、頸部が形骸化している。口縁部は段状になり、頸部は短く湾曲から折れるような外反になっている。この類も器高に対する口径の割合の大小で２つに分けることができる。Ｅ－４－ａ、Ｅ－４－ｂ類とする。

Ｅ－５類は口縁部と頸部が一体化し、もはや区別できなくなっている。さらに胴部上半と下半の境に明確な屈折が見られるようになっている。胴部上半が外湾しながら内側に傾いている。

【Ｆ類】

土器が口縁部、胴部、底部の３つの部分からなっている。口縁部は広く開いたもので最大径は口縁端部にある。ただ、底部はいわゆる丸底であり、胴部との境は明瞭ではない。

Ｆ－１類は水平な口縁端部になるもので、Ｆ－２類は波状の口縁端部になっている。

③椀形土器

基本的に胴部と底部からなっており、胴端部がそのまま口縁端部になっている。器高は低い。２つの器形に分けられる。Ａ類は底部と胴部の境が明瞭なものと明瞭でないものとがあるようで、前者は当然のことながら胴部が直立している。Ｂ類は楕円形の板状の粘土を底部としており、その内側から胴部が立ち上がっており、底部が胴部より外にはみ出す形をしている。

④高坏形土器

本来遺跡から出土する高坏形土器の数がすくないため、分類は困難であるが傾向はつかめる。

【Ａ類】

脚部が細長く、しばしば脚部に文様を施している。底部が平底のものと上げ底のものがある。

【Ｂ類】

脚部が太く短くいもので、底部が平底のものと上げ底のものとがある。

⑤注口土器

数も少なく、しかも色々な器形があり、分類は難しい。ただ、共通していることは最大胴部がその土器の最大径になっており、その最大胴部径の部分に注口部が付けられていることである。そして、注口部は口縁端部近くまで達しており、口縁端部より高くなるものもある。すなわち、この土器は注口部と胴部が主体の土器で、頸部から口縁部は極力張り出

さないように短く、すぼまった形になっている。

b　土器型式について

遺跡や遺構の年代を知るための土器型式の研究は熊本県地方でも長年の積み重ねがある。

縄文時代後期以降の土器型式の変遷についても、多くの研究者の研究があり、乙益重隆氏、賀川光夫氏、島津義昭氏、坪井清足氏、富田紘一氏、前川威洋氏、水ノ江和同氏などの研究（文献一覧参照）の上に現在の型式変遷がある。ただ、当然のことながら全てに見解の一致を見るものではなく、研究者によってその変遷は若干の相違がある。ここでは熊本県地方を中心に後期後半における研究の実績のある富田紘一氏と島津義昭氏の土器型式の変遷案にそって、ワクド石遺跡出土土器を型式分類し説明していく。ただ、ワクド石遺跡出土の土器がすべて両氏の型式設定に当てはまるとは言い切れないため、著者の考えを付加した変遷観である。そのため、ここではあくまで出土土器の説明をするさいの目安として理解していただきたい。

両氏の研究によって現在もっとも蓋然性のある土器型式変遷として次の型式変遷が考えられている。

なお、ワクド石遺跡で量的にまとまって出土したのは太郎迫式～黒川式までの土器である。

なお、古閑式に関しては、清田氏が指摘し（文献43)、提唱者の島津氏も認めるように、少なくとも２つの型式が認められる。ここでは筆者の考えにより、より古いと思われる型式を古閑式とし、新しいと思われる型式を黒川式としている。

鐘崎式	磨り消し縄文系土器型式
⇩	
北久根山式	
⇩	
西平式	
⇩	
太郎迫式	
⇩	
三万田式	黒色磨研系土器型式
⇩	
鳥井原式	
⇩	
御領式	
⇩	
天城式	
⇩	
古閑式	
⇩	
黒川式	凸帯文系土器型式
⇩	
山の寺式	
⇩	
夜臼式	

【太郎迫式土器】

器種としては深鉢形、鉢形、浅鉢形、椀形、高坏形、皿形があるというが、深鉢形、鉢形以外は良好な資料を欠いているようだ。なお、今回鉢形は深鉢の中に含めている。文様は磨り消し縄文及び「X」文がこの型式を代表している。

深鉢形土器　A-1、A-3、B-1、C-1類があり、A-1、B-1類が大半を占める。

文様を持つものはA-1、A-3類であり、B-1類についてははっきりしない。文様帯は口縁部と胴部上半部の２つの部分である。なお、A-3類は胴部上半部に文様帯をもつかどうかはっきりしていない。

文様は沈線文、凹点文、磨り消し縄文（巻き貝疑似縄文、二枚貝疑似縄文を含む)、「X」字状沈線文（以下「X」文と呼ぶ)、鋸歯状沈線文の組み合わせで構成されている。A-1類口縁部文様帯は口縁部を上下平行にめぐる２本の沈線とその上下の外側に残された磨り消し縄文、そして、波状口縁の高まりの頂部に押された凹点で構成されている。

胴部文様帯は頸部との境に刺突列点文をめぐらせ、それ以下に４本～８本の平行沈線文を引き、「X」文をこの平行沈線文の中に円周を４～８分割するように配している。「X」文は上下２段に配されるものが多く、また、上下に重なっていたり、上段の「X」文と「X」文の間に下段の「X」文が配されたりする。また、磨り消し縄文は平行沈線で区切られた３～７つの空間に連続せず、間をおいて残されるようである。

Ａ－３類で口縁部に文様を付けられたものはワクド石遺跡では出土していないが、他遺跡例ではＡ－１類の波状の高まり部分にあたる箇所に縦に平行な２本の沈線を引き、上下に平行する２本の沈線はその手前で反転しつながっている。そして、磨り消し縄文は沈線の外側を埋めている。

浅鉢形土器　良好な資料がなく、明確ではないがＡ－１、Ｂ－１、Ｆ－１類が存在するようである。また、文様は細い平行沈線、磨り消し縄文、はりつけ粘土浮文で構成されるらしい。Ａ－１類は深鉢形土器Ａ－３類の文様構成と同じものもあるようだ。また、口縁部を四分割する口縁端部に粘土をはりつけ、浮文としているものも見られる。ただ、この類は高坏形土器と類似するため、破片だけでは明確ではない。

Ｂ－１類はやや内傾する口縁部に特徴的な細い３本の平行沈線を引いている。

高坏形土器　良好な資料がなく、明確ではないが、従来からの資料では口縁部外面に平行沈線とその間に鋸歯沈線文を引いた例がある。ワクド石遺跡では新たな例が出土している。

【三万田式土器】

現在のところ器種として、深鉢形、浅鉢形、埦形、注口形、高坏形土器が知られている。いわゆる黒色磨研系土器の初現型式として知られるように、表面が丁寧に磨かれており、光沢を持つものが多い。さらに磨り消し縄文技法がすでに無くなり、細線羽状文がこの型式を代表する文様となっている。

深鉢形土器　Ａ－１、Ａ－２、Ａ－４、Ｂ－１、Ｂ－２類が見られる。

Ａ－１類は無文であろうと考えられる。波状口縁部の頂部の凹点がなくなっている。

Ａ－２類は口縁部の形状とともに胴部に特徴がある。最大胴径が胴部でもかなり上位にあり、最大胴径から頸部までの長さは短い。しかもこの類は屈折部間が直線状をしており、屈折部が明確に折れ曲がる傾向にある。無文のものと文様帯を持つものがある。文様帯は胴部上半、胴部屈折部から頸部の間にあり、文様帯としては幅が狭くなっている。なお、口縁部には基本的に文様はなくまた波状口縁頂部の凹点もない。ただ、口縁部内面に沈線を１条めぐらす場合がある。胴部文様帯は平行沈線文、細線羽状文、凹点文から構成されており、平行沈線間に細線羽状文が見られる。

Ａ－４類は胴部や口縁部の形状及び文様帯のあり方などからいくつかに細分されそうである。ただ、全体の傾向として、胴部上位に屈曲部が現れ、しかも頸部が内湾しながら立ち上がることは共通しているようだ。無文のものと文様帯を持つものがある。文様帯は口縁部と胴部屈曲部から頸部までの間にある。二つの文様帯には同時に文様が付けられる場合もあるがどちらか一方の場合もある。

文様は平行沈線文、細線羽状文、凹点文で構成されている。細線羽状文は沈線と沈線の間に描かれるが、胴部文様帯では幾何学的な沈線文から「ハ」の字状に連続して引かれている。

Ｂ－１類の胴部から頸部にかけての特徴はＡ－４類と共通している。ただ、屈曲部とするほど明確な折れはない。この類はほとんどが無文である。

Ｂ－２類はＢ－１類の口縁部が波状になったもので器形的にはＢ－１類とほとんど変わらない。ほとんどが無文である。

浅鉢形土器　Ｂ－１、Ｂ－２、Ｃ、Ｄ類が見られる。

Ｂ－１類は太郎迫式に見られたＢ－１類の器形とほとんど変化はない。違いは口縁部の文様帯に細線羽状文や凹点文が加わっている。細線羽状文は沈線と沈線の間に描かれている。また、凹点から垂直に沈線文を引いた例も見られる。沈線の大きさは太郎迫式のそれより少し幅が広く、しかも深くなり明瞭である。

Ｂ－２類は三万田式になってはじめて見られる器形である。文様帯は口縁部にある。文様は基本的に平行沈線、細線羽状文、凹点文によって構成されている。細線羽状文は沈線と沈線の間かその外側に描かれている。また、この類にも凹点から垂直に沈線文を引いた例が見られるようだ。

Ｃ類は数もわずかであり、しかも良好な資料に恵まれていないようでその全体像は明確ではないが、胴部から屈折して頸部になる部分の頸部側に文様帯があるようだ。文様の構成ははっきりしないが、沈線と細線羽状文であろう。

Ｄ類は深鉢Ａ－２類の胴部の形状とよく類似している。本来、深鉢とすべきか浅鉢とすべきか迷うところである。この器形もこの型式からはじめて現れる。文様帯は口縁部と胴部から頸部へ屈折する頸部側の２か所にある。文様は平行沈線文、凹点文、細線羽状文から構成されており、細線羽状文は沈線と沈線の間やその外側、凹点のまわりに描かれている。

埦形土器はワクド石遺跡では出土していないが、この型式の出土例を見るとＢ類が見られる。ただ、底部ははみ出した粘土板ではなく、上げ底の底部になっている。ほとんど発見されないので詳細は不明である。

注口土器　三万田式のものは注口土器としての特徴的な器形をしていないようだ。いわば普通の深鉢の胴部上半に注口部がつけられた器形になっている。そのためどうしてもバランスが悪く、洗練された器形にはなっていない。文様部は胴部上半に沈線と細線羽状文で構成されている。

高坏形土器　遺跡からは脚部の出土が多く、坏部の資料は非常に少ない。三万田式にはＡ類の脚部が見られる。文様部は脚部にもあり、沈線と細線羽状文が認められる。

【鳥井原式土器】

器種としては深鉢形土器、浅鉢形土器、埦形土器、注口形土器が知られている。高坏形土器は存在するはずであるがまだ知られていない。凹線文と細線羽状文がこの型式を代表する文様である。鳥井原式の凹線文は凹線と凹線を隣り合わせることで鋭い稜を作りだしており、凹線より稜が目立っている。鳥井原式の細線羽状文は細長くなり、三万田式のように沈線と沈線の間に多用するのではなく凹線の中の下半部に多用される。また、磨き技法が頂点にあると感じさせるように丁寧な磨きを施しているものが多い。また、この型式の口縁端部近くは外反が一段と強くなり、折れ曲がったような感がある。

深鉢形土器　Ａ－４、Ａ－５、Ｂ－１類が見られる。

Ａ－４類は三万田式で見られた胴部上位での屈曲がなくなり、胴部屈曲部からそのまま頸部になっている。従って最大胴部径が胴部と頸部の境になる。そのため頸部は丸みを残しながらも強く内湾し直立しながら立ち上がっている。胴部はあまりふくらまずに底部に至っている。口縁部は外反しながらも内傾しており、文様帯となっている。文様帯は口縁部のみである。文様は平行凹線文と凹点文から構成されている。また、口径は最大胴部径より小さくなり、口がしまった感がある。

Ａ－５類の存在はワクド石遺跡では明確に確認できていない。他遺跡の例では口縁部に３本の平行凹線と山形突起の下に凹点を押しているようだ。

Ｂ－１類も三万田式で見られた胴部の屈曲部がなくなり、屈曲部からそのまま頸部になる。頸部は三万田式に見られた丸みを胴部との境にわずかに残している。ただ、Ａ－４類と同様に口径は最大胴部径より小さくなっている。

浅鉢形土器　Ｂ－２、Ｃ、Ｄ、Ｅ－１、Ｅ－２類が見られる。

Ｂ－２類は頸部と口縁部の境に特徴があり、底部からほぼ直行してきた頸部が口縁部近くで急に外反すし、口縁部下端が角のように外に突き出している。この傾向は他の浅鉢も共通している。文様帯は口縁部にあり、平行凹線文、細線羽状文、凹点文そしてまれに二枚貝背部押圧文などがある。

Ｃ類は三万田式のものとほとんど変化はないが鳥井原式のほうが頸部が長く、直立している。また、口縁部内面に１条の沈線を引いている場合が多い。文様帯は胴部との境の頸部下端部にあり、１、２条の凹線文、凹点文、細線羽状文から構成されている。

Ｄ類は三万田式のものに比べ胴部に対する頸部、口縁部の長さの比が小さくなり、頸部、口縁部とも短くなった感がある。なお、器高そのものも低くなったものがあるようだ。これはＥ－１類との分離を難しくしている。文様帯は口縁部と頸部下端部にあり、凹線文、凹点文、細線羽状文から構成されている。

Ｅ類は鳥井原式になって登場する器形である。ワクド石遺跡では出土数はわずかである。浅鉢Ｄ類とよく類似しており、Ｄ類の器高をさらに低くした器形になっている。底部は資料が少なくはっきりしないが丸底になる可能性もある。

埦形土器　Ａ類とＢ類が見られるようだ。ワクド

石遺跡では小破片しかなく詳細は不明である。他遺跡例ではＡ類は胴部がふくらみながら上半部が直立する器形をしている。基本的に無文であるがＢ類は底部の周囲に凹線文がめぐる。

注口土器　この鳥井原式になって注口土器として独自の器形をするようになる。口縁部が基本的になく、頸部と胴部からなっており、器高の半分以上を頸部が占めている。胴部は低いながらも強くふくらむ形をしている。頸部は筒形をしており胴部から直立している。文様帯は注口土器それぞれで異なるようであるが、ほぼ口縁部から胴部上半部まで連続する。文様は凹線文、凹点文、二枚貝背部押圧文、細線羽状文から構成される。

この型式の高杯形土器はまだ明確ではない。

【御領式土器】

器種としては深鉢形土器、浅鉢形土器、埦形土器、注口形土器が見られる。御領式になると文様はほとんど目立たなくなる。文様帯も基本的には口縁部に限られるようだ。文様は基本的には２本の平行凹線文とまれに凹点文で構成されている。鳥井原式の凹線文ほど幅広くはならないものの、沈線とよべるほど明確な２本線にはなっていない。しかも、御領式の凹線文は１回で引かれたものでなく、ヘラかヘラ状の工具で何回も形を整えながら作られた凹線になっている。そして御領式の特徴として凹線と凹線の間を突帯状に盛り上げるように作りだしていることがあげられる。これは文様としては凹線文よりめだっており、型式を決める際の重要な観点となっている。また、器形上の特徴として深鉢形、浅鉢形の胴部から頸部への屈折部が鳥井原式とくらべ角張っていることである。鳥井原式のやや丸みをもっている屈曲部と明らかに違っている。その他の特徴として口縁端部がきわめて平滑になっていることがあげられる。

また、Ｅ類が器高に対する口径の割合の大小によって二つに細分されることも重要である。鳥井原式ではこの分離が難しかったが御領式でははっきりしてくる。

深鉢形土器　Ａ-４、Ａ-５、Ｂ-１、Ｃ-１類が見られる。

Ａ-４類は全体の器形は鳥井原式と変わないが口縁部幅が短くなる。また、土器の最大径が胴部と頸部の屈折部にあり、頸部から口縁部にかけては内傾する。胴部から頸部への屈折部は丸みを持たず角張っており、頸部から口縁部への頸部上端は鳥井原式より強くしかも短く外反している。文様帯は口縁部にあり、基本的に２本の凹線文が引かれる。また、胴部と頸部の屈折部よりやや頸部寄りに一つの段がめぐっている。いわゆる界線と呼ばれているものである。

Ａ-５類の器形はＡ-４類とほとんど変わらない。山形の突起のある部分は２本の凹線のうち１本が山形になり口縁部下端に凹点が付く。

Ｂ-１類は全体の器形として頸部が内傾せず、ほぼ直立している。このため口径と最大胴部径がほぼ同じか、やや口径がおおきくなる傾向にある。胴部から頸部への屈折部は角張る。

Ｃ-１類は御領式になって初めて現れる器形であるようだ。ただ、ワクド石遺跡でも他遺跡でもこの類の胴半部以下が明確でないためＣ-１類のような器形をしているのか断定はできない。無文であると思われる。

浅鉢形土器　Ｂ-２、Ｃ、Ｅ-１、Ｅ-２類が見られる。

Ｂ-２類は器形においては鳥井原式のそれとほとんど変わらない。ただ、口縁部幅が短くなっている。文様帯は口縁部にあり、２本の平行凹線文が引かれている。無文のものもあるようだ。

Ｃ類はその存在がワクド石遺跡でも他遺跡でも明確ではなく詳細はわからない。

Ｅ-１類は頸部が胴部との屈折部から短く内傾したあと強く外反するところに特徴があり、頸部と胴部、頸部と口縁部との屈折部は強く角張っている。文様帯は口縁部にあり、２本の平行凹線文が引かれている。口縁部幅は鳥井原式より短いがしっかりと直立する。

Ｅ-２類は二つに細分される。胴部や頸部が外に傾き器高に対して口径の割合が大きくなるものと、胴部や頸部が外にそれほど傾かず、特に頸部は直立気味に内湾するため器高に対して口径の割合が小さ

くなるものである。屈折部は角張る。文様帯は口縁部とまれに頸部下端部にある。口縁部文様は２本の凹線文が引かれており、山形突起の口縁部下端には凹点文が押されている。胴部文様は深鉢の界線に近い凹線になるようだ。

埦形土器　Ａ、Ｂ類がある。Ａ類は鳥井原式のものと変わらない。

注口土器　出土例が少なく、器形、文様ともはっきりしない。他遺跡例では胴部が算盤状になるらしい。

【天城式土器】

器種としては深鉢形土器、浅鉢形土器、埦形土器、が見られる。高坏形土器の存在は確認されていないようだ。また、浅鉢形土器の器高に対する径の割合の大小による二分化が一段とはっきりしてくる。

天城式になると御領式以上に文様が希薄になる。しっかりした文様帯は深鉢口縁部と注口土器に見られるのみとなる。浅鉢口縁部にも沈線文が見られるが１条が見られるのみであり、もはや文様とはいえない状況にある。深鉢口縁部の文様は一応平行沈線文と言えるが、その沈線文は粗雑に引かれた感を逃れない。また、沈線文そのものも一定した形を持っておらず、また沈線文の本数は定まったものはないようだが、少なくとも３本以上がほとんどを占めている。なお、器形的には天城式に近いが口縁部に沈線文でなく、貝殻条痕文が見られるものがある。天城式に含めて考えたいが、従来は貝殻条痕文を用いることを指標として古閑式と考えてきた経緯があり、古閑式とする。

器形的な特徴としては前型式に見られた胴部から頸部への屈折部の角張りがなくなっており、胴部から頸部への屈折部の角度が大きくなり、緩やかに屈折している。これは浅鉢形土器で器高に対して口径の割合の大きいものにも当てはまる。

また、器面調整においても浅鉢形土器以外は磨き技法が粗くなっており、特に深鉢では胴部以下の部分は部分的な磨きが主流になっている。

深鉢形土器　Ａ－４、Ｂ－１類が見られる。

Ａ－４類は深鉢形土器の口縁部が内傾せず、直立するかやや外傾しており、口縁部幅も少し広くなる。また、胴部も緩やかなふくらみを持っており、重心が下がり、安定した印象を受ける。最大径は胴部から頸部への屈折部にあり、頸部は内湾しながら内傾しておりしまった感がある。なお、胴部と頸部の屈折部外面には界線が粗いが確認できる。なお、この類は前型式に見られた口縁端部の平滑な端面の特徴がやや崩れてきてはいるが残されている。

Ｂ－１類はＡ－４類の底部から頸部までの特徴とほぼ一致する。

浅鉢形土器　Ｅ－１、Ｅ－２類が見られる。両者とも口縁部はしっかりとした立ち上がりを見せるもののその幅はかなり短くなり、沈線文は基本的に１本で構成される。また、Ｅ－２類の山形突起も形式的に付けられており、粘土粒を口縁部端部にのせ整形した状態になっている。ただ、山形突起の下に付けられる凹点文は形式的ではあるが残されている。

浅鉢形土器の二分化はＥ－１類では資料が少なくはっきりしないが、Ｅ－２類では明確に認められる。ただ、ワクド石遺跡では小破片が多いため良好な資料は少ない。

埦形土器　Ａ、Ｂ類がある。Ａ類は前型式より胴部のふくらみがなくなり、口縁端部直下の立ち上がりがなくなっている。Ｂ類はワクド石遺跡では出土していない。他遺跡の例では、てづくねのような状態で粗雑な作りになっている。

注口土器　ワクド石遺跡では出土していない。他遺跡の例では、前型式と同様のものがあるらしい。

【古閑式土器】

器種としては深鉢形土器、浅鉢形土器、埦形土器、高杯形土器、そして類例は少ないが皿形土器や壺形土器も見られる。

古閑式では基本的に文様がなくなり、器面調整としていわゆるヘラケズリ整形のあとナデ調整や貝殻条痕文がみられるのみとなる。なお、深鉢の口縁部には貝殻条痕文を口縁に平行にひき沈線文に似せたと思われるものがある。この種の器形は天城式に近いと言える。

文様が見られるのは浅鉢形土器の特殊なものや壺形土器、高杯形土器に限られるようだ。しかも、文様は沈線文のみで描かれている。

器面調整は深鉢形土器以外ではまだ丁寧な磨き技法が残るが、深鉢形土器にはほとんど使用されなくなっている。

器形の特徴としては胴部から頸部への屈折部、頸部から口縁部への屈折部が前型式よりもさらに屈折する角度が鈍くなり、胴部、頸部、口縁部の境が単に折れ曲がる感がある。そして、浅鉢形土器の山形突起が認められるのはごく一部の資料に限られることから、ほぼ古閑式で付けられなくなるようだ。

浅鉢形土器の二分化は古閑式で完全に定着している。

深鉢形土器　Ａ－４、Ｂ－１、Ｂ－２、Ｃ－１類が見られる。

Ａ－４類は各部がさらに直線化する。口縁部には２種みられ、頸部から屈折して直立するかやや内傾するものと、頸部から折れ曲がって真っ直ぐ外傾するものがある。前者は天城式に近いと言える。胴部については前型式の特徴を引き継いでおり、丸みを持ってふくらんでいる。口縁部外面には沈線文は付かず条痕が認められる。なお、底部については基本的に平底で、段がついたものも見られる。

Ｂ－１類は古閑式では少ないようで、詳細は不明である。ワクド石遺跡でもこの類であるといえる資料は少ない。

Ｂ－２類はＡ－４類の口縁部が波状になったものであるが、山形との区別は資料が少ないため難しい。

Ｃ－１類はワクド石遺跡でもまとまった出土数がある。ただ、小破片のため口縁部以下が鉢形になっているのかが断定できない。他遺跡例をみると口縁部の形状でいくつかに細分されそうである。基本的には胴部上半でややふくらみ、底部にかけてほぼ真っ直ぐな器形になりそうである。底部の形状は不明であるようだ。なお、この器形は御領式からみられるようであるが、この古閑式から主要な土器になったとみられる。

浅鉢形土器　Ｅ－３、Ｅ－４、Ｆ－２類が見られる。

Ｅ－３類はワクド石遺跡ではまとまってみられた。頸部が前型式に比べ、相対的に長くなり、しかも緩やかに内湾しながら外傾し、口縁部に続いている。

口縁部は頸部上端部をわずかにつまみ上げたような形状をしており、口縁部という名称をつけるにはあまりに幅が小さい。

Ｅ－４類の器高に対して口径の割合が大きくなるものをＥ－４－ａ類とする。Ｅ－４－ａ類はＥ－３類の頸部幅が大幅に短くなり、短い逆「く」の字状になっている。頸部を形だけ残した印象を受ける。また、口縁部もＥ－３類よりさらに形式的になり、頸部内面に段を付けることで口縁部を作りだしている。

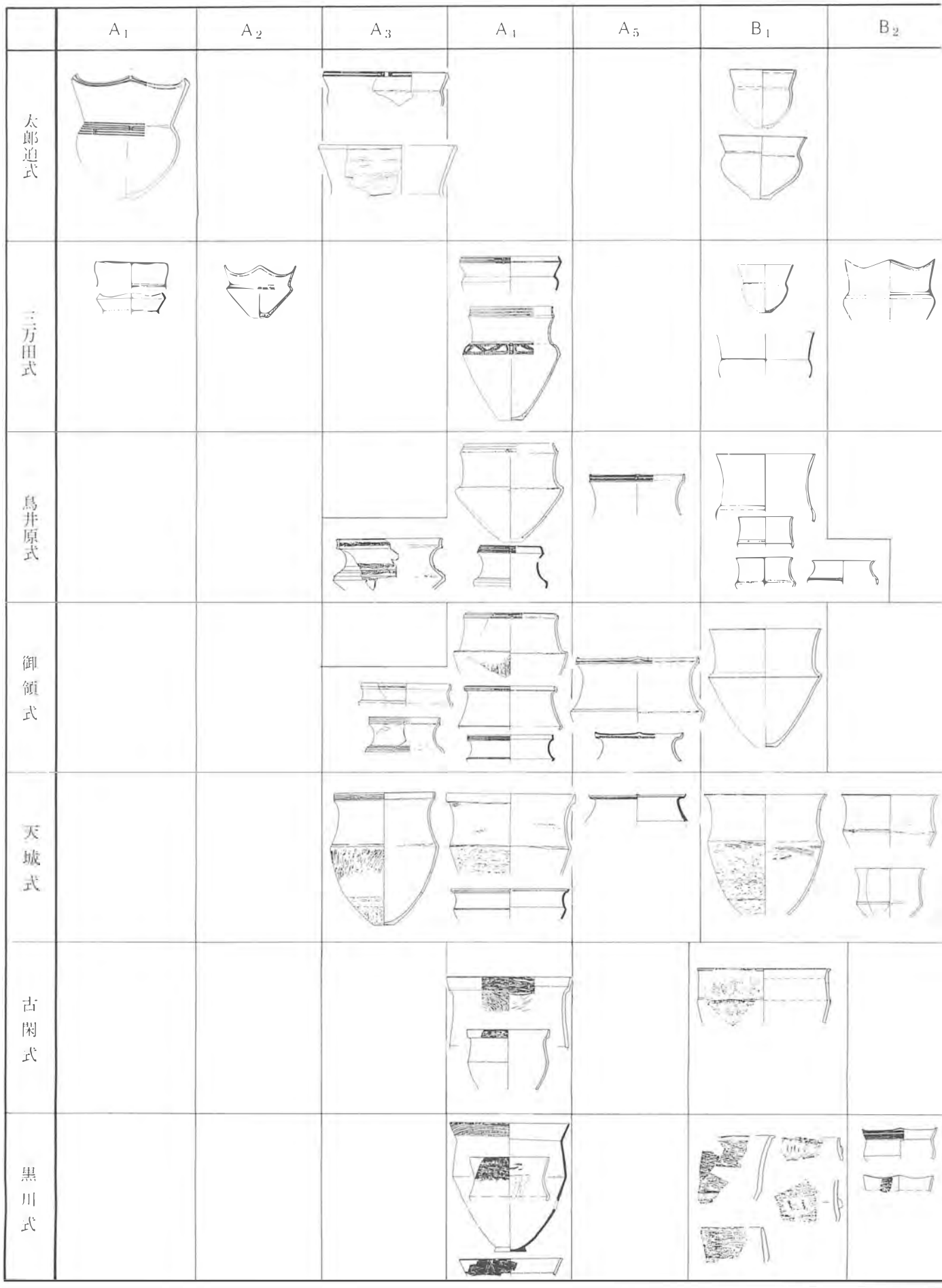
Ｅ－４類の器高に対して口径の割合が小さくなるものをＥ－４－ｂ類とする。この類は胴部が口縁部と直結した形状をみせており、すでに外面は頸部の部分がなくなり、内面で口縁部に続く頸部がわずかに残っている。口縁部はＥ－４－ａ類と同じような形状をしている。なお、このＥ－４類の中には山形突起を口縁端部にもつものが存在するようである。ワクド石遺跡でも出土している。

Ｆ－２類は後期及び晩期の土器の変遷の中ではかなり異質である。その形状は浅鉢からの影響と考えるのか、埦形土器からの影響と考えるのか、それとも他地域からの搬入品と考えるのか難しいところである。器面調整はワクド石遺跡出土品をみても極めて丁寧に磨かれており、色調も他の土器とは違っているようだ。なお、この類には沈線による弧線文がしばしば見られる。

埦形土器　Ａ、Ｂ類が見られる。Ａ類は胴部が口縁端部まで直行しており、埦形のＦ－２類の口縁部やや浅鉢Ｅ－３類の頸部に見られるように外側に大きく開く形状において共通する特徴を示している。Ｂ類は埦形というよりは皿形といってよい形状をしており、前型式に見られたてずくね状の粗雑な整形をしている。

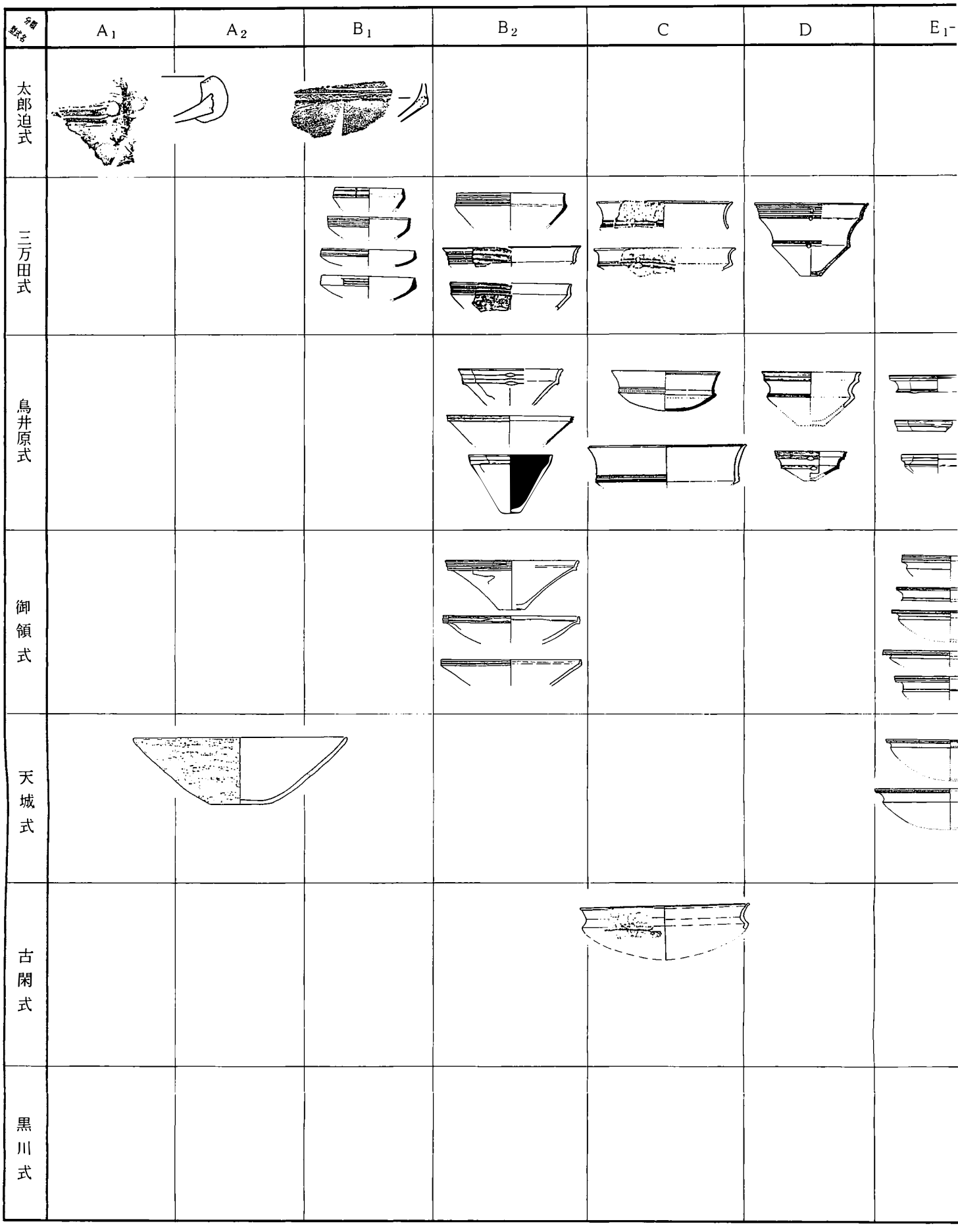
高坏形土器　Ｂ類が見られる。ワクド石遺跡では平底の資料が出土している。脚部のみの出土であり、坏部の形状は不明である。他遺跡でも坏部の資料は知られていない。

壺形土器　ワクド石遺跡では出土していないが、至近距離にある伊坂上の原遺跡、それに古閑遺跡で出土した例を示しておく。伊坂上の原遺跡例は口縁部、底部が欠けているが、夜臼式に見られる壺形土器に近い器形をしているものと考えられる。沈線に



第46図　縄文時代後期（太郎迫式）～晩期（黒川式）の深鉢形土器器形分類図

C_1	C_2	D_1	D_2	その他(壺形)



第47図　縄文時代後期（太郎迫式）～晩期（黒川式）の浅鉢形土器器形分類図

a	E_1- b	E_2- a	E_2- b	E_4- a	E_4- b

E5	F1	その他(埦形・注口形・高坏形など)
	F2	

よる重弧文が胴部に見られる。一応古閑式に含められているが他の土器との器形上の共通性はなさそうだ。古閑遺跡例は胴部のみの資料であり、壺形になるのかもわからない。その文様は３本を単位とする平行沈線文の相対する部位に山形の削り出しを施し、ひし形状の文様を作り出している。他の土器との共通性はない。

このことはこれらの壺形土器が時期を異にしているか、他地域からの搬入品であるかのどちらかということになる。

【黒川式土器】

中部九州のなかで、熊本県地方では古閑式の後に設定される土器形式の良好な遺跡が知られておらず、当地域での形式名の設定はされていない。そのため、現在まで論文、報告書などで用いられてきた鹿児島、宮崎地方の形式名である黒川式をそのまま使用する。そのため、本来の黒川式の土器形式の内容とは異なる部分が生じてくる可能性がある。

黒川式の最大の特徴は器面調整や用いる粘土の胎土において深鉢と浅鉢の格差が大きくなることである。深鉢の器面調整は粗い条痕文によって仕上げられており、古閑式以上にその粗さが目立つ。それに比べ、浅鉢は胎土も良好ながら、器面調整も丁寧に磨かれている。この際立った違いは、おそらく、次の凸帯文土器系の各形式で明確になる壺と甕の違いにつながるものであろう。

器種として深鉢形土器、浅鉢形土器、埦形土器がある。その他の器種もあると考えられるが、現在のところはっきりとしていない。

深鉢形土器　Ａ－４、Ｃ－１、Ｄ－１、Ｄ－２類がある。Ａ－４類は口縁部、頸部、胴部の各部が前型式より、いっそう屈曲が鈍くなり、直線化する。古閑式に見られた胴部のふくらみもなくなっているようだ。

Ｃ－１類がこの型式になって目立ってくる。古閑式のＣ－１類が胴部の口縁部近くで外湾ぎみに丸みを持っていたのに比べ、黒川式は口縁部まで直行する器形や、胴部の上位がわずかに逆「く」の字状に屈曲する凸帯文系土器の深鉢形土器の器形に近い形状を示すものもある。この類には口縁端部に蝶ネクタイやそれを半割したような突起飾りが付くものがある。

Ｄ－１類は胴部上端が外側に折れ曲がり、口縁部のようになったもので、いわゆる甕形をなす。資料としては少ない。

Ｄ－２類はＣ－１類の口縁端部外面や、やや下部に断面三角形の凸帯をめぐらしたもので刻み目は入っていない。ただ、凹点文がまれに確認できる。これは連続するものではなく周囲をいくつかに分割する位置にあるものと思われる。

浅鉢形土器　Ｅ－５、Ｆ－１類が見られるようだ。ただ、他の器形も存在する可能性が強い。Ｅ－５類は胴部上半が外湾し、頸部と口縁部が一体化し短くなる独特の器形を示している。Ｆ－１類は古閑式によく見られるＥ－３類の口縁部が無くなった器形をしている。口縁端部には蝶ネクタイを半割したような突起飾りが付くものがある。

埦形土器　前型式に続き同様のものが見られるようだが、詳細は明らかではない。

高坏形土器　古閑式のものと凸帯文系土器に見られるような台付鉢形のようなものとの中間形態が想定されるが、詳細は不明である。

以上、本報告書で使用する土器型式についてその各器種の内容を提示した。これは基本的には富田氏、島津氏の型式変遷をもとにしたものに、ワクド石遺跡での遺物のあり方を加味したものである。したがって、本報告書での型式名の土器内容はこれに沿って記述している。

ｃ　各調査区出土土器

【Ａ調査区】（第48図～第51図）

当調査区の器種構成は深鉢形土器がほとんどを占め、浅鉢形土器、埦形土器がわずかに存在する。また、土器形式もほとんどが太郎迫式と考えられる。

深鉢形土器はＡ－１、Ａ－３、Ｂ－１類が認められ、浅鉢形土器ではＢ－１、Ｅ－３類が認められる。埦形土器（106）は口縁部が欠けているため分類は不明である。ただ、口縁部が外湾する状態から見るとＦ－１類になると見られる。

深鉢形土器Ａ－１類は文様帯が口縁部と、頸部と胴部の境から胴部上半にかけての２つに見られる。

また、器形は、頸部が長く伸びるものは少なく、胴部は丸く外湾するものが多い。ただ、（５）のように胴部の中央で屈折して折れ曲がるものもある。

口縁部の文様は沈線２本とその外側に縄文を部分的に残した磨り消し縄文で構成されたものと縄文がまったくみられないものとがある。

胴部の文様は頸部と胴部の境にある刺突列点文以下の平行沈線が６本であるものが多く、その平行沈線を縦につなぐように「Ｘ」字状の反転文（以下Ｘ文と呼ぶ）が文様帯の全周をいくつかに分割するように描かれている。このＸ文は上下となりどうしの沈線を結ぶものと１本おいて結ぶものとがあるようだ。また、Ｘ文は２段に描かれていると考えられるものが多い。その場合、上下に重なっているものは少なく、上段のＸ文とＸ文の中間に下段のＸ文が描かれる場合が多いようだ。なお、Ｘ文の分割は（６）、（83）のように全周を４分割するものが多い。また、磨り消し縄文はそのほとんどの場合、平行沈線６本の中で２本目と３本目の間と４本目と５本目の間に施されている。

この他の胴部文様として（93）、（95）、（97）のように沈線と沈線の間に磨り消し縄文を残しその上から細線羽状文を描いたものがある。また、(94)、(96)のように沈線と沈線の間の磨り消し縄文の上に鋸歯文を描いたものもある。さらに、（９）などは磨り消し縄文を残さず、鋸歯文、刺突文、円形浮文などで構成されているものもある。

なお、胴部の中央で屈折して折れ曲がる器形のものが少し見られるので触れておく。（５）、(75)、(80)、（93）、（95）、（97）がそれで、細線羽状文を描いたものが含まれている。また、（５）、(75)、(80）は沈線が４、５本になっており、（５）の例からみるかぎり小型の深鉢になりそうである。

最後に特異例として（10）をあげておく。平行沈線が８本あり、磨り消し縄文の部分はない。Ｘ文は２段が確認されるが、上段のＸ文は２重になっている。

深鉢形土器Ｂ－１類には２種ある。口縁端部近くでわずかに外湾ぎみに内側に傾いて、頸部はほぼ直立に近くなっている（１，２など）ものと真っ直ぐな口縁部を持つものである。前者は内外面の調整は横方向のミガキが主流であるが（101）～（103）のように外面に細かな条痕文がみられるものもある。また、後者は口縁端部に縄文をつけるもの（60）がある。

深鉢形土器Ａ－３類は口縁部外面の文様帯部が無文になっている（57，58）。

この他の深鉢形土器で特異なのは（13）である。縄文時代10号住居跡から出土した深鉢形土器（第37図　３）と同一のものの口縁部破片である。

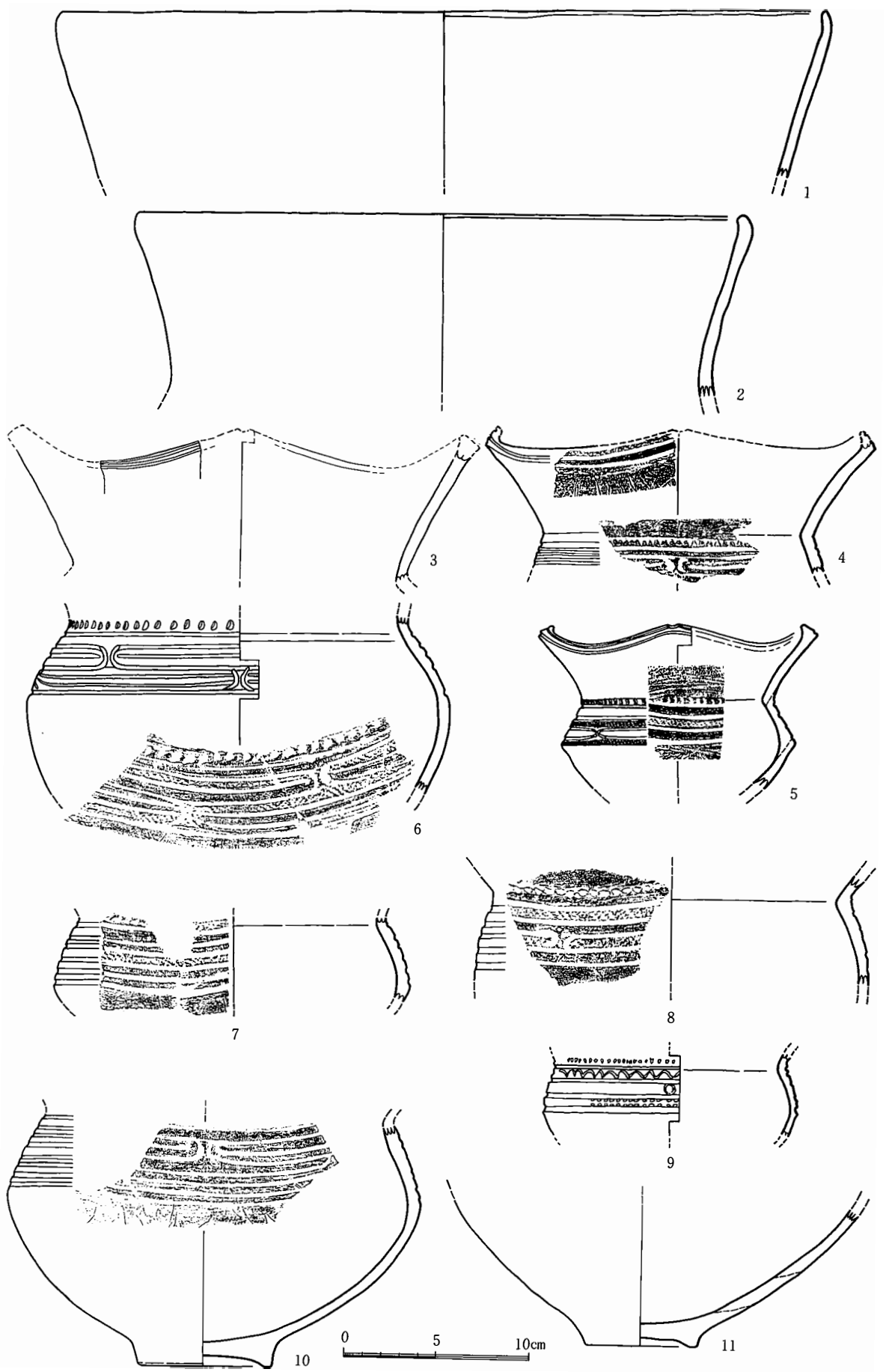
また、深鉢形土器として分類が可能かどうかわからない土器として（12）がある。胴部は中位付近から逆「く」の字状に折れ曲がっており、頸部はわずかに立ち上がっているのみである。文様帯は折れ曲がった胴部の上半にあり、２本の平行沈線で「ハ」の字状の区画を横に連続させているようである。平行沈線の間には磨り消し縄文を残している。そして、文様帯の上下は沈線で区切っており、特に頸部と胴部の境には.2本の平行沈線が引かれ、その間に斜行の短い細線文を連続させている。また、口縁端部上には縄文をつけている。

浅鉢形土器では（98）、（99）のようにＥ－１類かＥ－２類であろうと考えられるもの、また、（100）のようにＥ－３類のものがある。

（104）はＢ－１類であろうが、口縁部中央に菱形で断面三角形の粘土を貼り付けた飾りがある。

以上、説明してきた土器類はそのほとんどが深鉢Ａ－１類になり、従来からの型式名でいえば太郎迫式と呼ばれているものである。また、深鉢Ａ－３類もその範囲に含まれている。しかし、従来からの太郎迫式の範囲にはなかったものも存在する。細線羽状文を描く深鉢形土器の一群で、いずれも地に磨り消し縄文を残しており、その点では太郎迫式と共通する。今のところ太郎迫式として考えたい。ただ、頸部から口縁部にかけて欠けているため波状口縁になるのか、水平な口縁部になるのか気になるところである。

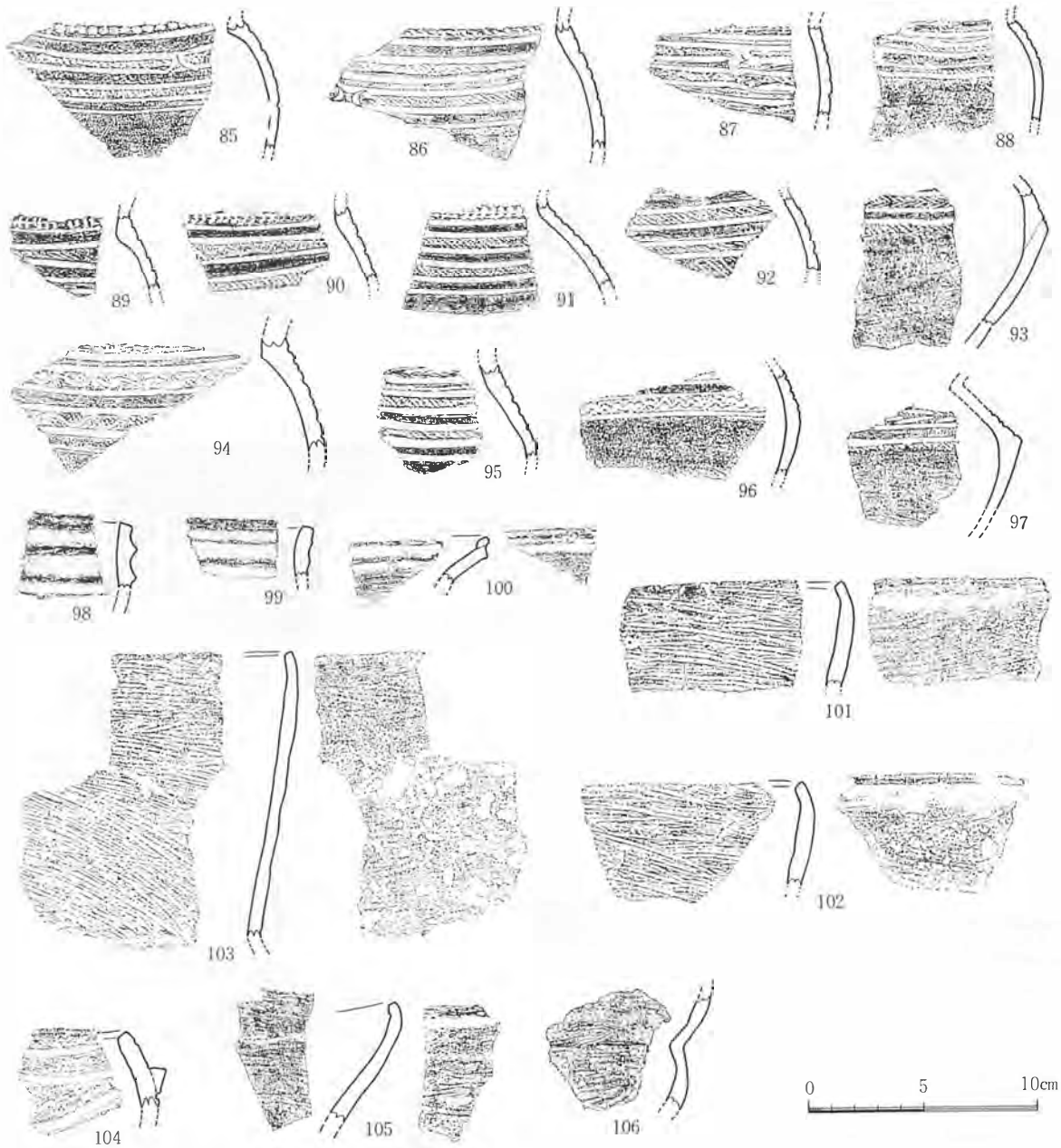
また、文様構成から見ると太郎迫式の範囲でとらえられるが、新たに太郎迫式に付け加えるべき様相として（13）の口縁部の形状、それに胴部が逆「く」



第48図　A調査区出土土器(1)

第49図　A調査区出土土器(2)

第50図　A調査区出土土器(3)



第51図　Ａ調査区出土土器(4)

の字状に折れ曲がる形状がある。

太郎迫式かどうかわからないものとして、深鉢Ｂ－１類で口縁部近くが外湾しながらわずかに内側に傾くものをあげておく。Ｂ－１類で太郎迫式と考えられてきたものにはこのような特徴はなく、また、次型式とされる三万田式にもないようだ。

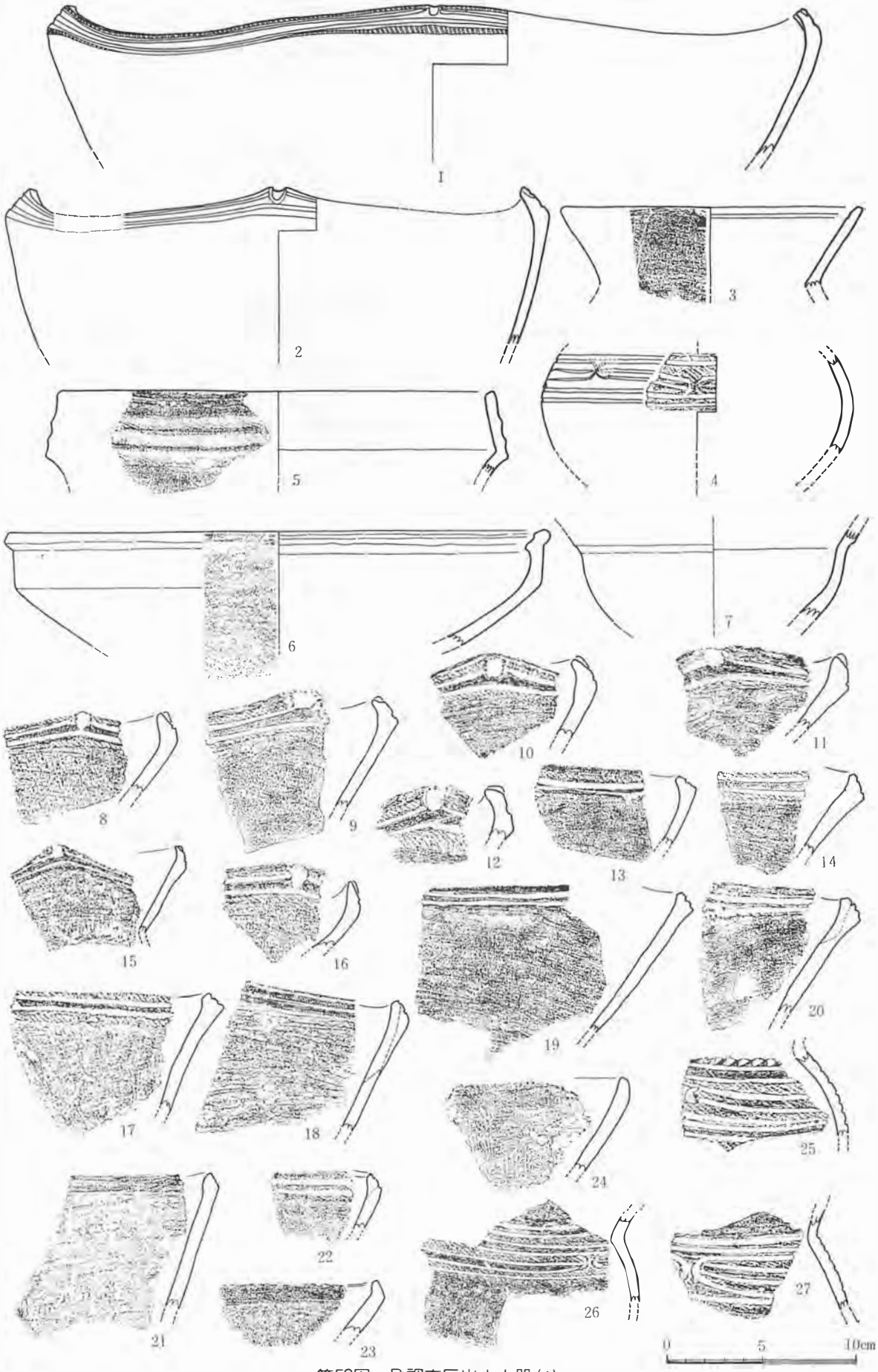
明らかに太郎迫式以前と考えられる型式として（12）をあげておく、文様構成からみると辛川式の範囲に入るものである。また、明らかに太郎迫式以後と考えられるものとして、（98，99）と（100）があげられる。前者は鳥井原式、後者は天城式である。

【Ｂ調査区】（第52図，第53図）

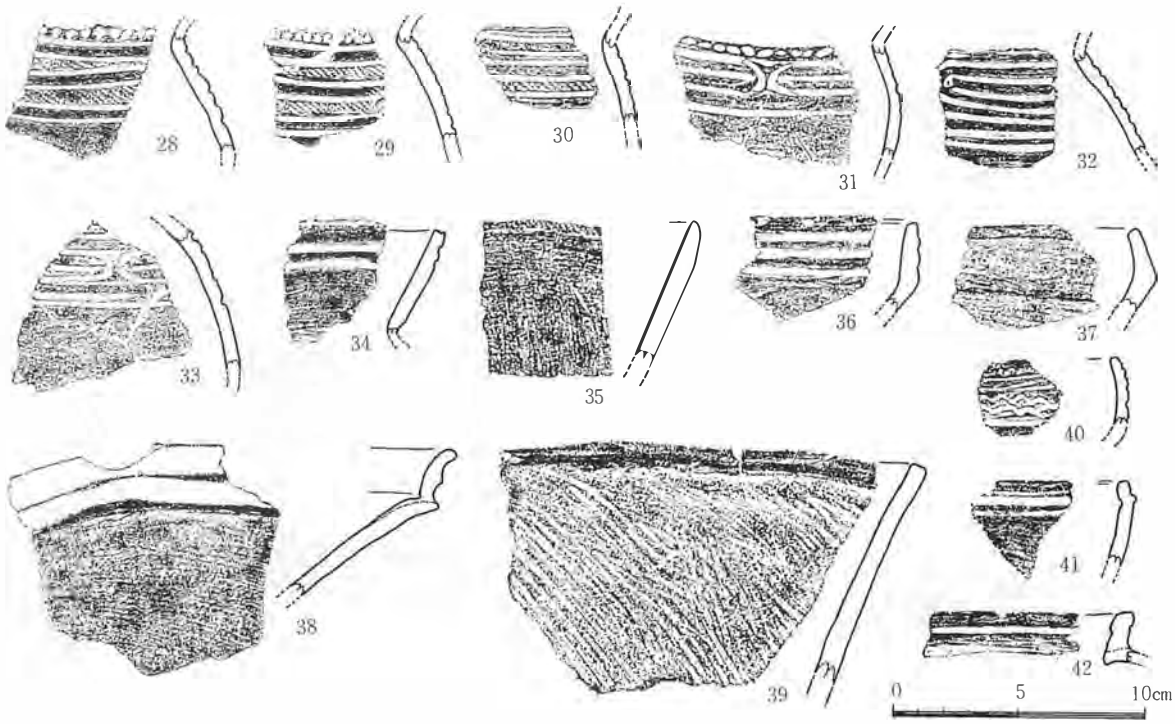
Ａ調査区同様に太郎迫式がその大半を占めるようである。ただ、出土地点はＢ調査区の西側から北側に偏っているようだ。数は少ないが古閑式、鳥井原式、三万田式、御領式も見られる。

深鉢形土器としてＡ－１類、Ａ－４類、Ｂ－１類が見られる。浅鉢形土器としてはＢ－１類、Ｂ－２類、Ｅ－４類、Ｅ－５類、Ｆ－２類が見られる。この他の器種として椀形土器が１点見られる。

Ａ－１類の深鉢形土器は口縁部と胴部上半に文様帯のあるものがほとんどで、無文のものは(21)、(23)、（24）と少ない。太郎迫式にあたる。



第52図　B調査区出土土器(1)



第53図　Ｂ調査区出土土器(2)

口縁部文様帯にはＡ区で主にみられた２種が見られる。

胴部文様帯は破片が小さいため、多くは語れないが、平行沈線の数にばらつきがある。４本、６本、７本、８本が見られる。そして、(26)、(27)、(30)のようにＡ調査区には見られなかった刺突列点文のないものが存在する。磨り消し縄文は（31)、(32)、(33）ではなくなっている。

Ａ-４類として（５）と（37）が見られる。（５）は逆「く」の字状に屈折する口縁部の外面に３本の凹線を引いており、１本目と３本目の凹線の中に右下がりの細長い連続した細線羽状文を描いている。鳥井原式に当たる。(37）は小破片でＡ-１類の可能性もあるが、口縁部の逆「く」の字状の屈折が明確で口縁部幅が広くなっていることはＡ-２類として差し支えないと思われる。無文である。三万田式に当たる。

Ｂ-１類としては（３)、(34)、(35)、(39）がある。（３)、(34）は頸部が短く、真っ直ぐに伸び、内、外に沈線をめぐらしている。特に（34）は口縁端部にも小さな沈線を引いている。(３)は三万田式、(34)は御領式か。(35)、(39）は頸部が長くなり（35）はやや外湾ぎみになり、口縁端部に縄文を付けている。三万田式である。(39）はやや外反し、口縁端部は鋭い平坦面をなす。太郎迫式か。

浅鉢形土器Ｂ-１類は（40）の１点のみである。平行沈線の間に鋸歯文が描かれている。ただ、小破片であるため器形は断定できるものではない。

浅鉢形土器Ｂ-２類も（38）の１点のみである。典型的な鳥井原式である。

浅鉢形土器Ｅ-４類も（６）の１点のみである。頸部と口縁部がほぼ一体化しており、古閑式の典型となる。器面調整は粗い。

浅鉢形土器Ｅ-５類も（42）の１点のみである。頸部と口縁部が一体化し、胴部が外に大きく張り出している。見方によっては無頸の壺とも呼べる。黒川式の典型である。

浅鉢形土器Ｆ-２類も（７）の１点のみである。胴部から若干屈折して開くように口縁部が直行する器形はＦ-２類の特徴である。古閑式か。

（41）は小破片ながら埦形土器とした。口縁部がやや外側に折ってから内側に傾けているために、外側に突起がまわっているようにみえる。古閑式に入るか。

【Ｃ調査区】（第54図～第64図）

Ｃ調査区は面積が広く、東西では土器の様相も少し異なっており、細かく地区を分けて見ていきたい

ところであるがあまりに遺物が多すぎるため、そこまで分析がなされていない。そのため、おおまかな土器様相の説明になる。なお、当調査区は土器様相の面で明らかにＡ、Ｂ調査区とは異なっており、遺跡の構造を考える上では重要な地点になっている。また､柱穴群の項でも述べたが､Ｂ・Ｃ・Ｄ-11・12・13・14区には柱穴が少なくなっている。これは遺物の分布においても同じような傾向を示している。

当調査区ではＢ・Ｃ・Ｄ-11・12区において太郎迫式がまとまって出土する傾向にあり、その他の調査区には三万田式、鳥井原式、御領式、天城式が同じ割合で出土しているようだ。なお、少量ではあるが古閑式も見られる。

深鉢形土器としてＡ-１類、Ａ-２類、Ａ-３類？、Ａ-４類、Ｂ-１類、浅鉢形土器としてＢ-１類、Ｂ-２類、Ｃ類、Ｅ-１類、Ｅ-２類、Ｅ-３類、Ｅ-４類、Ｅ-５類、Ｆ-２類がみられる。この他の器種として埦形土器、高坏形土器、注口土器が見られる。

深鉢形土器Ａ-１類で口縁部と胴部上半に文様が付けられるものと無文のも（282，283）のとが出土している。磨り消し縄文を残さないものの割合が多くなってくる傾向にある。また、刺突列点文をつける例も少なくなっている。

Ａ-２類は小破片が多いため、Ａ-３類との区別が難しい。（７）の例は頸部が短く、外湾しており珍しい例といえる。器面の状態からは三万田式か。他は太郎迫式であろう。

Ａ-４類は三万田式、鳥井原式、御領式、天城式、古閑式のものが見られ、特に御領式、天城式が多く見られる。三万田式のものは口縁部が外湾しながら内傾するもの（135，136，244，286，292）で、沈線と沈線の間に細線羽状文が描かれている。また、鳥井原式（164，187）は浅鉢類との区別が難しいが、口縁部が内傾しており、深鉢形土器になるものと考えられる。

Ｂ-１類は三万田式、鳥井原式、御領式、天城式が確認された。ただ、御領式と天城式の区別は難しく、御領式としたものの中に天城式のものが含まれている可能性が強い。

三万田式のもの（８，108，111，112，211，217，254，229，129～132）は頸部が直行し、端部が丸みを帯びるが、９は口縁端部近くで外湾ぎみに内傾している。この種も三万田式に入れておきたい。

鳥井原式として24、25、167～171、174～176がある。口縁端部近くで外反する特徴を持っている。

御領式、天城式として208～215、252、255がある。

なお深鉢胴部破片が若干出土しているが、249が御領式になり、他は天城式のようだ。

浅鉢形土器として、Ｂ-１類、Ｂ-２類、Ｃ類、Ｅ-１類、Ｅ-２類、Ｅ-４類、Ｅ-５類、Ｆ類がみられる。

Ｂ-１類には太郎迫式、三万田式、鳥井原式、御領式が見られる。太郎迫式のもの（21，23，27，34，119，128）は胴部と口縁部との境が明瞭ではなく、丸みをもって屈曲している。文様は平行沈線文の間に鋸歯状沈線文を描いたり、疑似縄文（巻き貝背部使用）を付けたりしている。

三万田式のもの（137，141～144，146，293，294）は胴部と口縁部の境が明瞭に屈折している。文様は沈線と沈線の間に細線羽状文を引いている。

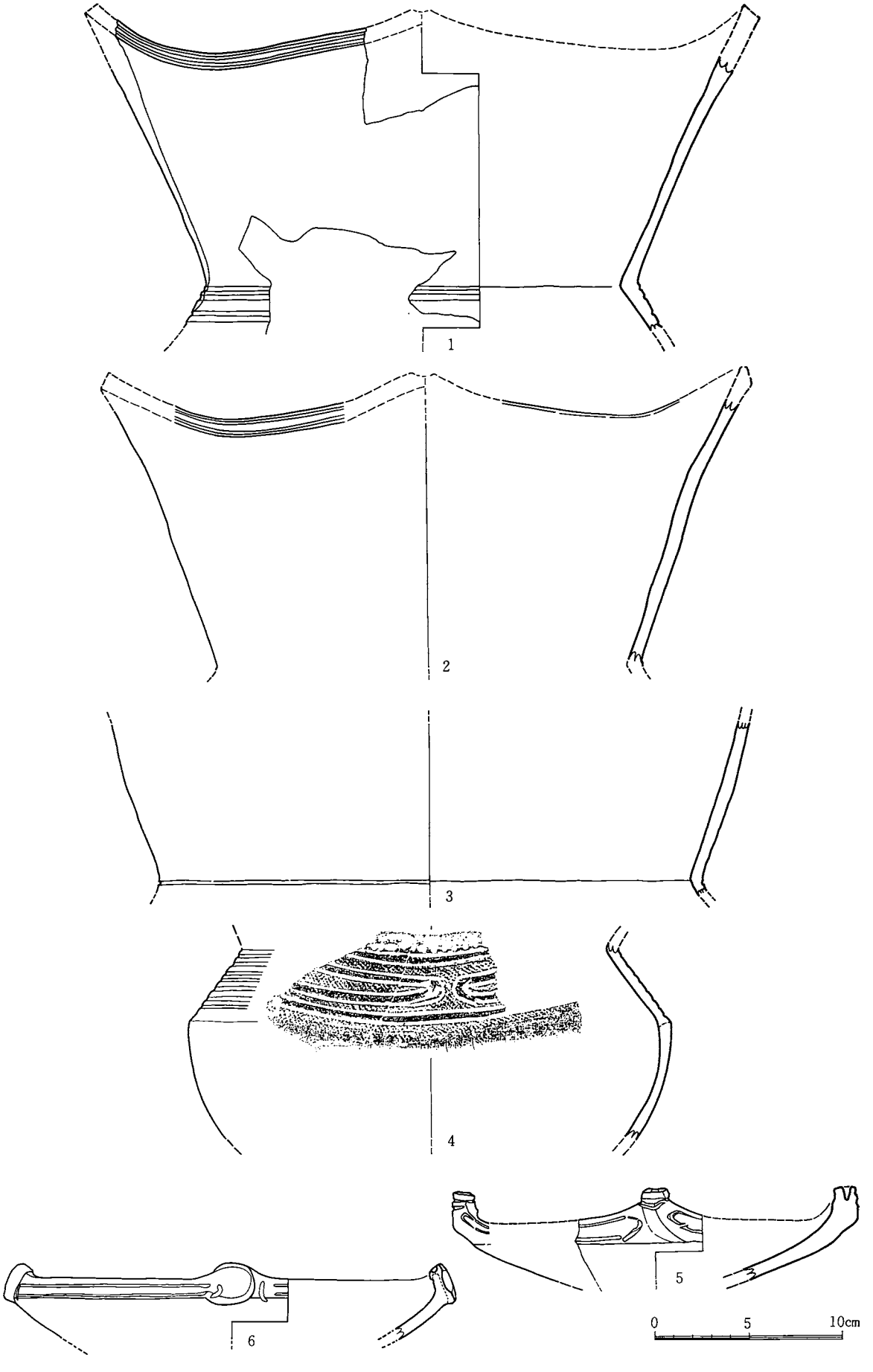
鳥井原式のもの（162，163，178）は三万田式の細線羽状文が沈線の中の下半部に引かれている。

Ｂ-２類は鳥井原式のものがほとんどで御領式にも若干見られる。31～33、184、187、188、194などがある。なお、御領式のものは43である。

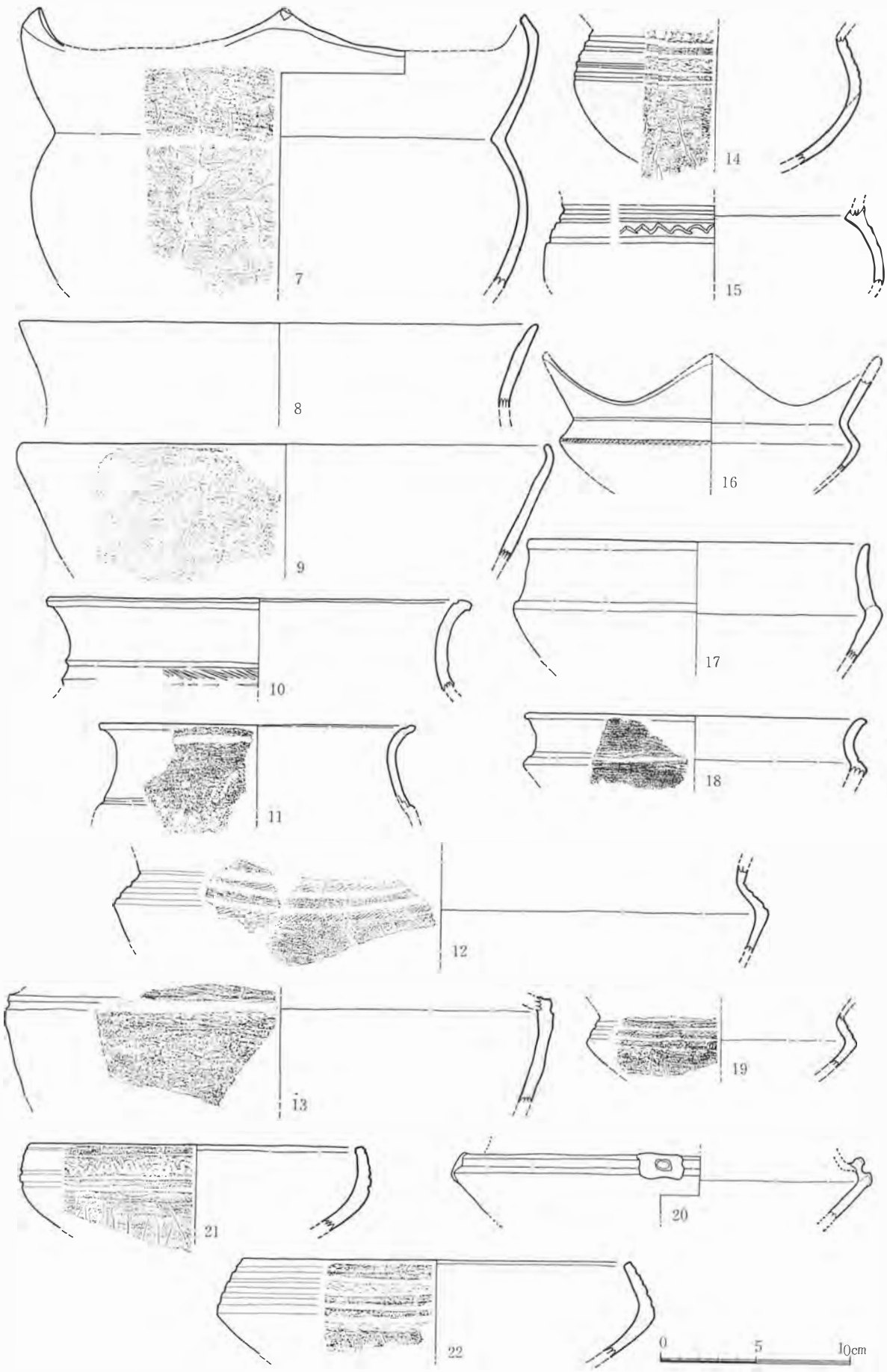
Ｃ類は三万田式と鳥井原式が見られる。ただ、三万田式と鳥井原式は器形状では区別が困難であり、細線羽状文の状態で判断することになる。290、291は胴部と頸部の境及び口縁部外面に細長い細線羽状文を描いており、特に290例は鳥井原式に特有の二枚貝背部押圧文を模した細線文を描いていることから鳥井原式と考えられる。20は頸部の下端に幅広の凹線文を引き、周縁を４分割する位置に円形の粘土をはりつけている。この文様構成は太郎迫式に共通している。

Ｅ-１類は御領式と天城式に集中している。鳥井原式は29の１点のみである。

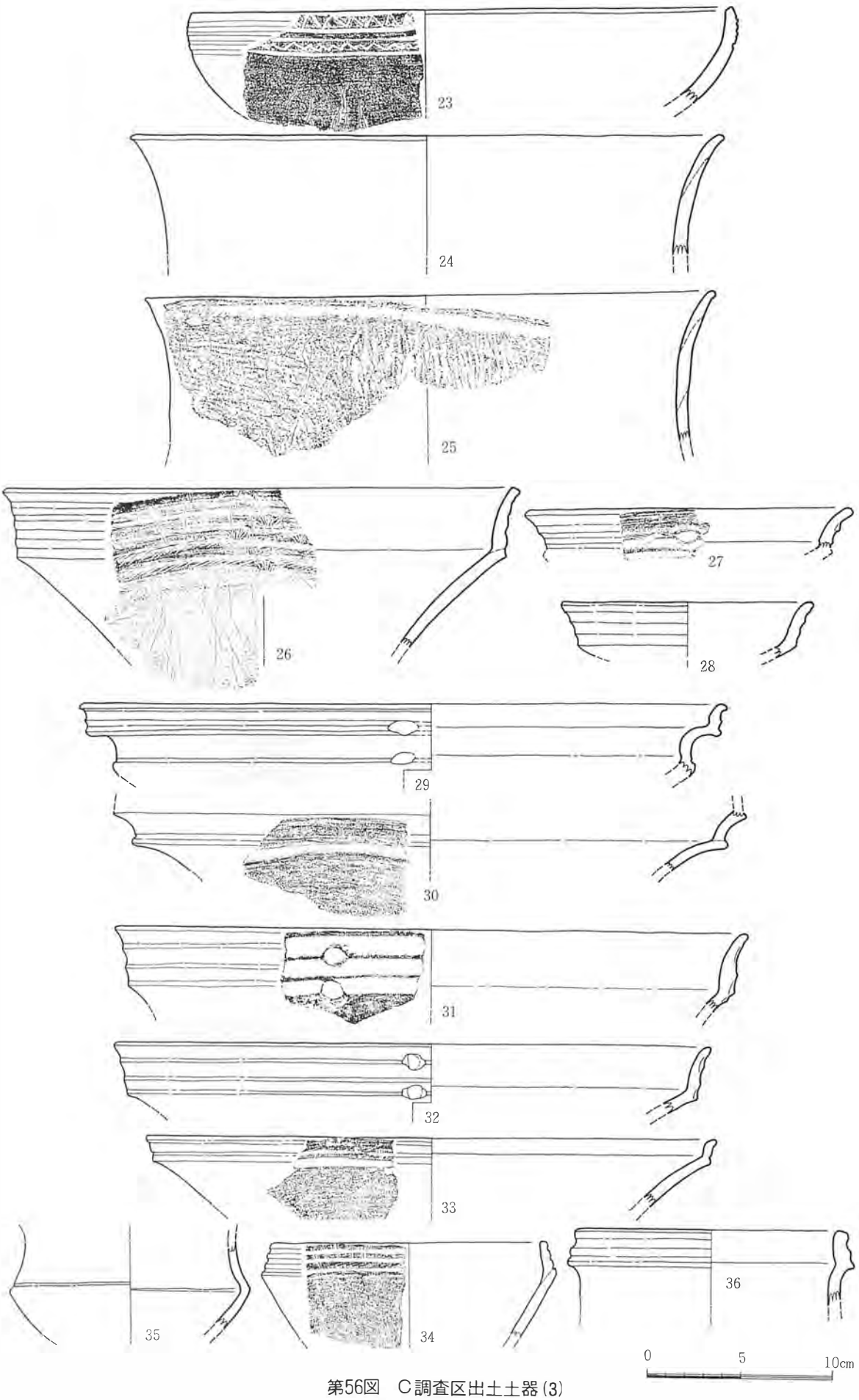
Ｅ-２類の類例は少なく219、220、317の３点を数えるのみである。いずれも３本の沈線文がみられ、御領式や天城式とは異質である。



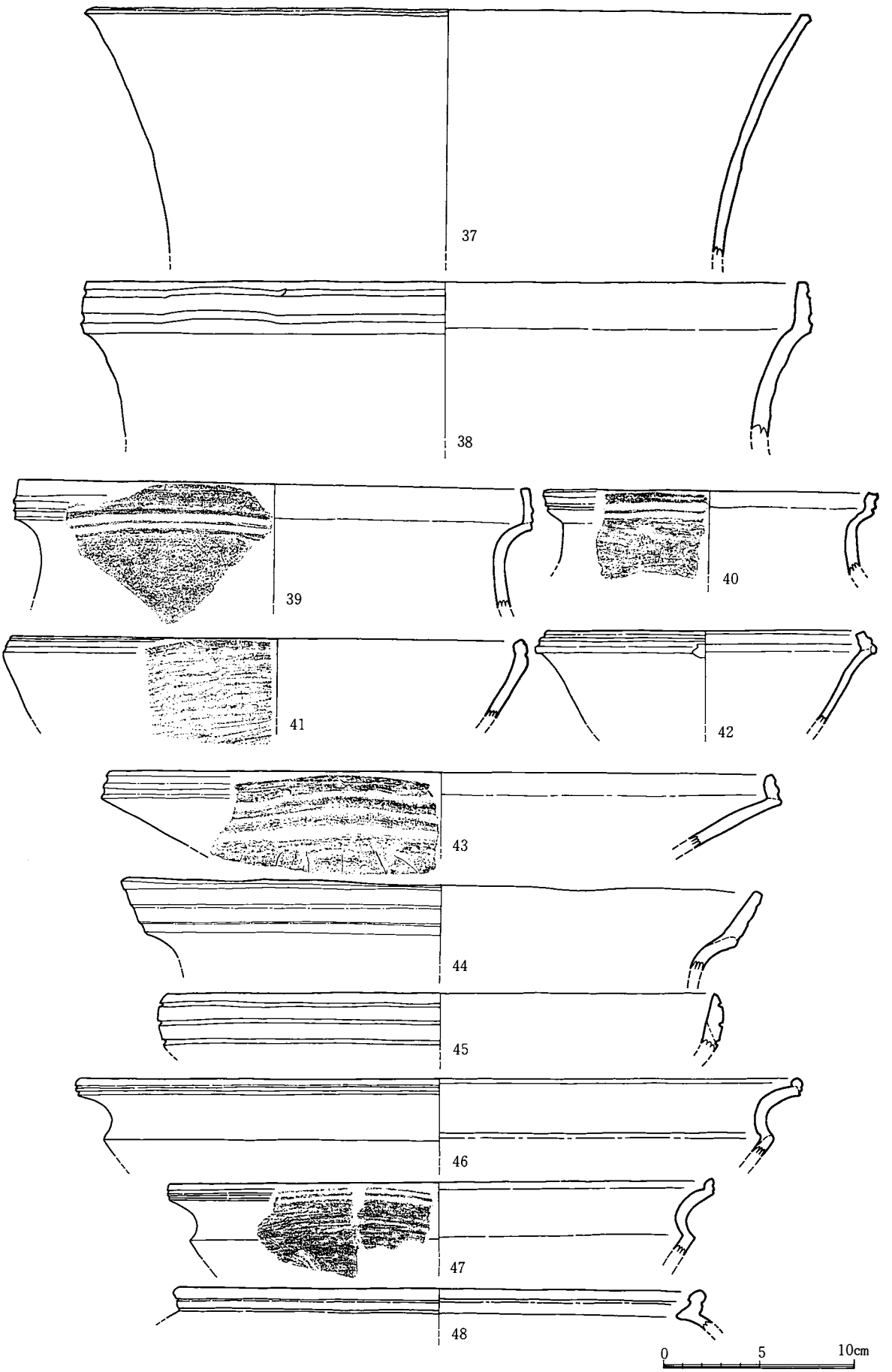
第54図　Ｃ調査区出土土器(1)



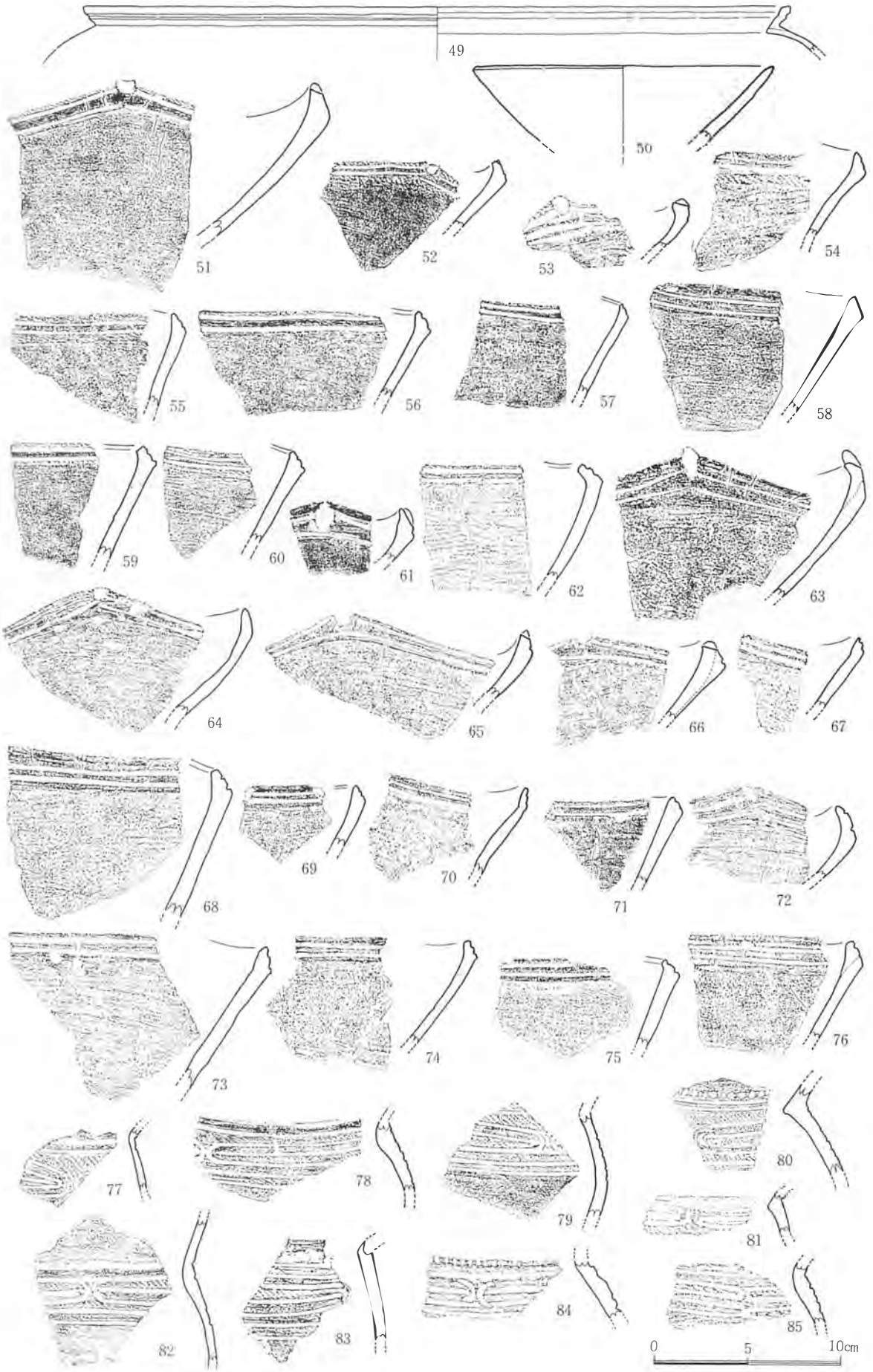
第55図　C調査区出土土器(2)



第56図　Ｃ調査区出土土器(3)



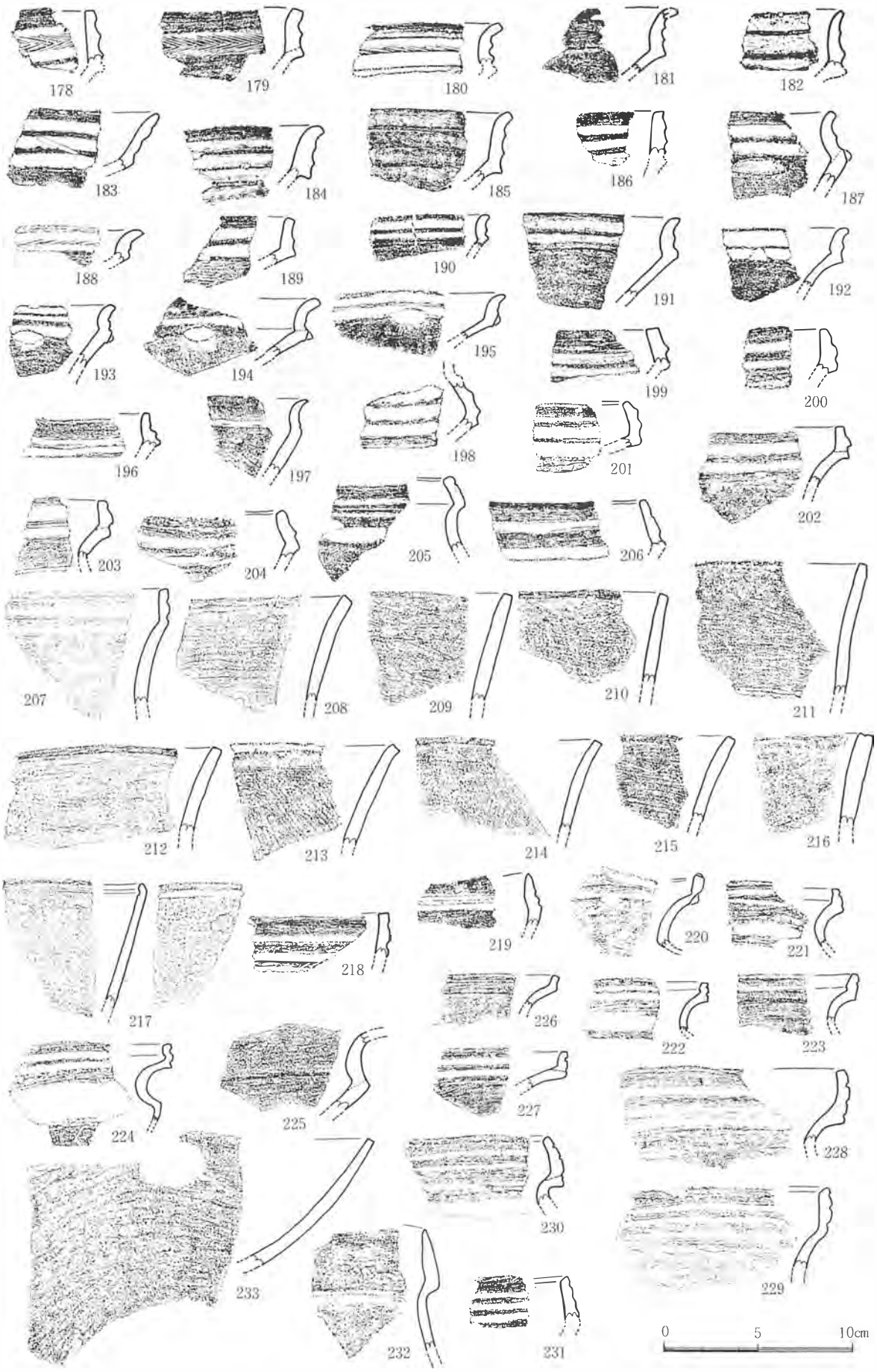
第57図　C調査区出土土器(4)



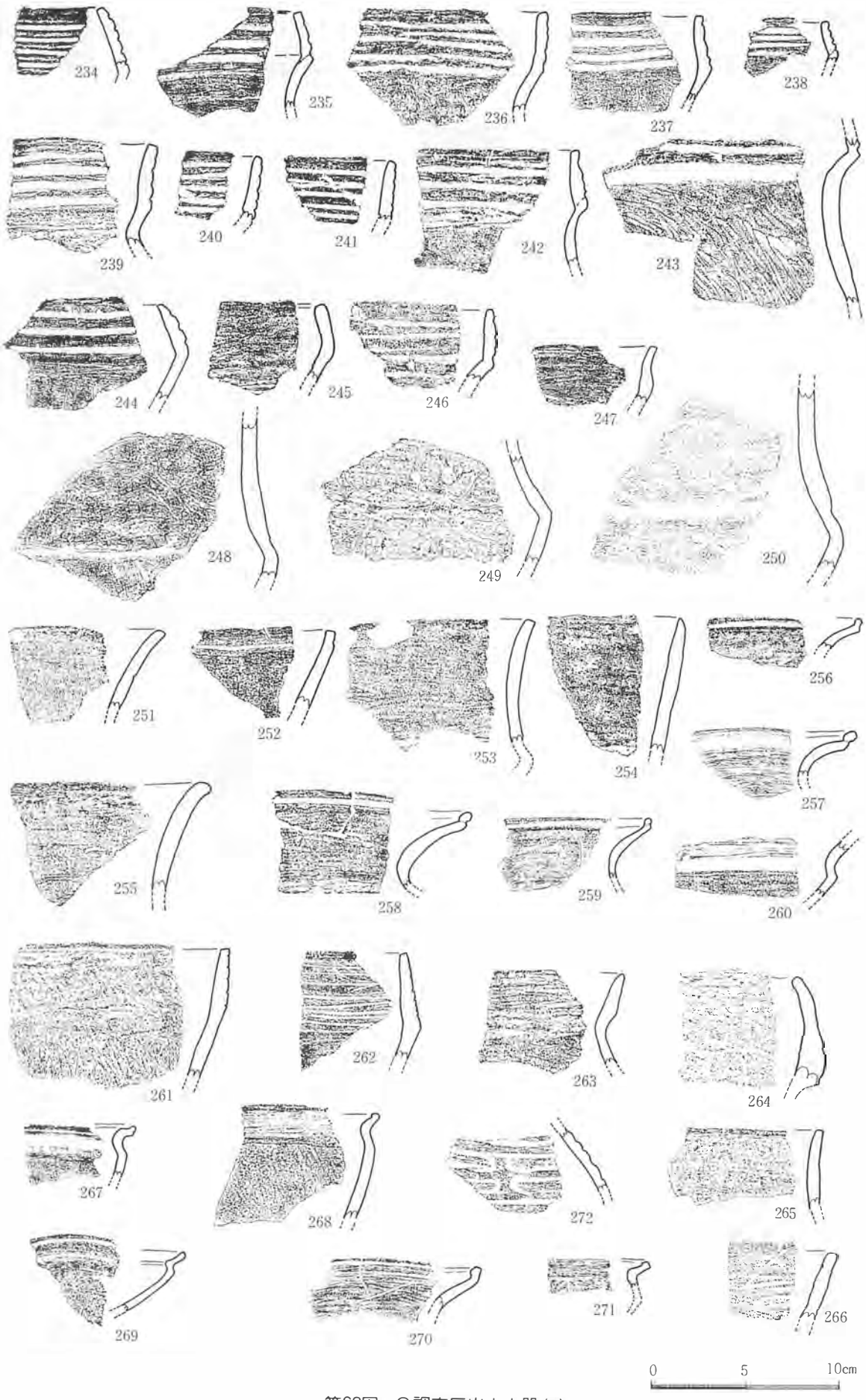
第58図　Ｃ調査区出土土器(5)

第59図　C調査区出土土器(6)

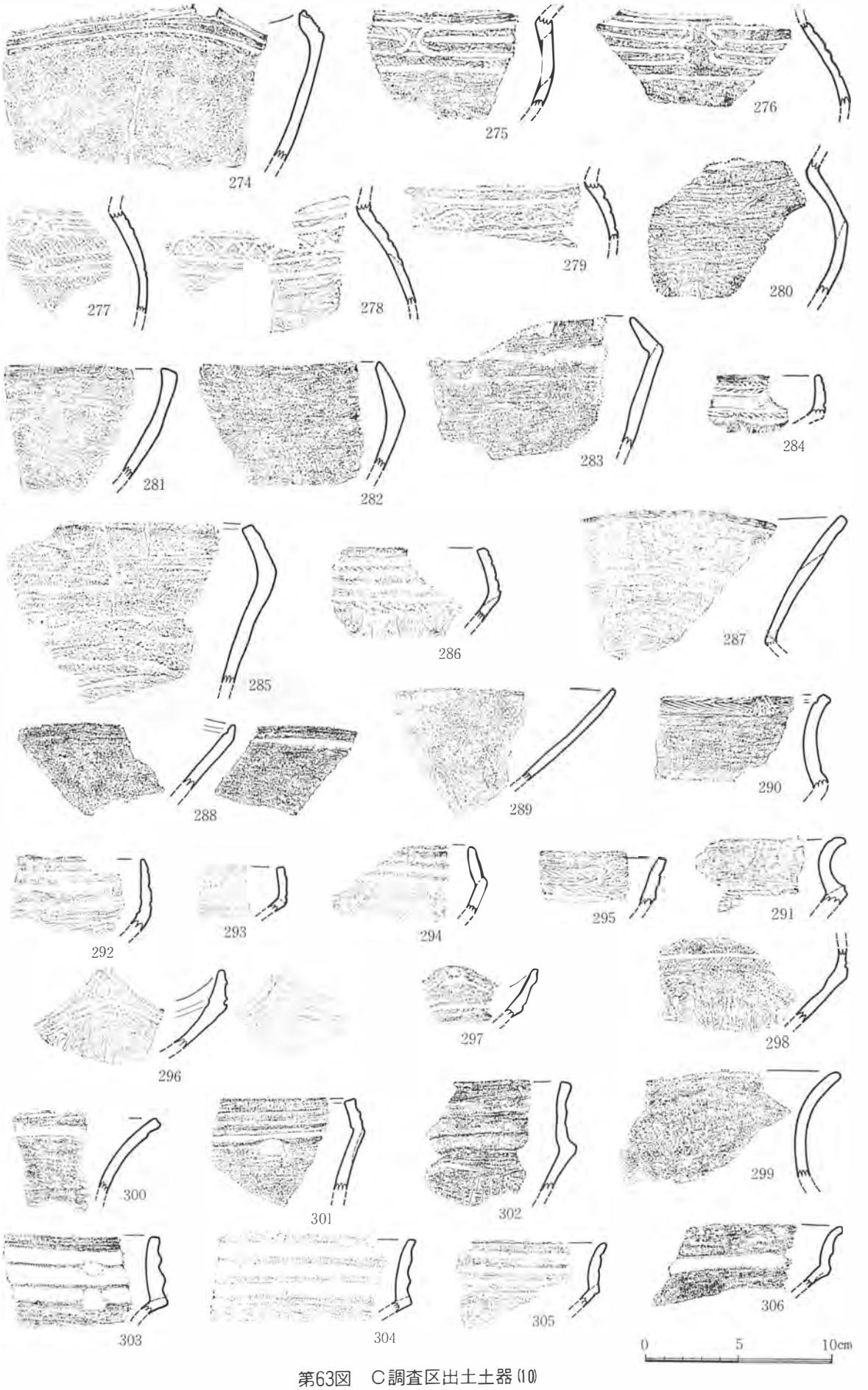
第60図　Ｃ調査区出土土器 (7)



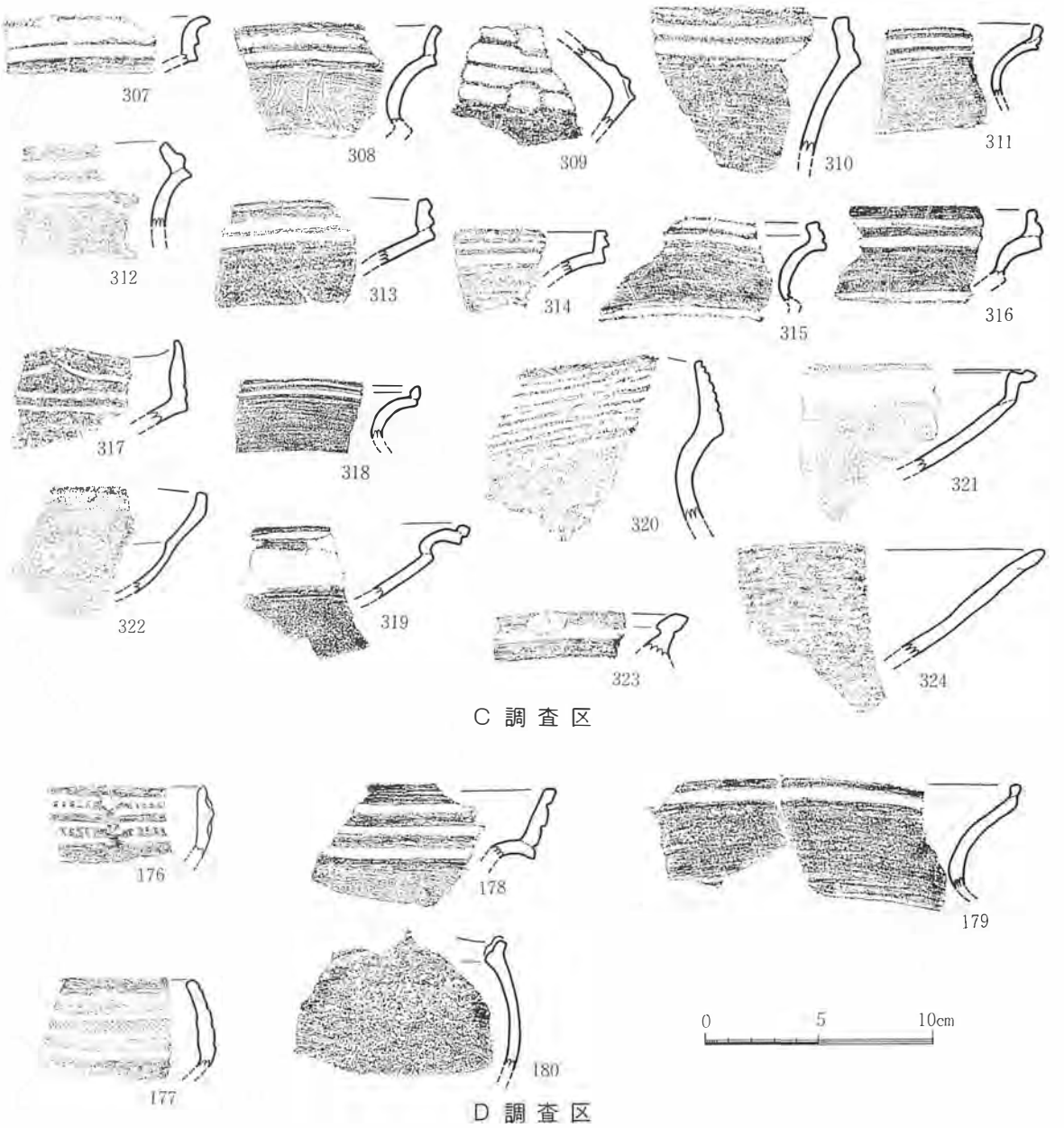
第61図　C調査区出土土器(8)



第62図　Ｃ調査区出土土器 (9)



第63図　C調査区出土土器(10)



第64図　C・D調査区出土土器(11)

E－4類は古閑式の器形である。E－4－a（269，321）、E－4－b類（180，267，268）の両方が見られるが、わずかな出土数である。なお、180は山形の突起を持つものである。

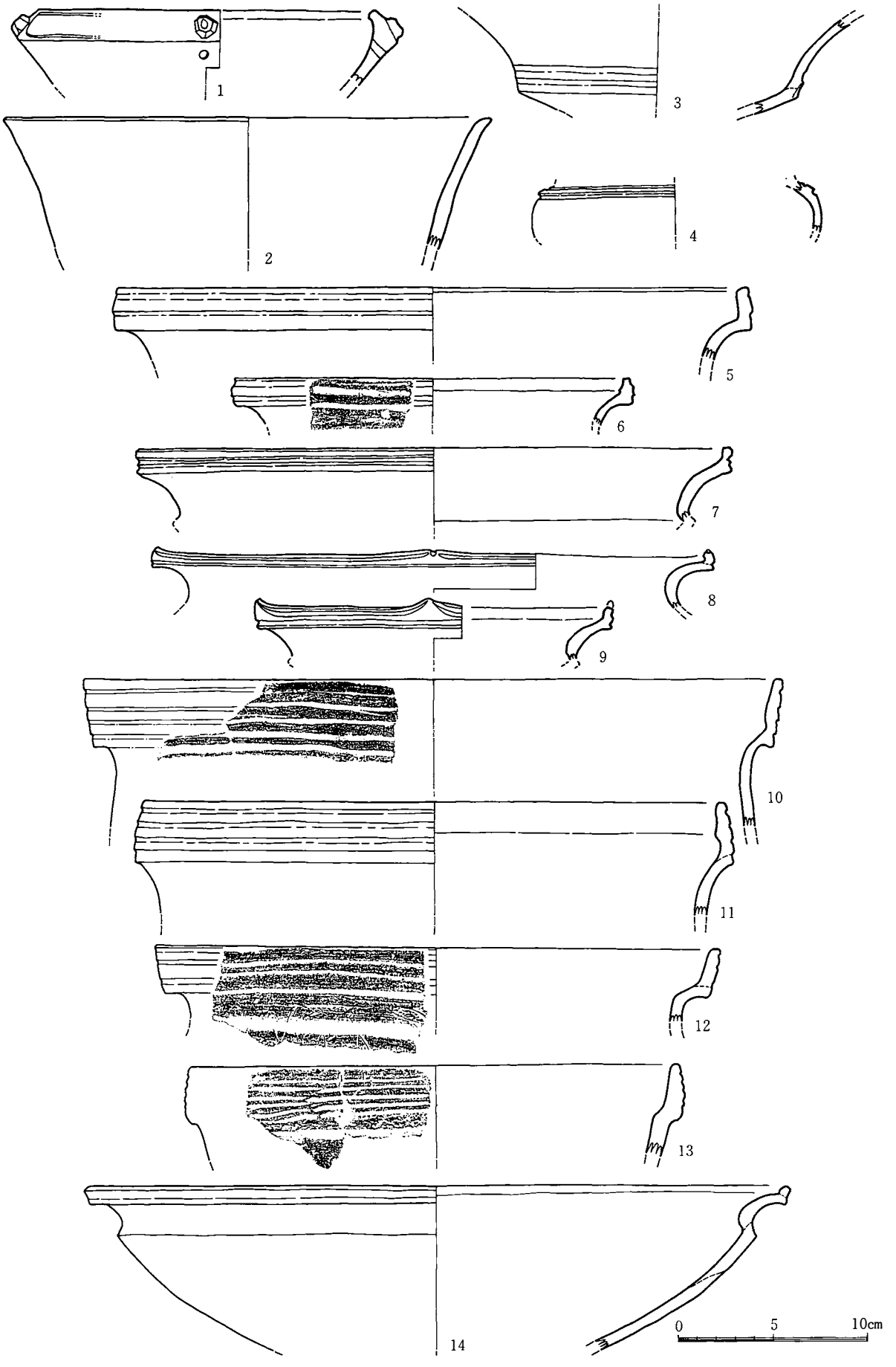
E－5類も少なく3点のみである（48，49，323）。黒川式の器形で胴部上半の器形は壺形といってもおかしくはない。いずれも精製された胎土をしており、ていねいに磨かれており、器壁も薄い。色調も他の土器と異なっている。

F類は1点のみである。口縁部の平坦な端部は水平な口縁部を連想させるが、小破片のため、F－1かF－2類かの判断は困難である。

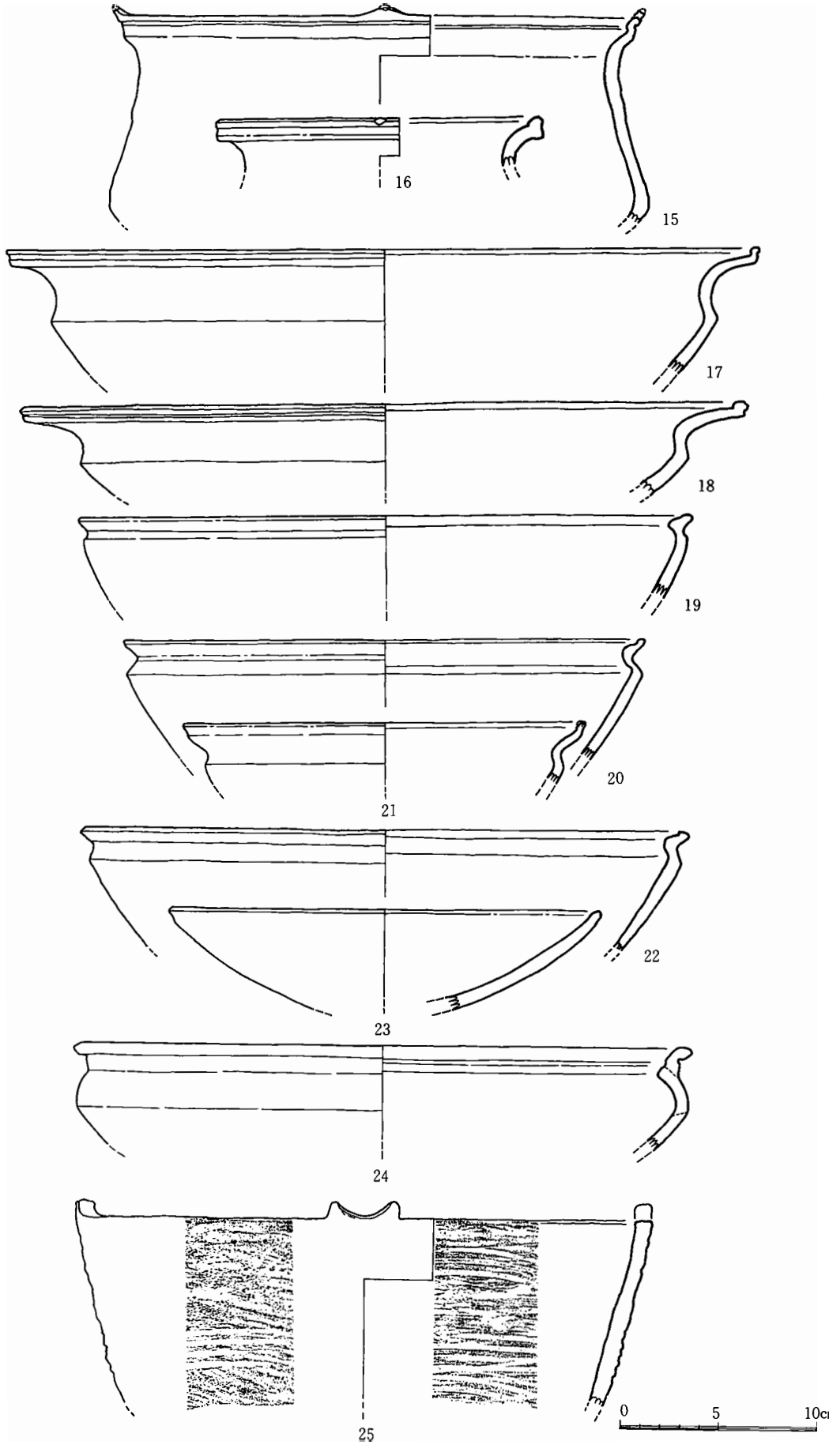
高坏形土器は少なく、5、6の2点だけである。いずれも2本の平行沈線文を口縁部にめぐらし、4ヵ所において反転させている。4ヵ所には粘土を付け足して意味は不明であるが、何らかの意匠を示す粘土の飾りを付けている。三万田式とする。

【D調査区】（第64図～第70図）

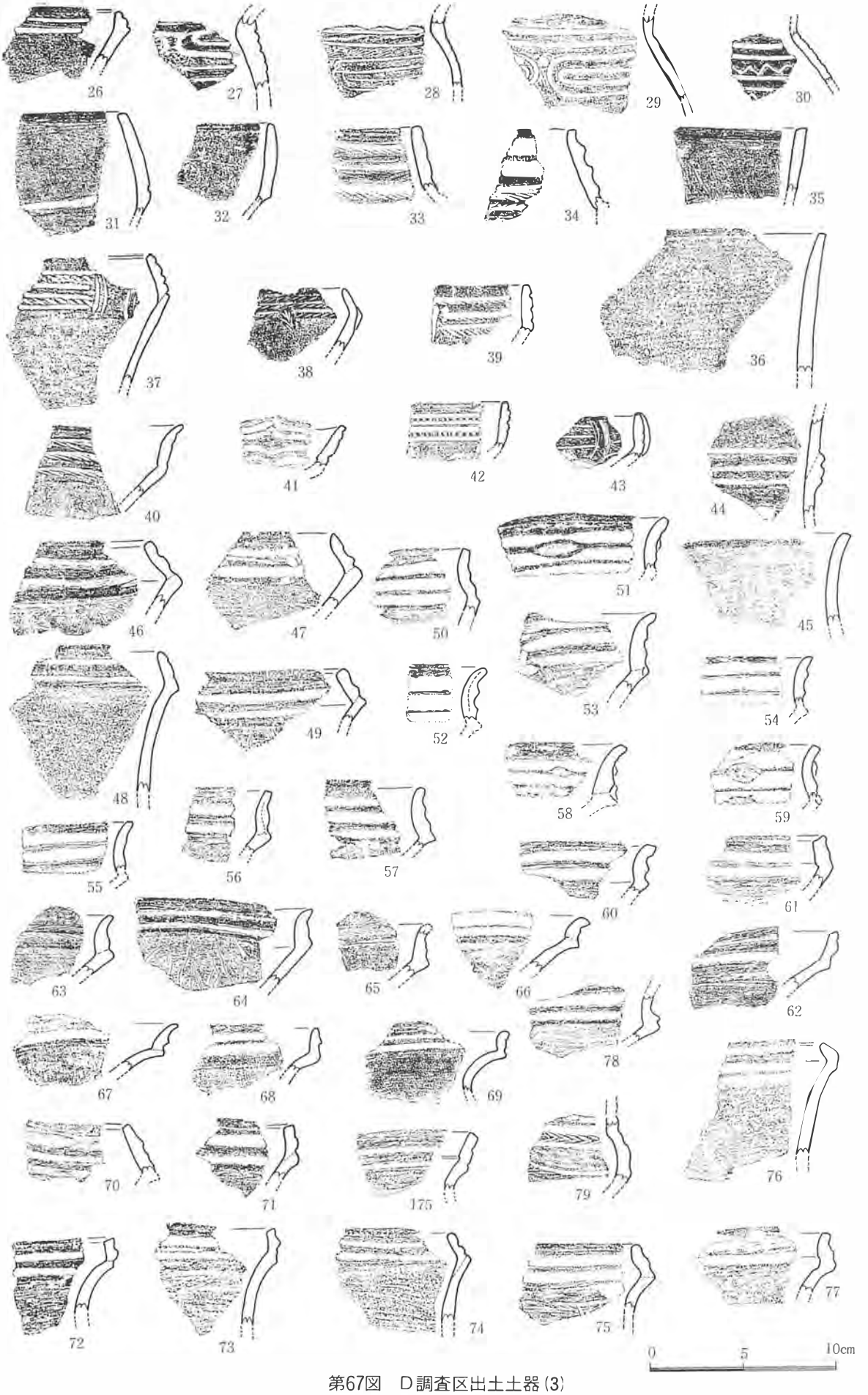
この調査区は先述したように古墳時代以降の住居跡が造成された整地層の上に築かれている。すなわち、整地層のなかには古墳時代以前の遺物が混在し、しかも周辺地区からの遺物もたくさん混入している。したがって本来この地区から出土している遺物の摘



第65図　D調査区出土土器(1)



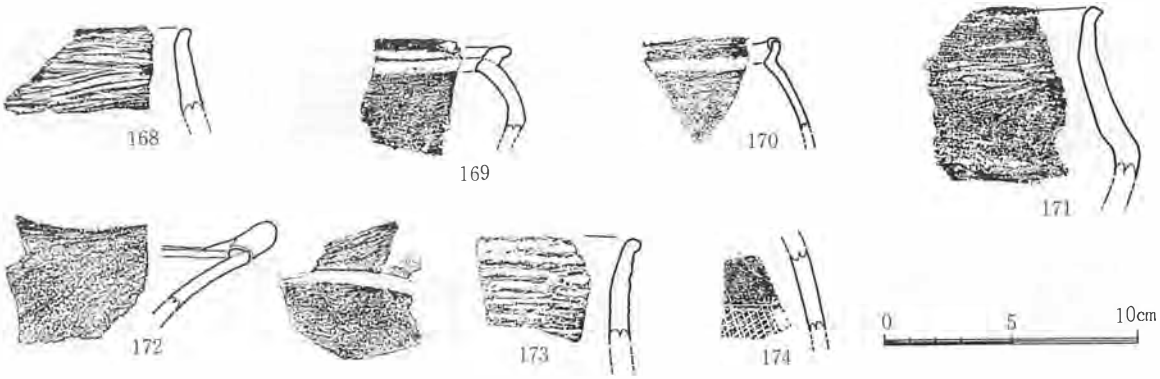
第66図　Ｄ調査区出土土器 (2)



第67図　D調査区出土土器(3)

第68図　Ｄ調査区出土土器(4)

第69図　D調査区出土土器(5)



第70図　Ｄ調査区出土土器(6)

出は難しいことになる。ただ、柱穴は他地区に劣らず多数存在するし、そのほとんどが縄文時代後期から晩期にかけてのものと考えられることから、当地区出土として提示する土器の様相は本来の様相とそれほどかけ離れたものではないと考えられる。当調査区においては太郎迫式、三万田式、鳥井原式、御領式、天城式、古閑式、黒川式が見られるが中心となるのは鳥井原式以降の土器形式である。そのなかでも、黒川式がまとまってみられるのはこの調査区だけである。

深鉢形土器としてはＡ－１、Ａ－４、Ａ－５、Ｂ－１、Ｃ－１、Ｄ－２類がみられる。

Ａ－１類は太郎迫式、三万田式が少ない地区だけに数がすくない。４、26～30がそれに当たる。４は頸部から口縁部がなく、胴部上半に平行沈線文を２本から３本引いている。胴部の器形からみれば太郎迫式である。また、28は磨り消し縄文のかわりに巻き貝背部を使用した疑似縄文が見られる。

Ａ－４類は御領式と天城式が中心となる。この類は鳥井原式と御領式の区別が難しい。特に口縁部が内傾するものは２本の沈線が引かれているが、沈線というよりは凹線のように幅広くなっているため口縁部幅が長くなり、鳥井原式との分離が困難になってくる。46、47などがそれに当たる。

また、Ａ－４類の天城式における口縁部外面の文様には二つの種類が見られる。一つはほぼ３本以上の沈線を手描きしているもので、もう一つは13、129～133のように口縁部に平行な条痕文を描いている場合である。口縁部の器形はほとんど変わらないため、手描き沈線か条痕文かを識別する必要がある。

Ａ－５類は少なく、15に示した１点のみである。口縁部外面の沈線が１本になっており、天城式であろう。ただ、器高が低く浅鉢形土器の範疇でもおかしくない。

Ｂ－１類は胴部からの形態がわかれば型式がはっきりするが、口縁部の小破片のみの出土であり、特徴的は明確には現れていない。ただ、口縁端部や傾きの状況から、２、36、185、119など鳥井原式から天城式にかけてみられるようだ。35は口縁部まで外傾し直行しており、三万田式であろう。

Ｃ－１類とＤ－１類はともに当調査区ではまとまって見られた。おそらく、ワクド石遺跡での黒川式の中心地帯と考えられる。

Ｃ－１類としては25、151、152、159～163、165、166、168、173が見られる。内外面とも貝殻条痕文で調整されており、調整は粗い。なお、25には蝶ネクタイ状の突起が口縁端部の４ヵ所に付けられている。また、151、152には蝶ネクタイを半分に割った突起が口縁端部に付けられている。

Ｄ－１類としては153～159があげられる。器形や調整はＣ－１類と全く変わらないが、口縁端部直下かその近くに凸帯を１条めぐらしたもので、刻み目はない。このＤ－１類はいままであまり知られておらずどの型式に入れるべきか迷うところである。黒川式に入れておく。

浅鉢形土器としてＡ－１、Ｂ－１、Ｂ－５、Ｃ、Ｄ、Ｅ－１、Ｅ－２、Ｅ－３、Ｅ－４、Ｅ－５類が見られる。

Ａ－１類は１のみである。口縁部を４分割する部分にボタン上の突起がつけられ、その部分を境に口縁部をめぐる２本の沈線が反転しつながっている。おそらく太郎迫式であろうが、高坏形の可能性もある。

Ｂ－１類も数がすくなく、４点である。口縁部外面に文様帯があり、38、39、43は沈線文の間に刻み目や細線羽状文を描いている。42は「ノ」の字状の突起が付けられ、それを境に三本の沈線が反転している。43、42は太郎迫式、38、39は三万田式である。

Ｂ－２類は全て鳥井原式のものであり、63、65は細線羽状文が描かれる。なお62、87、88は御領式に当たる。

Ｃ類は104のみである。ただ三万田式か鳥井原式かの判断は難しい。

Ｄ類は３のみである。

Ｅ－１類は御領式と天城式を中心に見られる。器高に対して口径の小さいものは少なく、御領式では69、80、84であり、天城式では16、124である。

Ｅ－２類は御領式を中心に見られる。90～93は器高に対して口径の小さいものである。

Ｅ－３類は128のみである。

Ｅ－４類は古閑式に特有の器形であり、19～22などのＥ－４－ａ類と149、150などのＥ－４－ｂ類がある。

Ｅ－５類少なく、24、169がある。

埦形土器23は口縁部に向かって胴部の膨らみがなく直行するものである

注口土器として72がある。細線羽状文が描かれる部位から見ると三万田式とみられる。

なお、174の格子目文は黒川式の浅鉢に伴うものと考える。

【Ｅ調査区】（第71図～第86図）

当調査区もＤ調査区と同様に調査区北西部は土器を含んだ二次堆積土となっている。この層はＤ調査区と同様に古墳時代の住居跡の造営に伴って整地されたものと考えられる。ここに提示する土器は、そのほとんどがこの二次堆積層出土のものである。したがって、これらの土器はほんらいＥ調査区にあったものとは言い切れず、周囲、特に東側に本来の位置があったものとすることができる。

器種としては深鉢形土器、浅鉢形土器、埦形土器、注口形土器、高坏形土器が出土している。型式名でいえば太郎迫式、三万田式、天城式が数多く出土する傾向にある。また、古閑式、黒川式はほとんど出土しない。

深鉢形土器としてはＡ－１、Ａ－２、Ａ－３、Ａ－４、Ｂ－１、Ｃ－１、Ｄ－２類が見られる。

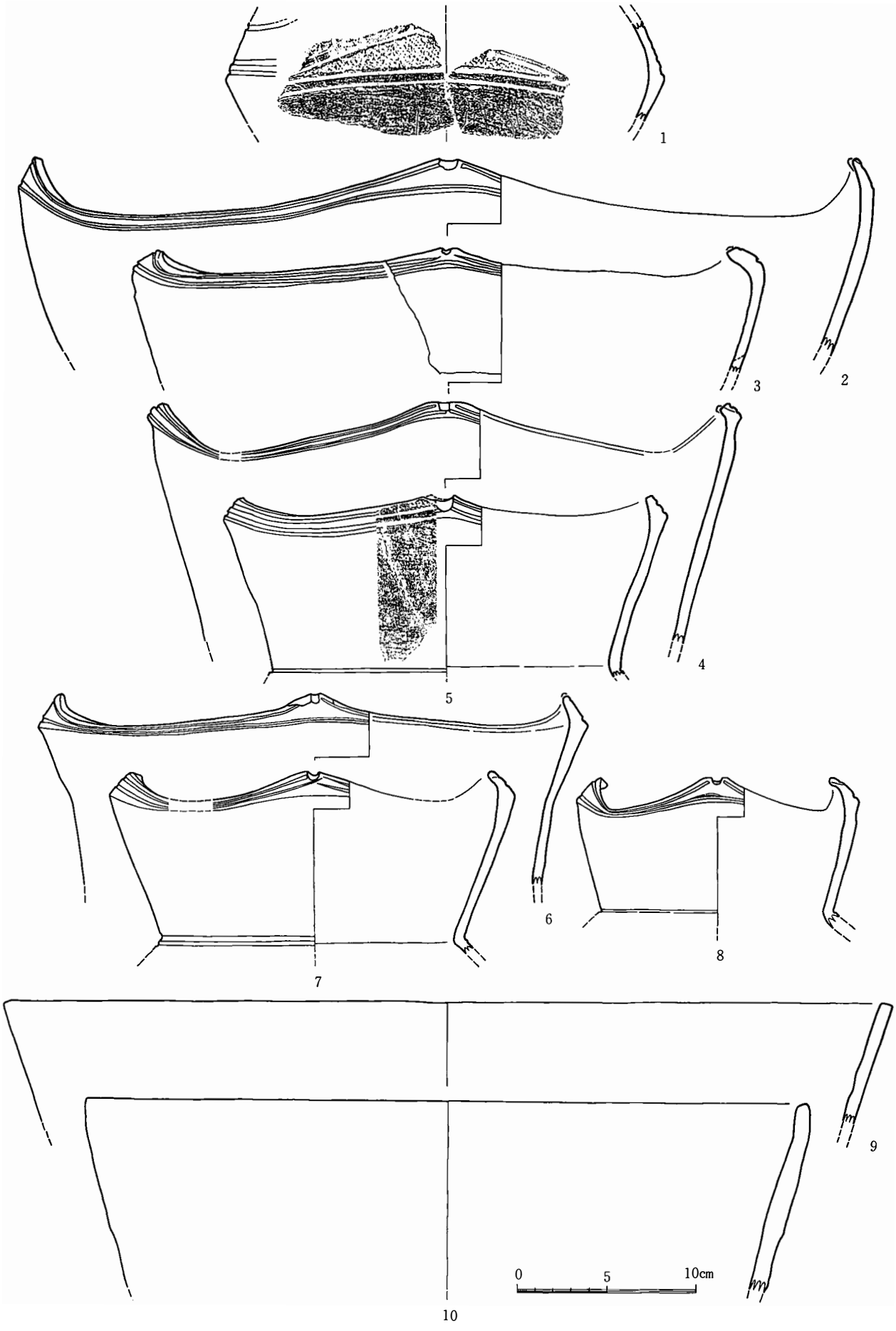
Ａ－１類は口縁部と胴部が確認される（２～８，15～28，89～115，118～146，148～150，153～162）が、口縁部から胴部にいたる資料がなく、口縁部文様帯と胴部文様帯との関係が不明である。ただ、口縁部文様帯では磨り消し縄文が残されていないものの割合が大きく、胴部文様帯では刺突列点文が刻まれないものの割合が大きくなっている。

Ａ－２類は太郎迫式と考えられるもの（29，30，163～174）と三万田式と考えられるもの（38～40，42，43，195～197，200～202，204，253，396，397）とがある。胴部破片は厳密にはＡ－２類といえるかどうか不明であり、推定の域をでない。なお、42、43は器形的には44に近くＢ－１類にしたいところであるが、44が特殊な土器のため、一応このＡ－２類の胴部になるものと考えておきたい。

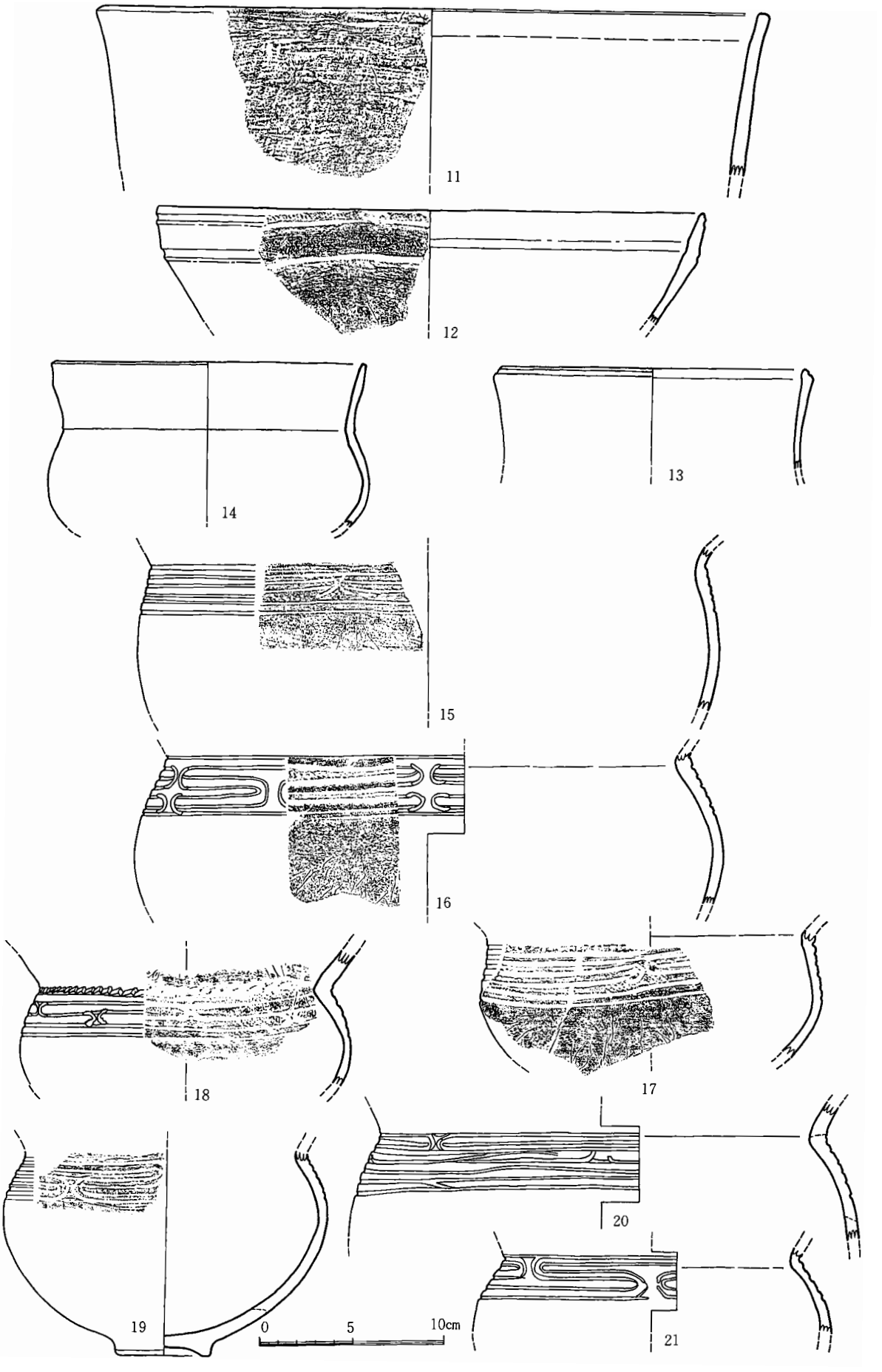
Ａ－３類は小破片のためＡ－２類との区別は難しい。また、この類の胴部と思われる資料は今のところ明確なものはなく、Ａ－１類の胴部をこの類の胴部と想定してもよさそうである。Ａ－３類とおもわれるものは206～210、214である。

Ａ－４類は今まであまり知られていなかった三万田式のものがかなり出土している。31～35、41、192、193、221～224、227、228、231～237、288、386、389、390がそれに当たる。口縁部と胴部との関係は両者をつなぐ資料がないため不明である。口縁部は外湾しながら内傾するものが多く、浅鉢形土器と区別するのは難しいが、傾きから深鉢形土器の口縁部とする。なお、192には沈線と沈線との間に二枚貝口唇部による疑似細線羽状文を描いている。

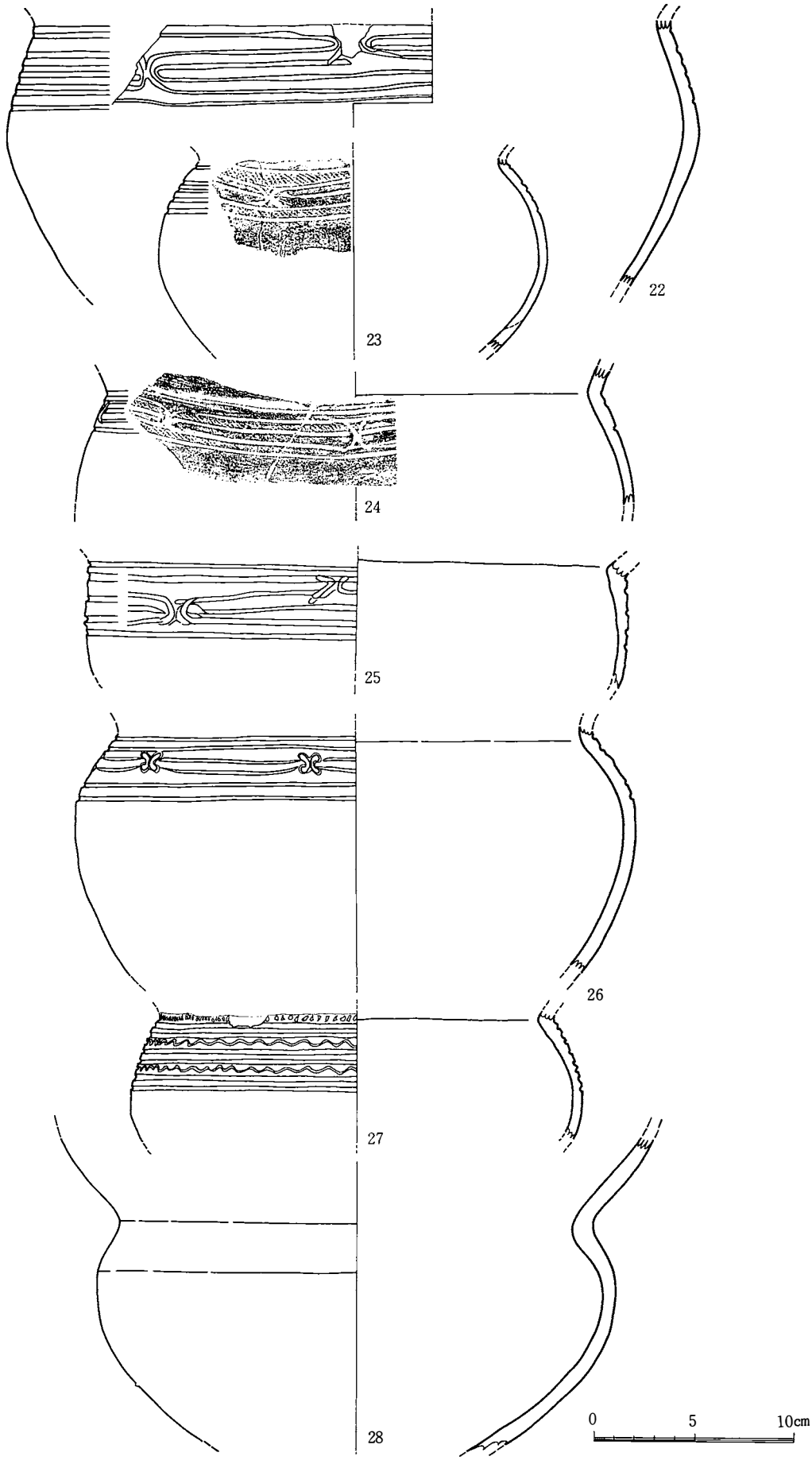
Ｂ－１類が小破片である場合、頸部から口縁部まで直行する特徴を持つ太郎迫式、その特徴に口縁部近くでわずかに内傾する器形を付け加える三万田式以外は傾きがはっきりしないと型式を判断するのは困難である。太郎迫式として９、10、11、13、14、175、215、216をあげておく。また、三万田式として36、37、211～214、218、218をあげておく。その他は明確でない。なお、44は平行にめぐる凹線文の



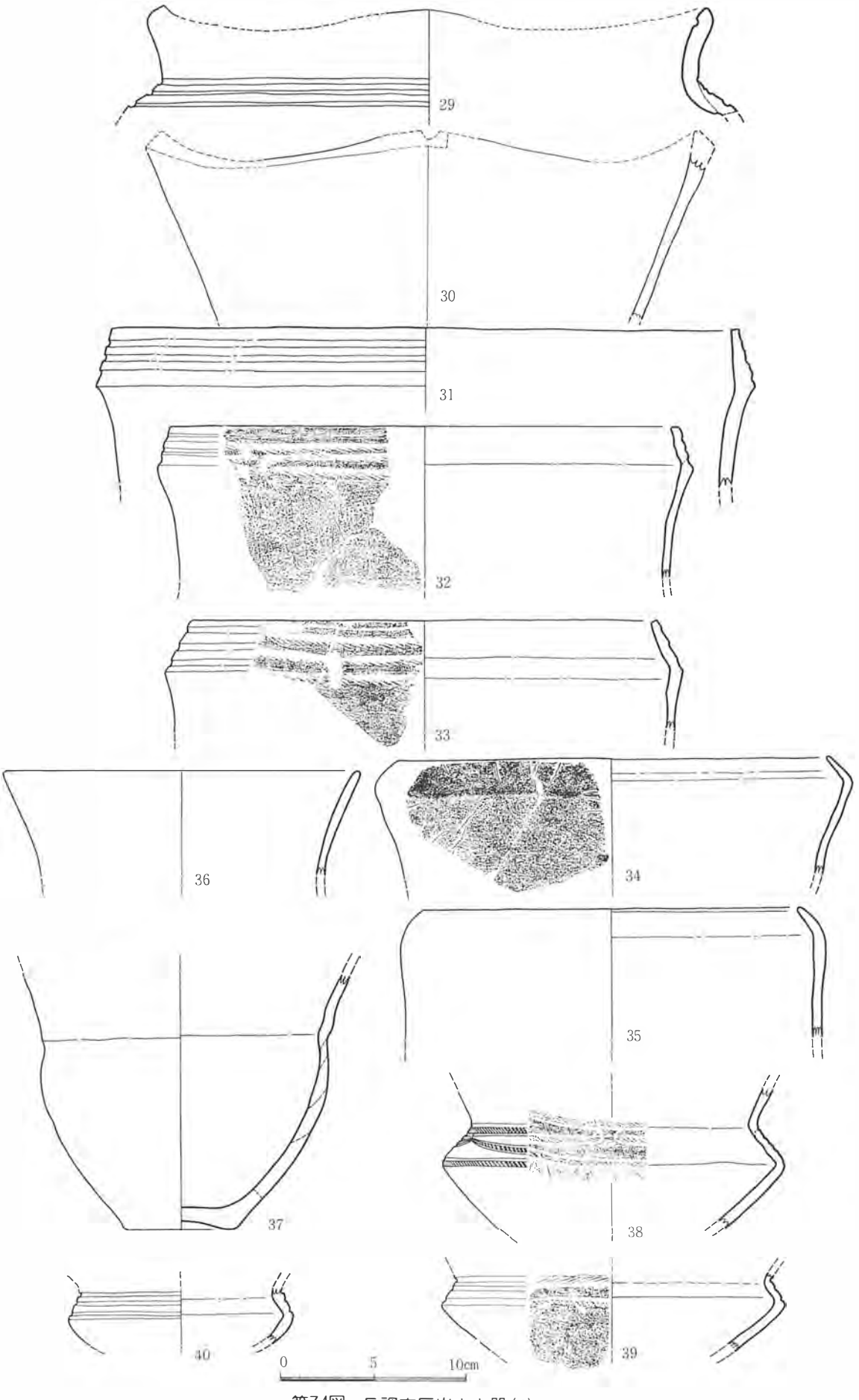
第71図　Ｅ調査区出土土器(1)



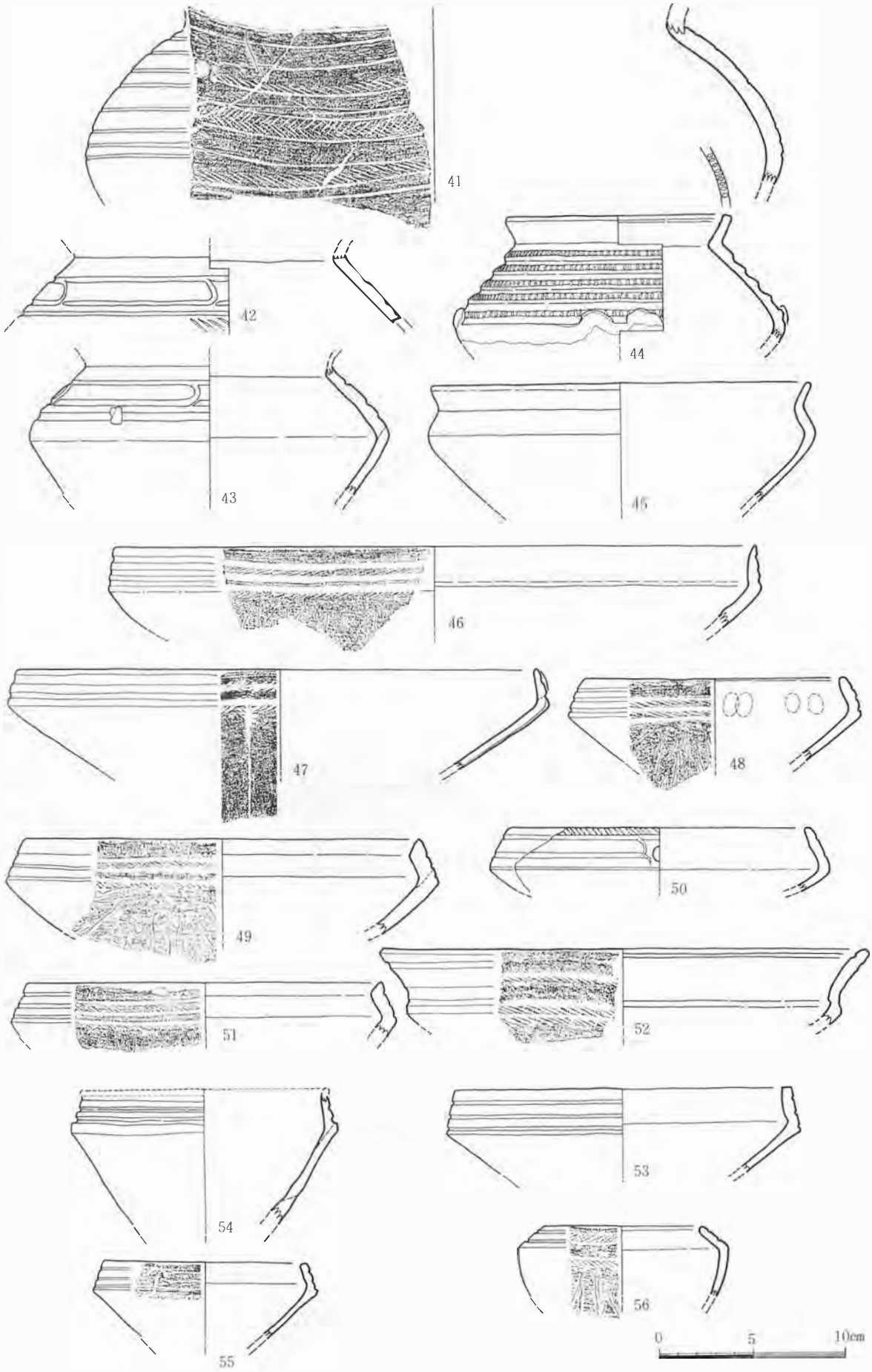
第72図　E調査区出土土器(2)



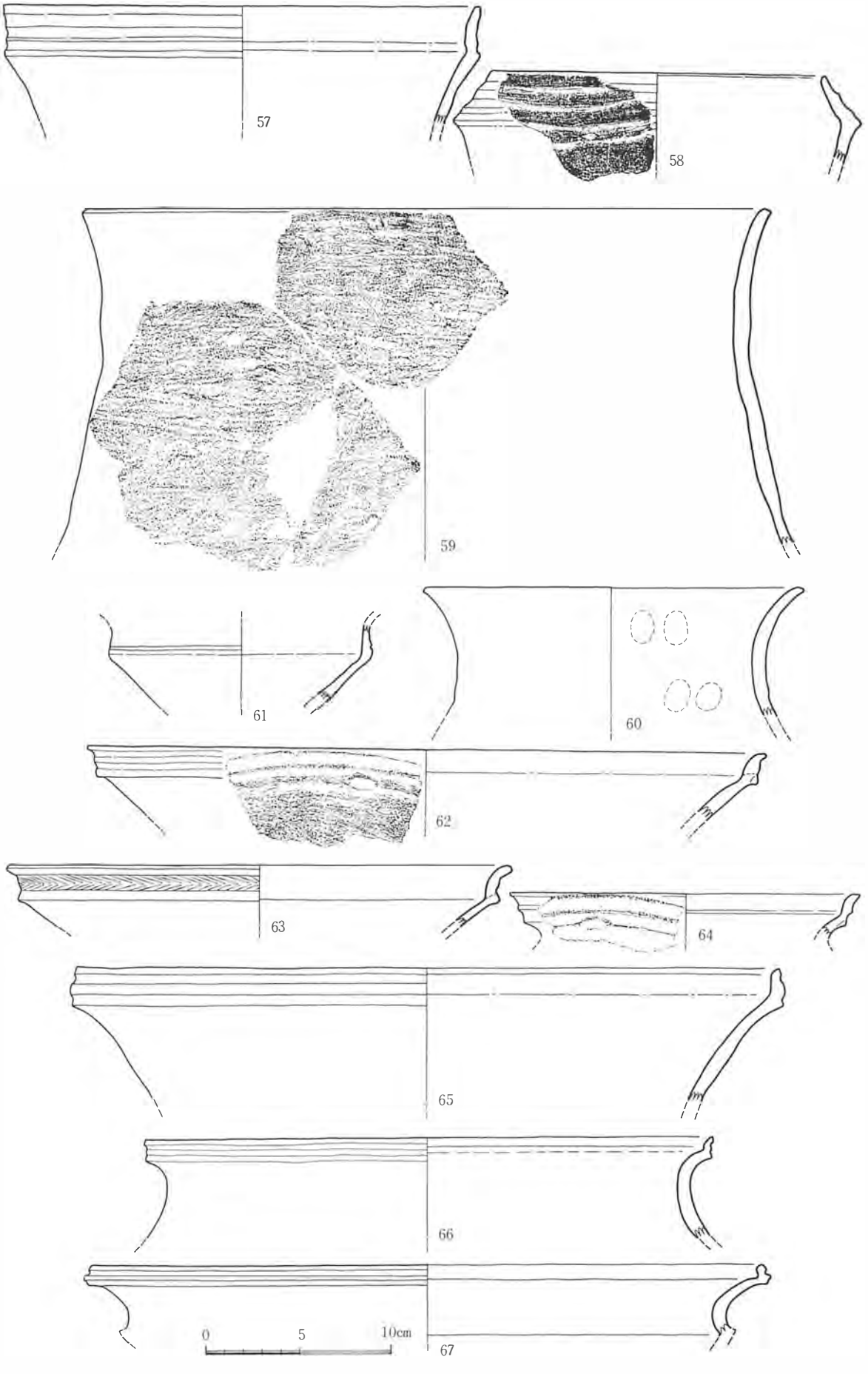
第73図　Ｅ調査区出土土器(3)



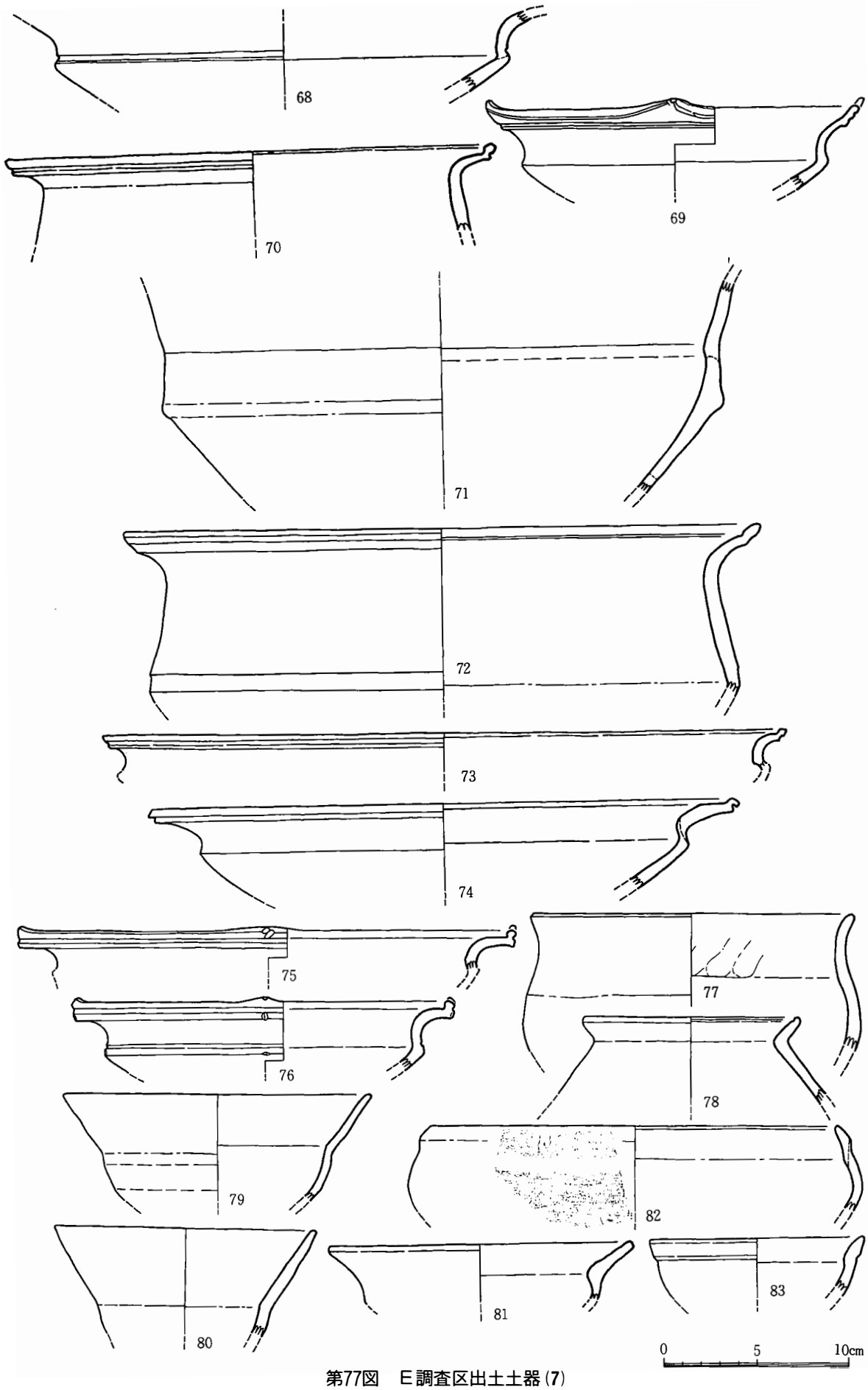
第74図　E調査区出土土器(4)



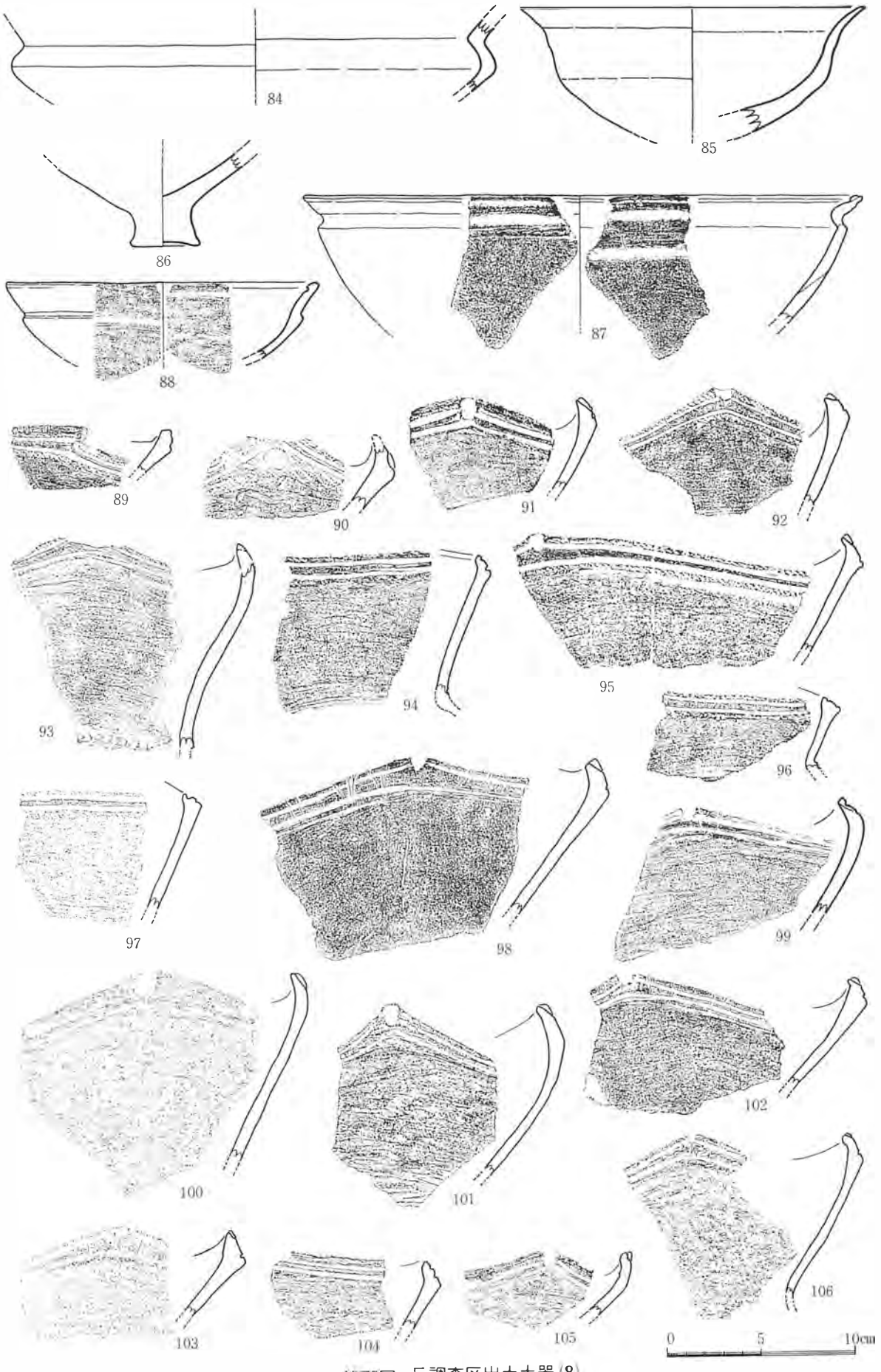
第75図　Ｅ調査区出土土器(5)



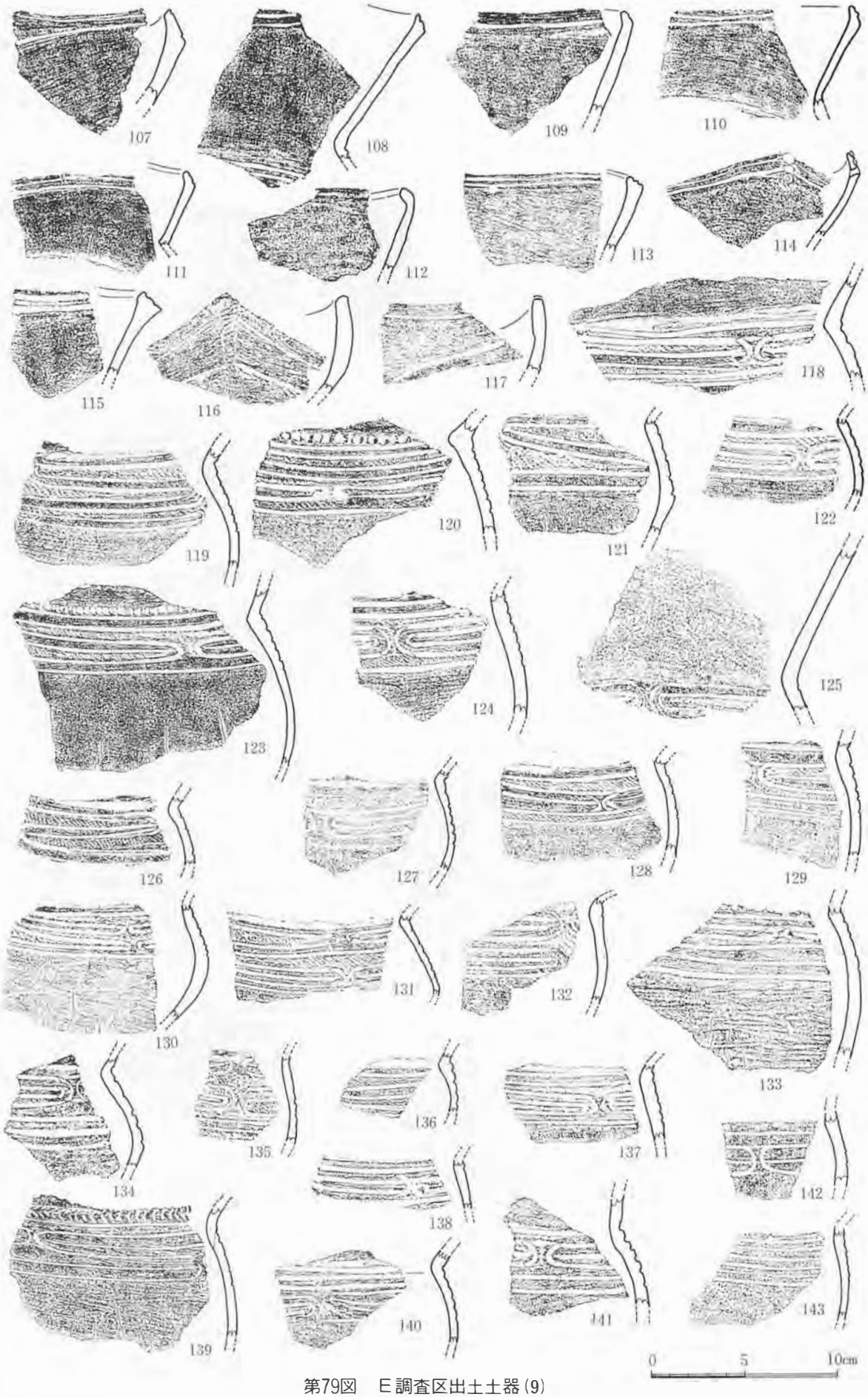
第76図　E調査区出土土器(6)



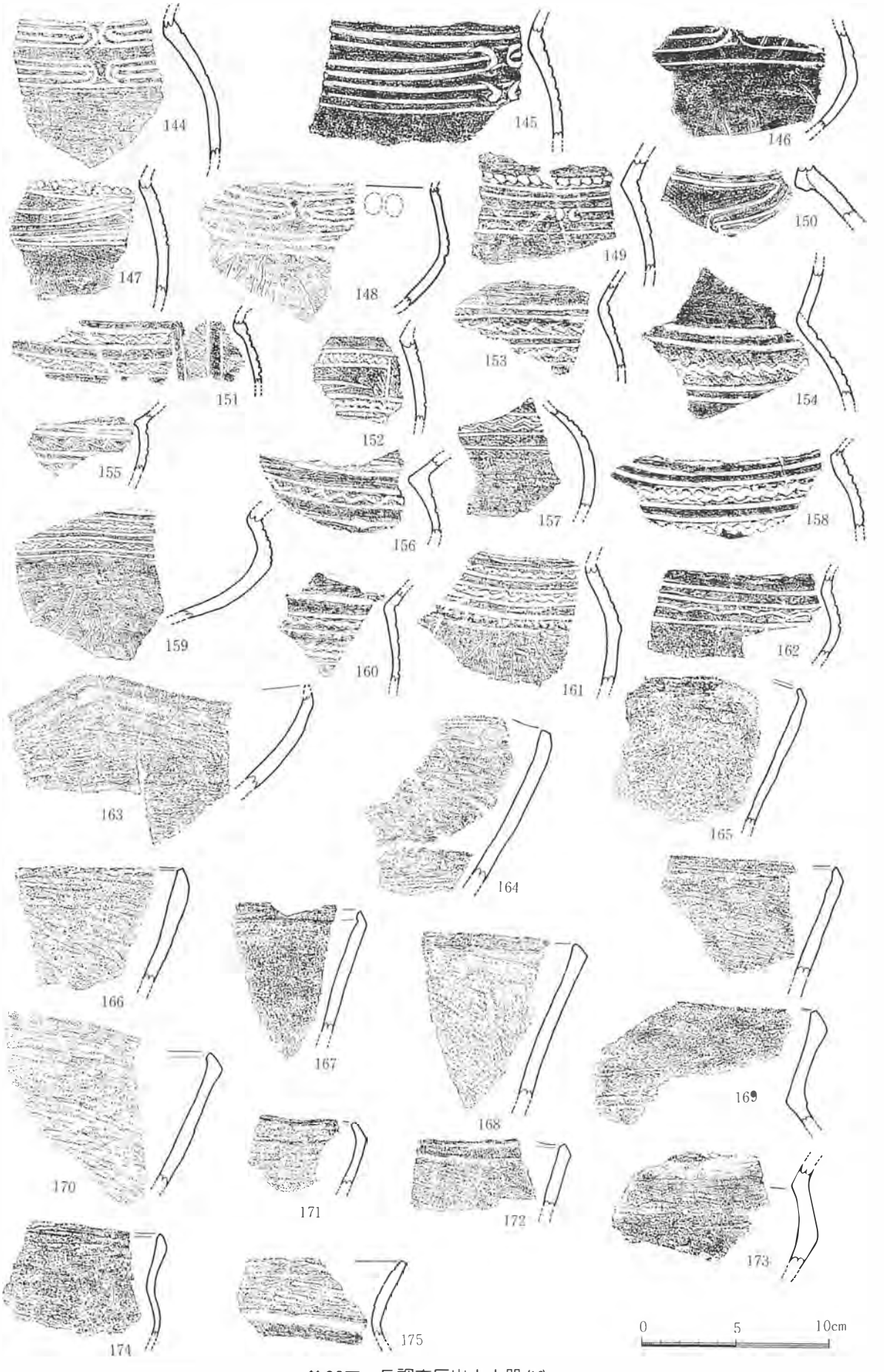
第77図　E調査区出土土器(7)



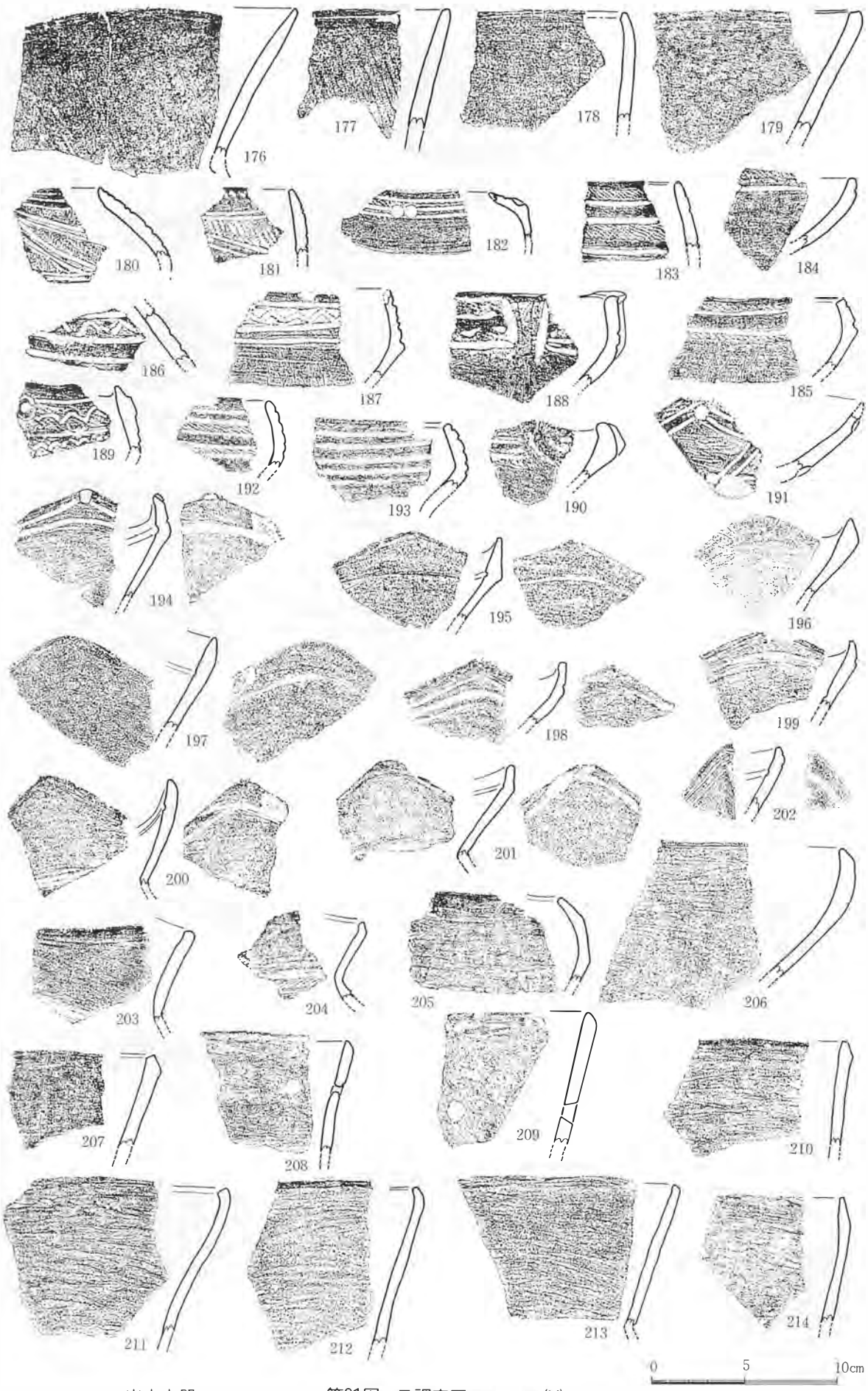
第78図　E調査区出土土器(8)



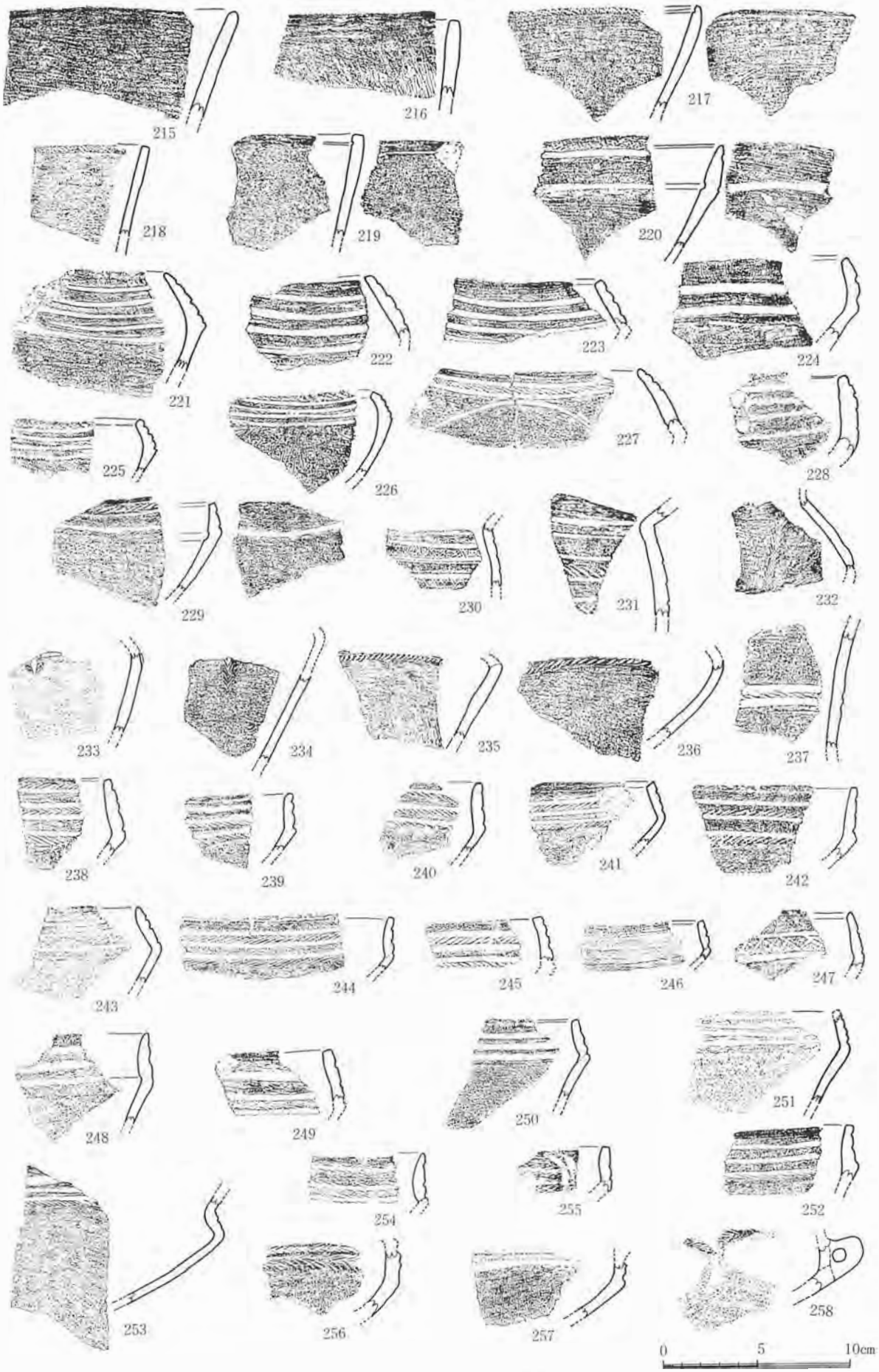
第79図　Ｅ調査区出土土器(9)



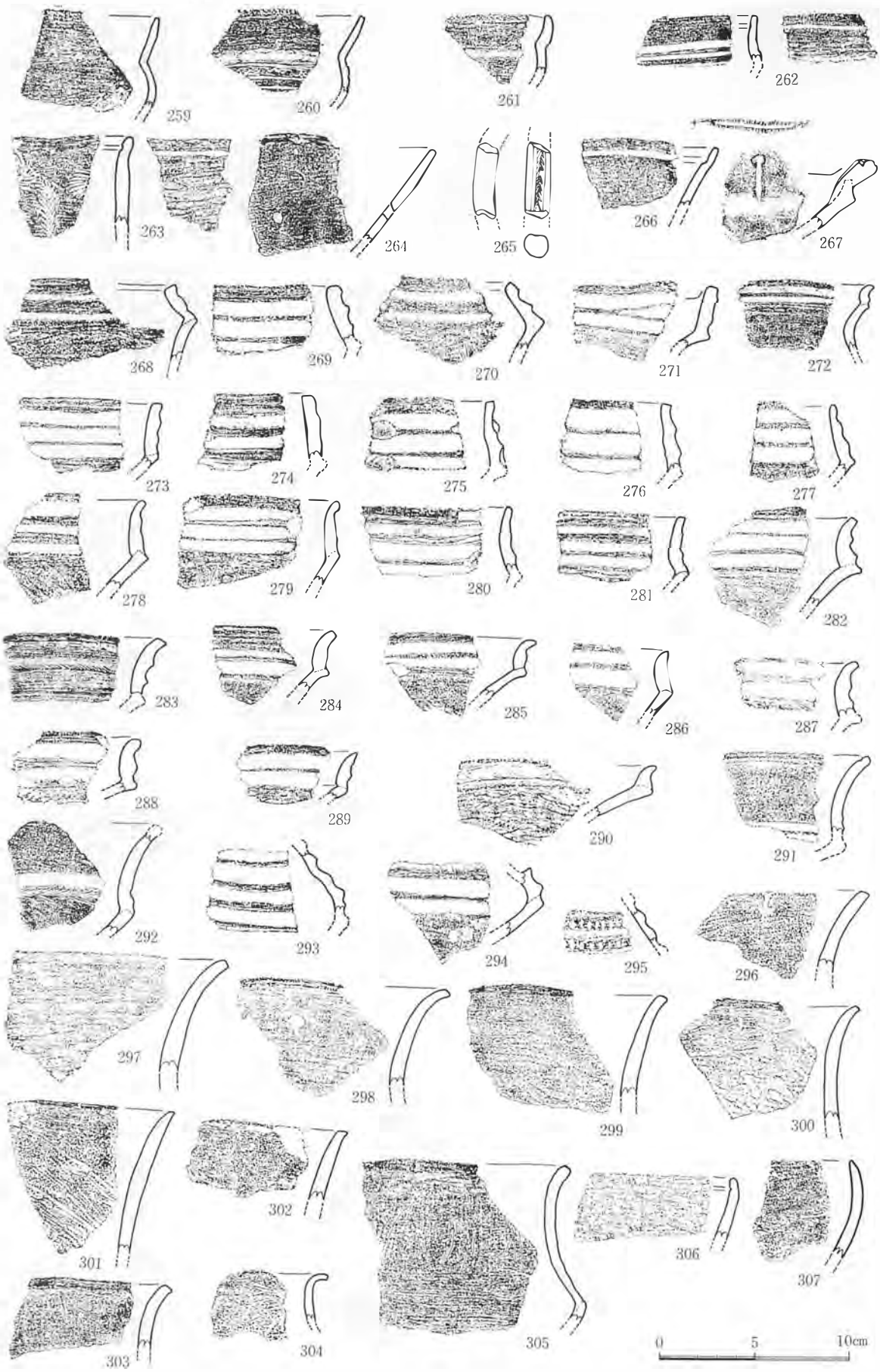
第80図　E調査区出土土器(10)



出土土器　　第81図　Ｅ調査区　(11)

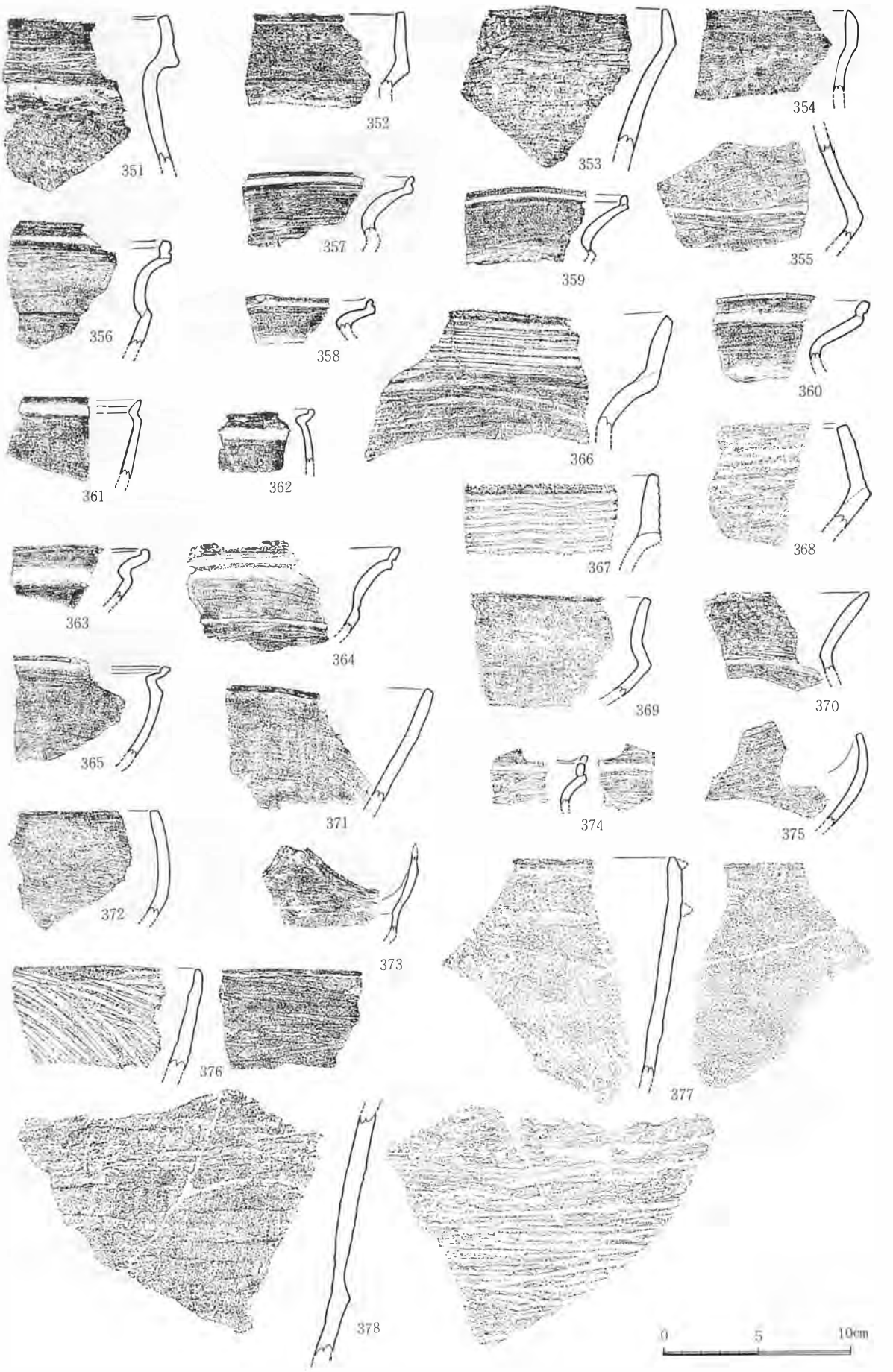


第82図　E調査区出土土器(12)

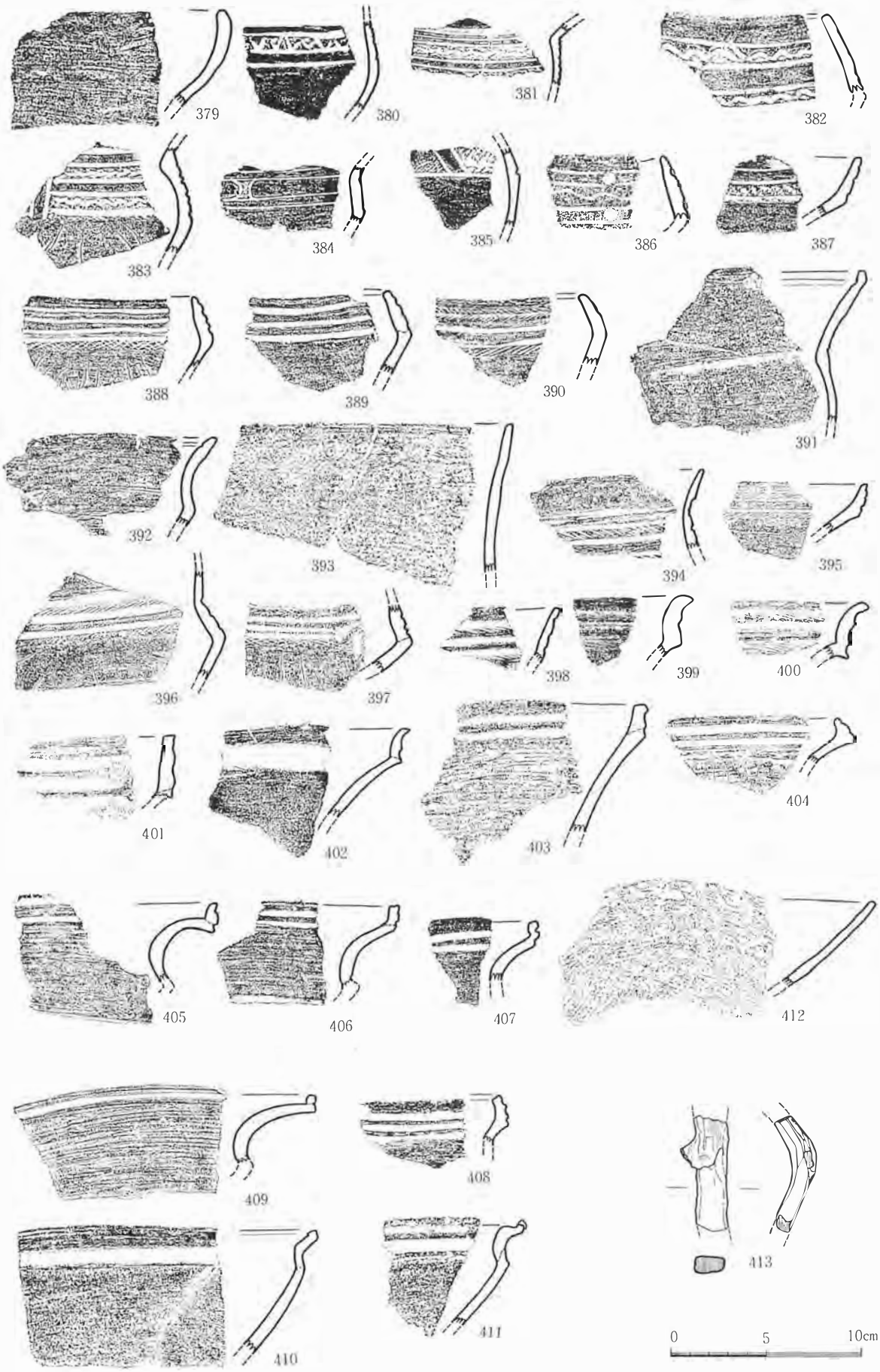


第83図　Ｅ調査区出土土器(13)

第84図　E調査区出土土器(14)



第85図　Ｅ調査区出土土器(15)



第86図　E調査区出土土器(16)

盛り上がった部分に刻み目を入れ、胴部の４ヵ所に円形の粘土をはりつけるなど通常の土器とは異なっている。おそらく、注口土器などの特殊な土器と思われる。78は不明である。

Ｃ-１類は少なく、376のみである。外面を貝殻条痕文で粗く調整しており、内面は磨いている。黒川式のものとは調整の面で異なっており、型式は不明としておく。

Ｄ-２類として377がある。凸帯が剝落しており、本来の形は不明であるが、口縁部外面に２条の凸帯とめぐらすものと考えられる。器面調整は内外面とも粗い。器形は黒川式になると思われる。

浅鉢形土器としてはＢ-１、Ｂ-２、Ｃ、Ｄ、Ｅ-１、Ｅ-２、Ｅ-４、Ｆ-２類が認められる。

Ｂ-１類（46～51，54～56，238～247，249～251，255）は三万田式のものがほとんどである。基本的に沈線は３本となっている。文様は細線羽状文が沈線と沈線の間に描かれている。

Ｂ-２類（62～64，248，252，254，273～290，389～402）は鳥井原式がほとんどである。３本凹線文と２本凹線文が基本的にあり、その間に細線羽状文や凹点文が描かれている。なお、331、332は御領式である。

Ｃ類は三万田式と考えられるものが262、392であり、鳥井原式と思われるものが52、292である。291はどちらか不明である。

Ｄ類は61のみである。

Ｅ-１類は御領式（67，326～330，405～407）、天城式（68，73，74，356，357，359，364，409）を中心として見られる。鳥井原式は272のみである。鳥井原式の口縁部外面の凹線文、御領式の２本の沈線文、天城式の１本の沈線文の差は明確に区別できる。

Ｅ-２類もＥ-１類と同様の傾向を示す。Ｅ-２類は器高に対して口径の割合の小さいものが目立つ。

鳥井原式として271、御領式として69、318、319、320、323、324、天城式として75、76、358、374がある。

Ｅ-４類は若干出土している。361～363、410、411であり、古閑式に当たる。

Ｆ-２類として373、375がある。古閑式であろう。

椀形土器の数は少なく、傾向はつかめない。三万田式として263、古閑式として264、412がある。なお、263は椀形になると考えられるが通常三万田式では見られない器形である。細線羽状文による文様がみられる。

注口土器として明確にわかる資料はないが、胴部破片と思われるものが３点出土した。いずれも細長い細線羽状文がみられ、鳥井原式と考えられる。

高坏形土器も数は少なく、４点出土した。資料数が少なく、型式変遷は確立していないが、116を太郎迫式、190、267を三万田式にしておく。なお、267は把手付きのもので外面に細線羽状文が見られる。また、191は凹点文から沈線文が派生しており、西平式の文様構成と一致する。おそらく、太郎迫式と同時期か１型式古い段階であろう。

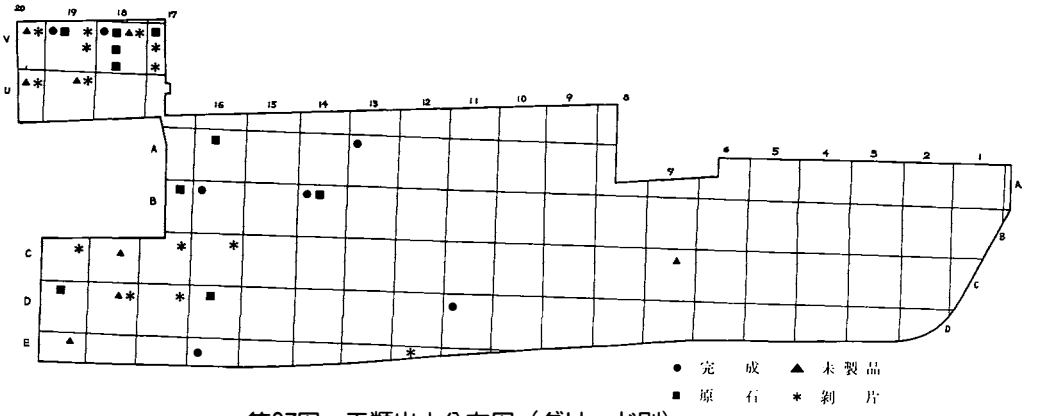
以上がＥ調査区の土器の様相であるが、この調査区では太郎迫以前の型式が若干見られるので、ここで触れておきたい。さきの高坏形土器もそうであるが、深鉢胴部として147、150、151、152、180、181、182もそのなかに含まれそうである。

151、152は地に縄文がつけられ、その上に鉤型の沈線文、鋸歯型の沈線文が引かれており、北久根山式に近い文様構成と考えられる。147、150、180、181は地に縄文をつけ、その上から弧状の沈線文を引くところから、辛川式の範疇でとらえられると思われる。182は高坏形土器のところでも触れたように、凹点から沈線が始まっており、文様構成としては西平式になる。

(7)　各調査区出土の僅少遺物

ａ　玉　　類（第88図）

ワクド石遺跡は玉類の生産が行われていたらしく、その原石から完成品までの過程を示す石片が出土している。ただ、それらは製作場の機能を持つような遺構から一括して発見されたのではなく、第87図に示したように遺跡から散発的に出土している。ただ、その中でも分布には特徴が見られる。Ｄ・Ｅ調査区は先述したように整地層の中に遺物がかなり含まれており、周辺地域からの遺物の移動の可能性が強い。



第87図　玉類出土分布図（グリッド別）

そのため、本来の玉類の分布からみると、D・E調査区は除いて考えるべきであろう。それらを考慮して分布を見ると、C調査区西側及び、E調査区東端部に分布の中心があるようだ。しかも、分布の状態から見ると住居跡単位に本来の分布があるように思われる。

玉類の内訳は原石11点、剥片16点、未製品７点、完成品８点である。原石はそれほどおおきくなく、ある程度荒割りした段階のものとおもわれ、原石ではなく、素材である可能性も否定できない。

剥片は玉の種類によって、素材として考えられるものと小さすぎるものとがある。小玉類は十分作りだされる大きさであるが、勾玉、管玉などには小さすぎるようだ。以下、図示した未製品、完成品について記述する。

１は藁科氏の分析によって糸魚川産の翡翠(硬玉)であることが判明した勾玉である。半円状に湾曲する形状をしており、頭部に二つの孔をあけている。大きい孔のほうは一方が小さくなる断面をしており、おそらく片側からのみの穿孔であろう。小さい孔のほうは孔の中央で狭まっており、両側からの穿孔と思われる。また、先端の孔の下側には孔と孔を結ぶ溝が彫られている。

２は異形であるが勾玉であろう。中央やや上位に比較的大きな孔があけられており、その孔の上下を区切るように溝が彫られている。

３は垂玉であろう。平面形は舟形をしている。上端近くに孔があけられ、孔と上端を結んで２本の溝が彫られている。また中央部表裏面に幅の広い溝が彫られている。

４、５は管玉である。５は中脹らみで身が短い。断面から両端からの穿孔であることがよくわかる。４は欠損しており全体の形状は不明であるが、孔には特徴がある。孔の出口でラッパ状に開いている。おそらく、類例があり、時期や地域的な特徴がつかめるものと思われるが、まだ知り得ないでいる。

６～８は勾玉の未製品である。６は整形、穿孔が終了し、磨きをかける段階と思われる。側辺中央部には３本の溝が彫られており、おそらく湾曲を付けるための整形であろう。７、８はまだ整形段階であり、孔の穿孔部が未完成である。

９は管玉の完成品と考えられるが、整形の際の面取り線が観察できるため、図に線を入れた。ただ、磨きはまだ不十分のようだ。中脹らみの形状をしている。

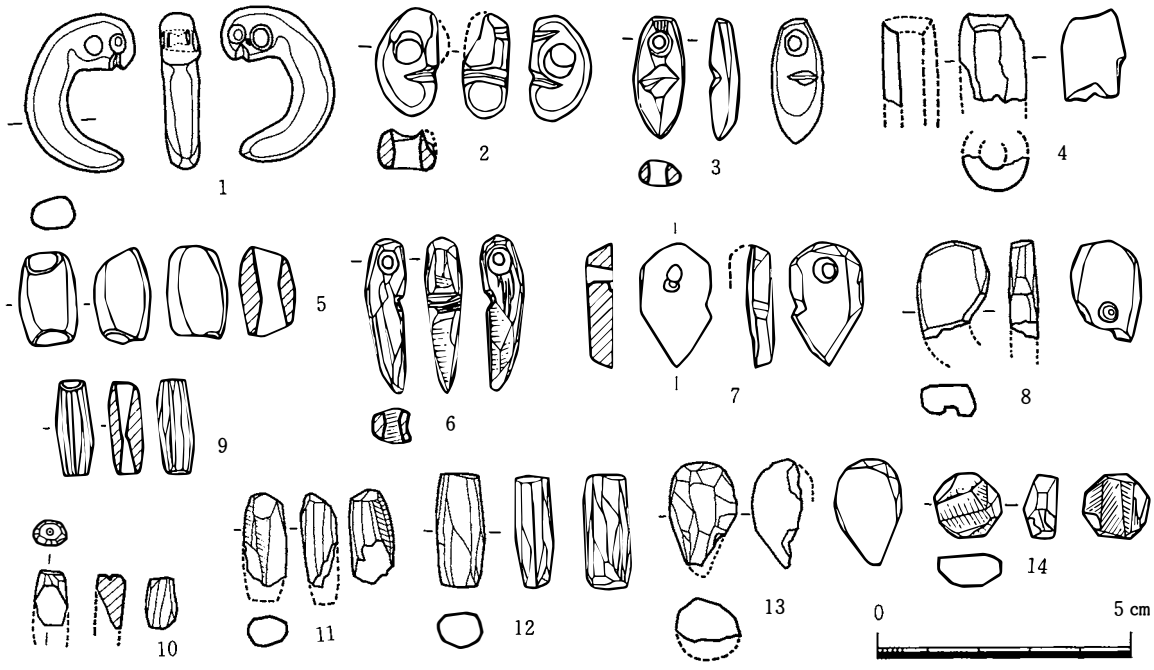
10～12は管玉の未製品である。10は穿孔の段階、11、12は整形の段階である。

13は身が短く太いため、４、５の形状の管玉の未製品と思われる。整形の段階である。

14は唯一小玉の未製品である。整形段階である。

原石から完成品までの資料からその製作過程を復元すれば、次のようになるものと考えられる。まず、原石を荒割りする段階、その原石に整形剥離を加え形を整える段階、砥石を使用し、整形をする段階、穿孔をする段階、磨きを加え完成品にする段階の５段階に分けられるようだ。

なお、９～12、14は肉眼観察で長崎産の翡翠と考えていたが、藁科氏の分析によれば分析結果が違い、他の地域の可能性が強くなった。また、これら以外の滑石に近い岩石は中央構造線沿いの変成帯で産出



第88図　各調査区出土玉類

する可能性が強いとのことであった。

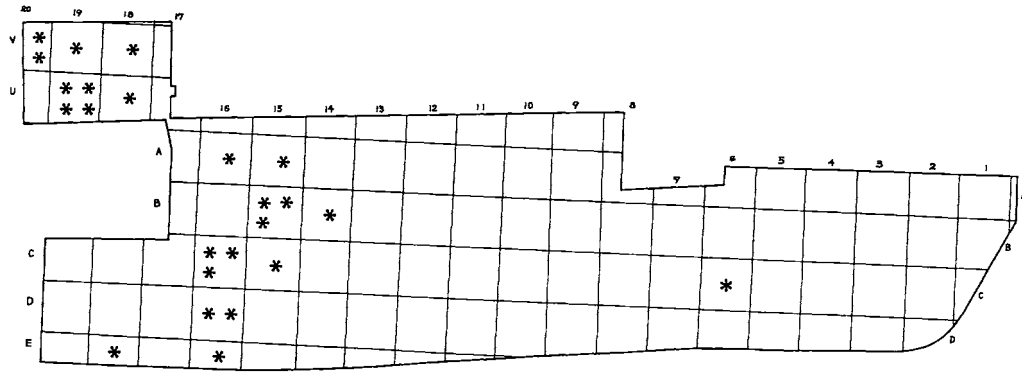
b　土　　偶（第90図～第91図）

今回の発掘調査調査では15点の土偶が出土している。いずれも破片であり、全体の姿をとどめたものはない。以下、各資料について紹介する。

１はＢ-15区pit２から出土したもので、頭部に体部の一部が残存した破片である。色調は、表が黒褐色、裏は黒色を呈している。焼成は良好で、胎土は砂粒多混で白色の粒が多い。表裏とも資料な研磨で仕上げられている。形態は頭部・体部ともに薄く作っている。顔面は縦の長さより横幅の方が広い。顔面には中央やや下に押点が一つあり、口を表現している。目眉や鼻の表現はない。両側には左右に少し窪めた部分があり、他の例のように突起ではないが耳を表現しているものと思われる。両側の耳から頭頂を経て２本の沈線が施文されている。後頭部には全く施文は存在しない。体部では、前面はほとんど特徴を認められないが、背面には周縁部を厚くしている。おそらく両肩を隆起させたものであろう。

２はＢ-14区SX01から出土した頭部破片である。調は黄白色をなし、部分的に淡黒褐色の部分がある。焼成は良好で、胎土は小砂を含む。仕上げはナデで、研磨の痕跡は認められない。顔面には緩やかな凹凸がある。上部に飛鳥状の目または眉とみられる表現があり、その下に押点で口を現している。頭頂から頭側にかけて、３本の沈線を施文している。この間には耳の表現はない。後頭部はやや凹凸があるだけで表下は存在しない。頸部の一部に木芯痕かとみられる縦長の植物質の痕跡が認められる。

３はＤ-６区縄文後期・晩期土器包含層より出土した頭部破片である。色調は黒褐色を呈している。焼成はほぼ良好であるが、顔面向かって右上の部分は焼成が悪く一部崩れている。胎土には黒色と白色の砂粒を含んでいる。形態は半球形をなし、突起を付して両耳とする。耳には貫通した刺突で耳孔としている。顔面部には両側に縦の沈線を各１本施文している。中央やや上には横長の小さな刺突を左右に各１個付けており､目の表現とみられる｡その下には小さな刺突が２つあり、鼻孔かとみられる。更にその下には刺突状の押点で口を表現している。額部には、鉢巻をしたように横位の帯状の施文がみられるが、中央から向かって右側にかけては欠損している。この施文帯は、上下に各２本のごく細い沈線を引き、その間にごく浅い斜行する短沈線を付している。斜行沈線で方向を異にしたものがあり、あるいは羽状文となるのかも知れない。後頭部は半球形の球面のままで、頭から後頭部にかけて縦の沈線を１本施文



第89図　土偶出土分布図（グリッド別）

しているのみである。この土偶は顔面装飾が他のものに比べると豊富である点で注目される。特に小刺突で鼻孔を表現しているのは珍しい手法である。

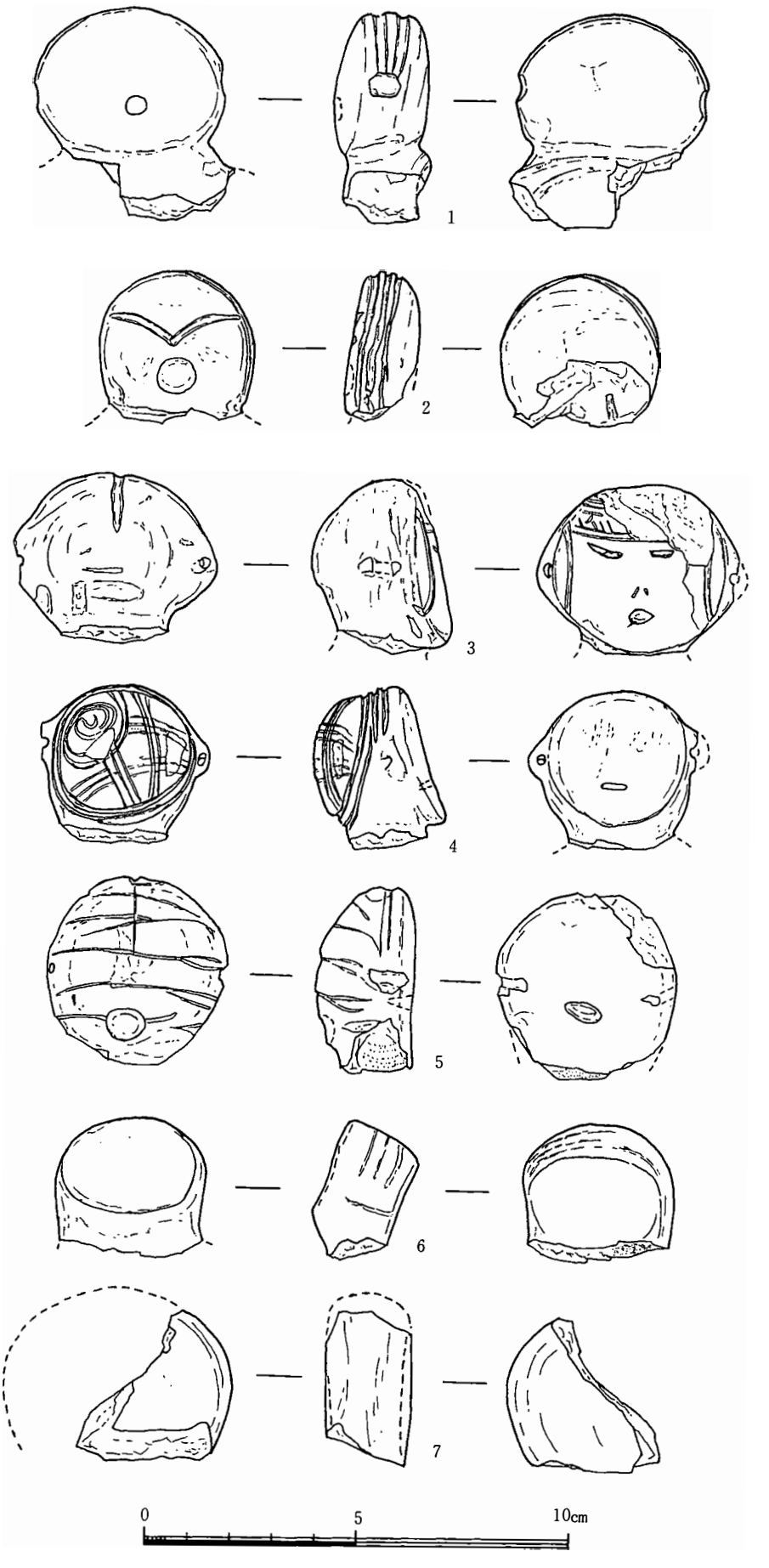
4はB-15区pitから出土した頭部破片である。色調は黒色から暗黄褐色を呈している。焼成はまあまあ良好で、胎土には砂粒を含む。形態は半球形をなし、突起を付して両耳とする。耳には貫通した刺突で耳孔としている。顔面には横長の小刺突で口を表現している。後頭部では、それを取りまくように2本の沈線がめぐり、頭頂から両耳にかけての部分にはさらに1本の沈線が加わる。後頭部の中央に刃3本単位のごく細い沈線を井桁状に施文している。また、その部分の向かって左上の部分には2本単位の沈線を渦巻状に施文している。この渦巻状の施文は頭髪を巻き上げているような表現に見えるが、中九州の土偶でこのような施文は他にはみられないものである。

5はV-19区縄文後期・晩期土器包含層より出土した頭部破片である。色調は黄褐色から暗黄褐色を呈している。焼成は暗黄褐色を呈した部分はあまりよくないようで、一部崩れている。頸部欠損部と後頭部下部の色調が同じで、二次的に火を受けたことが考えられる、焼成時に破損した可能性も考えられる。胎土には白色の小砂粒を少々含んでいる。形態は薄手の半球形をなしている。顔面には中央やや下に刺突による深い窪みがあり口を表現している。また左右の端ちかくには貫通する孔があり耳を現している。頭側から頭頂には押点状の窪みが一つ存在する。後頭部には横位に細沈線が5本施文されている。その下部には頭頂にみられたと同じような押点状の窪みが一つ存在している。このような窪みは、他の土偶の例では口を表現したものに多いが、この資料の場合は頭頂部と後頭下部にあり何を表現したものか不明である。頸部には頭部側が凸面となる剝離面が明瞭であるが、木芯痕は認められない。

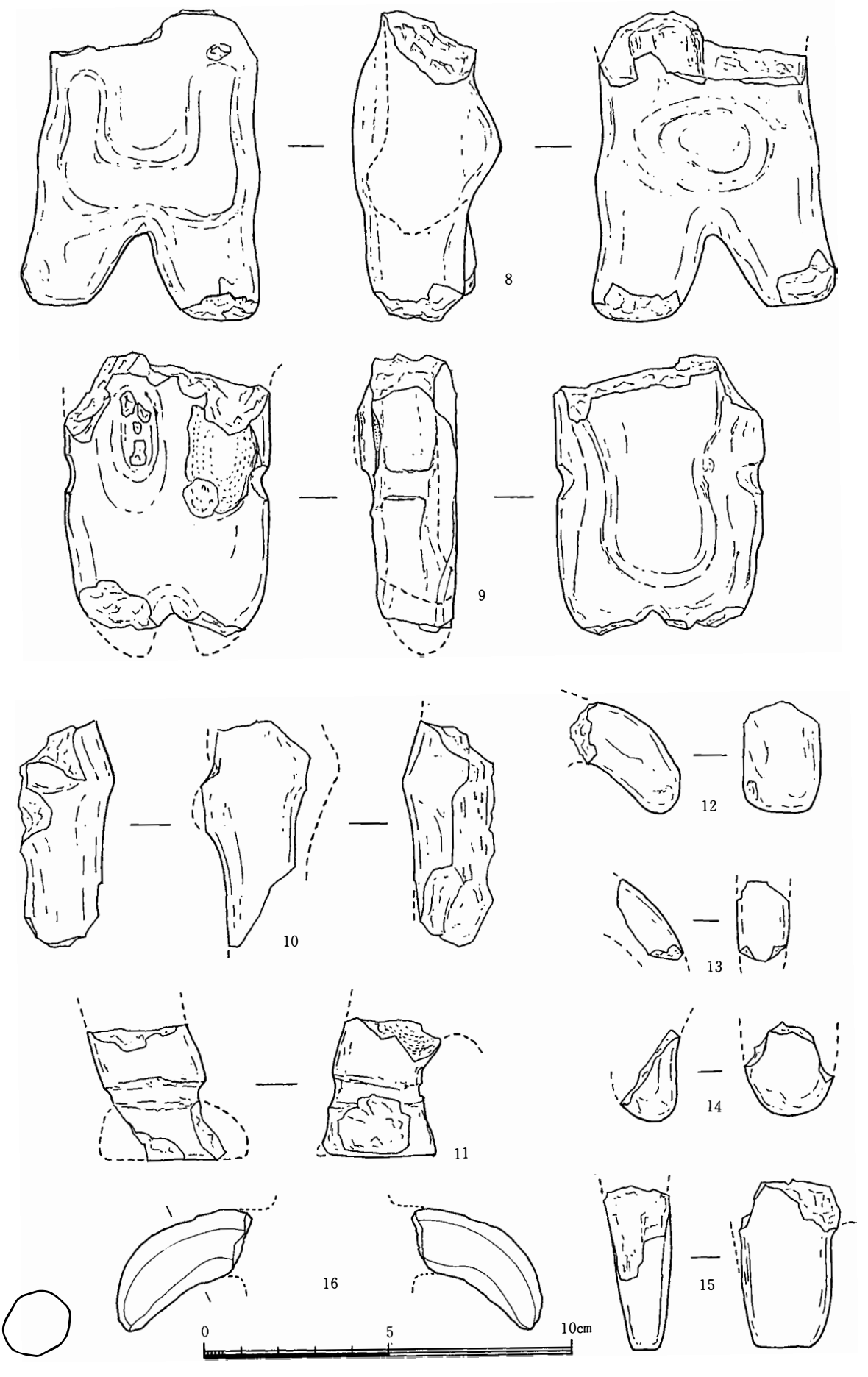
6はB-15区道路遺構より出土した頭部破片である。色調は黄白色から暗黄白色を呈している。焼成は良好で、胎土は小砂を少々混入したのみである。短い筒状の頭部に頸がついたような形態をなしている。顔面・後頭部共に何の表現もないが、頸部との角度からやや上を向いた方が顔面であろうと考えられる。頭頂部にはほとんど窪まない沈線状の線が3本みられる。頸部には一部に頭部側が小さな凹面をなす剝離面が観察される。

7はA-16区集石部一括より出土した、正円形よりやや楕円形に近い円盤状をなす土製品の一部で、おそらく土偶の頭部破片であろうと考えられる資料である。色調は黄褐色から黒褐色をなし、二次的に火を受けているらしい。焼成張り子で、胎土には小砂粒を含んでいる。一部の破片であり、表裏・上下など不明瞭であるが、一応のカーブから推測して側頭部として実測図を作成した。

8はC-16区イモ穴から出土した体部下半から両脚にかけての資料である。色調は淡黒褐色から暗黄褐色を呈している。焼成は良好で、胎土には混入物は少なく微白色の粒を含むのみである。形態は寸胴の体部に短い脚がついており、脚は左右で長さを異にしている。副部は大きく膨らみ妊娠の状態を表現



第90図　各調査区出土土偶(1)



第91図　各調査区出土土偶(2)

している。背面は体部下半の臀部を現したかのように周辺をＵ字状に隆起させている。

９はＳＩ24埋土中から出土した体部破片である。胸部の乳房より上と、脚部を欠いている。色調は黄白色、黒色、淡黒色の斑で、二次的に火を受けている。焼成は良好であるが二次的に火を受けたことによる焼成戻りがみられる。胎土には小砂を混入している。向かって右側の乳房は完全に剝離しており、左側は縦長で先端部を欠いている。ウエストには両側に小さな抉りを入れてくびれを表現している。背面は背中を大きくＵ字状に窪めている。脚部は股間部分が残存しており、両側の、カーブから推測するとごく短いものであったことが推測される。

10はＡ-15区pit２より出土した腕部破片である。色調は淡黒色から黄白色を呈しており、黄白色の部分は二次的に火を受けているらしい。焼成は良好で、胎土には砂粒を含んでいる。仕上げはなでて、表裏を示すほどの手がかりはなく左右いずれかは判らない。

11はＢＳＩ15埋土中より出土した小破片で、その湾曲から腕部破片と考えられる資料である。色調は黒色から茶褐色をなし茶褐色の部分は二次的に火を受けているとみられる。焼成は良好で、胎土には小砂を少々混入している。

12はＤ-16区イモ穴より出土した体部から脚部にかけての破片である。腰背面があり、それにより向かって左側の破片であることがわかる。色調は黄白色をなし、上端部が淡黒色となっている。焼成は良好で、胎土には微白色粒をみるだけで混入は少ないが、１粒だけ大きな砂粒が見える。仕上は弱い研磨である。下腹部は膨らむらしいが中心は欠落している。腰の背面は側端と下端が隆起するが突出部が欠落していて、全体の形態は不明瞭である。

13はＣ-６区縄文後期・晩期土器包含層から出土した脚部破片である。色調は黄褐色から明黄褐色をなし、二次的に火を受けている。焼成は良好で、胎土に小砂を少々含んでいる。股間のカーブに続く部分があり、それからみると向かって左側の脚であることが知られる。それから復原すると、脚を大きく踏み広げた下半身の形態が推測できる。足部は前後を欠落しているが大きく作っており爪先と踵を作りだしていたと思われる。上端の欠損部には体部を凸面とする剝離痕が認められる。

14はＳＩ25埋土一括中から出土した脚部破片である。色調は暗黄褐色から黒色をなしている。焼成は良好で、胎土に小砂を少々含む。全体を薄手に作っており、前後が不明瞭であるが、若干仕上がりが良好な面を前と考え、向かって左側の脚部として実測した。

15はＶ-18区縄文後期・晩期土器包含層から出土した脚部端と考えられる破片である。色調は黄白色から黒褐色を呈し、黄白色の部分は二次的に火を受けていると思われる。研磨によって仕上げられている。焼成は良好で、胎土には小砂を含んでいる。

16はＤ-16区縄文後期・晩期土器包含層から出土したもので、腕部破片である。色調は黄白色を呈している。

ｃ　注口土器注口部・高坏形土器・土製品など

（第92図）

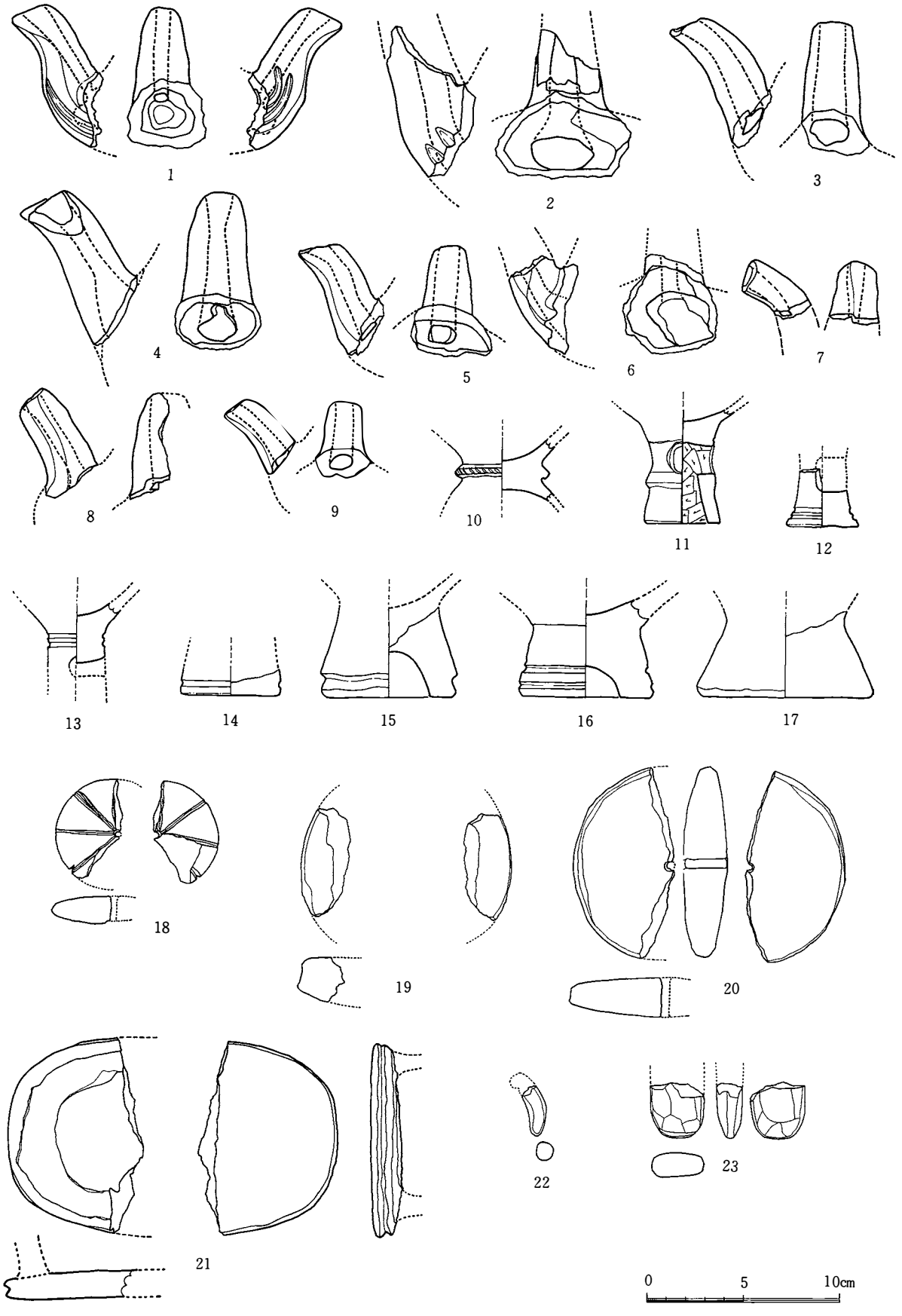
注口土器の注口部は総数12点出土している。分布はＣ調査区西側からＥ調査区に集中している。この結果はＡ・Ｂ調査区を中心に広がりを見せる太郎迫式には伴わないことを物語っていると考えられる。

注口部の分類基準はその先端の切り方であろう。斜めに切断するもの（１～６）と、垂直に切断するもの（７～９）の２種に分けられそうである。型式的にはどの注口土器とセットになるのかは不明である。ただ、前者のほうが丁寧な器面調整であり、器形も大きくなっているようであり、より時期的にはさかのぼりそうである。

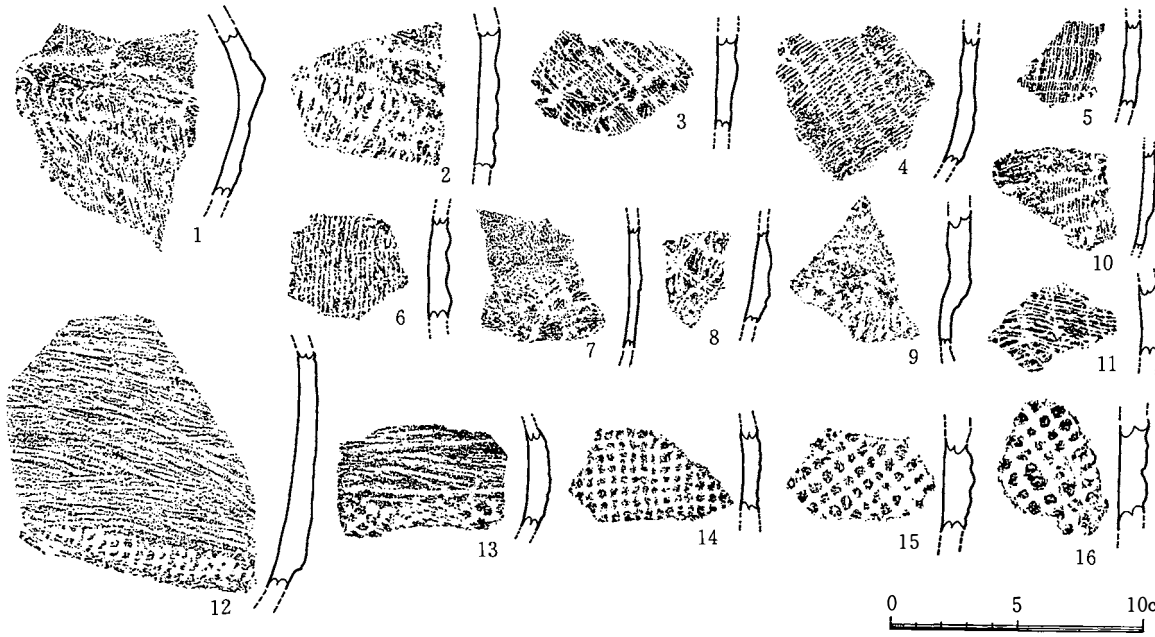
高坏形土器は総数８点が出土した。出土地点はＥ調査区が多く、原位置は明確ではない。

器形は変化に富んでいる。脚部が大きく開き、坏部との境まで上げ底になっているもの（10）、脚部幅が小さく、しかも開かず、坏部との境まで上げ底になっているもの（11）、脚部幅が小さく、しかも開かず平底になっているもの（12,13,14）、脚部が太く短く、上げ底になっているもの（15，16）、脚部が太く短く、平底になっているもの（17）がある。

器面の調整は14までが丁寧な磨きが認められるが、それ以外は粗い調整になっている。おそらく、15～



第92図　各調査区出土注口土器（注口部）・高坏形土器・土製品



第93図　各調査区出土組織痕土器

17は型式としては古閑式以降になるものと考えられる。

円盤形土製品は18～20の３点が出土した。中央に小さめの焼成前の孔をあけている。機能は不明であるが、紡錘車としての機能も考慮しなければならないだろう。18は焼成前に放射状の４本の溝を彫っている。

21は埦形土器Ｂ類として土器の項で分類したものである。楕円形の粘土板が胴部の底に付けられている。この粘土板は円盤形土製品の側辺に見られるようなくぼみをもっており、技法上の共通点を持っている。

22は土製勾玉の欠損品であろう。23は不明であるが土偶の足部とも考えられる。

ｄ　焼粘土塊（口絵写真参照）

おそらく土器製作や土偶製作などに関係するものであろうが、焼けた粘土の塊が出土した。一定の形状は見せておらず、また、大きさもまちまちであるようだ。ワクド石遺跡では小破片のみであるが、他遺跡（七城町大久保遺跡など）では頭大に近いものも発見されている。焼けの状態を観察すると完全に焼けた状態ではなく、この粘土塊を焼こうとしたものではなさそうである。

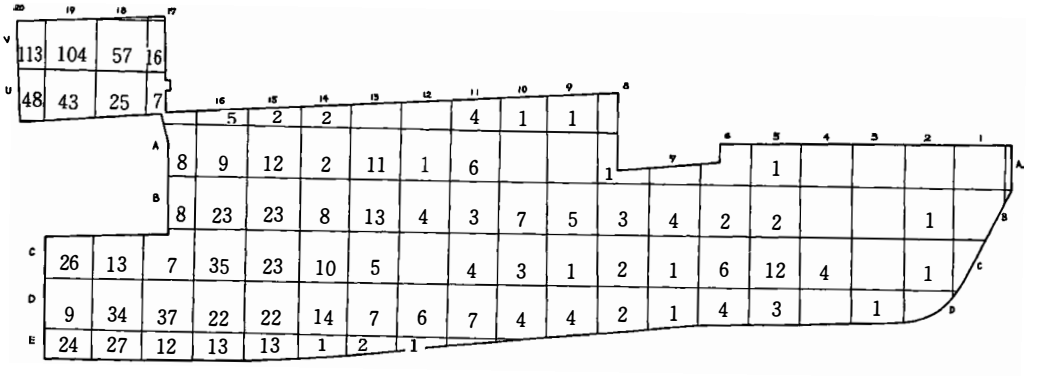
分布はＣ調査区西端のＣ-16区からＤ調査区ほぼ全域とＥ調査区Ｖ-20区の二つに見られ、かなり、狭められた空間に分布しているようだ。このことは土器製作や土偶製作などが集落の中でも一定の空間の中で行われたことを物語っている。ただ、この空間の内容まではわからない。

ｅ　組織痕土器（第93図）

ほとんどが小破片であり、総数24点が出土した。分布をみるとそのほとんどがＢ調査区とＤ調査区に集中している。この分布は黒川式土器が多く分布する地域と一致しており、これまでの組織痕土器の編年観をうらづけることになる。

土器は小破片のため、どの器種のどの部分になるのかを決定しがたい状況にある。ただ、組織痕以外の部分の器面調整をみると、条痕を使った粗い調整を行っており、この時期の浅鉢形土器に見られる丁寧な磨きとはかけ離れていることから、深鉢形土器を中心に組織痕がつけられているようだ。

組織痕を観察すると二つの繊維の織り方がある。一つは１～11まで見られるような目の粗い縦糸に目の細かい横糸を通したものである。もう一つは12から16まで見られるような目の粗い平織り状のものである。



第94図　打製石斧出土点数（グリッド別）

第４節　縄文時代の石器

(1)　打製石斧

今回の調査で出土した打製石斧の総点数は1000点を上回る。そのほとんどは半分以上が欠けたもので、本来の姿が想定できるものは少ない。ここでは本来の姿が想定できるもの、分類上必要なものを掲載した。紙面の関係上分類基準について明らかにし、重要なもの以外個々については説明しない。なお、石材については熊本市立博物館 永井 剛氏の鑑定を受け、その結果は計測表に記載した。

a　出土状況（第94図）

全てがいわゆる包含層や柱穴、イモ穴、溝からの出土であり、住居跡や遺構に伴って原位置から出土したものはなかった。したがって、その分布を見るときには一定の制約がある。例えば、Ｄ区やＥ区は整地層の中からの出土であるため、周辺地域から運ばれた可能性が強く、そのため、面積的には小さいにもかかわらず出土点数は非常に多くなっている。

ただ、それらを勘案した上での分布には少なからず意味を見つけ出すことができるものと考えられる。

打製石斧の分布は特徴的である。集中する部分はＣ調査区西側のＢ・Ｃ・Ｄ-15・16区、Ｄ調査区南側、それにＥ調査区である。Ｄ・Ｅ調査区は先述したようにその出土状況は本来の姿を反映していないとすれば、その周囲に集中する地域が想定できる。いずれにしても今回の調査で打製石斧が集中するのはＣ調査区西側のＢ・Ｃ・Ｄ-15・16区にあたる。この地域は柱穴の分布においてもっとも密度の高かった地域であり、多くの住居跡の重複が考えられる場所である。おそらくそれらの住居跡に本来の出土地点が集中するものと考えられる。

また、打製石斧が分布する範囲は太郎迫式が少ない地域であり、一応太郎迫式以後に打製石斧が主要に作られる時期を設定しておく。

b　打製石器の分類

ワクド石遺跡出土の打製石斧はその形状、調整、大きさから大きくⅨ類に分類した。以下、その特徴について記述する。

Ⅰ類（第95図～第100図）

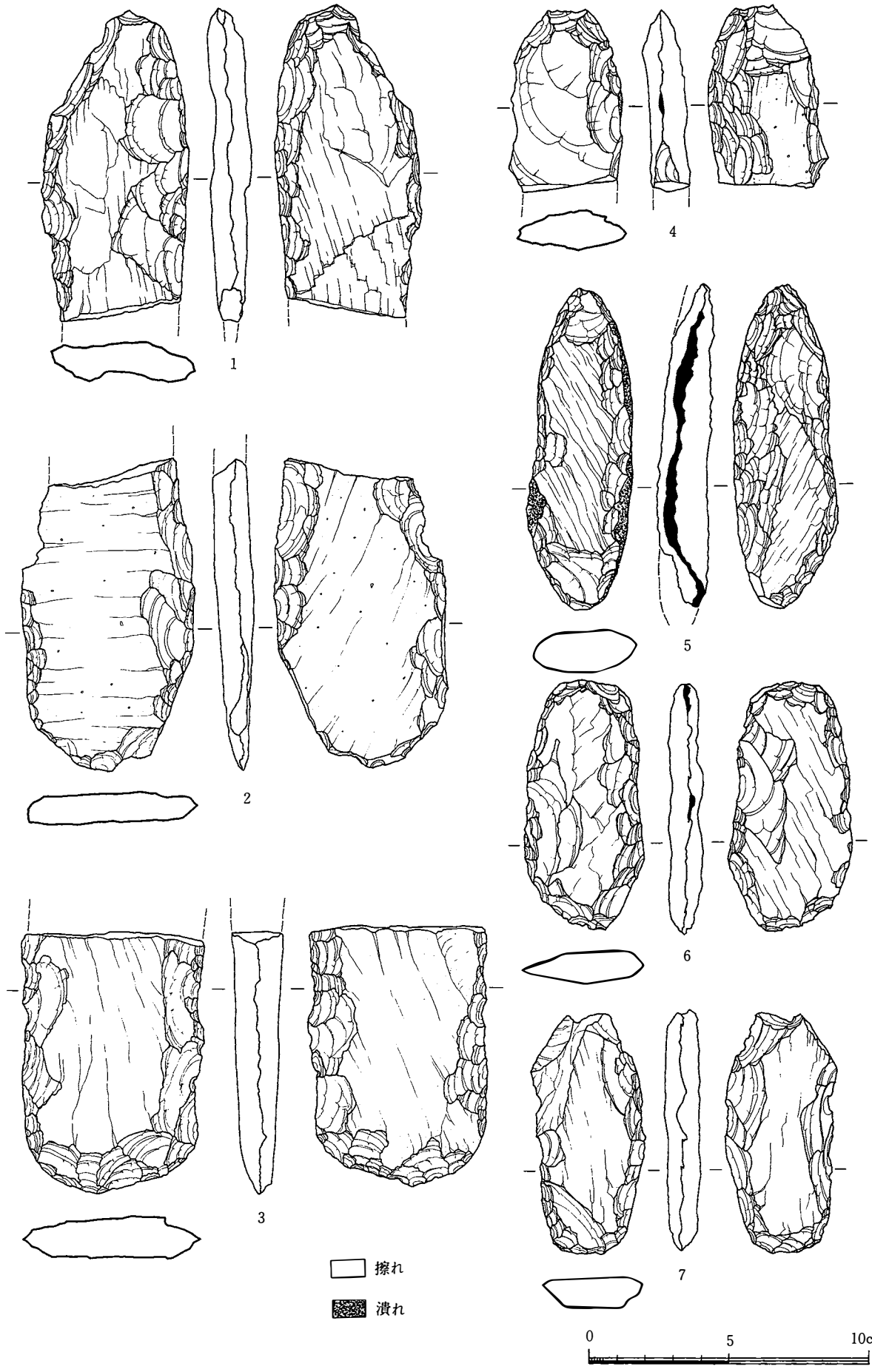
従来から「短冊形」と呼ばれてきたもので、全体の形状は長方形に近く、最大幅が石斧のほぼ中位にくるものである。刃部の形状は一定ではないが円刃のものが多い。また、統計処理ができていないが、この類は大きさに対して厚みの割合が高い。

Ⅱ類（第101図～第107図 74）

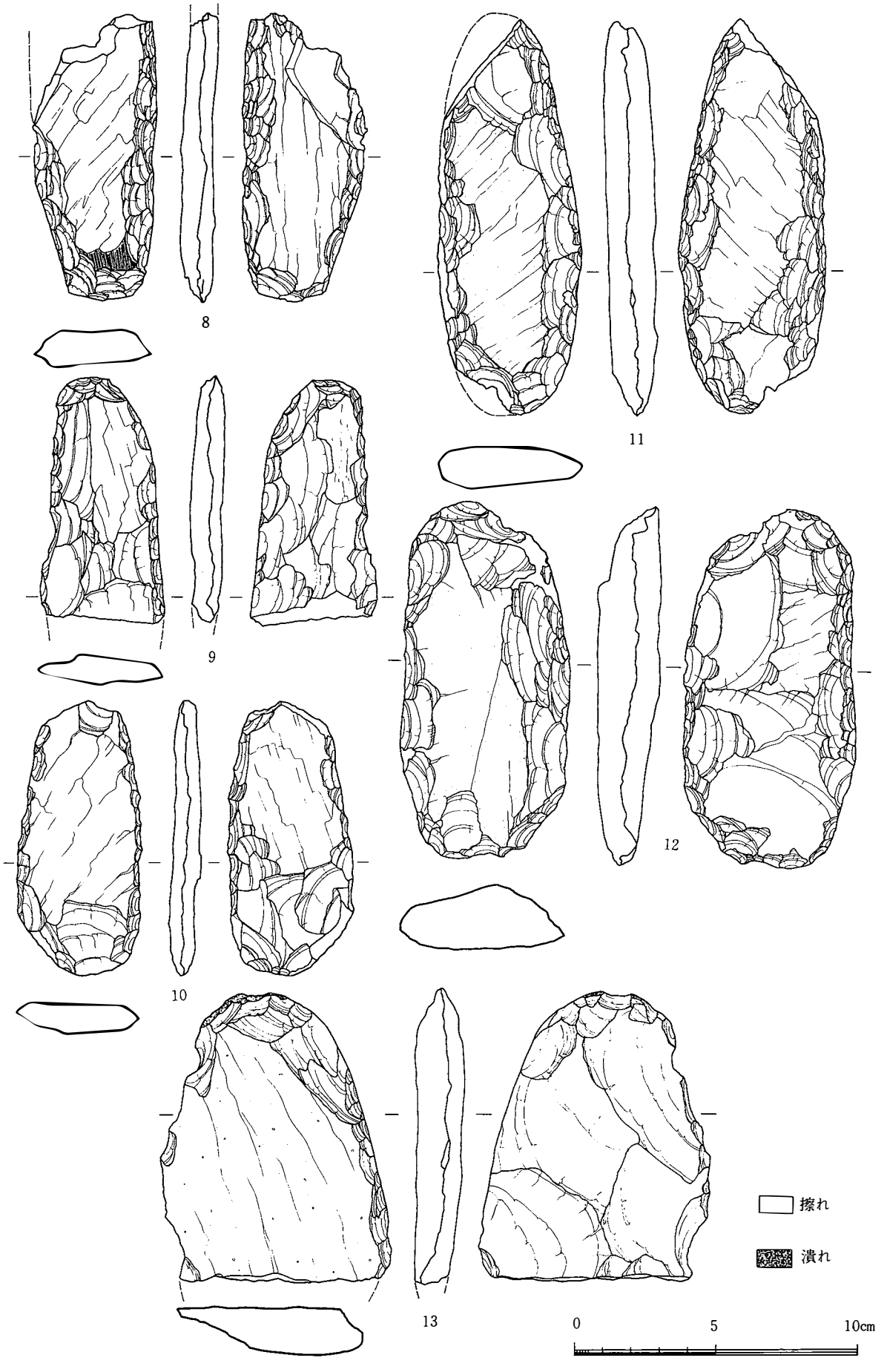
従来から「バチ形」と呼ばれてきたもので、全体の形状は二等辺三角形に近く、最大幅は石斧の下位にくる。最大幅の位置と形状から二つに細分した。最大幅が保母刃部近くにあり、刃部が直線に近くなるものをⅡ-ａ、最大幅が刃部から少し上位に離れ、全体の形状がⅠ類に近くなり、円形に近い刃部を持ったものをⅡ-ｂ類とする。厚みはまとまった傾向は見せていないようであるがⅠ類よりは薄くなるようだ。

Ⅲ類（第107図 75～第109図）

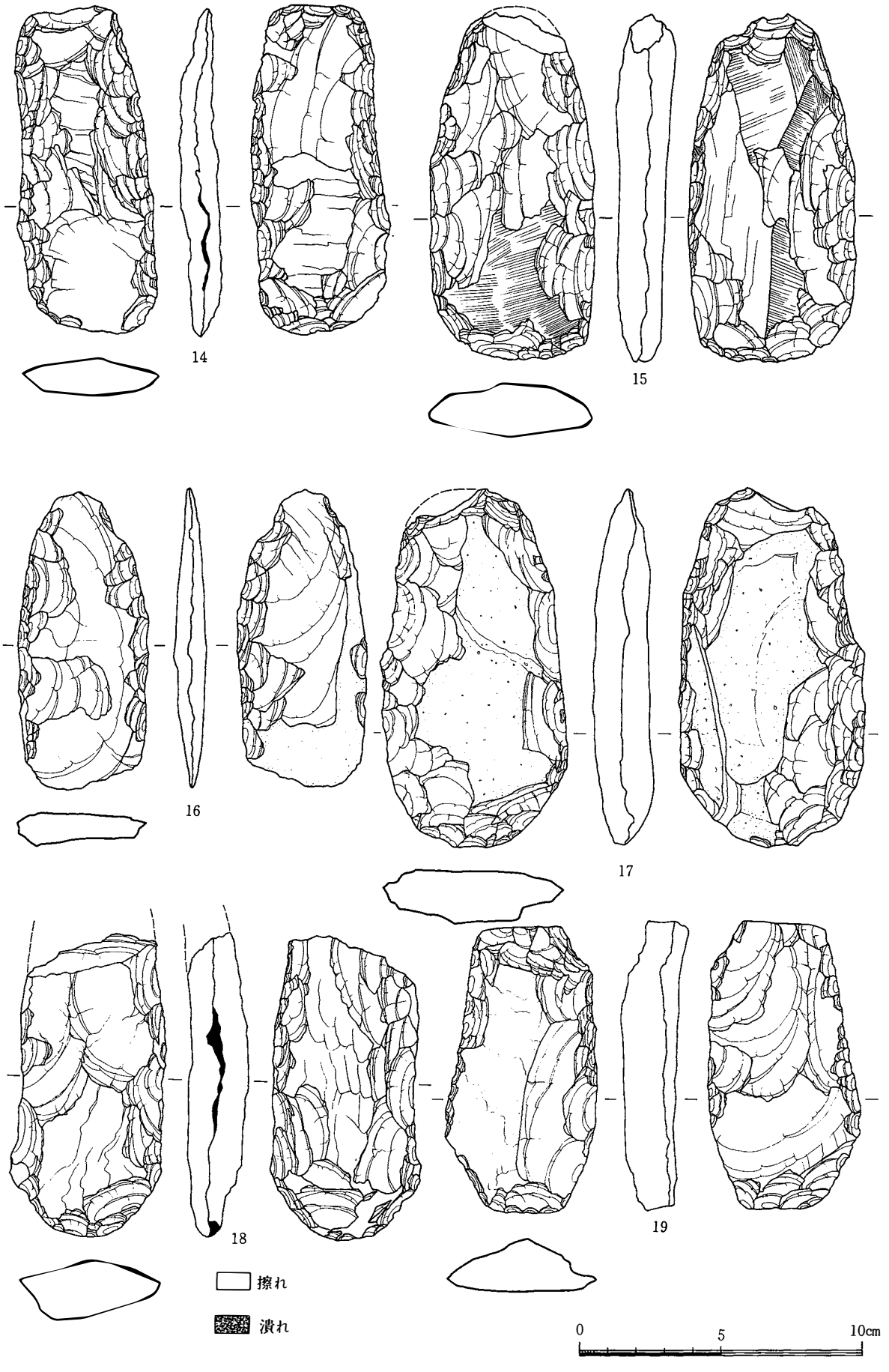
石斧の側辺に内湾する抉りが作りだされたもので、抉りの位置で３種に細分した。従来から「分銅形」



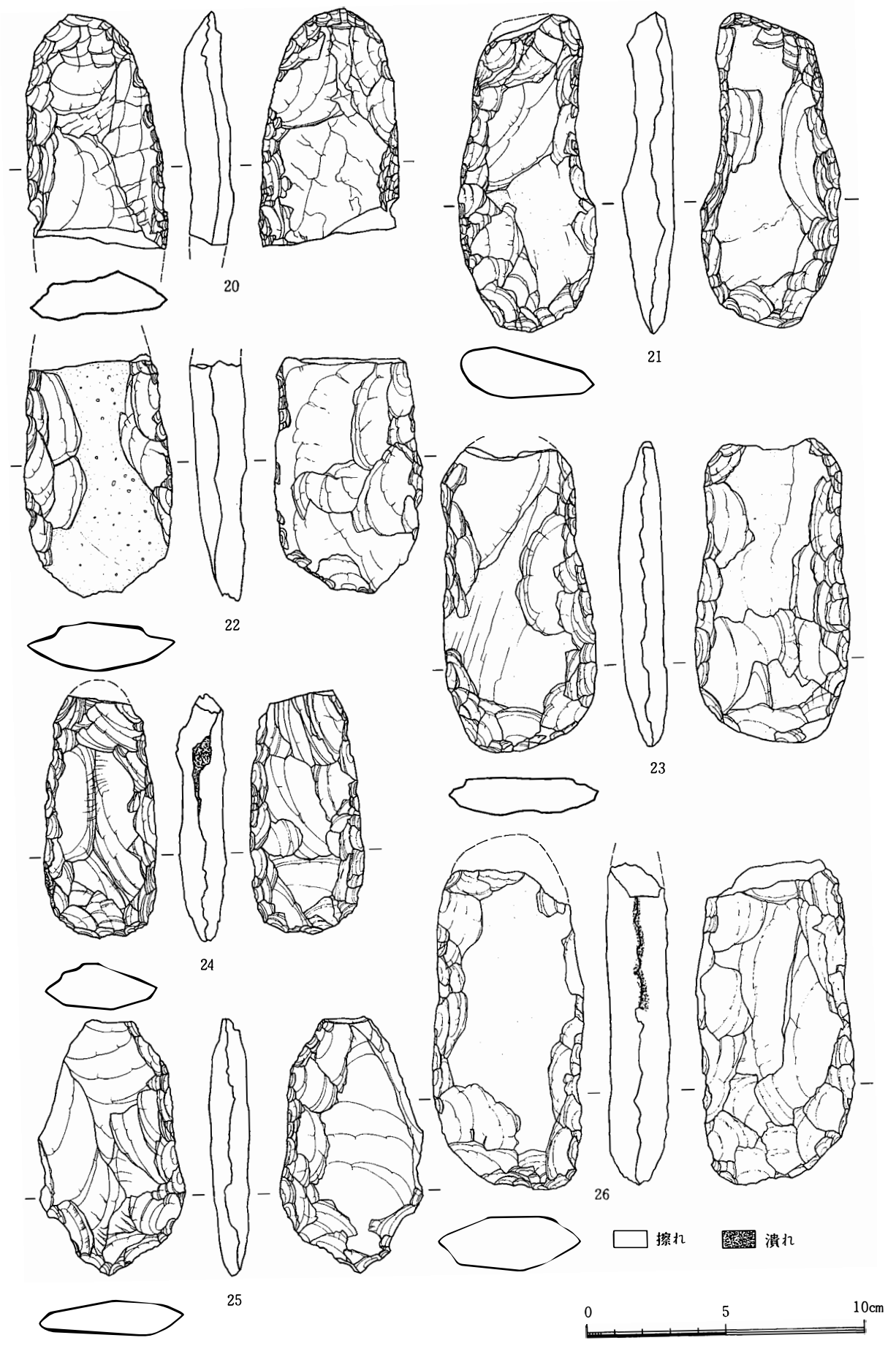
第95図　各調査区出土打製石斧（1）



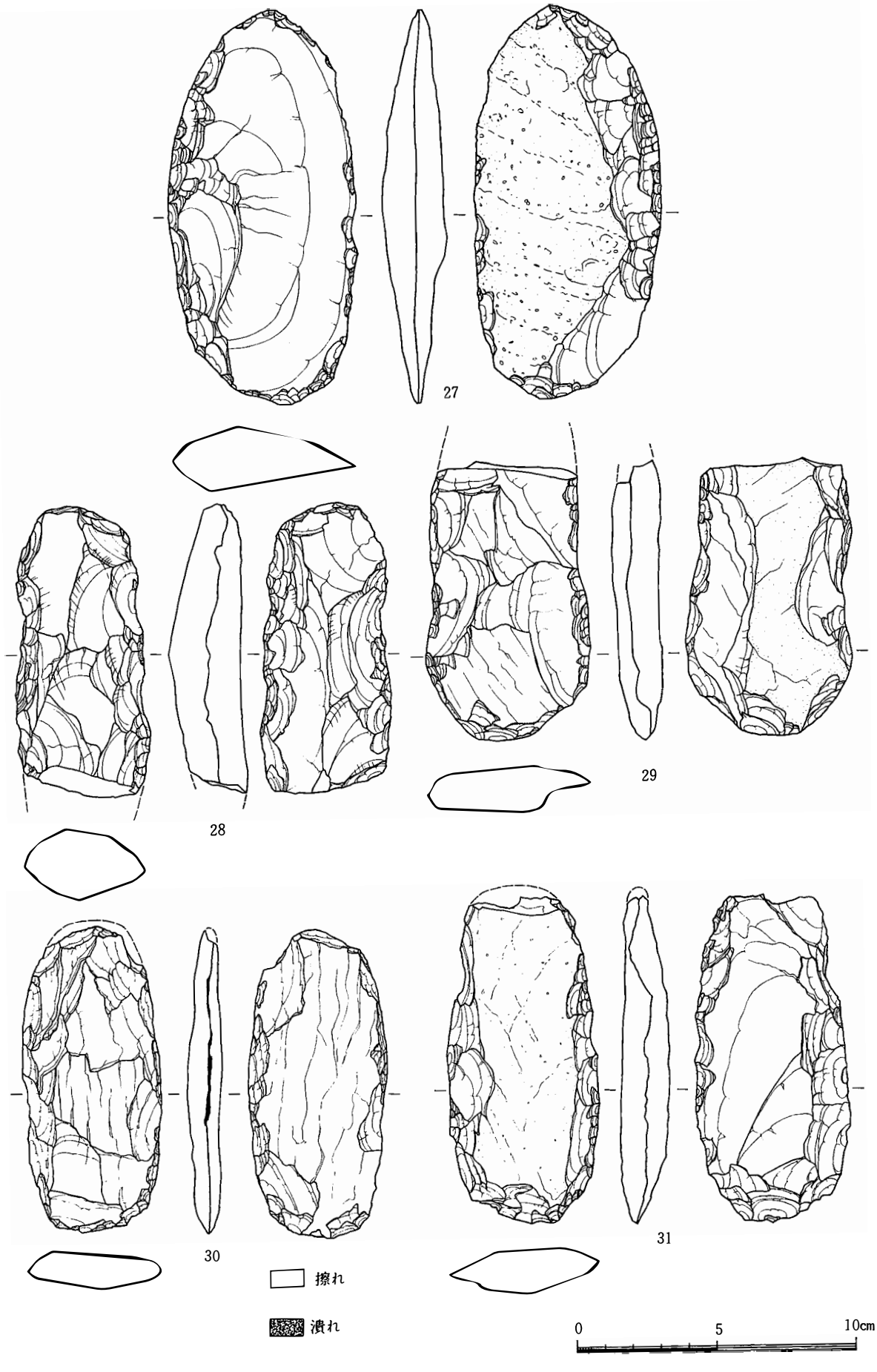
第96図　各調査区出土打製石斧(2)



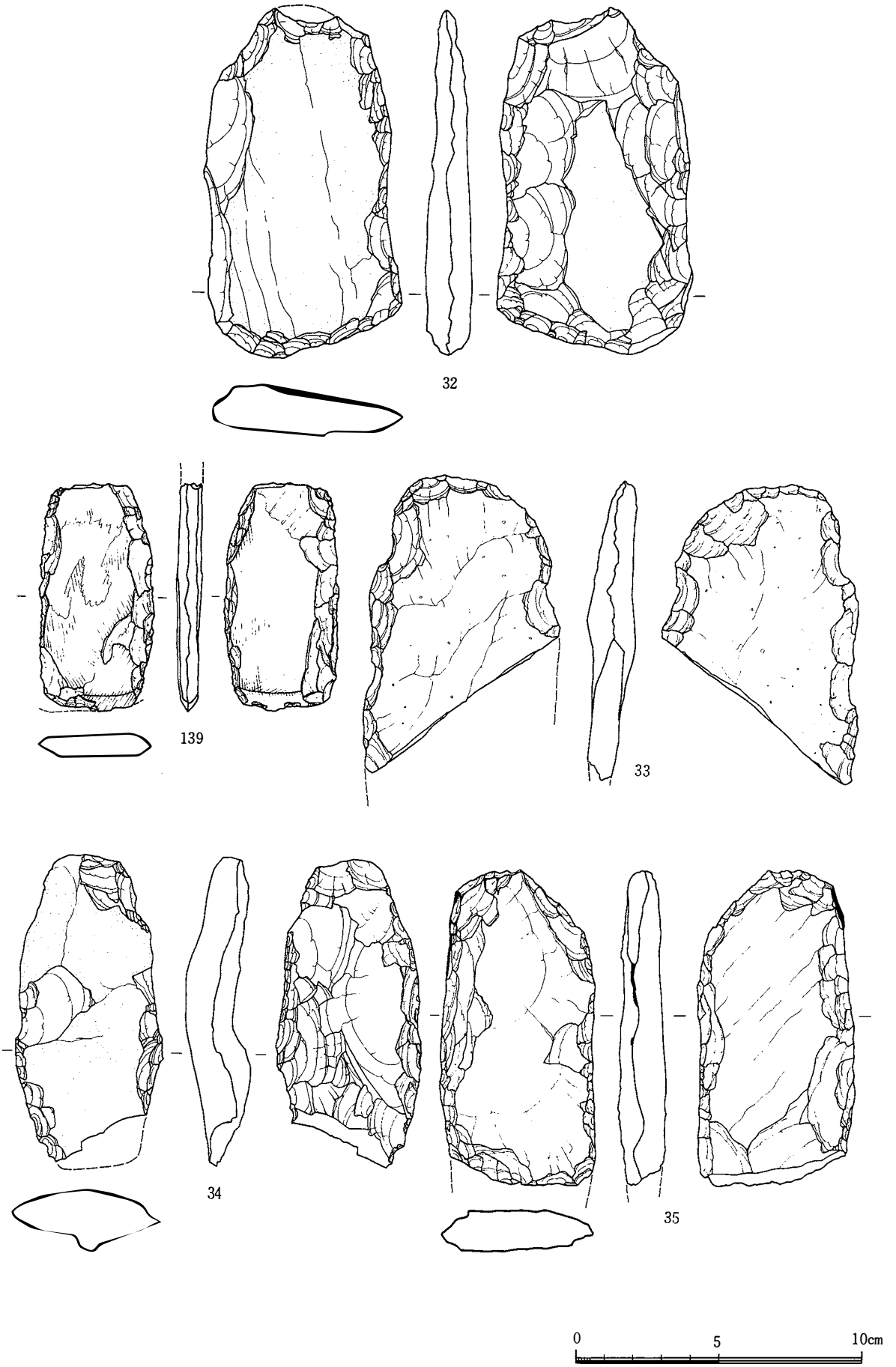
第97図　各調査区出土打製石斧 (3)



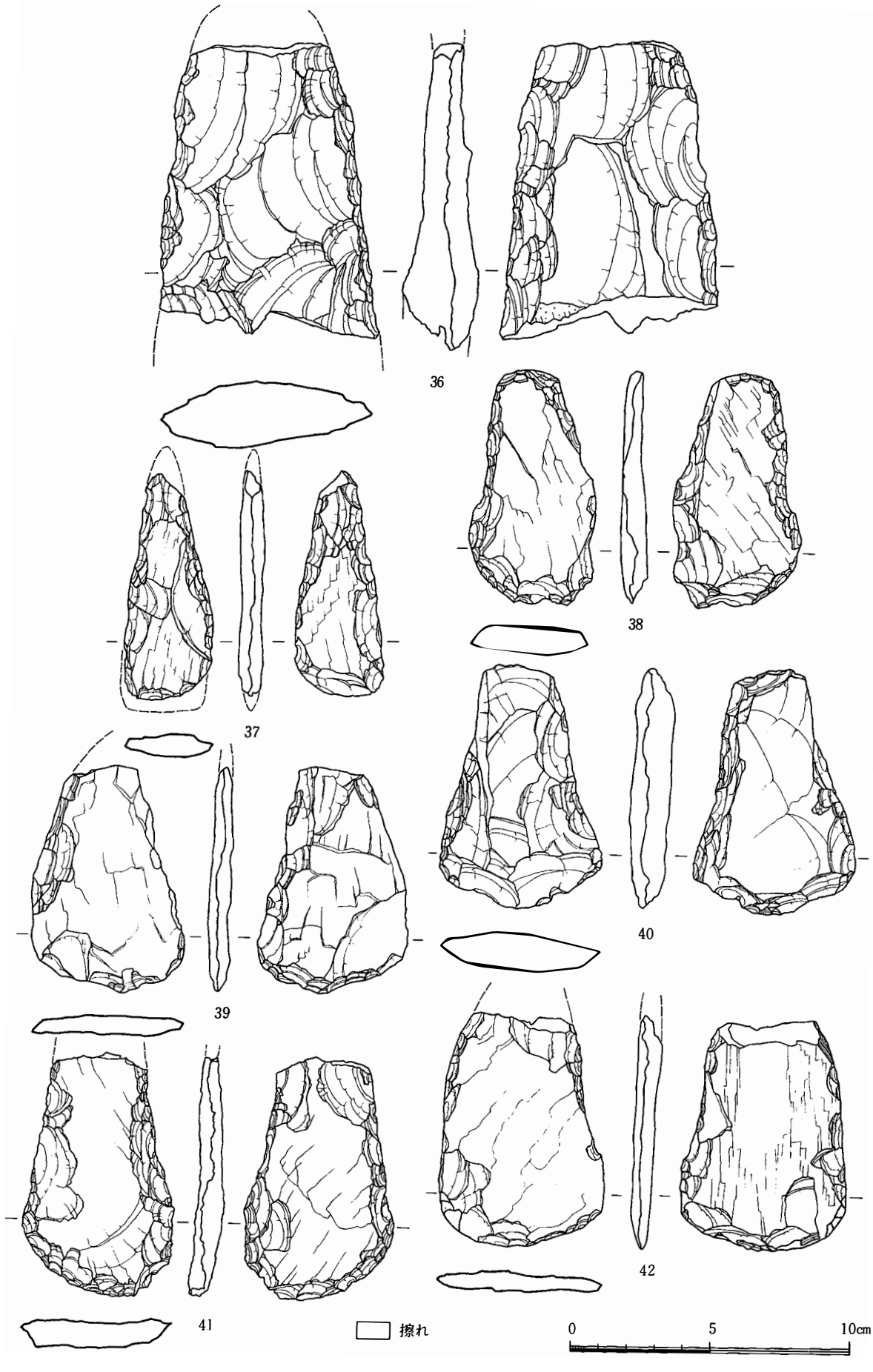
第98図　各調査区出土打製石斧 (4)



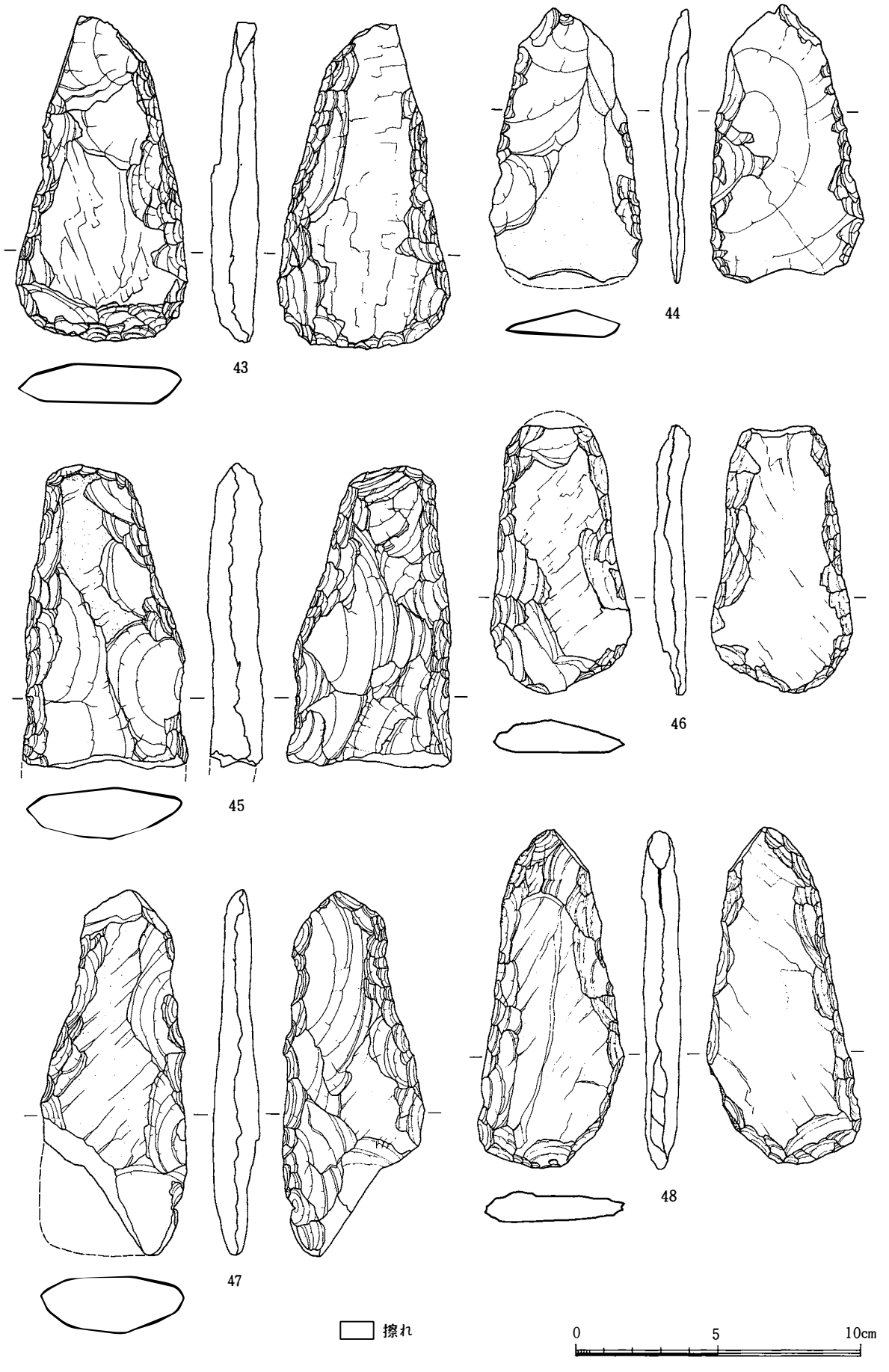
第99図　各調査区出土打製石斧(5)



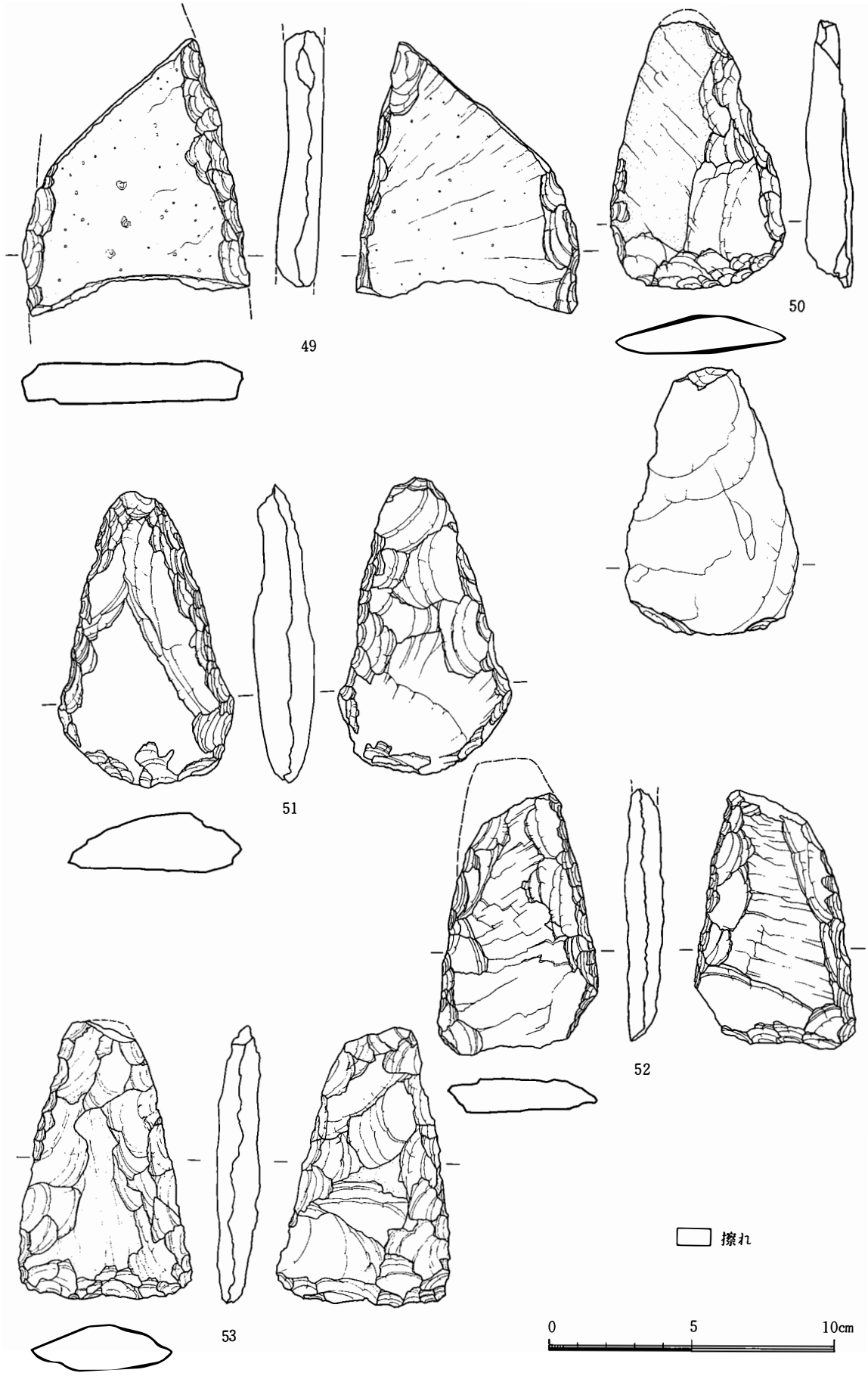
第100図　各調査区出土打製石斧(6)



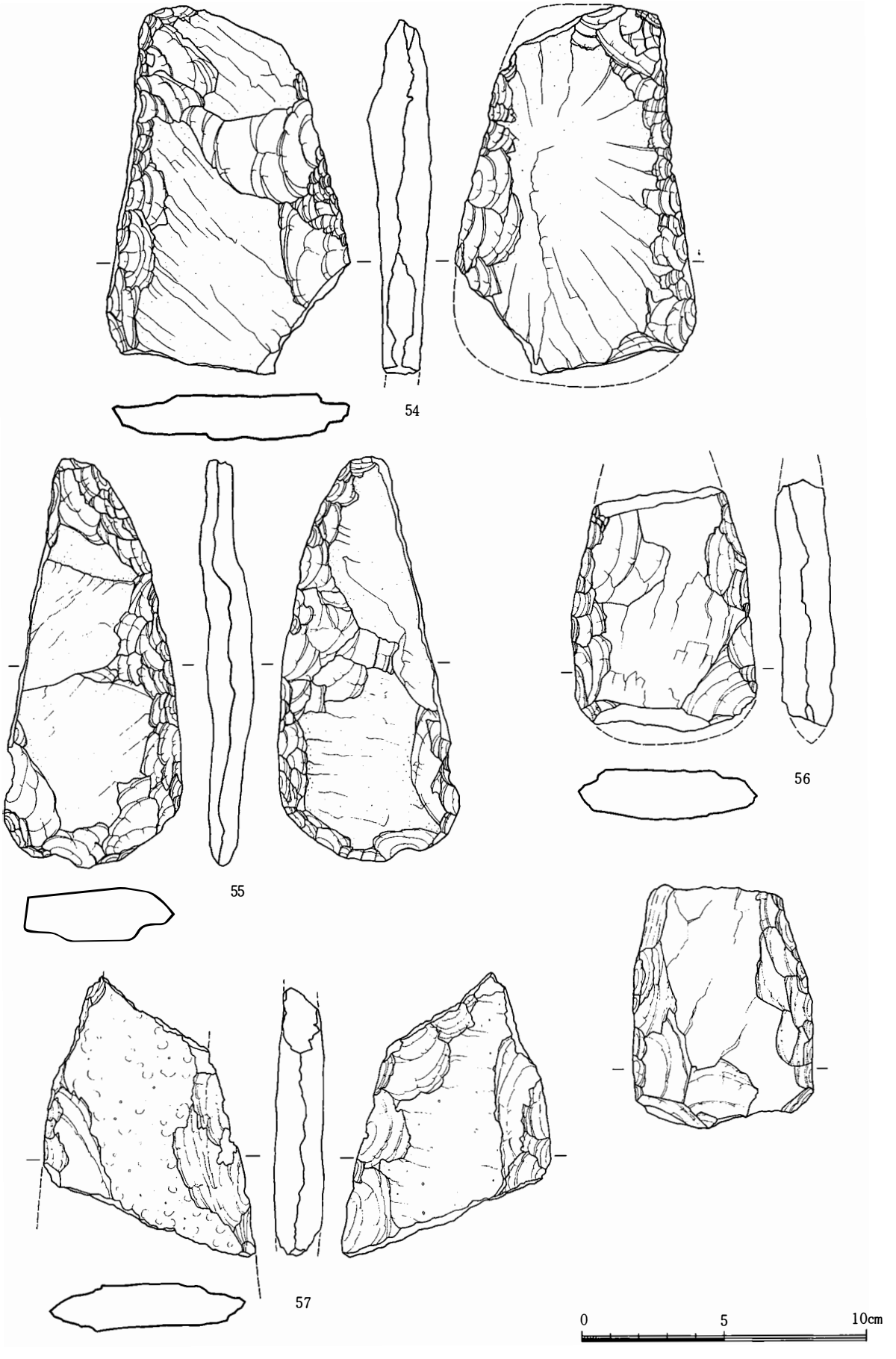
第101図　各調査区出土打製石斧 (7)



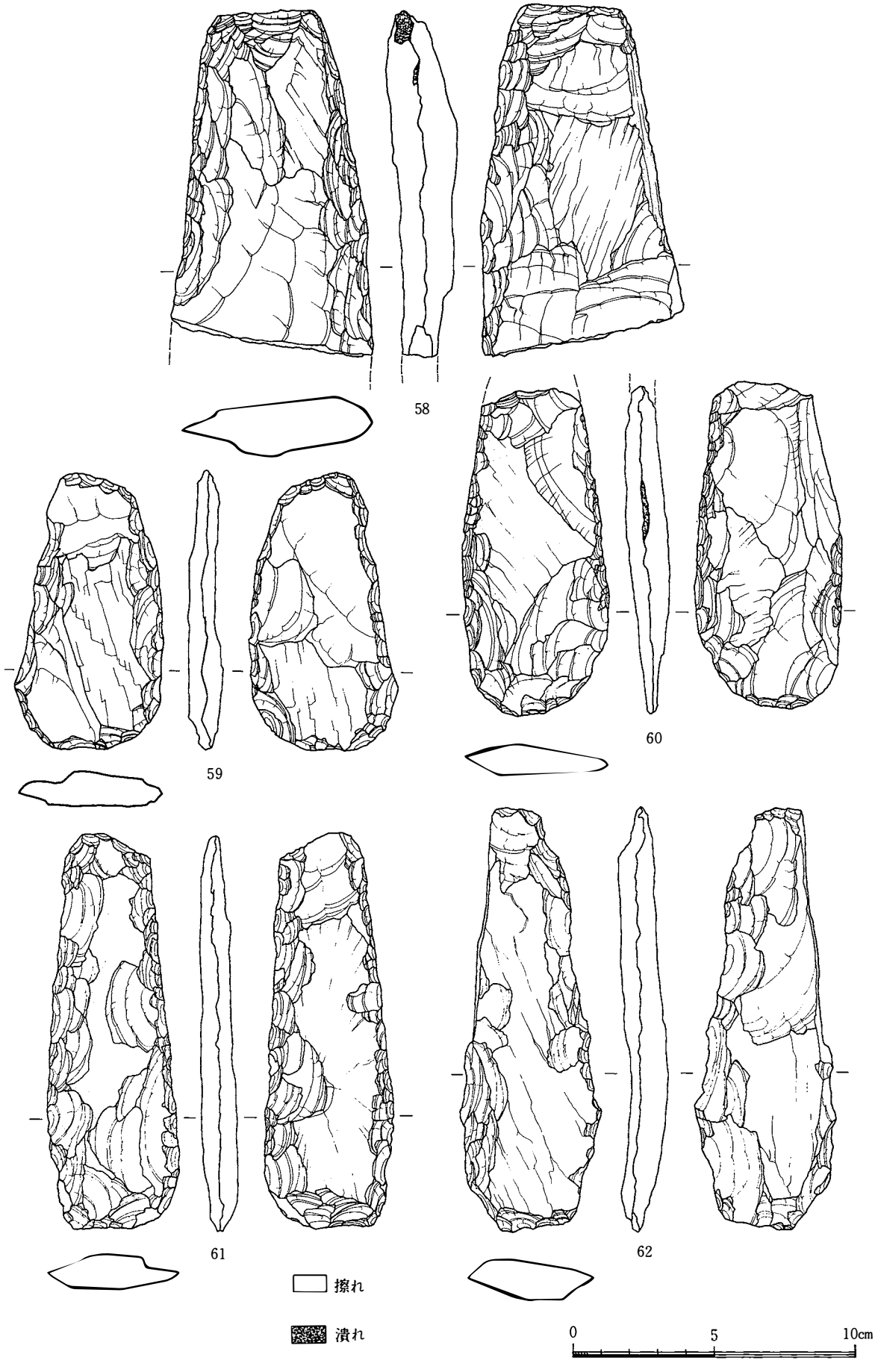
第102図　各調査区出土打製石斧(8)



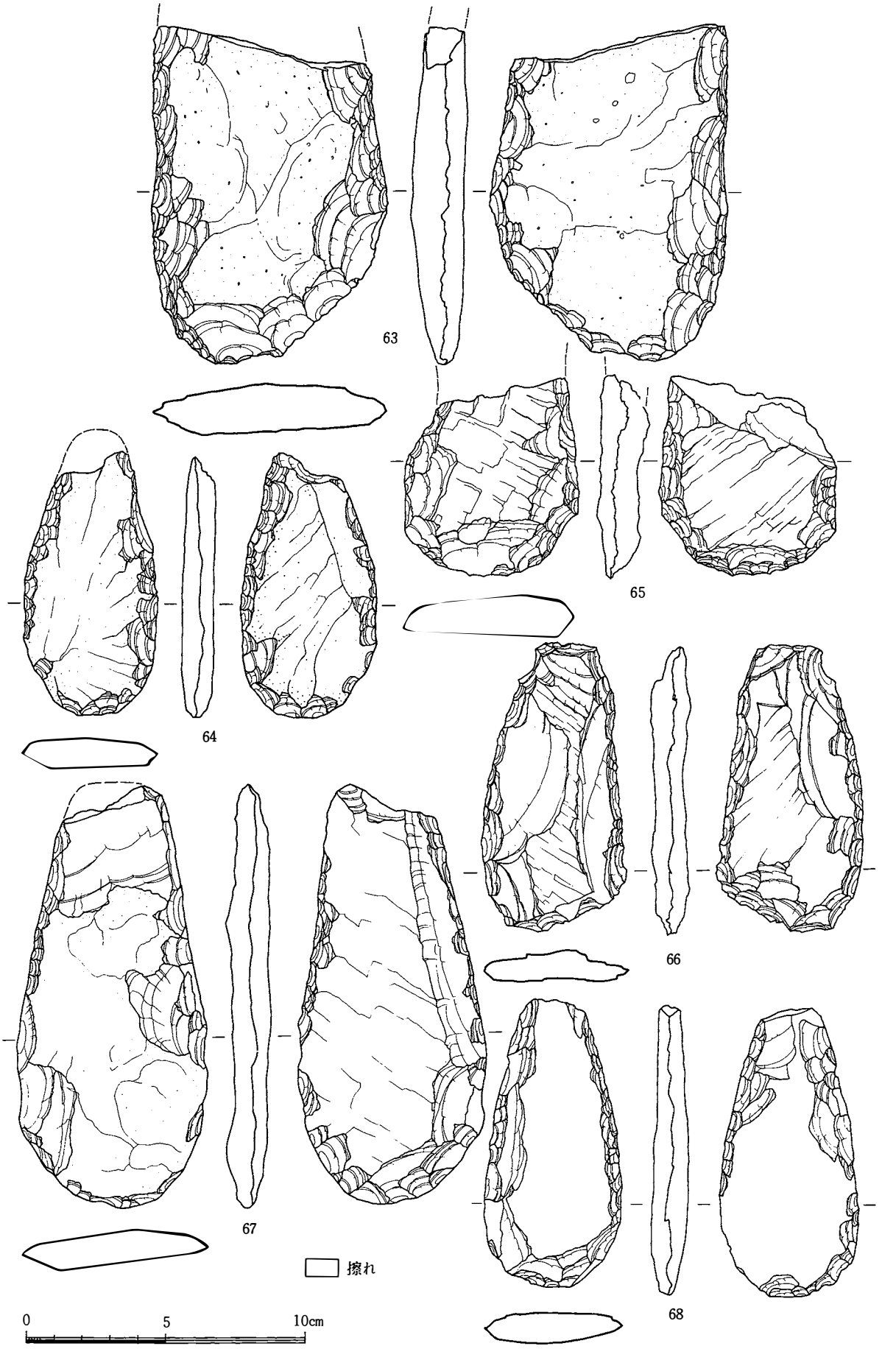
第103図　各調査区出土打製石斧(9)



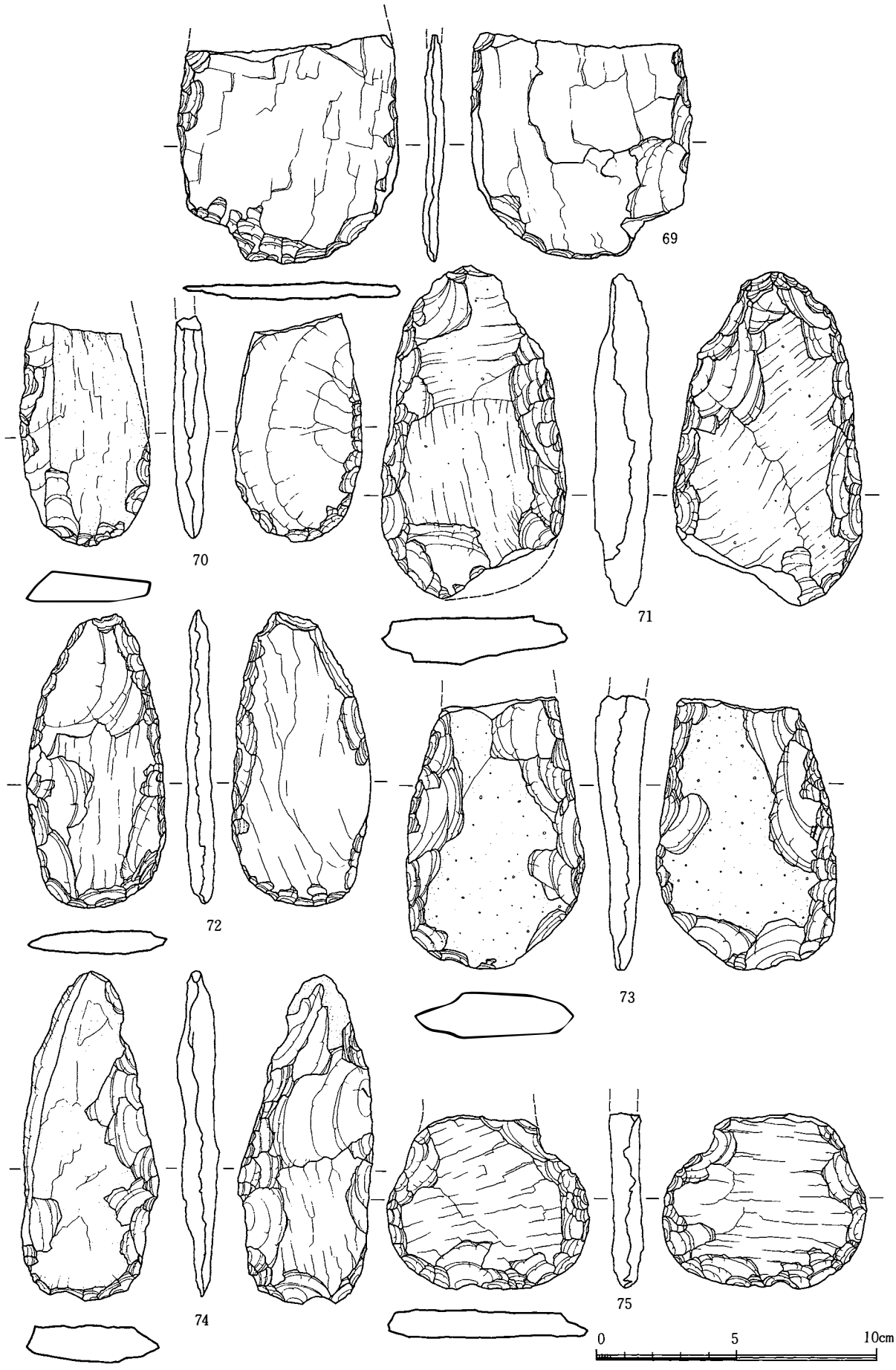
第104図　各調査区出土打製石斧(10)



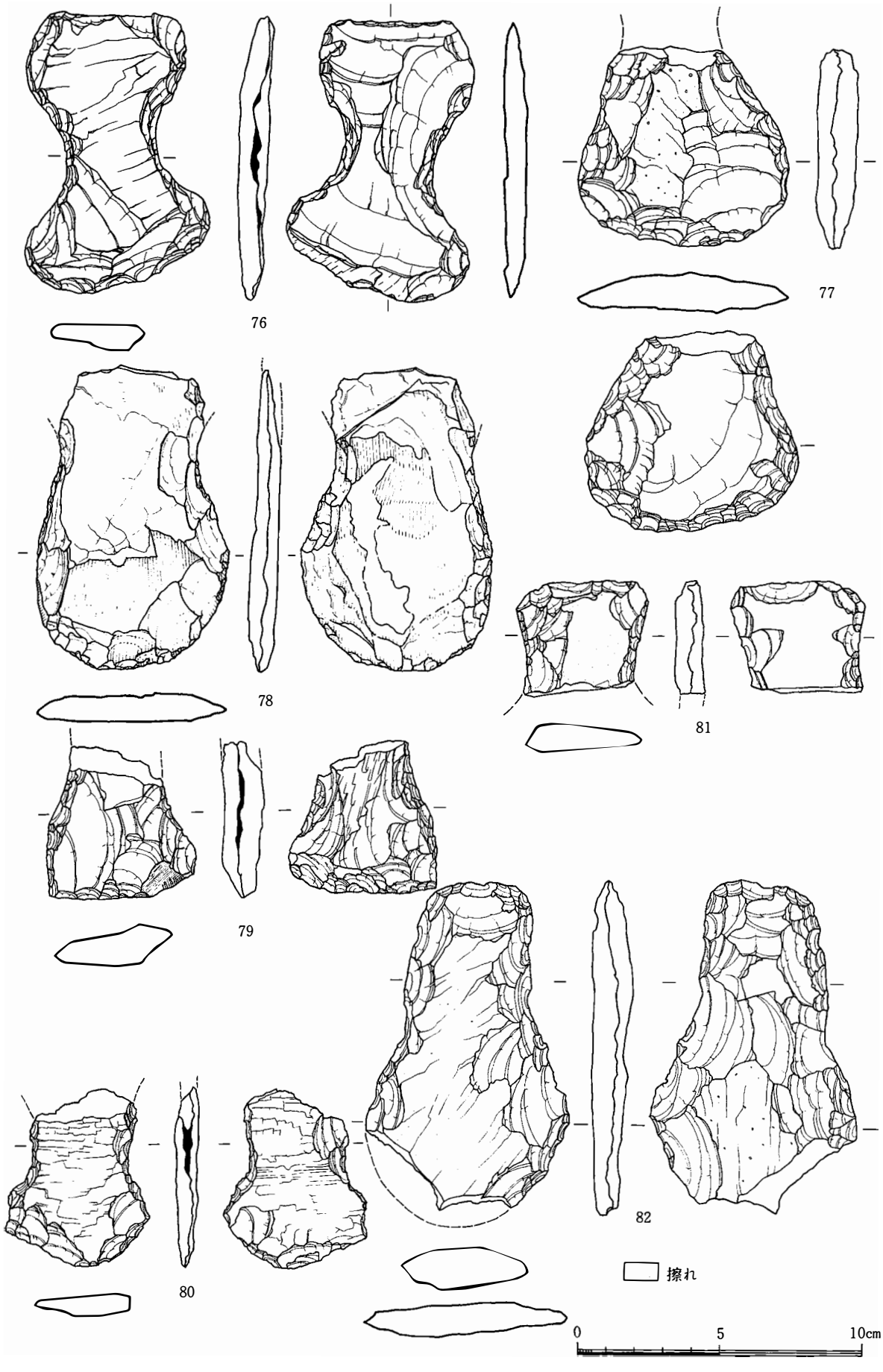
第105図　各調査区出土打製石斧(11)



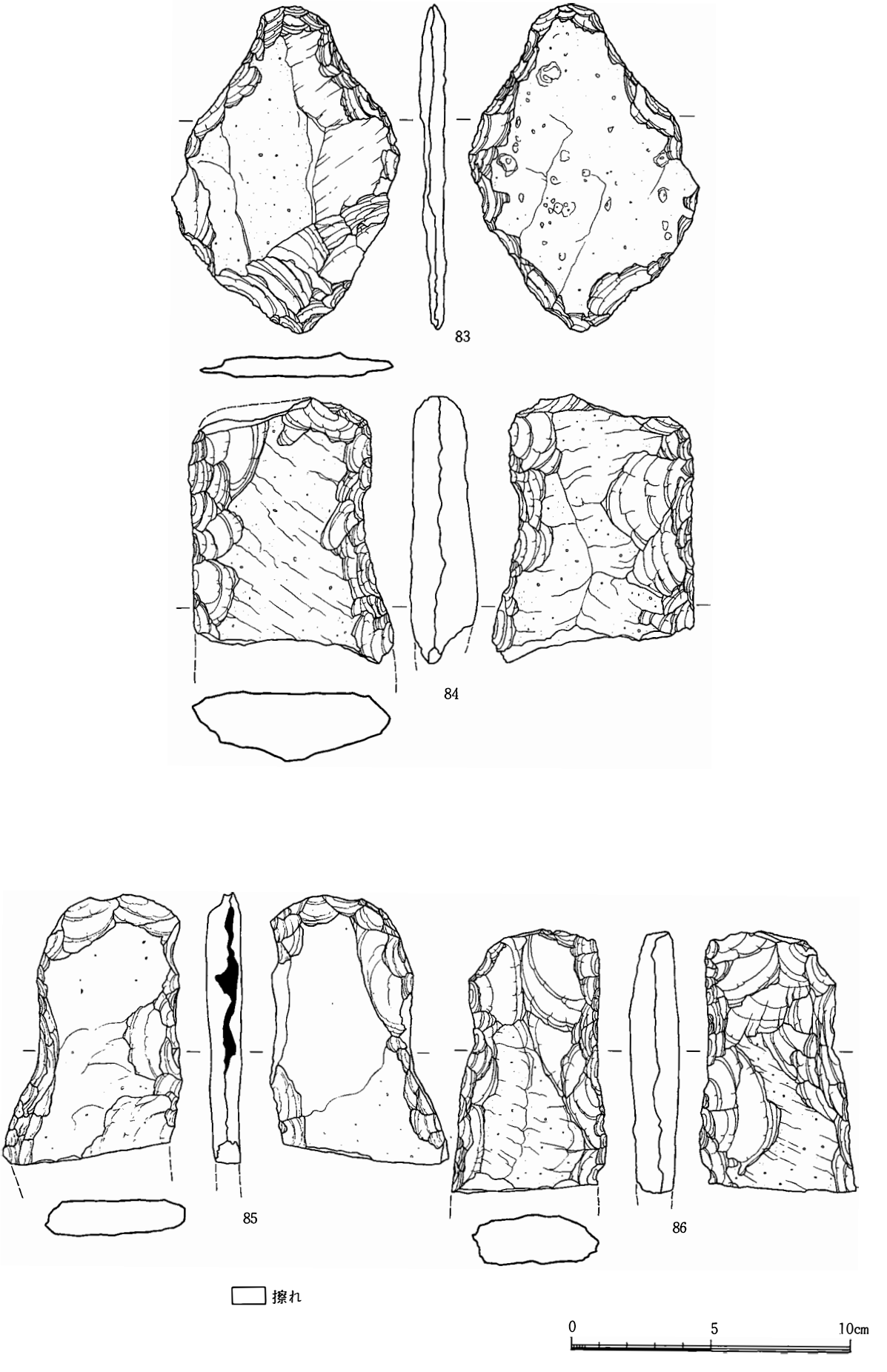
第106図　各調査区出土打製石斧 (12)



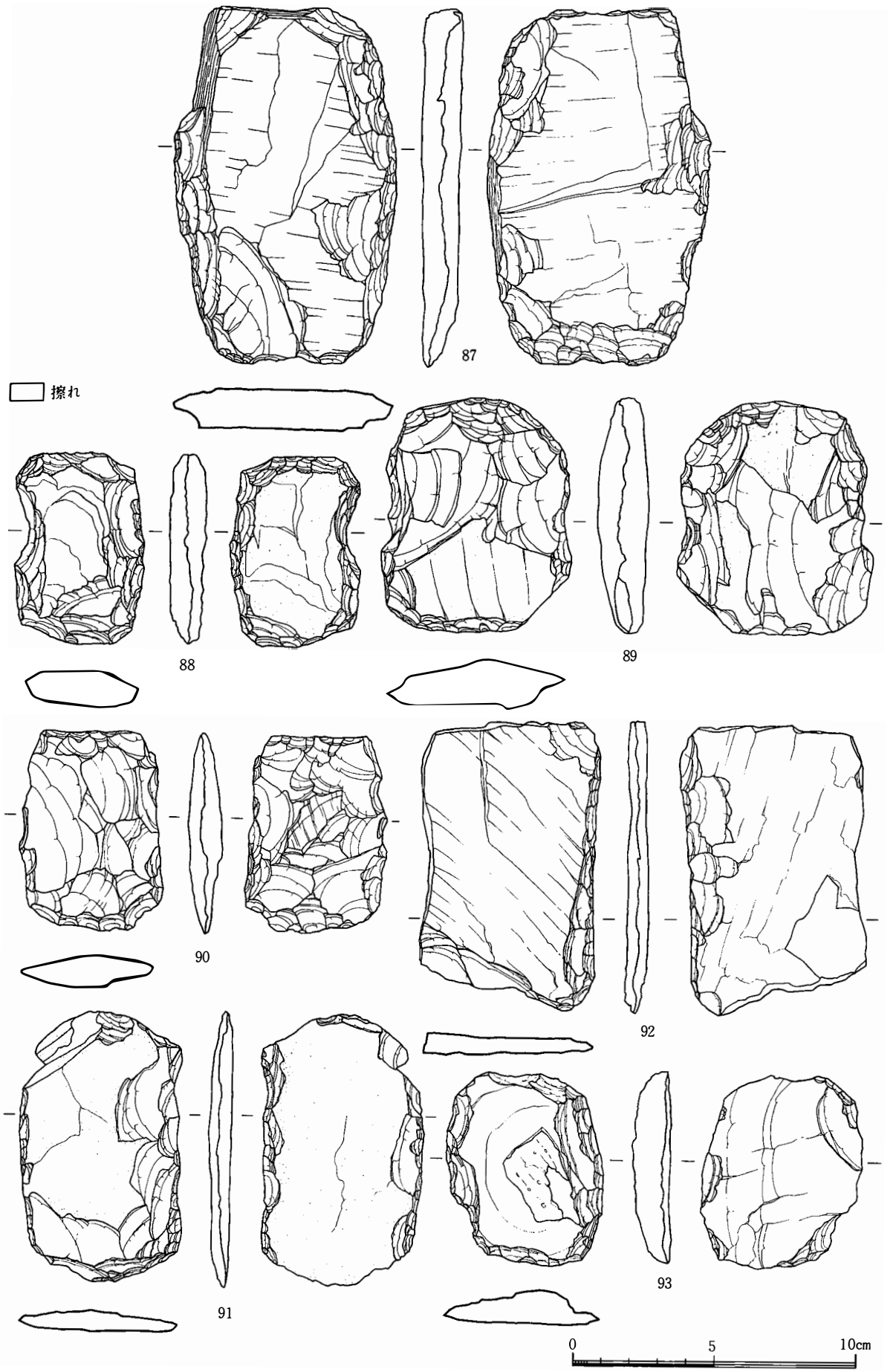
第107図　各調査区出土打製石斧 (13)



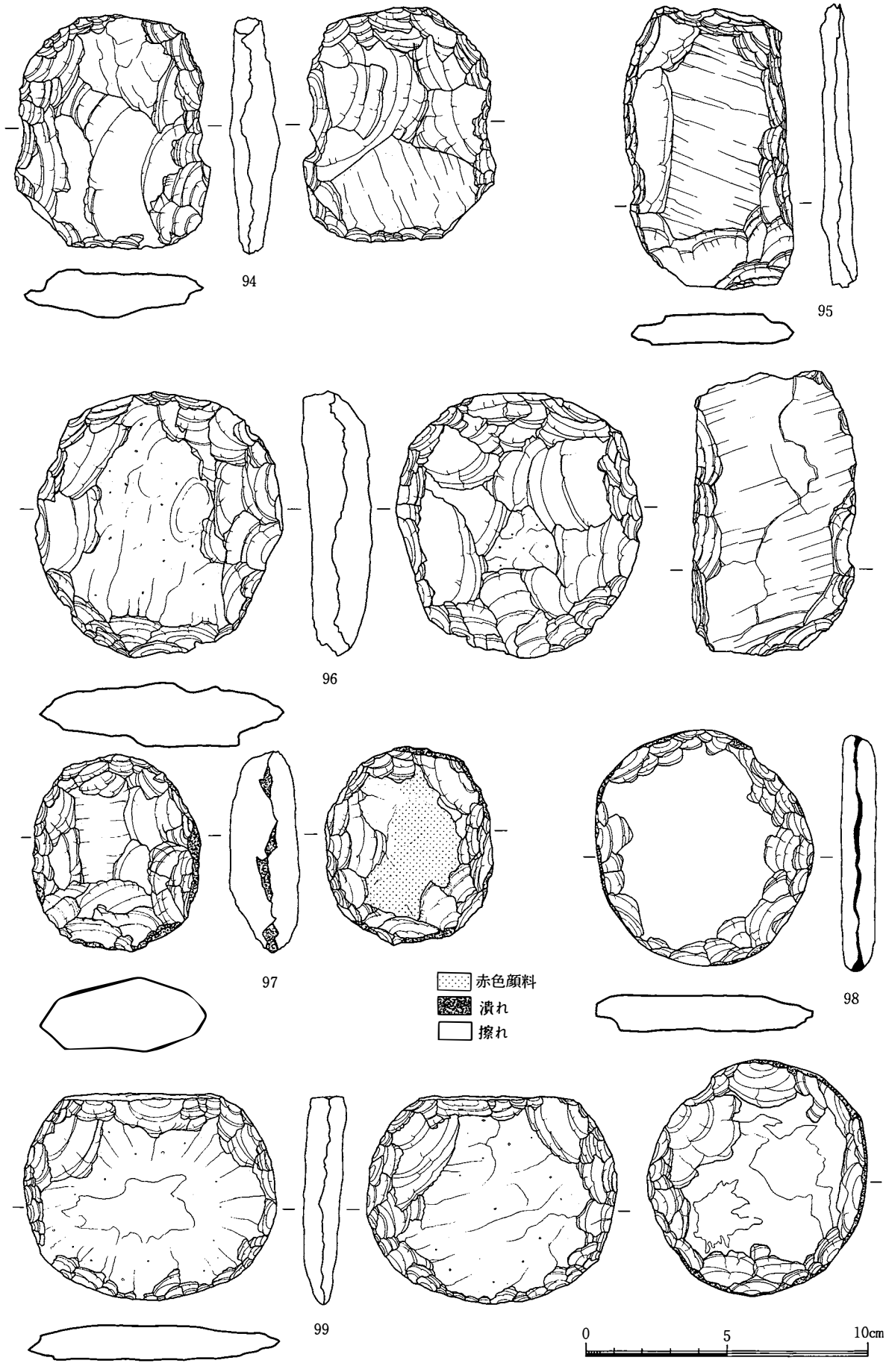
第108図　各調査区出土打製石斧(14)



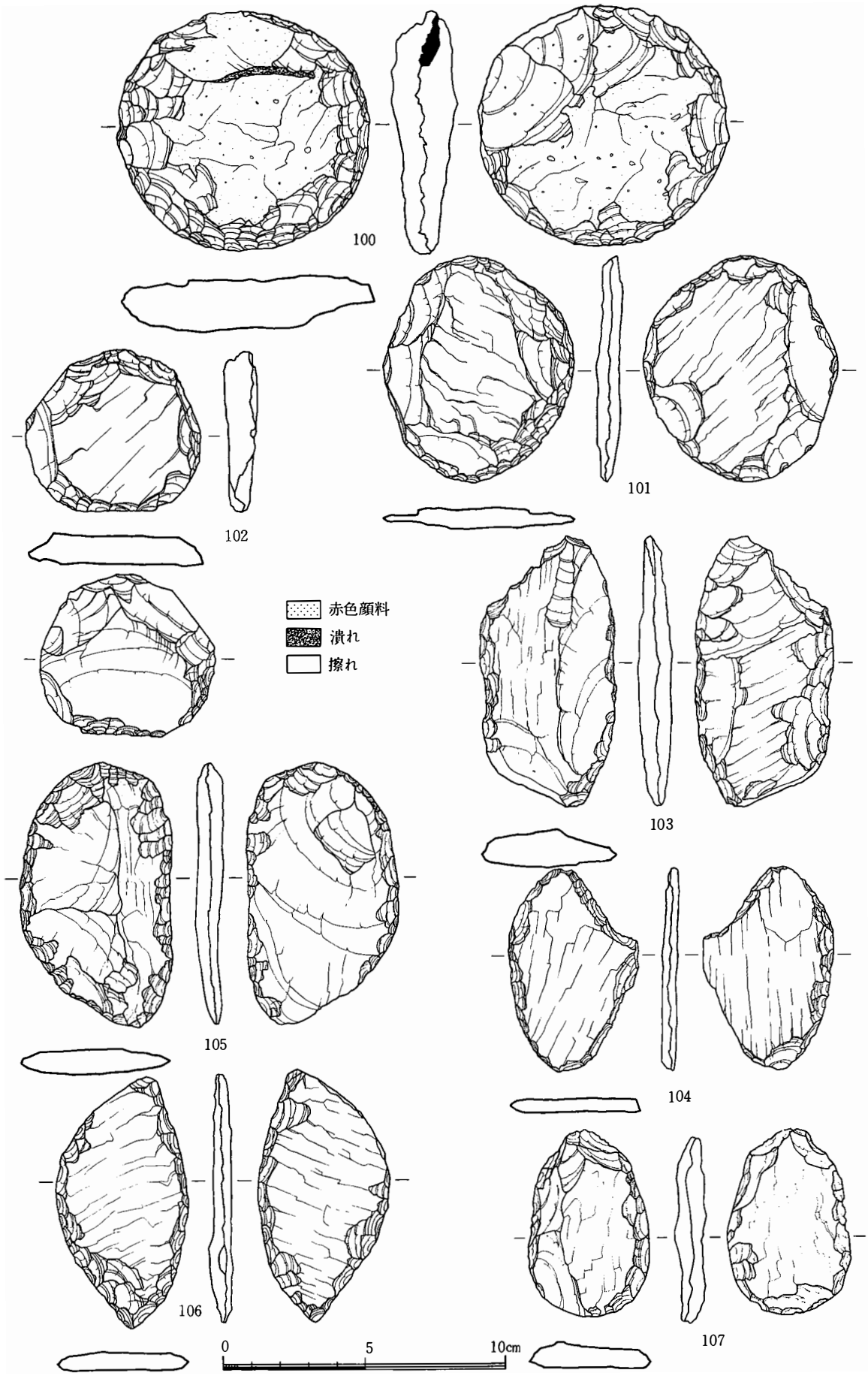
第109図　各調査区出土打製石斧(15)



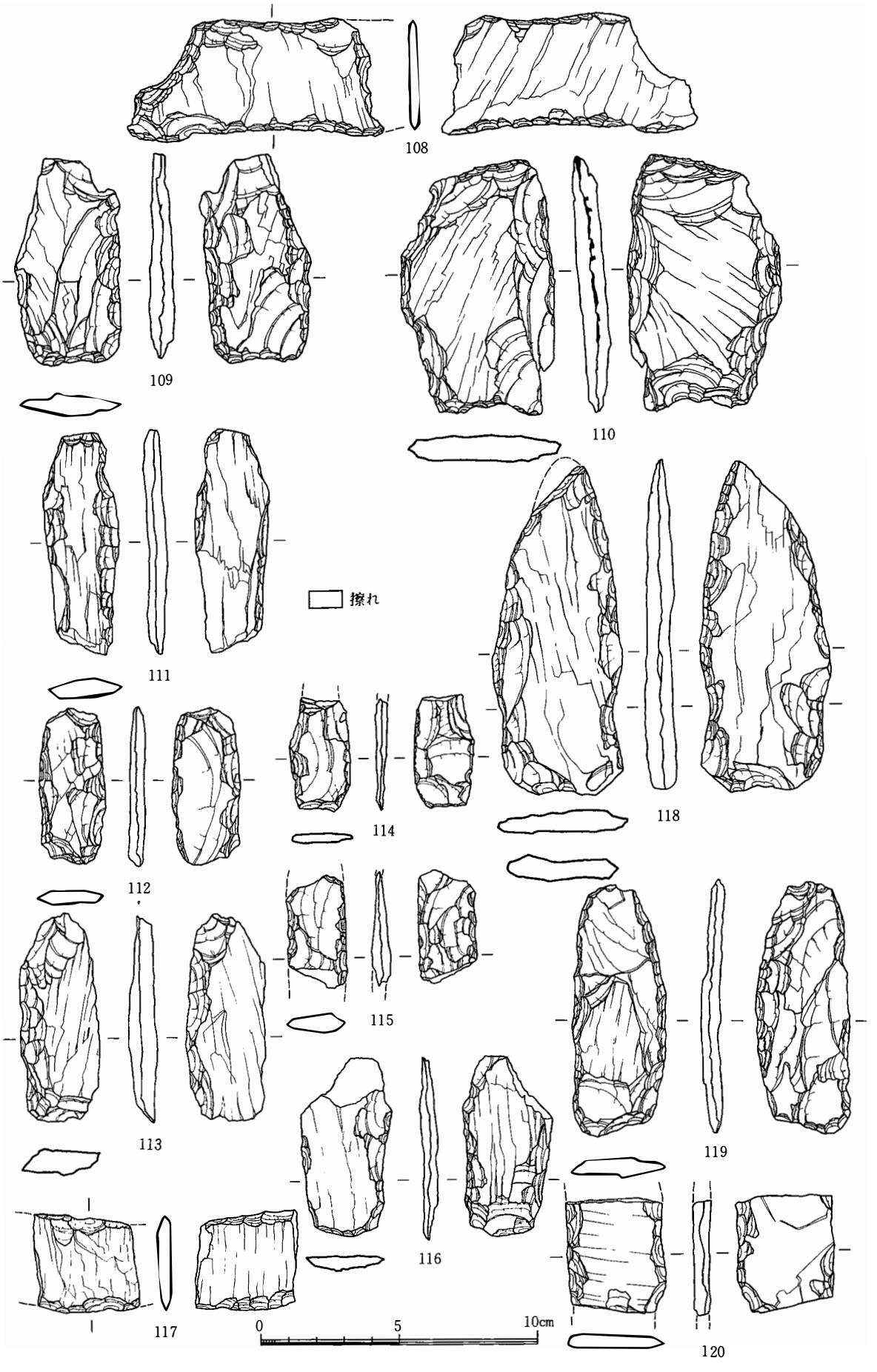
第110図　各調査区出土打製石斧(16)



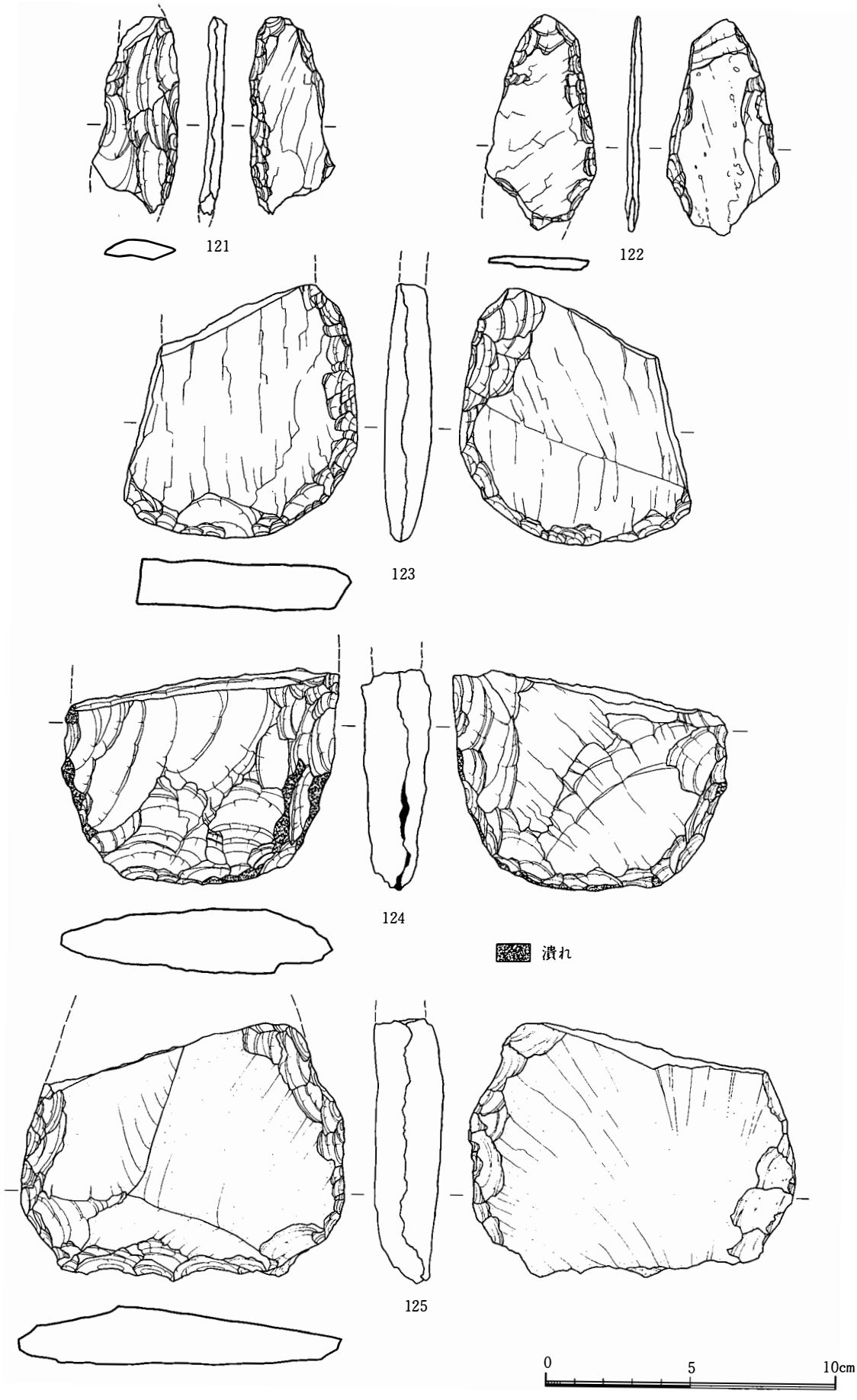
第111図　各調査区出土打製石斧 (17)



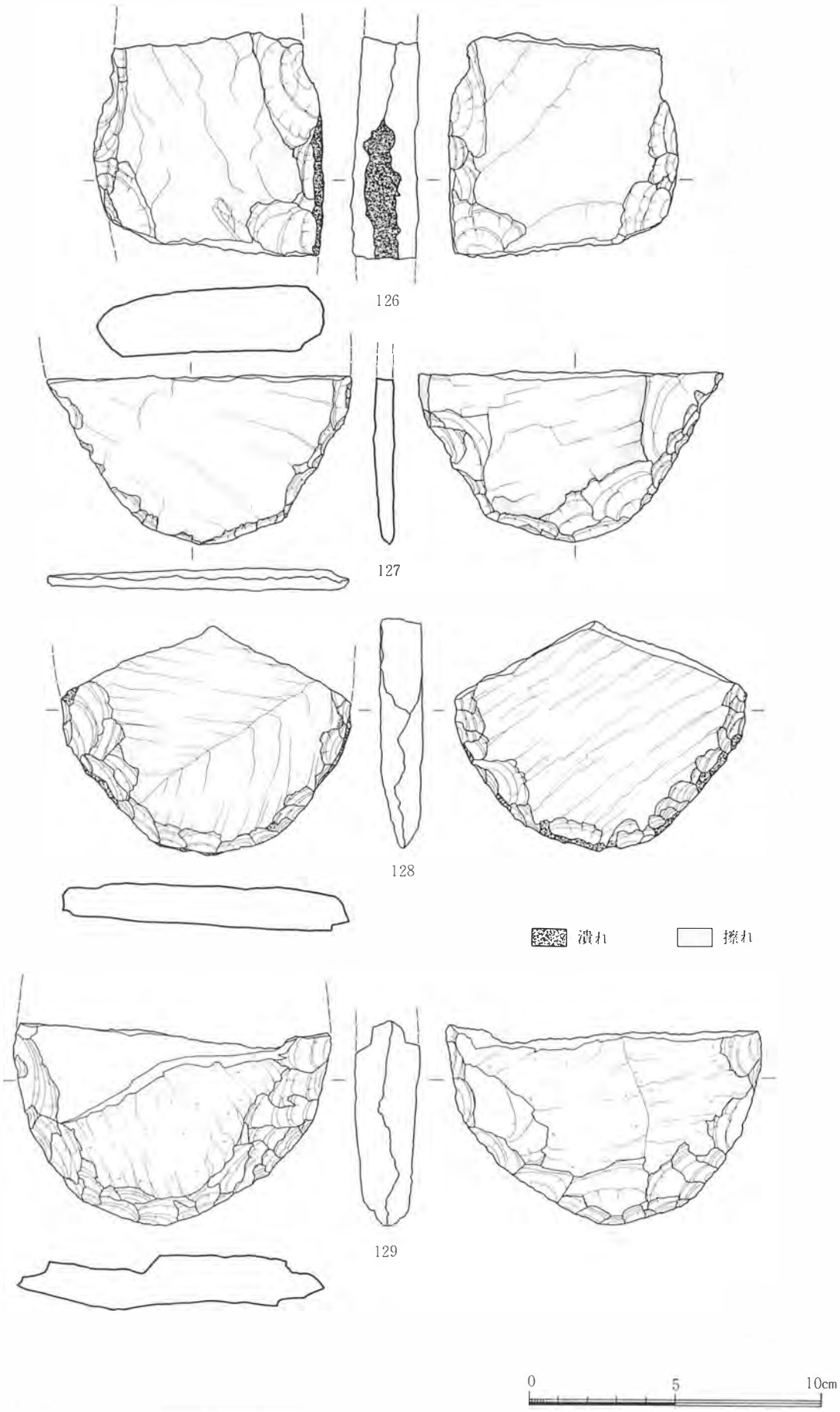
第112図　各調査区出土打製石斧(18)



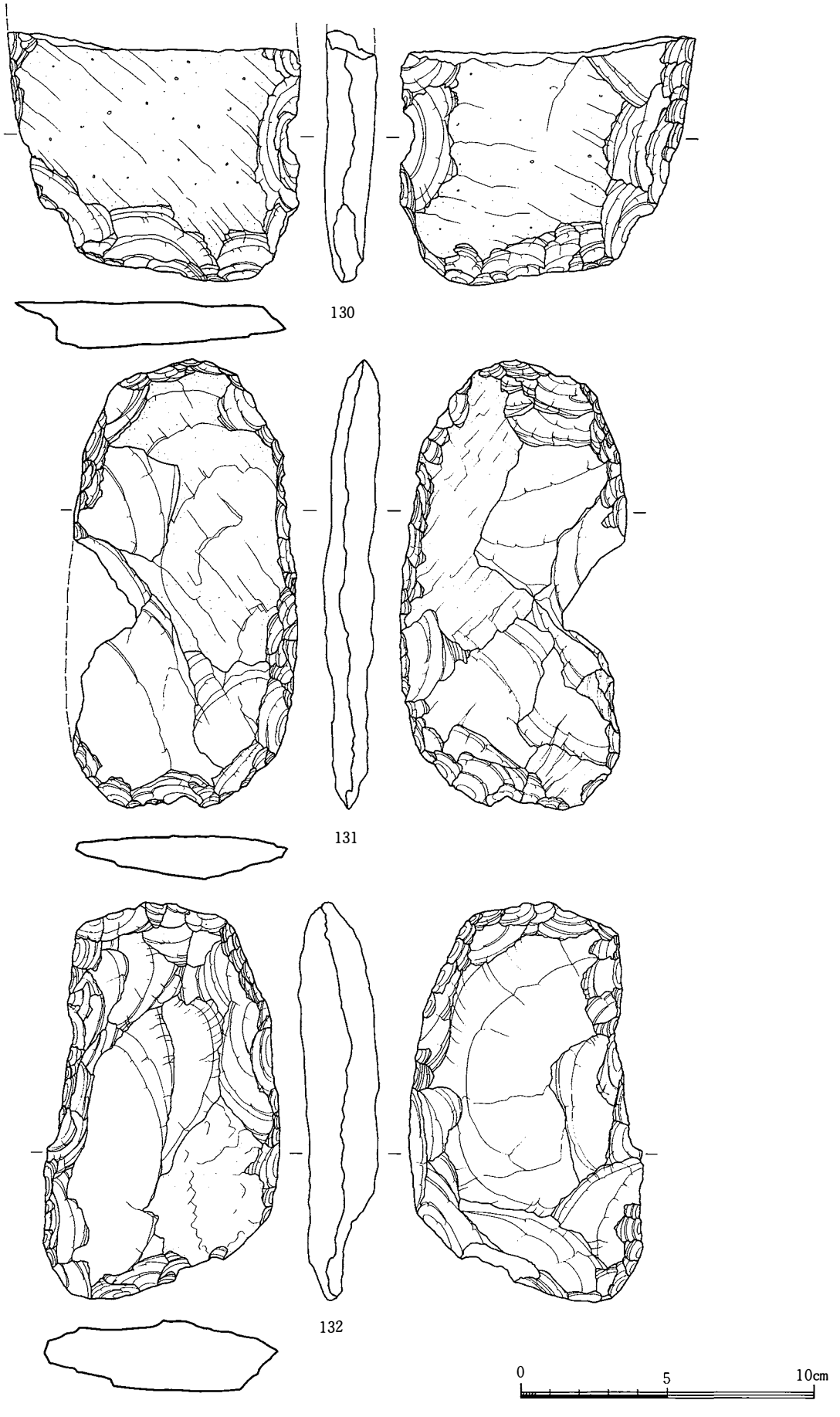
第113図　各調査区出土打製石斧 (19)



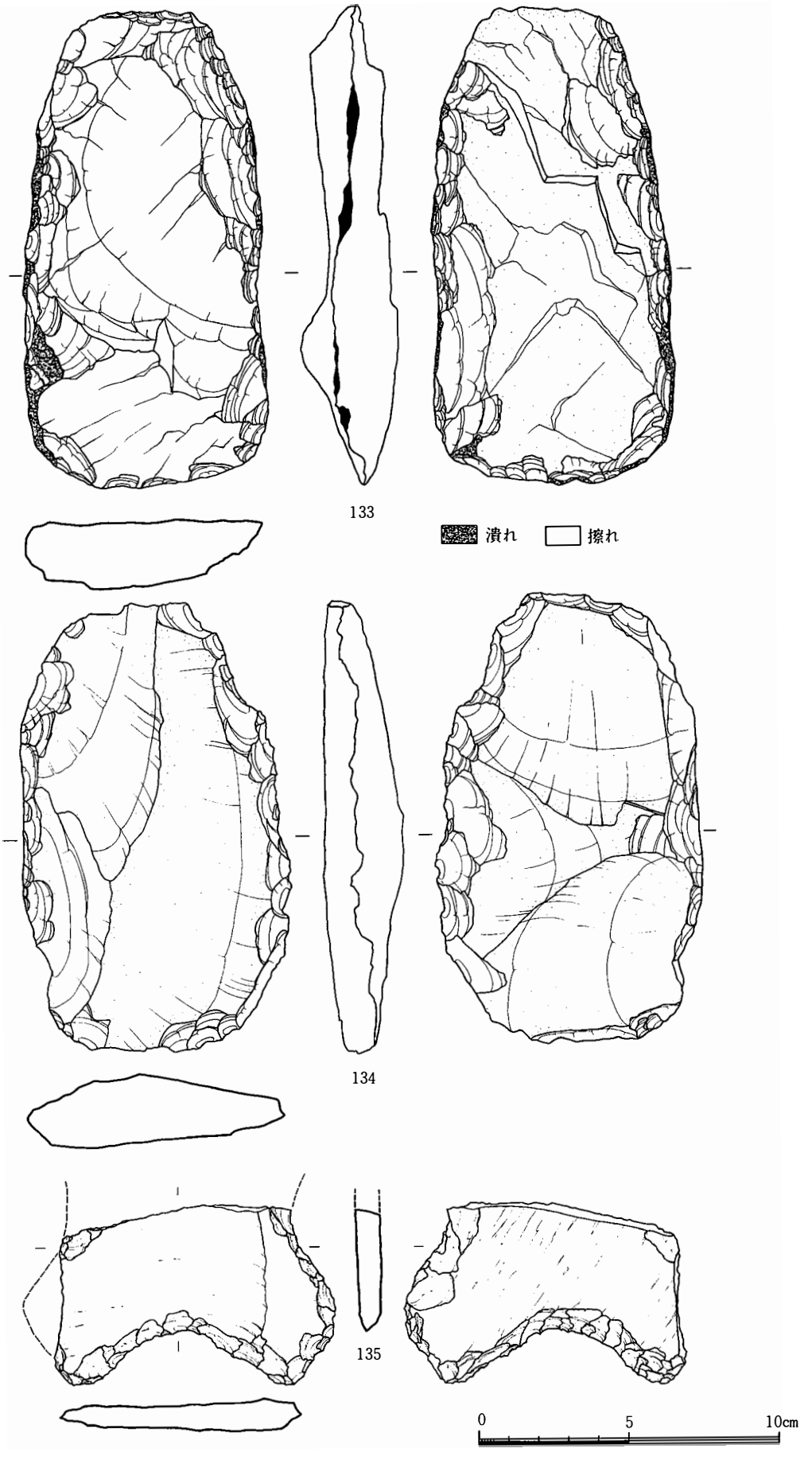
第114図　各調査区出土打製石斧 (20)



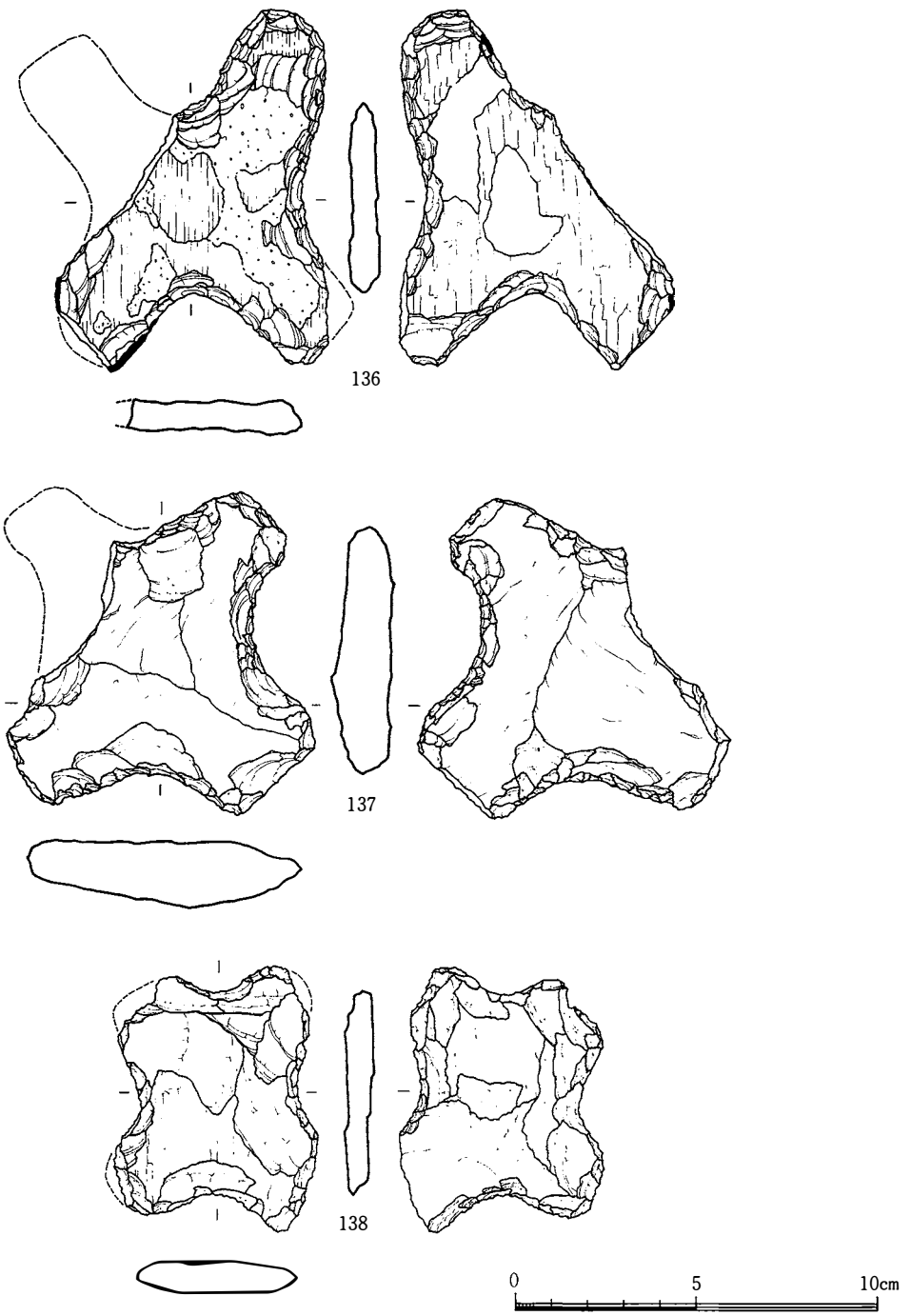
第115図　各調査区出土打製石斧 (21)



第116図　各調査区出土打製石斧(22)



第117図　各調査区出土打製石斧 (23)



第118図　各調査区出土打製石斧(24)

と呼ばれてきたもので、抉りが中位の両側辺にあり、上下両端が刃部になっているものをⅢ-a、従来から「有肩石斧」と呼ばれてきたもので、抉りが上位の両側辺にあるものⅢ-b、抉りが上位の片側にあるものをⅢ-c類とする。総じて、厚みは薄くなっている。いずれも数は少なく、主要な石斧ではない。ただ、その特徴的な形状から他遺跡との比較の上で重要なものとなる。

Ⅳ類（第110図～第111図 95）

Ⅰ類より長さが短くなり、より正方形に近くなる。刃部は上下両端部に限定されることはなく、両側にも刃部が認められる。両刃のものがほとんどであるが、片刃のものがまれにある。厚みは比較的薄い。この類も数は少ないが、その用途を考える上では重要になってくる。

Ⅴ類（第111図 96～第112図 102）

従来から「円盤状石器」と呼ばれてきたもので全周に刃部がまわる。刃部は両刃がほとんどであるが、片刃のものがまれにある。厚みは大きい。

Ⅵ類（第112図 103～107）

全体の形状が楕円形に近い。両側辺に両刃の刃部を外湾するようにつくりだしている。石材は緑色片岩系を利用し厚みを薄くしている。

Ⅶ類（第113図 108～110）

基本的にはⅣ類に近い。両側辺の刃部以外にも両小口部分にも刃部をつけているが抉りをつけている。この類はⅣ類よりもさらに厚みが薄くなっており、石材は緑色片岩を多用している。

Ⅷ類（第113図 111～第114図 122）

石材のほとんどが緑色片岩である。そのため、厚みがなく、かなり薄い。全体の形状は細長い長方形をしているが、湾曲し、先端で尖る鎌状を呈するものと考えられる。刃は湾曲する両側辺に付けられている。抉りの有無で２種に細分した。両側辺に抉りのあるものをⅧ-ａ、抉りがないものをⅧ-ｂとする。なお、現状では折れたものがおおく明確にはしがたい。

Ⅸ類（第114図 123～第117図 134）

明確な基準は提示できないが、これまでの分類された打製石斧の中では、別格に大きいものをこの類とする。したがって、個々は今までの分類の中でとらえられる。

Ⅹ類（第117図 135～第118図）

従来から「十字形石斧」と呼ばれてきたもので、Ａ調査区の柱穴から出土した十字形石製品とは分類を異にした。石材が安山岩であり、細かな整形剝離を施している。ただ、機能として両者に違いがあるのかは不明である。

以上、分類基準を示した。なお、表面には使用の際の「擦れ」や、装着の際の側辺の「潰れ」が認められ、図上にスクリントーンで示した。

⑵　磨製石斧（第119図～第122図 24）

磨製石斧は総数23点を数える。打製石斧と同様に原位置から出土したものはなく、包含層、柱穴、溝、イモ穴などからの出土であった。その分布はかなり明確である。Ａ調査区西端部からＢ調査区にかけてと、Ｃ調査区西端部とに集中している。Ｅ調査区にも見られるが、先述したように整地層のなかからの出土であり、原位置を離れている。

磨製石斧の場合、その所属時期を決定するのは困難である。ただ、縄文時代早期や前期、中期の土器分布と一致することもないのであえて縄文時代後期・晩期でないとはいえない。そのため、ここでは同時期である物も含まれている可能性が高いものとして考えていく。

磨製石斧はその形状、厚み、磨製部位などにより、６類に分かれる。

Ⅰ類（１～４，７，８）

全体の形状は中脹らみの二等辺三角形を呈しており、最大幅が中位にある。基部は丸く尖り、刃部は両刃で直線に近い。磨きは丁寧で全面に及ぶ。厚みはかなりあり、断面形は楕円形に近い。４の資料は整形の際の叩打痕跡をわずかに残す。

Ⅱ類（５，６）

全体に細長い二等辺三角形をしており、側辺は直線状をし、最大幅は刃部に近いところにある。厚みは厚く、断面形は円形に近い。５の資料は叩打痕跡を中位から基部にかけて全面に残している。

Ⅲ類（９～14，21）

基部が欠損しているものがほとんどなので全体の形状は不明であるが、側辺の状態から推測すれば長方形に近いいわゆる「短冊形」をしている可能性が強い。この類の最大の特徴は厚みにある。断面形を見ればわかるように、偏平で薄い。刃部は両刃になっており、円刃に近い。磨きはそれほど丁寧ではなく、整形の際の剝離痕を残したままである。

Ⅳ類（15～18）

形状としてはⅡ類に近いが、断面形が方形に近く、表裏が平坦な面となって、側辺と表裏面との境が稜線を作りだしている。この類も整形の際の剝離痕跡をのこしたままの磨きである。

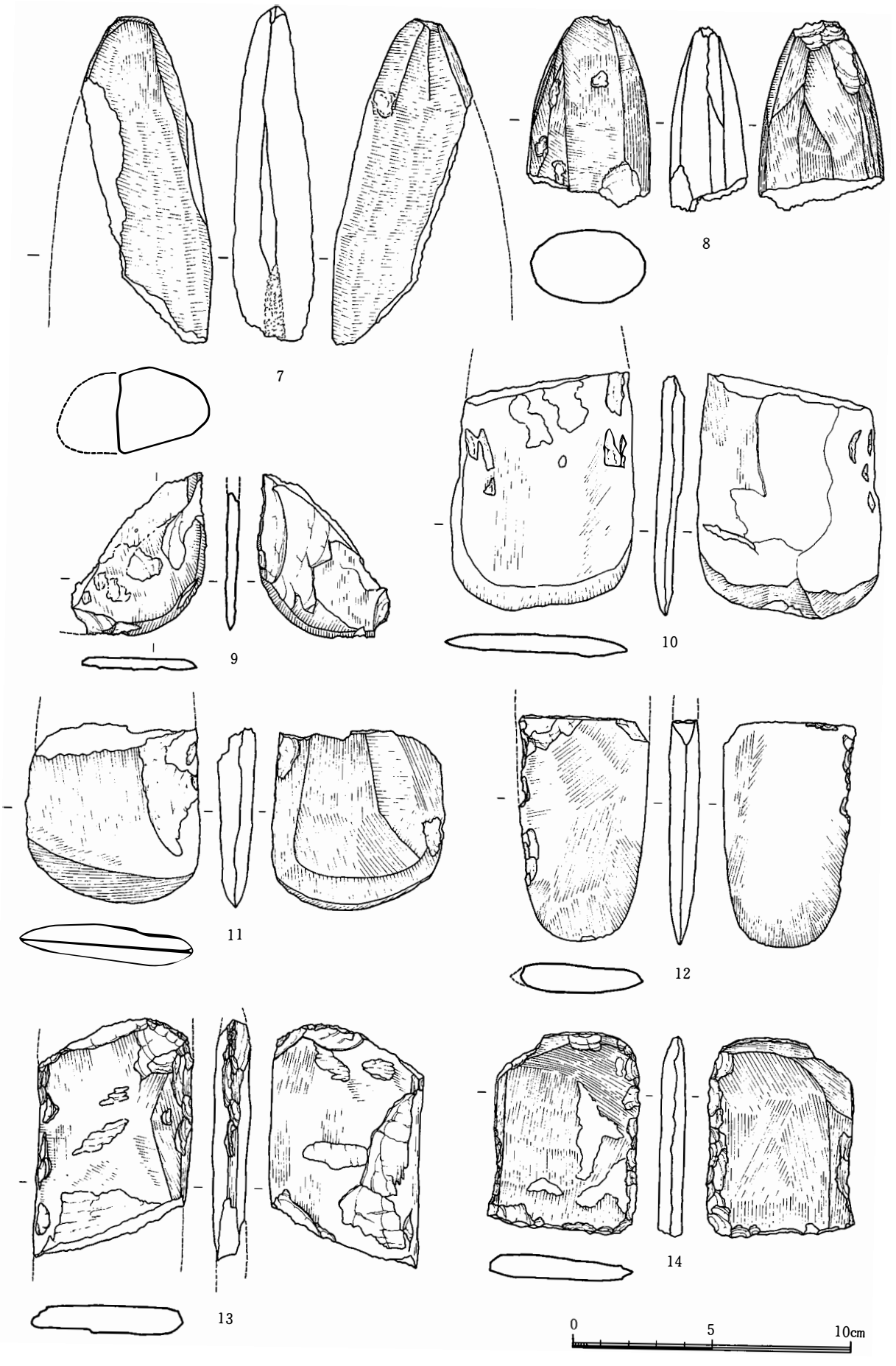
Ⅴ類（17，18）

Ⅳ類を小型化したものといってよい。側辺は明確に平坦な面をなしており、Ⅳ類の特徴を継承している。17は自然礫をそのまま磨き基部は磨いていないが、側辺の磨きだけは忘れず行っている。

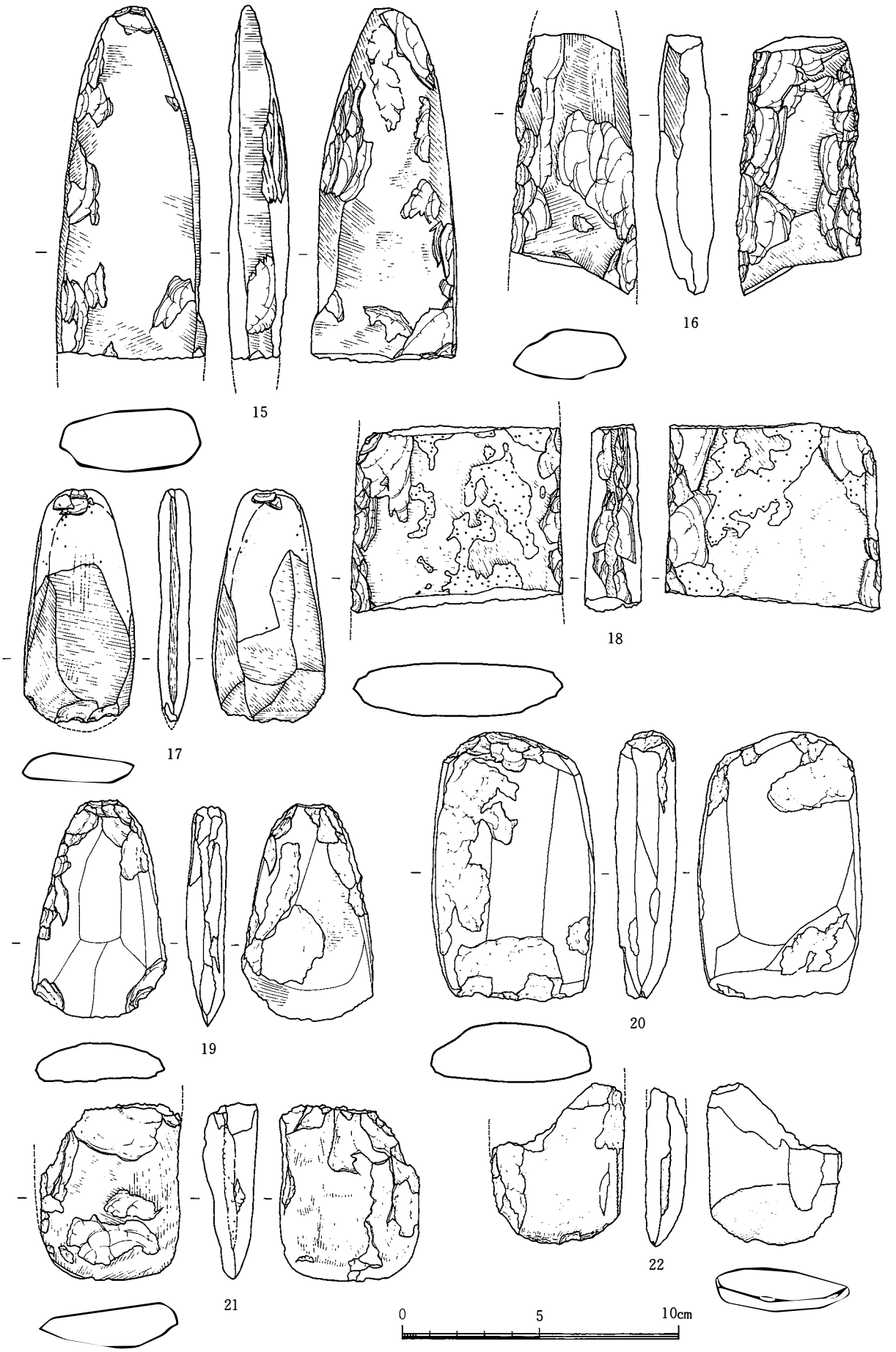
Ⅵ類（20，22～24）

全体の形状は方形で縦幅は短い。断面形も方形に

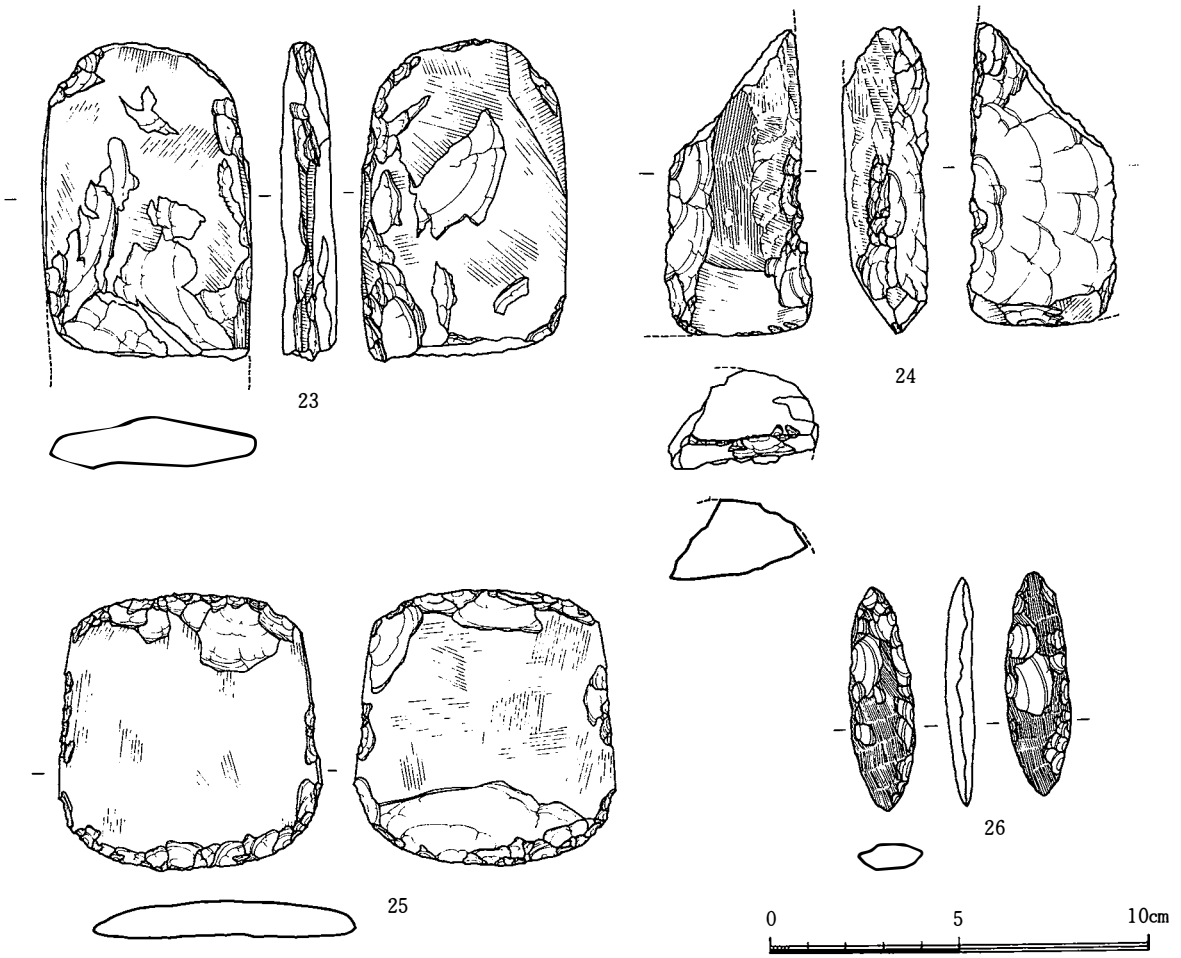
第119図　各調査区出土磨製石斧(1)



第120図　各調査区出土磨製石斧 (2)



第121図　各調査区出土磨製石斧(3)



第122図　各調査区出土磨製石斧及び磨製石器(4)

近く側辺と表裏面との境が明確で稜線を作っている。刃は両刃であるが、一面の方が深い面取りになっている。また、刃先は湾曲している。いわば「かんな」の刃の形状によく似ている。表面には整形の際の剥離痕が残されたままである。

なお、25はおそらくⅢ類の石斧を転用した打製石斧と考えられる。また、26は整形剥離のあと前面を磨いて尖頭器状にしあげたもので、磨製尖頭器とも言えるものである。弥生時代の磨製石鏃とは形状が全く異なっている。

以上、磨製石斧について分類したが、この中で、Ⅰ、Ⅱ類は形状や磨きの状態、叩打技法の存在から縄文時代前期から中期にかけての型式と考えていいと思われる。したがって、もし、後期・晩期の石斧を考える場合、Ⅲ類からⅥ類の石斧がその有力な候補と考えていいだろう。

その特徴は整形剥離を残したままの粗い磨き。偏平さというより、表裏が平坦な面をなし、側辺を表裏面に対して直角方向に面を形作っていることである。

(3) 石　　鏃（第123図～第126図）

総数200点近くが遺跡全域から出土した。その分布を見ると、Ａ調査区、Ｃ調査区西半部、Ｅ調査区に集中している。石鏃の出土状況も打製石斧や磨製石斧と同様に原位置からのものではない。

石鏃はその形状から、大きく３類に、それをまた細分し、全体で10類に分類した。

Ⅰ類（第123図　1～3）

全体の形状が二等辺三角形をしている平基式の石鏃である。両側辺はわずかにふくらみながら先端に続く。ほとんどの資料が表裏面の一部に素材の際の剥離面を残している。

Ⅱａ類（第123図　4～13）

全体の形状が正三角形をしている凹基式の石鏃である。凹基の状態はわずかに内湾する程度である。

両側辺は外湾しながら先端に続く。ほとんどの資料が表裏面の一部に素材の際の剝離面を残している。

Ⅱｂ類（第123図 14～18）

全体の形状が二等辺三角形をしている凹基式の石鏃である。凹基の状態はわずかに内湾する程度である。両側辺は直線的に先端に続く。この類は素材の際の剝離面を残すものは少ない。

Ⅲａ類（第123図 19～21，第124図 22～33，43）

全体の形状が正三角形をしている凹基式の石鏃である。凹基の抉りは内湾状をしており、全長の1/4まで達している。両側辺は外湾しながら先端に続く。この類も素材の際の剝離面を残すものは少ない。なお、Ⅲａ類は29、30のように側辺が先端近くで内湾ぎみになり、先端を強く尖らすようにしたものや、両側辺が２ヵ所で角張り全体の形状が７角形に近くなったものなどが見られ、細分が可能である。

Ⅲｂ類（第124図 34～42）

全体の形状が二等辺三角形をしている凹基式の石鏃である。凹基の抉りは三角状をしており、全長の1/3まで達している。両側辺は直線的である。Ⅲａ類に比べ、二つの脚部が長くなり、尖る。38、39はまだ未製品の段階であろう。素材の際の剝離面を残すものは少ない。

Ⅲｃ類（第125図 44～49，51～60）

基本的な特徴はⅢｂ類と共通するが、側辺がその中位で最大幅になるように外湾しながら先端に続いており、二つの脚部が外に突き出た形ではなく、内側に向かっている。その中で、51と60はやや異形である。

Ⅲｄ類（第125図 50,61～64,第126図 66,67,72,73）

全体の形状が二等辺三角形をしている凹基式の石鏃である。凹基の抉りはアーチ状をしており、抉り自体はそれほど深くはない。両側辺は直線状をしている。この類の最大の特徴は両脚部の先端が尖らず、水平になっていることである。なお、72、73は側辺が外湾し、しかも中位から屈曲しているため全体の形状が５角形を見せている。

Ⅲｅ類（第126図 69～70）

Ⅲｄ類の縦の長さが短くなり、全体の形状が正三角形になったものである。凹基の抉りは浅いアーチ状をしている。

Ⅲｆ類（第126図 76～81）

いわゆる「鍬形鏃」と呼ばれるもので両脚部が長く伸びた形状をしている。なお、この類はⅢａ類との区別が困難な資料が多い。

Ⅲｇ類（第126図 74，75，82～86）

全体の形状はⅢｃ類と同様であるが、側辺の形状が異なっている。側辺が下位において屈曲し角張っている。屈曲部から先端にかけては内湾しながら続いており、両脚部が三角状に突き出たようになっている。

以上、石鏃をその特徴により分類してきたが、分類されたものの所属時期は明らかではない。ワクド石遺跡では縄文時代早期から晩期までの土器が出土している。そのため、全ての時期の石鏃が含まれている可能性がある。ただ、土器の分布と石鏃の分布の違いから、後期から晩期の石鏃をある程度推測することはできそうである。

縄文時代早期から中期までの土器の分布が見られない地域はＡ調査区とＣ調査区のＣ・Ｄ・Ｅ-16・17区である。

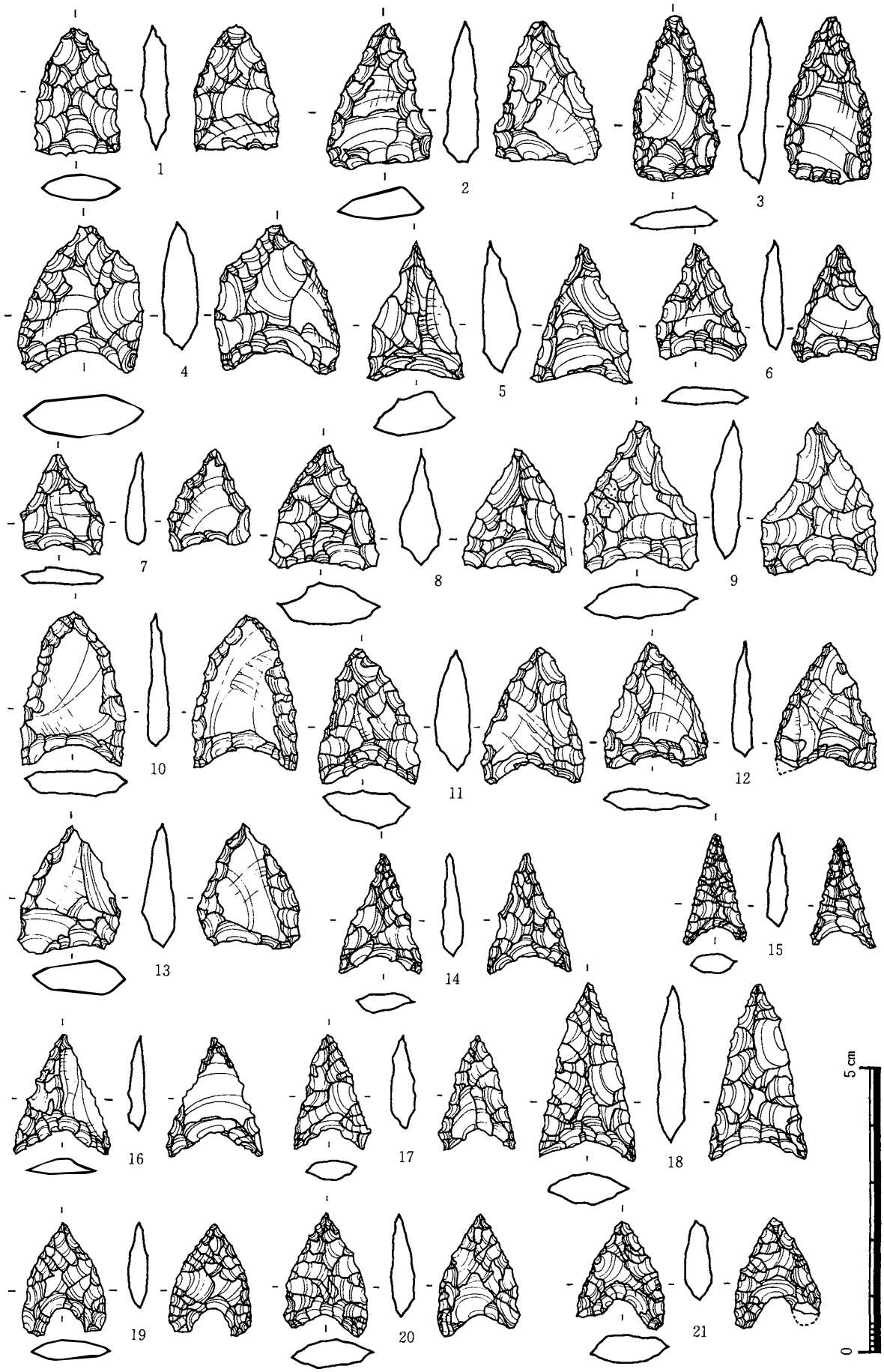
石鏃の分布からその地域で出土したものを抽出し、さらに包含層からのものを取り出すと、上記の分類のⅡａ、Ⅱｂ、Ⅲａ、Ⅲｂ類であることがわかった。いずれも小型の石鏃であり、一つの特徴であろうか。

⑷　クサビ形石器（第127図，第128図）

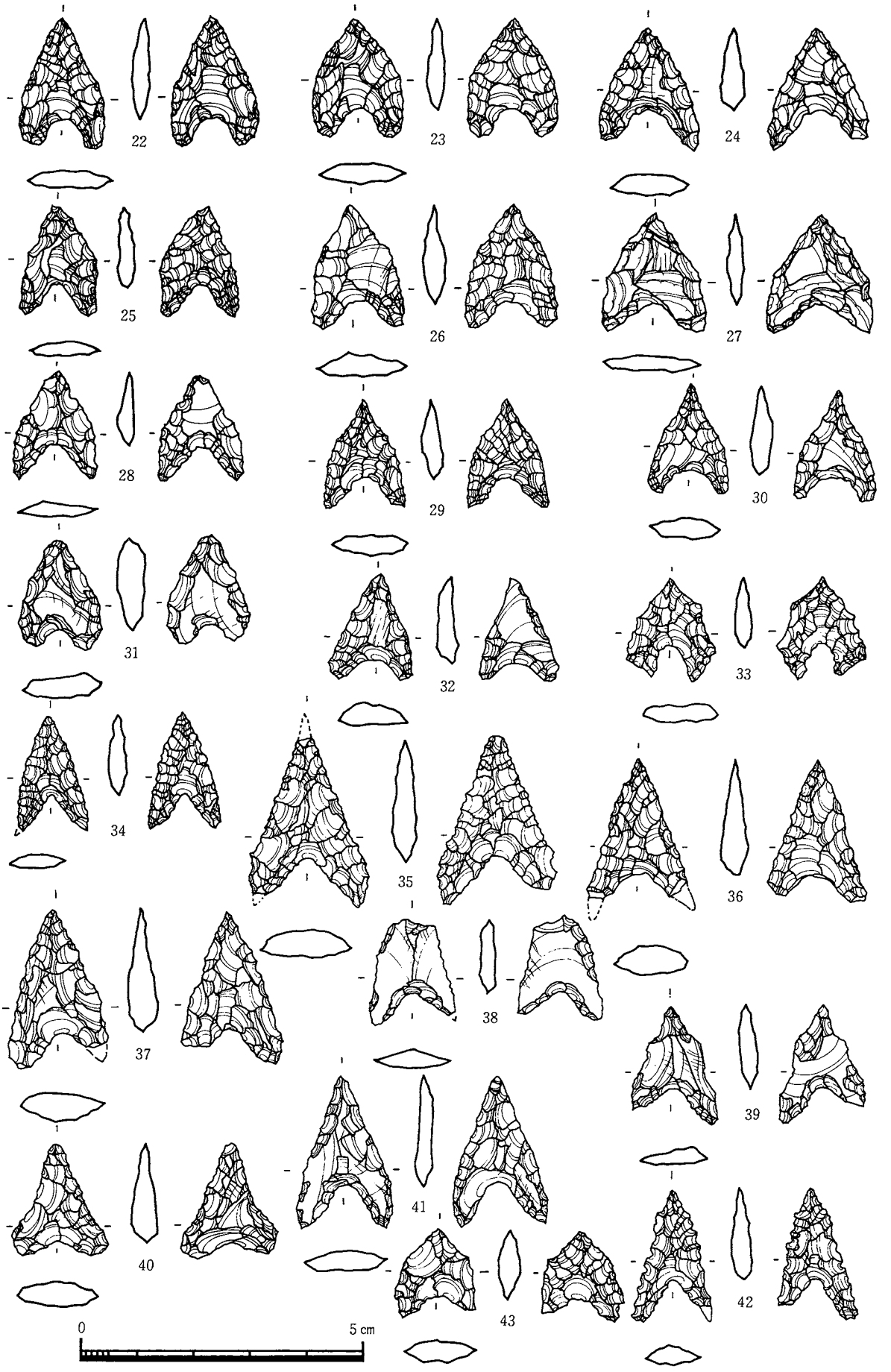
総数173点が出土した。欠損したものが多く、その中で欠損していないものを掲載した。分布はほぼ全域から出土するが、Ａ調査区では数も少なく、分布の中心から外れているようだ。

クサビ形石器は基本的に四角形をしており、相対する側辺に細かく潰れたような剝離痕が無数に見られる。この剝離痕は両極技法によるものと考えられており、用途がクサビのように対象物とハンマーの間で使用される道具とされている。また、この石器の特徴として両側辺には上下両端からの縦に長い剝離痕（樋状剝離）がみられる。おそらく使用によって生じた剝離であろう。

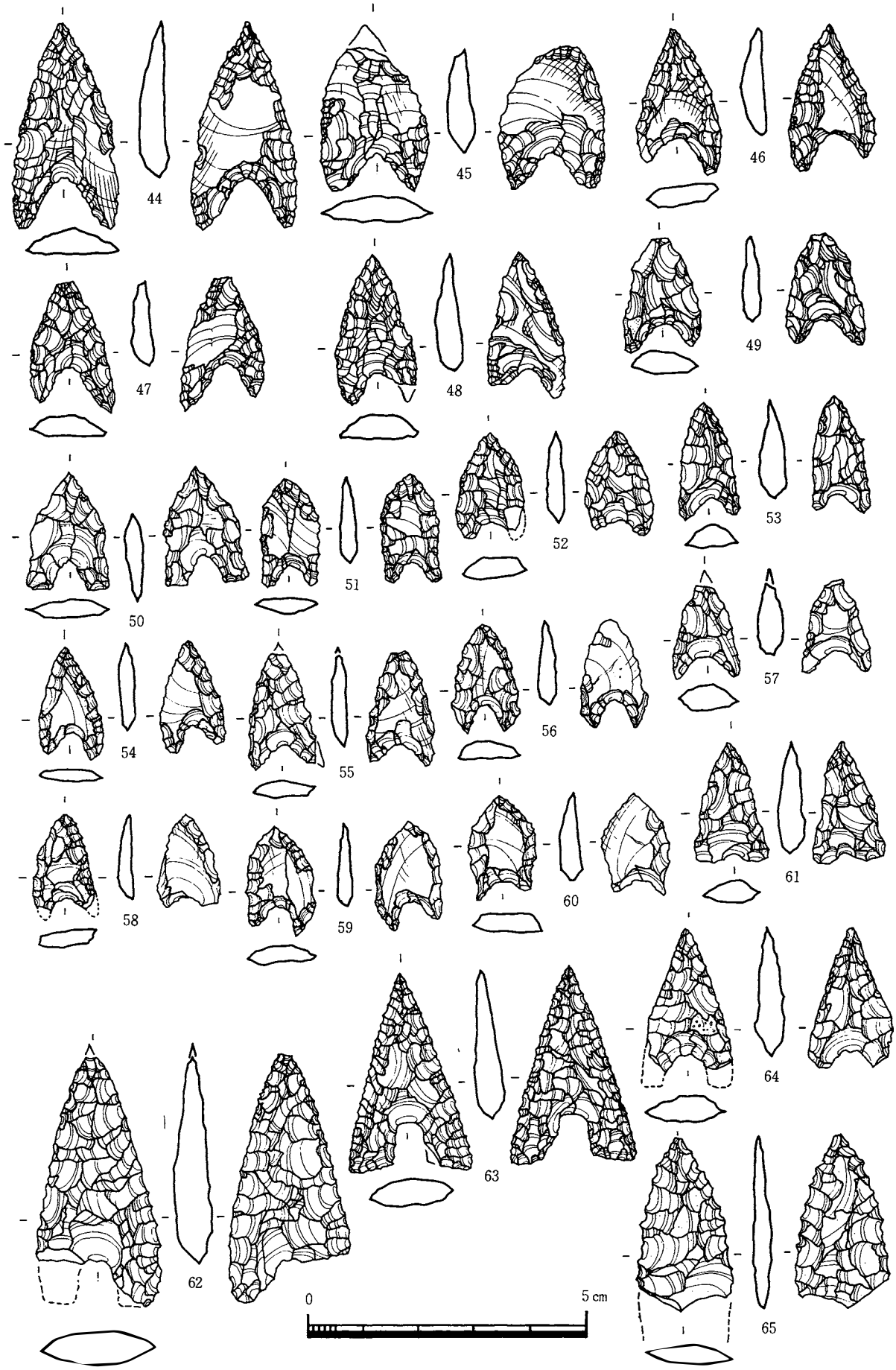
この石器は旧石器時代から縄文時代にかけて使用



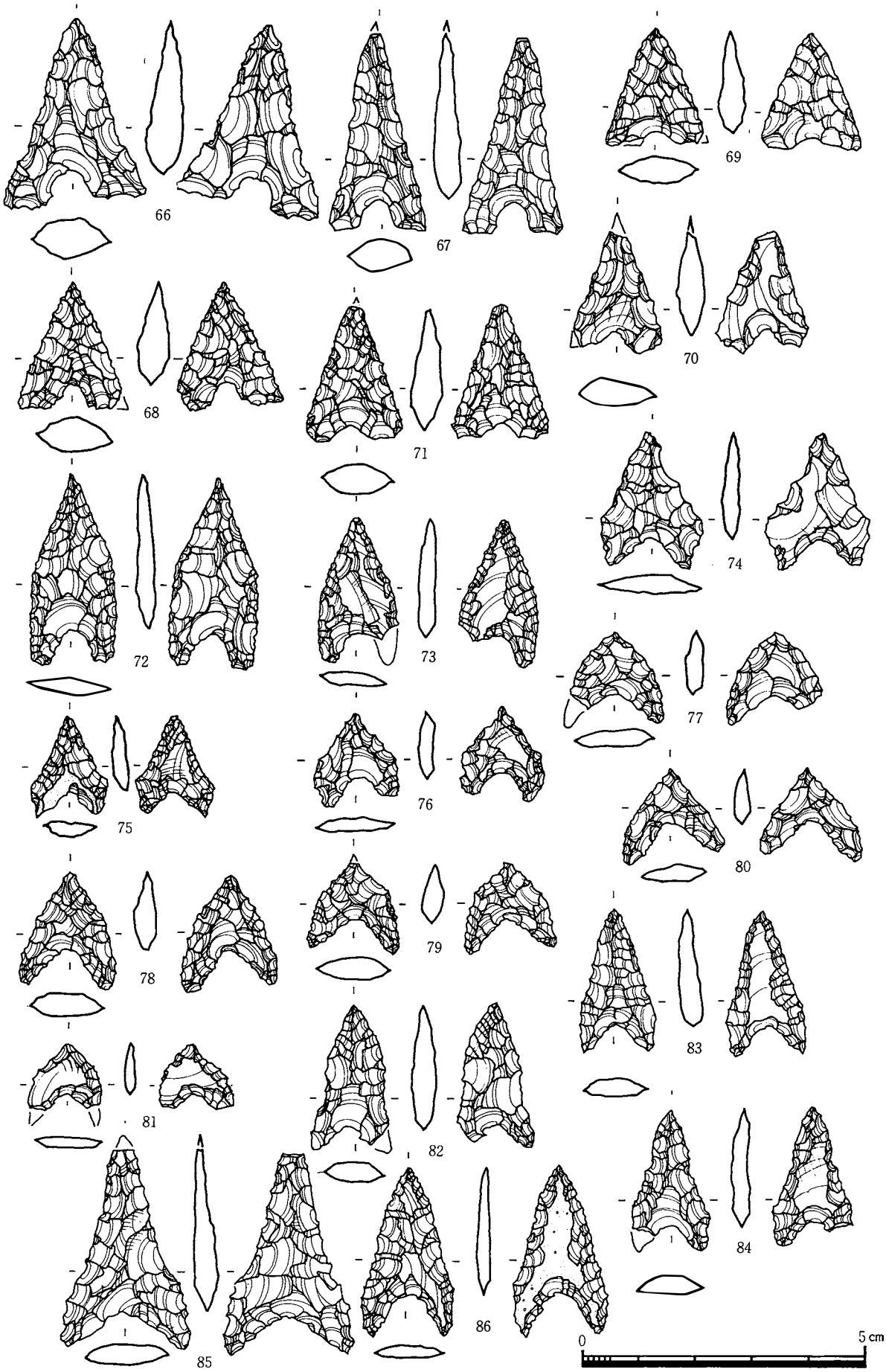
第123図　各調査区出土石鏃（1）



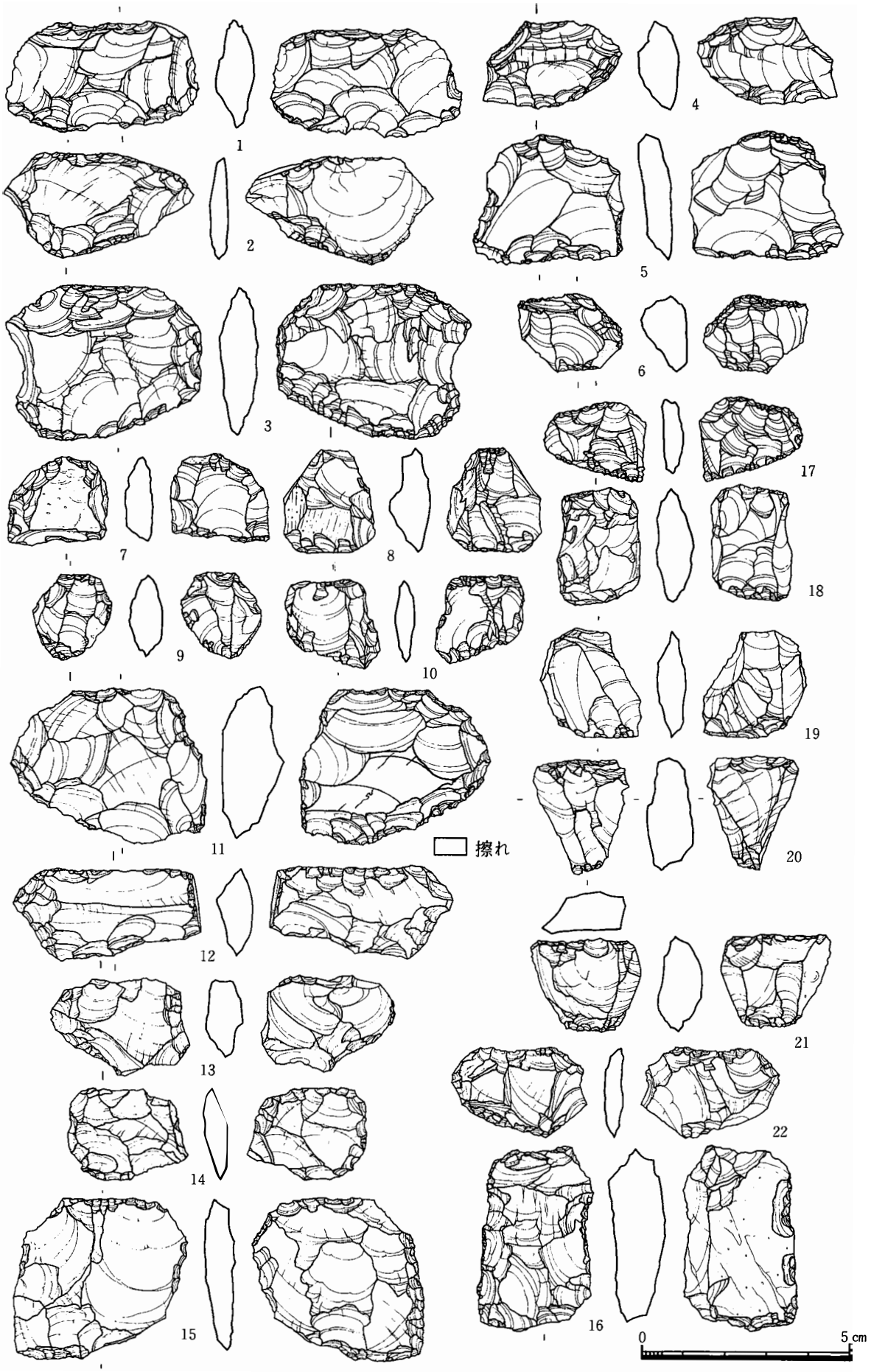
第124図　各調査区出土石鏃(2)



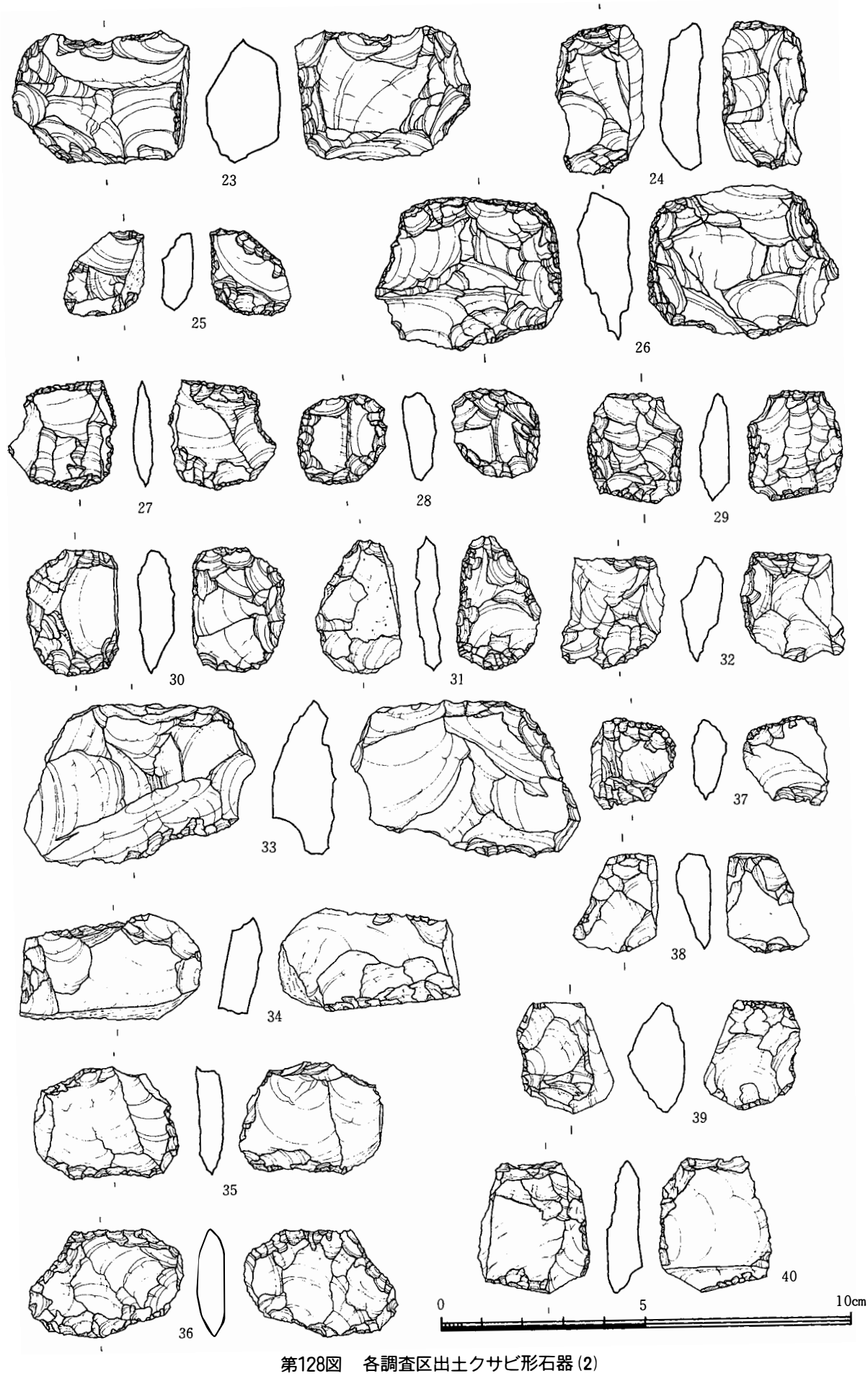
第125図　各調査区出土石鏃（3）



第126図　各調査区出土石鏃(4)



第127図　各調査区出土クサビ形石器（1）



第128図　各調査区出土クサビ形石器(2)

されたようで、非常に息の長い石器と言える。このためワクド石遺跡のどの土器型式に伴うものかは全く不明である。ただ、石鏃と同じく土器の分布傾向から、同時期の型式が抽出できるかもしれない。

クサビ形石器は細かく潰れた剥離痕の部位と両側辺の樋状剥離の有無で５つに分類できる。

Ⅰ類（第127図 １～10）

上下両端に細かく潰れた剥離痕があるもので、樋状剥離はない。

Ⅱ類（第127図 11～15，第128図 25～29）

上下両端および左右両端からも細かく潰れた剥離痕がみられるもので、樋状剥離はない。

Ⅲ類（第128図 17～22，35～40）

左右両側辺か、どちらか一側辺に使用による樋状剥離が認められるもので、他の側辺は細かく潰れた剥離痕が見られる。

Ⅳ類（第127図 16，第128図 23，24，31）

左右どちらかの一側辺に樋状剥離が認められるものの、その後その側辺からも細かく潰れた剥離が加えられているもので結果として上下両端、左右両端に細かく潰れた剥離痕が見られることになる。

Ⅴ類（第128図 32～34）

樋状剥離は認められないものの、三側辺に細かく潰れた剥離痕が見られる。すなわち残りの一側辺は素材の際の剥離痕が残されている。

以上、分類基準を示したが、この分類は使用段階による分類に近く、編年的な意味はあまり持たないものと考えられる。

⑸　ドリル・スクレイパー（第129図，第130図 24）

ドリル13点、スクレイパー27点の出土である。分布の傾向で特に特徴的なものはない。ただ、Ａ調査区およびＢ調査区ではほとんど出土しておらず、太郎迫式期には伴わないことを示しているのだろうか。

以下、分類基準を示すほどの点数が出土していないため、個々を説明する。

１～９までがドリルである。１、２は黒曜石製のもので、先端がつるつるになるほど磨耗している。特に２は先端から１㎝ほどが同じ太さになっており、かなり硬いもので、同じ大きさの穴の作成に繰り返し使用されたことを物語っている。９は未製品であろう。

スクレイパーは定型的なものとして３種、それに剥片の側辺の形状をそのまま生かしたものが見られる。

10～15までは従来から「石匙」と呼ばれてきた石器である。10～12の縦型のものと13～15の横型のものがある。13はチャート製のもので特に刃部を限定しておらず、装飾品の可能性もある。

17～20は剥片の側へんに内湾する刃部を作りだしたもので、19などは両側辺に作りだしている。16、第130図21～24は剥片の側辺の形状をあまり変えずに刃部を作りだしている。ほとんどが直刃であるが、22は外湾刃になっている。

⑹　使用痕のある剥片（第130図 25～第133図）

総数107点が出土した。主に縦長剥片の側辺に使用によって付いたと考えられ細かな剥離痕が残されたものである。これは意図的に剥離をして刃を付けたのではないため、剥離は規則的なものではなく不連続であり、側辺の形状に沿ったものとなっている。

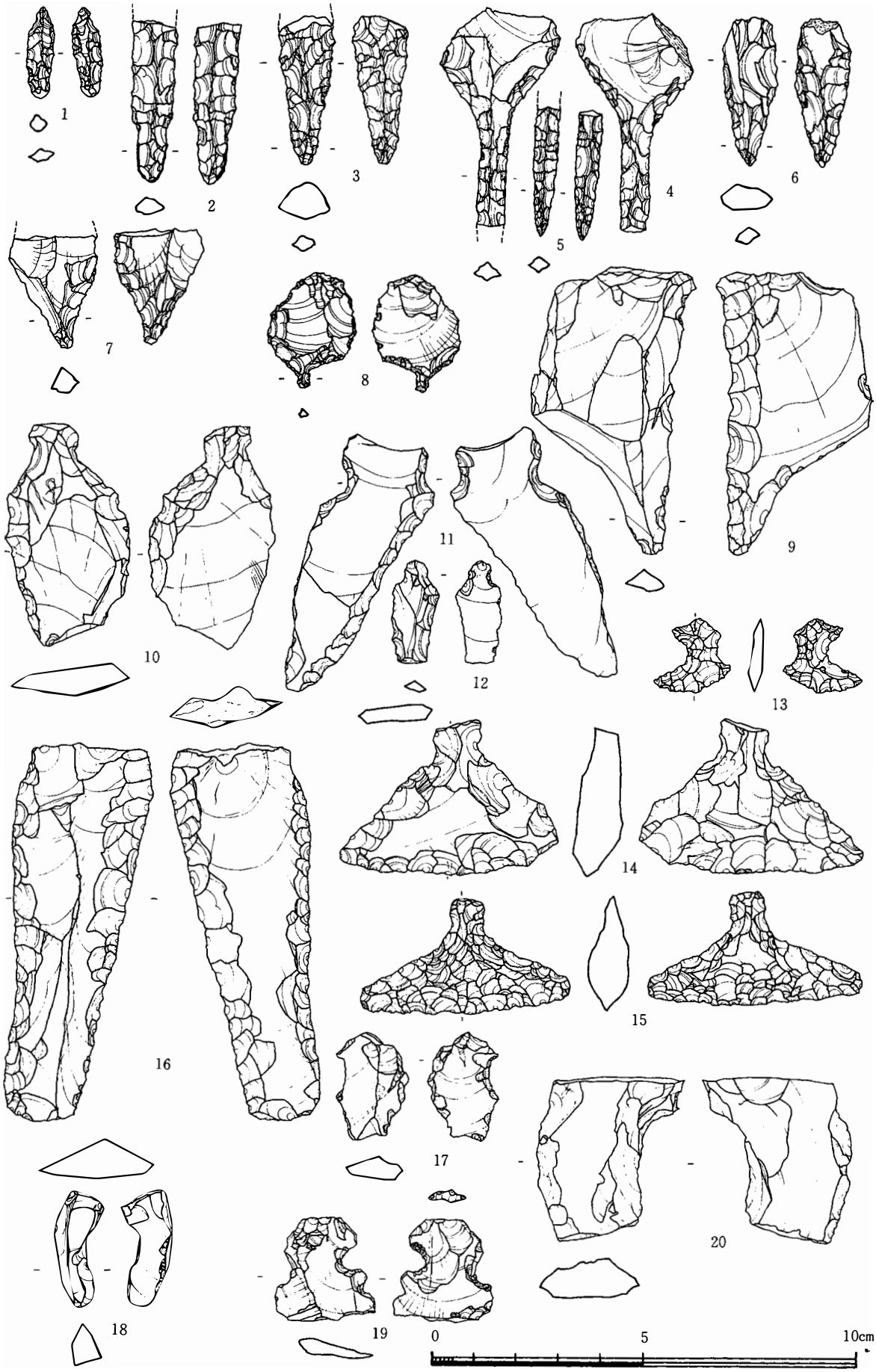
ただ、資料によっては剥離がかなり大きな角度になるまで使用しており、機能的にはスクレイパーと同じような役割を果たしているものもあるようだ。

石材には25～33、35のようにサヌカイト（佐賀県多久市周辺産出のものか？）のものと、34、36～62のように良質の黒曜石のものがある。この黒曜石は佐賀県伊万里市の腰岳で産出するものであろう。

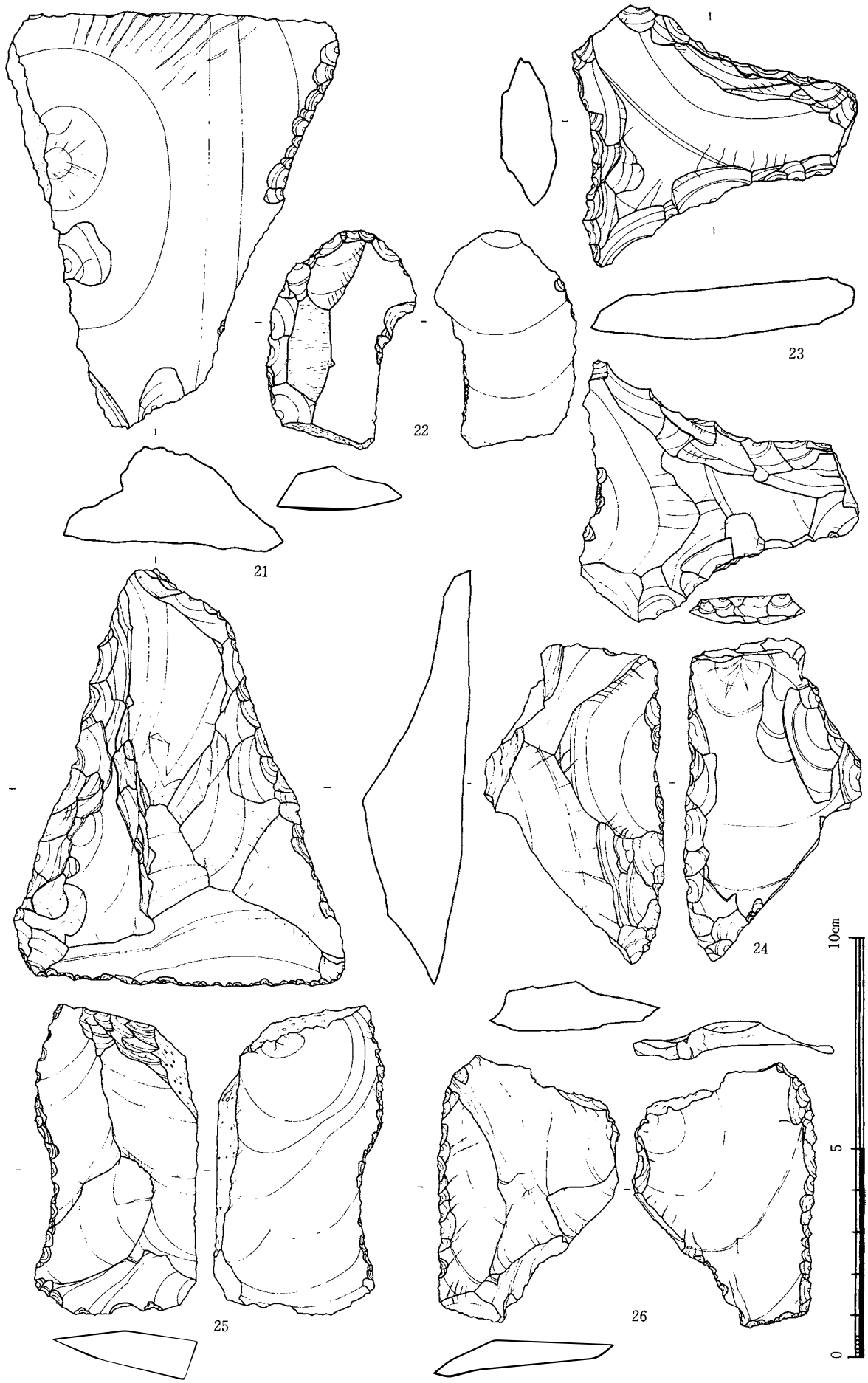
両者とも縦長剥片がほとんどであり、特に黒曜石製のものは旧石器時代に見られるような石刃状のものであり、長さ、幅、厚みとも規格的である。また、この剥片の特徴は剥片の打面にある。面としての打面を持つものはほとんどなく、打面が稜となっているものがほとんどである。

使用痕のある剥片の遺跡内における分布は石材によってかなり異なっている。

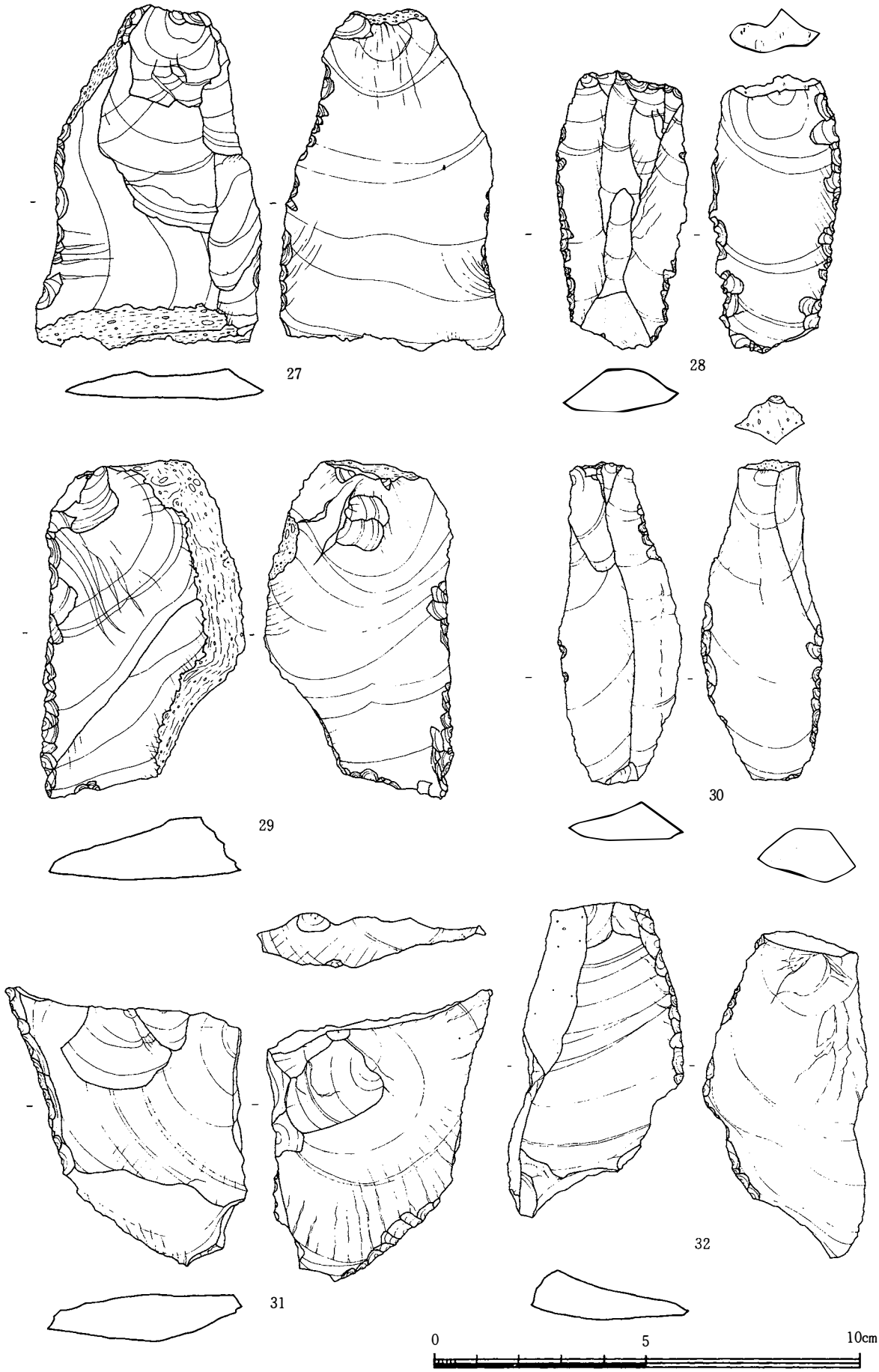
サヌカイト製のものはＡ調査区中央部、Ｃ調査区西側部、Ｅ調査区を中心にみられる。黒曜石製のものはＢ調査区中央部、Ｃ調査区西端部、Ｅ調査区を中心に見られる。先述したようにＥ調査区のものは



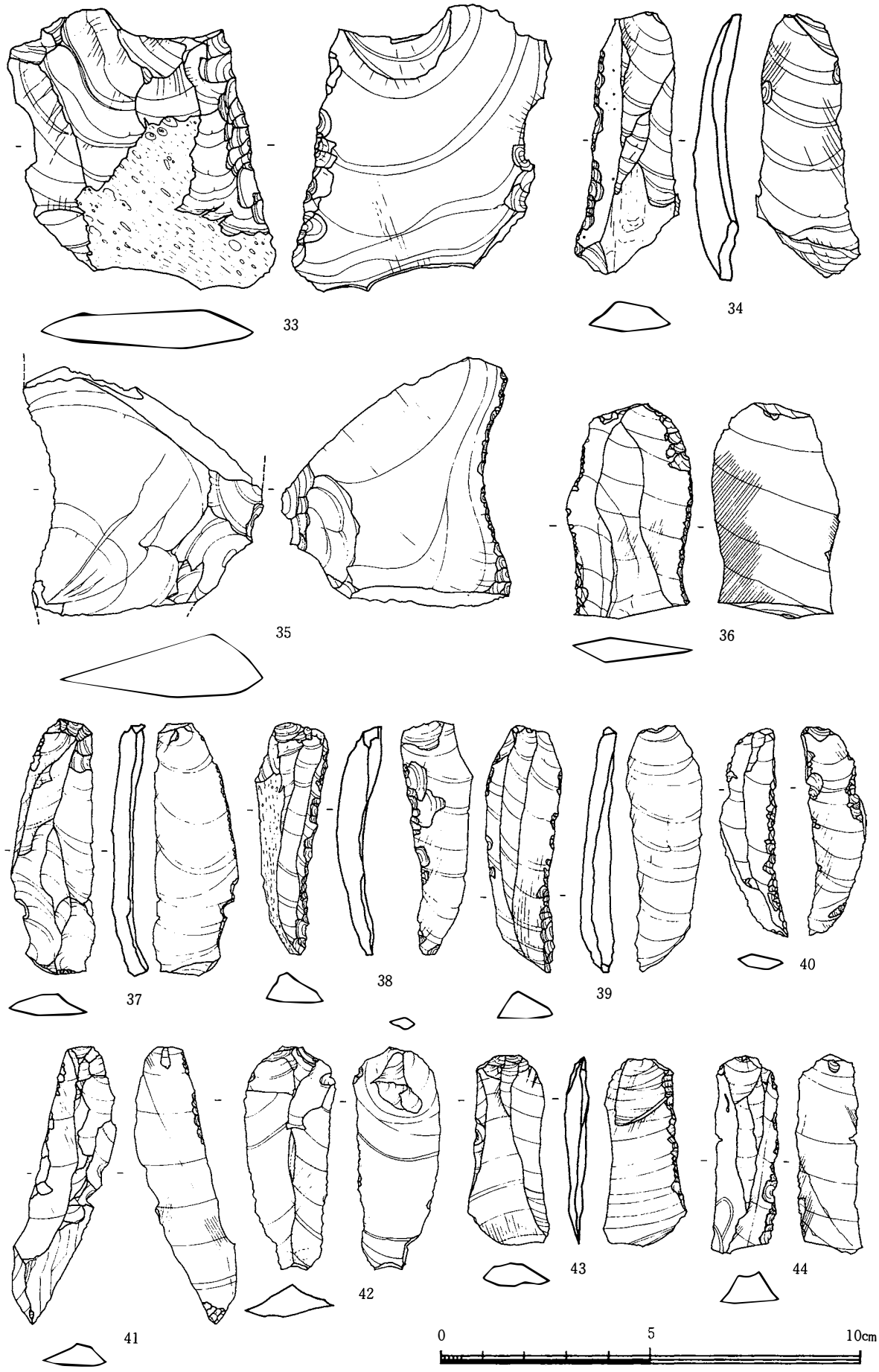
第129図　各調査区出土ドリル・スクレイパー(1)



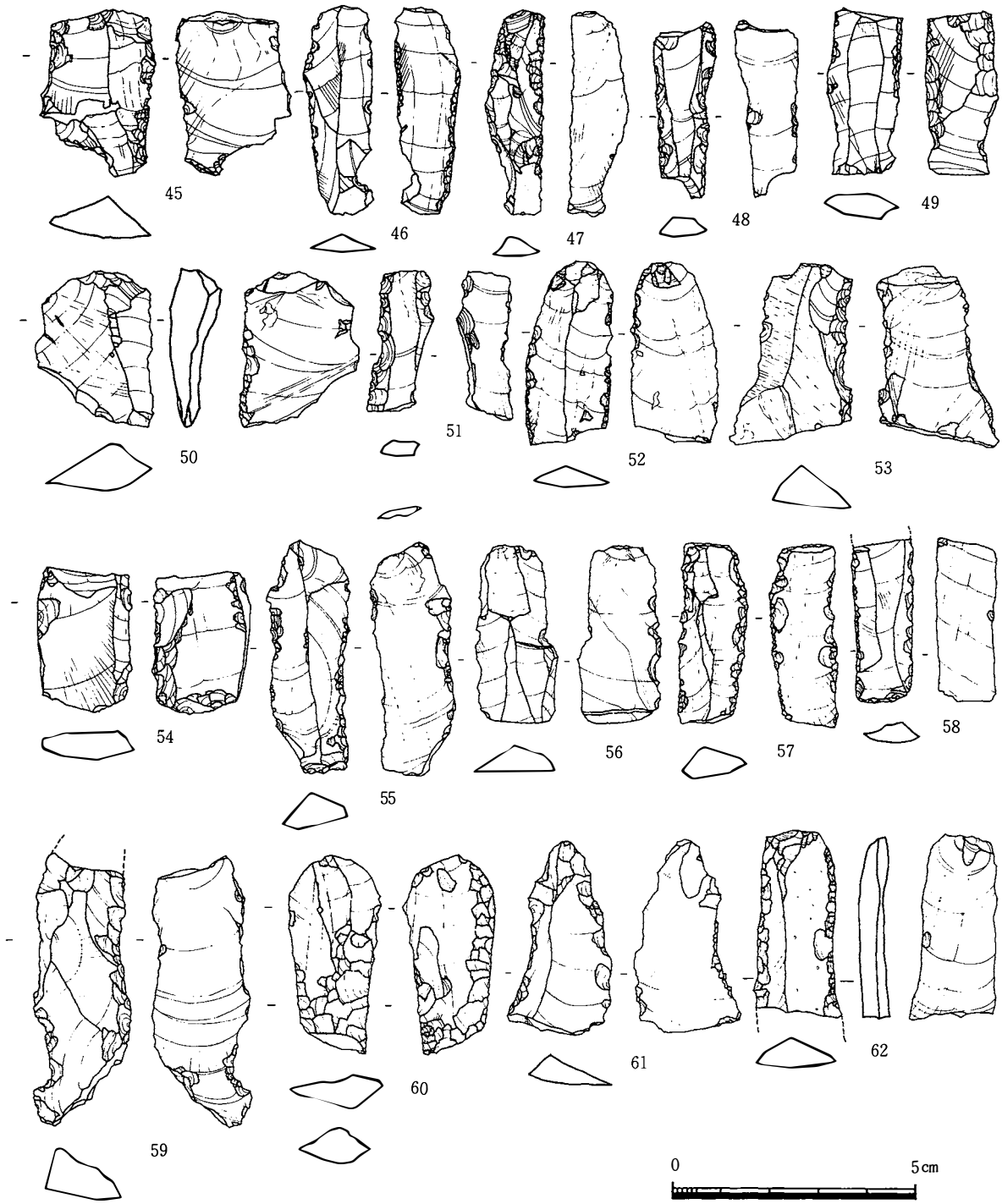
第130図　各調査区出土スクレイパー(2)・使用痕のある剥片(1)



第131図　各調査区出土使用痕のある剝片(2)



第132図　各調査区出土使用痕のある剥片(3)



第133図　各調査区出土使用痕のある剥片(4)

整地層からのものであり、原位置をかなり動いていると考えられる。E調査区を除けば、サヌカイト製のものはA調査区中央部とC調査区西側部に同等に分布しているようだ。黒曜石製のものは特にC調査区西端部に集中している。

(7) 石　　核（第134図～第136図）

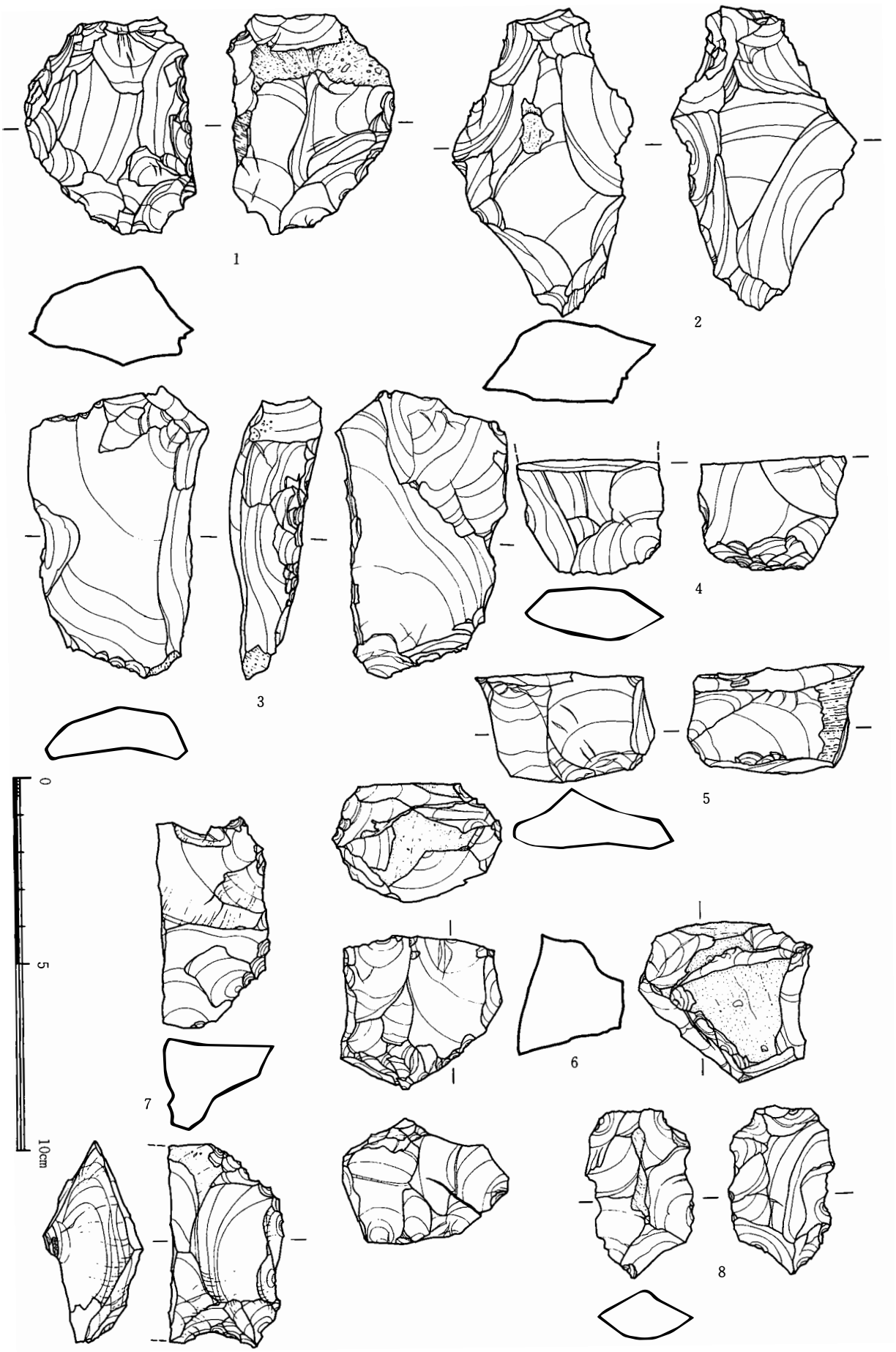
総数150点近くが出土した。石核も他の石器と同様にどの時期のものかを判断するのは非常に困難である。

石核の石材は黒曜石(大分県姫島産のものを含む)のものが2/3近くを占めている。その次に多いのが安山岩となっている。この他に剥片で見られたようにチャート、石英、頁岩などの石核が少数見られる。

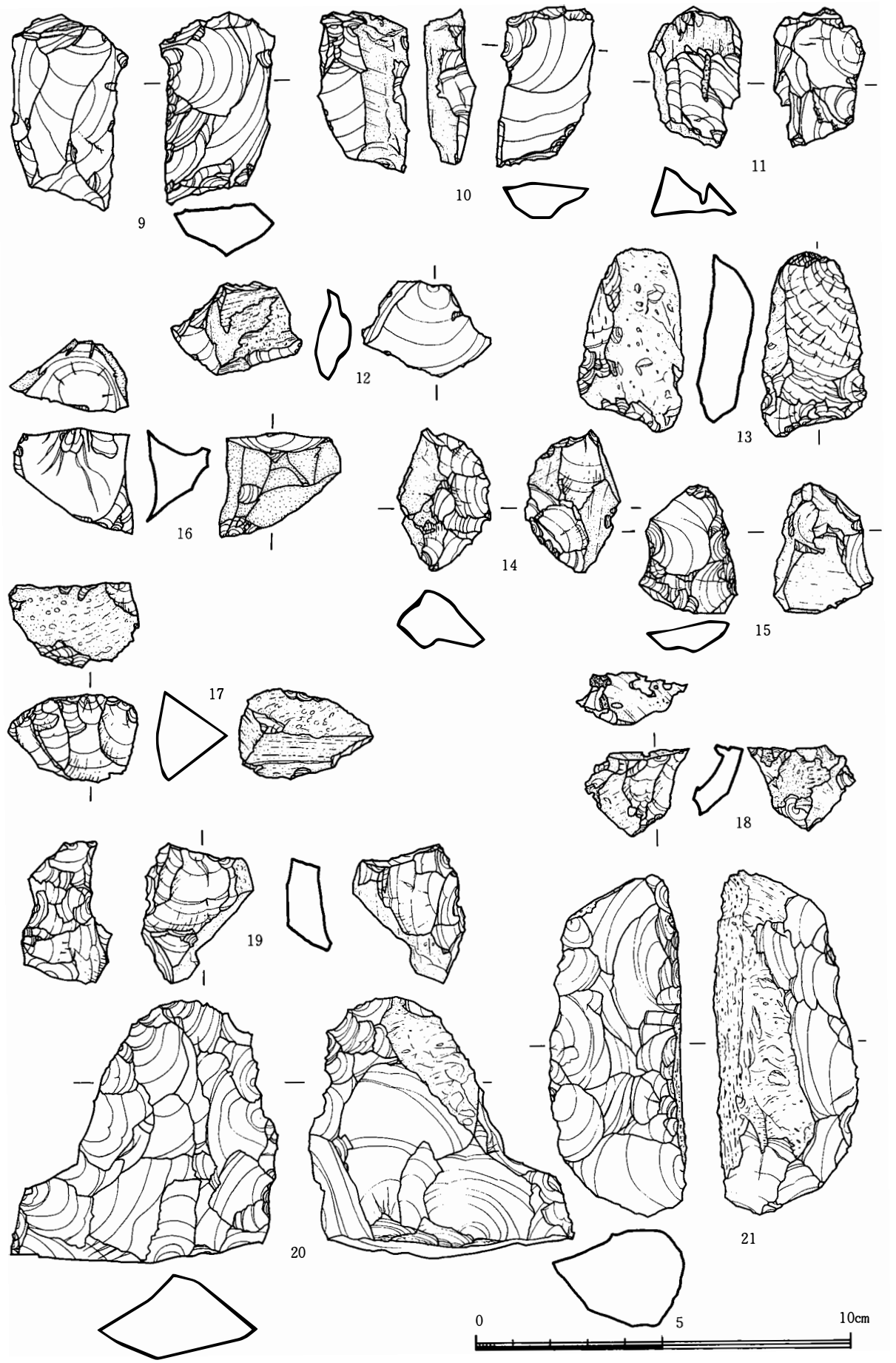
石核はその剥片の剥離の方法で3種に分かれる。

Ⅰ類（第134図 1～4,7,8,第135図 9～15,20,21）

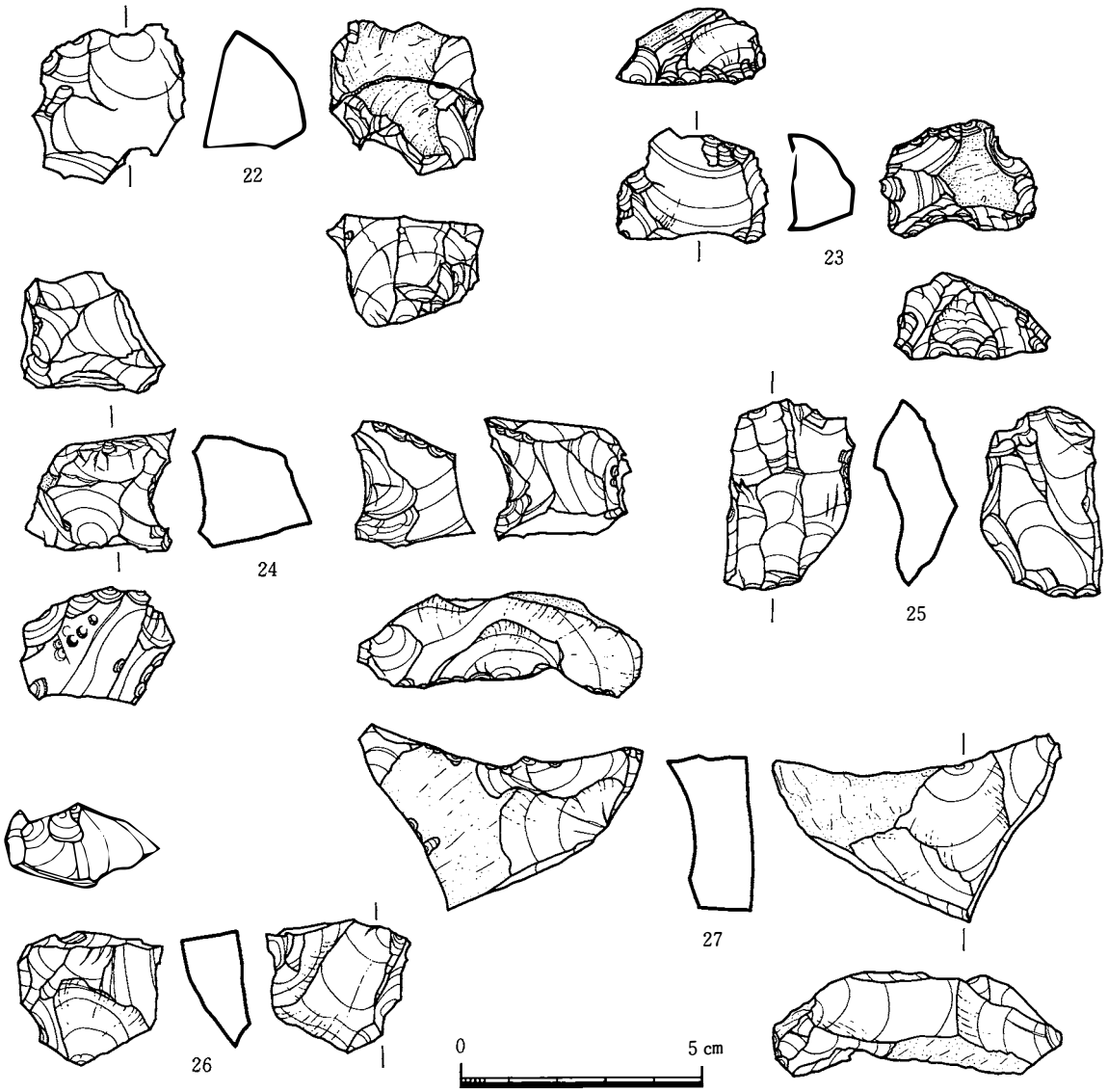
表裏両面が剥離を行う作業面となっており、その中心部に向かって剥離がなされている。剥離の方法



第134図　各調査区出土石核(1)



第135図　各調査区出土石核(2)



第136図　各調査区出土石核(3)

は両面に対して交互に行うものと、片面毎に行うものとがあるようである。

Ⅱ類（第134図 5，6，第135図 16,19）

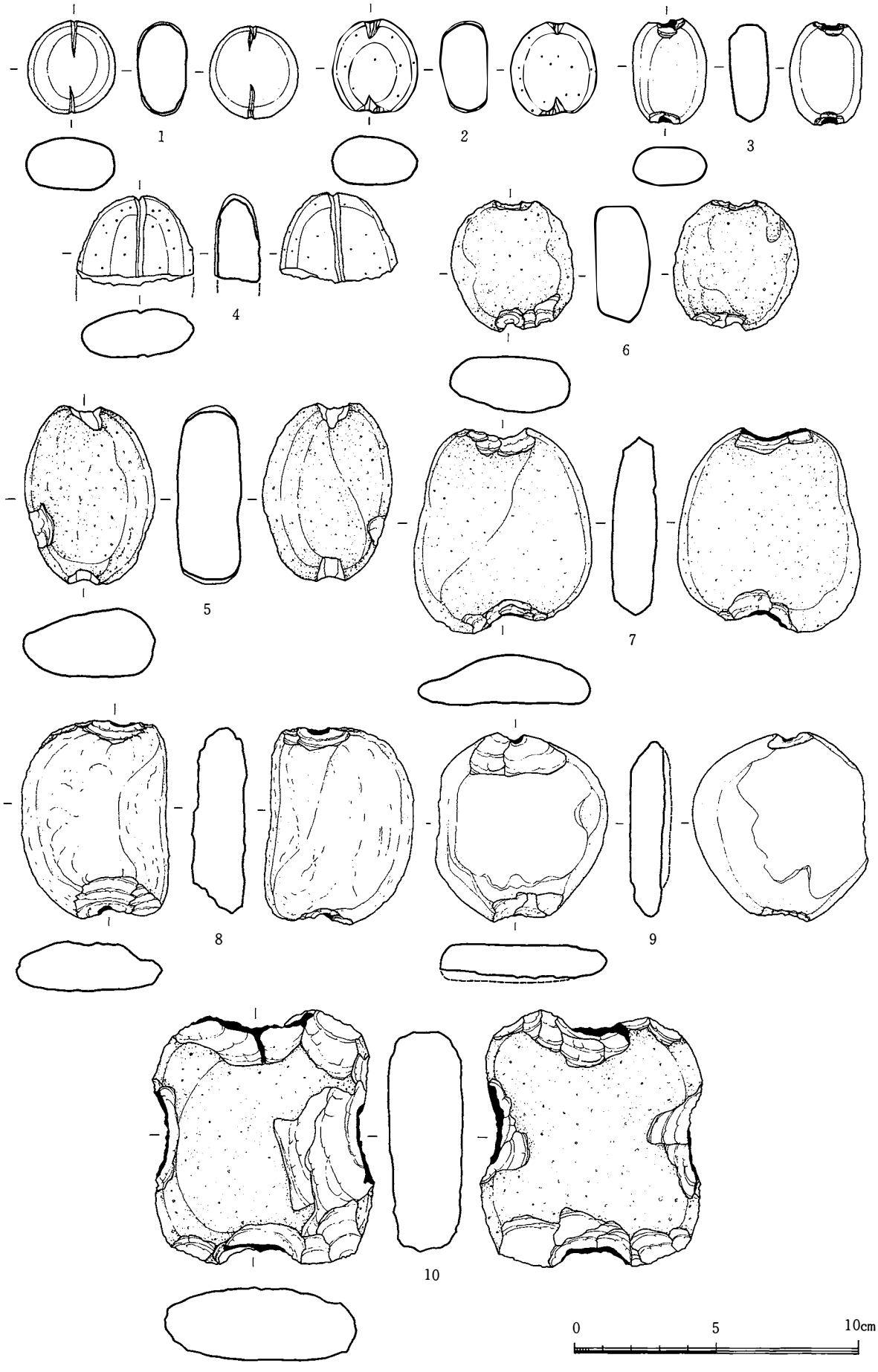
剥離作業面を次々に変えていくもので、全体の形状がサイコロのような多面体をしている。一回の剥離作業の回数は少なく、２～３回程度であろうか。

Ⅲ類（第135図 17,18）

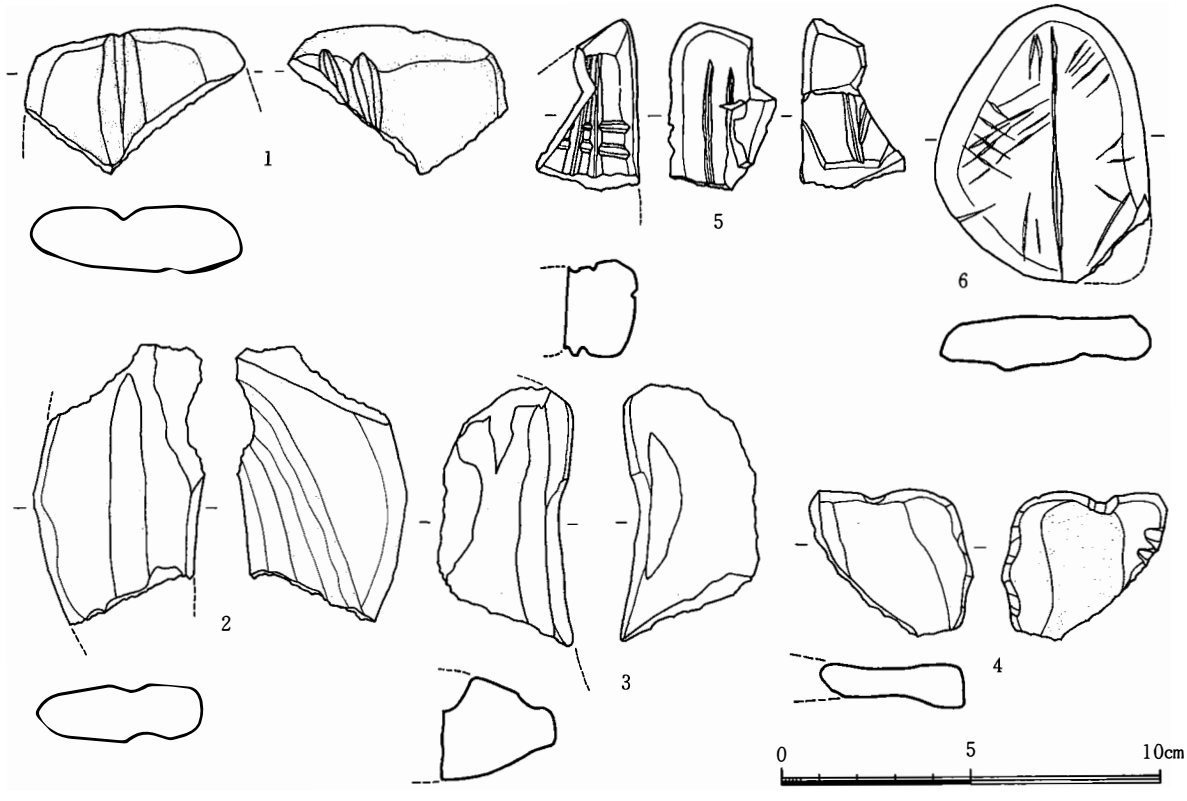
縦に長い剥片を目的とした石核で方柱状の原石を用意し、打面を上下か一方の端面に固定し、剥離作業を行っている。図示した２点はいずれも打面は自然面であり、そこから下方向へ剥離作業を行っている。剥離作業は打面を半周する程度まで行われている。18はまだ始まったばかりであろうか。

大まかにはこの３種が認められる。ところで、使用痕のある剥片を剥離したと思われる石核が今回の発掘では出土していない。かなり広い面積の発掘であるところから、本来その種の石核はない可能性が強い。

この３種の石核から剥離される剥片はまとまった資料として出土しておらず、その特徴を明らかにはできないが、石核から判断すればⅠ類の石核からは横に長い剥片と縦横ほぼ同じ長さの剥片が取られているようだ。Ⅱ類の石核からは縦横ほぼ同じ長さの剥片が、Ⅲ類からは当然のことながら縦に長い剥片がとられている。ただ、縦横の比はそれほど大きくはないようだ。



第137図　各調査区出土石錘



第138図　各調査区出土有溝砥石

これらの石核から取られた剝片はその形状から見ると石鏃かクサビ型石器を中心に供給された可能性が強い。

⑻　石　　錘（第137図）

総数10点が出土した。出土地点はＤ調査区、Ｅ調査区に集中している。

石錘はその用途は別にして、縄または網掛け用のくぼみを打ち欠いたものと溝を彫ったものとに大きく分けられる。

打ち欠いたものは「礫石錘」と呼ばれており、３、６～10がそれに当たる。上下両端の２ヵ所を打ち欠いたものがほとんどで、10のみが上下左右の４ヵ所になっている。３、７～10は打ち欠いた後、使用による擦れが認められる。

溝を彫ったものは「切れ目石錘」、「有溝石錘」と呼ばれており、１、２、５は切れ目石錘、４は有溝石錘に当たる。「切れ目石錘」や「有溝石錘」は全国的には縄文時代中期以降に出現するといわれており、ワクド石遺跡においても、そのころの時期の土器に伴うものであろう。

⑼　砥　　石（第138図）

総数６点が出土した。Ｄ調査区を中心に出土した。石材は全て砂岩系の岩石である。

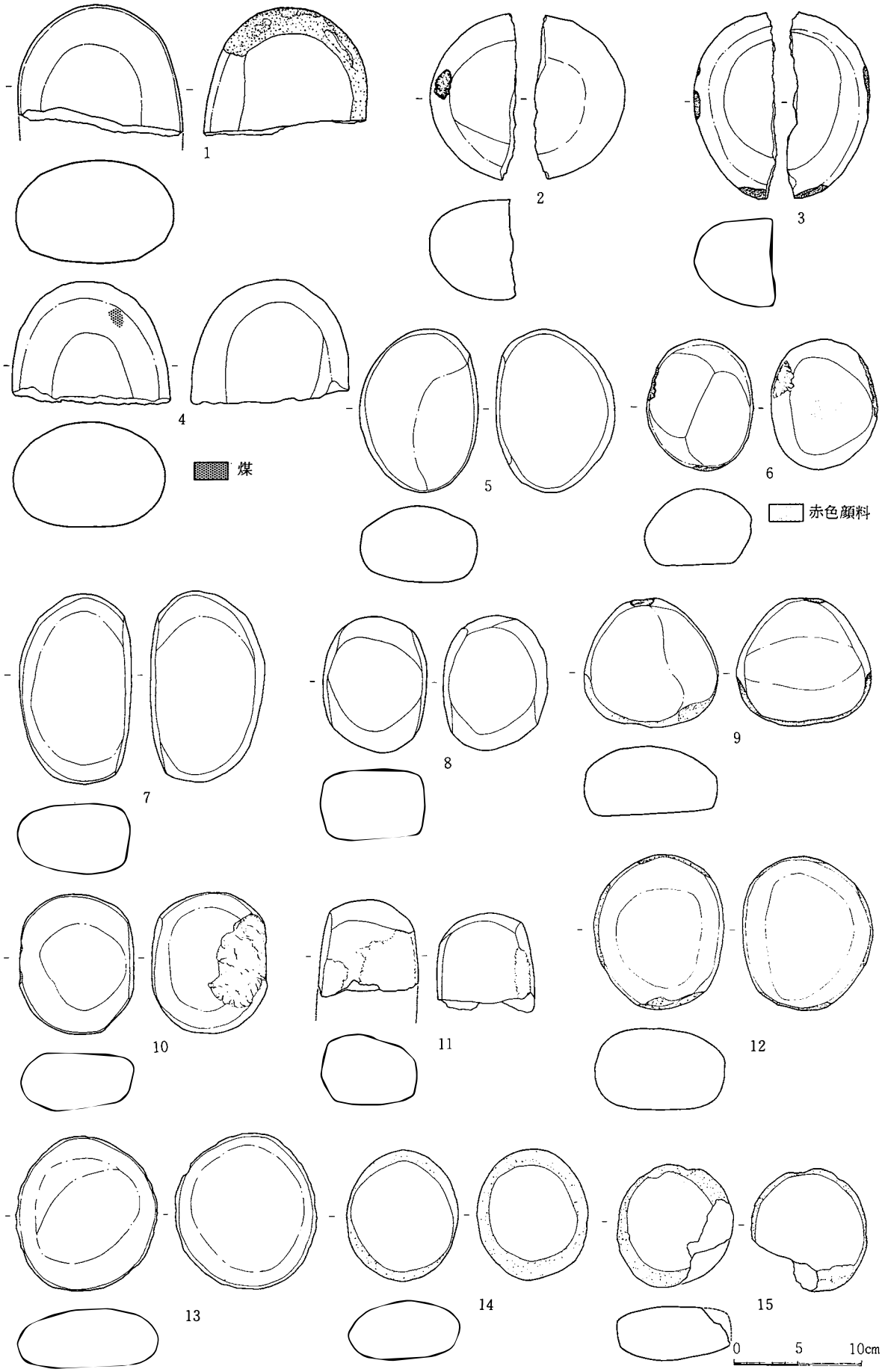
ここでは溝を持った砥石を砥石として認定したが、平砥石もかなりあるものと考えられるが破片としての発見が多いため、石皿、磨石などとの区別が明確でなかった。

溝の状態から３種に分類が可能である。

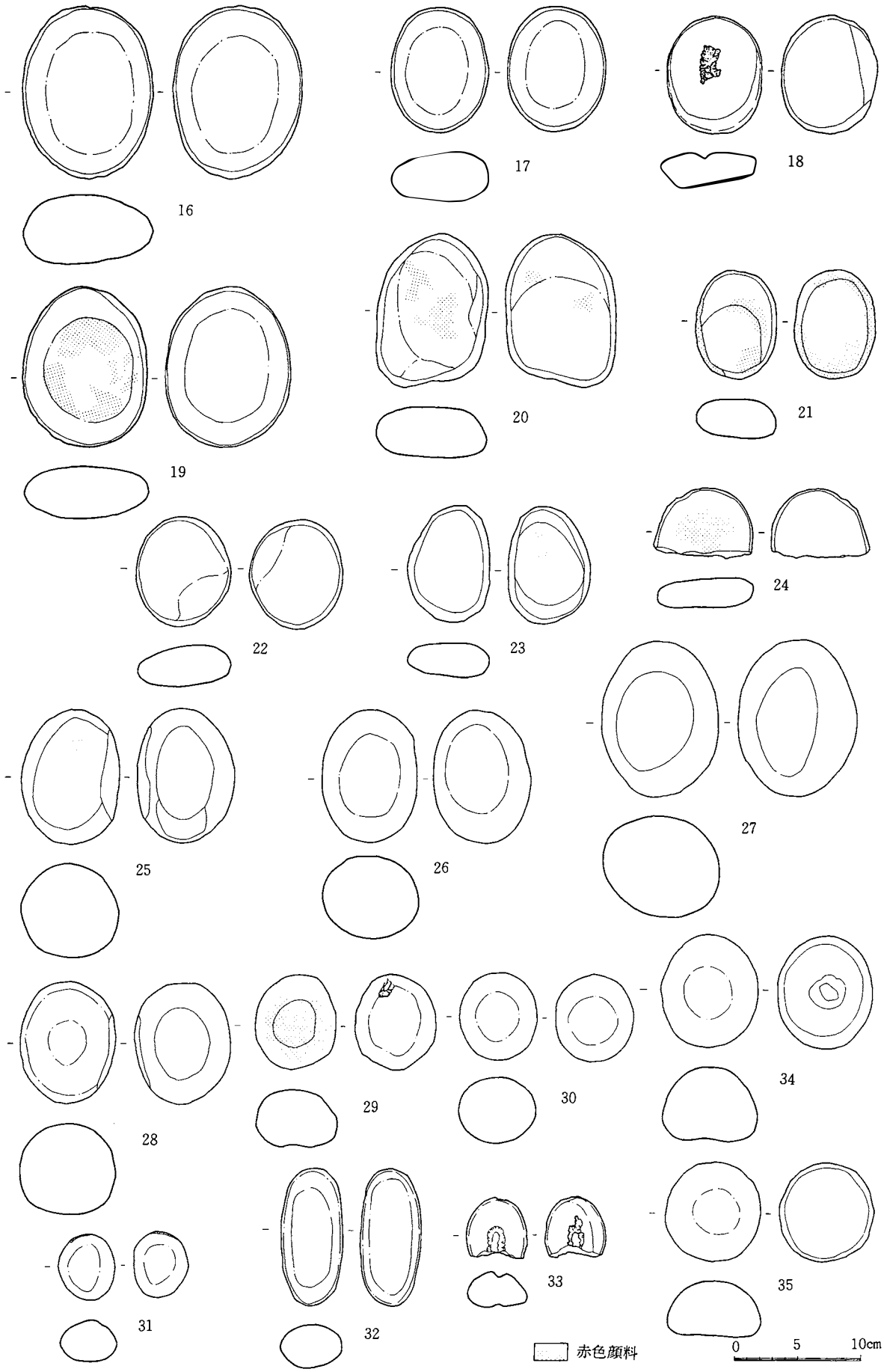
１～３は幅が１cmほどで直線状のＵ字形の溝が見られるものである。おそらく玉類などの研磨に使用されたと考えられる。

４は幅広の帯状の溝が見られるもので、わずかに窪んでいる状態である。ただ、側辺には１～３で見られたような溝も見られる。このことは両者の溝を使い分けていたことがわかる。

５、６は数多くの溝が縦横に走っているもので、溝は狭く、Ｖ字形になっている。６はまだ深く刻まれてはいないが、使用が進めば５のような溝になるものと思われる。５、６の砥石の状態からこの類は携帯用で石斧の刃の砥石ではないかと考えられるがどうであろうか。

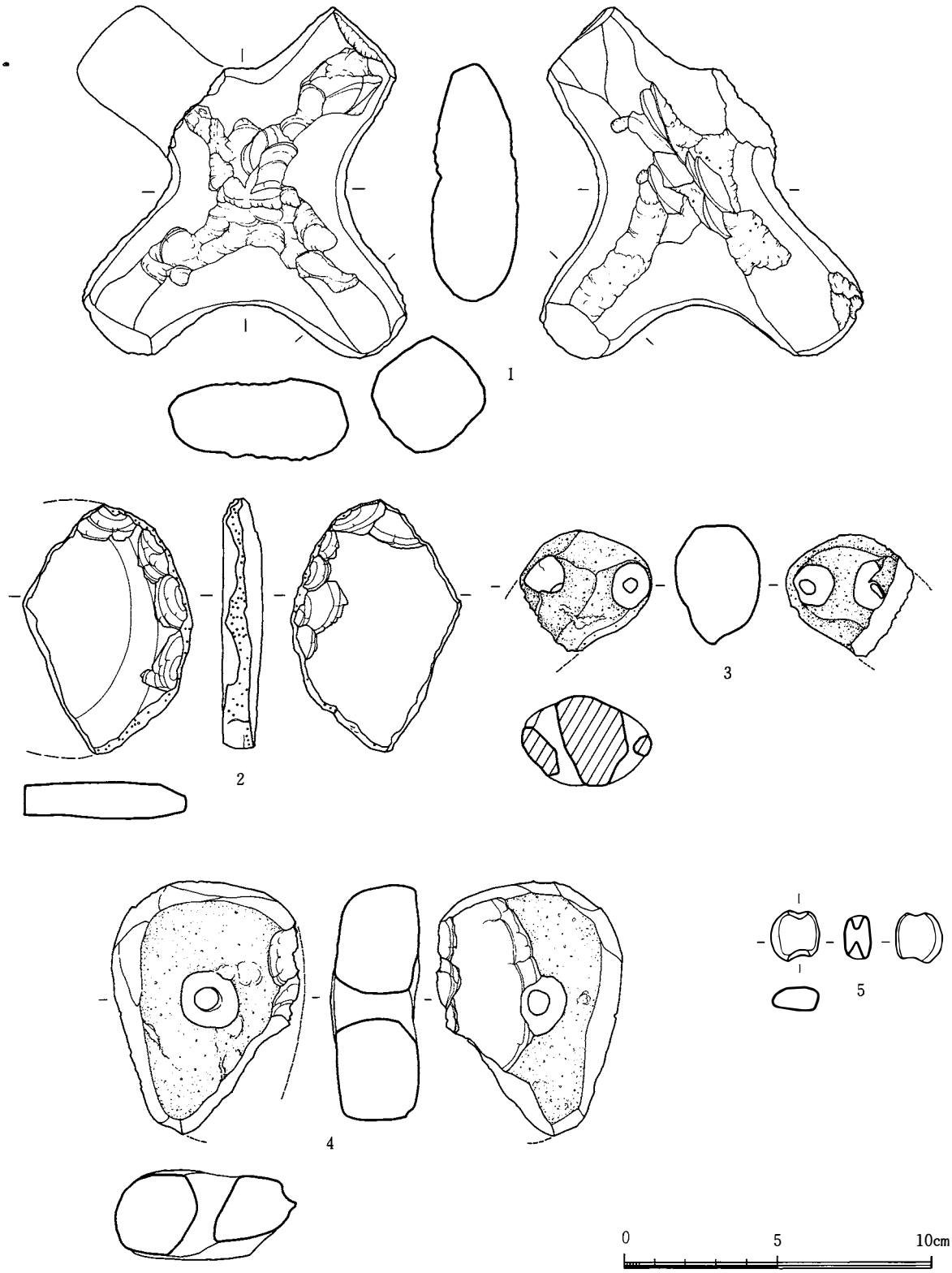


第139図　各調査区出土磨石(1)



第140図　各調査区出土磨石(2)

第141図　各調査区出土石皿



第142図　各調査区出土石製品

⑽　磨　　石（第139図，第140図）

総数200点あまり出土しており、遺跡全域からの出土である。そのなかで本来の形状をよく保っているものを掲載した。

磨石は使用頻度によってその形状は異なってくると考えられることから、石皿とのセット関係をみこした分類をすることは困難であった。以下、その形状から分類したものを示す。

１～５は表裏面に磨り面が発達したものでほぼ円形を示す。

6～12は小型の部類に入いる。両側辺まで磨り面があり、断面形が四角形をしている。6、9などは表面が2つの磨り面に分かれる。

13～24は断面形を見ると偏平になっている。ただ磨り面は明確な平面を持つほど磨れてはいない。20、21、22、23は表面に赤色顔料が付着しており、赤色顔料をすりつぶしたことがわかる。

25～28は断面形に特徴があり、ほぼ円形になっている。表裏両面ともしっかり磨られており、このような断面になることを意図したものと思われる。

29、33～35は断面形が半円形をしている。特に下部が磨られたということではないようだ。

30～32はワクド石遺跡で最も多く出土したもので表面には本来の姿を変形させるほどの磨り面はないものの、確かに磨った跡が観察できるものである。おそらく、使用が石皿とセットになった使用ではないことが推察できる。土器の磨きの器面調整などに使用されたかもしれない。

⑾ 石　　皿（第141図）

石皿の出土総数は少ない。もともと大きな遺物であり、耕作などで掘り出されていたことは事実である。遺跡の表面探査でも畦に積み上げられていたのは石皿であった。そのため、発掘によって出土した石皿は破片になって小さくなったものが多かった。そのなかから代表的なものを選び掲載した。

1、3は本来はかなり大きい安山岩製の石皿で、表裏両面に石皿のくぼみが見られるものである。くぼみはかなり発達しており、長期間使用されたことが窺われる。

2は片面に石皿のくぼみが見られるもので、これもかなり長期間に渡って使用されたようだ。

4、6、8はそう大きくない円礫を利用し、片面に石皿のくぼみが見られるもので、くぼみもあまり発達していない。1～3までのものとはすりつぶす対象も異なっているのだろう。

7は表裏面に磨り面があるがくぼんだ状態ではない。そのため砥石としての機能も考えられるが、一面に赤色顔料の残存が認められることから石皿とした。

5は表裏面がかなり磨られているが、くぼまず平坦な面になっている。磨石とも考えられるがそれにしては大きすぎるきらいがある。

⑿ 石 製 品（第142図）

量的にまとまっていないものをここに集めた。2は砂岩製の円盤状のもので表裏面は磨かれている。3、4は軽石製で孔を開けたものである。用途が全く不明であるが、軽石であることから浮子の可能性がある。5は穿孔しようとして中断したものと考えられる。ただ、石材は軽石である。これも浮子の未製品であろうか。

第5節　弥生時代の遺物（第143図）

当期の遺構は調査では発見できなかった。遺物量から見て多数の遺構の存在は想定できず、しかも、遺物がかなり磨滅していることから現位置をかなり離れて出土していることが予想される。

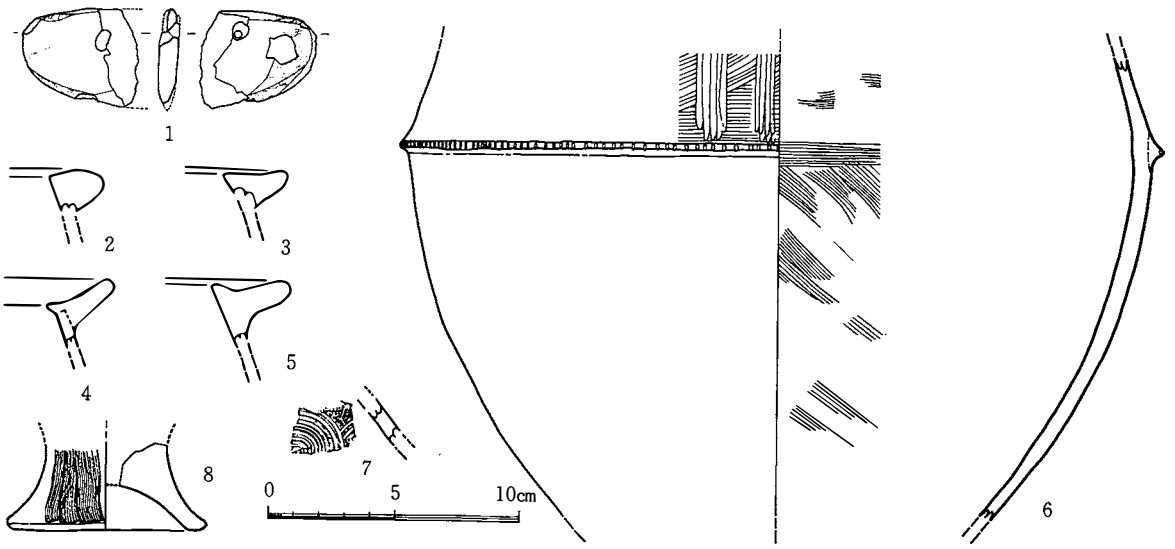
ここでは6点の石器、土器について記述する。

1は粘板岩製の石包丁である。約半分が欠けている。全体の形状は半月形に近く、下端の刃部を中心に周囲を磨いている。穿孔部は2ヵ所あり、表裏面から穿孔し中間部で合わせている。刃部は両刃に磨き上げられている。

2～5は甕口縁部破片である。2はどちらかと言えば玉縁に近い断面三角形の粘土を貼りつけている。3～5は口縁部がT字形に近くなるもので、4は内側にも粘土を引き延ばすように張り出させている。

8は甕底部破片で高い上げ底になっている。おそらく3、5などの甕の底部になるものと考えられる。7は壺形土器の胴部破片と思われる。外面には櫛がきと考えられる同心円文または波状文が連続しているようだ。

6は唯一の大型破片である。甕形土器の胴部破片である。ほぼ胴部最大径の外面に刻目を入れた断面三角形の突帯がめぐっている。底部と口縁部の形は不明であるが、底部は平底、口縁部は胴部上半が内湾してすぼまり内側に張り出し部分をもち、急激に外反する口縁部になりそうである。



第143図　弥生時代の遺物

これだけの土器量ではあるが確実に弥生時代に遺跡が存在したことを表している。その時期は土器形式から見ると、２～５、８などは弥生時代中期、６、７は後期とすることができそうである。特に、６の甕形土器は菊陽町梅の木遺跡で調査されたように甕棺として用いられることが多いことから、弥生時代の集落と甕棺墓群とが周辺に存在する可能性がある。

第６節　古墳時代の遺構と遺物

古墳時代に属する遺構と遺物は遺構配置図からもわかるようにＣ調査区を中心としてＤ、Ｅ調査区から発見された。

遺構としては、18棟の住居跡があげられるが、その他の遺構は検出されなかった。遺物はほとんどが住居跡の中から出土した。

18棟の住居跡は第144図に示したように、Ｃ調査区を中心として、今回の調査区の西側に広がっている。住居跡はお互いに一定の間隔を保って建てられており、しかも、住居跡の主軸の方向はほぼ南北か東西になっている。住居跡どうしが重なったり切り合ったりしておらず、また、方向や間隔が企画性をもっていることから、この18棟は短期間に盛衰した可能性が強い。

このことを暗示するように住居跡内から出土する土器には須恵器が含まれておらず、ほぼこの集落を５世紀前半の時期に比定することができる。

また、土器の出土状態も特異である。ほとんどの住居跡からは完形土器の単独出土か、破片の散発的な出土となっている。通常は住居に残された土器は少ないものの、住居が埋没する過程で土器が多数捨てられる捨て場にされている場合が多く、引き続き集落がその場に営まれていることを表している。このことからすると、当遺跡におけるあり方は、一度に住居が廃棄されたと見るほうが妥当であると考えられる。

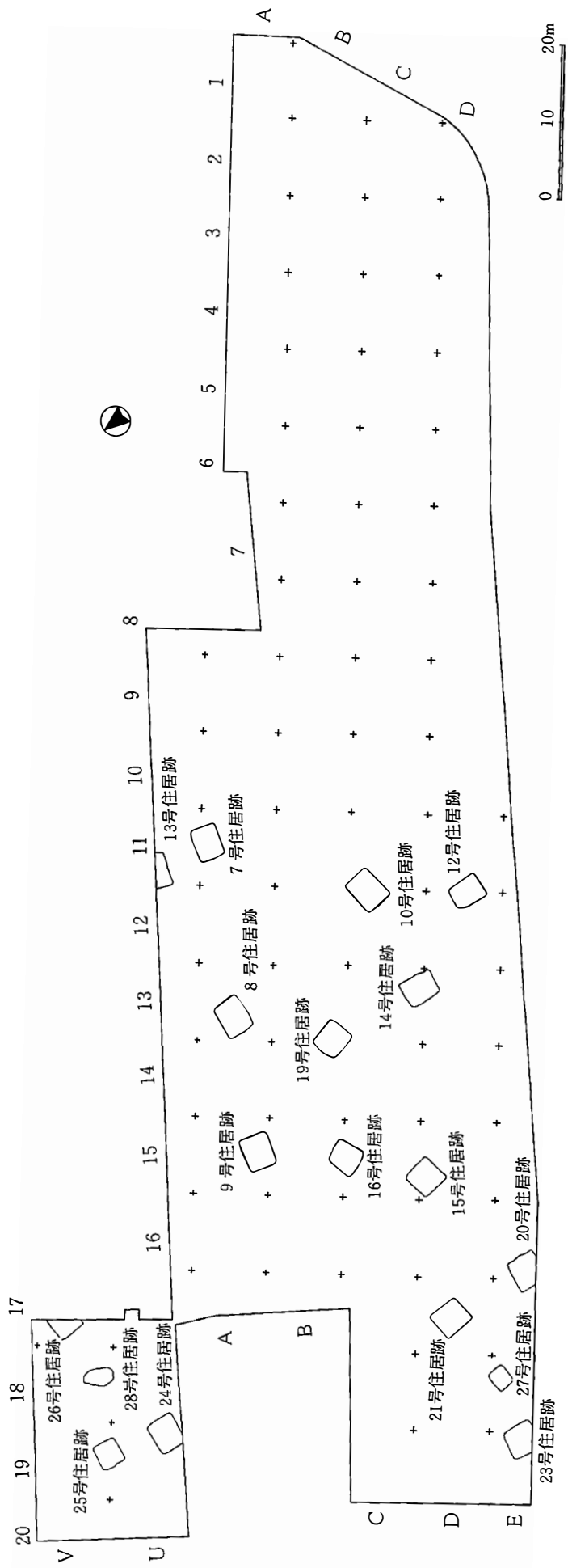
なお、住居跡の深さは、遺跡第Ⅷ層まで達している住居跡もあり、全体的に深く、Ⅱ層上面から30～50cmを計り、他の時期の住居跡の竪穴の深さと比べれば圧倒的に深い。住居の構造や当時の気候状況に違いがあるのであったのであろうか。

以下、各住居跡について詳述する。

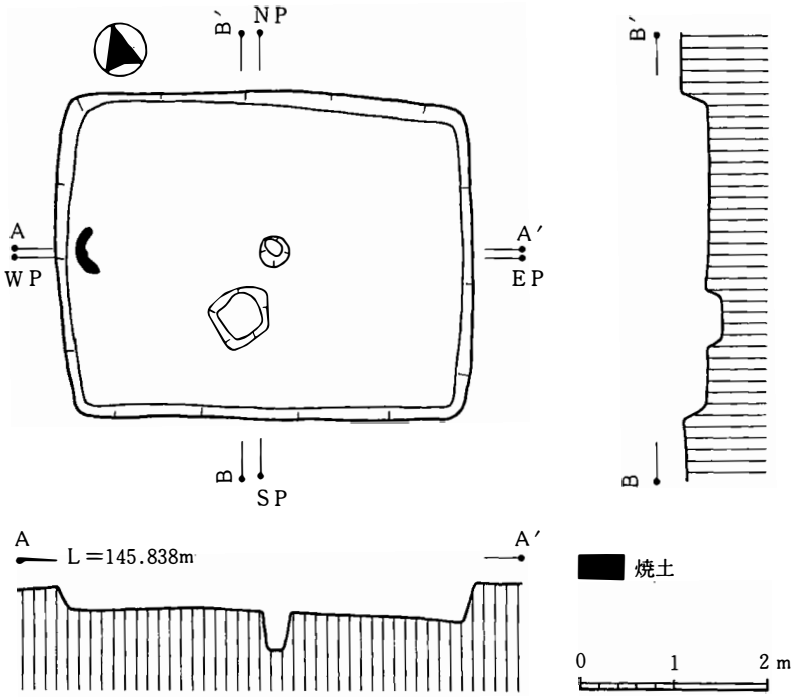
７号住居跡（第145図）

長方形の平面形をしており、短軸3.4m、長軸4.5m、検出面からの深さ約20cmを計る。長軸方向は西南西の方向を向く。

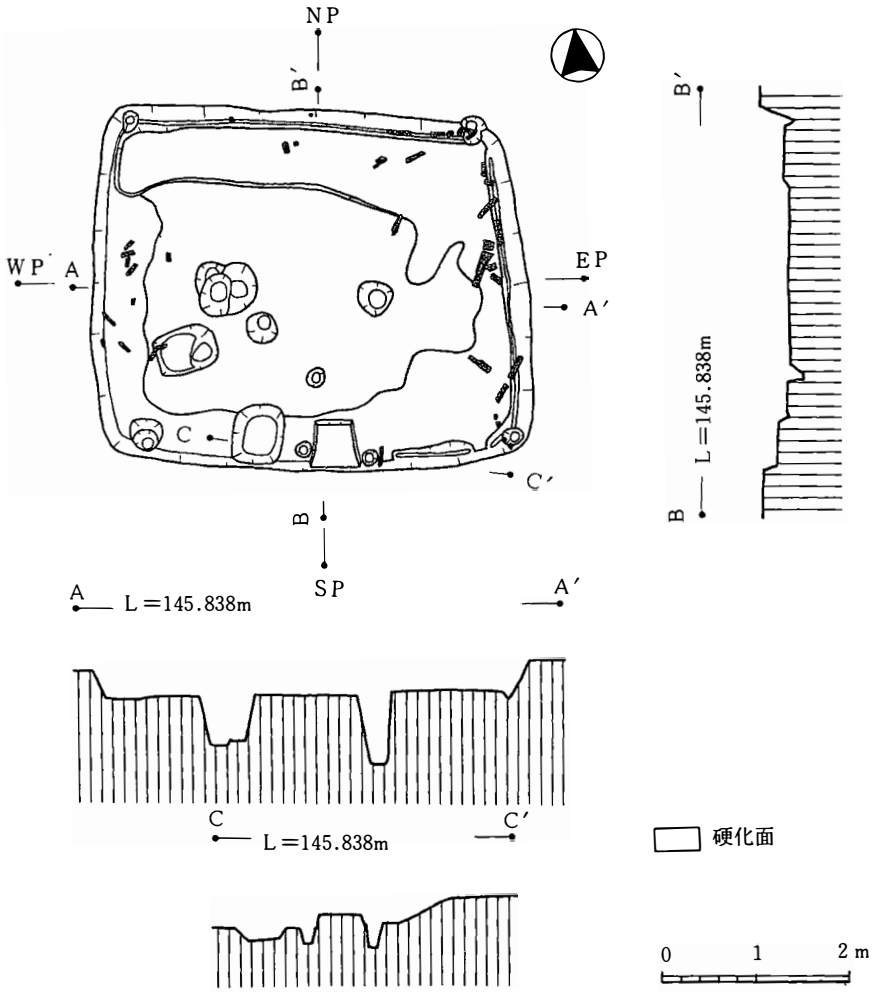
住居跡の内部構造は通常の住居跡とは異なっている。床硬化面は検出されず、炉跡も発見できなかった。また、柱も中央に１本のみであった。このことからいわゆる人が住む住居としての機能よりは、倉庫としての機能を考えたい。また、西側壁際に焼土の塊が発見されており、焼失住居の可能性もある。



第144図　古墳時代住居跡配置図



第145図　７号住居跡実測図



第146図　８号住居跡実測図

なお、柱穴の南にある炉跡らしき皿状の土坑は埋土が褐色土の中に第Ⅷ層の黄褐色土を交えることから炉跡ではなく住居跡に伴うものではなさそうだ。

なお、当住居跡からは遺物は検出できなかった。

8号住居跡（第146図）

長方形の平面形をしており、短軸3.8m、長軸4.6m、遺構検出面からの深さは約30cmを計る。長軸は西南西の方向を向く。

主柱は住居跡長軸中心線に沿って2本が並んでおり、長軸中心線を3等分する間隔で立てられている。なお、主柱のうち西側の柱穴は同一地点に3本が重なっており、改築が行われたことが予想される。

炉跡は西側の主柱すぐ南西、住居跡の南西部に見られる。40cm、60cmの長方形をしており、床面からの深さは約10cmで浅い。暗褐色土の埋土に赤褐色の焼土を混じえるが、焼土塊の炉跡内での広がりは認められない。

炉は屋根に設けられる換気口との関係から、その場所が決められるとすれば、炉跡の直上に換気口が存在することになる。この仮定とこの住居跡の主柱が2本であることから、当住居が切り妻の屋根であった可能性が強くなる。

住居跡の南壁に接して炉跡とほぼ同じ平面形で、深さが床面から30cmの土坑が存在する。埋土は褐色土であり焼土は含まれていないことから貯蔵穴の可能性が強い。

この貯蔵穴の東側にこの住居跡の大きな特徴である地山を削りだした階段が壁に付設している。階段の両脇に接して、床面から約30cmの深さの小ピットがある。階段は床面からの高さが15cm程ある。この階段は入口の一部と考えられ、外部に向けて数段の階段が存在し、しかも両脇の小ピットが示すように入口に廂があったことが予想される。また、入口構造とも関係すると考えられるが、この住居跡は壁に沿って溝が掘られている。いわゆる壁溝と呼ばれているものである。溝底部幅が2～5cmあり、深さは床面からほぼ10cmである。この壁溝は板壁の存在を予想させるものであるが、住居跡西側から南側にかけて壁溝が発見されていない部分があり、明確ではない。

床硬化面はほぼ中央部に広がってる。ただ、北側は60cmの幅で東西に5cmの段差があり、硬化面が広がっていない。弥生時代の住居跡によく見られるベッド状遺構ほど段差はないものの、機能としては同じものだったと考えてよいかもしれない。

なお、この住居跡は焼失住居と考えられ、床面直上において住居部材の炭化木が多数検出された。

【遺物】（第147図）

古墳時代の住居跡の中では最もおおく土師器が出土した。床面直上の土器はないが、床面上3cmの範囲内で5点が出土した。これらは住居跡中央部に集中している。

甕形土器5点、高坏形土器4点を掲載した。甕形土器の胴部は球状に近く、口縁部は強く外反する。口縁端部は少し外に折れるように曲がっており、共通した特徴のようだ。ただ、1は口縁端部が外ではなく、内側につまみ上げられたようになっている。

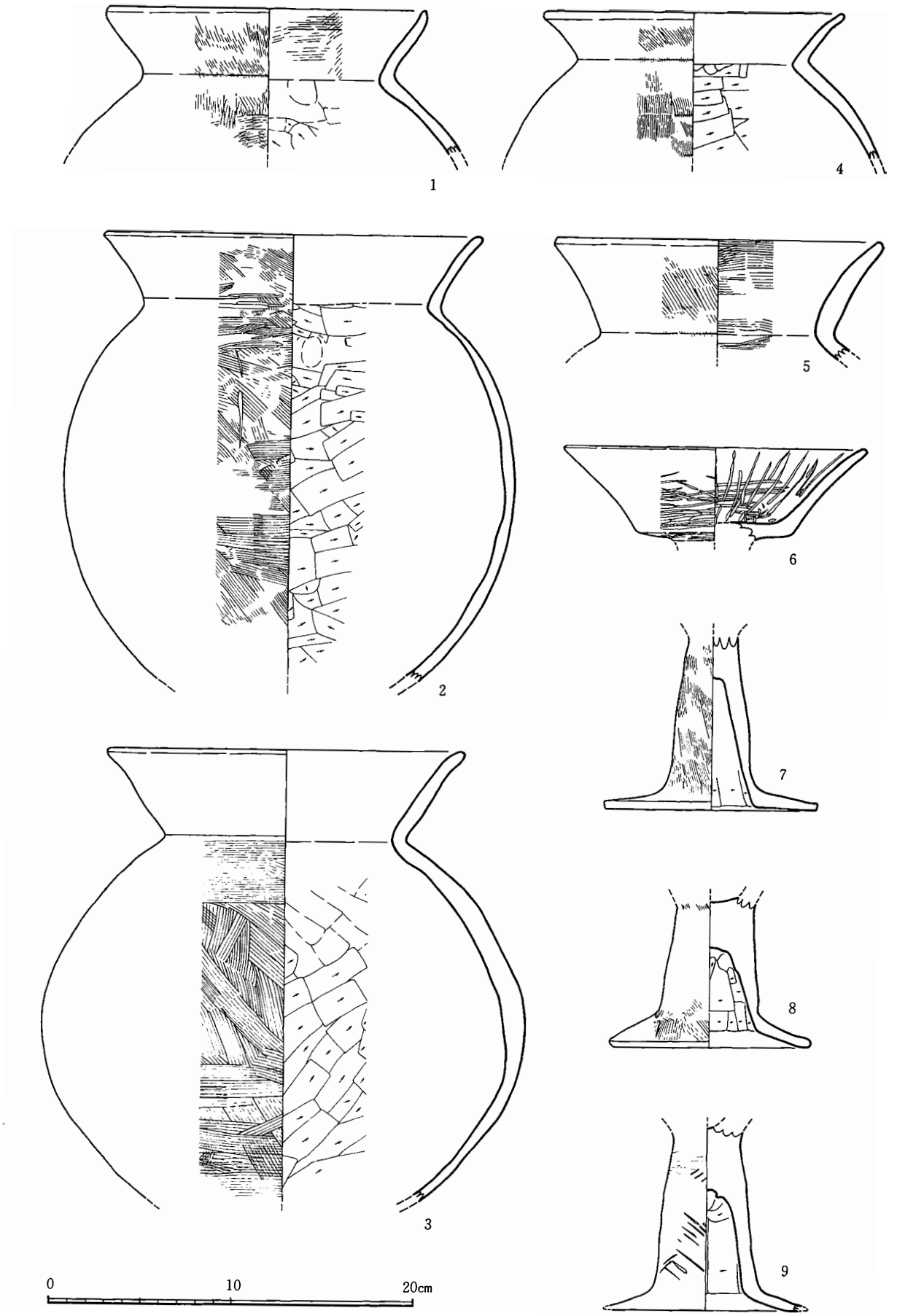
外面の調整は刷毛目が全てに認められるが、3の口縁部はナデで消されている。内面は胴部がヘラ削り、口縁部はナデ調整されている。

高坏形土器の脚部の屈曲部は27のようにほぼ接地面につくものとやや浮き上がるものがある。屈曲部から脚部端部までは短い。坏部は1点のみであるが口縁部は外反ぎみに開いている。器面調整は脚部のみのものは刷毛目をナデ消している。なお、29の外面にはタタキと思われる痕跡が見られる。坏部のみのものは内外面ともヘラ磨きの細い沈線が見られ、内面においてはそれが底部から放射状にのび、文様の役割を果たしている。

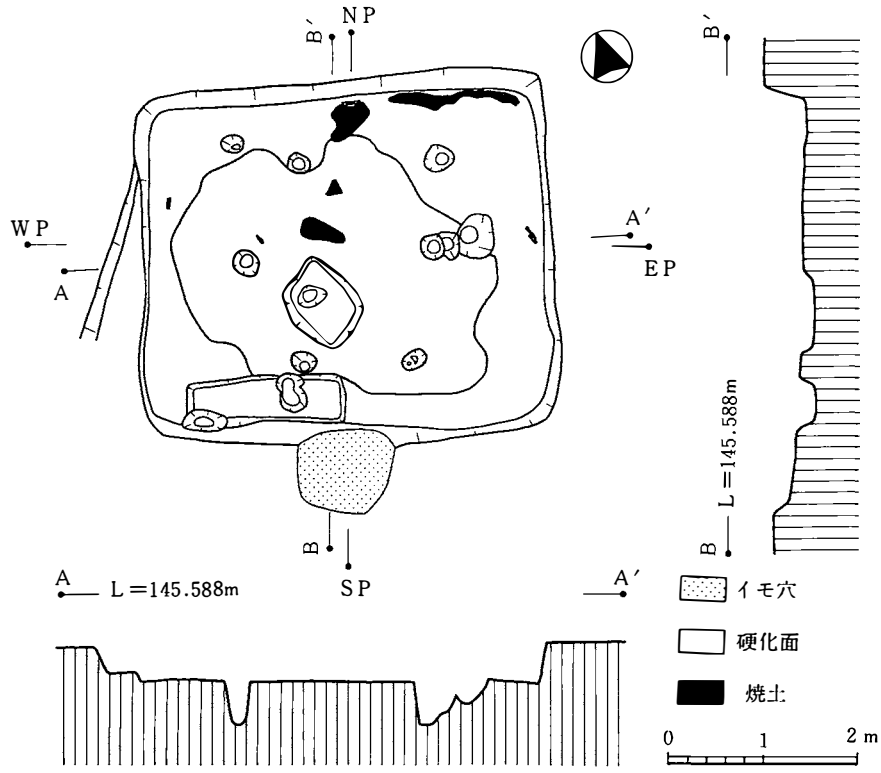
9号住居跡（第148図）

長方形の平面形をしており、短軸3.6m、長軸4.4m、遺構面からの深さは約35cmを計る。長軸方向は西南西を向く。

主柱は長軸中央線に沿って、2本が並んでいる。柱間は2mあり、それぞれの柱は壁と1mの間隔を置く。西側主柱南西に炉跡と思われる掘り込みがある。長方形の平面形をしており、床面からの深さは10cmである。ただ、埋土は暗褐色土に若干の焼土を



第147図　８号住居跡出土土器



第148図　9号住居跡実測図

含んでいるだけであり、焼土そのものの塊の広がりは見られない。

住居跡南壁の西側に沿って長方形の貯蔵穴と考えられる土坑がある。深さは床面から20cmあり、埋土は黄褐色粘質土混じりの褐色土である。

床硬化面は主柱を囲んで広がっており、南壁に向かって張り出している。おそらく南側に入口があったのであろう。また、床面直上には焼土の塊や炭化木が点在しており、この住居跡が焼失住居であることがわかる。

【遺物】（第153図　1，2）

床面直上からの出土遺物は土師器頸部小破片1点のみである。埋土中にも当住居跡の時期の土師器はほとんど発見されず、縄文時代後・晩期の土器片が多く発見された。そのなかで高坏形土器坏部と広口壺を掲載した。

高坏形土器坏部はほぼ水平な底部から外反せず、大きく開いて立ち上がる口縁部になっている。器面調整は内外面ともヘラ磨きである。外面のそれは粗い。

広口壺は胴部の割合が大きくなっており、口縁部は開いて立ち上がるが短い。

10号住居跡（第149図）

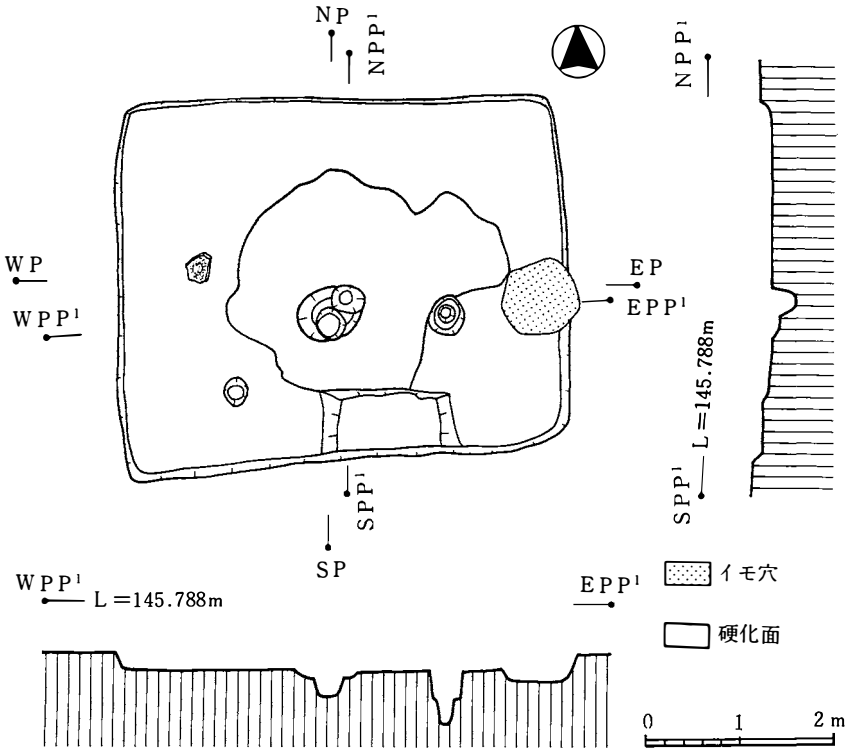
長方形の平面形をしており、短軸4ｍ、長軸4.8ｍ、遺構面からの深さは約30cmを計る。長軸方向は西南西を向く。

主柱は、東側の長軸中心線からやや南寄りに1本があるのみである。本来は2本存在した可能性が強いが、西側の1本がどうしても検出できなかった。

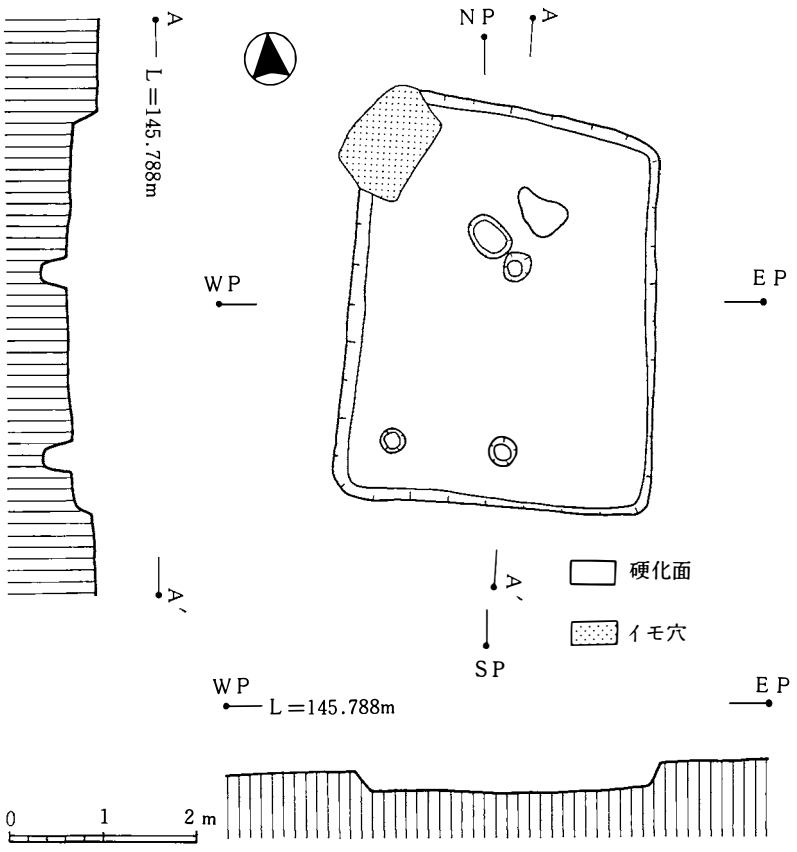
炉跡と考えられる掘り込みが中央南寄りにあるが、2つの新しいピットにより攪乱されている。ただ、埋土には焼土は見られなかった。この炉跡を中心として南側に延びた床硬化面が認められた。

南の延びた床硬化面に続いて、8号住で見られた階段状の遺構が検出された。8号住ほど明確ではないが5cmほどの階段になっている。この階段状の遺構は南壁中央よりやや東寄りに付設されており、8号住と共通している。

なお、当住居跡は古墳時代の土師器より縄文時代後期の土器片が多量に出土している。この縄文時代の土器は主に床硬化面下部より出土している。そのため、古墳時代の住居跡である10号住が造られる以前に縄文時代の住居跡が存在したのではないかと考え、床硬化面以下を地山まで掘り下げた。その結果、



第149図　10号住居跡実測図



第150図　12号住居跡実測図

中央部が約20cmほど窪んだ状態になり、10号住の四方の壁に向かってなだらかに続く窪みになっていることがわかった。これは縄文時代の住居跡と考えるよりは10号住の建造当初の掘り方であり、床面を整える際に縄文土器を含んだ土を使用したと考えられる。

なお、貯蔵穴らしきものは検出できなかった。

また、遺物はきわめて少なく、しかも小破片のため掲載できなかった。

12号住居跡（第150図）

長方形の平面形をしており、短軸3.2m、長軸4.2m、遺構検出面からの深さ約30cmを計る。長軸の方向は北北東から南南西を向く。

主柱は長軸に沿って２本ある。長軸中央線よりはやや東寄りにあり、柱間隔は約２ｍある。

炉跡は北側主柱に接して北側にある。楕円形をしており、床面からの深さは約10cmを計る。暗褐色土に焼土が混ざっている。この炉跡も焼土の塊の広がりは認められなかった。

床硬化面は北側主柱の北側にわずかに広がっているが、それほど硬化はしていない。本来しっかりした硬化面はなかったようだ。

なお、貯蔵穴らしきものは検出できなかった。また、北東隅はイモ穴によって壊されている。

【遺物】（第153図　３～６）

床直上の遺物はなく、ほぼ床上10cmのレベルに集中している。甕形土器４点を掲載した。32以外は口縁部から胴部上半までの資料であり、全体の形状は明確ではない。ただ、32は胴部のふくらみがややなくなっているようだ。口縁部は胴部から屈曲し、外反しながら立ち上がるが、それほど外へは開かず直立ぎみに立ち上がる。そろって見られる特徴として口縁部がかなり肉厚になっていることである。口縁端面は平坦になり角張るものと丸みをおびるものがある。器面調整は外面が刷毛目、内面は胴部以下にヘラ削りがみられる。なお、32のヘラ削りは縦方向となっている。また、34は口縁部内面に刷毛目がナデで消されずに一部残っている。

13号住居跡（第24図）

２号縄文住居を後世において破壊するかたちでほりこまれている。住居跡の1/2が調査区外にあり、その全体は検出されていない。住居の深さは約30cmほどである。かなり厚い硬化面が広く広がっているようだ。柱穴は住居跡南北の長軸線よりやや東寄りに２本が並んでいるようで、その１本が検出されている。炉は未検出であり、調査区外にあるものと思われる。住居跡南壁の中央よりやや西側に貯蔵穴と考えられる土抗が検出された。中からは完形の甕形土器が出土した。

【遺物】（第153図　７，８）

住居跡が約1/2の面積の調査のため遺物の数は極端に少ない。ここでは貯蔵穴から出土した甕形土器と高坏形土器の坏部を掲載した。

甕形土器は胴部が卵形をしており、口縁部は屈曲して外反せず端部に続く。口縁部はやや肉厚で端面は平坦面をしている。器面調整は内面胴部以下にヘラ削りが見られる以外は内外面ともナデ調整である。なお、外面の一部には消しのこされた刷毛目の痕跡が認められる。

高坏形土器は坏部が途中で屈折し、屈折部の外面に１条の沈線がめぐっている。内面は放射状のヘラ磨き、外面は刷毛目の後ヘラ磨きがみられる。

14号住居跡（第151図）

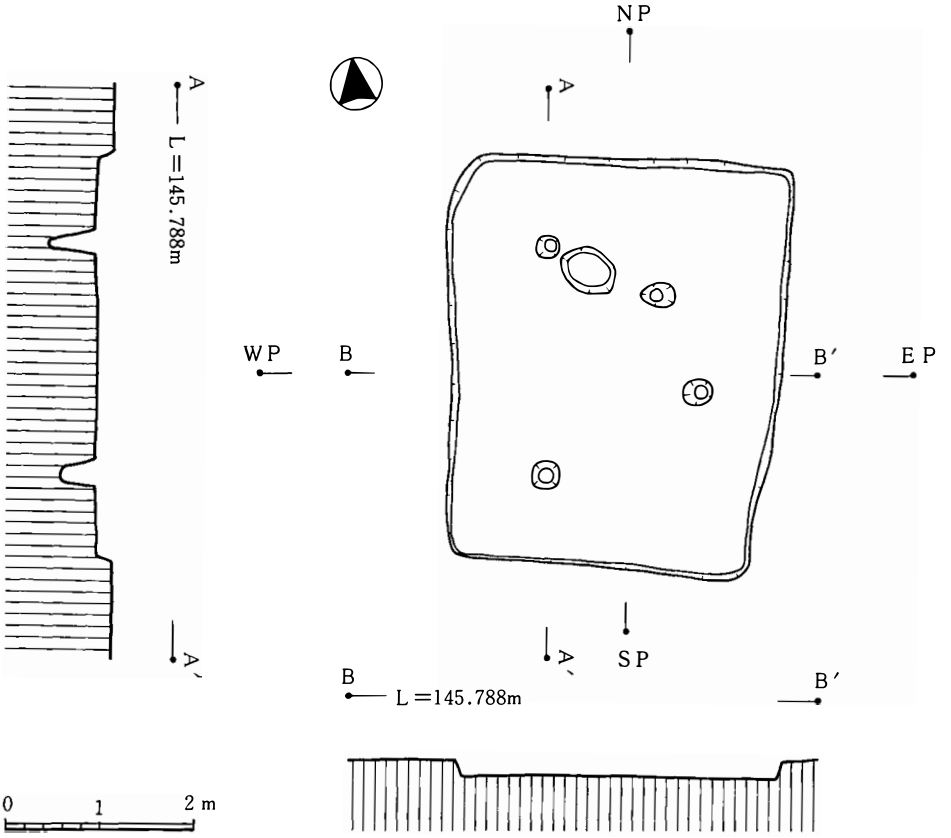
長方形の平面形をしており、短軸3.4m、長軸4.3m、遺構検出面からの深さ20cmを計る。長軸の方向は北北東から南南西を向く。

主柱は長軸に沿って２本あり、柱間隔は2.2mである。主柱は長軸中心線より西側にかなり寄っており、対する東側に柱穴を探したが、検出できなかった。

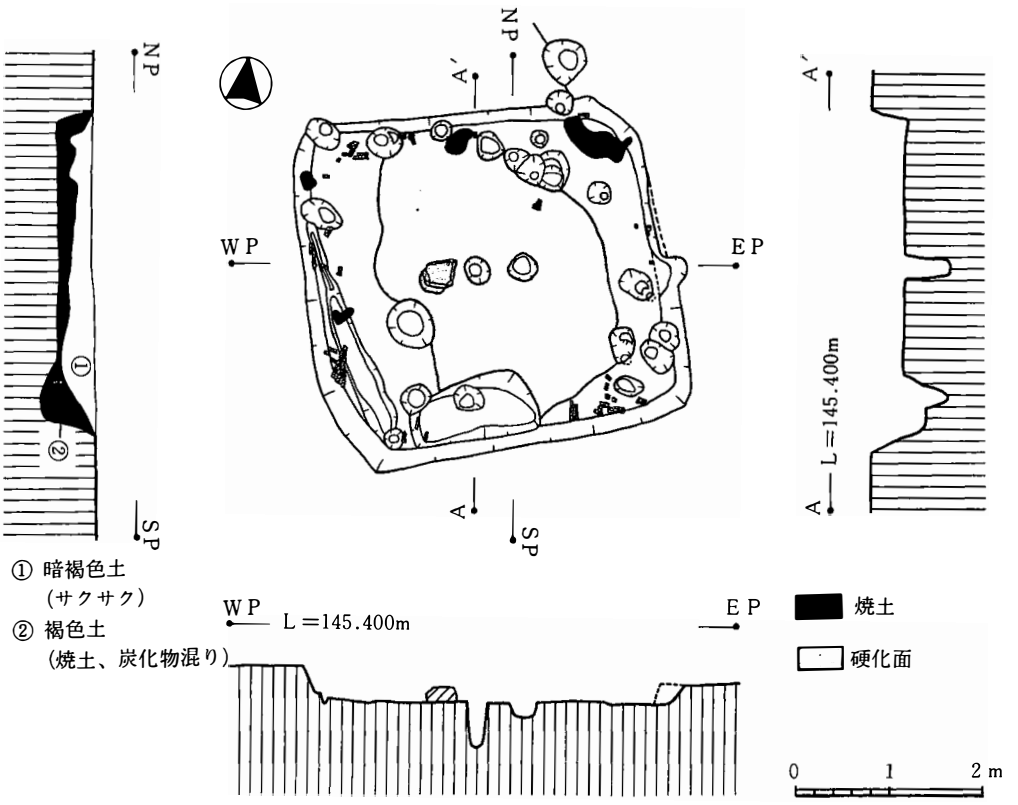
炉跡は北側主柱の東に接してある。暗褐色土に焼土が混ざっており、焼土の塊の広がりはなかった。

また、床硬化面はこの住居跡では検出できなかった。12号住で検出された床硬化面もしっかりしたものではないので、住居としての使用の仕方に共通性があるのかもしれない。

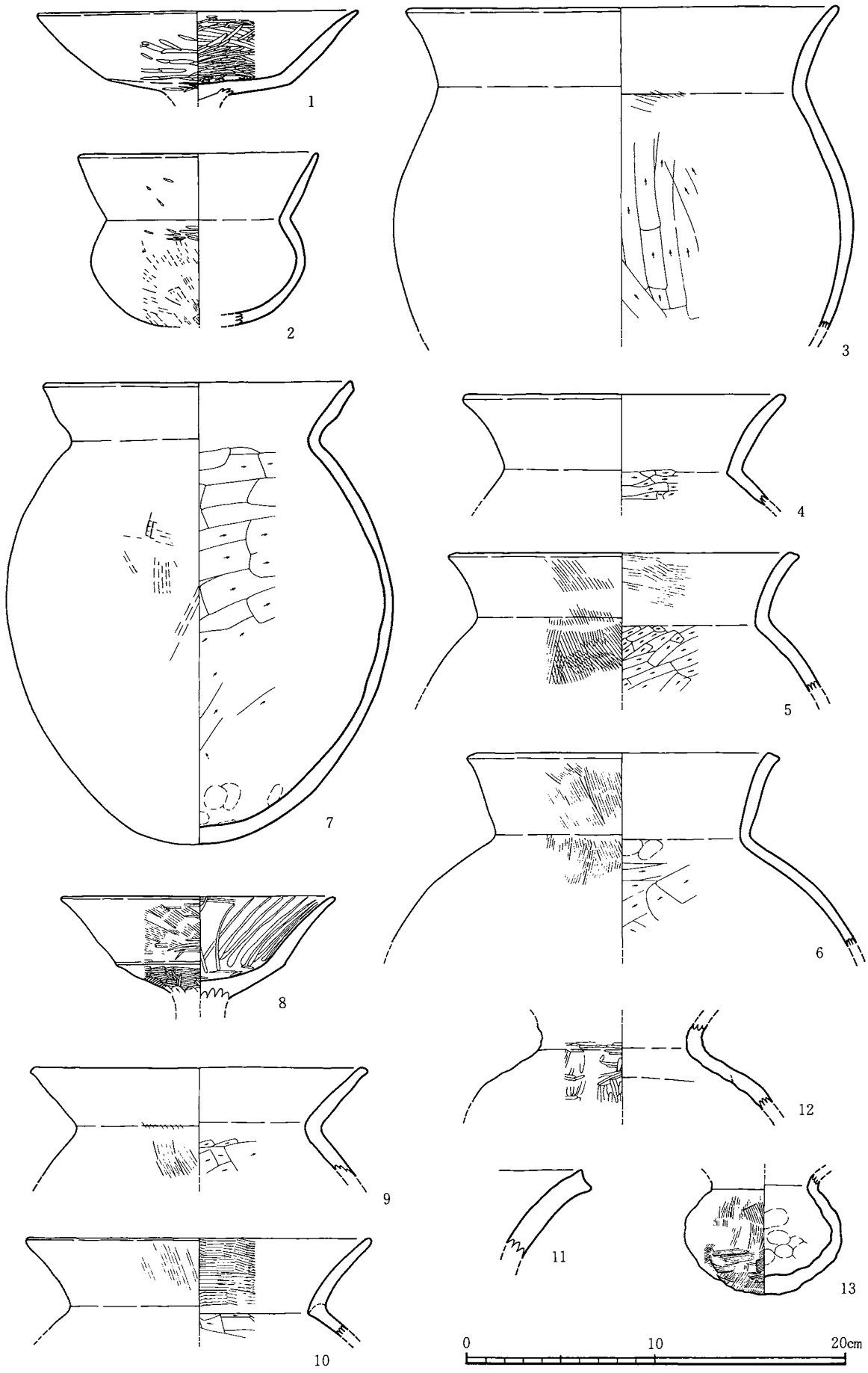
なお、貯蔵穴らしきものは検出できなかった。



第151図　14号住居跡実測図



第152図　15号住居跡実測図



第153図　9・12・13・14号住居跡出土土器

【遺物】（第153図　９～13）

出土した遺物は少なく、破片がほとんどである。

その中で甕形土器３点、壺形土器、小型丸底壺の５点を掲載した。甕形土器は８号住や12号住のものに類似している。ただ、39は口縁部内面に刷毛目がそのまま消されずに残っている。40は壺の形状をしており、外面にヘラ磨きの跡が見られる。42は小型丸底壺にあたるようだ。口縁部はかなり開きながら端部に続くようだ。ただ、てずくねであろうか、器形の凹凸が激しい。

15号住居跡（第152図）

ほぼ正方形をしており、短軸3.6m、長軸3.8m、遺構検出面からの深さ約40cmをはかる。長軸の方向は東西を向く。東壁は奈良時代の溝によって一部破壊されている。

主柱は住居跡中央に１本が確認された。本来１本柱が住居構造上あり得るのかは知りえないが、かなり精査したにもかかわらず、２本柱、４本柱になる柱穴は発見できなかった。なお、四方の壁際に見られる多くの柱穴は、縄文時代の柱穴と考えられる。

炉跡は主柱の西南方向にあり、円形をしており、床硬化面からの深さは約15cmを計る。埋土は暗褐色土に焼土が混じった状態で、焼土の塊の広がりは認められなかった。

床硬化面はかなり広範囲に広がっており、しかも硬化の厚みも大きく、かなり長期間使用された住居跡と見ることができる。硬化面は東西の壁際近くまで広がり、南北は壁まで接している。16号住でも触れるが、硬化面が壁際まで広がっていることは、壁際まで立って歩けたことを物語っており、住居構造上興味ある問題を提供している。なお、主柱の西側に接して硬化面上に据え置かれた台石がある。

南側の壁際の西側に長方形の平面形をし、床硬化面からの深さが約20cmの貯蔵穴が存在する。また、西側壁際に沿って壁溝が検出された。南側は壁溝にしては幅が広い。

四方の壁近くには床硬化面直上から遺構検出面近くまでの幅で焼けた炭化木及び焼土の塊が散在している。なぜ、壁際に集中するのか定かでないが、住居跡埋土の土層断面の観察からするとうなずける結果が見られる。土層は２層からなっており、①層はサクサクの暗褐色土で、②層が焼土、炭化物まじりの褐色土になっている。②層は壁際で遺構検出面まで達しており、この住居が焼失した後すぐに堆積した土層とみるこができる。そして、この層に炭化木や焼土の塊が含まれている。この結果からすると、焼失したあと中央部に残された焼け残った部材を持ち去り、炭化木が残らなかったと考えるか、燃え残った部材をかたづけたあと周囲からまた流れ込んだかのどちらかであろう。

【遺物】（第159図　１，２）

当初、住居跡の深さがかなりあり、遺物の残りは良好ではと期待されたが、発掘の結果遺物数はかなり少なかった。また、床に張り付いた遺物もなく、掲載した土器も床上10cmほど上位から出土したものである。

１は甕形土器である。球状の胴部をし、口縁部は肉厚になっている。これは胴部内面がヘラ削りによってかなり器壁が薄くなっているための相対的なものである。口縁部は胴部との屈折部からやや外反し、口を大きく開きながら端部に続いている。端面は丸くなっている。胴部外面は縦方向の刷毛目が顕著である。口縁部内外面はナデ調整となる。

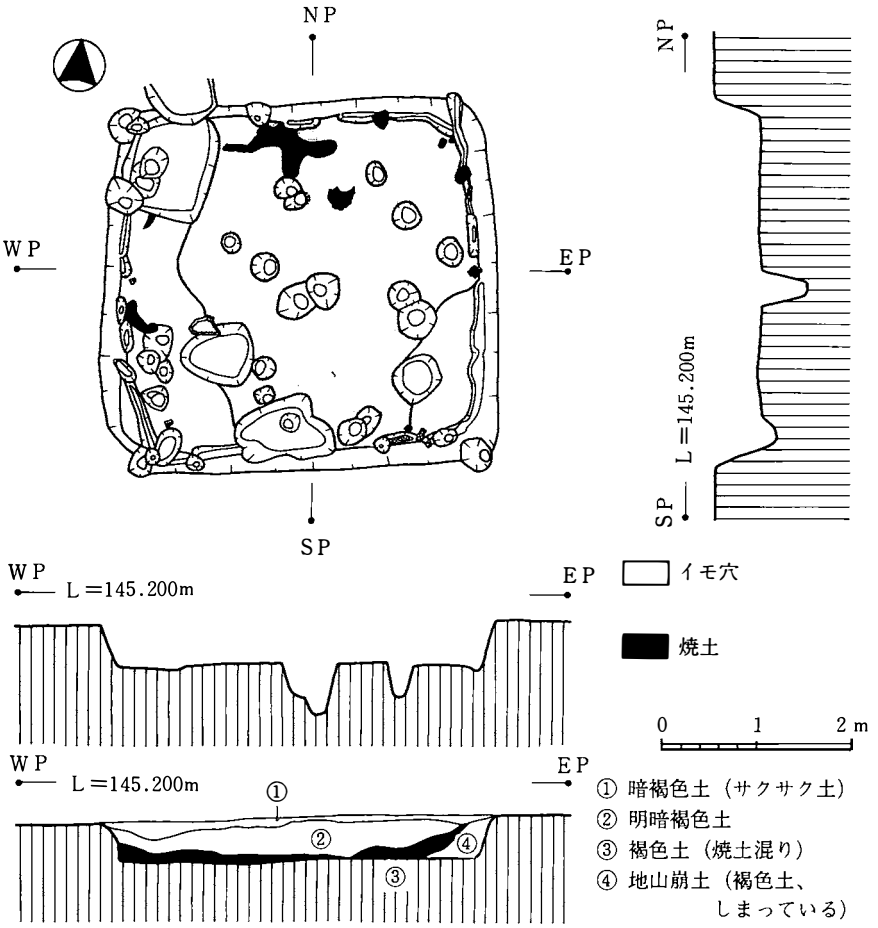
２は高坏形土器の脚部である。外面の丁寧な横方向のヘラ磨き調整が目立つ。内面はヘラ削りを施す。脚部屈折部の角度は大きく、接地面からかなり近い。端部は丸くなる。

16号住居跡（第154図）

正方形に近い平面形をしており、短軸3.9m、長軸4.2m、遺構検出面からの深さ約50cmを計る。長軸方向は東西を向く。

主柱は15号住と同じく住居中央に１本が存在する。四方の壁際には壁溝が見られるが、必ずしも連続した溝にはなっていない。西北隅はイモ穴によって一部破壊されている。

炉跡は主柱の西南部にある。三角形に近い楕円形をしており、床面からの深さは約15cmを計る。埋土は焼土の混じる褐色土となっている。



第154図　16号住居跡実測図

床硬化面は厚く、広範囲に広がっており、硬化していない部分が少なくなるくらいである。北側、東側、南側では硬化面が壁に接しており、壁際まで立って歩けたことを物語っている。このことは当住居跡は15号住では検出できなかった壁溝が断続的ながら存在することから、壁際を人が立って歩けるくらいの板壁が存在した蓋然性を強くしている。硬化面の厚みはかなりあり、約10cm近くになっている。かなり長期間使用されていたと考えられる。

南側壁中央やや西側にに接して、貯蔵穴がある。全体の形状は長方形に近い不定形を呈してる。注目すべきはその中から、完形の壺が横たわって出土したことである。貯蔵穴の底部からは若干浮き上がっている。

当住居跡も焼失住居であったらしく、四方の壁際に炭化木、焼土の塊が散在する。特に北側中央壁際には多量の焼土の塊が発見され、その中には炭化木が含まれていた。また、主柱と北側壁との中間地点からは屋根材と思われるチガヤの炭化物が細い炭化木と一緒に発見された（ＰＬ22）。

なお、当住居跡も掘り方が深かったためが埋土が４層にわかれていた。基本的には15号住と同じく、最下層に焼土、炭まじりの褐色土がある。

【遺物】（第159図　3）

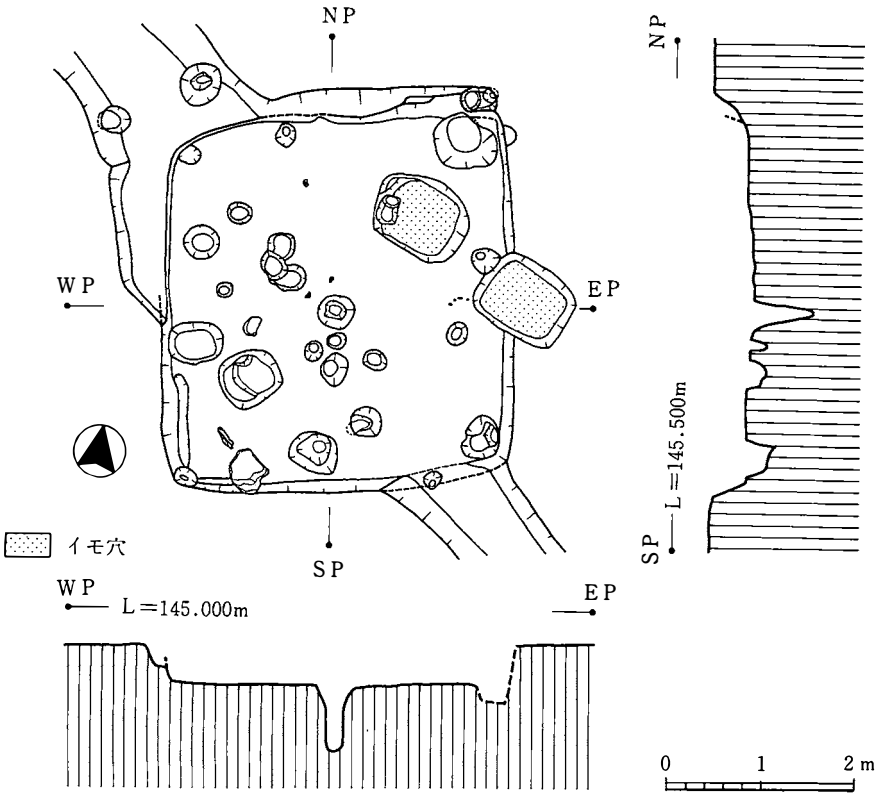
この住居跡も遺物がほとんど見られず、貯蔵穴の中から出土した甕形土器を掲載した。

胴部が卵形をし、胴部との屈曲部から外反しながらやや立ちぎみの口縁部を持っている。端面は丸くなる。胴部内面のヘラ削りはあまり丁寧でなく器壁は厚くなったままである。また、その下半はナデによって消されている。外面の調整はヘラ削りが行われたらしく、ナデによって消し残されたヘラ削りの痕跡が観察される。

19号住居跡（第155図）

ほぼ正方形に近い平面形をしており、短軸3.8m、長軸4.2m、遺構検出面からの深さ約40cmをはかる。長軸方向はほぼ南北を向く。

主柱は、住居跡中央に１本が確認された。床面かの深さは深く、他に発見された柱穴は浅いことから



第155図　19号住居跡実測図

１本に限定できるようだ。

炉跡は住居南西部にあり、正方形に近い楕円形をし、床面からの深さは約10cmである。埋土は褐色土に焼土と炭を混じえる。

当住居跡は、奈良時代の溝によって中央部を北西から南東にかけて破壊されている。その溝の深さは住居跡の床面の深さを越えており、住居跡の床硬化面は明確に検出できなかった。

貯蔵穴も当住居跡でははっきりしない。ただ、西側壁際に楕円形で深さが約20cmの掘り込みがあり、貯蔵穴かと考えられるが、大きさが小さく問題が残る。なお、住居跡内に散在するピットは縄文時代のものと考えられる。

実際の発掘作業の際は気づいてはいないのだが、この地点には縄文時代の大きな土坑が存在した蓋然性が高い。図から見ても分かるように住居跡北西部に住居跡及び溝によって破壊された長円形の土坑があるようだ。当住居跡及び溝の中からは縄文時代後期の土器や玉類、玉原石などが出土している。これらの遺物に関係する何らかの遺構があったと考えられるのである。

【遺物】（第159図　４，５）

当住居跡も遺物数が少なく、甕形土器２点を掲載した。

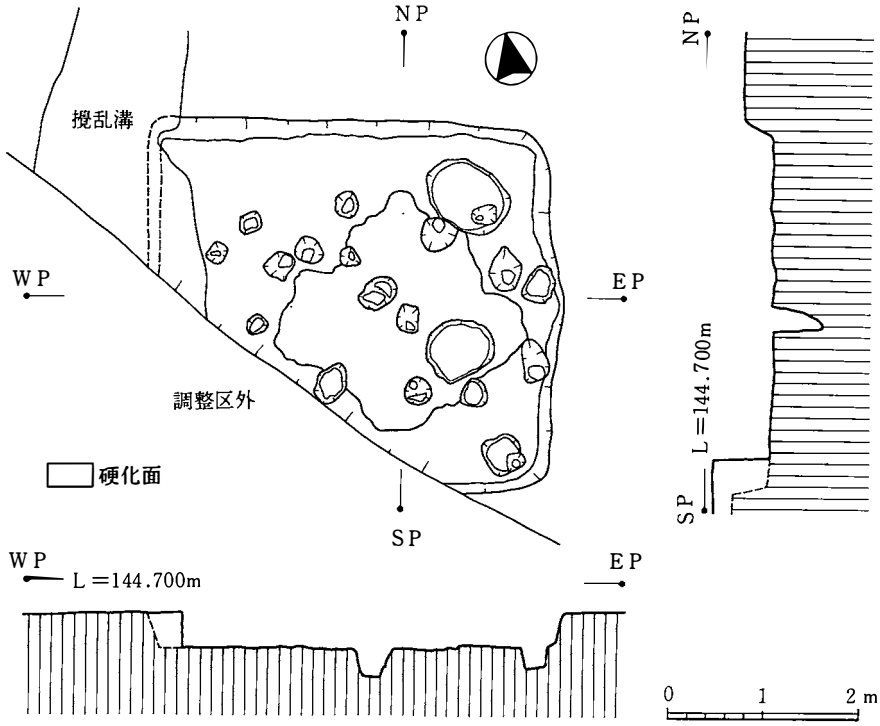
４は胴部が卵形より脹らみがなくなっている。口縁部の外反も弱い。端面は丸くなる。器面調整はナデ調整が内外面とも主流になっており、刷毛目、ヘラ削りはその痕跡が残るのみである。

５は上げ底の脚部を持つものであろう。てずくねでつくられたようで凹凸が目立ち、器面調整もナデでおおわれている。ただ、外面のほんの一部にヘラ削りが認められる。この土器は当遺跡の土師器の中でも異形であり、他地域からもたらされたものかもしれない。

20号住居跡（第156図）

ほぼ正方形の平面形をしており、短軸４ｍ、長軸4.2ｍ、遺構検出面からの深さ約40cmを計る。長軸方向はほぼ東西を向く。住居跡西側壁は近世の溝によって破壊されており、正確な住居ラインは確認できなかった。

主柱は住居中央に１本が確認された。住居内では他に多数のピットが存在するが、当住居跡に伴うと考えられるものの特定はできなかった。その中で２本柱になるもの、４本柱になる組み合わせは確認できなかったことから１本柱として認定した。なお、



第156図　20号住居跡実測図

他のピットは縄文時代のものと思われる。

炉跡は主柱の南東部に見られた。楕円形をしており、床面からの深さは約10cmである。埋土は焼土混じりの暗褐色土であった。

貯蔵穴は現段階では認定できていない。恐らく調査区外に存在するものと思われる。

床硬化面は住居中央部やや東寄りに広がっている。硬化面は比較的やわらかく、居住期間はそれほど長くはなかったようだ。

なお、遺物はほとんどなく、しかも復原できた土器はなかった。

21号住居跡（第157図）

ほぼ正方形の平面形をしており、短軸3.8m、長軸４m、遺構検出面からの深さ約25cmを計る。長軸方向はほぼ南北を向く。なお、当住居跡は南東隅部が近世の溝によって破壊されており、また、奈良時代の掘立柱建物の柱が床面を破壊している。

主柱は４本柱と認定した。なお、主柱以外にも多数のピットが見られるがほとんどが縄文時代のものと思われる。

炉跡は南西部の主柱西側に接して検出された。円形をしており、床硬化面からの深さ約10cmを計る。埋土は暗褐色土であり、焼土の塊が中央部に見られた。

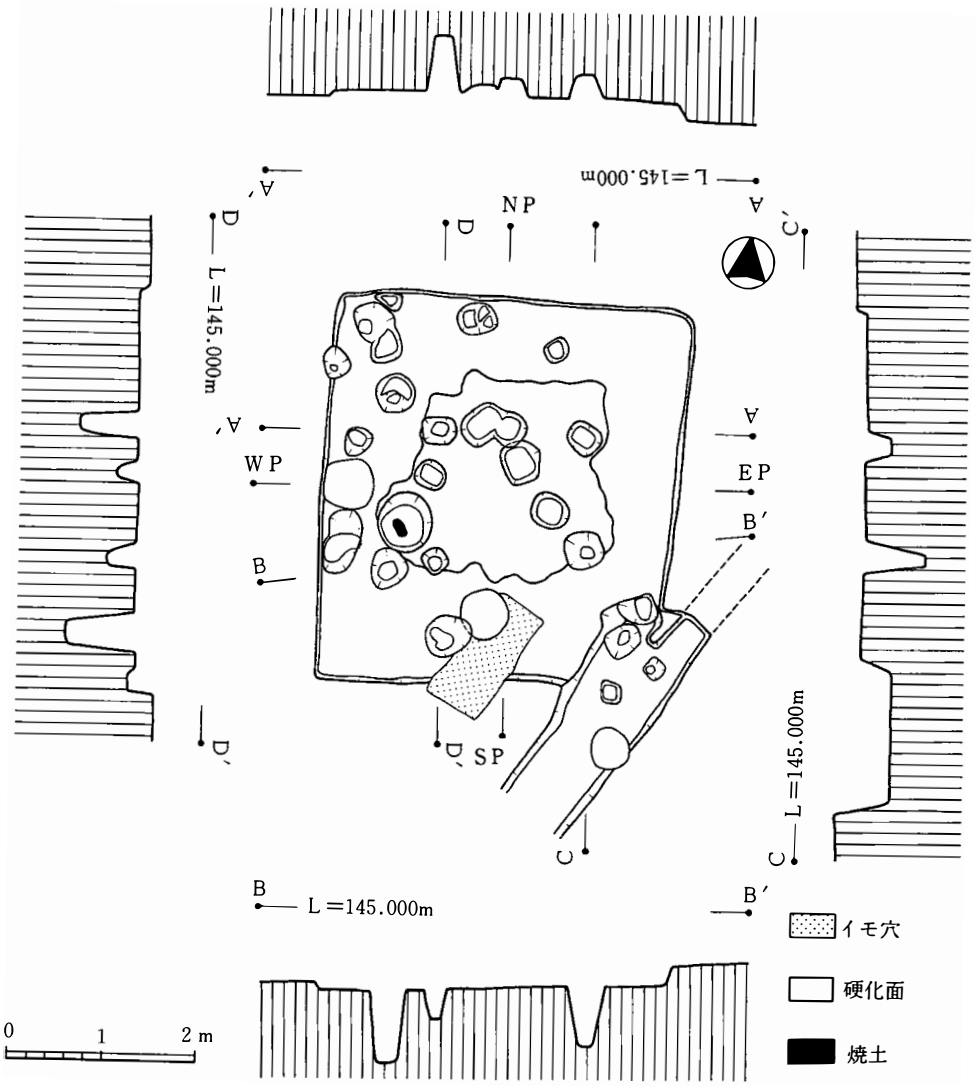
貯蔵穴は後世の破壊のためか確認できなかった。

床硬化面は中央部に広がっている。しっかりした硬化面で厚みもあり、かなり長期間使用された住居と考えられる。ただ、Ｄ調査区の特徴である整地層に住居が建設されているため、床面の検出が難しかった。また、整地層の中に入っている。他の時期の土器がさらに検出を困難なものにした。したがって住居内のさまざまな施設の検出を見逃している可能性がある。

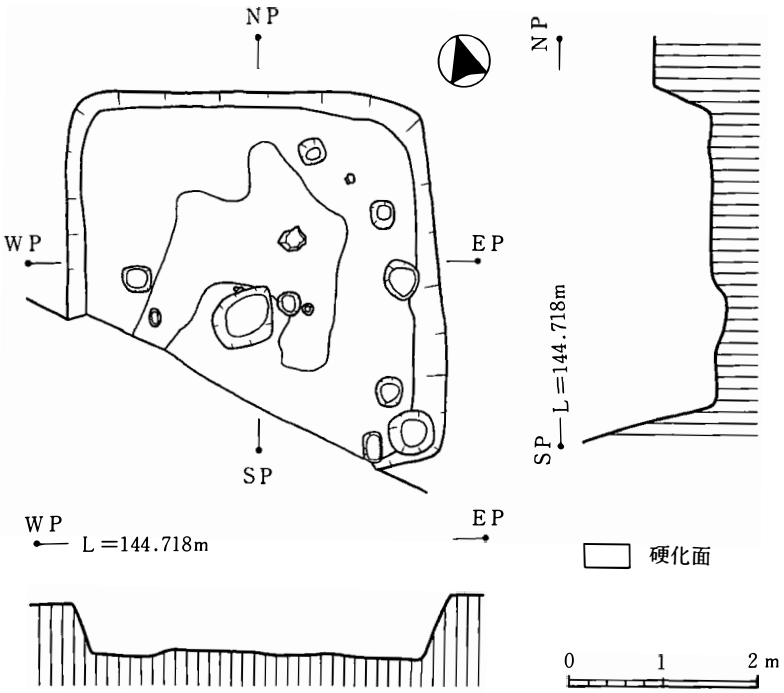
【遺物】（第159図　６～８）

当住居跡の遺物数は少ない。そのなかで器形が復原できるもの３点を掲載した。

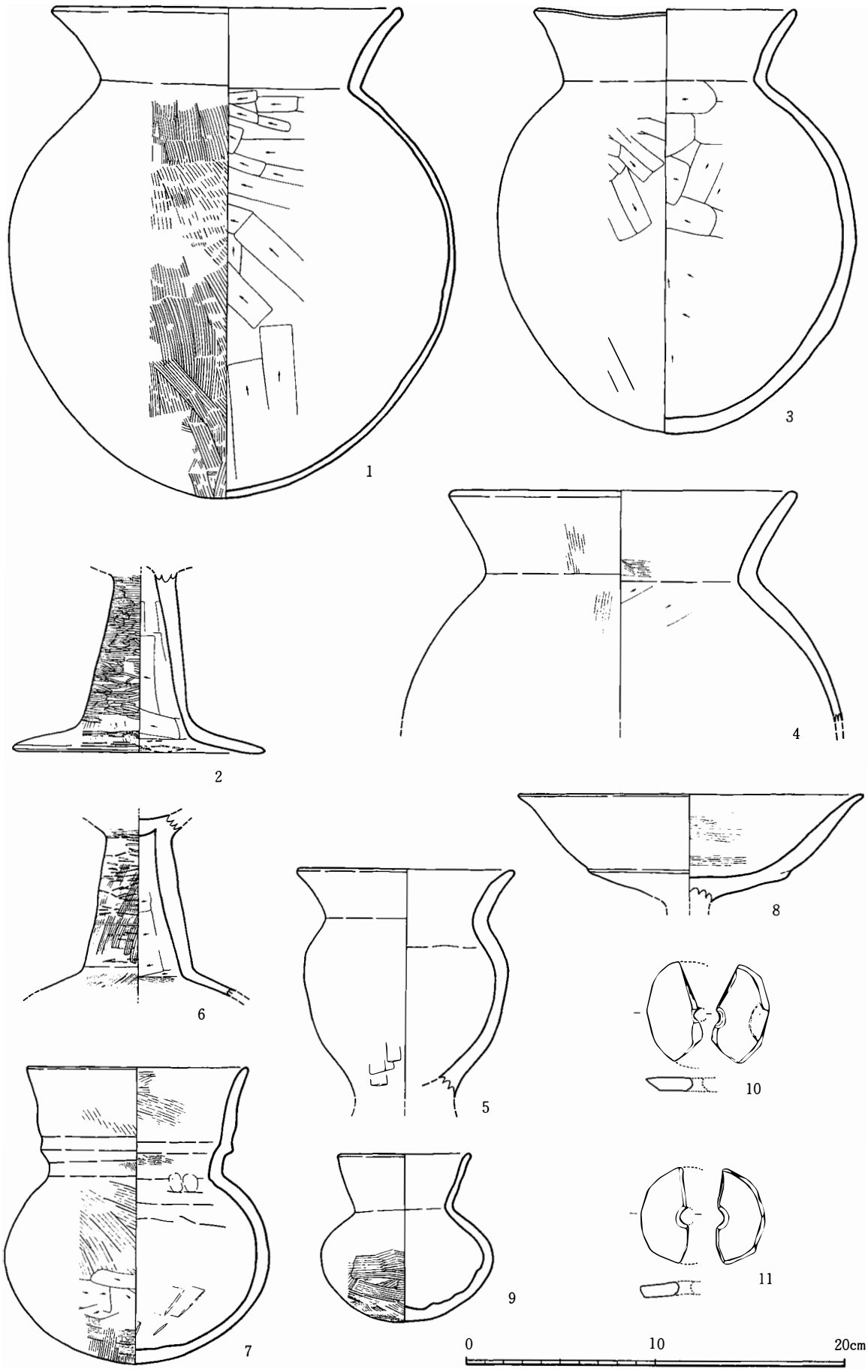
６、８は高坏形土器の脚部と坏部である。６の脚部の屈折部は角度が大きいが、接地面にそれほど近くはないようだ。内面にはヘラ削りが見られる。外面調整は刷毛目の後ヘラ磨きが認められる。８は坏部の屈曲があまり明確ではない。ただ、屈曲部は粘土接合部になっており、外面に１条の沈線をめぐらせ段をつくることで屈曲部の機能を果たしている。



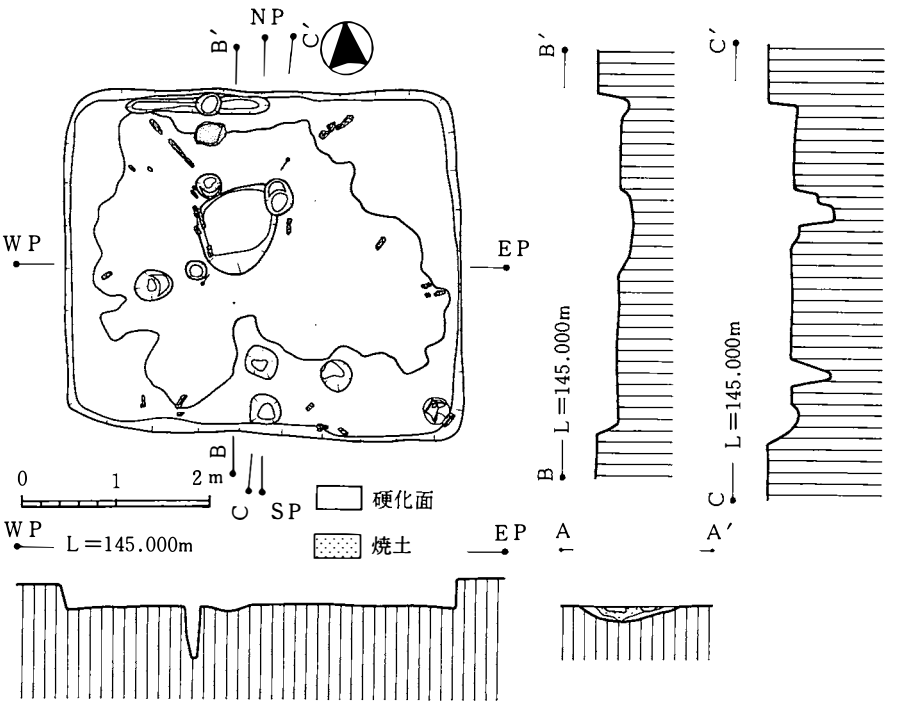
第157図　21号住居跡実測図



第158図　23号住居跡実測図



第159図　15・16・19・21・23号住居跡出土遺物



第160図　24号住居跡実測図

７はいわゆる小型丸底壺と言ってよいものである。頸部上半部が屈折し、複合口縁状になったもので口縁部と頸部の境に明瞭な稜線が作られている。内面はんナデ調整が多く、外面は胴部にヘラ削りの後刷毛目が見られる。

23号住居跡（第158図）

ほぼ正方形の平面形をしており、短軸3.9m、長軸４m、遺構検出面からの深さ約50cmを計る。長軸方向はほぼ南北を向く。

炉跡は住居中央南寄りにある。楕円形の平面形をしており、床面からの深さは約10cmを計る。埋土は焼土まじりの暗褐色土である。

床硬化面は、やや明確さを欠くが中央部に広がっている。ただ、21号住と同様に当住居跡が整地層に建設されているために床面がはっきりしていない。しかし、この床面上には台石がのっており、床面である蓋然性を高くしている。

主柱は当住居跡でははっきりしない。かなり、詳細に探索したが図に載せたピットが確認されただけであった。これらのピットは深さがいづれも床面から10cm～20cmであり、柱穴としては浅すぎるようだ。また、住居内での柱の位置として妥当と考えられる柱が見当たらない。

【遺物】（第159図９）

当住居跡から出土した遺物は極端に少なく、小型丸底壺１点を掲載した。外面下部に明瞭な刷毛目を残す。

24号住居跡（第160図）

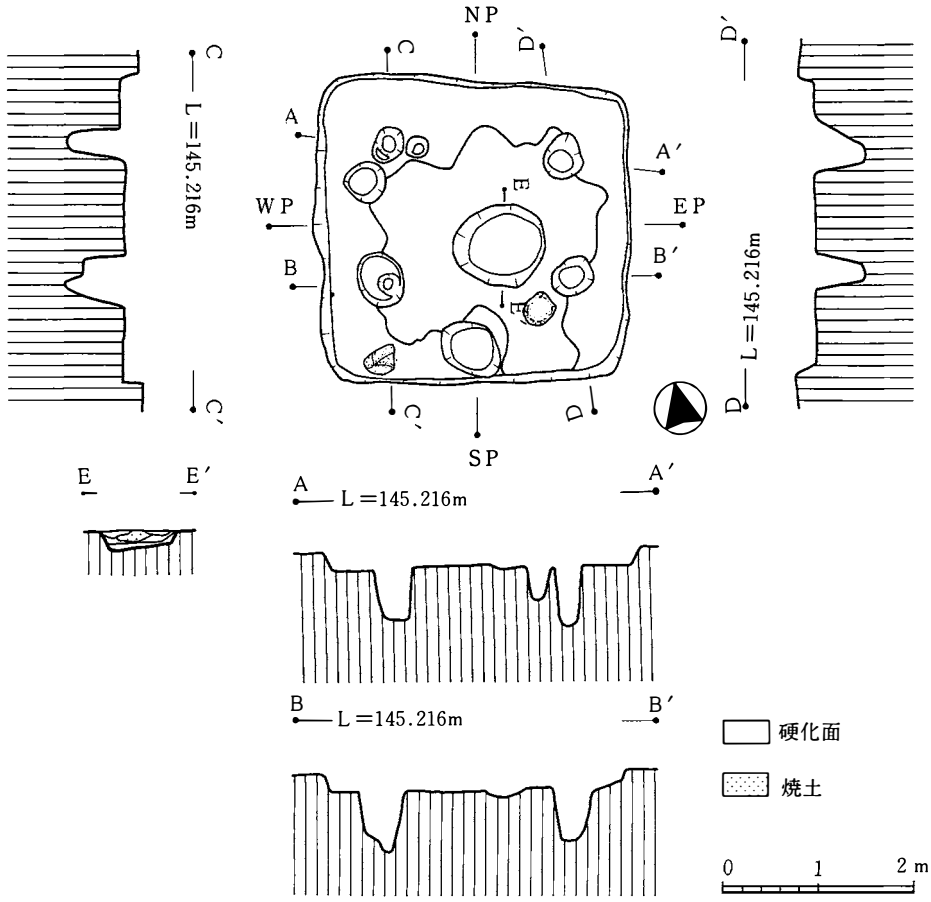
正方形に近い長方形をしており、短軸3.6m、長軸4.2m、遺構検出面からの深さ約30cmを計る。長軸方向はほぼ東西を向く。

主柱は短軸中央線に沿って２本が認められる。柱間隔は1.7mある。

炉跡は北側主柱の南西部に接してある。楕円形をしており、かなり大きい。床面からの深さは約15cmあり、埋土は暗褐色土に焼土の塊が認められる。

床硬化面は広範囲に広がっており、硬化もかなりの厚みを持ち、かなり長期間にわたって利用されたようだ。硬化面は北側壁際でほぼ接するように広がっており、北側に出入口が付設されていた可能性がある。なお、硬化面が北側壁際に近づく位置に壁溝が部分的に見られた。

床硬化面上には住居の建築部材の炭化木がかなり多数検出された。炭化木の方向を見ると主柱に向かっている様子が窺えるものがあり、屋根の構造を知る上で参考になる。また、床面の高さで南東隅に完



第161図　25号住居跡実測図

形の土師器壺が横たわった状態で出土した。当初この部分に貯蔵穴があるものと考えたが、精査の結果貯蔵穴らしき掘り込みは確認できなかった。

【遺物】（第163図　1）

この住居跡も遺物がほとんど出土していない。ここでは住居跡南東隅で横たわっていた壺形土器を掲載した。やや縦長の胴部であるが球状に近い。頸部は直立ぎみに外反している。端面は平坦になっている。内面は胴部以下にヘラ削りが丁寧に施されている。外面は刷毛目の後ナデ調整が行われており、刷毛目がわずかに残存するのみである。頸部内外面はナデ調整で覆われている。

25号住居跡（第161図）

ほぼ正方形の平面形をしており、短軸3.1m、長軸3.3m、遺構検出面からの深さ約25cmを計る。長軸方向はほぼ東西を向く。

主柱は長軸方向に柱間隔が長くなる4本が確認された。

炉跡は南東南側の主柱近くに見られる。楕円形をしており、直径1mほどをはかり、かなり大きい。床面からの深さは約20cmある。埋土は暗褐色土を主にし、焼土の塊を含んでいる。

床硬化面は4つの主柱の内側に広がっている。なお硬化は厚く、この住居が長期間使用されたことを物語っている。また、硬化面は南側壁東において壁と接している。おそらく出入口になるものと考えられる。

出入口と考えられる硬化面の西には壁に接して、深さ約45cmとやや深いピットが検出された。貯蔵穴としては問題が残るが、位置的には妥当と考えられる。

当住居跡においても床面上において、少しではあるが炭化木が発見された。南東部壁際からの出土である。

【遺物】（第163図　2）

5号縄文住居跡が重なっているため、縄文土器が多量に発見されている。そのため、発掘の際に縄文

土器と共に取り上げているとかんがえたが、整理においては土師器はほとんど分離できなかった。ここではその中でも復原可能な埦形土器１点を掲載した。

埦形土器は平底より丸底に近いようだ。口縁端部近くで直立する。内外面とも丁寧にヘラ磨きされている。

26号住居跡（第162図）

住居の北東隅から南西隅にかけて調査区外になっており、推定になるがほぼ正方形に近い平面形をしているものと考えられる。南北が長軸になりそうで、3.6m、東西が短軸で3.4mと推定される。なお、遺構検出面からの深さは約50cmを計る。

主柱は短軸の中央線に沿った２本柱になりそうである。

炉跡、貯蔵穴及び床硬化面は現状では確認できなかった。当遺跡での古墳時代の住居跡の炉跡の位置としては、主柱に近接しており、あるとすれば東側の主柱の近くにあるものと考えられる。ただ、当住居跡は床の顕著な硬化が認められないごとから、住居の短期間の使用か、あるいは人が常時住まない倉庫としての使用も考えられる。

【遺物】（第163図　3～5）

遺物は床直上に据えられた台石の他は住居南西部から土師器がまとまって出土している。

３、４はおそらく同一個体と考えられる壺形土器である。底部はやや安定性を欠く平底となっている。胴部は縦に長くなっており、頸部近くで急にすぼまる。頸部は外反しながらも直立ぎみである。口縁端部外面には刻み目が連続して付けられている。

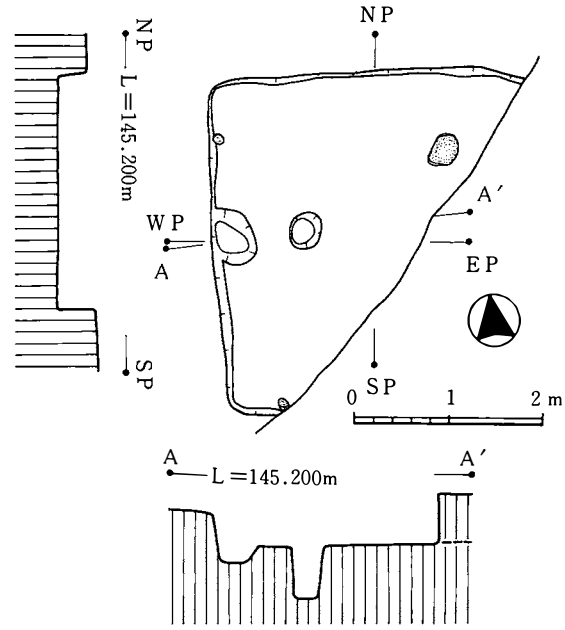
器面調整は内外面とも丁寧な刷毛目調整が施されている。

５は高坏形土器で埦形の坏部に裾が急に広がる脚部が付いている。この土器も内外面とも刷毛目調整が施される。ただ、脚部内面はナデ調整である。

これらの３～５の土器は土師器というよりは弥生式土器の系統を強く引いているものと考えられる。

27号住居跡（第164図）

長方形の平面形をしており、短軸2.4m、長軸2.8m、



第162図　26号住居跡実測図

遺構面からの深さ約20cmを計る。長軸方向はほぼ東西を向く。

主柱は短軸に沿い中央線よりはやや東よりに２本が確認された。

炉跡は主柱の中間部に位置しており、楕円形の平面形をしている。床面からの深さは約10cmである。炉底に焼土の塊が堆積しており、上部に焼土をまじえた暗褐色土が埋土になっている。

当住居跡では炉はかなり長期間使用されたような状態で検出されているにもかかわらず、床硬化面の発達は認められない。住居規模からみても通常の住居とは考えにくく、集落内における特別の機能を持った住居と思われる。

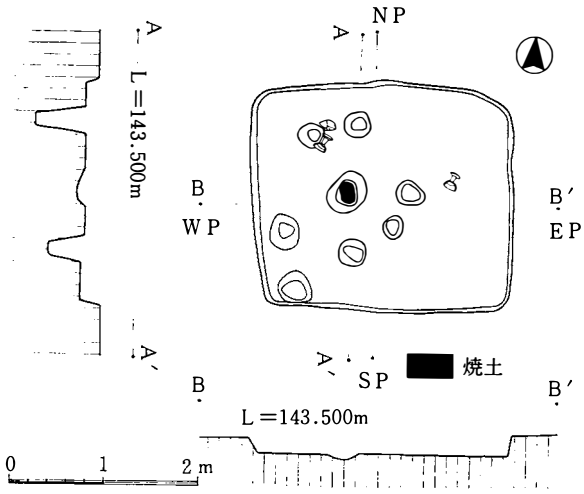
遺物においても、やや趣を異にする出土の状態であった。完形の高坏形土器２点が住居跡の床面に倒れたままの状態で検出された。

【遺物】（第163図　6～8）

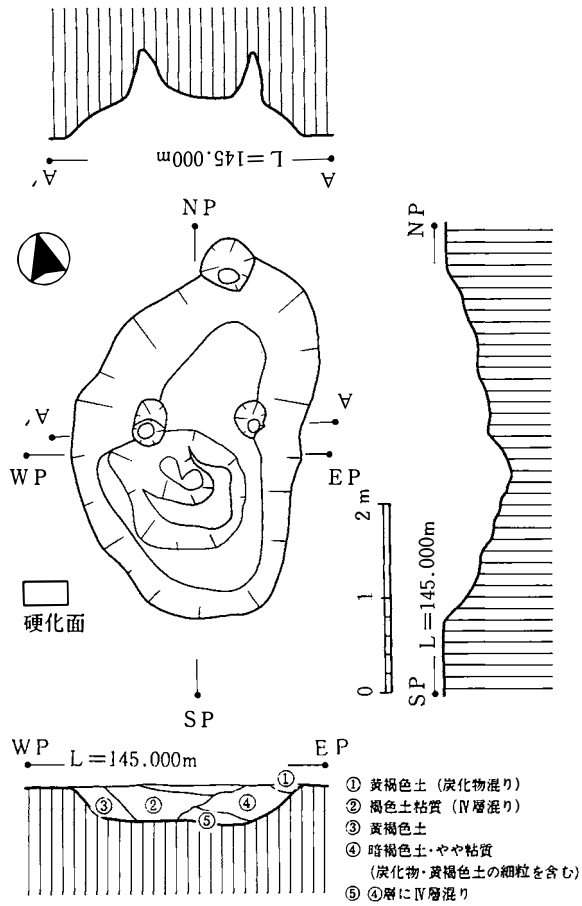
出土遺物はここに掲載した３点のみである。　６は甕形土器で口縁端部近くで外反し、外に開く口縁部を持っている。内面胴部以下にヘラ削りがみられ、外面には刷毛目が見られる。

７、８とも共通した器形をしている。坏部が中位から屈折し、外面に稜が形成されている。脚部も下位で屈折しており、形式的には古い。器面調整は７

第163図　24・25・26・27・28号住居跡出土土器



第164図　27号住居跡実測図



第165図　28号住居跡実測図

が外面、坏部内面にヘラ磨きを多用し、脚部内面にヘラ削りを施すのに対して、８は外面に刷毛目の痕跡がわずかに認められるほかはナデ調整を施している。

28号住居跡（第165図）

遺構は楕円形に近い土坑状のものであるが、床硬化面が認められることから住居跡とする。

先にも述べたように平面形は楕円形をしている。遺構検出面から床硬化面までの深さは約40cmを計る。なお、本来の掘り方の深さは約70cmである。

主柱は東西に２本が確認された。住居跡の短軸に沿っているが、床硬化面の広がりからは北に外れている。

通常の住居跡とは異なって壁は直立せず、なだらかに立ち上がっている。

床硬化面はそれほど固く、厚くはないものの明確に硬化している。この硬化面の下部には、円形の落ち込みがあり、断面形を見るといっそう住居跡としては珍しい形態を見せる。

埋土は黄褐色粘質土（遺跡第Ⅳ層）が混じった褐色土を中心としている。これは他の古墳時代や奈良時代の住居跡の埋土とは異なっている。

出土遺物は縄文後期・晩期の土器が多いが土師器甕が１点出土した。なお、楕円形の平面形をし、直立した壁を持たない住居跡は縄文時代早期の住居形態と通じるものであるが、早期の土器は、検出されていない。

【遺物】（第163図　9）

土師器は１点のみであり、他の出土遺物は縄文後期・晩期の土器が圧倒的に多い。６に器形、調整ともよく類似した甕形土器である。

第７節　奈良時代から平安時代の遺構と遺物

この期の遺構と遺物は調査区の北西から南東にかけてほぼまっすぐ掘られた溝によって区画された南側にみられた。

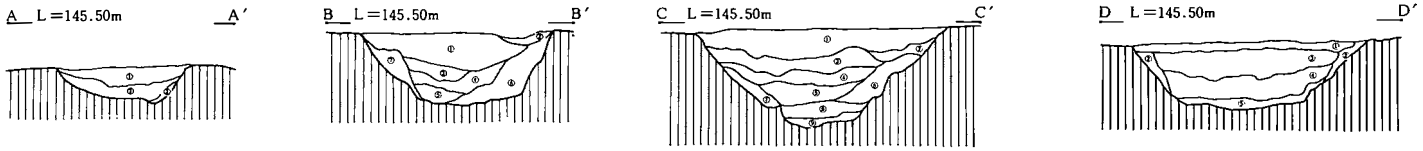
この溝は当然のことながらこの期に属する。溝の性格は断定はできないいものの、この期の集落を画して囲むものか、あるいは区切るものと考えられる。

遺構はこの溝のほかに、竪穴住居、掘立柱建物、土坑などが認められた。

遺物はそれほど多くはなく、主に溝からの出土であり、住居跡からの出土は少ない。

(1) 住居跡

全体で６棟検出された（第166図）。いずれも竪穴住居で、発見場所は東西に分かれてまとまっている。

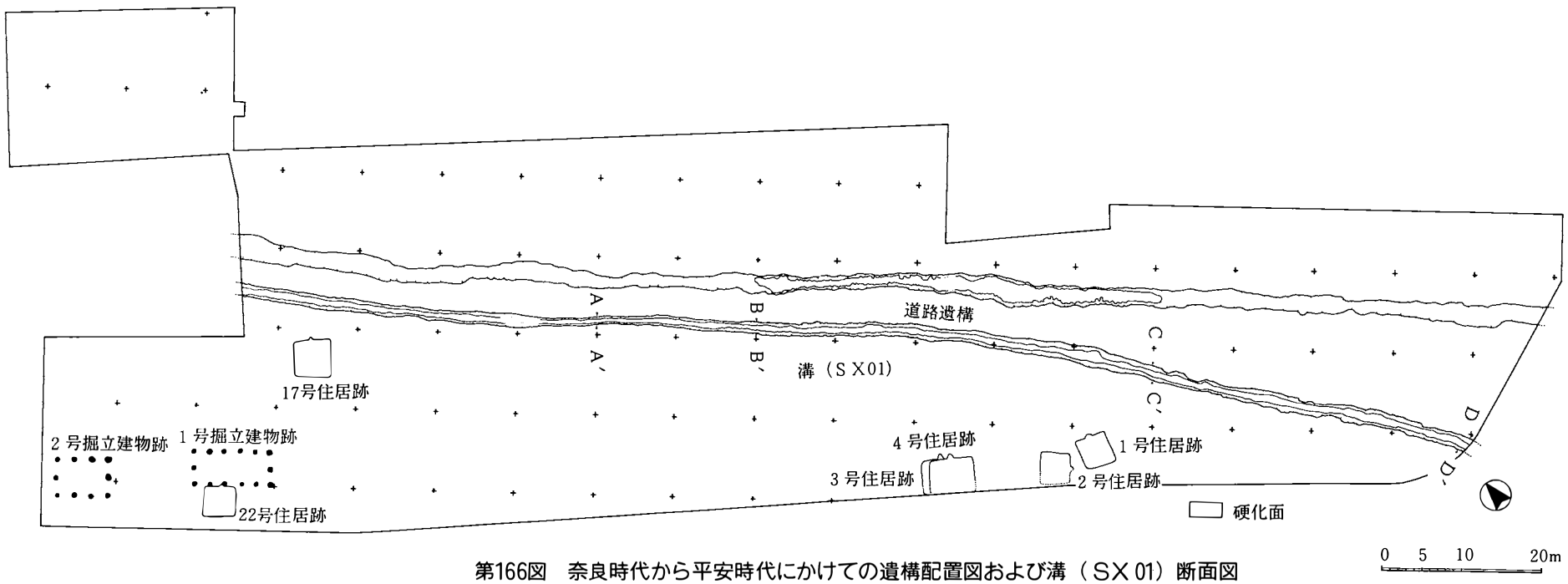


①層―暗褐色　軟質
②層―地山崩壊土
③層―地山苦土

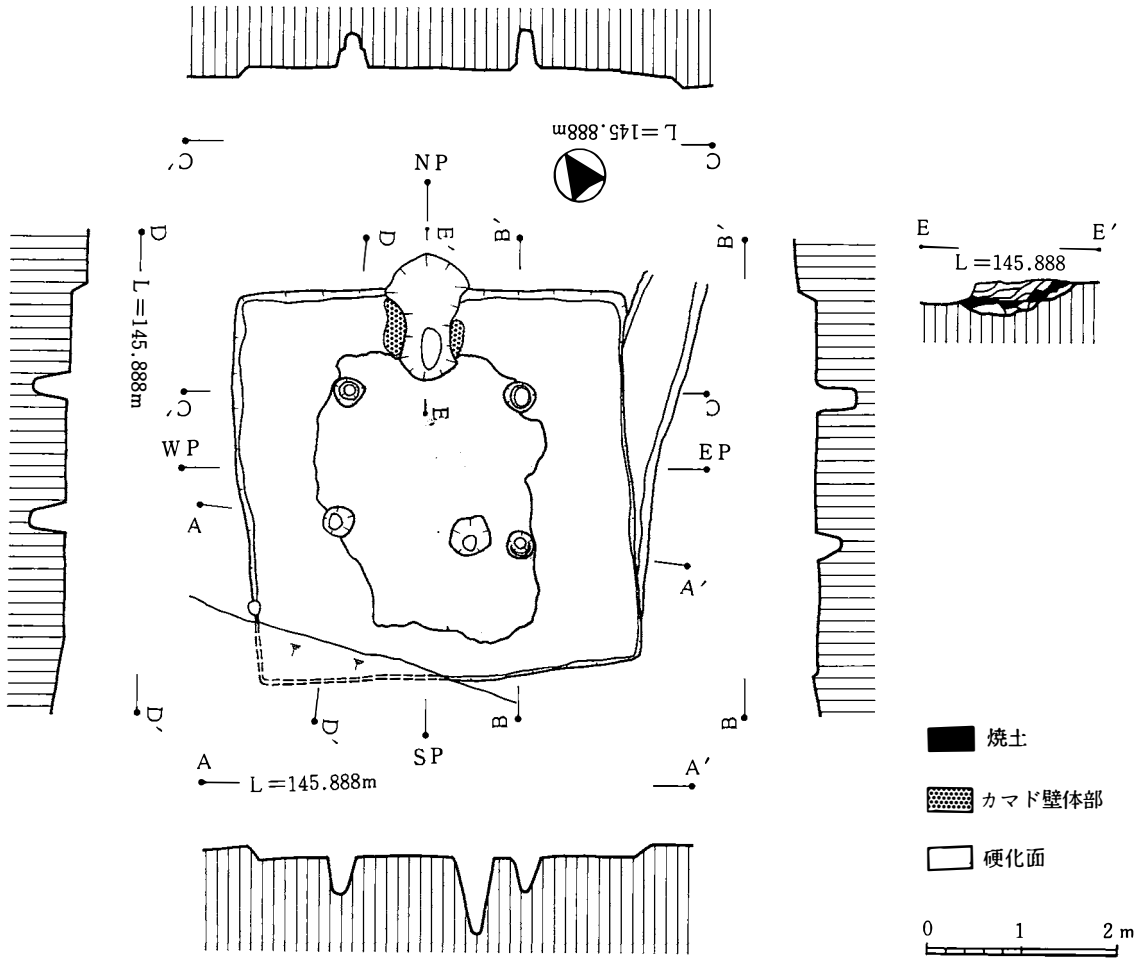
①層―明暗褐色土、軟質
②層―褐色土、オレンジ色の焼土がある
③層―明暗褐色土、やや粘質
④層―暗褐色土、ローム質
⑤層―褐色土、軟質ブロック土を含む
⑥層―褐色土、地山崩壊か？
⑦層―暗褐色土、粘質

①層―褐色土、粘性がある
②層―明暗褐色土、軟質
③層―暗褐色、粘質
④層―明暗褐色土、やや粘質
⑤層―暗褐色土、粘質
⑥層―褐色苦土
⑦層―褐色苦土
⑧層―褐色土、硬質
⑨層―明褐色土、地山崩壊土

①層―火山灰を多く含みサラサラである。乾くと砂ぼこりがある(かなり)。③層より明るい色である。褐色。
②層―地余が流れ込んだものである。
③層―明褐色。せき流を含んでおり、①層よりしまっている。
④層―暗褐色。粘質。
⑤層―④層より明るい。粘質がある。この層の上面に硬化面が出ている。



第166図　奈良時代から平安時代にかけての遺構配置図および溝（ＳＸ01）断面図



第167図　１号住居跡実測図

調査区南側に４棟、西側はＣ調査区東端からＤ調査区にかけて２棟見られる。なお、西側のまとまりはこの他に掘立柱建物２棟が伴う。

１号住居跡（第167図）

正方形の平面形をしており、長短ほぼ４ｍである。軸の方向はほぼ東西南北を向く。遺構検出面からの深さは約15cmをはかり、かなり浅い。

竈が北側の壁に付く。竈は住居外に煙道部が突き出ており、竈本体はすでにその大部分が破壊されているが、床面に接した部分が一部破壊されずに両袖状に残っている。燃焼部は北側壁から60cmの位置にある。

主柱は４本から構成されており、柱間隔は東西が1.8m、南北が1.5mとなっている。ただ、南西部の柱はやや北にかたよっている。壁際からの間隔は東西南北ともほぼ１ｍとなっている。

床硬化面は主柱を境界としてその内側に広がっているが、南側については、壁際まで続いている。おそらく出入口があったためであろう。

なお、当住居跡では炉跡、貯蔵穴は検出されなかった。

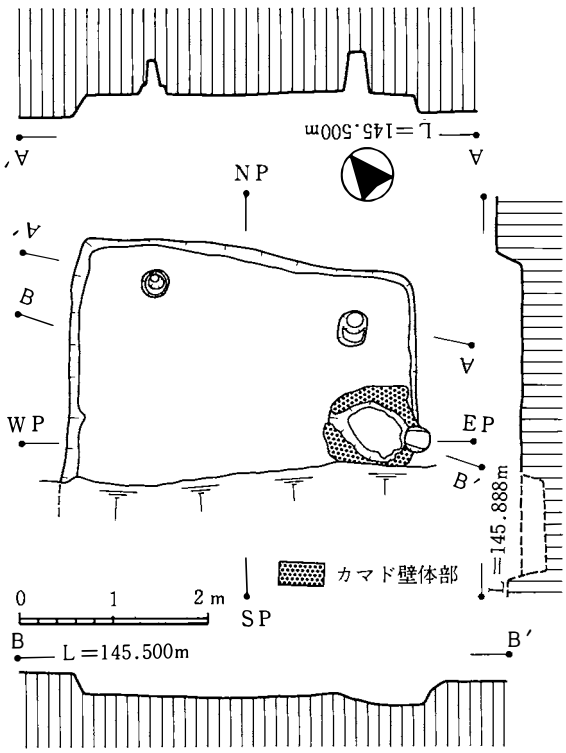
【遺物】（第170図　１～７）

遺物は住居跡覆土内からの出土であり、床面や竈内からの出土はなかった。また、遺物点数も少なく小破片が散在している。

遺物は７点を掲載した。須恵器は甕胴部破片、壺底部破片、坏蓋破片等が出土している。また、土師器では甕口縁部破片がある。

１は壺底部破片で、おそらく平底になるものと考えられる。内面には平行タタキの痕跡が窺える。外面の底部近くは回転ヘラ削りで成形されている。

２、４は須恵器甕胴部破片である。いずれも内面は同心円タタキが見え、外面は格子文、ハケ目が観察される。３は平瓶の頸部から胴部にかけての破片と思われる。内面には車輪文が特徴的に観察できる。



第168図　2号住居跡実測図

外面は回転ナデを施す。7は小破片の須恵器蓋である。色調が赤色系であり、いわゆる赤焼き須恵器である。

5、6は土師器甕口縁部破片である。いずれも内面口縁部下にヘラ削り、外面には口縁部下にタテ方向のハケ目が観察される。両者は口縁部の作り方に違いがみられる。5は口縁部を折り曲げており、6は突帯状に粘土をはりつけている。

2号住居跡（第168図）

ほぼ住居跡の半分が後世の道路遺構によって破壊されているため、本来の平面形の大きさは断定できないが残存する住居から推定すれば、長軸、短軸とも3.7mほどの正方形をしているものと考えられる。遺構面からの深さは約20cmをはかり、かなり浅い。軸方向は北西から南東および北東から南西を向く。

住居南東側壁には竈が付設されている。1号住と同様に煙道部が住居外に張り出している。燃焼部は壁際から約40cmの位置にある。住居跡の深さが20cmということから竈本体はほとんど破壊されていた。ただ床面に接して竈本体がかろうじて残されており、その広がりは竈燃焼部を囲むように円形で帯状の形で認められた。なお、住居中央部に向いて竈本体が途切れる部分があり、おそらく焚口と思われる。また、燃焼部には焼土の塊の広がりは認められなかった。

主柱は4本柱と考えられるが、住居の半分が破壊されているために2本が確認されたのみであった。主柱はかなり壁際に近く立てられており、柱間隔は約2mをはかる。

床硬化面は発掘では確認されなかった。これは竈燃焼部に焼土塊の広がりが認められなかったことと関係があるのかもしれない。

【遺物】（第170図　8～10）

1号住と同様に遺物数はかなり少なく、しかも、覆土内に散在する。8は須恵器甕胴部破片であり、1号住のものと共通する。9、10は土師器皿の底部から胴部にかけての破片である。両者に共通する特徴は底部と胴部が明瞭に区分されていることであり、9はやや上げ底気味になっており、10は底部が回転ヘラ削り、内面外面とも回転ヘラ磨きで仕上げている。

3・4号住居跡（第169図）

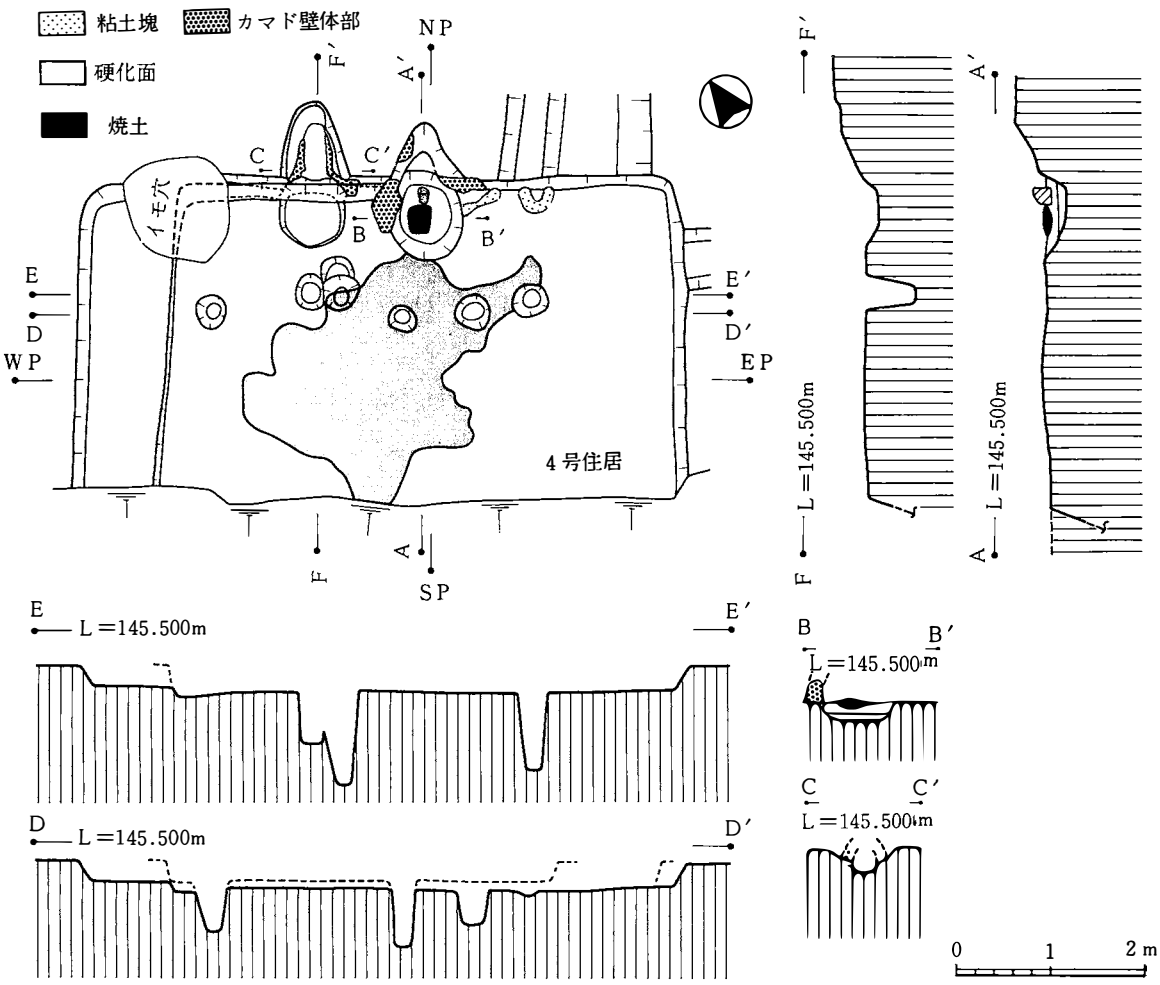
3・4号住居跡はほぼ同一の場所に建てられていることから建て替えられたものと考えられる。

両住居跡とも住居のほぼ半分が後世の道路遺構によって破壊されている。そのため、本来の平面形は不明であるが、床硬化面の広がりから推定すれば、長方形に近い平面形になるものと考えられる。

両住居跡の平面形を長方形であると推定すると長軸は北西から南東の方向を向き、両住居跡とも5.5mほどになる。短軸方向は正確には測定できないが約4.5mになるものと思われる。遺構検出面からの深さは、3号住が約20cm、4号住が約30cmを計る。なお、竈は両住居跡とも長軸方向の北側壁中央部に付設されている。

両住居跡のずれはほぼ長軸方向の1mであり、これは主柱、竈のずれとも一致する。

3号住は4号住によって破壊されているため、床硬化面が検出されず、また竈本体部及び燃焼部上部がなくなっている。竈煙道部はわりあい残りがよく、



第169図　3・4号住居跡実測図

煙突を巻いたと思われる焼けた粘土が一部残っている。煙道部は完全に住居外に出ており、壁の立ち上がりを境にして、外が煙道部、内側が燃焼部という構造になっているようだ。燃焼部は４号住によってすでに燃焼部底部近くまで破壊されていた。ただ、本体の一部と思われる焼けた粘土の壁体が向かって右壁際に残っていた。

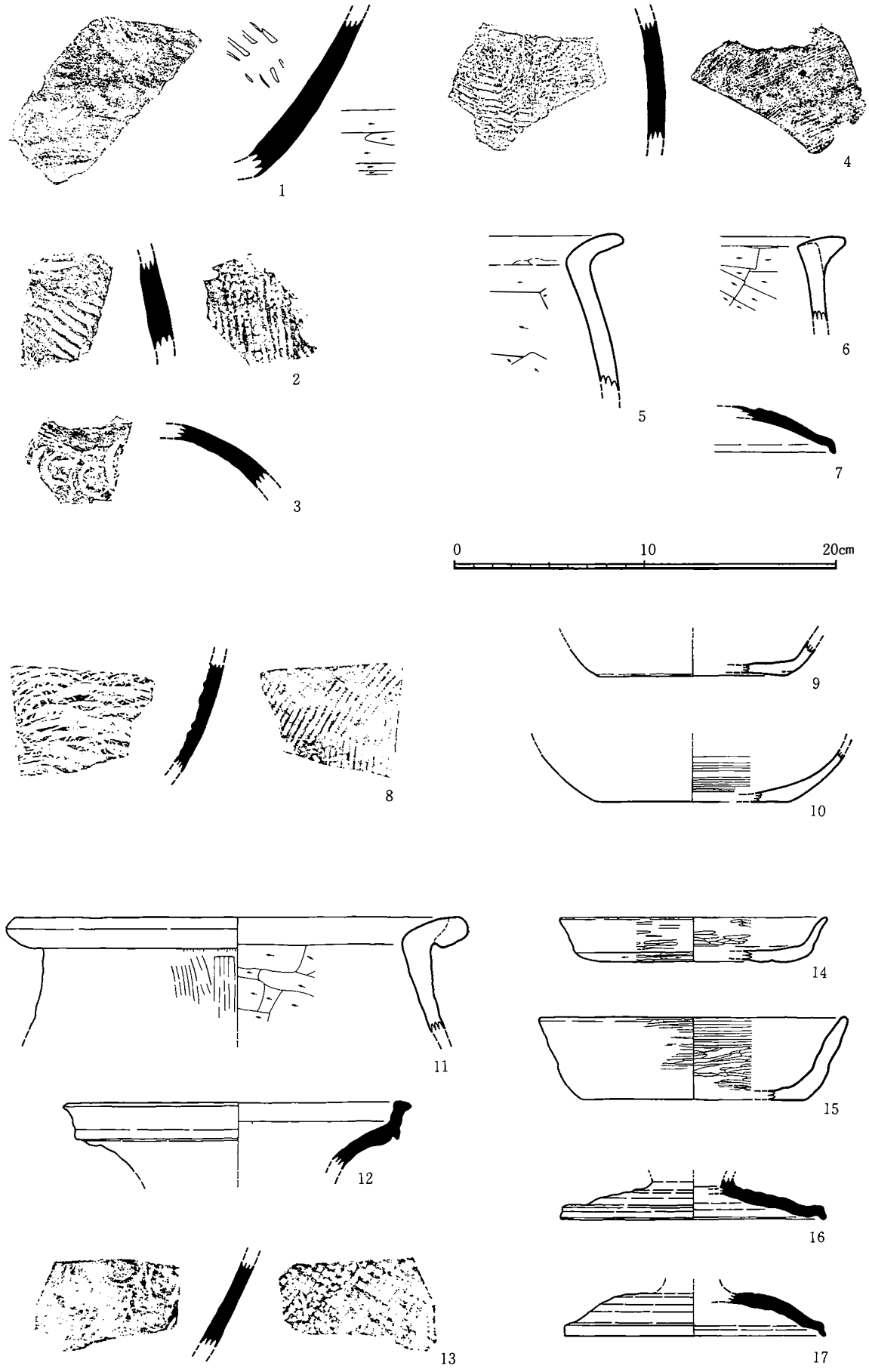
主柱は４本と考えられるが、南側が道路遺構によって破壊されているために、２本のみが検出された。柱間隔は２ｍ、壁際からの間隔は長軸方向からは１ｍ、短軸方向からは1.5ｍである。なお、竈の位置は主柱のほぼ中間にある。

４号住の竈の残りは良く、その構造が割りと分かりやすい。３号住と同様に壁の立ち上がりを境にして煙道部と燃焼部が分かれる。煙道部には煙突を巻いたと思われる粘土は検出されなかったが、その一部が残っている。

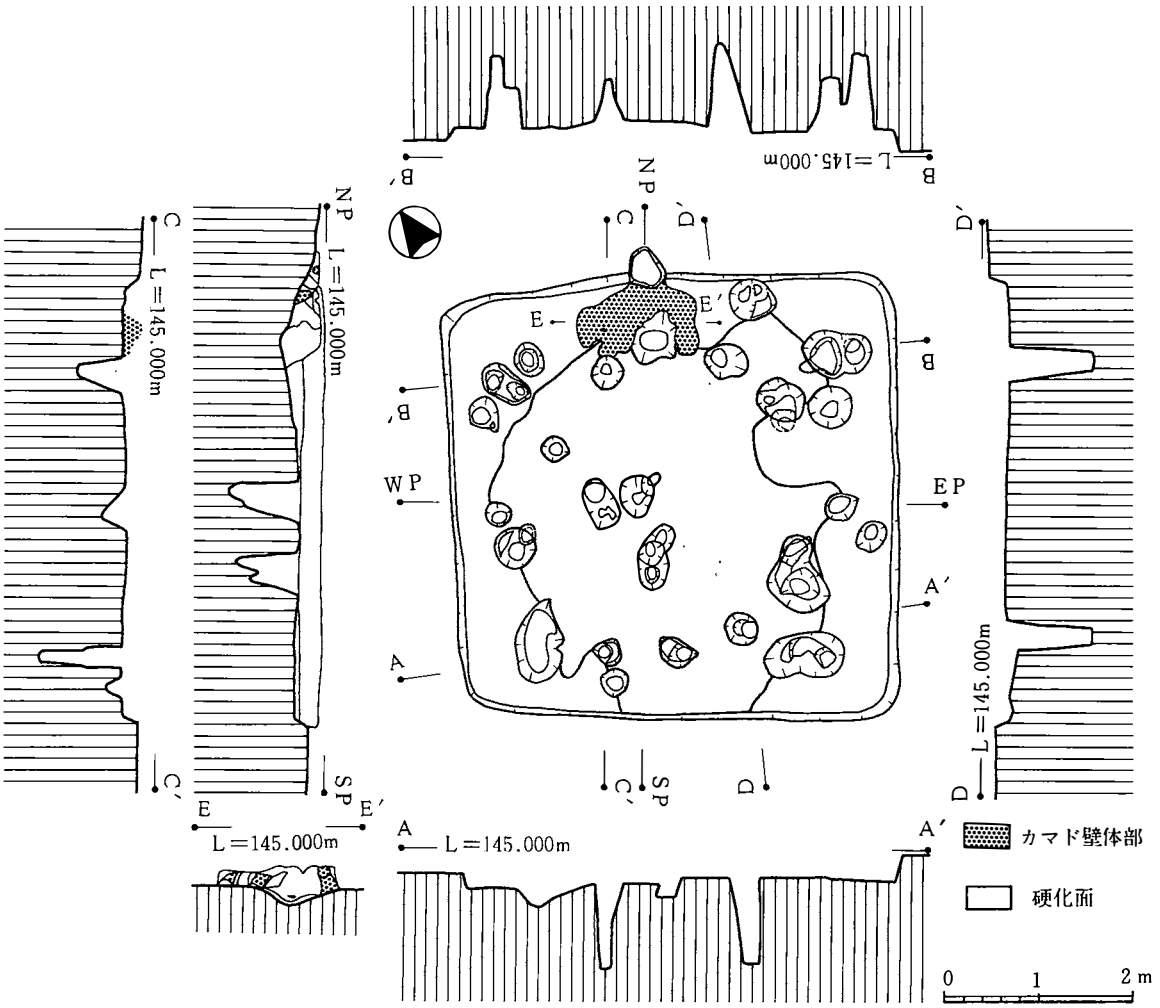
燃焼部は床面から20cmの深さにほぼ楕円形の燃焼床を作り、それを囲むように竈本体を粘土で作り付けている。発掘では竈本体はほとんどが破壊されて検出され、残っていたのは向かって左側の一部と右側の壁際の一部であるが、左側のものは床面に接地した部分が検出され、本体の内面と外面の面が残っていた。内面は焼け方がひどくかなり硬化していた。

燃焼床やや住居中央寄り壁際から30cmの位置に焼土塊が円形に広がっていた。ほぼ床面の高さと同じである。さらに注目すべきことは焼土塊の奥に接して安山岩製角礫の立石が発見されたことである。この燃焼部内に設置された立石は県内各地から多く例があげられるが、その機能を表すような検出例はない。なお、竈右側壁際に粘土の塊が10cmの幅の紐状で発見された。床面上に置いた状態で出土している。何に使用されたのか不明である。

主柱は３号住と同様に４本柱と考えられるが道路遺構による破壊のため、２本が検出されている。柱間隔、および、壁際からの距離は３号住と同じ法量



第170図　1・2・4号住居跡出土土器



第171図　17号住居跡実測図

を計る。

床硬化面は住居中央部に広がっており、壁際までは認められなかった。ただ、北側は竈燃焼床の端まで接しており、南側は住居跡の推定の大きさから見ると出入口に続いていると思われる硬化面の突出が認められる。

【遺物】（第170図 11～17）

遺物数はきわめて少ないが、１・２号住と比べれば多いと言えよう。すべて４号住出土の遺物で、３号住から出土しているものはなかった。

11は４号住の竈近くから出土したもので竈に使用されていた可能性が強い。胴部中央で径が最大になるようで胴部中央から口縁部にかけてはかなり絞られたプロポーションを見せている。当遺跡ではこの形は少ない。

14・15は土師器皿である。径に対する器高の割合はそれほど低くはなく、まだ立体感が感じられる。内外面ともヘラ磨きが認められる。

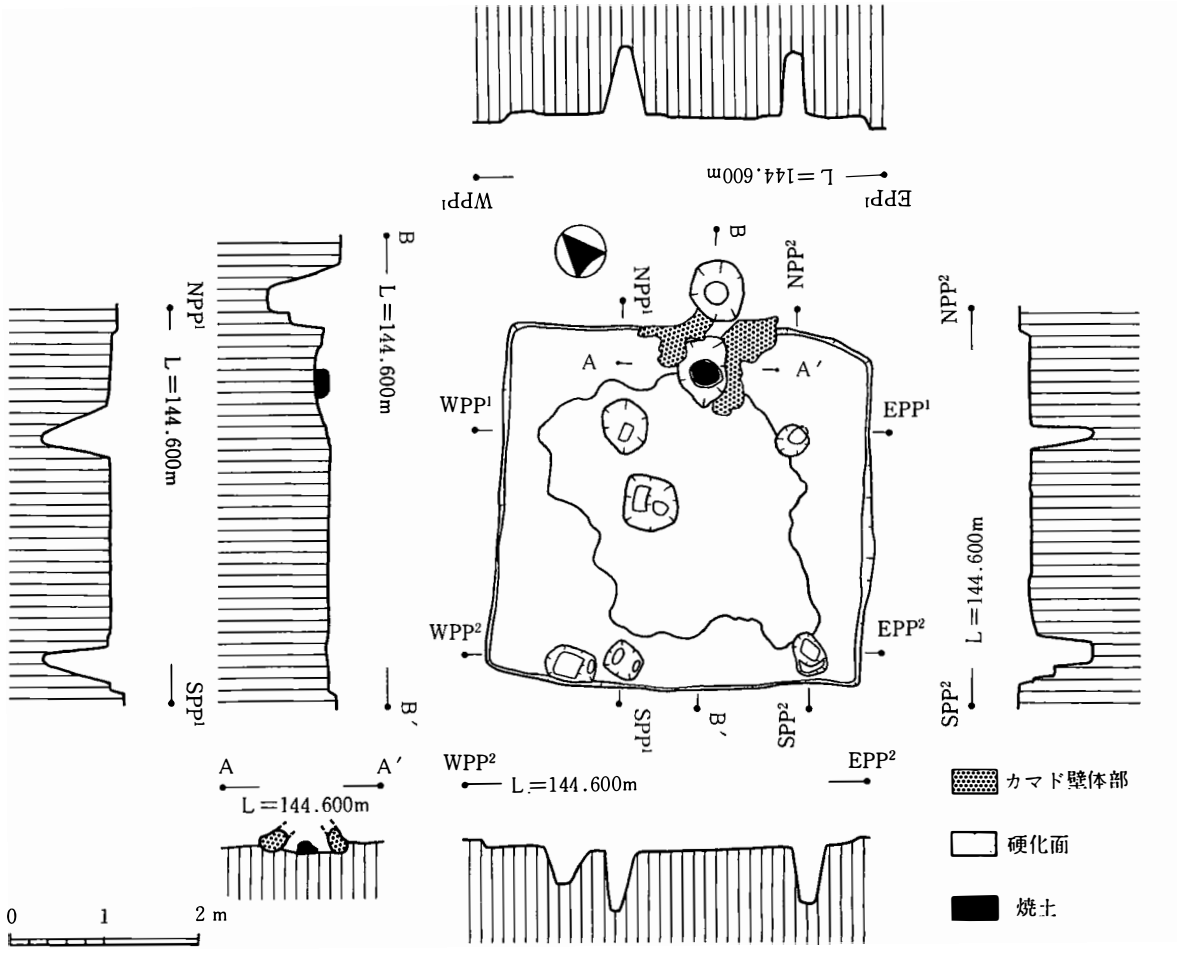
12は須恵器壺であろうか。16・17は須恵器坏蓋である。16はつまみが輪状の高台に似た形をしており、時期がある程度決定できる。

17号住居跡（第171図）

４号住までと異なり、調査区の西側のまとまりに入る。

正方形の平面形をしており、一辺が4.7m を計る。軸方向は北西から南東、および南西から北東をむく。遺構検出面からの深さは約20cmであり、かなり浅い。

竈は住居跡北側壁中央よりやや西寄りに作り付けられている。煙道部と燃焼部との境は壁ではなく、壁よりも住居側に寄っており、燃焼部すなわち竈本体と壁との間に隙間がある。したがって、煙道部は住居跡外にはあまり突出していない。燃焼部竈本体は破壊されているが、燃焼床両側の床面に接して黄



第172図　22号住居跡実測図

白色粘土が若干残存しており、竈本体と考えられる。

主柱は４本が確認された。柱間隔は東西がほぼ1.2m、南北が３ｍである。当住居跡は柱穴と考えられるピットが集中して発見されており、主柱の認定は困難であった。結局、その位置と深さ、及び柱穴底部の形状から先の４本と認定した。

床硬化面は住居内に広く広がっている。特に南側は壁まで接している。おそらく出入口であろう。当住居跡はわりと壁際まで硬化面が接近しており、住居構造を知る上で重要である。なお、硬化面は厚く、長期にわたって使用されたことを物語っている。

【遺物】（第173図　１，２）

出土遺物の数は多いのであるが、縄文時代の土器がほとんどであり、当住居跡に伴うと考えられる遺物は少なく、２点を図化した。

いずれも土師器甕である。２は底部から胴部にかけて残存している。平丸底をしており、ほぼ胴部は直立している。おそらくそのまま口縁部まで達し、径を変えない程度で口縁部を折り曲げているものと思われる。

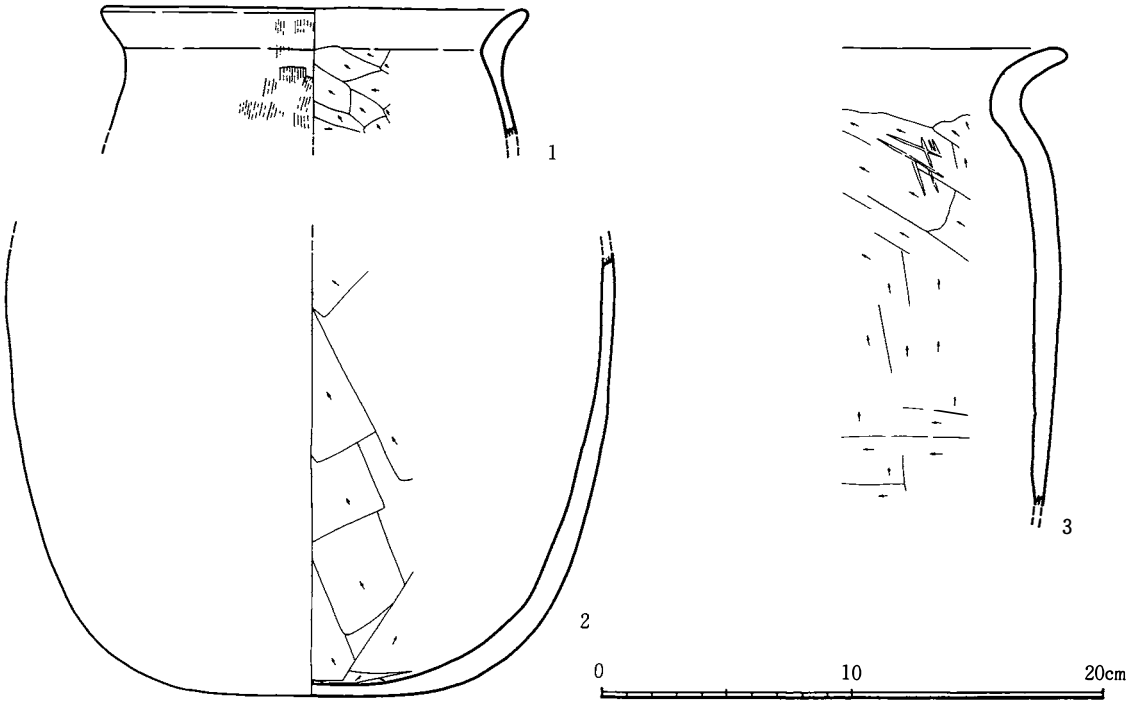
22号住居跡　（第172図）

ほぼ正方形に近い平面形をしており、長軸４ｍ、短軸3.8ｍを計る。遺構検出面からの深さは約10cmとかなり浅い。長軸方向は北西から南東を向く。

竈は短軸方向の北側壁の中央よりやや東寄りに付設されている。煙道部は掘立柱建物１の柱穴により破壊されているが、20cmほどの傾斜を持った面が検出されている。この面は竈本体の燃焼床より若干上部でつながっている。

竈本体は住居跡の深さがしめしているようにすでにほとんど破壊されているが、燃焼床と床面の境に本体の黄白色粘土の立ち上がりが見られる。

燃焼床は約20cmの深さがあり、壁から40cmの位置に焼土の塊がある。燃焼床の形状は楕円形をしている。



第173図　17･22号住居跡出土土器

主柱は４本が確認された。位置的には住居南東部に偏って検出された。柱間隔は東西が約1.8m、南北が2.3m を計る。

床硬化面は厚く、竈付近、及び南側に顕著に広がっている。

【遺物】（第173図　3）

遺物はほとんどなく、土師器甕破片１点を図化したのみである。

口縁部と胴部の径がほぼ同じになり、筒形といってよいものである。胴部から底部にかけては17号住出土の２と同様の形態をしているものと思われる。

⑵　掘立柱建物

掘立柱建物は、この期の遺構の２つのまとまりのうち西側のまとまりの中で２棟発見された。この地区は柱穴と考えられるピットが多数検出され、掘立柱建物の検出は困難をきわめるのが通常であるのだが、この２棟に関しては、その検出は容易であった。

その理由は、柱穴の中の埋土であった。当遺跡の柱穴と考えられるピットの埋土はほとんどが暗褐色土である。ところが、この２棟の柱穴の埋土は黒褐色土であったことから、容易に他のピットと区別することができ、柱穴の並びが確認できた。

１号掘立柱建物（第174図）

桁行き５間、梁行き２間の柱配置をしており、桁行き方向は北西から南東を向く。この方向はこの期の竪穴住居の主軸方向と一致する。

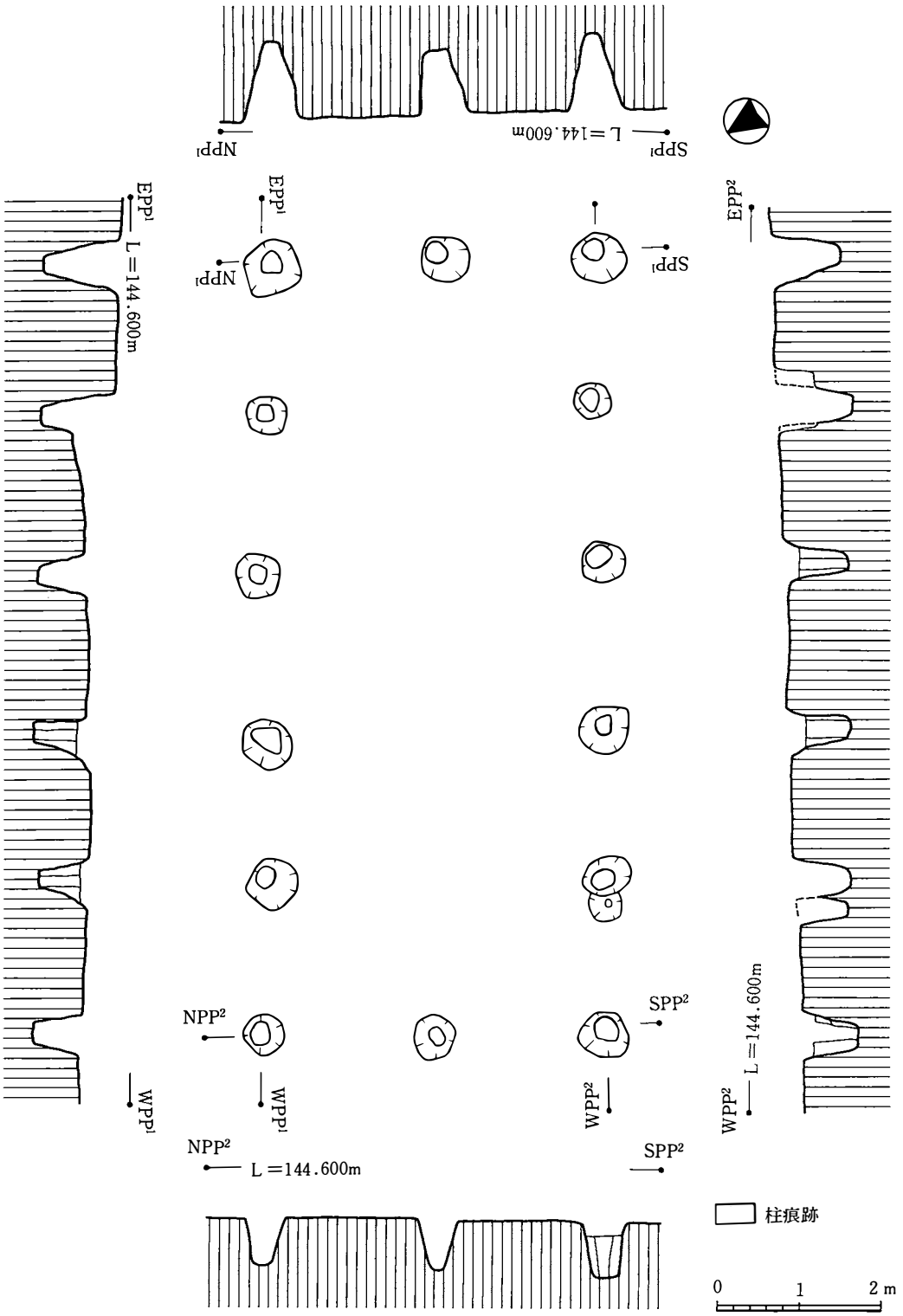
柱穴のなかの埋土は暗黒褐色土をしており、他の時期の柱穴と区別するのは容易であった。遺構検出面での柱穴の大きさは直径50～70cmあり、遺構検出面からの深さは60～90cmを計る。

この掘立柱建物のあるＤ調査区は古墳時代の住居が造成された時か、またはそれ以前に整地されている。そのため、古墳時代あるいは奈良時代から平安時代の住居跡や柱穴は比較的明確に確認できた。その後、整地層を取り除いたあと整地される以前の柱穴を中心とした遺構が検出されており、整地の前後の時期の遺構は割りと明確に識別できた。

桁行き柱間隔は、北側列及び南側列ともほぼ1.9m を計り、相対している。

梁行き柱間隔は、西側列では2.1m、東側列では2.0m を計り、東列の方が若干短くなっている。

柱痕跡を残した柱穴は５か所の柱穴から検出され



第174図　1号掘立建物跡実測図

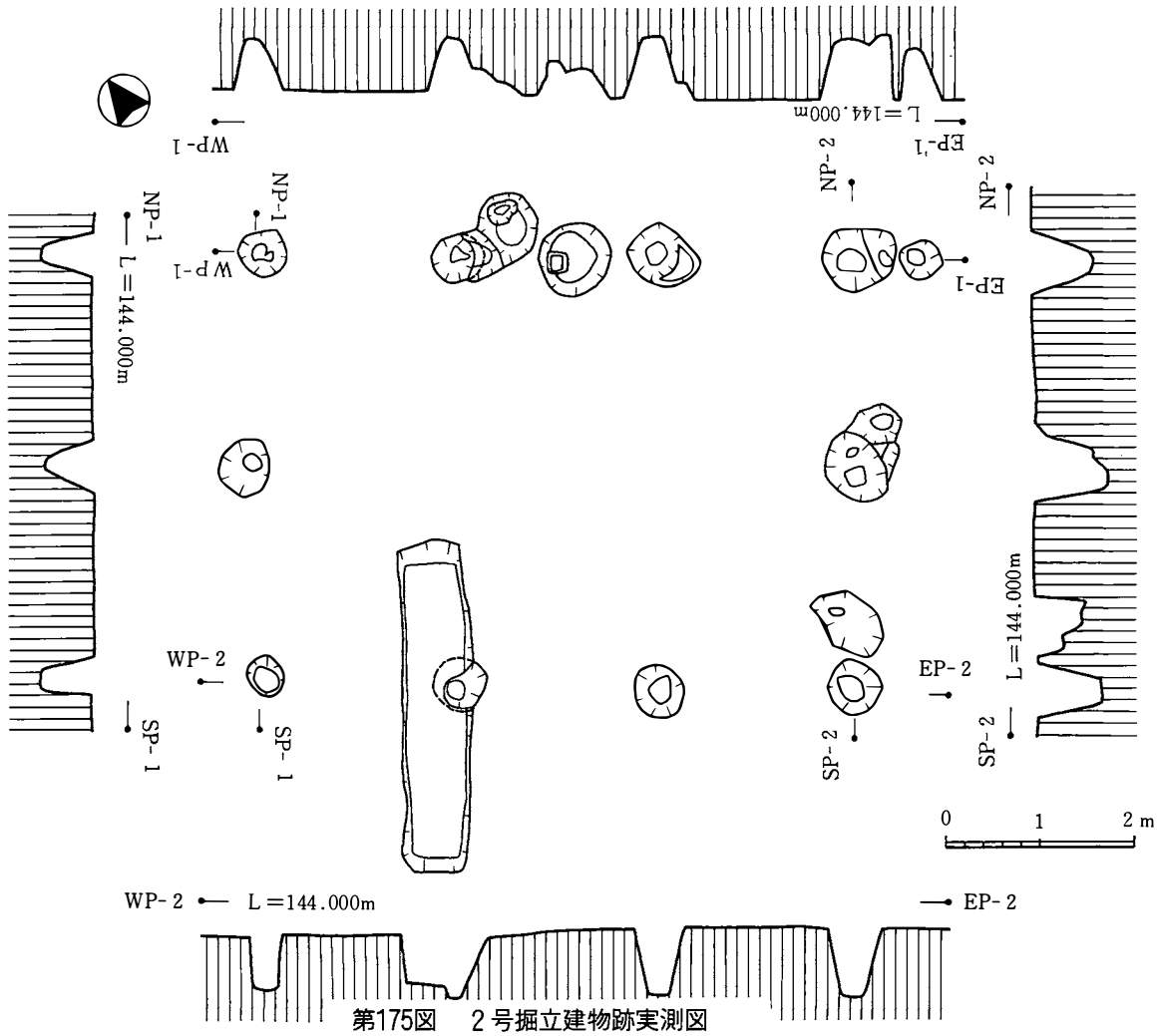
た。直径20～30cmを計り、柱としてはかなり大きいものであった。この事から短絡的に建物の正確を住居よりは倉庫として考えることは避けなければならないが、可能性としては強いと考える。

2号掘立柱建物（第175図）

桁行き3間、梁行き2間の柱配置をしている。桁行きの方向は北東から南西を向く。この方向は1号掘立柱建物と同一である。

桁行きの柱間隔は北側列、南側列ともほぼ2.1mを計る。また、梁行きの柱間隔は東側列、西側列ともほぼ2.2mを計る。

柱穴は平面形においてほぼ円形をしており、直径は40～60cmを計る。深さは遺構検出面から50～70cm



第175図　２号掘立建物跡実測図

を計る。

柱穴の埋土は黒褐色を呈するものと考えられるが発掘作業の手違いにより、すでに柱穴を掘りおわった後にその並びを確認し建物の認定に至ったため、正確な色調の確認はできていない。そのため、柱痕跡の検出もできていない。ただ、柱穴の底部は20～30cmの直径を計るところから、それくらいの大きさを持つものと思われる。

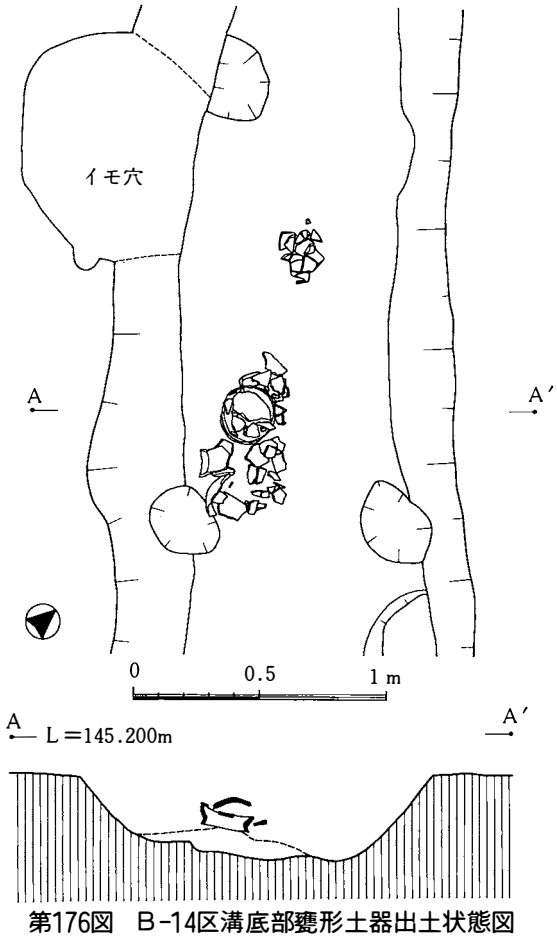
(3) 溝（ＳＸ01）（第166図）

奈良時代の集落を囲むか、区切っている溝である。遺跡調査区の中央を南西から北東に向かってほぼ一直線に横切っており、長さは現状で150m である。

この溝から出土した遺物は、縄文時代早期や後期、晩期、また古墳時代などの遺物も出土しているが、その大半は奈良時代のものである。また、溝の各地点における最下層の土器を検討してみると、奈良時代の土器に限定できる。さらにＢ-14区において土師器甕が逆さに置かれた状態で溝最下層上面から検出されたこと（第176図）から、この溝が掘られた時期を奈良時代とすることができる。

この溝から出土した土器の時期は、溝の南側に広がる竈を持つ住居跡や掘立柱建物などから出土している土器の時期と一致している。すなわち、この溝はこれらの住居群と同時期で、しかも、この溝の北側には同時期の遺構が認められないことから、これらの住居群すなわち集落を取り囲んでいるか、区切っている溝とすることができる。

溝の規模は地点によって異なるが、遺構確認面での幅は２～４ｍ、遺構確認面からの深さは0.6～1.6m を計る。また、調査区西に行くほど溝の幅は狭まり、深さも浅くなる。調査区最も西寄りと東寄りとの溝では、幅で２ｍ、深さは１ｍほど違っている。ただ、溝底部の高さを見るとＣ調査区中央部で最も高くな



第176図　B-14区溝底部甕形土器出土状態図

っているものの、その比高差はほとんどなく、約50cmの幅で推移するが、一定方向に低くなる傾向は窺えない。

断面形はほぼ逆台形をしており、底部幅は60～80cmを計る。この底部幅はどの地点でもほとんど変わらないことから、遺構確認面での幅の大きな違いは、後世における攪乱の程度の違いの結果であると考えられる。

埋土は、基本的に最下層群には遺跡第Ⅳ層と第Ⅴ層の崩壊土が堆積する。これは溝の深さによって異なる。そして、その上位から最上層までには暗褐色土と褐色土が交互に堆積している。両層の中で特に暗褐色土の存在はこの溝が造成された際の地表面が黒色土にちかいものであったことを物語っているようだ。

堆積状況は、各層ともレンズ状の自然堆積をしており、一気に埋められたものではないことをしめしている。

【遺物】（第177図，第178図　5～11，14～17）

この溝から出土した遺物はさまざまな時期に属している。もっとも多量に出土した遺物は縄文時代後期の土器群である。ただ、この溝が掘られた年代は縄文時代ではなく、B-14区で検出した溝底部に伏せておかれた土器をもって決定した。その土器は奈良時代の土器型式であり、溝の南側に散在する竈付き住居跡の時期と一致する。

ここでは溝の時期が奈良時代であることから、その時期の出土土器を中心に掲載した。ただ後述するように奈良時代にやや先行する6世紀後半の土器も見られることからここでとりまとめて説明する。

1、7は6世紀後半に属すると思われる土師器甑と土師器鍋である。1の器形は鉢形をしている。器面調整は内面口縁部以下をへら削り、外面を刷毛目調整の後なで消している。

7は胴部から口縁部への屈折が明確になっておりやや新しい様相を示している。

2～6は甕形土器である。2、5はB-14区の溝底部で検出した甕形土器である。両者とも胴部上半で急激に窄まり、短く、しかも強く外反する口縁部になっている。したがって、最大径は口径ではなく胴部の中位にきている。2の内面は丁寧なへら削りが見られ、外面は全面に赤色顔料が塗られている。そのため器面調整は不明であるがおそらく刷毛目であろう。なお図に示した外面の方向は赤色顔料が塗られた方向を示している。5の器面調整は赤色顔料の塗布以外2と同じである。

4は2、5と基本的に同様の土器である。3は口縁部が胴部上位で単に折れ曲がった形状を示しており、最大径が口径と重なる。

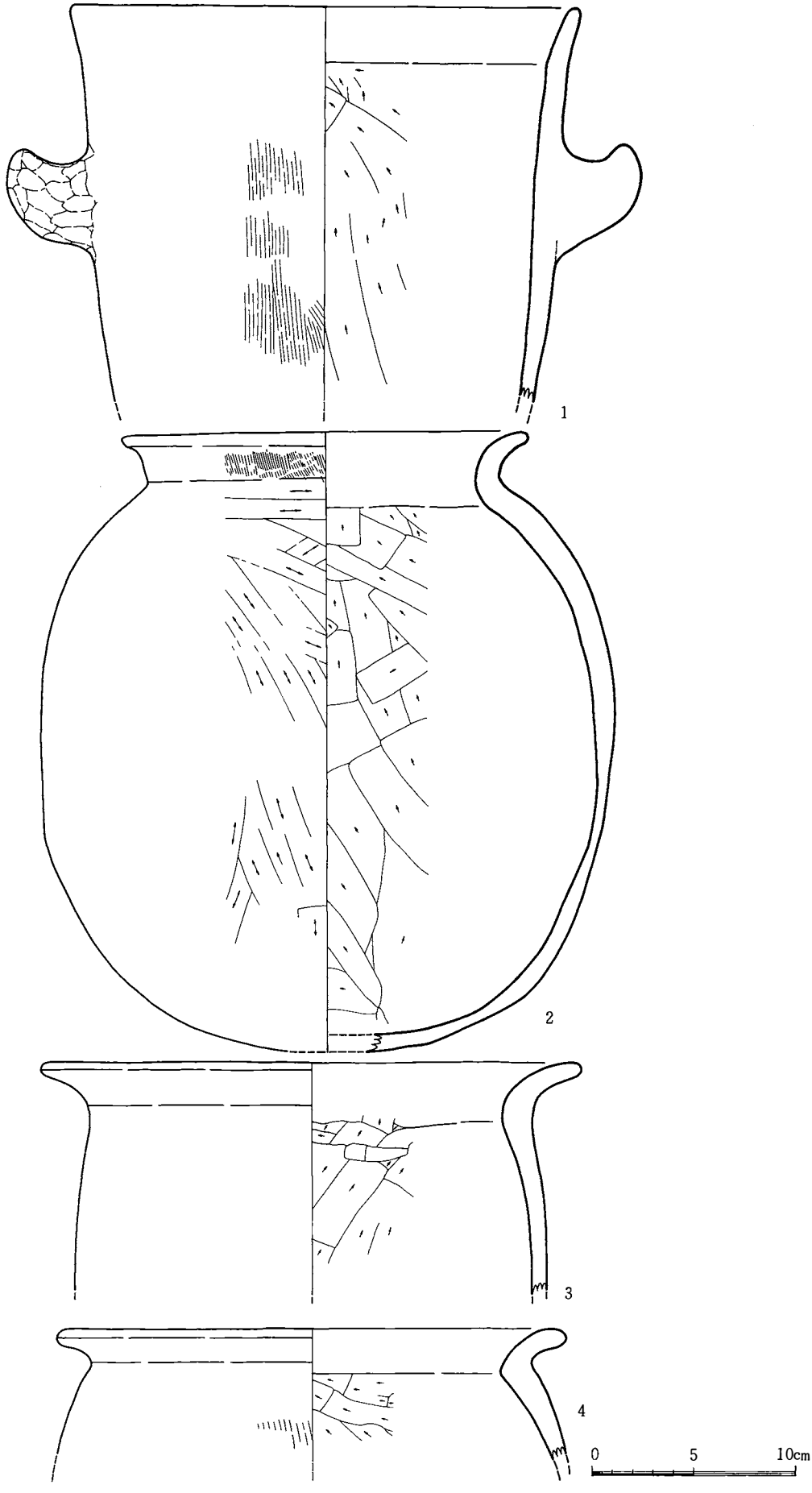
8は須恵器甕形土器の口縁部である。破片が小さく全体の形状は不明である。

9は土師器皿である。内外面ともなで調整がいきとどいており、底部外面にはへら切り根が確認される。

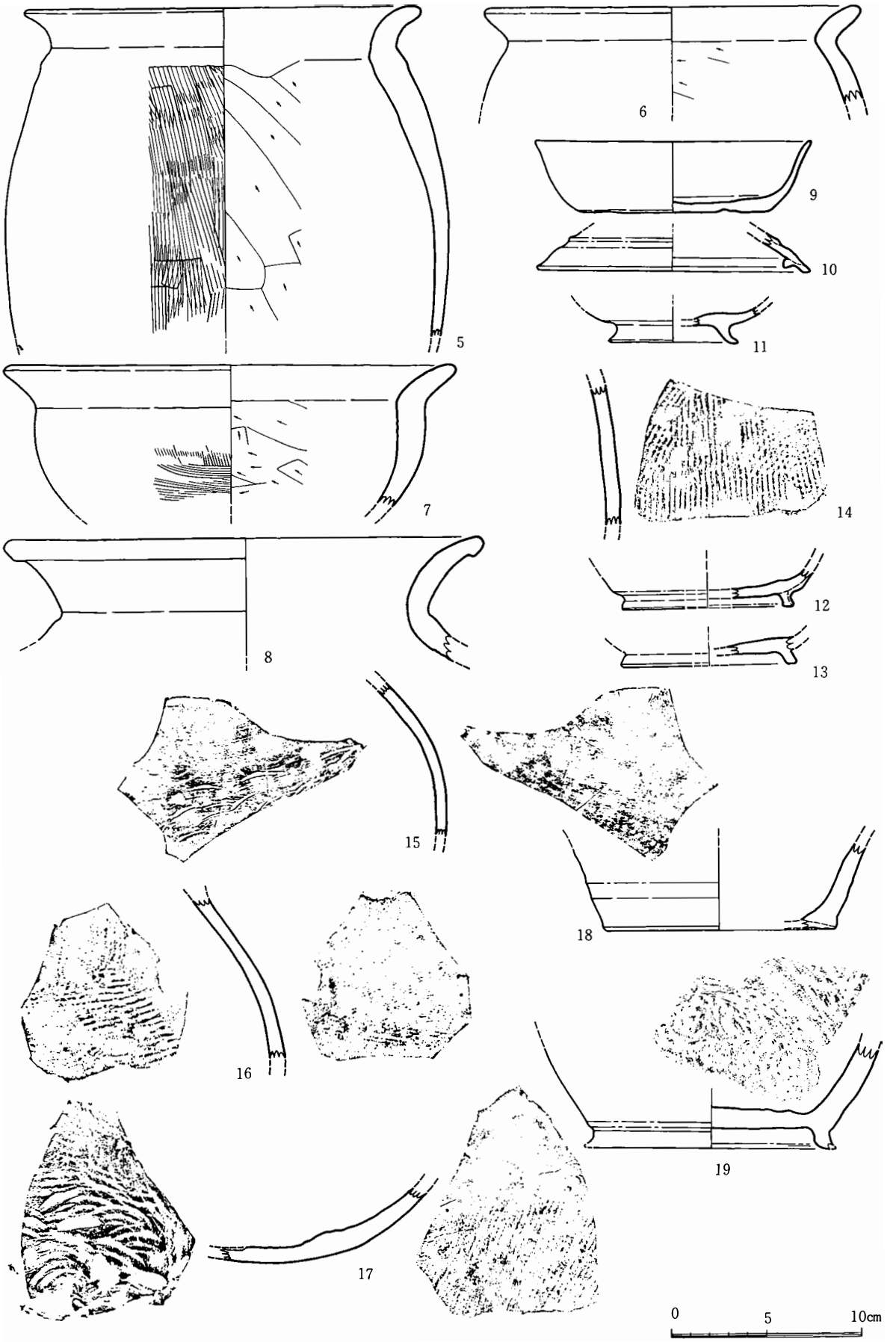
10は須恵器坏蓋である。内面の返しは内側に隠れているおそらく宝珠つまみがつくであろう。

11は須恵器高台付埦である。高台部は端部において強く外反している。

14、15～17は須恵器甕形土器の胴部破片である。



第177図　溝（ＳＸ01）出土土器



第178図　溝（SX 01）および道路遺構出土土器

第８節　中世以降の遺構と遺物

この期の遺物は調査区全域から小破片として多数発見された。ただ、現位置を保って検出された遺物は全くと言っていいほどなく、遺構の時期を決定する際の障害となった。

そのため、ここでの遺構の時期はその上限を示しているに過ぎず、その下限については不明である。

遺構としては道路遺構、鍛冶遺構、溝遺構、イモ穴などがある。

⑴　道路遺構（第179図）

調査区中央を北西から南西にかけて一直線に横切っている。遺跡第Ⅱ層上面で検出された。現状では幅が約２ｍ～2.5ｍ、総距離155ｍを計る。

Ⅱ層上面と同レベルで道路硬化面が検出されたことから当時の姿はややくぼんだ状態で道路が存在した可能性が強い。

道路硬化面の幅は狭い部分で約50㎝広い部分で約２ｍほどある。かなり硬化しており、長期にわたって使用されていたことが分かる。遺物は硬化面上または硬化面に食い込んだ状態で発見された。この遺物のなかには縄文時代の土器や古墳時代、奈良平安時代の土器も多数含まれていた。そのなかで最も多く出土した時期の遺物を図に示してた。また、イモ穴の項で後述するようにこの道路遺構を破壊してイモ穴が作られている。このことはイモ穴の時期が近世以降になることから、道路遺構の年代の下限は近世以前の中世ということになる。これは鍛冶遺構が道路に面しているという推定を補強する

なお、上限については遺物実測図にも示したとうり８世紀後半と思われる須恵器高台付埦が出土しており、このころから道路が利用されたと思われる。

このことからかなり長期間に渡りこの道路が利用されたことがわかる。

この道路は広い視野でながめてみると遺跡の北側を流れる峠川に沿って台地上に走る道路の可能性が強く、当時の主要な道路として存在したと考えられる。おそらく、その道路が現在は峠川のすぐ横を走るように付け替えられたものと思われる。

【遺物】（第178図 12～13，18～19）

12、13、18、19は溝（ＳＸ01）に沿って走る道路遺構２の硬化面から出土した土器である。

12、13は須恵器高台付埦である。小破片のため全体の器形は明らかではない。

18、19は須恵器壺であり、いずれも底部の破片である。19には高台が付いている。19は胴部に鍔がつく壺の可能性が強い。

⑵　鍛冶遺構

Ｂ－１区の道路遺構南側及びＤ－３区で検出された。両者はいずれも土坑として検出されている。また遺構に伴う遺物が少なく、特に時期の決定には必要不可欠の土器が出土しておらず明確な時期は不明といわざるをえない。

さらに、鍛冶遺構とする積極的な根拠は今のところ提出することはできない。ただ、それでは現状でどのような性格の遺構とするかは決定できず、状況証拠から鍛冶遺構とした。

鍛冶遺構１（第180図）

Ｂ－１区から検出された隅丸の方形に近い楕円形の土拡である。短軸1.2ｍ、長軸1.3ｍ、深さ10㎝を計る。鍛冶遺構として認定した根拠は土坑の中に焼土の固まりが広がった状態で検出されており、しかも、土坑の周囲からスラッグが出土していることである。

焼土塊はかなり高温の熱を受けたと考えられるような状態で検出されており、その広がりの形状から円形の炉体が存在したようだ。なお、土坑の中には黒褐色の灰が厚く堆積していた。

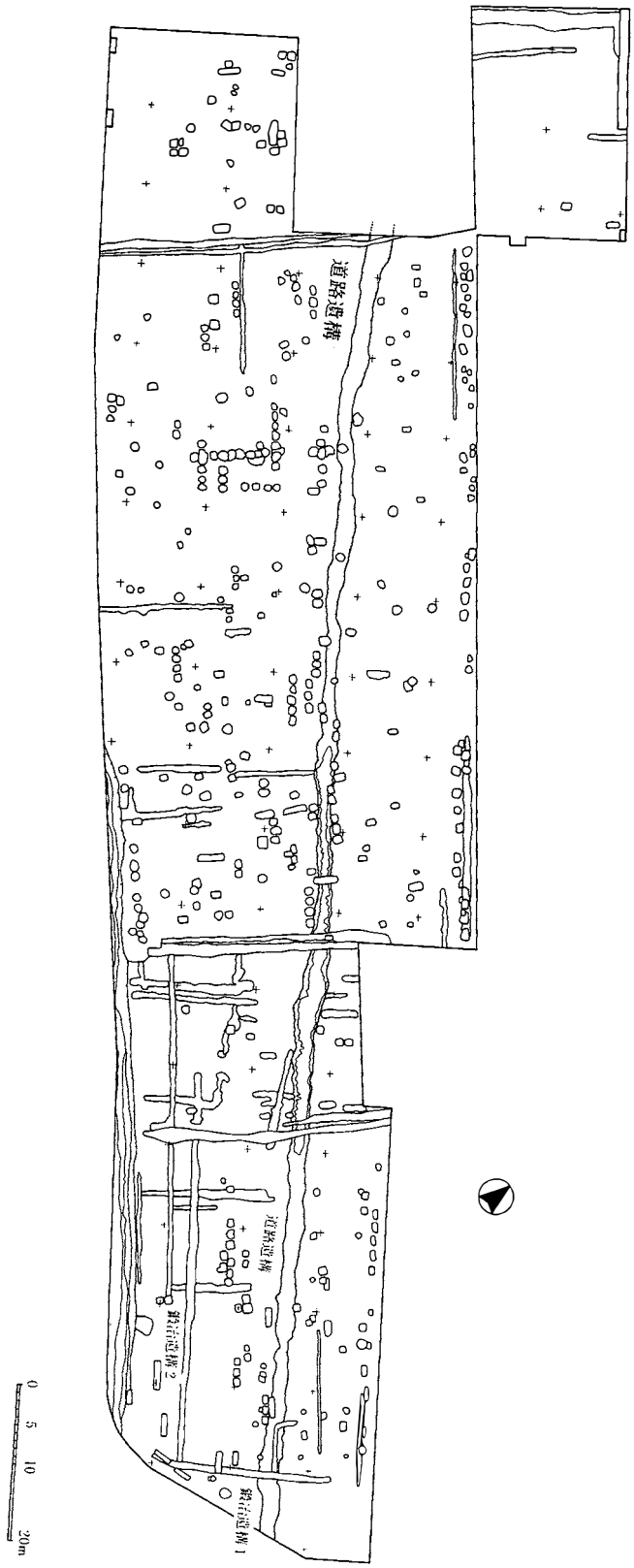
鍛冶遺構２（第181図）

Ｄ－３区から検出された円形に方形の張り出したステップが付設したような土坑である。

円形部内には固く焼けた焼土が東西の２か所にブロックとして分布しており、炉体があったものと推定される。ただ、その大きさなどは測定不可能なほど破壊されている。

この土坑には４本の柱穴が周辺にあり、この鍛冶遺構の上屋の柱の可能性がある。

なお、当鍛冶遺構からはスラッグ等の鍛冶遺構を



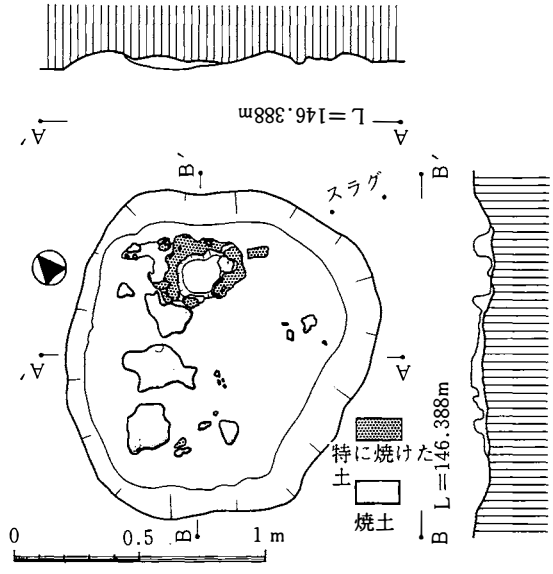
第179図　中世以降の遺構（道路遺構・イモ穴・小溝）配置図

思わせる遺物は発見されていない。

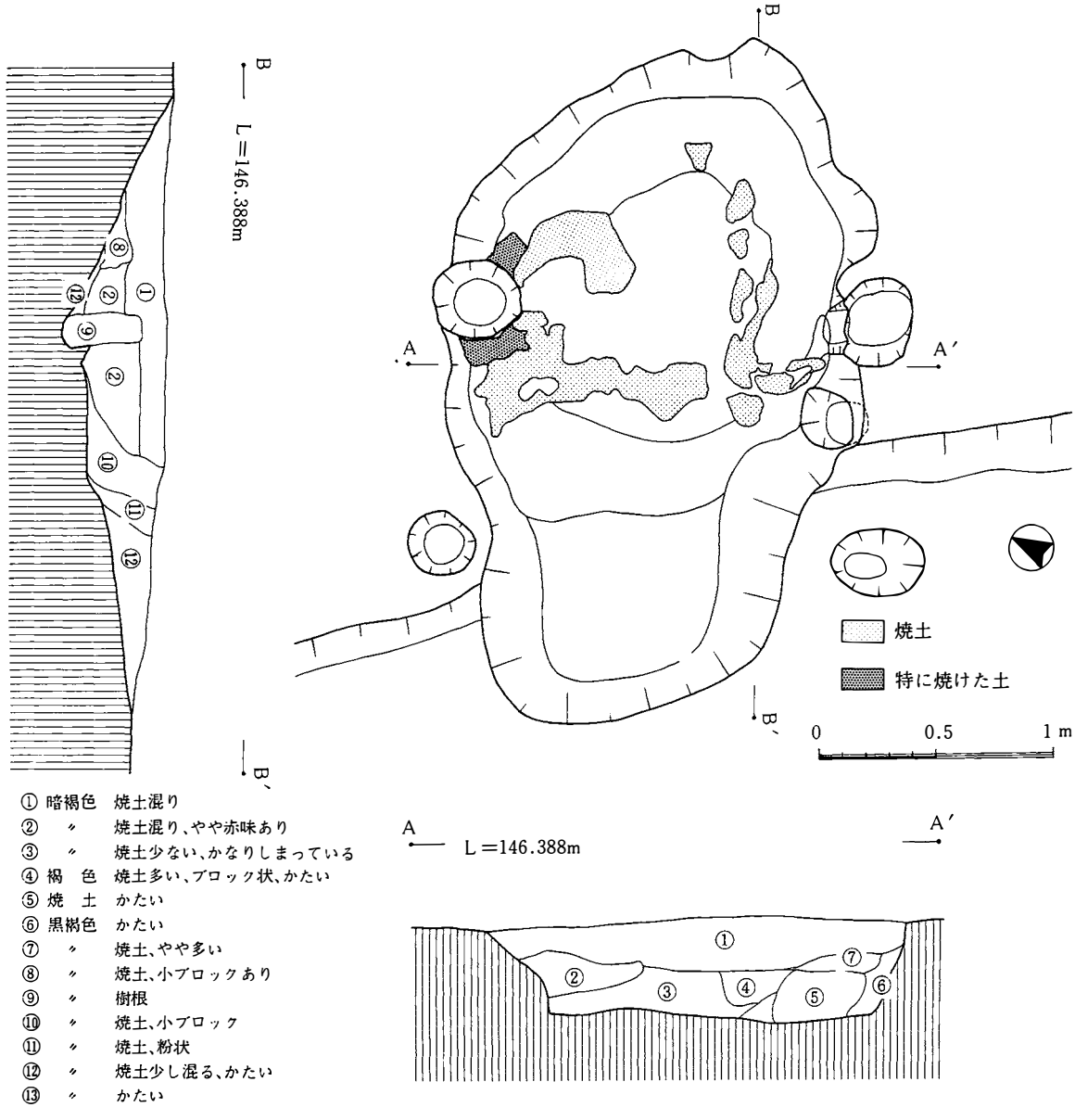
(3) 溝遺構及びイモ穴（第179図）

出土遺物は最も新らしいものとして近世に属すると考えられる陶磁器が発見されている。このことから少なくとも江戸時代以降の時期であろうと考えられる。

溝は調査区のグリッド線と縦横に平行する形で掘られており、しかも、一定の広さを区画しているように思われる。現在の畑と必ずしも一致するわけではないが、それらを合わせれば現在の畑とほぼ一致するのは確かである。



第180図　鍛冶遺構１実測図



第181図　鍛冶遺構２実測図

また、イモ穴との関係も考え合わせれば、この溝が畑を区切る溝であったことが明確である。

イモ穴は遺跡全域から検出されるが、その分布には特徴がある。まんべんなく散在するものは少なく、直線上に４～６基が並んで発見される例が多い。イモ穴の機能上イモを貯蔵する施設であることから畑の中央にではなく端に寄せて作られるのが通例である。このことからイモ穴の並びは近世以降の畑の境を示していることになる。ただ、畑の区画は時代により変遷するものであるから一枚の畑の大きさをイモ穴の並びから類推する事はかなり厳密な作業を必要とする。報告書作成の期間の都合上この作業ができなかった。

なお、イモ穴の形状は円形、正方形、長辺が３ｍ以上の長方形の三種が存在する。この違いは大まかな変遷を示している。

第Ⅵ章　自然科学分析

1　ワクド石遺跡出土の硬玉製勾玉の産地分析

藁 科 哲 男・東 村 武 信（京都大学原子炉実験所）

⑴　はじめに

遺跡から出土する大珠、勾玉、管玉の産地分析というのは、玉類の製品が何処の玉造遺跡で加工されたということを調査するのではなくて、何ケ所かあるヒスイの原産地のうち、どこの原産地の原石かを明らかにするのが、玉類の原産地推定である。玉類の原石の産地を明らかにすることは考古学上重要な意味をもっている。糸魚川市でヒスイが発見されるまでは、中国、雲南、ビルマ説、発見後は、専ら国内説で、岩石学的方法（文献１）および貴重な考古遺物を非破壊での産地分析を蛍光Ｘ線分析で行う元素比法（文献２，３）が報告されている。また、碧玉製管玉の産地分析で、系統的に行った研究は蛍光Ｘ線分析法と電子スピン共鳴法を併用し、産地分析より正確に行った例（文献４）が報告されている。石鏃など石器と玉類の製品はそれぞれ使用目的が異なるため、それぞれの産地分析で得られた結果の意味も異なる。（１）石器の原材産地推定で明らかになる遺跡から石材原産地までの移動、活動範囲は、石器は生活必需品であるため、生活上必要な生活圏と考えられる。（２）玉類は古代人が生きるために必ずしも必要なものではない。勾玉、管玉は権力の象徴、お祭、御守り、占いの道具、アクセサリーとして、精神的な面に重要な作用を与えると考えられる。従って、玉類の産地分析で、明らかになるヒスイ製玉類の原石の分布範囲は、権力の象徴としての玉類であれば、権力圏を現わしているかもしれない。お祭、御守り、占いの道具であれば、同じような習慣を持つ文化圏が考えられる。石器の原産地分析では得られない貴重な資料を考古学の分野に提供することができる。

⑵　非破壊での産地分析の方法と手段

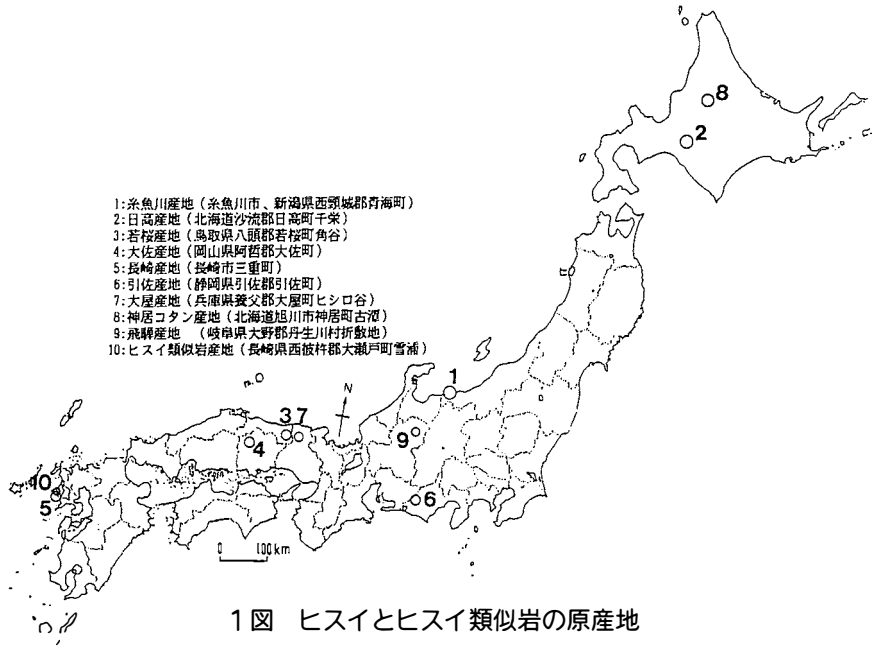
原産地推定の第一歩は、原産地間を区別する、人間で言えば指紋のような、その原産地だけにしかないという指標を見つけなければならない。その区別するための指紋は鉱物組成の組合わせ、比重の違い、原石に含有されている元素組成の違いなどであり、原産地同士を区別できなければ産地分析はできない。成功するかどうかは、とにかく行ってみなければわからない。原産地同士が指紋でもって区別できたならば、次に遺跡から出土する遺物の指紋と原産地の指紋を比較して、一致しない原産地を消去して一致する原産地の原石が使用されていると判定する。

ヒスイ、碧玉製勾玉、大珠、玉などは、国宝、重要文化財級のものが多くて、非破壊で産地分析が行える方法でなければ発展しない。石器の原材産地分析で成功している（文献５）非破壊で分析を行う蛍光Ｘ線法を用いて玉類に含有されている元素を分析する。

遺跡から出土した大珠、勾玉、菅玉などを水洗いして、試料ホルダーに置くだけの、完全な非破壊で産地分析を行った。ヒスイ製玉類は蛍光Ｘ線分析法で元素の種類と含有量を求め、試料の形や大きさの違いの影響を打ち消すために分析された元素同士で含有量の比を取り、この元素比の値を原産地を区別する指標とした。碧玉製玉類はＥＳＲ法を併用するが試料を全く破壊することなく、碧玉に含有されている常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した。

⑶　ヒスイの原産地

分析したヒスイ原石は、日本国内産では（１）新潟県糸魚川市と、それに隣接する同県西頸城郡青海町から産出する糸魚川産、（２）軟玉ヒスイと言われる北海道沙流郡日高町千栄の日高産（文献６）、（３）鳥取県八頭郡若桜町角谷の若桜産、（４）岡山県阿哲郡大佐町の大佐産、（５）長崎県長崎市三重町の



1図　ヒスイとヒスイ類似岩の原産地

長崎産であり、さらに（6）西黒田ヒスイと呼ばれている静岡県引佐郡引佐産の原石、（7）兵庫県秩父郡大屋町からの原石、（8）北海道旭川市神居町の神居コタン産、（9）岐阜県大野郡丹生川村の飛騨産原石、また、肉眼的にヒスイに類似した原石で玉類等の原材になったのではないかと考えられる（10）長崎県西彼杵郡大瀬戸町雪浦からの原石である。国内産のヒスイ原産地は、これでほぼつくされていると思われる。これら原石の原産地を図1に示す。これに加えて外国産として、ミャンマー産の硬玉と台湾産軟玉および韓国、春川産軟玉などのヒスイの分析も行われている。

(4) ヒスイ試料の蛍光X線分析

ヒスイの主成分元素はナトリュム（Na）、アルミニュム（Al）、珪素（Si）などの軽元素（文献7）で、次いで比較的含有量の多いカルシウム(Ca)、鉄(Fe)、ストロンチウム（Sr）、である。また、ヒスイに微量含有されている、カリウム（K）、チタニウム（Ti）、クロム（Cr）、マンガン（Mn）、ルビジウム（Rb）、イットリウム（Y）、ジルコニウム（Zr）、ニオビウム（Na）、バリウム（Ba）、ランタニウム（La）、セリウム（Ce）、の各元素を分析した。主成分の珪素など軽元素の分析を行わないときには、励起線源のX線が試料によって散乱されたピークを観測し、そのピークの大きさが主に試料の分析面積に比例することに注目し、そのピークを含有元素と同じく産地分析の指標として利用できる。ナトリュム元素はヒスイ岩を構成するヒスイ輝石に含有される重要な元素で、出土した遺物が硬玉か否かを判定するには直接ヒスイ輝石を観測すればよい。しかし、ヒスイ輝石を非破壊で検出する方法が確立されるまでは、蛍光X線分析でNa元素を分析し間接的にヒスイ輝石の存在を推測する方法にたよる他ないのではなかろうか。各原産地の原石のなかで、確実にNa元素の含有が確認されるヒスイ産地は糸魚川、大屋、若桜、大佐、神居コタン、長崎の各原産地の原石で、これらは硬玉に属すると思われる。Na元素の含有量が分析誤差範囲の産地は日高、引佐、飛騨の各産地の原石である。糸魚川産原石のうち緑色系の硬玉に、肉眼的に最も似た原石を産出する産地は、他の硬玉産地よりも後述した日高、飛騨、引佐の原石に見られる。各原産地の原石の他の特徴を以下に記術する。若桜産のヒスイ原石はSrのピークがFeのピークに比べて相当大きく、またZrの隣に非常に小さなNbのピークが見られ、Baのピークも大きく、糸魚川産では見られないLa、Ceのピークが観測されている。このCeのピークは大佐産と長崎産ヒスイ原石のスペクトルにも見られ、これらCeを含有する原石の産地は、糸魚川の産地と区別するときに有効な判定基準になる。長崎産ヒスイは、Tiの含有量が多く、Yのピークが見られるのが特徴的である。

表1　ヒスイ製遺物の原石産地の判定基準 (1)

原産地名	分析個数	比　重	蛍光X線法による元素比の範囲 K／Ca	Ti／Ca	Sr／Fe	Zr／Sr	Ca／Si
糸魚川産	41	3.00～3.35	0.01～0.17	0.01～0.56	0.15～30	0.00～2.94	0.72～27.6
若桜産	12	3.12～3.29	0.01～0.91	0.03～0.59	3.45～47	0.00～0.25	4.33～48.4
大佐産	20	2.85～3.17	0.01～0.07	0.00～1.01	3.18～61	0.00～12.4	3.47～28.6
長崎産	3	3.16～3.23	0.01～0.14	0.17～0.33	0.02～0.06	4.30～16.0	
日高産	22	2.98～3.29	0.00～0.01	0.00～0.02	0.00～0.37	0.00～0.063	5.92～51.6
引佐産	8	3.15～3.36	0.04～0.04	0.00～0.03	0.03～0.33	0.00～0.018	36.3～65.9
大屋産	18	2.96～3.19	0.03～0.08	0.04～0.16	1.08～79	0.02～0.48	0.95～4.81
神居コタン産	9	2.95～3.19	0.02～0.49	0.09～0.17	0.04～0.22	0.12～0.85	2.22～17.3
飛騨産	40	2.85～3.15	0.01～0.04	0.00～0.00	0.02～0.10	0.00～1.24	12.7～28.5
ミャンマー産	26	3.15～3.36	0.02～0.14	0.01～0.26	0.09～2.5	0.01～23	
台湾産	1	3.00	0.003	ND	ND	ND	

ND．検出限界以下の濃度

日高産、引佐産、飛騨産ヒスイ原石は、Caピークに比べてTiとかK、またFeピークに比べてSrなどのピークが小さいのが特徴で、糸魚川産のものと区別するときの判断基準になる。

春川軟玉原石は、優白色の工芸加工性に優れた原石で、軟玉であるが、古代では勾玉などの原材料となった可能性も考えられることから分析を行った。この原石には、Sr、Zrのピークが全く見られないため、糸魚川産などのSr、Zrを含有する原石と容易に区別できる。また、長崎県雪浦のヒスイ類似岩をヒスイの代替品として勾玉、大珠などの原材料に使用している可能性が考えられ、分析を行った。この岩石は比重が2.91と小さく、比重でもって他の産地のものと区別できる。また砒素（As）のピークが見られる個体が多いのも特徴である。

これら各産地の原石は同じ産地の原石であっても、原石ごとに元素の含有量には異同がある。したがって、一つの原産地について多数の原石を分析し、各元素の含有量の変動の範囲を求めて、その産地の原石の特徴としなければならない。

糸魚川産のヒスイは、白色系が多いが、緑色系の半透明の良質のもの、青色系、コバルト系、およびこれらの色が白地に縞となって入っているものなど様々である。分析した糸魚川産原石の比重を調べると、硬玉の3.2～3.4の範囲のものと、3.2に達しない軟玉に分類される原石もある。若桜産、大佐産の分析した原石には、半透明の緑色のものはないが、全体が淡青緑かかった乳白色のような原石、また大屋産は乳白色が多い。このうち大佐産、大屋産の原石では3.20に達したものはなく、これらの原石は比重からは軟玉に分類される。しかし、ヒスイ輝石の含有量が少ない硬玉とも考えられる。長崎産のヒスイ原石は3個しか分析できなかったが良質である。このうち1個は濃い緑色で、他の2個は淡い緑色で、少しガラス質である。日高産ヒスイの原石は肉眼観察では比較的糸魚川産のヒスイに似ている。ミャンマー産のヒスイ原石は、質、種類とも糸魚川産のヒスイ原石と同じものが見られ肉眼で両産地の原石を区別することは不可能と考えられる。分析した台湾産のヒスイは軟玉に属するもので、暗緑色のガラス質な原石である。これら各原産地の原石の分析結果から各産地を区別する判断基準を引き出し産地分析の指標とする。

(5) ヒスイ原産地の判別基準

原石産地の判定を行なうときの判断基準を原石の

表2　ヒスイ製遺物の原石産地の判定基準（2）

原産地	蛍光X線による分析元素（各元素が確認できた固体数の百分率）							
	Cr	Mn	Rb	Y	Nb	Ba	La	Ce
糸魚川産	26%	6%	20%	ND	13%	33%	ND	ND
若桜産	ND	ND	16%	ND	100%	100%	67%	67%
大佐産	ND	ND	44%	ND	33%	100%	67%	67%
長崎産	ND	ND	ND	100%	100%	100%	100%	100%
日高産	tr	tr	ND	ND	ND	tr	ND	ND
引佐産	88%	75%	ND	ND	ND	ND	ND	ND
大屋産	tr	ND	31%	ND	6%	90%	100%	100%
神居コタン産	ND	100%	22%	100%	ND	55%	ND	ND
飛騨産	100%	100%	ND	ND	ND	ND	ND	ND
ミャンマー産	13%	4%	ND	ND	ND	35%	ND	ND
台湾産	tr	tr	ND	ND	ND	ND	ND	ND

ND：検出限界以下　　tr：検出確認

分析データーから引き出すが、分析個数が少ないため、必ずしもその原産地の特徴を十分に反映したと言えない産地もある。**表1**に各原産地ごとの原石の比重と元素比量をまとめた。元素比量の数値は、その原産地の分析した原石のなかでの最小値と最大値の範囲を示し、**判定基準（1）**とした。ヒスイで比重が3.19未満の軽い原石は、硬玉ヒスイではない可能性があるが、糸魚川産の原石で比重が3.19未満のもの分析を行った。大佐産のヒスイは比重が3.17未満であった。したがって、遺物の比重が3.3以上を示す場合は判定基準（1）により大佐産のヒスイでないと言える。日高産、引佐産の両ヒスイではSr/Feの比の値が小さくて、糸魚川産と区別する判定基準（1）になる。**表2**の**判定基準（2）**にはCr、Mn、Rb、Y、Nb、Ba、La、Ceの各元素の蛍光X線ピークが観測できた個体数を%で示した表である。例えば遺物を分析してBaのピークが観測されなかったとき、その遺物は、若桜、大佐、長崎産のヒスイでないといえる。

図2はヒスイ原石のSr/Feの比の値、Sr/Zrの比の値の分布を各原産地ごとにまとめて分布範囲を示したものである。●は糸魚川産のヒスイで、分布の範囲を実線で囲み、この枠内に遺物の測定点が入れば糸魚川産の原石である可能性が高いと判断する。□はミャンマー産のヒスイの分布で、その範囲を短い破線で囲む。糸魚川の実線の範囲とミャンマーの破線の範囲の大部分は重なり両者は区別できないが、ミャンマーと糸魚川が区別される部分がSr/Feの値（横軸）2.5以上の範囲で見られる。この範囲の中に、遺物の測定点が入ればミャンマー産と考えるより、糸魚川産である可能性の方が高いと考えられる。▲は大佐産の、△は若桜産の、▽は大屋産のヒスイの分布を示している。

糸魚川と大佐、若桜、大屋のヒスイが重なる部分に遺物の測定点が入った場合、これら複数の原産地を考えなければならない。しかし、この遺物にBaの蛍光X線スペクトルのピークが見られなかった場合、**表2**の判定基準（2）に従えば糸魚川産または大屋産のヒスイであると判定でき、その遺物の比重が3.2以上あれば大屋産でなくて、糸魚川産と推定される。■は長崎産ヒスイの分布で、独立した分布の範囲を持っていて他の産地のヒスイと容易に区別できる。台湾産の軟玉はグラフの左下に外れる。★印の日高産および＊印の引佐産ヒスイの分布の一部が、糸魚川産と重なり区別されない範囲がみられる。しかし、Ca/Si比とSr/Fe比を指標とすることにより（**図3**）、糸魚川産ヒスイ日高産および引佐産の両ヒスイと区別することができる。Na/Si比と

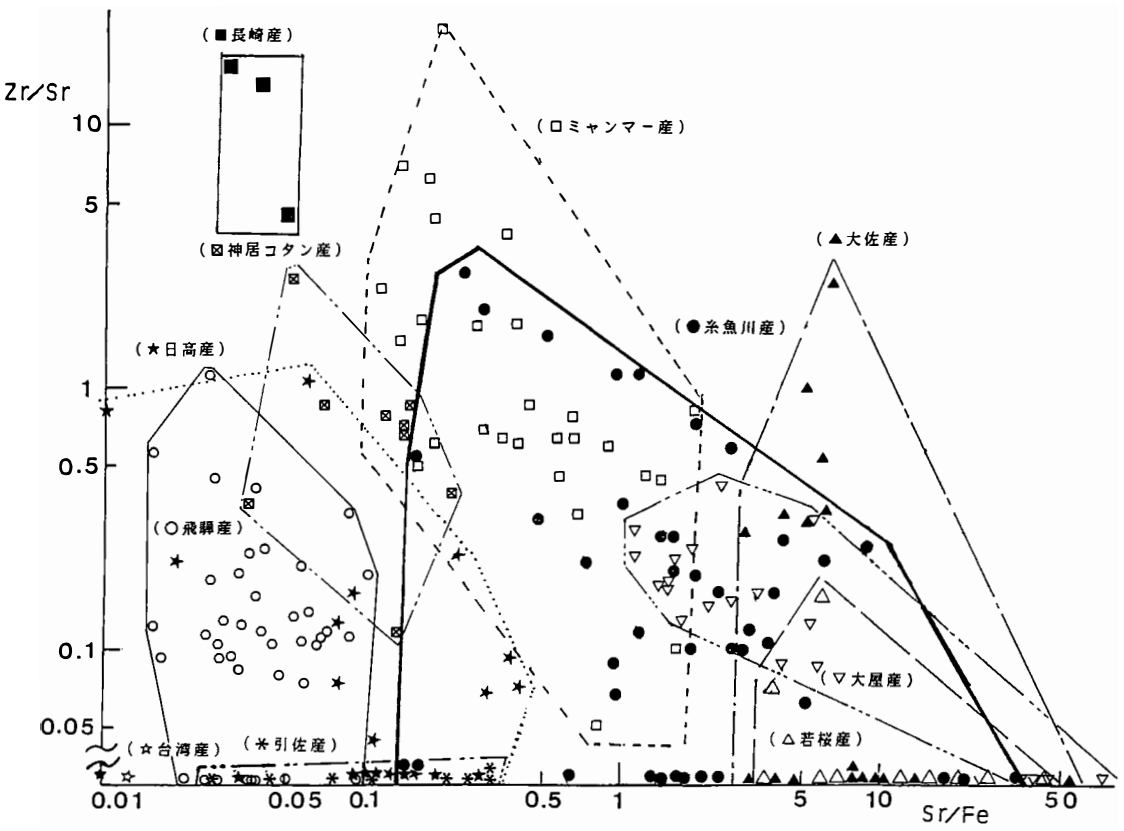


図２　ヒスイ原石の元素比値のZr/Sr対Sr/Feの分布および分布範囲

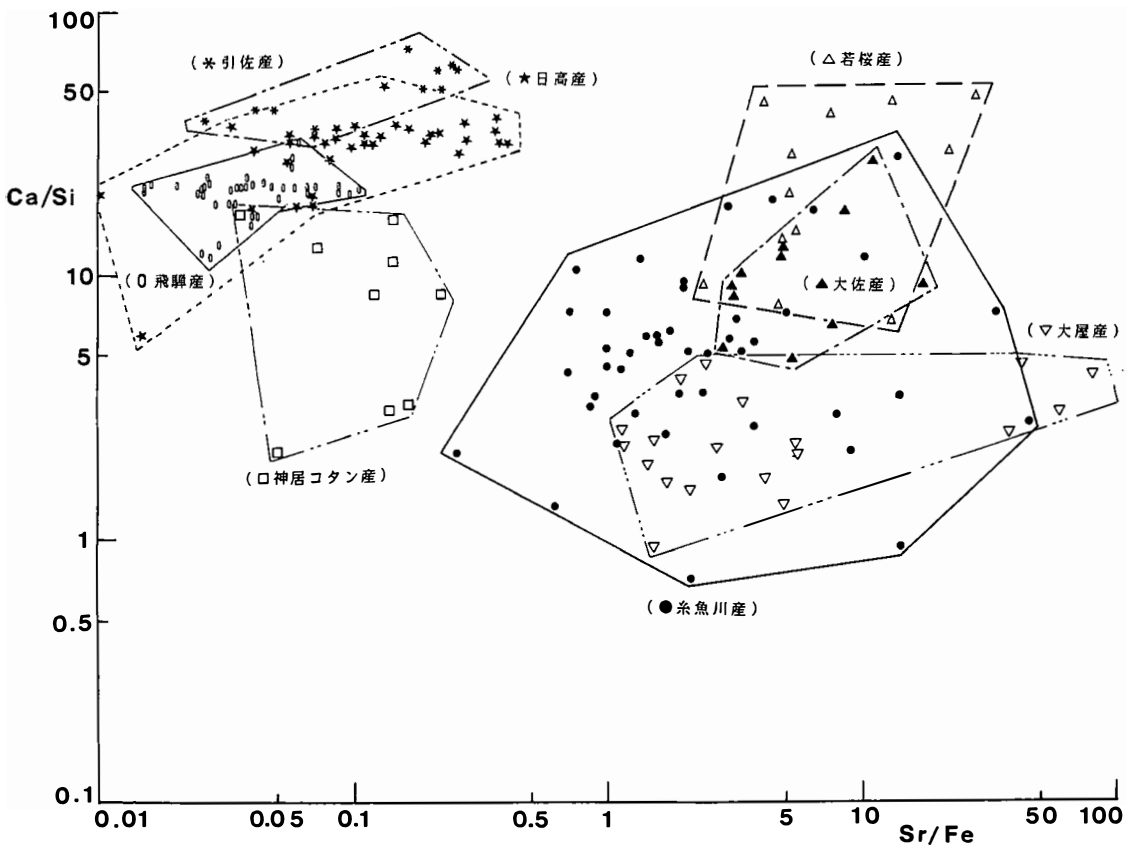


図３　ヒスイ原石の元素比値のCa/Si対Sr/Feの分布および分布範囲

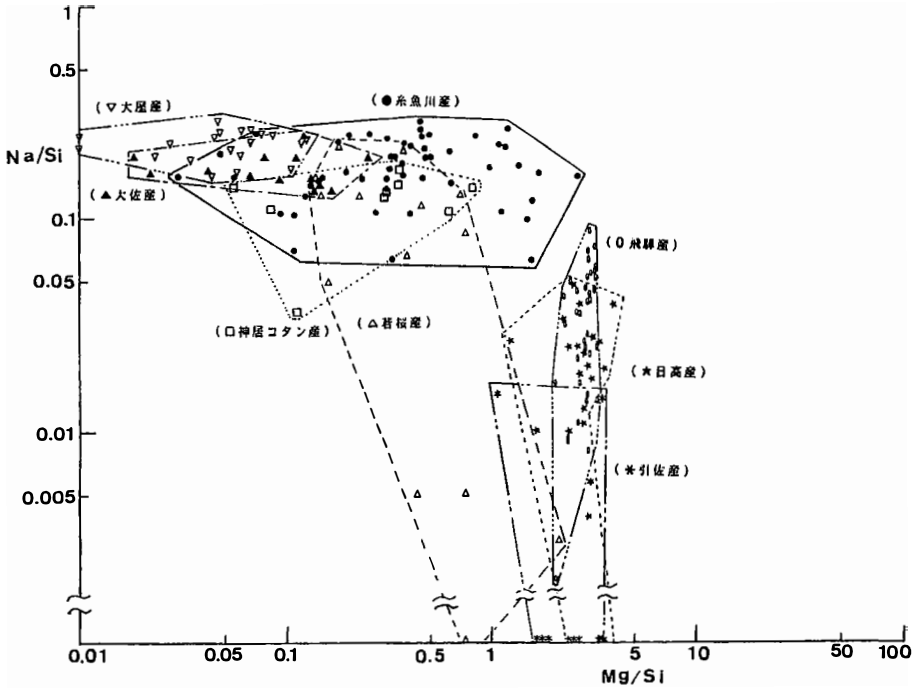


図４　ヒスイ原石の元素比値のNa/Si対Mg/Siの分布および分布範囲

Mg/Si比を各原産地の原石について分布を示すことにより（図４）、遺物がどこの原産地の分布内に帰属するかにより、硬玉か軟玉かの判別の手段の一つになると考えられる。

(6) 出土の硬玉製勾玉の分析結果

この硬玉製勾玉（33418）の比重は3.347（アルキメデス法）で、蛍光Ｘ線スペクトル（図５）にはNa元素が観測され硬玉の可能性を示唆している、比重も硬玉の範囲にいる。この勾玉の原石産地を明らかにするために、K/Ca、Ti/Ca、Sr/Fe、Zr/Sr、Ca/Si、Na/Si、Mg/Siなどの各比値を求め表３に示し、また各原産地の原石の元素比量の分布範囲と比較し図６、７、８に示した。図６では糸魚川、大佐、大屋の各産地に、図７では糸魚川、大佐、大屋、若桜、また、図８では糸魚川産地のみ範囲に入る。これら図中の中で最も可能性のある産地は糸魚川産地であることが分かる。また、この硬玉の蛍光Ｘ線スペクトルはBa元素が観測されないために若桜、大佐の原石の可能性は低いと言える。

(7) 結　　論

出土した硬玉製勾玉には糸魚川産ヒスイ原石が使用され、ヒスイは権力の強い古代人が入手できると考えると、この勾玉の持ち主は遺跡地域の権力をもっていた可能性を考察しても産地分析の結果と矛盾しないであろう。

参考文献

1）茅原一也（1964）、長者ヶ原遺跡産のヒスイ（翡翠）について（概報）『長者ケ原』新潟県糸魚川市教育委員会：63-73

2）藁科哲男・東村武信（1987）、ヒスイの産地分析。『富山市考古資料館紀要』６：1-18

3）藁科哲男・東村武信（1990）、奈良県内遺跡出土のヒスイ製玉類の産地分析。橿原考古学研所紀要『考古学論攷』14：95-109

4）Tetsuo Warashina (1992), Allocation of Jasper Archaeological Implements by Means of ESR and XRF. Journal of Archaeological Science 19：357-373

5）藁科哲男・東村武信（1983）、石器原材の産地分析『考古学と自然科学』16：59-89

6）番場猛夫（1967）、北海道日高産軟玉ヒスイ。調査研究報告会講演要旨録　No.18：11-15

7）河野義礼（1939）、本邦における翡翠の新産出及び其化学的性質『岩石礦物鉱床学雑誌』22：195-201

8）東村武信（1976）、産地推定における統計的手法『考古学と自然科学』9：77-90

表3　硬玉製勾玉の元素分析値の比量と比重

分析番号	遺物品名	元素分析値の比重 K／Ca	Ti／Ca	Sr／Fe	Zr／Sr	Ca／Si	Na／Si	Mg／Si	分析元素の有無 ○有 Nb	△微量 Ba	La	×無 Ce	試料比重	試料重量
33418	硬玉製勾玉	0.001	0.001	7.047	0.262	9.603	0.183	0.570	×	×	×	×	3.347	4.967
JG-1 a)		1.327	0.277	0.338	0.768	2.602	0.030	0.098	加圧固化整形試料					

a) 標準試料、Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. (1974). 1974 compilation of data on the GJS geochemical refernce samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. *Geochemical Journal*, Vol.8 175-192.

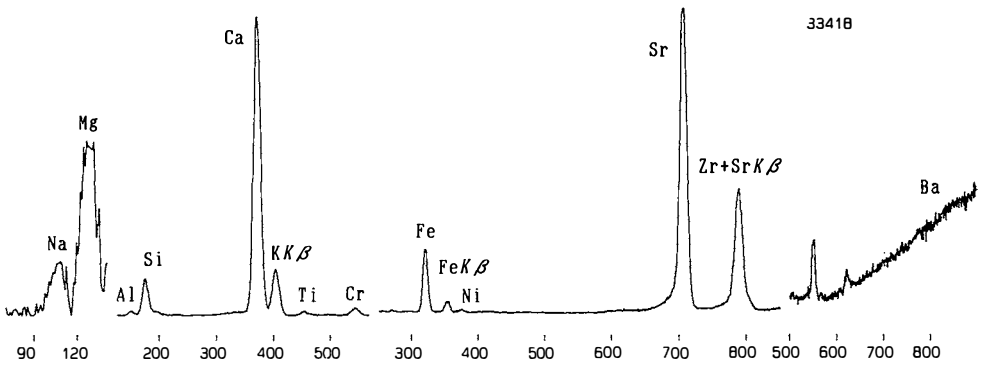


図5　硬玉製勾玉の（33418）の蛍光X線スペクトル

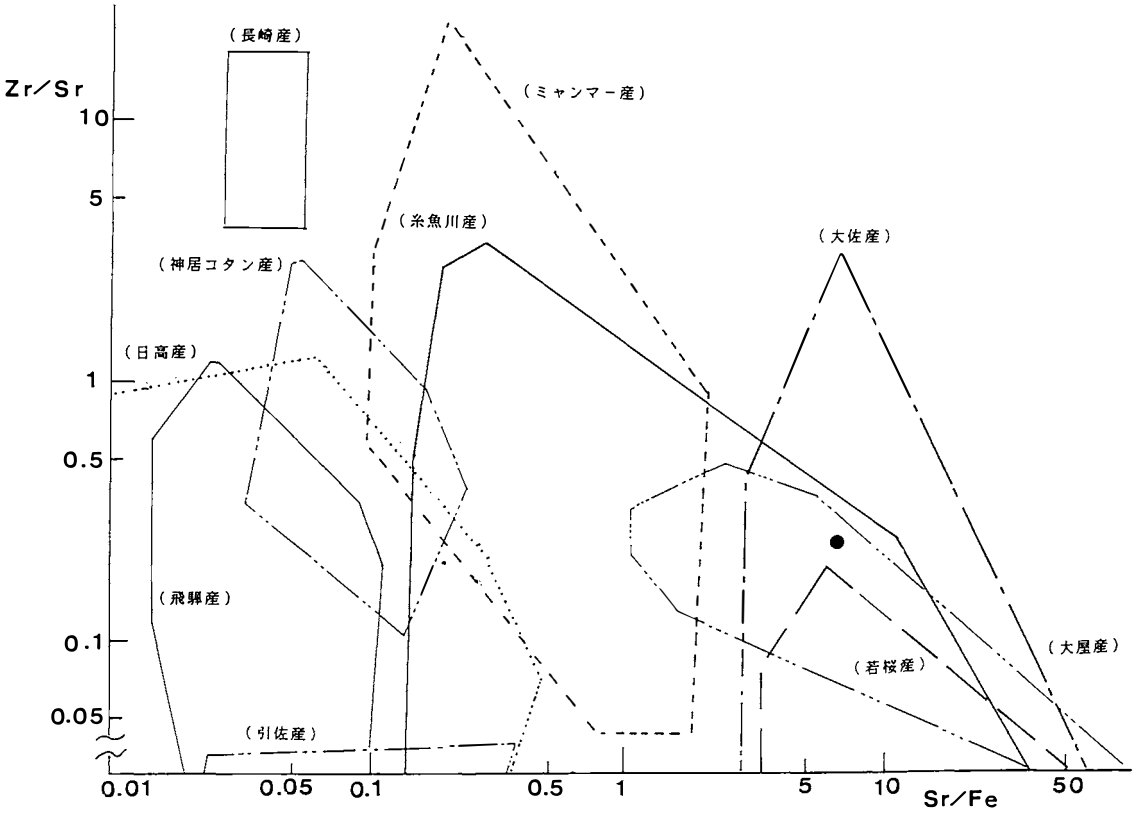


図6　硬玉製勾玉のZr／Sr対Sr／Feの分布

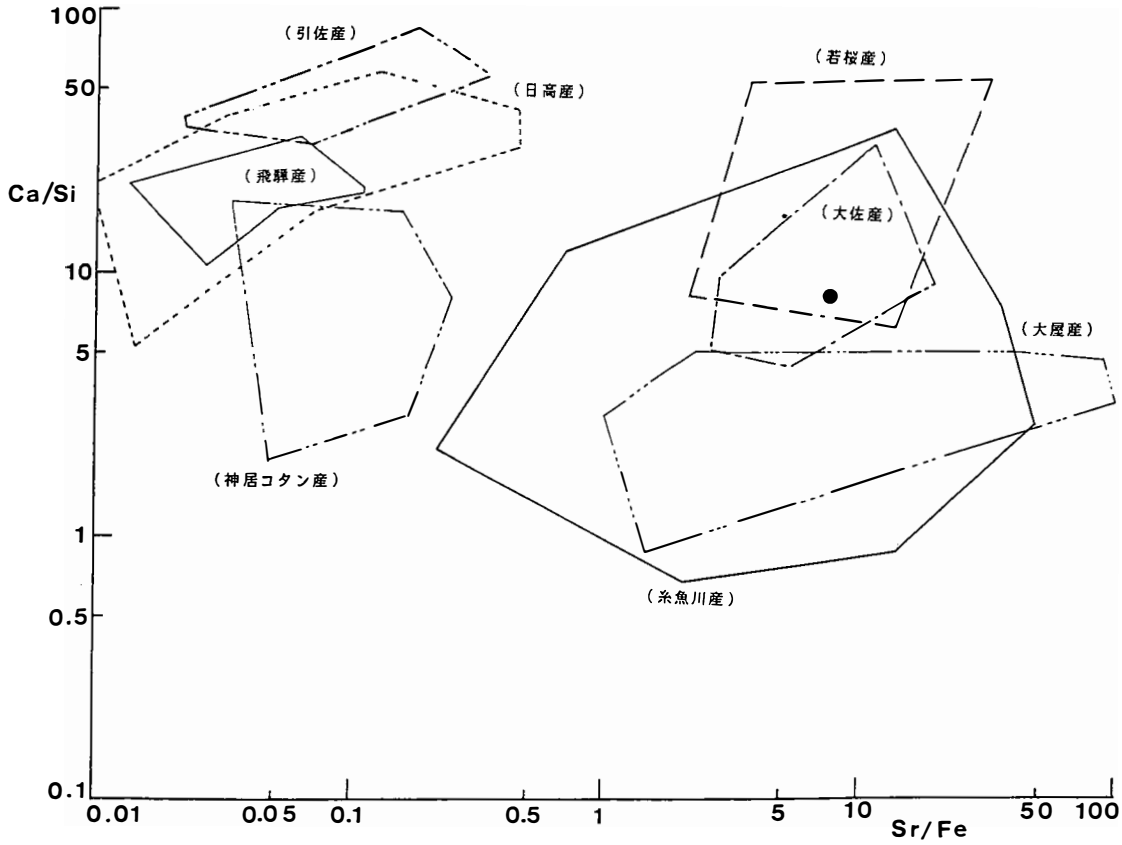


図７　硬玉製勾玉のCa／Si対Sr／Feの分布

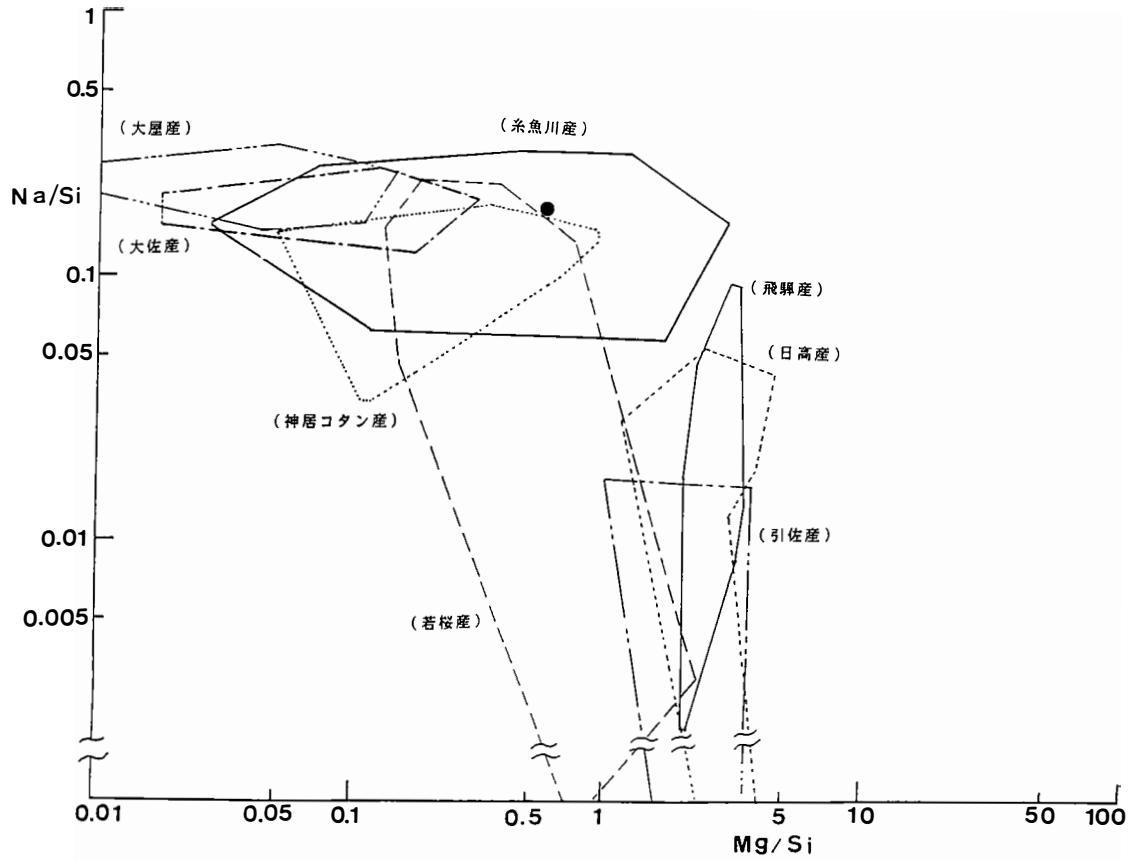


図８　硬玉製勾玉のNa／Si対Mg／Siの分布

2　ワクド石遺跡出土の玉材石片の産地分析

藁科哲男・東村武信　（京都大学原子炉実験所）

(1)　はじめに

今回分析を行った玉材石片は、熊本県菊池郡大津町大字杉水字小林に位置するワクド石遺跡から出土した合計6個で、これら遺物の分析結果が得られたので報告する。

今回分析した遺物の特徴を調べた結果を記述する。

(2)　碧玉原石の蛍光X線分析

碧玉の蛍光X線スペクトルの例として島根県、花仙山産原石を図1に示す。猿八産、玉谷産などの原石から検出される蛍光X線ピークも異同はあるものの図1で示されるピークは観測される。土岐、興部の産地の碧玉は鉄の含有量が他の産地のものに比べて大きいのが特徴である。産地分析に用いる元素比組成は、Al/Si、K/Si、Ca/K、Ti/K、K/Fe、Rb/Fe、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zrである。Mn/Fe、Ti/Fe、Nb/Zrの元素比は非常に小さく、小さい試料の場合測定誤差が大きくなるので定量的な判定の指標とはせず、判定のときに、Ba、La、Ceのピークの高さとともに、定性的に原材産地を判定する指標として用いる。

(3)　碧玉の原産地と原石の分析結果

分析した碧玉の原石の原産地を図2に示す。佐渡島猿八原産地は、（1）新潟県佐渡郡畑野町猿八地区で、産出する原石は、地元で青玉と呼ばれている緑色系の石で、良質なものは割れ面がガラス光沢を示し、質の良くないものは光沢の少ないグリーンタフ質なものである。産出量は豊富であったらしく採石跡が何カ所か見られ、分析した原石は猿八の各地点から表採したもの、および地元で提供された原石などで、提供されたものの中には露頭から得られたものがあり、グリーンタフ層の間に約7cm幅の良質の碧玉層が挟まれた原石であった。分析した原石の比重と個数は、比重が2.6～2.5の間のものは31個、2.5～2.4の間は5個で合計36個で、この中には、茶色の碧玉も2個含まれている。原石の比重が2.6～2.3の範囲で違っても、碧玉の色が茶色、緑色、また、茶系色と緑系色の縞があるなど、多少色の違いがあっても組成上には反映されていない。出雲の花仙山は近世まで採掘が行われた原産地で、所在地は（2）島根県八束郡玉湯町玉造温泉地域である。産出する原石は濃緑色から緑色の緻密で、剝離面が光沢をもつ良質の碧玉から淡緑色から淡白色などいろいろで、硬度が低そうなグリーンタフの様な原石も見られる。良質な原石の比重は2.5以上あり、質が悪くなるにしたがって比重は連続的に2.2まで低くなる。分析した原石は、比重が2.619～2.600の間のものは10個、2.599～2.500は18個、2.499～2.400は7個、2.399～2.300は11個、2.299～2.200は11個、2.199～2.104は3個の合計60個である。比重から考えると碧玉からグリーンタフまでの領域が分析されている。花仙山産原石は色の違い、比重の違いによる組成の差は見られなかった。玉谷原産地は、（3）兵庫県豊岡市辻、日高町玉谷地域で、産出する碧玉の色、石質などは肉眼では花仙山産の原石と全く区別がつかない。また、原石の中には緑系色に茶系色が混じ

表3　分析遺物の特徴

分析番号	色　調（光沢）	硬　度	比　重	調査区	遺構名	層　位
34700	薄灰緑（脂光沢）	2.5	2.805	A-16	№21	遺構面堀り下げ
34701	白灰緑（〃）	3.5	2.875	V-18		〃　一括
34702	薄灰緑（　〃　）	2.5	2.785	B-14	SX-01	上部
34703	エメラルド色（　〃　）	2.5	2.827	B-17付近		排土中
34704	〃　（　〃　）	2.5	2.832	D-18	№19	
34705	〃　（　〃　）	2.5	2.827	C-19	№100	遺構面堀り下げ

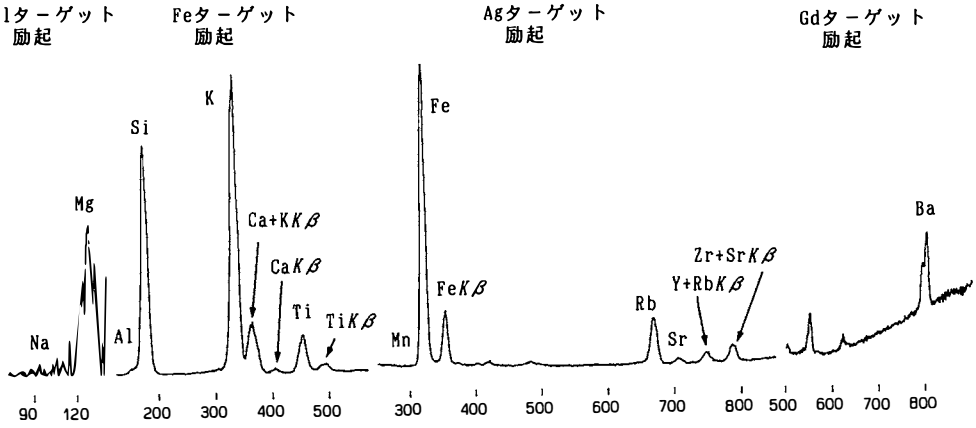


図１　花仙山産碧玉原石の蛍光Ｘ線スペクトル

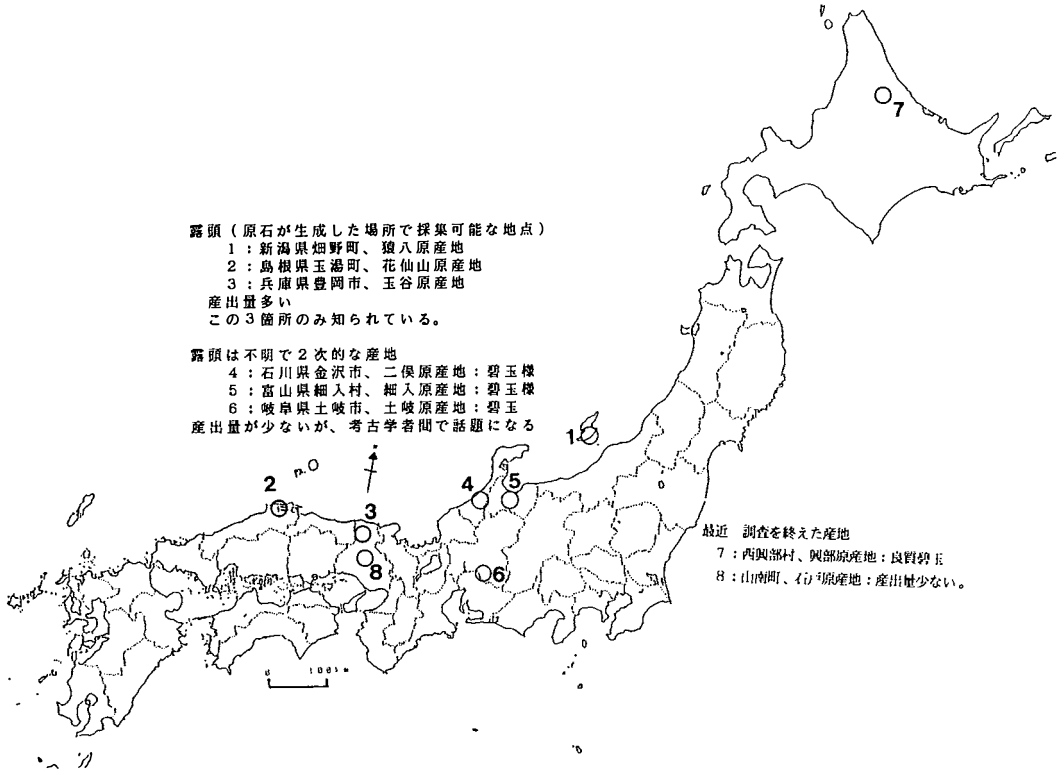


図２　碧玉の原産地および碧玉のような緑色の石の産地

るものもみられ、これは佐渡猿八産原石の同質のものに非常によく似ている。比重も2.6以上あり、質は花仙山産、佐渡猿八産原石より優れた感じのものもみられる。この様な良質の碧玉の採取は、産出量も少ないことから長時間をかけて注意深く行う必要がある。分析した原石は、比重が2.644～2.600は23個、2.599～2.589は４個の合計27で、玉谷産原石は色の違いによる分析組成の差はみられなかった。また、玉谷原石と一致する組成の原石は日高町八代谷、石井、アンクラなどで採取できる。二俣原産地は（４）石川県金沢市二俣町地域で、原石は二俣川の河原で採取できる。二俣川の源流は医王山であることから、露頭は医王山に存在する可能性がある。河原で見られる碧玉原石は、大部分がグリーンタフ中に層状、レンズ状に非常に緻密な部分として見られる。分析した４個の原石の中で３個は、同一塊から３分割したもので、１個は別の塊からのもので、前者の３個の比重は2.42で後者は2.34である。元素組成は他の産地の組成と異なり区別できる。この４個が二俣原産地から産出する碧玉原石の特徴を代表しているか

どうかは、さらに分析数を増やす必要がある。細入村の産地は、（5）富山県婦負郡細入村割山定座岩地区のグリーンタフの岩脈に団塊として緻密な濃緑の碧玉質の部分が見られる。肉眼では、他の産地の碧玉と区別できず、また、出土する碧玉製の玉類とも非常に似た石質である。しかし、比重が非常に軽く、分析した８個は2.25～2.12で、この比重の値で他の原産地と区別できる場合が多い。土岐原産地は、（6）愛知県土岐市地域で、赤色、黄色、緑色、などが混じり合った岩石が産出しこのうち緻密な光沢のよい濃緑で比重が2.62～2.60の原石を碧玉として11個分析を行った。ここの原石は鉄の含有量が非常に大きく、カリウム含有量が小さいという特徴を持ち、この元素比の値で他の原産地と区別できる。興部産地は、（7）北海道紋別郡西興部村で碧玉原石には鉄の含有量が非常に高く、他の原産地と区別する指標になっている。また、比重が2.6以下のものはなく遺物の産地を特定する指標として重要である。石戸の産地は、（8）兵庫県氷上郡山南町地区で安山岩に脈岩として採取されるが、産出量は非常に少ない。元素組成から他の産地の碧玉と区別できる。これら原石を原産地ごとに統計処理を行い元素比の平均値と標準偏差値をもとめて母集団を作り**表１**に示す。各母集団に原産地名を付けて、その産地の原石群、例えば花仙山群と呼ぶ。花仙山群は比重によって２個の群に分けて表に示したが比重は異なっても組成に大きな違いは見られない。したがって、統計処理は一緒にし、花仙山群として取り扱った。原石群とは異なるが、豊岡市女代南遺跡で主体的に使用されている碧玉製の玉の原材料で原産地は不明の遺物が出土している。同質の材料で作られた可能性がある玉類は北陸、近畿、中国地方に分布しているらしい。この分布範囲を明らかにし、原石産地を探索すると言う目的で女代南遺物群として原石群と同じように使用する。この他、鳥取県の福部村たねが池、鳥取市つづらお岬などの自然露頭からの原石を４個分析した。比重は2.6以上あり元素比組成は、興部、玉谷、土岐石に似るが、他の原産地の原石とは組成で区別される。また、緑系の原石ではない。

(4)　玉材石片と国内産碧玉原材との比較

遺跡から出土した玉類は表面の泥を超音波洗浄器で水洗するだけの完全な比破壊分析で行っている。

遺物の原材産地の同定をするために、（1）蛍光Ｘ線法で求めた原石群と碧玉製遺物の分析結果を数理統計の手法を用いて比較をする定量的な判定法で行う。（2）また、ＥＳＲ分析法により各産地の原石の信号と遺物のそれを比較して、似た信号の原石の産地の原材であると推測する方法も応用した。

(5)　蛍光Ｘ線法による産地分析

これら遺物の蛍光Ｘ線分析の結果（**図３～８**）および比重（**表２**）から原材料の岩石の分類を試みた。今回分析した分析番号34700、34702の石片には、相対的にMg元素の含有量が非常に多く、源岩のカンラン岩が蛇紋化作用を受けた岩石であると推測した。多量に含有するFeとかAlはMgを置換し、Siの一部もAlで置換されている。また、蛇紋岩に共伴する副成分鉱物としての鉄鉱鉱物からのFe、Crが観測されている可能性も考えられる。少量ではあるがMnの含有が確認される。分析番号34701の石片では、Caの含有量が多く、ドロマイト起源ではなかろうか。これら比重は2.6～2.9の範囲で、滑石の比重に一致する、しかし遺物の硬度は約2.5で蛇紋石の硬度に一致する。この遺物を蛇紋岩とすると蛇紋石の比重約2.6の値より重くなっている理由は、共伴する副成分鉱物の量の多少によるものではなかろうか。分析番号34703、34704、34705の石片の硬度、比重は、滑石、蛇紋石に近いが、主成分組成のMg、Feの量が少ない。また、Kの含有量が非常に高いことがあげられる。これら緑色の遺物は蛇紋、滑石系の岩石と言えない。これら遺物の元素組成比および比重の結果を碧玉原石群（**表１**）の結果と比較してみる。遺物の比重が2.3以上あるため細入原産地の原石でないことが分かる。原石の数が多く分析された原産地については、数理統計のマハラノビスの距離を求めて行うホテリングＴ^{2}検定（文献８）により同定を行い興部、玉谷、花仙山、猿八、女代（Ｂ）の各原石群への帰属確率を求めたところ全ての遺物は各原石群

表1　各碧玉の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

原石群名	分析個数	Al／Si $\overline{X}\pm\sigma$	K／Si $\overline{X}\pm\sigma$	Ca／K $\overline{X}\pm\sigma$	Ti／K $\overline{X}\pm\sigma$	K／Fe $\overline{X}\pm\sigma$
興部	31	0.011±0.003	0.580±0.320	0.123±0.137	0.061±0.049	0.022±0.006
猿八	36	0.046±0.007	3.691±0.548	0.049±0.038	0.058±0.011	0.370±0.205
土岐	11	0.010±0.001	0.404±0.229	0.090±0.074	0.057±0.035	0.027±0.007
玉谷	27	0.025±0.009	0.625±0.297	0.110±0.052	0.476±0.104	0.045±0.014
花仙山1	27	0.019±0.004	0.909±0.437	0.171±0.108	0.222±0.098	0.059±0.019
花仙山2	33	0.023±0.003	1.178±0.324	0.157±0.180	0.229±0.139	0.055±0.015
細入	8	0.019±0.003	0.534±0.284	0.991±0.386	0.372±0.125	0.031±0.008
二俣	4	0.043±0.001	2.644±0.183	0.337±0.079	0.158±0.009	0.312±0.069
石戸	4	0.019±0.004	0.601±0.196	0.075±0.022	0.086±0.038	0.154±0.072
女代南遺物群	68	0.045±0.016	3.115±0.445	0.042±0.024	0.107±0.036	0.283±0.099

原石群名	分析個数	Rb／Fe $\overline{X}\pm\sigma$	Fe／Zr $\overline{X}\pm\sigma$	Rb／Zr $\overline{X}\pm\sigma$	Sr／Zr $\overline{X}\pm\sigma$	Y／Zr $\overline{X}\pm\sigma$
興部	31	0.070±0.021	174.08±124.9	16.990±13.44	0.668±0.435	1.801±1.434
猿八	36	0.384±0.153	1.860±1.070	0.590±0.185	0.139±0.127	0.165±0.138
土岐	11	0.091±0.029	47.540±31.76	4.074±2.784	0.271±0.323	0.269±0.265
玉谷	27	0.151±0.020	6.190±1.059	0.940±0.205	0.192±0.170	0.158±0.075
花仙山1	27	0.225±0.028	10.633±3.616	2.345±0.693	0.476±0.192	0.098±0.052
花仙山2	33	0.219±0.028	12.677±2.988	2.723±0.519	0.472±0.164	0.132±0.071
細入	8	0.073±0.020	12.884±3.752	0.882±0.201	1.879±0.650	0.026±0.032
二俣	4	0.338±0.039	1.495±0.734	0.481±0.176	0.697±0.051	0.088±0.015
石戸	4	0.170±0.079	7.242±1.597	1.142±0.315	0.649±0.158	0.247±0.092
女代南遺物群	68	0.267±0.063	2.374±0.676	0.595±0.065	0.214±0.097	0.171±0.047

原石群名	分析個数	Mn／Fe $\overline{X}\pm\sigma$	Ti／Fe $\overline{X}\pm\sigma$	Nb／Zr $\overline{X}\pm\sigma$	比重 $\overline{X}\pm\sigma$
興部	31	0.004±0.003	0.001±0.001	0.455±0.855	2.626±0.032
猿八	36	0.003±0.001	0.018±0.010	0.032±0.014	2.543±0.049
土岐	11	0.001±0.001	0.001±0.001	0.261±0.242	2.607±0.009
玉谷	27	0.006±0.003	0.016±0.003	0.054±0.021	2.619±0.014
花仙山1	27	0.001±0.001	0.009±0.002	0.042±0.034	2.570±0.044
花仙山2	33	0.001±0.001	0.009±0.004	0.035±0.025	2.308±0.079
細入	8	0.003±0.002	0.008±0.002	0.021±0.344	2.169±0.039
二俣	4	0.007±0.002	0.043±0.010	0.043±0.023	2.440±0.091
石戸	4	0.007±0.001	0.009±0.002	0.227±0.089	2.598±0.008
女代南遺物群	68	0.011±0.004	0.026±0.009	0.034±0.016	2.554±0.019

$\overline{X}$：平均値、σ：標準偏差値

女代南遺物群：女代南遺跡(豊岡市)で使用されている原石産地不明の玉原材料で作った群

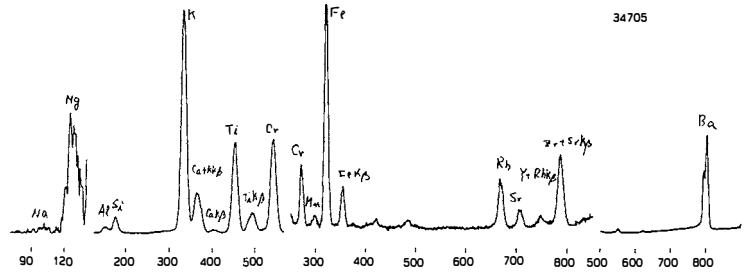


図８　玉材石片分析番号34705の蛍光Ｘ線スペクトル

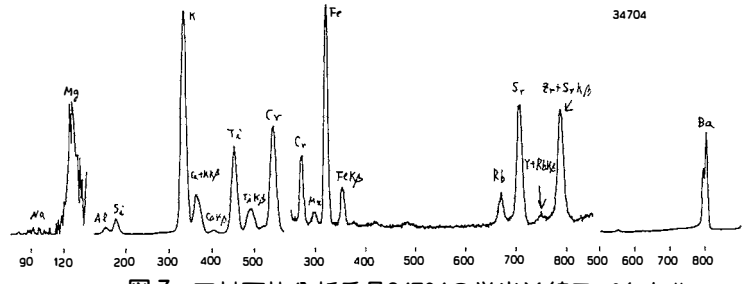


図７　玉材石片分析番号34704の蛍光Ｘ線スペクトル

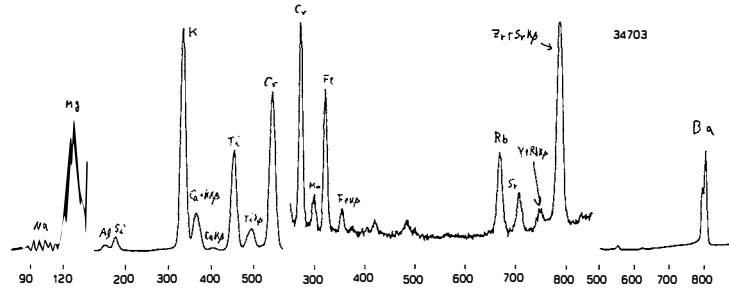


図６　玉材石片分析番号34703の蛍光Ｘ線スペクトル

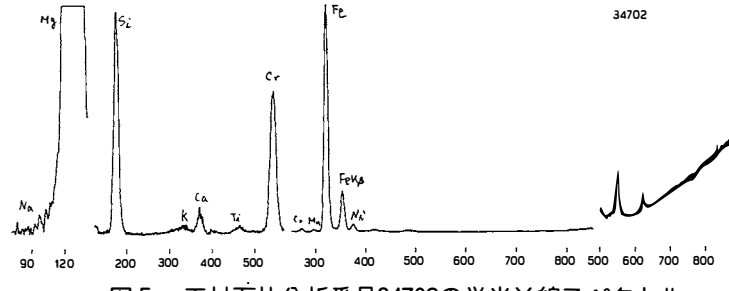


図５　玉材石片分析番号34702の蛍光Ｘ線スペクトル

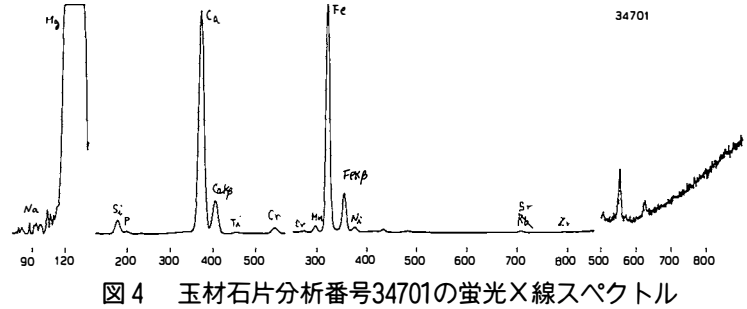


図４　玉材石片分析番号34701の蛍光Ｘ線スペクトル

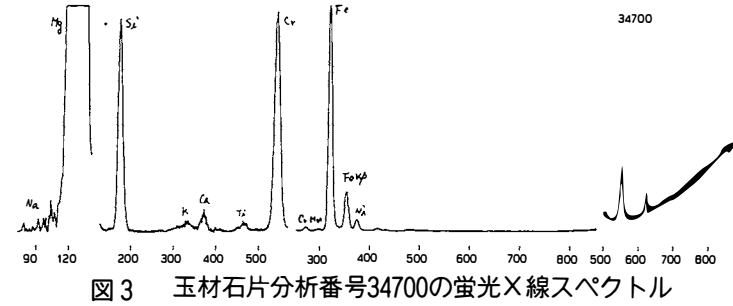


図３　玉材石片分析番号34700の蛍光Ｘ線スペクトル

表2　ワクド石遺跡出土の玉材石片の分析結果

試料番号	元素比							
	Al／Si	K／Si	Ca／K	Ti／K	K／Fe	Rb／Fe	Fe／Zr	Rb／Zr
34700	.017	.073	1.443	.189	.003	.000	999.999	.331
34701	.023	.223	83.696	.581	.007	.000	999.999	.000
34702	.016	.018	4.235	.921	.006	.001	999.999	999.999
34703	.347	18.027	.075	.481	2.199	.845	.420	.354
34704	.378	17.131	.074	.393	.664	.186	1.574	.293
34705	.335	16.420	.100	.427	.616	.282	2.263	.638
JG-1 a)	.077	3.443	.757	.210	.132	.258	4.025	1.040

試料番号	元素比					重量gr	比重
	Sr／Zr	Y／Zr	Mn／Fe	Ti／Fe	Nb／Zr		
34700	1.764	.000	.004	.000	.000	14.232	2.805
34701	999.999	999.999	.025	.001	.000	12.207	2.875
34702	999.999	999.999	.008	.000	.000	11.974	2.785
34703	.161	.000	.046	1.136	.000	11.768	2.827
34704	1.265	.000	.015	.268	.000	0.657	2.832
34705	.234	.000	.009	.269	.000	0.933	2.827
JG-1	1.351	.205	.021	.023	.058		

a) 標準試料、Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. (1974). 1974 compilation of data on the GJS geochemical refernce samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. *Geochemical Journal*, Vol.8 175-192.

に0パーセントに近い確率であった。また、土岐、二俣、細入、石戸原産地は統計処理ができるだけの原石の分析数が用意されてないが元素組成からこれら産地の原石でないと推定された。蛍光X線分析の結果から原石産地を特定された遺物はない。以下に述べる表面風化の影響を受けていない試料深部からの信号も測定できる電子スピン共鳴（ＥＳＲ）法により石片の分析を試みた。

(6)　ＥＳＲ法による産地分析

ＥＳＲ分析は碧玉原石に含有されているイオンとか、碧玉が自然界からの放射線を受けてできた色中心などの常磁性種を分布し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した。ＥＳＲの測定は、Varian社のE-4型X-バンドスペクトロメーターで行う。試料は完全な非破壊分析で、直径が11mm以下の管玉なら分析は可能で、小さい物は胡麻粒大で分析ができる場合がある。図9-1のＥＳＲのスペクトルは、幅広く磁場掃引したときに得られた信号スペクトルで、g 値が4.3の小さな信号（Ⅰ）は鉄イオンによる信号で、g 値が2付近の幅の広い信号（Ⅱ）と何本かの幅の狭いピーク群からなる信号（Ⅲ）で構成されている。図9-1では、信号（Ⅱ）より信号（Ⅲ）の信号の高さが高く、図9-2，-3の二俣、細入原石ではこの高さが逆になっているため、原石産地の判定の指標に利用できる。

今回分析した玉類の中で信号（Ⅱ）が信号（Ⅲ）より小さい場合は、二俣、細入産でないといえる。各原産地の原石の信号（Ⅲ）の信号の形は産地ごとに異同があり産地分析の指標となる。図10-1に花仙山、猿八、玉谷、土岐および図10-2興部、石戸、八代谷-4、女代（B）遺物群、八代谷の各原石の代表的な信号（Ⅲ）のスペクトルを示す。今回分析した石片のＥＳＲ信号は重なっている鉄イオンの信号（Ⅱ）が小さく、信号（Ⅲ）が観測でき、Mnイオンと同じ磁気分裂幅をもつ信号（Ⅲ）を示す（図11）。これら石片の原材は調査された各碧玉、碧玉様産地の原石の信号と異なり、比較した産地の原石

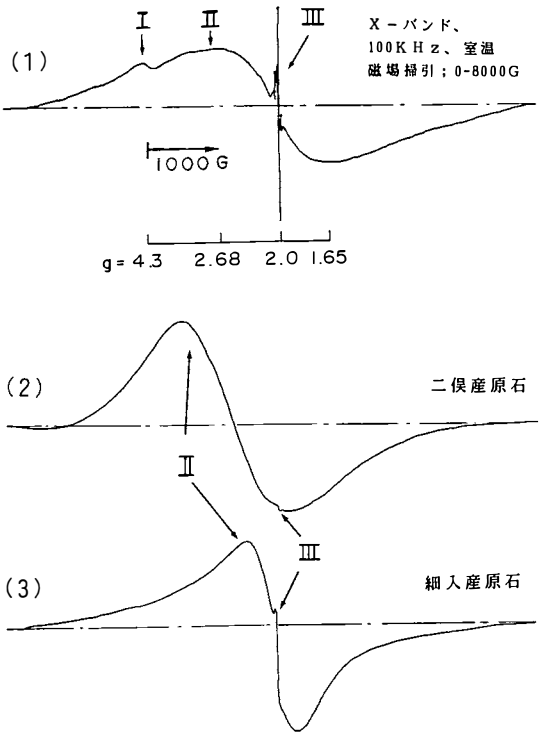


図9　碧玉原石のESRスペクトル
（花仙山、玉谷、猿八、土岐）

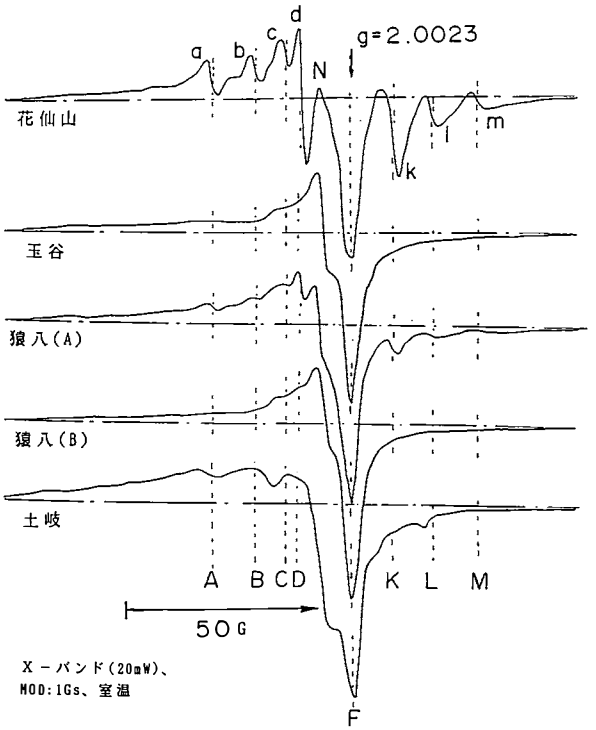


図10(1)　碧玉原石の信号ⅢのERSスペクトル

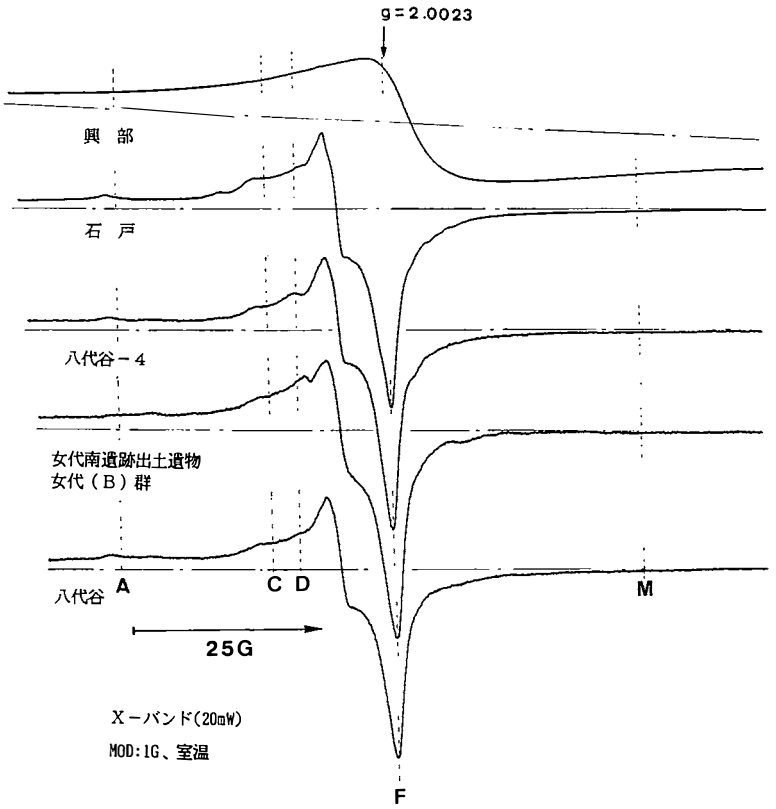


図10(2)　碧玉原石の信号ⅢのERSスペクトル

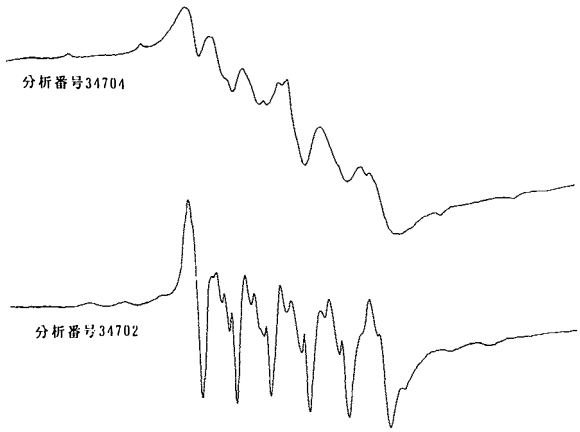


図11　玉材石片の信号ⅢのERSスペクトル

でないことが分かる。さらに正確な原石産地を推測するために蛍光X線分析の結果と組み合わせ総合判断として、両方法でともに同じ原産地特定された場合のみ、そこの原産地の原石であると決定する。

(7) 結　論

今回分析した遺物は、調査されている碧玉原石の組成とは一致しなかった。蛍光X線分析で分析番号34700、34701、34702の石片から、蛇紋岩、滑石の主成分であるMg元素の含有量が非常に多く観測された。また、副成分鉱物としての鉄鉱鉱物からのFe、Cr、が観測され、少量ではあるがMnの含有が確認される。分析番号34701の石片では、Caの含有量が多く、ドロマイト起源ではなかろうか。これら遺物の比重は2.6～2.9の範囲で、滑石の比重に一致する、しかし遺物の硬度は約2.5で蛇紋石の硬度に一致する。この遺物を蛇紋岩とすると蛇紋石の比重約2.6のより重くなっている理由は、共伴する副成分鉱物の量の多少によるものではなかろうか。蛇紋岩と滑石相互に関係していて、滑石鉱床はしばしば蛇紋岩中の小レンズ鉱床となっている場合が多く、遺物石片に両鉱物が共存しているために、硬度は蛇紋岩、比重は滑石となったのではなかろうか。分析番号34703、34704、34705の石片の硬度、比重は、滑石、蛇紋石に近く、緑色であることを考慮すると緑泥石の比重、硬度に一致する。しかし緑泥石の主成分組成のMg、Feの主成分組成のMg、Feの量が少ない。また、緑泥石の可能性が低い理由としてKの含有量が非常に高いことがあげられる。これら緑色の遺物の硬度、非重、組成を考え合わせると雲母系と一致すると考えられ、緑色の雲母系としては鹿児島県のバナジン雲母が知られている。遺物にCrの含有量が比較的多く含有されている。このクロムがCr^{3+}として存在していると、緑色になることが知られているため、Crが緑色の原因元素になっている可能性は考えられる。

蛍光X線分析で緑色の玉材と薄灰緑の玉材の主成分組成は全く異なり、一見比重と硬度が同じ鉱物で、色だけが異なるように見えるが蛍光X線分析で両玉材の主成分組成が異なっていることが明らかになった。これら玉材の原石産地を探索しその分布圏から古代の玉材交易を明らかにすることが今後の課題である。

参考文献

1）茅原一也（1964）、長者ヶ原遺跡産のヒスイ（翡翠）について（概報）『長者ケ原』新潟県糸魚川市教育委員会：63-73
2）藁科哲男・東村武信（1987）、ヒスイの産地分析。『富山市考古資料館紀要』6：1-18
3）藁科哲男・東村武信（1990）、奈良県内遺跡出土のヒスイ製玉類の産地分析。橿原考古学研所紀要『考古学論攷』14：95-109
4）Tetsuo Warashina (1992), Allocation of Jasper Archaeological Implements by Means of ESR and XRF. Journal of Archaeological Science 19：357-373
5）藁科哲男・東村武信（1983）、石器原材の産地分析『考古学と自然科学』16：59-89
6）番場猛夫（1967）、北海道日高産軟玉ヒスイ。調査研究報告会講演要旨録　No.18：11-15
7）河野義礼（1939）、本邦における翡翠の新産出及び其化学的性質『岩石礦物鉱床学雑誌』22：195-201
8）東村武信（1976）、産地推定における統計的手法『考古学と自然科学』9：77-90

3　ワクド石遺跡の植物珪酸体分析

（古環境研究所）

⑴　はじめに

植物珪酸体は、植物体内で形成されたガラス質の細胞であり、植物が枯れた後も微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定、および古植生・古環境の推定などに応用されている。（杉山，1987ａ）。

ワクド石遺跡の発掘調査では、縄文時代後晩期とされる遺物や遺構が検出された。そこでこれらの遺物や遺構内の試料について植物珪酸体分析を行い、イネ科栽培植物の検討、および遺跡周辺の古植生・古環境の推定を試みた。

⑵　試　　料

試料は、縄文埋鉢（１，２，３）内の埋土、縄文住居跡１号の炉跡内焼土とピット６内の埋土、および縄文住居跡３号の置鉢内の埋土について採取された。試料数は計６点である。

⑶　分 析 法

植物珪酸体の抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原，1976)」をもとに、次の手順で行った。

（１）試料の絶乾（105℃・24時間）

（２）試料約１g を坪量、ガラスビーズ添加（直径約40μ m、約0.02g ）
※電子分析天坪により１万分の１g の精度で坪量

（３）電気炉灰化法による脱有機物処理

（４）超音波による分散（300W・42KHz・10分間）

（５）沈底法による微粒子（20μ m以下）除去、乾燥

（６）封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成

（７）検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行なった。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１g あたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率かけて、試料１g 中の植物珪酸体個数を求めた。

⑷　結果および考察

（１）イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネをはじめ、オオムギ族（ムギ類が含まれる)、キビ族（ヒエやアワ、キビなどが含まれる)、トウモロコシ属、ジュズダマ属(ハトムギが含まれる）などがある。本遺跡の試料からは、このうちのイネおよびキビ族が検出された（表１)。

イネは、縄文住居跡１号の炉跡内の焼土から検出された。このことから、炉跡で稲藁が焼かれていた可能性が考えられるが、植物珪酸体密度が1,400個／g と低い値であることや、比較試料（焼土の直上層など）について分析が行われていないことから、上層から後代の植物珪酸体が混入した可能性も否定できない。

キビ族は、縄文住居跡１号のピット６の埋土から検出された。密度は、600個／g と低い値である。キビ族にはヒエやアワ、キビなどの栽培種が含まれるが、現時点では植物珪酸体の形態からこれらの栽培種とイヌビエやエノコログサなどの野・雑草とを識別するには至っていない（杉山ほか，1988)。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、未分類等としたものの中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。

（２）縄文時代の植物と環境の推定

上記以外の分類群では、分析を行ったすべての試料からタケ亜科Ｂ１タイプ（クマザサ属など）など

のタケ亜科が多量に検出された。また、ウシクサ族（ススキ属など）やイネ科Ｂタイプ（ウシクサ属型）もすべての試料から検出され、コナラ属（おもにアカガシ亜属）などの照葉樹に由来する植物珪酸体もほとんどの試料から検出された。樹木は葉身中で形成される珪酸体密度が低いことから、給源植物の量を推定する際には他の植物と比較してかなり過大に評価する必要がある。

これらのことから、当時の遺跡周辺はクマザサ属を主体としススキ属なども見られるイネ科植生であったものと考えられ、カシ・シイ類などの照葉樹もある程度生育していたものと推定される。

なお、縄文住居跡１号の炉跡内の焼土ではタケ亜科Ｂ１タイプ（クマザサ属など）が約９万個／g と特に高い密度で検出された。このことから、本炉跡ではクマザサ属の葉などが燃料として焼かれていた可能性が考えられる。また、縄文埋鉢２ではコナラ属（おもにアカガシ亜属）が他の試料よりも特に多く検出され、シイノキ属およびイスノキ属と思われる植物珪酸体も検出された。このことから、鉢の内部にはなんらかの形でカシ・シイ類の葉などが入れられていた可能性も考えられる。

⑸ まとめ

縄文時代後晩期とされる遺物や遺構内の試料について植物珪酸体分析を行った。その結果、縄文住居跡１号の炉跡内の焼土からイネの植物珪酸体が検出され、当時の遺跡周辺で稲作が行われていた可能性が示唆された。ただし、検出密度が低いことや、比較試料の分析が行われていないことから、上層などからの混入の可能性も懸念された。

当時の遺跡周辺は、クマザサ属なども見られるイネ科植生であったものと考えられ、カシ・シイ類などの照葉樹もある程度生育していたものと推定される。

タケ亜科やススキ属は、その有用性から燃料や道具、住居の屋根材や建築材などとして盛んに利用されていたものと考えられる。特に笹類は鹿などの草食動物の食料としても重要であったものと考えられる。

参考文献

１）杉山真二（1987ａ）、遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点、植生史研究 第２号：27-37

２）杉山真二（1987ｂ）、タケ亜科植物の機動細胞珪酸体、富士竹類植物園報告 第31号：70-83

３）杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）、機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用―古代農耕追究のための基礎資料として― 考古学と自然科学 20：81-92

４）藤原宏志（1976）、プラント・オパール分析法の基礎的研究（１）―数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法― 考古学と自然科学 9：15-29

５）藤原宏志（1979）、プラント・オパール分析法の基礎的研究（３）―福岡・板付遺跡（夜臼式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（O.sativa L）生産総量の推定― 考古学と自然科学 12：29-41

表1　ワクド石遺跡の植物珪酸体分析結果

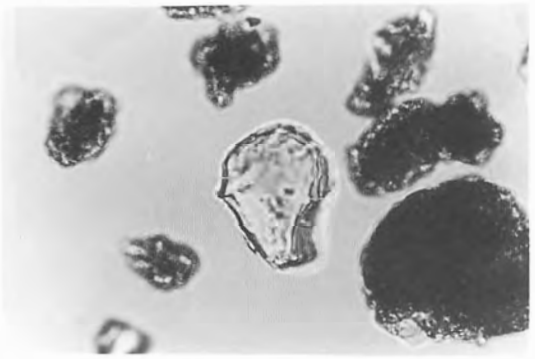
（単位：×100個／g）

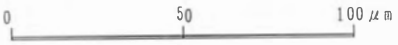
分析群	縄文埋甕内埋土			JSI01住居跡		JSI03住居跡
	2	3	4	炉跡内（2層）	Pit 6 埋土下部	置甕内埋土
イネ科						
イネ				14		
キビ族（ヒエ属など）					6	
ヨシ属					13	6
ウシクサ族（ススキ属など）	41	79	62	28	38	74
Aタイプ（キビ族型）	23			7	13	31
Bタイプ（ウシクサ族型）	110	109	75	90	64	74
タケ亜科						
A-1-aタイプ（ネザサ節など）	6		6	28		6
B-1タイプ（クマザサ属など）	384	309	412	858	522	541
未分類等	192	73	75	90	25	98
その他のイネ科						
表皮毛起源	46	36	31	138	32	31
棒状珪酸体	232	170	125	304	223	190
茎部起源		6		7		
未分類等	296	255	250	228	433	387
樹木起源						
Aタイプ（コナラ属-アカガシ亜属？）		79	19	14	6	25
Bタイプ（シイノキ属）		6	6			
Cタイプ（イスノキ属？）		12	12			
（海綿骨針）		6				6
植物珪酸体総数	1331	1134	1075	1806	1376	1462

表2　植物珪酸体の顕微鏡写真

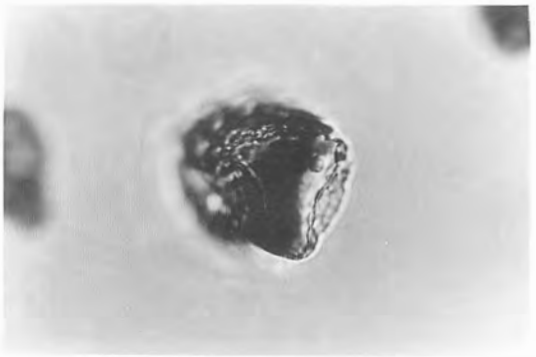
（倍率はすべて400倍）

No.	分類群	遺構	試料名
1	イネ	JSI01	炉跡内
2	イネ	JSI01	炉跡内
3	キビ族（ヒエ属など）	JSI01	Pit 6 埋土下部
4	キビ族（ヒエ属など）	JSI01	Pit 6 埋土下部
5	ヨシ属	JSI01	Pit 6 埋土下部
6	ウシクサ族（ススキ属など）	JSI03	置甕内埋土
7	イネ科Aタイプ（キビ族型）	縄文埋甕 2	甕内埋土
8	イネ科Bタイプ（ウシクサ族型）	縄文埋甕 2	甕内埋土
9	タケ亜科B-1タイプ（クマザサ属）	JSI01	炉跡内
10	タケ亜科B-1タイプ（クマザサ属）	縄文埋甕 2	甕内埋土
11	表皮毛起源	JSI01	炉跡内
12	棒状珪酸体	JSI01	Pit 6 埋土下部
13	棒状珪酸体	縄文埋甕 3	甕内埋土
14	イネ科の茎部起源	JSI01	炉跡内
15	コナラ属（アカガシ亜属？）	縄文埋甕 4	甕内埋土
16	コナラ属（アカガシ亜属？）	JSI03	置甕内埋土
17	コナラ属（アカガシ亜属？）	縄文埋甕 3	甕内埋土
18	海綿骨針	JSI03	置甕内埋土

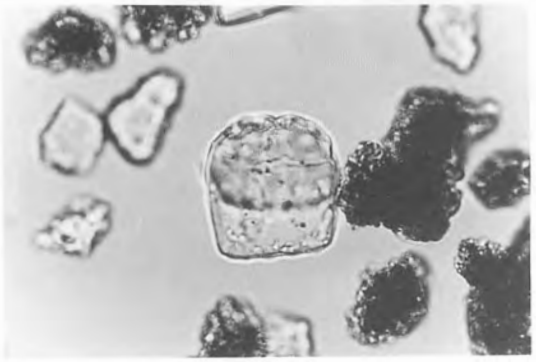




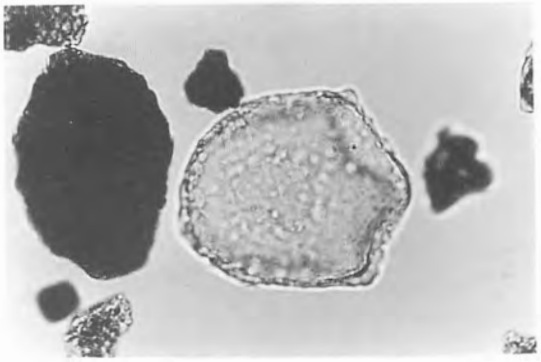
1



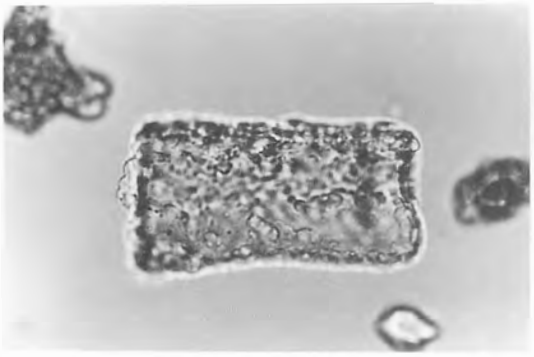
4



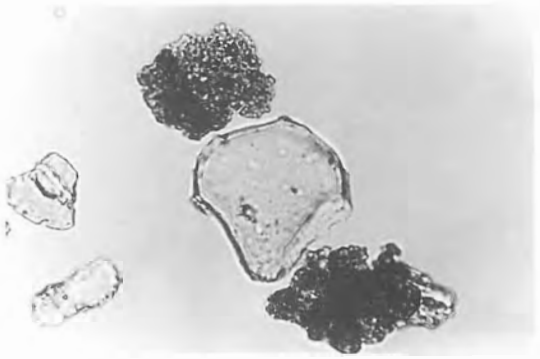
2



5

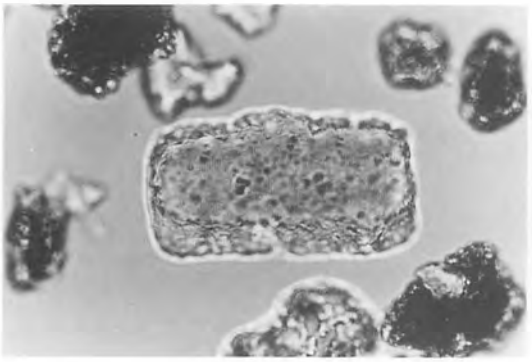


3

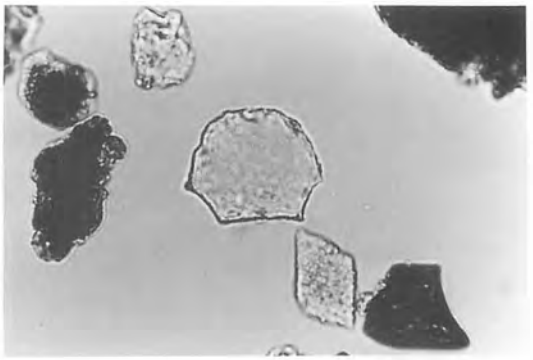


6

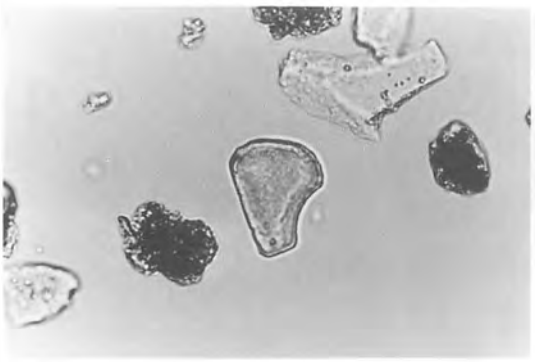
プラントオパール顕微鏡写真(1)



7



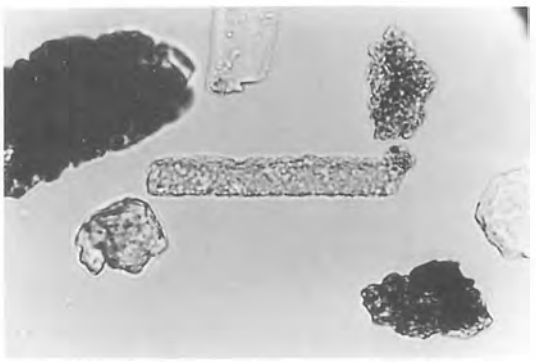
10



8

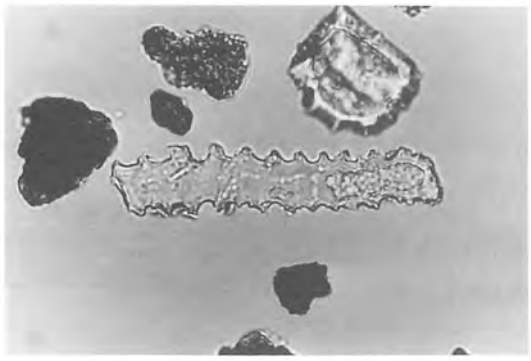
11

9



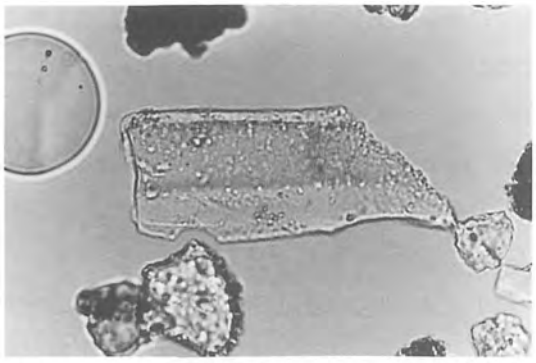
12

プラントオパール顕微鏡写真(2)



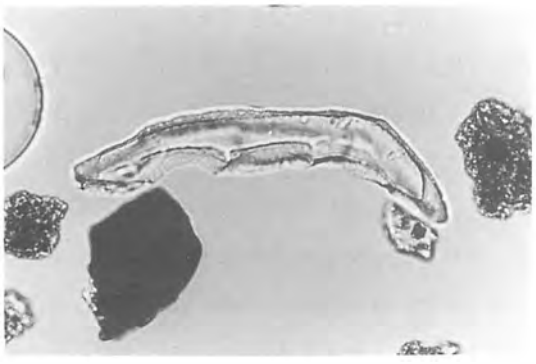
13

16

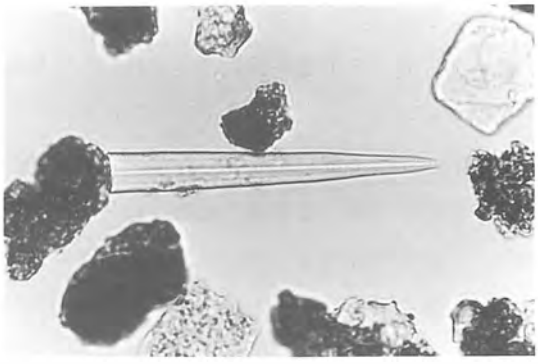


14

17



15



18

プラントオパール顕微鏡写真(3)

第Ⅶ章　総　　括

1　はじめに

第Ⅰ章でも述べたように、ワクド石遺跡は縄文時代後期～晩期の大遺跡として知られている。そこで採集された土器は資料としていろいろな論文に掲載された。また、この遺跡で川上勇輝氏によって採集された籾痕のついた浅鉢形土器は縄文時代における稲作農耕の存在を傍証するものとして学界で注目された経緯を持つ。

この遺跡の内容を知るための学術調査は坂本経堯氏及び小谷凱宣氏によって行われているが発掘面積が小さく、遺跡の内実を明らかにはしえていないようだ。

今回の9000㎡におよぶ調査は遺跡の性格や内実を不十分ではあるが明らかにしたといえる。そのいくつかをここで明らかにしたい。ただ、遺構の残存状況は極めて悪く、そのため考古学的な検討をするには資料としての有効性は低いといえる。そのため、ここで述べることは可能性のより高いものと考えてもらいたい。

2　土器型式の内容と問題点

遺跡を発掘する際に、その年代の決定は主に土器の型式で行う。そのため、土器型式の検討は発掘調査のたびごとに行われ、その精度はより細かく、しかも正確にされなければならない。その意味で、ワクド石遺跡における土器型式の内容を検討し、問題点を整理する。

第Ⅳ章第２節でも触れたように、ワクド石遺跡では後世の削平のため土器のほとんどが破片で出土している。しかも復原するには小さすぎる。このため、土器型式を論じるためのまとまった一括資料や特徴的な型式を抽出することが困難な状況にある。そのため、遺跡の変遷や集落の時期、変遷、他の遺跡との比較を進めやすくすることを第一義とするために従来の型式名を使用した土器記述をしている。

ただ、土器器形分類はワクド石遺跡出土の土器から導いたものに従来の型式に見られるものを加味して分類しており、ワクド石遺跡での土器形式の特徴は把握できると思われる。以下、内容と問題点を取り上げていく。

(1)　ワクド石遺跡における太郎迫式の様相

太郎迫式の土器群はＡ調査区、Ｅ調査区においてまとまって出土している。とくにＡ調査区においては他の型式がほとんど出土していない。遺構出土の一括資料ではないが現状での土器研究の上では資料的価値は高いものといえる。Ｅ調査区においてもかなりの量が出土しているものの、他の型式も豊富に出土している。なお、太郎迫式の内容については富田氏の論文（文献21）を参照されたい。

ワクド石遺跡の太郎迫式土器の土器群には富田氏が設定した太郎迫式の標識遺跡である太郎迫遺跡では明確でなかった様相が見られる。

第１点はＡ調査区出土深鉢23に見られる胴部上半部文様帯の文様に方形区画文が見られる土器が出土していることである。松永幸男氏によれば（文献32）北部九州を中心に分布するという。ワクド石遺跡において出土したことからそのつながりがどの様な経緯を持つものか注目される。

第２点は、縄文時代10号住居跡出土の深鉢１、３に見られるような小型深鉢、言い換えれば鉢形土器の存在が明確になったことである。富田氏が指摘するように太郎迫式に続く三万田式においては器形分化した小型深鉢（鉢形土器）が一定の占有率を占めるようになる。ワクド石遺跡においても同様の様相を示し、これを裏付けている。ただ、太郎迫式ではっきりと捕らえられていなかった様相である。

第３点は、Ａ調査区出土土器34、Ｅ調査区出土土器56などに見られる高杯形か浅鉢形土器の出土である。浅鉢形土器とすれば、太郎迫式でははっきりと捕らえられていなかった様相である。

第４点は、Ｅ調査区出土深鉢85、123などに見られるような小型深鉢で器形的には三万田式のＡ－２

類の小型深鉢に近いものが出土したことである。胴部上半部に見られる文様は平行沈線文のみであり、磨消縄文文様は見られない。平行沈線文は周囲を数分割する位置で２本の沈線がつながれ、それが対面し、「X」文状になっている。このように文様的には太郎迫式、器形的には三万田式という様相を見せている。

第５点は、縄文時代３号住居跡内置鉢、およびＣ調査区出土深鉢56などに見られるＡ－２類の深鉢が出土していることである。これらは三万田式のＡ－２類の小型深鉢とは大きさにおいて明確に分離できるが、頸部が相対的に短くなる点においては共通している。いずれも無文であり、どの型式に含まれるかは断定できないが、器形的には明らかに三万田式に近い。

第２点および第３点は太郎迫式の器種構成の追加、または太郎迫式の編年的な細分という観点で、第４点、第５点は太郎迫式の新たな様相というよりは、三万田式とのつながりという観点での問題点として指摘しておきたい。すなわち、水ノ江和同氏も指摘したように（文献34）太郎迫式と三万田式との型式内容における隔たりを埋める資料として評価できる可能性がある。

⑵　ワクド石遺跡における三万田式の様相

三万田式土器はＣ調査区東半部、Ｅ調査区を中心に出土しており、ワクド石遺跡の土器群の中ではまとまってみられる型式である。これらの土器群のなかで目立つのはＡ－２類の小型深鉢とＢ－１類の浅鉢である。目立つというのは、小型深鉢のほとんどの例が胴部上半部に細線羽状文を施すからであり、浅鉢ではこの類が量的にかなり多いためであろう。

この目立つ両者に見られる細線羽状文は沈線と沈線との間に描かれることが基本となっており、綾杉状の細線羽状文は基本的に見られない。ただ、第47・48図の器形分類図に示したような深鉢や注口土器には見られるが次型式の鳥井原式のように長く、細いものではない。

この期と断定できる深鉢の資料は少ない。しかし、それは少ないのではなく、おそらく、破片が多いため、文様のない資料に関しては分類が困難になるためであろう。すなわち、この期の深鉢は太郎迫式のように明確な文様帯がなくなり、無文の深鉢が主流を占めるものと考えられる。なお、この期に現れる平口縁で幅広の口縁部に３～４本の平行沈線文を施すＡ－４類の資料は破片から見るかぎり少ないといえる。ただ、Ｃ調査区出土深鉢46、123などのようにやや外湾する口縁部を持ち、細線羽状文を施すものが少ないが、確認できる。

また、注口土器や高杯形土器は三万田式には確実に伴っており、太郎迫式にはない様相である。

⑶　ワクド石遺跡における鳥井原式の様相

鳥井原式土器はワクド石遺跡では量的にはそれほど多くはないが、そのほとんどはＣ調査区東半部に集中しており、他の調査区では少ない。この土器群の中では浅鉢形土器Ｂ－２類がそのほとんどを占めており、他の器種は少ない。特にＡ－４類の深鉢形土器はこの期と断定できるものは少ない。ただ、破片がほとんどであるがＢ－１類と思われる深鉢形土器は少なからず見られ、深鉢の主流を占めるものと考えられる。

鳥井原式の土器の特徴としては先述したように、凹線文と細くて尾長の繊細な細線羽状文である。この繊細な細線羽状文が描かれた土器をみるとほとんど全てが極めて丁寧な磨きが施されており、他と対照的である。また、器種も浅鉢の一部および注口土器などの特定の土器に対して用いられているようである。

⑷　ワクド石遺跡における御領式の様相

御領式土器もワクド石遺跡では量的には少なく、Ｃ調査区東半部、Ｄ調査区、Ｅ調査区に見られ、特に集中する部分はないようだ。

縄文時代６号住居跡で出土した置鉢は御領式のＢ－１類の深鉢であることから、この期に集落が存在するのは間違いないようだ。

⑸　ワクド石遺跡における天城式の様相

天城式土器はＣ調査区東半部、Ｅ調査区を中心に

まとまって出土した。ワクド石遺跡で、太郎迫式、三万田式とともに中心となる土器型式である。

島津義昭氏による型式設定（文献30）が御領式土器に類似する型式としてとらえられたことから、御領式土器との分離が困難な部分もあるが、深鉢形土器口縁部の文様や浅鉢形土器の沈線の数などで明らかに御領式土器とは異なっており、ワクド石遺跡においても認められた。なお、類例は少ないのであるがＣ調査区出土浅鉢123、219などのように口径に対して器高の割合が高いものがあるようでＥ類の中でｂ類として分離している。この類は次型式の古閑式で顕著になるようだ。

また、ワクド石遺跡での天城式の深鉢形土器の器面観察で特徴的であったのは、磨き技法の変質である。御領式まで磨き技法の痕跡として器面に磨きの際の筋が見られたのであるが、天城式土器にはそれが見られない。しかも胴部下半は粗い削りがそのまま残されている。浅鉢形土器との精粗の差がこの期から明確になるとする先学の観察を裏付ける。

この深鉢形土器はワクド石遺跡では埋鉢として利用されている。ワクド石遺跡の埋鉢は天城式の深鉢形土器のみである。もし、埋鉢が一つの埋葬形態とすれば、ワクド石遺跡のように各型式が連続する遺跡の中での出来事として、その初現を知る上で貴重であろう。

⑹　ワクド石遺跡における古閑式の様相

ワクド石遺跡では古閑式の土器は他の型式に比べ、かなり少ない。その中でもＤ調査区が中心である。

古閑式は、熊本県古閑遺跡から出土した土器群を一括して呼んでおり、従来から上の原式や黒川式とされたものを含んでいることを否定できない。そのため、図示されたものをみるとかなり型式差のあるものが含まれているようだ。深鉢形土器ではＡ－４類としたものの中に、口縁部が頸部から屈折して立ち上がるものと、屈折せずに単に折れ曲がり外反するものの二者があり、また、浅鉢形土器では、Ｅ－３類、Ｅ－４－ａ類、同ｂ類、Ｆ－１－ｂ類と型式的にかなり隔たりのあるものがある。ワクド石遺跡では深鉢形土器では屈折して立ち上がるもの、浅鉢形土器では全てが出土している。これらは島津氏も認めているように、少なくとも２つの型式に細分できると思われる。浅鉢形土器は、頸部から口縁部にかけての特徴から、Ｅ－３類とＦ－１－ｂ類、Ｅ－４－ａ類と同ｂ類の二つに分離でき、編年的には、全く根拠は示せないが型式的には前者が古い。
そして、屈折する深鉢形土器がより古い方に伴う可能性が強い。ここでは上記の形式的に古いと考えられる一群を古閑式とし、新しい一群を黒川式としておく。

⑺　ワクド石遺跡における黒川式の様相

黒川式の土器はＤ調査区に集中しており、その分布範囲は限定されている。ただ、Ｄ調査区は先述したように整地層が広がっていることから、この黒川式の正確な分布範囲は言及できない状況にある。

さて、その土器群は従来から黒川式とされていた深鉢形土器Ａ－４類の中で、口縁部が頸部から屈折して立ち上がるものではなく、屈折せずに単に折れ曲がり外反するもの、浅鉢形土器ではＥ－４－ａ類、同ｂ類がある。ワクド石遺跡では粗い条痕文や組織痕でおおわれたＢ－１、Ｃ－１類の深鉢形土器や一見すると短頸壺を思わせるＥ－５類の浅鉢形土器、そしておそらくＣ－１類と考えられるもので口縁部近くに１～２条の突帯をめぐらした深鉢形土器のまとまった出現が認められる。この中でＢ－１、Ｃ－１類の深鉢形土器は従来から知られていたものであるが、Ｅ－５類の浅鉢形土器や口縁部近くに１～２条の刻み目を付けない突帯をめぐらした深鉢形土器は土器型式の明らかな変化を印象づけるものであり、この期の特徴としてあげられるだろう。ただ、この特徴を黒川式としないならば、新たな型式を設定しなければならない。

3　石器群の平面的分布とその時期

ここで土器から目を転じて縄文時代後期、晩期の石器に注目してみたい。まず1000点以上出土している打製石斧は土器型式からみると三万田式から黒川式が目立って分布するＣ調査区東半部、Ｄ調査区、

E調査区などにより多く集中する。このことは三万田式以降に打製石斧の需要が増加することを傍証することになると考えられる。

このような背景のもとで、打製石斧の内容を見てみると、そのなかにより収穫具としての機能を思わせるⅥ類からⅧ類の緑色片岩を用いた薄身の石器が量的にまとまって見られることに気づく。

この種の石器が三万田式以降に他の打製石斧の増加と伴に新たに登場するのか、それともそれ以前から連続してみられるのかは他遺跡の検討を経なければならないが、ワクド石遺跡で太郎迫式を中心に出土するA調査区では少なく、その可能性は否定できない。

磨製石斧は平面的分布を問題にするには数が少なく、また、所属時期も明確でない。

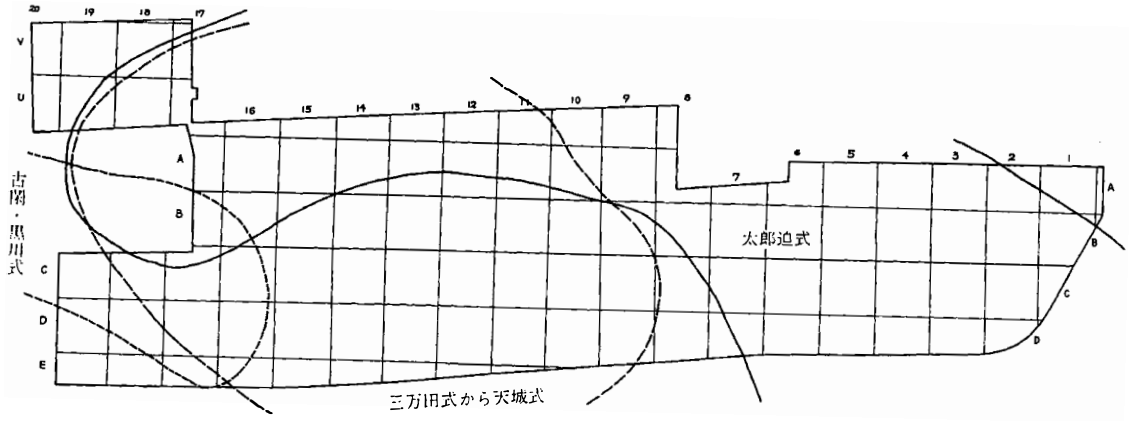
次に、クサビ形石器、石鏃を見てみたい。クサビ形石器の分布は、見事なほど縄文時代早期の土器分布と重なっており、その所属時期をうかがい知ることができる。ただ、クサビ形石器は一定の時期に限定できる石器ではないことから、今後形式的に分離できる可能性がある。特に、腰岳産の黒曜石を素材とした小型のものは、後述するように使用痕のある剥片と同じ素材であることからその時期を限定できる可能性がある。

石鏃はその形状から所属時期を限定することはなかなか難しい。ただ、ワクド石遺跡の土器から見た時期は、縄文時代早期と後期～晩期にその中心があることから推定すれば、そのどちらかに所属するものがほとんどということになる。そのような観点から石鏃の分布を見てみると、三万田式以降の土器の分布の中心となるC調査区東半部に石鏃の分布が希薄なことがはっきりしていることから、三万田式以降の土器型式には石鏃は量的にまとまっては伴わないといえる。このことは熊本県の後期から晩期にかけての他の遺跡も同様であるようだ。特に、天城遺跡、古閑遺跡ではその土器量の多さに比べ石鏃は数点という様相を示している。すなわち、ワクド石遺跡の石鏃は、そのほとんどが縄文時代早期に属すると考えられ、また一部が太郎迫式に伴っているものと思われる。

クサビ形石器や石鏃と対照的な石器が使用痕のある剥片である。三万田式以降の土器の分布の中心となるC調査区東半部とE調査区にその分布の中心があり、しかも、割りと集中する。このことは、この石器が出現し、盛んに使用される時期をある程度知ることができる。

この他の石器については量的に少なく、しかも分析する時間的余裕がないため、今後の課題としておく。

最後に、石材の問題に触れておきたい。打製石斧の有名な原産地である熊本県西合志町所在の二子山の石材である玄武岩質安山岩を使用したものはワクド石遺跡で量的にまとまっている。ただ、それ以外の阿蘇周辺に原産地を求めることができると思われる角閃石安山岩や中央構造線周辺か変成地帯にその原産地を求めることができると思われる緑色片岩もまとまってみられる。また、その外にも数種の石材が認められる。このことは打製石斧に関してはその



第182図　各土器型式の分布範囲

素材を１ヵ所の原産地に依存するのではなく、集落内の人間の活動圏やその集落が属する集団の交易圏のなかで複数の原産地から石材を入手していたことが窺われる。

クサビ形石器、石鏃、使用痕のある剝片などの石材には腰岳産黒曜石、姫島産黒曜石、安山岩を中心として用いられている。このなかで腰岳産黒曜石や姫島産黒曜石は、同じ九州島とはいってもかなりの遠距離となる。この点は先述した打製石斧の石材供給のあり方とはかなり異なっている。

石材は原石として持ち込まれているが、遺跡から出土したものは小さく、拳大を越えるものはない。

注目されるのは三万田式以降に出現すると思われる使用痕のある剝片である。腰岳産黒曜石を素材としている。製品から見るかぎり、素材となる剝片はおそらく旧石器時代の石刃に勝とも劣らぬ縦長剝片であることが推定されるが、遺跡内には剝片をとったと考えられる石核は皆無である。この石器には石鏃とは違い、素材の段階で一定の規格に仕上げておく必要性が窺われる。この観点では、遺跡内に残された石核はそれらを取り出す技術からは程遠いものである。すなわち、これらの石器の素材には高度の技術的基盤が必要とされるため原石としてではなく、剝片として遺跡に持ち込まれたと考えるほうが妥当である。このような消費地における状況は県内の他の遺跡でも共通している。

この石器の素材の原産地である長崎県腰岳周辺の鈴桶遺跡で抽出された鈴桶技法と呼ばれる縦長剝片剝離法は消費地のこの種の石器の素材生産方法としては最も近く、今後、鈴桶技法と媒介とした原産地周辺での専業体制の解明が待たれる。

4　遺構・遺物の分布からみた縄文時代後期～晩期の集落の姿

ここではワクド石遺跡で発見された遺構・遺物から得られた情報を最大限用いて集落としての姿をとらえたい。ただ、第Ⅳ章でも触れたように遺構・遺物の残りが悪く、大幅な推論をまじえることをお許し願いたい。

(1)　検出された遺構の時期

ワクド石遺跡で住居跡として検出されたのは10棟である。その中で時期が推察できるのは、１号住、３号住、６号住、10号住である。

１号住は床面から出土した深鉢口縁部細片から判断するしかない。それらを観察すると、太郎迫式と思われるものと御領式～天城式と思われるものが混在している。型式的には離れているため、おそらくどちらかが混入したものと考えられる。ここではより新しい時期と考えられる御領式～天城式の住居跡としておく。なお、石囲炉は県内では三万田式の土器を出土した三万田東原遺跡や鳥井原式以降の土器を出土する上南部遺跡において検出されており、石囲炉の有無では時期の判定にはならないようだ。

３号住は住居跡南側に置かれた深鉢と炉跡内から出土した深鉢細片が時期の決め手となる。住居南側の深鉢はその器形から三万田式に含めておきたい。炉跡出土のものは御領式に近い。ここではしっかりした出土状態をみせる住居南側の深鉢資料から、三万田式の時期としておく。

６号住は住居南側と考えられる位置に置かれた深鉢形土器はその器形から御領式の範疇に入る。

10号住では出土土器が豊富であり、いずれも太郎迫式の土器である。

その他の住居跡では直接その住居と関係すると思われる土器が出土していないため、時期の判断はできない。ただ、周辺から出土する土器からおおまかにはとらえられる。４・５号住はＥ調査区にある。Ｅ調査区から出土する土器型式は太郎迫式～天城式の土器が中心であることから、住居跡もその時期幅の中でとらえられる。

７・８・９号住の周辺はかなり削平されており、土器はほとんどみられなかった。ただ、これらの住居跡があるＡ調査区は、土器型式からみるとほとんどが太郎迫式であることから、住居跡もその時期である可能性が強い。

次に埋鉢であるが、埋鉢に関しては３基とも天城式の典型といってよい。

⑵　遺跡における土器型式の広がり

１でも若干触れたが、遺跡における集落の変遷を知るためにやや詳しく土器型式の広がりを説明したい。

【太郎迫式】

Ａ調査区ではほぼ単一状態で出土しており、資料的にもまとまっている。そしてＡ調査区の広がりが延びるように、Ｂ調査区西側から北側にかけての広がりを見せている。Ｃ調査区では、Ｂ・Ｃ・Ｄ-11・12区でまとまって出土する傾向にある。また、分布は希薄ではあるもののＣ調査区北側にも広がっているようだ。Ｅ調査区でも多量に出土しているが、先述したように、その北側の整地層から出土しているものがほとんどであり、本来はＥ調査区の東側を中心に分布していたと予想される。

【三万田、鳥井原、御領、天城式】

これらの４つの型式は、分布がほぼ重なっている。ただ、そのなかでの各型式の疎密は存在するが、それらを抽出することは現段階ではできない。

４つの型式のもっとも集中する地区はＣ調査区東半部である。また、Ｅ調査区からもまとまって出土していることから、Ｅ調査区東側から南側にも広がっていることが予想される。そして、分布は希薄であるもののＣ調査区東半部からＢ調査区西半部にもその広がりが認められる。

【古閑、黒川式】

これらの２つの型式は、分布がほぼ重なっており、しかもそれほど濃密な分布は見せない。その中心はＤ調査区であり、Ｃ調査区東半部にも若干の分布を見せる。

以上を大胆にまとめると**第182図**のような各型式の広がりを推定することができる。

⑶　柱穴群の広がり

各調査区の柱穴群の詳細についてはすでに述べたとおりである。ここでは調査区全域を見通した上での柱穴群の様子を見てみる。

第12図からわかるように柱穴はかなりの数にのぼっており、住居跡が多数存在していたことが予想される。ただ、この分布状態から集落形態を推定するには、あまりに柱穴が多いため、かえってそれが障壁となっている。

つまり、土器型式からみると、量的にまとまった太郎迫式から天城式まで連続しており、集落形態を継承することなく、各期において変化していったとしたら、**第182図**のような状態になる可能性が強い。

以上、⑴～⑶までの理解から、ワクド石遺跡における縄文時代後期～晩期にかけての集落の姿を復元してみたい。

まず、今回の調査区の地形上の特徴から触れてみたい。今回の調査区は遺跡を含めた周辺地形の中でもっとも高い部分にあたっている。そして、調査区と未調査区との境に沿って南側と西側には段差が存在する。特に南側の段差はきつい。西側の段差はＥ調査区西側からＤ調査区を南北方向で斜めに横切るように走っている。こちらの段差は南側ほどではないものの、地形上の変化点にはなりえる。

このような微地形とはいえ、地形上の特徴は集落が存在した場合、そのはずれはこのような段差で区切られる可能性が高いものと考えられる。

次にこのような地形的な観点も考慮に入れて、各土器型式での集落の範囲およびその変遷を考えたい。

太郎迫式期の集落の範囲は**第182図**の太郎迫式土器の分布範囲とその南側を含めた半円形の形態を見せるものと考えられる。南側には土器の分布は希薄であるが広場としての役割があるだろう。そして、土器の分布範囲の中にこの期の住居跡が密にあったものと想定される。７・８・９号住および10号住もこの中の一つであろう。ただ、土偶や玉類はこの範囲と一致するものはすくなく、太郎迫式期には土偶や玉類との関連は薄かった可能性がある。

三万田式から天城式期の集落の範囲は４つの土器型式の広がりとほぼ一致するようだ。この期と考えられる１号住、３号住、６号住もこの範囲の中に存在する。ただ、土器の分布範囲は４つの土器型式の広がりであり、個々の時期の分布までは明らかにできなかったため、どの様な違いがあるのかは不明である。そのなかで、Ｃ調査区東半部はいずれの時期にも中心であったらしく、無数の柱穴の出土と多量の遺物の出土が見られた。

また、土偶や玉類の分布もこの三万田式から天城式の土器分布範囲と一致するものが多く、これらの土器型式の時期の範囲で使用された可能性が強い。

そして、天城式期で注目されるのが、天城式の埋鉢の分布である。出土した3基は4つの土器型式の広がりの西側の端に沿って分布している。これは少なくとも、集落の中ではなく、集落とは別の場所に埋めるという意図を感じる。

古閑、天城式の土器はそれほどまとまった量が出土したわけではなく、これらの時期の集落を想定することは困難である。ただ、古閑、天城式が集中するD調査区が地形的な変化点になっており、その東側の段上の面からの出土が極めて少ないことから判断すると、より西側にその分布の範囲が推定される。

なお、焼粘土塊は時期の決め手がなく、いずれの時期に伴うか不明である。ただ、どの時期のあてはめても、集落想定範囲のはずれに分布している。これは偶然の結果なのか、そうではなく意味を持つものなのか現段階では不明である。今後の調査例を待ちたい。

このように各期の集落の範囲やその特徴を見ていくと、東から西へ集落の中心が移行していることがわかる。そのなかで、三万田式から天城式までの4型式がほぼ同一地域で継続していることは注目に値する。このような状況が他の遺跡でも認められるとすれば、何らかの解釈が必要となってこよう。

5　ヒスイ製勾玉の意味するところと遺跡の性格

今回、ワクド石遺跡から採集された勾玉及び調査によって出土した玉類の石材の産地同定を藁科哲男氏にお願いした。その結果、勾玉が富山県糸魚川産の翡翠であることが判明した。また、出土した玉類の石材のうち緑色をした翡翠類似の石材で従来から長崎産とされてきたものが分析の結果、長崎産ではないことが判明し、鹿児島産の可能性があることがわかった。そして、滑石製と考えていた石材は蛇紋岩を産出する岩脈と同一の産地から得られたものであろうとのことであった。現在、蛇紋岩を産出する地点は県南の中央構造線沿いの変成地帯である。

このような遠隔地からの玉類原材料（勾玉は製品として持ち込まれた可能性がある。）の入手はいったいどのような意味を持つのであろうか。同じく、遠隔地から原材料を入手している腰岳産黒曜石製使用痕ある剝片は直接的に生産、加工など集落構成員の活動のなかで消費されるものであり、生活に必要不可欠なものとして、言い換えれば日常的な交易品として遠隔地のものでも入手できる状況にあったと考えられる。

玉類はどうであろうか。玉類は当時においては装身具として身につける者の指導者としての役割を象徴するものとして考えられる。このような性格を持つものが日常的な交易品として取引されたとは考えにくい。すでに象徴として集団の構成員から認められた玉類は指導者から指導者へ代々受け継がれるものであろうし、新たに作られる場合、その原材料はその集団が属するより大きな集団のなかに、その入手経路をもっていると考えられるのである。

この観点からすると、玉類の原材料が鹿児島県ではという推察は今後大きな意味を持つものと考えられる。

それでは、富山県糸魚川産の翡翠製勾玉の存在をどう理解したらよいのであろうか。これを考える際の参考資料として、大津町の南に接する西原村の桑鶴遺跡から出土した翡翠製の大珠があげられる。この資料は藁科氏の分析によって糸魚川産であることが判明している。この遺跡は縄文時代中期の土器を出土するという。この中期という時期は熊本県岡田遺跡（文献15）で明確になったように九州島に瀬戸内、近畿地方からの土器文化の影響が現れる時期であり、その後、北方からの影響は磨消縄文技法の九州島への伝播として語られることになる。

おそらく桑鶴遺跡出土の大珠もこの文化の流れのなかで北方からのつながりのある集団を通じてこの地にもたらされたのではなかろうか。そして、ワクド石遺跡の翡翠製の勾玉もこの時期に入り、この地域において受け継がれてきたものと考えたい。

さて、最後にワクド石遺跡の性格の問題に触れてみたい。その際、ワクド石遺跡のどの時期をもって

代表させるかが問題となるが、ここでは今回、多量で多様な遺物が含まれていた三万田式期から天城式期の集落をもって言及したい。この期には多量の土器とともに、打製石斧を中心とした石器類、玉類、土偶類、それに埋鉢などが伴っていた。また、焼粘土塊もこの時期の可能性がある。このように多様な遺物をもつ集落を大遺跡、中心的集落、母村と呼ぶ研究者が多い（文献35など）。

宮内克己氏は熊本地方の縄文時代後・晩期遺跡の分布をみる際、火山灰台地上の遺跡群を菊池川、坪井・井芹川、白川・加勢川、浜戸川の４つの流域に分け、Ⅰ群～Ⅳ群とした。そして、ワクド石遺跡・三万田東原遺跡（Ⅰ群）、太郎迫遺跡・四方寄遺跡（Ⅱ群）、上南部遺跡・上の原遺跡（Ⅲ群）、御領貝塚（Ⅳ群）をそれぞれの母村とした。

この遺跡群のとらえ方は、母村という概念の明示はないものの、火山灰台地上の遺跡群をその中心と考えること、そして、火山灰台地を刻む河川流域を単位と考えることにおいて同意できる。

ただ、現在、いわゆる母村と考えられる遺跡はそれぞれの群のなかで増加している。たとえばⅠ群では天城遺跡、大久保遺跡、Ⅲ群では古閑遺跡などがあげられる。さらに最近では球磨川流域でも中堂遺跡などを中心とした遺跡群が知られるようになってきている。

いずれにしても、ワクド石遺跡は一つの遺跡群のなかでも拠点集落と考えられ、玉類や土偶の製作、配布、使用などを通じて散在する集落を精神的に結んだり、各集落の人々が寄り集まることによって経済活動が行われたりする集落であったと考えられる。

6　籾痕ある土器の時期とプラントオパール分析

第Ⅰ章でも述べられたように、川上氏による採集当時はこの土器を御領式としてとらえている。その後土器の編年研究が進み、『新熊本の歴史』では黒川式として紹介されている。

今回、あらためて実測図を作成した結果、今回の土器分類のＥ－４－ａ類に近い器形（山形口縁の可能性がある）をしているようだ（**第１図**）。先述したようにこの類は黒川式としたものである。ただ、ワクド石遺跡においては古閑式、黒川式の土器はそれほど出土してはおらず、この籾痕ある土器を含む土器群の特色を明らかにはできなかった。今後の大事な課題となろう。幸い、古閑式、黒川式の土器が広がっていると思われる今回の調査区西側は遺跡として広大な面積が残されており、学術調査がなされ、この課題が解決されることを望みたい。

籾痕そのものの分析は、今回できなかったが、『新熊本の歴史』に詳しい写真と説明があり、ジャポニカの陸稲と推測されている。籾痕であることに疑いはないであろう。

ここでは古環境研究所の杉山氏のプラントオパール分析から推測された当時の環境について触れたい。縄文時代１号住居跡の炉跡内焼土中からイネのプラントオパールが検出されたことは先に述べられたとおりである。調査者としては積極的に評価したいところであるが、資料採取地点が恣意的になった点や分析値がやや不安定な状況である点からイネのプラントオパールが検出されたことをもってよしとしたい。

それよりも杉山氏が指摘した遺跡周辺の植生の分析結果は重要である。おそらく、この植生は耕作土直下の黒色土（クロボク）層の主要な植生と考えられるが、分析された植生から見るかぎり、上記の陸稲を育成するためにはかなり良好な条件と思われる。この黒色土は現在は阿蘇外輪山の近くでしか確認できないが、当時は火山灰台地いったいに堆積していたものと考えられる。今後、数多くの調査地点での分析結果からより詳細な植生復原が行われることが望まれる。

7　古墳時代集落と奈良時代集落について

ワクド石遺跡では縄文時代の遺構・遺物とともに古墳時代集落と奈良時代の遺構・遺物がまとまって検出されている。特に古墳時代の住居跡群は数量的に多く、しかも重なりあっておらず、短期間に営ま

れた様子が窺われる。焼失住居がほとんどであることから集落全域が火災にあった可能性が指摘できるところである。それにしても、その後、当地に集落を継続させなかった理由は何であったのだろう。

その後、6世紀後半の土器が溝（ＳＸ01）から出土していることからみると何らかの集団の痕跡が認められてしかるべきであるが、遺構としては確認できなかった。

そして、奈良時代でほぼおさまると思われるカマド付きの住居跡や掘立柱建物をもつ集落が出現する。この集落は溝（ＳＸ01）によって囲まれているようだ。この期には通常の集落は河川流域の沖積面に位置していると思われるので、違和感を覚える。いわゆる官衙的性格をもつものとも考えられる。

この溝遺構に沿って走るのが道路遺構である。その造営年代は不明であるが、溝の掘削時と同時期である可能性も残しておきたい。なお、この道路は出土遺物から中世の間使用されたようである。2基の鍛冶炉と思われる遺構も中世の時期に営まれた可能性が強い。

いずれにしても、古墳時代以降の以降・遺物に関する分析は、時間がなく表面をなぞるものになってしまった。今後の課題とさせていただきたい。

主要参考文献一覧

1）松本達郎・野田光雄・宮久三千年　『日本地方地質誌　九州地方』　朝倉書店
2）古川博恭　『九州・沖縄の地下水』　九州大学出版会
3）『菊池・大津地域土地分類基本調査　菊池』　熊本県（土地利用対策課）
4）大津町史編纂委員会編纂室　『大津町史』　大津町
5）旭志村史編纂委員会編纂室　『旭志村史』　旭志村
6）鎌木義昌編　『日本の考古学Ⅱ　縄文時代』　河出書房
7）「新・熊本の歴史」編集委員会　『新・熊本の歴史１　古代（上）』　熊本日日新聞社
8）小畑弘巳「湯舟原遺跡」『肥後考古』５号　肥後考古学会
9）古森政次「熊本県下新発見の旧石器時代遺跡について」『旧石器考古学』24　旧石器文化談話会
10）中後迫遺跡調査団編　『中後迫遺跡調査報告』　九州電力株式会社
11）緒方　勉　『瀬田裏遺跡』　大津町教育委員会
12）日向遺跡調査団編　『日向遺跡調査報告』　九州電力株式会社
13）木崎康弘　『大丸・藤ノ迫遺跡』　熊本県教育委員会
14）江本　直ほか　『曽畑』　熊本県教育委員会
　水ノ江和同　「中・南九州の曽畑式土器」　『肥後考古』７号　肥後考古学会
15）江本　直　『岡田』　熊本県教育委員会
16）西田道世ほか　『黒橋』　熊本県教育委員会
17）木崎康弘　『六地蔵遺跡Ⅰ』　熊本県教育委員会
18）河北　毅ほか　『伊坂上原遺跡・石仏遺跡』　熊本県教育委員会
19）賀川光夫、島津義昭ほか　『古保山・古閑・天城』　熊本県教育委員会
20）緒方　勉ほか　『三万田東原遺跡』　泗水町教育委員会
21）富田紘一　「太郎迫遺跡の縄文土器(1)」『肥後考古』４号　肥後考古学会
22）富田紘一　「太郎迫遺跡の縄文土器(2)」『肥後考古』６号　肥後考古学会
23）和田好史　『中堂遺跡』　人吉市教育委員会
24）富田紘一　『上南部遺跡発掘調査報告書』　熊本市教育委員会
25）富田紘一　『鳥井原遺跡発掘調査報告書』　熊本市教育委員会
26）丸山伸二・濱田彰久　『大原天子遺跡』　熊本県教育委員会
27）富田紘一　『戸坂遺跡発掘調査報告書』　熊本市教育委員会
28）隈　昭志・三島　格・井上兼利　『二子山石器製作址』　西合志町資料刊行会
29）富田紘一　「三万田式土器」『縄文文化の研究』　雄山閣
30）島津義昭・山崎純男「九州の土器」『縄文文化の研究』　雄山閣
31）島津義昭　「黒色磨研土器様式」　『縄文土器大観』　小学館
32）松永幸男　「磨消縄文土器様式」　『縄文土器大観』　小学館
33）水ノ江和同　「九州の縁帯文土器」　『古文化談叢』　九州古文化研究会
34）水ノ江和同　「松丸遺跡（Ｄ地区）出土土器の位置づけ」　『九州考古学』　九州考古学会
35）宮内克己　「九州縄文時代土偶の研究」　『九州考古学』　九州考古学会
36）上野辰男・富田紘一『上野辰男蒐集考古資料図録』第一集「縄文時代特殊遺物」編 肥後上代文化研究会
37）野田拓治　『上の原遺跡Ⅲ』　熊本県教育委員会
38）鶴嶋俊彦ほか　『梅の木遺跡』　熊本県教育委員会
39）松本健郎　『生産遺跡基本調査報告』　熊本県教育委員会
40）野田拓治　『塚原』　熊本県教育委員会
41）網田龍生　『大江遺跡群Ⅱ』　熊本市教育委員会
42）川上勇輝　「米の圧痕をもつ縄文末期の土器」　『熊本史学』　14号
43）清田純一　肥後考古学会 第182回例会 発表資料

第2表　菊池川流域遺跡地名表

縄―縄文（早―早期　前―前期　中―中期　後―後期　晩―晩期）
弥―弥生　古―古墳　奈―奈良　平―平安　中―中世

番号	遺跡名	所在地		時代	備考
1	ワクド石遺跡	菊池郡大津町	杉水	縄(早・前・中・後・晩)弥・古	籾跡ある御領式土器
2	弥護山無動寺跡	〃	真木	平	平安前期創建の説　粘板岩円面硯片出土
3	塔の本遺跡	〃	杉水	縄(早)	縄文期　押型文土器
4	尾足原遺跡	〃	小林	縄(後)	縄文・弥生期　御領式・野辺田式土器
5	今村遺跡	〃	杉水	縄(後)	西平式・野辺田式土器
6	カメキュウラ遺跡	菊池郡旭志村	尾足	弥	野辺田式土器
7	尾鶴遺跡	菊池郡大津町	杉水	縄(晩)	縄文晩期　土師器
8	牟田原遺跡	〃	矢護川	縄(早)・弥	縄文早期　押型文・条痕文土器　黒ノ目玉石片
9	御領原遺跡	〃	〃	縄(後・晩)・弥	縄文後期・西平式・御領式・野辺田式土器
10	馬糞塚古墳群	〃	〃	古	小円墳教墓　人骨
11	七野尾遺跡	〃	七野尾	縄(早・中・後・晩)・弥・古	縄文早・中・後晩・弥生期　土師器・須恵器　石器
12	真木西津留(祝屋敷)遺跡	〃	真木	縄・古	銅鉾2本(中細)(国立博物館買上) 野辺田式土器供伴
13	立石遺跡	〃	矢護川	縄(後)・弥	積石塚6　石器
14	馬糞塚遺跡	〃	〃	縄(早・後)	押型文・御領式土器　石槍　鉄滓　住居跡
15	一尾刎2地点	〃	〃	古(後)	
16	向原遺跡	〃	真木	縄(前)・弥	石刀　野辺田式土器・土師器・須恵器
17	杉水上ノ原矢鉾遺跡	〃	杉水	縄(後)・弥	土師器・須恵器　石器
18	ナギナタ遺跡	〃	平川	縄(後)・古	条痕文・御領式・野辺田式土器
19	猿渡六地蔵	〃	〃	中	
20	一尾刎1地点	〃	〃	縄	
21	水ノ山遺跡	〃	矢護川	縄(早・後)・弥・古	支石墓　押型文・御領式・黒髪式・野辺田式土器 磨製石斧
22	真木古墳	〃	真木	古	円墳
23	合志一族墓	〃	〃	中	
24	中後迫遺跡	〃	〃	縄(早)	押型文・塞の神式土器
25	日向遺跡	〃	〃	弥	弥生中・後期　土器片
26	南出口(大津産業高実習地)遺跡	〃	室	弥	弥生式土器片(細)
27	中町横穴群	〃	大津	古	基数不明　形跡を留める程度
28	西弥護免遺跡	〃	〃	弥・古	弥生～古墳期
29	後迫横穴群	〃	〃	古	コの字型床・奥床を備える
30	大松山遺跡	〃	〃	弥	銅鉾2本出土(中広)
31	西獄遺跡	〃	〃	弥・古	野辺田式土器包含　台付壺出土
32	瀬田雨留尾遺跡	〃	〃	縄・弥・古	縄文・弥生・古墳期　寺跡(屋敷跡)
33	瀬田裏遺跡	〃	〃	縄(早・前)・古	縄文・古墳期
34	高尾野遺跡	〃	〃	弥・古	野辺田式土器包含
35	瀬田裏古墳群	〃	瀬田	古	3～4基(石室のみ)　卦土なし
36	大津高校グランド遺跡	〃	大津	縄(早)・古	縄文期　大石鏃・石槍　土師器片少数
37	岩坂遺跡	〃	岩坂	縄(早)	押型文土器包含
38	宝満鶴遺跡	〃	中島	弥	弥生期　挿目波状文
39	森遺跡	〃	森	縄(後)	御領式土器
40	岩坂横穴	〃	岩坂	古	須恵器
41	下町銅鉾出土地	〃	下町	弥	銅鉾
42	岩坂カンカン塔	〃	岩坂	中	
43	岩坂経塚	〃	〃	中	
44	台(うてな)古墳	菊池郡七城町	台	古	処女円墳
45	台遺跡	〃	〃	弥・古	野辺田式土器・土師器を包含する
46	瀬戸口横穴群	〃	瀬戸口	古	横穴十数基開口　軽石充満するものあり
47	水次一本松遺跡	〃	水次	縄(後・晩)	縄文後・晩期住居跡　御領式土器包含　勾玉
48	十連寺跡	〃	〃	中	奈良・平安期塔心礎　布目・有文多数

番号	遺跡名	所在地	時代	備考
49	水次遺跡	菊池郡七城町水次	古	野辺田式土器・土師器・須恵器　箱・船形石棺
50	山崎古墳	〃　山崎	古	箱式・船形・家形石棺　野辺田式土器
51	山崎遺跡	〃　〃	縄(後)	御領式土器　石器類包含
52	ヒジュウ谷横穴群	〃　岡田	古	
53	十連寺古墳	〃　水次	古	家形石棺
54	軽石坂横穴群	〃　岡田	古	
55	北上原古墳	〃　〃	古	円墳・船形石棺
56	岡田遺跡	〃　岡田	縄(前・中)	
57	神尾城(水次城)跡	〃　水次	中	七城の一つ　三次氏居城　三次城の別名あり
58	加恵城跡(正光寺跡)	〃　加恵	中	中世丘城　菊池18外城の一つ
59	新古閑遺跡	〃　新古閑	弥・古	野辺田式土器・土師器　磨製石斧
60	長明寺坂古墳群	〃　林原・亀尾	古	円墳3基
61	梶尾原遺跡	〃　清泉	縄(後)	縄文後期土器　石器出土
62	蛇塚古墳	〃　亀尾	古	前方後円墳　古墳の上に馬渡城あり
63	上鶴頭遺跡	〃　宇上鶴頭	平	官衛跡
64	亀尾原遺跡	〃　亀尾	縄(後)	西平式・御領式土器　石器
65	岩瀬チョウ塚古墳	〃　〃	古	小円墳　近くに円墳あり
66	岩瀬横穴群	〃　〃	古	横穴数基　須恵器一括
67	亀尾横穴	〃　〃	古	
68	長塚古墳	菊池郡泗水町南田島	古	土師器
69	宮田遺跡	〃　田島	古	土師器　磨製石斧
70	薄井遺跡	〃　〃	古	土師器　こしき等
71	岡遺跡	〃　〃	奈・平	礎石群　布目瓦
72	岡山小塚古墳	〃　〃	古	
73	田島廃寺跡	〃　〃	奈・平	土師器・須恵器
74	陣塚遺跡	〃　〃	平	蔵骨器　須恵器
75	高江出分塚山古墳	〃　豊水	古	家形石棺
76	高江出分遺跡	〃　〃	縄(後)	磨製石斧　こしき　土師器
77	久米若宮古墳	〃　〃	古	
78	安国寺遺跡	〃　〃	中	瓦器・青磁器
79	三万田東原遺跡	〃　亀尾	縄(後・晩)古・奈・平	縄文後晩期土器・注口土器・土師器　土偶　石器　飾玉
80	古閑原遺跡	〃　吉富	弥	須玖式・黒髪式土器　磨製石斧
81	富出分古墳	〃　〃	古	箱式石棺
82	牛畑遺跡	〃　〃	古・中	須恵器・土師器　青磁器
83	村吉古墳	〃　〃	古	石棺
84	村吉遺跡	〃　〃	平	蔵骨器・須恵器
85	今寺横穴群	〃　富納	古	横穴群
86	麦田遺跡	〃　豊水	古	土師器(野辺田式土器)
87	平町遺跡	〃　吉富	古・中	土師器・滑石釜
88	福本遺跡	〃　福本	弥	八幡北側　重弧文土器
89	西谷古墳	〃　〃	古	
90	南原古墳	〃　〃	古	箱式石棺
91	中林山遺跡	〃　〃	中	古塔碑群
92	藤巻遺跡	〃　永	弥	甕棺
93	福原遺跡	〃　〃	弥・古	野辺田式土器・土師器
94	鬼木製鉄跡	〃　〃	平	鉱滓
95	富納遺跡	〃　富納	弥	須玖式・黒髪式土器　磨製石斧
96	硯町横穴群	〃　住吉	古	須恵器
97	下峯遺跡	〃　〃	弥	石包丁　黒髪式・野辺田式土器
98	狐塚古墳	〃　〃	古	
99	備後塚古墳	〃　〃	古	
100	長塚古墳	〃　〃	古	

番号	遺跡名	所在地	時代	備考
101	城山遺跡	菊池郡泗水町住吉	平	蔵骨器
102	城山遺跡	〃　〃	縄(後)・平・中	土師・須恵・条痕文・西平・御領・野辺田式土器 青磁器
103	住吉日吉神社遺跡	〃　〃	奈・平・中	須恵器・土師器・滑石釜　円面鏡
104	南住吉古墳	〃　〃	古	石棺
105	南山王遺跡	〃　〃	縄	縄文期土器　石斧・石匙・石鏃
106	飛熊遺跡	〃　〃	中	経筒
107	平町横穴群	〃　〃	古	横穴群
108	南住吉遺跡	〃　〃	弥・古	遠賀川式・須玖式甕棺　野辺田式土器・土師器
109	中尾遺跡	菊池郡西合志町野々島	縄・弥・古	縄文・弥生・古墳期　土器片
110	黒松古墳群	〃　合生	古	墳丘墳4基1群
111	生坪塚山古墳	〃　〃	古	前方後円墳　長さ60cm　竪穴石室
112	生坪古墳	〃　〃	古	箱式石棺を容する円墳
113	生坪石立(こくりゅう)古墳	〃　〃	古	小型家形石棺　朱三角文　女人骨　櫛
114	八反田遺跡	〃　〃	弥	甕棺　壺　坩　磨製石斧
115	立割横穴群	〃　〃	古	横穴　数基から成る
116	小合志古墳	〃　〃	古	円墳　巨石横穴石室　副葬品多数
117	弘生原遺跡	〃　〃	弥・古	弥生期　野辺田式土器・須恵器・土師器
118	迫原ハヤマ古墳	〃　〃	古	円墳　箱式石棺　鉄鎌　文字ある土師器
119	江良遺跡	〃　〃	古	野辺田式・土師・須恵土器片ほか多数出土
120	迫原長塚(ちょうづか)古墳	〃　〃	古	箱式石棺
121	高木原遺跡	〃　〃	縄(後)・奈	広範囲 縄文後期より奈良時代に及ぶ 出土品大量
122	塚口横穴群	〃　〃	古	
123	八反原遺跡	〃　〃	古	
124	上生(うぶ)遺跡	〃　上生	弥	小児甕棺
125	城遺跡	〃　〃	弥・古	野辺田式土器　『日本書記』諸名の本拠
126	沖田遺跡	〃　野々島	縄(後)・古	丸木舟　御領式・野辺田式土器・土師器
127	北野甕棺遺跡	〃　上生	弥	
128	上原石棺墓	〃　〃	弥	
129	永田石棺	〃　野々島	古	
130	城甕棺群	〃　上生	弥	
131	野々島遺跡	〃　野々島	弥・古	畑地　弥生期　野辺田式土器・土師器
132	八反田遺跡	〃　〃	縄・弥	縄文・弥生期土器　中央小学校校庭
133	枇杷田遺跡	〃　〃	縄(後)・古	古式勾玉　御領式・野辺田式土器・須恵器等
134	二子山石器製作遺跡	〃　〃	縄(後)	
135	枇杷田遺跡	〃　〃	縄(早)	縄文早期
136	笹山遺跡	〃　御代志	縄	縄文期　条痕文土器　石匙出土
137	小合志原(おごうしばる)遺跡	〃　合生	縄(後)・平	縄文後期　土師器
138	辻久保遺跡	〃　〃	縄(後)	縄文後期
139	若原石棺遺跡	〃　野々島	古	
140	木原野遺跡	〃　〃	縄	縄文期　石鏃
141	宿の山(須屋)遺跡	〃　須屋	弥	弥生期　合口甕棺　土師器片一括
142	宿の山遺跡	〃　〃	弥	
143	向島遺跡	〃　〃	弥	
144	中林古墳	菊池郡合志町栄	古	円墳2基
145	中林遺跡	〃　〃	縄(後)	縄文期　御領式土器
146	中林西原遺跡	〃　〃	弥	弥生期　須玖式土器
147	後川辺(権現山)遺跡	〃　〃	弥・古	野辺田式土器
148	千経塚遺跡	〃　上庄	弥・平	弥生期　土師器・須恵器等
149	ヤンボシ塚遺跡	〃　栄	古	
150	野付(のつき)遺跡	〃　福原	縄(早)・弥	押型文・黒髪式土器　甕棺
151	陣の内遺跡	〃　幾久富	弥	須玖式・野辺田式土器　石包丁
152	宮の前遺跡	〃　上庄	弥	弥生期　須玖式・黒髪式土器・土師器

番号	遺跡名	所在地	時代	備考
153	小園遺跡	菊池郡合志町豊岡	縄(後)・弥	御領式・弥生式土器
154	木瀬遺跡	〃 上庄	弥	重弧文土器　石包丁
155	虚空蔵横穴	〃 〃	古	横穴
156	御手洗遺跡	〃 幾久富	縄(後)・平	縄文後期土器・御手洗式土器・土師器　石器
157	八久保遺跡	〃 竹迫	縄(中・後)	阿高式・御領式土器
158	郡山遺跡	〃 豊岡	平	蔵骨器
159	飯高山遺跡	〃 槍原	弥	弥生期
160	御領遺跡	〃 竹迫・福原	縄(後)	土偶　御領式土器
161	轟遺跡	〃 豊岡・福原	弥	黒髪式甕棺
162	小川遺跡	菊池郡旭志村辨利	縄(早)・弥	縄文・弥生期 押型文土器 甕棺 石斧・石鏃・石匙
163	松尾横穴群	〃 伊萩	古	約60穴　須恵器
164	土平横穴群	〃 辨利	古	
165	姫井遺跡	〃 〃	縄(中)	縄文期　阿高式土器
166	屋敷の上遺跡	〃 〃	縄(後)	御領式土器　磨製石斧・石鏃・有孔串玉
167	岩下横穴群	〃 〃	古	鉄鏃　刀子　環　土器
168	鶴ノ宮遺跡	〃 〃	古	土師器
169	孤塚遺跡	〃 麓	平	蔵骨器　鉄鏃
170	桜ケ水遺跡	〃 〃	縄(前)・弥・古	縄文・弥生・古墳期　曽畑式土器　石斧・石刃 槍　鉄刃
171	たばこ石遺跡	〃 〃	縄(後)・弥・古	縄文・弥生・古墳期 御領式・野辺田式土器・土師器
172	中尾遺跡	〃 辨利	縄(後)	縄文期　御領式土器
173	伏石遺跡	〃 麓	縄(中)	阿高式土器
174	伊坂上の原遺跡	〃 伊坂	縄(後)・弥	縄文・弥生期　御領式・野辺田式土器
175	ヒララ石遺跡	〃 川辺	縄(後)・弥	縄文・弥生期　摺消・縄文式土器　支石墓　石斧
176	四郎丸遺跡	〃 〃	縄(後)・弥	縄文・弥生期　御領式・野辺田式土器
177	高永遺跡	〃 新明	縄(後)・古	縄文・古墳期　御領式土器・須恵器
178	柏木遺跡	〃 川辺	縄(後)・弥	縄文・弥生期　摺消・縄文式・御領式土器
179	西原遺跡	〃 〃	縄(前・中)・古	縄文期　曽畑式・阿高式土器・須恵器
180	古官遺跡	〃 新明	縄(早)	縄文期　押型文土器
181	平山古墳	〃 麓	古	箱式石棺
182	北受遺跡	〃 〃	縄(早)・古	縄文・古墳期　押型文土器　箱式石棺
183	高柳遺跡	〃 〃	弥	弥生期　須玖式土器　甕棺
184	湯舟原遺跡	〃 〃	弥	弥生期　黒髪式石棺　須玖式土器
185	尾足原遺跡	〃 尾足	縄(後)・弥	縄文・弥生期　御領式・野辺田式土器
186	松ケ平遺跡	〃 新明	縄(後)	縄文期　御領式土器
187	五十町遺跡	〃 麓	縄(後)・古	縄文・古墳期　御領式・野辺田式土器　箱式石棺 石刃
188	横道石棺群	〃 〃	古	
189	南桜ケ水遺跡	〃 〃	縄(前・中)・弥	縄文・弥生・古墳期　曽畑式・阿高式土器 石斧・石刃・槍
190	面の平遺跡	〃 尾足	弥・平	弥生期　土師器　車路跡
191	車町遺跡	菊池市野間口	弥	低段丘　住居遺物　甕棺
192	南古閑遺跡	〃 西寺	弥	弥生期
193	西寺辻遺跡	〃 〃	弥・平	弥生期　住居跡　土師器包含
194	狐塚遺跡	〃 長田	古・平	土師器
195	水町遺跡	〃 西寺	古・平	土師器
196	木柑子横穴群	〃 木柑子	古	菊池川南岸　数十基　普通型　風化
197	木柑子フタツカ古墳	〃 〃	古	西向前方後円墳　石人立つ
198	大塚遺跡	〃 長田	弥・古	弥生後期土器・土師器
199	大塚古墳	〃 〃	古	前方後円墳　後円部金比羅社建つ
200	木柑子船形石棺	〃 木柑子	古	段丘　崖突出部に露出
201	東浦田平横穴	〃 〃	古	
202	西迫間横穴群	〃 西迫間	古	数基　現2基　出土品市指定

番号	遺跡名	所在地	時代	備考
203	丸山古墳	菊池市架沙尾	古	茶臼塚北谷をへだてた丘頭　三段になる
204	茶臼塚古墳	〃　〃	古	高塚西方丘陵端の破壊墳
205	高塚古墳	〃　〃	古	濠　円墳　横穴式　装飾文
206	玉禅寺遺跡	〃　玉禅寺	弥	銅鉾　野辺田式土器　石斧出土
207	城山古墳	〃　隈府	古	円墳状　大口露頭
208	隈府中学校校庭(北中)遺跡	〃　〃	弥	弥生期
209	北田遺跡	〃　〃	弥	弥生期
210	架沙尾遺跡	〃　架沙尾	弥	弥生期
211	立石遺跡	〃　隈府	弥	弥生期
212	神来遺跡	〃　野間口	古	石室一部残る　巨大な偏平石使用
213	車町遺跡	〃　〃	弥・平	弥生期　土師器　住居遺物　小児甕棺4基
214	堀切横穴群	〃　〃	古	
215	西村上遺跡	〃　架沙尾	縄	
216	西寺辻遺跡	〃　西寺	弥・平	弥生式土器片・土師器片散布
217	長田遺跡	〃　長田	弥	弥生期
218	外園遺跡	〃　〃	弥	弥生期　竪穴　石器・土器多数　貨泉出土
219	深川遺跡	〃　深川	縄(後)・古	条痕文・御領式・野辺田式土器・土師器出土
220	観音ノ本遺跡	〃　〃	弥	弥生期
221	深川古屋敷遺跡	〃　〃	弥	弥生期
222	赤星宮ノ前遺跡	〃　赤星	古	土師器
223	赤星ヤンボシ塚遺跡	〃　〃	古	横穴複式　同所に馬糞塚石棺復元
224	天城神社古墳	〃　〃	古	円墳
225	天城遺跡	〃　〃	縄(晩)・弥	縄文式・弥生式土器
226	天城池畑遺跡	〃　〃	縄	縄文期
227	北宮遺跡	〃　北宮	弥	弥生期
228	隈府北中学校校庭遺跡	〃　隈府	奈・平	須恵器・土師器・瓦出土　住居跡か
229	菊の池遺跡	〃　深川	弥	城跡全域　弥生期　土師器片包含
230	南園遺跡	〃　西寺	奈・平	布目瓦・土師器
231	長田狐塚遺跡	〃　長田	弥	黒髪式甕棺
232	赤星福土・水溜遺跡	〃　赤星	平	
233	医者どん坂遺跡	〃　出田	縄・弥	縄文・弥生期を含む
234	堂坂横穴群	〃　〃	古	22基　数基は一群の須恵器を出す
235	鬼石古墳	〃　〃	古	
236	亀の甲古墳	〃　〃	古	石棺あり　土師器多数出土
237	古池域跡古墳	〃　〃	古	横穴石室
238	万太郎(まだろう)遺跡	〃　赤星	縄	縄文期
239	城山遺跡	〃　〃	縄・弥	縄文・弥生期を含む
240	正観寺地蔵堂遺跡	〃　隈府	中	
241	亘遺跡	〃　亘	弥	弥生期　水田中に包含地あり
242	築地横穴群	〃　〃	古	北崖に数基　普通型　他にも考えられる
243	東福寺遺跡	〃　〃	平・中	本堂裏　青磁器・白磁器　壺の蔵骨器
244	木庭古墳	〃　木庭	古	
245	平原遺跡	〃　大平	弥	弥生期
246	中尾遺跡	〃　木庭	古	
247	稲荷山古墳参考地	〃　下河原	古	円墳状卦土　稲荷祠あり　弥生式土器片
248	比良良石支石墓	〃　原	弥	水田　石遺構　弥生式土器片散布
249	亘の経筒出土地	〃　亘	平	青銅経筒の一部　青銅盥　経釉盥
250	亘横穴	〃　〃	古	直刀　轡　鉄鏃
251	マユミノ横穴	〃　今	古	
252	妙見後田横穴群	〃　森北	古	須恵器一括出土
253	森北落水古墳	〃　〃	古	小円墳　石槌　勾玉出土
254	立石支石墓	〃　〃	弥	支石墓
255	妙見後田横穴群	〃　〃	弥	須恵器一群出土

番号	遺跡名	所在地	時代	備考
256	モトドリ山横穴群	菊池市森北	弥	横穴4基
257	上鍋倉遺跡	〃 原	縄・弥	縄文・弥生期
258	原遺跡	〃 〃	縄・弥	縄文・弥生期を含む
259	毛足遺跡	〃 〃	縄	御領式土器　石鏃
260	岩下遺跡	〃 四町分	縄	縄文期　磨製石斧1　有孔
261	平山遺跡	〃 〃	縄・弥	縄文・弥生期
262	渡打遺跡	〃 原	縄・弥	縄文・弥生期
263	若木遺跡	〃 四町分	縄・弥	縄文・弥生期
264	上沖野遺跡	菊池郡菊陽町原水	縄	縄文式土器
265	駄飼代(だかいしろ)遺跡	〃 津久礼	縄	縄文式土器
266	久保田下原遺跡	〃 久保田	弥	弥生式土器
267	久保田中原遺跡	〃 〃	縄	縄文・弥生期
268	久保田中岡遺跡	〃 〃	弥	弥生式土器
269	津久礼六地蔵遺跡	〃 津久礼	弥	弥生期
270	梅の木遺跡	〃 〃	弥	弥生式土器
271	鹿帰瀬西原遺跡	熊本市鹿帰瀬町	縄・弥	
272	鹿帰瀬遺跡	〃 〃	縄	
273	トンノマエ遺跡	熊本市弓削町	縄・弥	縄文式土器片多量　磨製石斧・打製石斧・すり石
274	上古閑遺跡	〃 〃	縄	縄文式土器片多量
275	宮原遺跡	〃 〃	縄	縄文式土器片多量
276	今石横穴群	菊池郡菊陽町津久礼	古	9基　一部は戦後住居に利用
277	上山立窪遺跡	〃 辛川	縄	縄文式土器
278	中屋敷遺跡	〃 〃	縄	縄文式土器
279	辛川東原遺跡	〃 辛川・曲手	縄	
280	曲手中原遺跡	〃 曲手	縄・弥	
281	狸坂遺跡	〃 〃	縄(後)	縄文後期遺物散布
282	津留(つる)遺跡	〃 辛川	古・平	段丘　湧泉地　土師器・須恵器出土
283	馬場楠・一丁畑遺跡	〃 馬場楠	古	箱式石棺
284	六道塚古墳	〃 辛川	古	畑中　石材露出する　墳形不明　小祠あり
285	上無田遺跡	阿蘇郡阿蘇町無田	縄	石斧・石鏃
286	狸坂遺跡	菊池郡菊陽町曲手	縄(後)	縄文後期遺物散布
287	人塚古墳	菊池郡大津町古城	古	円墳
288	西原銅鉾出土地	菊池郡旭志村川辺	弥	銅鉾
289	飛熊城跡	菊池郡泗水町住吉	中	
290	日頭山宣頓寺跡　合志家の墓	〃 〃	中	
291	池上城跡	〃 〃	中	
292	東駄飼城蔵骨器	〃 〃	奈・平	
293	山王宮跡	〃 〃	中	
294	臼塚石人	鹿本郡鹿本町御宇田	古	臼塚より移転　鹿本商工高校校庭から美術館へ
295	鹿本商工高校遺跡	〃 〃	弥	広峰型　同校庭より単独出土
296	茶臼塚古墳	〃 高橋	古	
297	平町遺跡	〃 中川	弥	弥生甕棺
298	双塚(ふたつかさん)古墳	〃 〃	古	
299	鹿本農業高校遺跡	〃 〃	弥・古	弥生期以降　土師器
300	原部古墳	〃 来民	古	凝灰岩材　210cm×70cm高坏　鉄斧
301	三郎丸館(ジョウ村館)跡	〃 御宇田	中	
302	前田(鹿本中学校校庭)遺跡	〃 来民	弥・古	
303	坂東石棺	〃 〃	古	
304	星丸将監館跡	〃 〃	中	
305	妙心寺河原合戦の跡	〃 中川	中	
306	新宮次郎・藤原忠親の墓	鹿本郡鹿央町北谷	平・中	
307	梅の木谷横穴群	〃 梅の木谷	古	
308	霜野城跡	〃 霜野	中	牧野弾正居城

番号	遺跡名	所在地		時代	備考
309	真堂浦如法経塔	鹿本郡鹿央町霜野		中	
310	牧野弾正の墓	〃	〃	中	
311	霜野阿弥陀堂古塔碑群	〃	〃	歴史	墓地内に多くの五輪塔・板碑あり
312	持松中屋敷(千田持松)古墳群	〃	持松	古	家形石棺　鉄鉈・鉄斧　剣　刀子
313	持松塚原(千田塚原)古墳群	〃	〃	古	家形石棺　櫛　刀子
314	久保原古墳	〃	岩原	古	箱式石棺　鉈　刀子　鏃先　珠文鏡
315	鬼塚古墳	〃	〃	古	円墳　箱式石棺　鉈　刀子　鏃先　珠文鏡
316	寒原第２号古墳	〃	〃	古	家形石棺　剣　刀子
317	岩原古墳	〃	〃	古	古墳群(前方後円墳・円墳)
318	岩原の土馬出土地	〃	〃	平	１点　少々欠ける
319	桜の上横穴群	〃	〃	古	金環　丸玉　鉄鏃　鋤先
320	塚さん古墳	〃	〃	古	箱式石棺主体
321	城ケ鼻城跡	〃	〃	中	中世城　稲荷社あり
322	岩原横穴	〃	〃	古	
323	岩原城跡	〃	〃	中	
324	田代横穴	〃	〃	古	
325	持松塚原古墳	〃	持松	古	
326	若竹の尾城跡	〃	岩原	中	
327	下原古墳	〃	〃	古	
328	寒原第１号古墳	〃	〃	古	
329	馬不向古墳	〃	〃	古	
330	狐塚古墳	〃	〃	古	
331	吉井原遺跡	〃	合里	弥	弥生期　甕棺群
332	天神免(広垣の内)遺跡	〃	広	弥	甕棺群　細形銅剣
333	下原古墳	〃	〃	古	
334	双塚第１・２号古墳	〃	合里	古	円墳
335	下米野古墳群	〃	〃	古	横穴群
336	千田浦大間古墳群	〃	千田	古	家形石棺　櫛　刀子　直刀　玉
337	向原遺跡	〃	合里	縄・弥・古	縄文式土器　弥生甕棺群　家形石棺
338	廣城跡	〃	広	中	中世丘城　城主・千田伊豫守
339	米野山城跡	〃	合里	中	米野岳山上　年代不明　佐伯氏居城
340	永野入道宗孚の墓	〃	〃	中	
341	寺の上石棺群	〃	広	古	
342	堤第１・２・３号古墳	〃	合里	古	
343	駄の原長者屋敷跡	〃	〃	古	
344	駄の原長者古墳	〃	〃	古	
345	駄の原遺跡	〃	〃	縄(後・晩)	縄文後・晩期土器
346	上谷官古墳	〃	広	古	
347	芹ケ迫古墳	〃	〃	古	
348	西屋敷遺跡	〃	〃	平・中	平安末期～中世
349	土蔵塚	〃	宮原	古	
350	久野古墳	〃	千田	古	古墳
351	千田中尾遺跡	〃	〃	弥	甕棺10　木棺43
352	早馬塚古墳	〃	〃	古	古墳(円墳)
353	八久保古墳	鹿本郡植木町宮原		古	
354	早馬遺跡	鹿本郡鹿央町千田		弥	弥生式土器　甕棺54　木棺11
355	山上箱式石棺	鹿本郡植木町宮原		古	
356	宮上箱式石棺	〃	〃	古	
357	浦田遺跡	〃	正清	弥	甕棺墓
358	亨禄板碑(大塚の板碑)	〃	〃	中	室町時代
359	永正の板碑	〃	田底	中	永正14年銘　室町時代
360	山城の板碑	〃	〃	歴史	
361	南平(みなみべら)横穴群	〃	正清	古	

番号	遺跡名	所在地		時代	備考
362	大塚古墳	鹿本郡植木町	正清	古	
363	加来の板碑	〃	田底	歴史	
364	八久保古墳	〃	宮原	古	
365	桑の木横穴群	〃	正清	古	
366	粕道石棺群	〃	内	古	箱式石棺
367	ササ塚古墳	〃	〃	古	
368	小原遺跡	〃	〃	弥	甕棺　現在消滅
369	玄蕃(げんば)塚古墳	〃	今藤	古	
370	伝習農場遺跡・火葬墓跡	〃	清水	縄(早・前)・奈・平	縄文早・前期土器　蔵骨器
371	今藤横穴群	〃	今藤	古	横穴約15基　五輪塔
372	慈恩寺経塚古墳	〃	米野	古	円墳
373	慈恩寺の板碑	〃	〃	歴史	
374	米塚古墳	〃	〃	古	
375	余内の経塚	〃	豊田	平	
376	余内の板碑	〃	船島	中	永禄12年８月
377	余内の横穴群	〃	豊田	古	
378	豊田古墳	〃	〃	古	円墳
379	宮穴横穴群	〃	〃	古	約40基
380	豊田六地蔵	〃	〃	中	室町時代
381	雪堂板碑・木造仏	〃	〃	中	永正13年
382	伊知坊甕棺遺跡	〃	伊知坊	弥	
383	乗越横穴群	〃	豊田	古	
384	平の須恵窯跡	〃	鈴麦	古	４基以上
385	布目瓦出土地	〃	〃	古代	
386	尾(大)平城跡	〃	平原	中	
387	布目瓦出土地・土師器片有	〃	大平	古	
388	砥石・宝篋印塔	〃	清水	中	神社境内　在銘同形２基
389	内の板碑	〃	内	歴史	
390	正院の五輪塔	〃	山本	中	
391	布目瓦出土地	〃	〃	古代	
392	味取観音古墳	〃	味取	古	鉄鏃
393	味取遺跡	〃	〃	古	須恵器・土師器
394	内村城(内空閑城)跡	〃	内	中	
395	服部の五輪塔	〃	豊田	中	
396	宝田横穴群	〃	亀甲	古	
397	高熊２号古墳	〃	古閑	古	
398	高熊古墳	〃	〃	古	前方後円墳　完形
399	高熊遺跡	〃	〃	弥・古	住居跡
400	請の原古墳群	〃	亀甲	古	円墳２基
401	亀甲東横穴群	〃	〃	古	装飾らしきものあり
402	新村遺跡	〃	〃	縄	縄文式土器
403	上の原遺跡	〃	豊田	中	城主・年代不明
404	上の原五輪塔	〃	〃	中	
405	原古墳	〃	亀甲	古	
406	原横穴群	〃	〃	古	
407	高隈地下式土壙	〃	古閑	古	
408	谷板碑	〃	豊岡	中	石造物
409	田原一の坂遺跡	〃	〃	縄	縄文式土器
410	田原古墳	〃	〃	古	円墳状を呈する
411	田原の五輪塔・板碑	〃	豊岡	中	田原寺跡　在銘板碑　塔片あり
412	公園遺跡	〃	〃	古	須恵器・土師器
413	公園板碑	〃	〃	中	石造物
414	豊岡の五輪塔　付板碑	〃	〃	中	

番号	遺跡名	所在地		時代	備考
415	穴カンノン古墳	鹿本郡植木町	富応	古	
416	外土井遺跡	〃	〃	縄	縄文期
417	中久保遺跡	〃	富岡	縄・弥	縄文・弥生期
418	城山城(田原城)跡	〃	豊岡	中	
419	経塚古墳	〃	味取	古	
420	富応廃寺跡・塔群	〃	富応	古代・中	
421	古閑板碑	〃	鞍掛	中	
422	岩野城(道祖城)跡	〃	〃	中	
423	鞍掛横穴群	〃	〃	古	
424	諏訪原石棺	〃	〃	古	組合箱式石棺
425	諏訪原遺跡	〃	〃	弥	
426	丸塚古墳	〃	富応	古	
427	鞍掛山城跡	〃	鞍掛	中	
428	荒平城跡	〃	山本	中	
429	一ツ木遺跡	〃	〃	縄(後・晩)	縄文後・晩期
430	山口横穴群	〃	岩野	古	
431	小畑遺跡	〃	有泉	弥	
432	石川遺跡	〃	石川	弥	弥生期
433	石川の板碑群	〃	〃	歴史	
434	鬼のいわや古墳	〃	小野	古	
435	塚園古墳群	〃	岩野	古	
436	小野板碑	〃	小野	歴史	
437	石川山古墳群	〃	石川	古	
438	烏帽子遺跡	〃	小野	弥	弥生期　土師器
439	広住遺跡	〃	広住	弥	土師壺
440	横山古墳	〃	有泉	古	前方後円墳(装飾古墳)
441	塔の本遺跡	〃	轟	弥	甕棺
442	埋原城跡	〃	〃	中	
443	龍源寺跡12仙龕	〃	〃	中	
444	龍源寺跡板碑	〃	那知	中	
445	辻畑遺跡	〃	轟	縄	縄文式土器
446	今古閑・久保遺跡	〃	〃	弥(後)	弥生後期
447	轟遺跡	〃	〃	弥	銅鉾4本　鉄斧1
448	滴水(たるみず)遺跡	〃	滴水	弥	弥生甕棺
449	滴水(たるみず)阿弥陀板碑	〃	〃	中	
450	轟城跡	〃	轟	中	城関係墓地あり
451	内目横穴群	〃	〃	古	風化・消滅多し
452	円台寺遺跡	〃	円台寺	縄	縄文期
453	円台寺五輪塔群	〃	〃	中	八幡宮西に多く埋没
454	円台寺の石造卒塔婆	〃	〃	中	2基　建久4年2月・建久7年2月銘
455	円台寺古塔碑群	〃	〃	中	現円台寺境内　五輪塔・宝塔・卒塔婆多数
456	円台寺磨崖仏群	〃	〃	中	浮彫・龕色仏面
457	河原立遺跡	〃	〃	縄・弥	縄文・弥生期　抉入石斧
458	ヲスギ遺跡	〃	滴水	縄(晩)・弥	縄文晩・弥生期　須恵器
459	轟横穴群	〃	〃	古	
460	内目遺跡	〃	轟	縄	縄文期
461	二葉パン工場遺跡	〃	舞尾	縄(後)・弥生(後・晩)	縄文後・弥生後・晩期
462	舞尾(もうの)薬師堂板碑	〃	〃	中	
463	舞尾の板碑	〃	〃	中	千本桜之木記念碑と並ぶ　六地蔵線刻
464	投刀塚(なたづか)古墳	〃	滴水	古	円墳　内部不明
465	松村刀鍛冶跡	〃	平野	弥	植木刀　松村昌直の鍛冶場
466	東原遺跡	〃	〃	弥	甕棺2
467	平野遺跡	〃	〃	弥・古	弥生～古墳期土器　甕棺

番号	遺跡名	所在地	時代	備考
468	平野五輪塔群	鹿本郡植木町平野	弥	五輪片多数　瓦器　甕棺
469	荻迫遺跡	〃　荻迫	縄(後)・古	縄文後期土器片・須恵器　石鎌・石斧
470	四ツ塚古墳群	〃　〃	古	いずれも小円墳　4基
471	鬼のかま古墳	〃　〃	古	2基　石材露出
472	荻迫狐塚古墳	〃　〃	古	円墳完形周溝　外堤があったが現在なし
473	滴水館跡	〃　滴水	中	
474	植木町三丁目遺跡	〃　植木	弥	弥生甕棺
475	笹尾遺跡	〃　木留	縄(早・後・晩)	縄文早・後・晩期土器・石器
476	向山古墳	〃　辺田野	古	円墳　径20m×高さ1m
477	笹尾遺跡	〃　木留	弥	甕棺墓
478	笹尾遺跡	〃　〃	縄(早)	集落　縄文早期土器　石斧・石棒
479	木留城跡	〃　〃	中	
480	服仏長遺跡	〃　鎧田	中	瓦器その他
481	山海道遺跡	〃　辺田野	縄(後・晩)	縄文後・晩期土器
482	坂田城跡	山鹿市坂田	中	中世山城　城主・年代等不明
483	上津留遺跡	〃　西牧	弥	
484	小原大塚横穴群	〃　小原	古	小円墳
485	小原大塚古墳群(大塚古墳)	〃　〃	古	小円墳　1基は箱式石棺
486	小原城跡	〃　〃	中	中世山城　昨日城とはこのことか　井戸あり
487	中尾遺跡	〃　中尾	弥	弥生期　野辺田式土器
488	長岩横穴群	〃　〃	古	118基内装飾8　鉄鏃　須恵器出土
489	小原浦田横穴群	〃　〃	古	内装飾2基
490	岩原横穴群	〃　岩原	古	装飾1基を含む
491	隈部親広館跡	〃　西牧	中	
492	志々岐大塚横穴群	〃　志々岐	古	
493	木下古墳	〃　方保田	古	
494	長坂城跡	〃　長坂	中	星子中務鎮永居城　天正16年秀吉のため落つ
495	方保田遺跡	山鹿市方保田	弥	弥生式土器一括
496	方保田箱式石棺	〃　〃	弥	箱式石棺　多数の弥生後期土器片
497	神社裏古墳	〃　〃	古	小前方後円墳1基
498	馬見塚古墳群	〃　〃	古	3基＋2基　計5基
499	馬見塚古墳(辻古墳)	〃　〃	古	円墳1　船形・家形・箱式等の石棺4　人骨9 他出土品多
500	馬見塚古墳	〃　〃	古	1基
501	馬見塚遺跡	〃　〃	弥・古	弥生式土器・土師器・須恵器多数　石包丁
502	大道小学校校庭遺跡	〃　〃	弥	甕棺
503	古城古墳	〃　〃	古	城跡内にあり
504	方保田遺跡	〃　〃	中	中世丘城　方保田重兼・同武明居城という
505	方保田古墳	〃　〃	古	円墳　巨石横穴石室
506	方保田箱式石棺	〃　〃	弥	弥生後期土器片多数　移転復元
507	方保田東原遺跡	〃　〃	古	古墳期住居　土師器・他土器片多数
508	端山塚古墳	〃　〃	古	円墳　内部不明
509	亀塚古墳	〃　〃	古	前方後円墳　後円部は現在消滅　直刀等
510	塚の本遺跡	〃　〃	弥	甕棺
511	清水山古墳	〃　〃	古	円墳　主体部は石棺か
512	一本杉石棺	〃　〃	古	
513	日置石棺	〃　〃	古	
514	日置遺跡	〃　〃	弥・古	
515	北原石棺(藤井石棺)	〃　藤井	古	卦土なし
516	北原遺跡(藤井遺跡)	〃　〃	弥	
517	専立寺板碑	〃　方保田	中	
518	繁根木貝塚	玉名市繁根木	縄	八幡宮境内全域　町筋南側　国鉄線路
519	保田木貝塚	〃　高瀬	縄(中)	城跡・神社境内全域　阿高式土器中心

番号	遺跡名	所在地	時代	備考
520	桃田貝塚	玉名市大蔵	縄(中)・古	国鉄線北2か所　阿高式土器～土師器・須恵器
521	部田遺跡	〃　津留	縄(後)	高台畑地　磨製大型石鍬出土
522	鍛冶屋町遺跡	〃　伊倉南方	縄・平	鉱滓多く分布
523	片諏訪貝塚	〃　片諏訪	縄・中	縄文～鎌倉期
524	伊倉八幡宮境内遺跡	〃　北方・宮原	縄(中・後)	縄文式土器　阿高式・御領式土器を多く包含
525	伊倉宮の後遺跡	〃　伊倉北方	縄(中・後)	縄文期 阿高式･御領式土器 石斧･石鏃多く出土
526	ビナワラ貝塚	玉名郡横島町横島	縄	縄文期
527	キャアガラワラ貝塚	〃　〃	縄	縄文期
528	竹崎貝塚	玉名郡天水町竹崎	縄(中)	縄文中期
529	野部田東遺跡	〃　野部田	縄(晩)	縄文晩期
530	久島貝塚	〃　部田見	縄	縄文期
531	尾田貝塚	〃　尾田	縄	縄文期
532	野辺田東遺跡	〃　野部田	縄(晩)	縄文晩期
533	湯の浦貝塚	〃　小天	縄(中)	縄文中期　阿高式他の土器　石器
534	辻遺跡	玉名郡玉東町二俣	縄(後・晩)	縄文後・晩期
535	立岩石器製作遺跡	〃　原倉	縄	打製石斧・剝片多数
536	東山西遺跡	〃　〃	縄(後・晩)	縄文後・晩期　土器・石器
537	東山遺跡	〃　〃	縄(後)	縄文後期の土器・石器包含
538	大谷石器製作遺跡	〃　〃	縄(後)	安山岩打製石器多量出土
539	十輪寺遺跡	荒尾市平山	縄(早)	縄文早期　土器・石器
540	鬼玉浦ん谷遺跡	玉名郡南関町上坂下	縄	石鏃単独発見
541	高野古閑遺跡	玉名郡菊水町高野	縄(中・後)	縄文中・後期土器
542	若園貝塚	〃　江田	縄(中・後)・古・中	
543	古閑遺跡	玉名郡岱明町上	縄	磨製石斧数個　土器　石鏃出土
544	尾崎貝塚	〃　野口	縄(中)	専修大学玉名高校校庭　阿高式土器
545	上鍋遺跡	〃　鍋	縄	縄文期　蛇紋岩半磨製石斧
546	目倉尾遺跡	〃　大野下	縄(早)	殻粒・山形連続押型文
547	中土楢ノ尾遺跡	〃　中土	縄(後)・弥(晩)	縄文後期～弥生晩期
548	中土西遺跡	〃　〃	縄(後)	縄文後期　御領式土器中心
549	浜田貝塚	〃　浜田	縄	縄文式土器片・石錘出土
550	山下西遺跡	〃　山下	縄(後)	縄文後期以降
551	庄司貝塚	〃　〃	縄(中)	縄文中期　阿高式土器
552	古閑原貝塚	〃　〃	縄(中)縄文中期	阿高式土器　炭化米　出土品多し
553	山下・木佐貫遺跡	〃　〃	縄	
554	万楽寺貝塚	飽託郡北部町万楽寺	縄(後)	縄文後期　少量　農道工事で発見
555	太郎迫遺跡	〃　太郎迫	縄(後)	縄文後期　土器・石器
556	北迫川底遺跡	〃　北迫	縄(後)・弥	川底－2～3m　縄文三万田式･弥生黒髪式土器
557	万楽寺上遺跡	〃　万楽寺	縄(後)	縄文後期
558	小糸山遺跡	〃　小糸山	縄(後)	縄文後期　御領式土器　他土器・石器多数
559	立石遺跡	〃　〃	縄(後)	縄文後期土器(御領式土器)　石器　弥生期
560	妙見遺跡	〃　立福寺	縄(晩)	通称・城跡　縄文晩期　押型文土器
561	川東遺跡	〃　和泉	縄(後)	縄文期　三万田土器大量出土　土偶1
562	皮籠石(こうごいし)遺跡	〃　〃	縄(晩)	縄文晩期　土器片少量
563	桑鶴遺跡	〃　〃	縄(後)・古	縄文後期　古墳期
564	五丁中原(なかばる)遺跡	〃　貢	縄(後)・弥・古	縄文後・弥生・古墳期　須恵器・土師器
565	柮の木遺跡	〃　硯川	縄(後)	縄文後期　御領式系土器少量
566	田畑遺跡	〃　下硯川	縄(後)	竪穴跡　敷石　縄文後期土器　石器
567	北中(ほくちゅう)遺跡	〃　鹿子木	縄(後)	縄文後期　三万田式系土器少量
568	四方寄(よもぎ)遺跡	〃　四方寄	縄(後)	縄文期　御領式・三万田式土器等多数　土偶1
569	四方寄御馬下(みまげ)遺跡	〃　〃	縄(後)	縄文後期土器片少量散布
570	大鳥居遺跡	〃　大鳥居	縄(晩)	縄文晩期土器　網目文包含
571	徳王遺跡	〃　徳王	縄・弥・古	縄文・弥生期　土師器多量　鏡出土
572	飛田(ひだ)塔の木遺跡	〃　飛田	縄(晩)	縄文晩期　打製石斧　土師器出土

番号	遺跡名	所在地	時代	備考
573	鶴羽田遺跡	飽託郡北部町鶴羽田	縄(後・晩)	縄文後・晩期　須恵器・土師器？
574	鶴の原・垣の外遺跡	〃鶴羽田・梶尾	縄(晩)・弥	縄文晩・弥生期　土師器・須恵器
575	楢(ひし)山遺跡	熊本市清水町	縄(晩)	縄文晩期　甕棺
576	楡木(にれのき)遺跡	〃	縄(早・前・晩)・弥	縄文早・前・晩期　弥生甕棺
577	山室遺跡	〃	縄・古	土師器　石斧
578	亀井遺跡	〃	縄	縄文土器
579	徳王遺跡	熊本市池田町	縄・弥・古	
580	楡木遺跡	熊本市清水町	縄(早・前・晩)・弥	縄文早・前・晩期　弥生甕棺
581	庵ノ前遺跡	〃	縄(早)・弥	押型縄文甕棺(須玖式)
582	一丁霍(一丁畑・楠団地)遺跡	〃清水町・竜田町	縄(晩)	縄文晩初期　土器多量　石器
583	天拝山遺跡	熊本市清水町	縄(早・前)・弥	縄文早・前期石器　弥生式土器片
584	緑が丘山の神遺跡	熊本市竜田町	縄	縄文式土器　石器
585	山尻遺跡群	熊本市弓削町	縄(晩)・弥	弥生期集落　縄文晩期
586	法王鶴(弓削)遺跡	熊本市竜田町	縄・弥	縄文・弥生期
587	吉原遺跡	熊本市吉原町	縄(晩)・弥	縄文晩・弥生期
588	片彦瀬遺跡	熊本市竜田町	縄(後・晩)	縄文後・晩期　土師器
589	竹ノ後遺跡	〃	縄(後)	縄文後期　土器・石器多量
590	上南部遺跡	熊本市上南部	縄(後・晩)	縄文期
591	瀬々井遺跡	熊本市石原	縄(後・晩)	縄文後・晩期　土器　石器
592	石原亀の甲遺跡	〃	縄(後・晩)・弥	運動公園を含む　縄文・弥生期大集落
593	北上遺跡	〃	縄(晩)	縄文晩期　打製石器　土師器片
594	松島遺跡	菊池郡七城町小野崎	弥	須玖式土器　土器窯跡？
595	年賀塚古墳	〃　〃	古	菊池武光対陣中に年賀の宴の場という
596	小野崎遺跡	〃　〃	弥	弥生期　土師器大量　野辺田式主体住居
597	打越城後	〃　蘇崎	中	七城町七城の一つ　林原氏居住
598	打越古墳群	〃　〃	古	円墳3基
599	町畑石棺墓	〃　小野崎	古	家形石棺
600	鬼丸遺跡	〃　打越	縄(早)・平	縄文・平安期
601	大久保遺跡	〃　林原	縄(後・晩)	縄文・平安集落跡
602	天神平遺跡	菊池郡泗水町南田島	古	土師器
603	宮の迫古墳	〃　〃	古	石棺
604	平野横穴群	〃　〃	古	
605	アブミズ(塚)古墳群	〃　〃	古	
606	黒松荻の迫遺跡	菊池郡西合志町合生	弥	甕棺　弥生式土器　片刃石斧出土
607	聖寿寺跡	〃　上生	歴史	
608	積雪城跡	〃　〃	中	
609	城敷古墳	〃　〃	古	
610	瀬吐古墳	〃　野々島	古	
611	汐浸古墳	〃　上生	古	
612	フタゴ塚古墳	〃　野々島	古	円墳
613	野々島土塁跡	〃　〃	中	
614	愛楽寺跡	〃　〃	歴史	
615	花園土塁跡	〃　〃	中	
616	須屋城跡	〃　須屋	中	
617	小園遺跡	菊池郡西原村鳥子	古	石器　須恵器
618	皆元遺跡	〃　〃	縄(晩)	縄文晩期土器・石器
619	馬場遺跡	〃　〃	古	須恵器
620	襟の平遺跡	〃　〃	縄(後・晩)	縄文後・晩期土器　弥生式土器　土師器
621	桃の木原遺跡	〃　〃	縄(早・晩)	縄文早・晩期土器　土師器
622	がくが峰遺跡	〃　〃	弥(後)	弥生後期土器
623	きつね塚古墳群	〃　小森	古	直刀出土
624	風当遺跡	〃　〃	弥(後)	弥生後期土器　石包丁
625	古閑遺跡	〃　鳥子	縄(早・晩)	縄文早・晩期土器　土師器

番号	遺跡名	所在地	時代	備考
626	葛目遺跡	菊池郡西原町鳥子	縄(早)・弥(後)	縄文早・弥生後期土器・土師器
627	葛目横穴	〃　〃	古	
628	下六段田横穴	〃　〃	古	
629	鳥子城跡	〃　〃	中	
630	きつね塚石棺群	〃　〃	古	
631	桑鶴古屋敷遺跡	〃　〃	縄(早)・弥・古	縄文・弥生・古墳期　土器出土
632	桑鶴扇坂の口遺跡(古池さん)	〃　〃	縄(中)・弥	縄文・弥生期
633	桑鶴遺跡	〃　〃	弥	弥生式土器・土師器・須恵器
634	桑鶴土橋遺跡	〃　小森	縄(中)・弥(後)	縄文早・弥生後期　土師器
635	鳥子城	〃　鳥子	中	
636	後迫遺跡	〃　小森	縄(早)・弥(後)	縄文早・弥生後期　土師器
637	どや堤の上遺跡	〃　〃	弥(後)	弥生後期土器　土師器・須恵器
638	うつさい遺跡	〃　〃	弥(後)	弥生後期土器
639	袴野遺跡	〃　〃	縄(前)・弥	縄文前期　弥生式土器
640	揺が池遺跡	〃　〃	弥(後)	弥生後期土器・土師器・須恵器
641	揺が池西側台地遺跡	〃　〃	縄(後・晩)・弥(後)	縄文後・晩・弥生後期土器

ワクド石遺跡出土　土器観察表

図版No.	土器No.	器種	部分	口縁種類	口径	器高	最大胴部	色　調	胎土の特徴	焼成	調　整	形式・備考
縄文時代早期～後期前半の土器												
18	1	深鉢	口縁部	平	—	—	—	褐色	長石目立つ	良		押型文(楕円)
	2	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色	凝灰岩入る	やや悪	(内)ナデ(部分)	押型文(格子目)
	3	〃	〃	〃	—	—	—	〃		良	(内)条痕・ナデ	〃
	4	〃	〃	〃	—	—	—	暗褐色		〃	(内)ナデ	押型文(山形)
	5	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色	角閃石目立つ	普通		押型文(楕円)
	6	〃	〃	〃	—	—	—	灰黄褐色		〃	(内)削り後ナデ (外)部分ナデ	〃
	7	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色	長石多	良	(内)部分ナデ	〃
	8	〃	〃	〃	—	—	—	〃	精選・石粒少	普通	(内)条痕・ナデ	〃
	9	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色		良		押型文(山形)
	10	〃	〃	〃	—	—	—	褐色		普通	(内)部分ナデ (外)口端ナデ	押型文(楕円)
	11	〃	〃	〃	—	—	—	明黄褐色		やや悪	(口端)ナデ	〃
	12	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色	精選	普通	(内)(外)部分ナデ	押型文(山形)
	13	〃	〃	〃	—	—	—	〃	石英目立つ	良	(口端)ナデ	押型文(楕円)
	14	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色		普通		〃
	15	〃	〃	〃	—	—	—	〃	長石目立つ	やや悪		〃
	16	〃	〃	〃	—	—	—	?		〃		〃
	17	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色	精選・くさり礫	良		〃
	18	〃	胴部	—	—	—	—	黄褐色	角閃石目立つ	〃		〃
	19	〃	〃	—	—	—	—	にぶい黄橙色		〃	(内)ナデ	〃
	20	〃	〃	—	—	—	—	明黄褐色	長石目立つ	やや悪		〃
	21	〃	〃	—	—	—	—	にぶい褐色		良	(内)ナデ	押型文(山形)煤付着
	22	〃	〃	—	—	—	—	にぶい黄褐色		普通	〃	〃
	23	〃	〃	—	—	—	—	にぶい黄橙色	長石多	やや悪		押型文(楕円)
	24	〃	〃	—	—	—	—	にぶい黄褐色		良	(内)ナデ	〃
	25	〃	〃	—	—	—	—	にぶい黄橙色		普通	〃	押型文(山形)
	26	〃	〃	—	—	—	—	にぶい黄褐色	石粒かなり多	やや悪		押型文(楕円)
	27	〃	〃	—	—	—	—	にぶい黄橙色	角閃石目立つ	普通	(内)ナデ	〃
	28	〃	〃	—	—	—	—	〃	3～4mm大の 石粒目立つ	良	〃	〃
	29	〃	〃	—	—	—	—	〃		〃		押型文(山形)
	30	〃	〃	—	—	—	—	明黄褐色		普通	(内)ナデ	〃
	31	〃	〃	—	—	—	—	にぶい黄橙色		〃	〃	押型文(楕円)
	32	〃	〃	—	—	—	—	明黄褐色	角閃石目立つ	良	〃	〃
	33	〃	〃	—	—	—	—	にぶい黄褐色		〃	〃	〃
	34	〃	?	—	—	—	—	褐灰色		〃		押型文(尖底)
	35	〃	胴部	—	—	—	—	にぶい黄橙色		普通	(内)ナデ	手向山
	104	〃	〃	—	—	—	—					
19	36	〃	〃	—	—	—	—	にぶい黄橙色	精選・砂粒少	良	(内)ナデ	条痕文
	37	〃	口縁部	平	—	—	—	暗褐色	石英多	〃	(内)ナデ (外)押型後条痕	押型条痕文
	38	〃	胴部	—	—	—	—	明褐色		〃	(内)ナデ	煤付着
	39	〃	〃	—	—	—	—	暗赤褐色	石英目立つ	〃	(内)(外)条痕	貝殻条痕
	40	〃	底部	—	—	—	—	明赤褐色		〃		条痕文
	41	〃	胴部	—	—	—	—	?	精選	〃	(内)(外)条痕	条痕文・煤付着
	42	〃	口縁部	平	—	—	—	にぶい赤褐色	長石多	〃	(内)撚糸指圧痕のち ナデ(外)ナデ・撚糸	撚糸文
	43	〃	〃	〃	—	—	—	褐色		〃	(内)(外)撚糸？	〃
	44	〃	胴部	—	—	—	—	橙色	石英多	〃		〃
	45	深鉢	口縁部	平	—	—	—	にぶい黄褐色	長石目立つ	良		塞ノ神

図版No.	土器No.	器種	部分	口縁種類	口径	器高	最大胴部	色　調	胎土の特徴	焼成	調　整	形式・備考
19	46	深鉢	口縁部	平	—	—	—	にぶい黄褐色	精選	良	(内)ナデ(外)撚糸	塞ノ神
	47	〃	〃	〃	—	—	—	〃		やや悪		〃
	48	〃	〃	〃	—	—	—	褐色	石英なし・くさり礫	良	(内)ナデ(外)条痕	条痕文・煤付着
	49	〃	胴部	—	—	—	—	にぶい黄褐色	石英	〃	(内)ナデ (外)沈線・撚糸文	塞ノ神？
	50	〃	〃	—	—	—	—	にぶい黄橙色	くさり礫多	普通	(内)ナデ(外)撚糸	塞ノ神
	51	〃	〃	—	—	—	—	褐色	精選	良	〃	〃
	52	〃	〃	—	—	—	—	にぶい黄橙色		やや悪	(内)ナデ	〃
	53	〃	〃	—	—	—	—	〃	精選	良		塞ノ神・煤付着
	54	〃	〃	—	—	—	—	褐色	長石かなり含む	やや悪		塞ノ神
	55	〃	〃	—	—	—	—	にぶい黄褐色		良	(内)削り後ナデ	沈線によって縄文と無文部に分ける
	56	〃	〃	—	—	—	—	橙色	精選・長石多	〃		塞ノ神
	57	〃	〃	—	—	—	—	にぶい赤褐色		〃	(内)(外)ナデ	塞ノ神・煤付着
	58	〃	〃	—	—	—	—	暗褐色		〃	(内)削り後ナデ (外)ナデ・沈線内撚糸	〃
	59	〃	〃	—	—	—	—	にぶい褐色		〃	〃	塞ノ神
	60	〃	〃	—	—	—	—	暗褐色	精選	〃	〃	塞ノ神・煤付着
	61	〃	〃	—	—	—	—	明赤褐色		〃	(内)削り後ナデ	〃
	62	〃	口縁部	平	—	—	—	にぶい黄褐色	比較的精選	〃		曽畑？・煤付着
	63	〃	〃	〃	—	—	—	〃	石英粒多	やや悪	(内)ナデ	曽畑・煤付着
	64	〃	〃	〃	—	—	—	暗褐色	長石・角閃石ほとんど無	良		曽畑？
	65	〃	〃	〃	—	—	—	？		〃	(内)ナデ	曽畑・煤付着
	66	〃	〃	〃	—	—	—	暗褐色	くさり礫・長石多・滑石わずか	〃		〃
	67	〃	？	—	—	—	—	暗赤褐色		〃	(内)ナデ	？
	68	〃	胴部	—	—	—	—	にぶい黄橙色	精選・石粒少	普通	(内)部分条痕	曽畑
	69	〃	〃	—	—	—	—	にぶい褐色		良	(内)ナデ	曽畑・煤付着
	70	〃	〃	—	—	—	—	にぶい黄橙色	石英多	やや悪	(内)ナデ	〃
	71	〃	〃	—	—	—	—	暗褐色	精選	良	(内)(外)ナデ	曽畑
	72	〃	〃	—	—	—	—	にぶい黄橙色	角閃石目立つ	やや悪		曽畑・煤付着
20	73	〃	〃	—	—	—	—	明褐色	金雲母多・滑石？	普通	(内)(外)ナデ	？・器面滑らか
	74	〃	〃	—	—	—	—	明黄褐色	精選	良	(内)ナデ	曽畑・煤付着
	75	〃	〃	—	—	—	—	〃	〃	〃	(内)(外)ナデ	曽畑
	76	〃	〃	—	—	—	—	にぶい黄褐色	〃	〃	(内)ナデ	〃
	77	〃	口縁部	平	—	—	—	褐色	滑石かなり含む	〃		阿高
	78	〃	胴部	—	—	—	—	暗赤褐色	〃	〃		阿高？
	79	〃	〃	—	—	—	—	にぶい赤褐色	〃	〃		阿高
	80	〃	〃	—	—	—	—	褐色		普通		鐘ケ崎
	81	〃	底部	—	—	—	—	橙色	長石・滑石微粒子多	やや悪	(内)(外)ナデ	中期　阿高系
	82	〃	口縁部	平	—	—	—	暗褐色	石英目立つ	良	〃	竹崎
	83	〃	〃	〃	—	—	—	暗赤褐色		〃		〃
	84	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色		やや悪	(内)ナデ(外)縄文	？
	85	〃	胴部	—	—	—	—	赤褐色		良		竹崎
	86	〃	〃	—	—	—	—	褐色	石英多	〃	(内)(外)ナデ	〃
	87	〃	〃	—	—	—	—	明黄褐色		〃		〃
	88	〃	〃	—	—	—	—	にぶい黄褐色		やや悪	(内)ナデ(外)縄文	竹崎？
	89	〃	〃	—	—	—	—	黒褐色		普通	〃	竹崎
	90	〃	〃	—	—	—	—	にぶい黄褐色		良	(内)ナデ	〃
	91	〃	〃	—	—	—	—	灰黄褐色	5mm程の石類目立つ	普通	(内)ナデ(外)縄文	〃

図版No.	土器No.	器種	部分	口縁種類	口径	器高	最大胴部	色　調	胎土の特徴	焼成	調　整	形式・備考
20	92	深鉢	口縁部	平	—	—	—	にぶい黄橙色		良	(内)磨き (外)ナデ後磨き	北久根山
	93	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色	滑石を含む	やや悪	(内)ナデ	?
	94	〃	〃	〃	—	—	—	明黄褐色	石英目立つ・ 角閃石なし	良	(内)削り後ナデ (外)ナデ	北久根山
	95	〃	胴部	—	—	—	—	にぶい黄褐色	滑石わずかに含む	普通	(内)(外)ナデ	?
	96	〃	〃	—	—	—	—	にぶい赤褐色	角閃石なし	良	(内)ナデ・削り後ナデ	鐘ケ崎・高坏?
	97	〃	〃	—	—	—	—	明黄褐色	精選	悪		?
	98	〃	〃	—	—	—	—	にぶい黄褐色		良	(内)ナデ	鐘ケ崎
	99	〃	〃	—	—	—	—	にぶい黄橙色		やや悪	〃	?
	100	〃	〃	—	—	—	—	にぶい黄褐色	滑石わずか・石英多	普通		?
	101	〃	〃	—	—	—	—	黄褐色		良	(内)削り	?
	102	〃	〃	—	—	—	—	にぶい黄褐色	滑石わずかに含む	〃		鐘ケ崎?
	103	〃	〃	—	—	—	—	〃		やや悪		〃
18	104	〃		—	—	—	—					
20	105	〃	?	—	—	—	—					
	106	〃	胴部	—	—	—	—	にぶい黄褐色	滑石を含む	良		御手洗
縄文時代1号住居跡出土遺物												
23	1	深鉢	口縁部	平	—	—	—	灰黄褐色	金雲母	良	(内)(外)磨き	天
	2	〃	〃	〃	—	—	—	褐灰色	長石目立つ	やや悪	〃	三・島?
	3	〃	〃	波	—	—	—	にぶい黄橙色	長石・角閃石	〃	〃	三?
	4	〃	頸部	—	—	—	—	黒褐色	〃	良	〃	〃
	5	〃	胴部	—	—	—	—	にぶい黄橙色	〃	やや悪	(内)(外)削り	?
	6	浅鉢	口縁部	平	22.0	—	—	黒褐色	〃	良	(内)(外)磨き	御・天?
縄文時代3号住居跡出土遺物												
26	3	浅鉢	口縁部	平	24.9	4.3	—	にぶい黄褐～ 黒色	砂粒・角閃石・ 長石・金雲母	良	(内)磨き (外)磨き(部分タテ)	?
	4	深鉢	〃	〃	—	—	—	灰黄褐色	長石かなり含む	普通	(内)(外)磨き	御?
	5	〃	〃	〃	—	—	—	内・灰黄褐色 外・鈍い黄橙	長石・角閃石	〃	(内)磨き (外)磨き(ナデ?)	天
	6	〃	〃	〃	—	—	—	内・鈍い黄橙 外・明黄褐色	〃	良	(内)(外)磨き	天?
	7	〃	〃	〃	—	—	—	内・鈍い黄橙 外・鈍い黄褐	〃	普通	(内)磨き (外)ヘラ削り・磨き	天
	8	〃	〃	〃	—	—	—	内・灰黄褐色 外・褐灰色	〃	〃	(内)ヨコ後タテ磨き (外)磨き	鳥
	9	〃	〃	〃	—	—	—	内・鈍い黄橙 外・浅黄橙色	粗い長石・角閃石・ 金雲母	〃	(内)磨き (外)条痕・磨き	古
	10	〃	〃	〃	—	—	—	内・浅黄橙色 外・鈍い黄橙	長石・角閃石・ 石英	やや悪	(内)ナデ・ヘラ削り・磨き (外)〃・〃・ヨコ後タテ磨き	天
	11	〃	〃	〃	—	—	—	褐灰色	長石・角閃石	普通	(内)ヘラ削り後ナデ (外)条痕・ヘラ削り後ナデ	古・煤付着
	12	〃	〃	〃	—	—	—	暗褐色	くさり礫・角閃石	良	(内)(外)磨き	?
	13	〃	〃	〃	—	—	—	内・明黄褐色 外・鈍い黄褐	長石・角閃石・ 石英	普通	(内)ヘラ削り後ナデ (外)ヘラナデ	古?
	14	〃	胴部	—	—	—	—	内・黄褐色 外・鈍い黄褐	長石多	やや悪	(内)(外)磨き	天
	15	〃	〃	—	—	—	—	褐色	粗い	普通	(内)磨き (外)磨き・突帯文	黒川
	16	〃	〃	—	—	—	—	内・鈍い黄橙 外・鈍い黄褐	長石・角閃石	良	(内)(外)磨き	天?
27	17	〃	口縁部	?	—	—	—	内・黒褐色 外・灰黄褐色	角閃石	普通	(内)磨き・ナデ (外)磨き	御

図版No.	土器No.	器種	部分	口縁種類	口径	器高	最大胴部	色　調	胎土の特徴	焼成	調　整	形式・備考
27	18	浅鉢	口縁部	平	—	—	—	黒褐色	精選	良	(内)磨き (外)ヘラナデ・磨き	天・煤付着
	19	〃	〃	?	—	—	—	〃	〃	〃	(内)(外)磨き	天
	20	〃	〃	〃	—	—	—	明黄褐色	角閃石	普通	(内)磨き (外)ヨコ後タテ磨き	〃
	21	〃	〃	平	—	—	—	褐灰色	精選	良	(内)(外)磨き	古
	22	〃	胴部	—	—	—	—	黒褐色	〃	〃	〃	天?
	23	〃	口縁部	山	—	—	—	内・灰黄褐色 外・鈍い黄褐		〃	(内)ヘラ磨き (外)ヘラ削り・磨き	?・煤付着
	24	〃	胴部	—	—	—	—	内・黒色 外・暗褐色		〃	(内)磨き (外)ヨコ後タテ磨き	天
縄文時代4号住居跡出土遺物												
31	2	深鉢	口縁部	波	—	—	—	鈍い黄橙色	長石・角閃石	良	(内)(外)磨き	太・煤付着
	3	〃	〃	波?	—	—	—	鈍い黄褐色	〃	〃	(内)ヨコ磨き (外)タテ磨き	?
	4	〃	〃	波	—	—	—	にぶい黄橙色	〃	普通	(内)(外)磨き	太・煤付着
	5	〃	頸～胴部	—	—	—	—	灰黄褐～黒色	〃	〃	〃	太
	6	〃	〃	—	—	—	—	黒褐色	〃	〃	〃	太・煤付着
	7	〃?	口縁部	山	—	—	—	にぶい黄褐色	〃	良	〃	?
	8	?	〃	?	—	—	—	黒褐色	〃		〃	〃
縄文時代5号住居跡出土遺物												
31	9	深鉢	口縁部	平	28.3	4.3	—	にぶい褐色	砂粒・角閃石	良	(内)磨き (外)ヨコ・タテ磨き	御
	10	〃	〃	波	19.0	—	—	にぶい黄橙色	精選	〃	(内)(外)磨き	?・煤付着
	11	〃	〃	〃	—	—	—	〃	くさり礫	〃	〃	太
	12	〃	〃	〃	—	—	—	〃		〃	〃	〃
	13	〃	〃	〃	—	—	—	〃	長石多	普通	〃	〃
	14	〃	〃	〃	—	—	—	黒褐色	長石・角閃石	やや悪	〃	三・煤付着
	15	〃	〃	?	—	—	—	〃	〃		〃	太・煤付着
	16	〃	〃	波	—	—	—	にぶい黄橙色	〃	普通	(内)磨き・削り (外)削り	〃
	17	〃	〃	?	26.0	—	—	灰黄褐色	精選	良	(内)(外)磨き	?・煤付着
	18	〃	〃	波	—	—	—	にぶい黄橙色	角閃石・金雲母	普通	〃	太?・煤付着
	19	〃	〃	平	22.0	—	—	〃	精選	やや悪	〃	御・煤付着
	20	〃	〃	山	—	—	—	灰黄褐色	長石・角閃石	〃	(内)磨き (外)ヨコ・タテ磨き	〃
	21	〃	〃	平	—	—	—	にぶい黄褐色	〃	普通	(内)(外)磨き	〃
	22	〃	〃	〃	—	—	—	暗褐色	〃	良	〃	天?
	23	〃?	胴部	—	—	—	—	にぶい黄橙色	精選・くさり礫	〃	〃	三
	24	深鉢	〃	—	—	—	—	黒褐色	長石・角閃石	〃	〃	〃
	25	〃	〃	—	—	—	—	〃	〃	やや悪	〃	太・煤付着
	26	〃	〃	—	—	—	—	〃	〃	普通	〃	太
	27	〃	〃	—	—	—	—	にぶい黄橙色	〃	良	〃	太・煤付着
	28	〃	〃	—	—	—	—	にぶい黄褐色	〃	やや悪	〃	〃
	29	〃	〃	—	—	—	—	〃	精選・長石・角閃石	良	〃	〃
	30	〃	頸～胴部	—	—	—	—	にぶい黄橙色	精選・長石	〃	(内)ヘラ削り・磨き (外)ヘラ削り・ヘラ磨き・磨き	天・御?・煤付着
	31	浅鉢	口縁部	平	—	—	—	灰黄褐色	長石・角閃石	やや悪	(内)磨き (外)磨き・細線紋・鋸歯紋	三・煤付着
	32	〃	〃	〃	—	—	—	橙色	精選・角閃石	良	(内)磨き (外)磨き・細線紋	三
	33	〃	〃	〃	18.0	—	—	灰褐色	角閃石	普通	〃	〃
	34	〃	〃	〃	—	—	—	橙色	精選・長石・角閃石・石英	良	(内)(外)磨き	〃

図版No	土器No	器種	部分	口縁種類	口径	器高	最大胴部	色　調	胎土の特徴	焼成	調　整	形式・備考
31	35	浅鉢	口縁部	平	—	—	—	黒褐色	長石・角閃石	良	(内)(外)磨き	御
32	36	〃	〃	?	—	—	—	内・黒褐色 外・褐色	長石・滑石	〃	(内)磨き (外)磨き・赤色顔料	御・煤付着
	37	〃	〃	平	—	—	—	にぶい黄褐色	長石・角閃石	〃	(内)磨き (外)磨き・細線紋	鳥
	38	〃	〃	〃	—	—	—	内・鈍い黄橙に黒斑 外・明黄褐色	砂粒・長石・ 角閃石・石英	〃	(内)(外)磨き	三
	39	埦形	〃	?	—	—	—	にぶい黄橙色	長石・角閃石	悪	(内)(外)磨き	太
	40	浅鉢	〃	〃	—	—	—	橙色	長石多	普通	(内)ナデ (外)ヨコ・タテ磨き	?
	41	無頸壺形	口～胴部	〃	—	—	—	黒褐色	精選・角閃石・金雲母	良	(内)磨き (外)磨き・縄文	辛川?
	42	?	口縁部	〃	—	—	—	〃	長石・角閃石		(内)磨き (外)ヘラ磨き	?・煤付着
	43	注口	胴部	〃	—	—	—	灰褐色	長石	普通	(内)磨き (外)磨き・細線紋	鳥
縄文時代10号住居跡出土遺物												
37	2	深鉢	胴～底部	—	—	8.1	13.2	内・鈍い黄色 外・黒褐色	砂粒・角閃石・ 金雲母	良	(内)(外)磨き	太
	3	〃	口～胴部	?	17.3	14.3	19.8	にぶい褐色	砂粒・角閃石・ 石英	〃	口縁(内)横・縦磨き(外)磨き 胴部(内)磨き(外)横・縦磨き	〃
	4	〃	胴部	—	—	—	—	内・灰黄褐色 外・橙 7.5YR	砂粒・長石・角閃石・ 石英・金雲母	普通	(内)(外)磨き	〃
	5	〃	口縁部	波	—	—	—	内・灰黄褐色 外・黒褐色	長石かなり含む	〃	(内)(外)削り・磨き	?・煤付着
	6	〃	〃	〃	—	—	—	黒褐色	角閃石	良	(内)(外)磨き	〃
	7	〃	〃	〃	—	—	—	内・鈍い黄橙 外・褐灰色	長石・角閃石	普通	〃	〃
	8	〃	〃	〃	—	—	—	内・鈍い黄橙 外・暗褐色	長石目立つ	〃	〃	?
	9	〃	胴部	—	—	—	—	黒褐色	長石・角閃石	良	〃	〃
	10	〃	底部	—	—	5.0	—	内・鈍い黄褐 外・明赤褐色	長石多	〃	(内)ヨコ磨き (外)タテ磨き	太・煤付着
A調査区出土遺物												
48	1	深鉢	口縁部	平	40.3	8.6	—	にぶい黄橙色	砂粒・長石・滑石	普通	(内)磨き(外)条痕	三
	2	〃	〃	〃	31.9	9.2	—	明褐色	砂粒・長石・角閃石	良	(内)(外)磨き	〃
	3	〃	〃	〃	—	—	—	黒褐～暗褐色	砂粒多	〃	〃	
	4	〃	口縁～肩	波	19.0	7.0	—	暗褐色	砂粒・長石・角閃石	〃	〃	太
	5	〃	口縁～胴	〃	13.2	8.5	12.2	黒褐色	〃	〃	〃	〃
	6	〃	肩～胴部	—	—	9.1	22.2	にぶい黄橙色	砂粒・角閃石	〃	〃	太・煤付着
	7	〃	〃	—	—	4.4	18.8	にぶい黄褐色	砂粒・角閃石・金雲母	普通	〃	太
	8	〃	〃	—	—	5.4	20.6	〃	砂粒・長石・角閃石	良	(内)磨き	太・煤付着
	9	〃	〃	—	—	4.2	13.2	黒～黒褐色	砂粒少・長石・角閃石	〃	(内)(外)磨き	太
	10	〃	肩～底部	—	—	13.1	21.8	文様帯黒褐色 以下黄橙色	砂粒・長石・ 角閃石	〃	〃	〃
	11	〃	胴～底部	—	—	7.4	—	橙色	砂粒・角閃石・石英?	〃	〃	〃
49	12	浅鉢	口縁部	平	—	—	—	黒褐～褐色			〃	辛川
	13	深鉢	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色		良		太
	14	〃	〃	〃	—	—	—	灰黄褐色	長石目立つ	〃	(内)(外)磨き	太・煤付着
	15	〃	〃	〃	—	—	—	黒褐色		〃	〃	西平?
	16	〃	〃	〃	—	—	—	灰黄褐色	長石目立つ・金雲母	〃	〃	太
	17	〃	〃	〃	—	—	—	暗褐色	長石多・金雲母	〃	〃	太・煤付着
	18	〃	〃	〃	—	—	—	黒褐色	長石目立つ	普通	〃	太

図版No.	土器No.	器種	部分	口縁種類	口径	器高	最大胴部	色　調	胎土の特徴	焼成	調　整	形式・備考
49	19	深鉢	口縁部	平	—	—	—	灰黄褐色	角閃石目立つ	良	(内)(外)磨き	太
	20	〃	〃	波	—	—	—	〃	角閃石多	普通	〃	太・煤付着
	21	〃	〃	平	—	—	—	黒褐色	長石・角閃石	良	〃	太
	22	〃	〃	〃	—	—	—	〃	長石	普通	〃	〃
	23	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色	長石目立つ	良	〃	太・煤付着
	24	〃	〃	〃	—	—	—	浅黄橙色	精選・長石目立つ	普通	〃	太？
	25	〃	〃	〃	—	—	—	黒褐色	長石目立つ	〃	〃	太・煤付着
	26	〃	〃	波	—	—	—	褐灰色		良	〃	〃
	27	〃	〃	〃	—	—	—	黒褐色	長石目立つ	〃	〃	太
	28	〃	〃	平	—	—	—	にぶい黄橙色	長石・金雲母	普通		〃
	29	〃	〃	〃	—	—	—	黄褐色	長石多	〃	(内)(外)磨き	？
	30	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色	長石・角閃石	〃	〃	太・煤付着
	31	〃	〃	〃	—	—	—	暗褐色	長石がほとんど	良	〃	太・西平？
	32	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色	長石・金雲母	〃	〃	太・煤付着
	33	〃	〃	〃	—	—	—	灰褐色	角閃石目立つ	〃	〃	太？
	34	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色	長石・角閃石	〃	〃	太
	35	〃	〃	〃	—	—	—	〃	長石・金雲母	〃	〃	〃
	36	〃	〃	〃	—	—	—	灰黄褐色	長石・角閃石少量	〃	〃	太？・煤付着
	37	〃	〃	〃	—	—	—	黒褐色	長石・角閃石	〃		太
	38	〃	〃	〃	—	—	—	暗褐色	〃	〃	(内)(外)磨き	太？・煤付着
	39	〃	〃	〃	—	—	—	褐灰色	精選・長石・角閃石	〃	〃	太
	40	〃	〃	〃	—	—	—	灰黄褐色	長石目立つ	普通	〃	〃
	41	〃	〃	〃	—	—	—	〃	長石・角閃石	〃	〃	太？
	42	〃	〃	〃	—	—	—	灰褐色	長石目立つ	良	〃	太・煤付着
	43	〃	〃	〃	—	—	—	褐灰色	精選・微粒子長石	〃	〃	〃
	44	〃	〃	〃	—	—	—	灰黄褐色	長石目立つ	〃	(内)(外)ナデ	〃
	45	埦形？	〃	波？	—	—	—	にぶい黄褐色	角閃石目立つ	〃	(内)(外)磨き	？
	46	深鉢	〃	平	—	—	—	灰黄褐色	精選・微粒子長石		〃	太・煤付着
	47	〃	〃	〃	—	—	—	〃	長石多	良	〃	〃
50	48	〃	〃	〃	—	—	—	褐色	長石多・金雲母	〃	〃	〃
	49	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい褐色	長石・角閃石	〃	(内)磨き・削り後ナデ (外)磨き	太？・煤付着
	50	〃	〃	〃	—	—	—	〃	角閃石目立つ	〃	(内)(外)磨き	太・煤付着
	51	？	〃	〃	—	—	—	黒褐色			〃	煤付着
	52	深鉢	〃	〃	—	—	—	にぶい橙色	長石・角閃石	普通		？・粗製土器
	53	〃	〃	〃	—	—	—	灰白色	精選・角閃石目立つ	良	(内)(外)磨き	太？・煤付着
	54	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色	精選・長石・角閃石	〃	〃	太？
	55	〃	〃	〃	—	—	—	褐色	精選・長石わずか	普通	〃	太・煤付着
	56	〃	〃	〃	—	—	—	灰黄色	角閃石目立つ	〃	〃	鳥？三？
	57	〃	〃	〃	—	—	—	暗褐色	長石多	良		太？
	58	〃	〃	〃	—	—	—	〃	〃	〃	(内)(外)磨き (口端)ナデ	〃
	59	〃	〃	〃	—	—	—	橙色	〃	普通	(内)ナデ(外)磨き	晩期？
	60	〃	〃	〃	—	—	—	暗褐色	長石多・金雲母	良	(内)(外)磨き	三・煤付着
	61	〃	〃	〃	—	—	—	灰黄褐色	長石目立つ	〃	〃	太？・煤付着
	62	〃	〃	〃	—	—	—	〃	長石多	〃	(内)ナデ・磨き (外)磨き	〃
	63	〃	〃	〃	—	—	—	暗褐色	長石・角閃石	〃	(内)(外)磨き	太・煤付着
	64	〃	頸～肩部	—	—	—	—	灰黄褐色	長石	〃	〃	太
	65	〃	肩部	—	—	—	—	〃	微粒子長石目立つ	普通	〃	太・煤付着
	66	〃	頸部	—	—	—	—	にぶい褐色	長石目立つ	〃	(内)磨き(外)ナデ	太？
	67	〃	〃	—	—	—	—	にぶい黄橙色	長石ほとんど	良	(内)(外)磨き	太
	68	〃	肩部	—	—	—	—	褐色	長石少量	〃	〃	太？・煤付着

図版No	土器No	器種	部分	口縁種類	口径	器高	最大胴部	色　調	胎土の特徴	焼成	調　整	形式・備考
50	69	深鉢	肩部	—	—	—	—	にぶい黄橙色	長石わずか	良	(内)(外)磨き	太(西平？)・煤
	70	〃	〃	—	—	—	—	にぶい橙色	長石目立つ	〃	〃	太？
	71	〃	〃	—	—	—	—	暗褐色	長石かなり含む	普通	〃	太
	72	〃	胴部	—	—	—	—	にぶい黄褐色		やや悪	〃	太・煤一部付着
	73	〃	肩部	—	—	—	—	暗褐色	長石目立つ	良		太？(西平？)
	74	〃	胴部上半	—	—	—	—	灰黄褐色	〃	普通	(内)(外)磨き	太・煤付着
	75	〃	胴部	—	—	—	18～20	黄褐色		良	〃	〃
	76	〃	頸～肩部	—	—	—	—	にぶい黄褐色	精選・微粒子長石	〃	〃	太
	77	〃	肩部	—	—	—	—	灰褐色	長石わずか	〃	(内)磨き・ナデ (外)磨き	太・煤付着
	78	〃	胴部	—	—	—	—	にぶい黄橙色	精選	やや悪	(内)(外)磨き	太
	79	〃	〃	—	—	—	—	黒色			(内)磨き(タテ後ヨコ) (外)磨き	太・煤付着
	80	〃	肩部	—	—	—	—	橙色	精選・微粒子長石	良	(内)(外)磨き	？・煤付着
	81	〃	胴部	—	—	—	—	灰褐色	長石目立つ	〃	〃	太
	82	〃	〃	—	—	—	—	灰黄褐色	〃	〃	〃	太・煤付着
	83	〃	肩部	—	—	—	—	黒褐色	〃	〃	〃	〃
	84	〃	〃	—	—	—	—	にぶい黄褐色	長石少	〃	〃	太
51	85	〃	胴部	平	—	—	—	灰黄褐色	長石目立つ	普通	〃	〃
	86	〃	〃	〃	—	—	—	黒褐色		良	〃	〃
	87	〃	〃	〃	—	—	—	灰黄褐色	精選・長石目立つ	〃	〃	〃
	88	〃	〃	〃	—	—	—	暗褐色	長石目立つ	〃	〃	太・煤付着
	89	〃	肩部	〃	—	—	—	浅黄橙色	長石少量	〃	〃	太？・煤付着
	90	〃	〃	〃	—	—	—	暗褐色	長石・角閃石	普通	〃	太
	91	〃	〃	〃	—	—	—	〃	長石目立つ	良	〃	太？・煤付着
	92	〃	胴部	〃	—	—	—	褐灰色	精選・長石目立つ	普通	〃	〃
	93	〃？	肩部	〃	—	—	—	〃	〃・長石・角閃石 微粒子	良	〃	三？・煤付着
	94	深鉢	胴部	〃	—	—	—	灰黄褐色		悪	〃	太？
	95	〃	肩部	〃	—	—	—		角閃石目立つ	良	〃	三
	96	浅鉢	胴部	〃	—	—	—		長石・角閃石	〃	〃	西平？
	97	深鉢	肩部	〃	—	—	—		長石目立つ	〃	〃	三？・煤付着
	98	〃？	口縁部	〃	—	—	—		角閃石目立つ	普通	〃	鳥？
	99	深鉢	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色	精選	良	〃	鳥？・煤付着
	100	浅鉢？	〃	〃	—	—	—	浅黄橙色	くさり礫目立つ	普通	〃	古
	101	深鉢	〃	〃	—	—	—	暗褐色	角閃石やや目立つ	良	(内)磨き(外)条痕	天？・煤付着
	102	〃	胴部	—	—	—	—	褐灰色	精選・長石目立つ	普通		太？・煤付着
	103	〃	口縁部	平	—	—	—	にぶい黄褐色		悪	(内)磨き(外)条痕	天古？・煤付着
	104	浅鉢	〃	波	—	—	—	にぶい黄橙色		普通	(内)(外)ナデ	？
	105	深鉢	〃	平	—	—	—	にぶい黄褐色	精選・長石目立つ	良	(内)(外)ナデ	？・煤付着
	106	浅鉢	頸・胴部	〃	—	—	—	〃	精選・くさり礫	〃	〃	御？
B調査区出土遺物												
52	1	深鉢	口縁部	波	39.1	7.7	—	にぶい黄橙～ 褐灰色	砂粒・長石・ 角閃石	良	(内)(外)磨き	太
	2	〃	〃	〃	26.4	8.1	—	にぶい黄橙～ にぶい褐色	砂粒・長石・ 角閃石・金雲母	〃	〃	〃
	3	〃	〃	平	15.4	4.2	—	にぶい黄橙色	砂粒やや多・ 角閃石	〃	(内)磨き	三
	4	〃	胴部	—	—	5.1	—	橙色	砂粒・長石・ 角閃石	〃	(内)磨き・ナデ (外)磨き	太・X文様が上下段 各4個と推定
	5	〃	口縁部	平	22.5	4.4	—	にぶい黄橙色	〃	〃	(内)(外)磨き	鳥
	6	浅鉢	〃	〃	28.0	5.6	—	〃	砂粒多・角閃石・ 石英・雲母	〃	〃	古・口縁～頸と内側 に有機物焦付着

図版No.	土器No.	器種	部分	口縁種類	口径	器高	最大胴部	色　調	胎土の特徴	焼成	調　整	形式・備考
52	7	浅鉢	胴部	—	—	4.6	—	にぶい黄褐色	砂粒・角閃石・石英・長石	普通	(内)(外)磨き	古
	8	深鉢	口縁部	平	—	—	—	黒色		〃	〃	太？
	9	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色	長石多	良	〃	太
	10	〃	〃	〃	—	—	—	〃	長石・角閃石ともに少	普通	〃	太・煤付着
	11	〃	〃	〃	—	—	—	浅黄橙色 部分的灰黄褐色	長石多	良	〃	〃
	12	〃	〃	〃	—	—	—	灰白色	長石かなり含む	〃	〃	太？
	13	〃	〃	〃	—	—	—	褐灰色	精選	普通	〃	太？・煤付着
	14	〃	〃	〃	—	—	—	浅黄橙色	長石目立つ	良	〃	太・煤付着
	15	〃	〃	波	—	—	頸胴屈曲径 16.0	にぶい黄褐色	精選・角閃石目立つ	普通	〃	〃
	16	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色	長石かなり含む	〃	〃	〃
	17	〃	〃	平	—	—	—	黒褐色	角閃石多	〃	〃	〃
	18	〃	〃	波	—	—	—	灰黄褐色	精選	〃	〃	太？・煤付着
	19	〃	〃	平	28.0	—	—	にぶい黄橙色	長石目立つ	良	〃	〃
	20	〃	〃	〃	—	—	—	〃	微細長石目立つ	〃	〃	太？
	21	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色	精選	〃	〃	太・煤付着
	22	〃	〃	波	—	—	—	浅黄橙色	長石目立つ	やや悪	〃	太？
	23	〃	〃	〃	—	—	—	灰黄褐色	〃	普通	〃	太？・煤付着
	24	〃	〃	平	—	—	—	〃			〃	太以前？・煤付着
	25	〃	胴部	—	—	—	24.0	浅黄橙色	精選・角閃石多	良	〃	太・煤付着
	26	〃	〃	—	—	—	20.0	灰褐～黒褐色		〃	〃	太
	27	〃	〃	—	—	—	31.0	にぶい黄橙色	長石・角閃石	やや悪	〃	太・煤付着
53	28	〃	〃	—	—	—	21.0	浅黄橙色	精選	良	〃	太
	29	〃	〃	—	—	—	—	灰黄褐色	精選・微細な石英多	普通	〃	太・煤付着
	30	〃	〃	—	—	—	—	にぶい黄褐色	長石かなり含む	やや悪	〃	太
	31	〃	〃	—	—	—	17.0	灰黄褐色	微細な長石多	〃	〃	太・煤付着
	32	〃	〃	—	—	—	—	暗褐色	精選・長石目立つ	普通	〃	〃
	33	〃	〃	—	—	—	—	にぶい黄褐色		やや悪	〃	〃
	34	鉢	口縁部	平	16.0	—	—	灰黄褐色	精選・微細長石目立つ	普通	〃	？
	35	深鉢	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色	精選・長石目立つ	〃	〃	太以前・煤付着
	36	〃？	〃	〃	24.0	—	—	浅黄橙色	角閃石目立つ	〃	〃	天？
	37	鉢	〃	〃	—	—	—	にぶい赤褐色		良	〃	御？
	38	浅鉢	〃	〃	34.0	—	—	黒褐色	精選	〃	〃	鳥・煤付着
	39	深鉢	〃	？	40.0	—	—	にぶい黄褐色	長石目立つ	普通	〃	？・煤付着
	40	浅鉢？	高坏？	〃	—	—	—	にぶい黄橙色	精選・角閃石目立つ	〃	〃	太
	41	〃	口縁部	〃	—	—	—	浅黄橙色	くさり礫目立つ	〃	〃	古？
	42	鉢	〃	〃	28.0	—	—	灰黄褐色	精選・微細石英目立つ	良	(内)磨き・ナデ (外)磨き	黒川？
C調査区出土遺物												
54	1	深鉢	口縁部	波	34.3	16.0	—	にぶい黄橙～黒褐色	砂粒・石英・角閃石	良	(内)(外)磨き	太
	2	〃	〃	〃	33.7	13.1	—	にぶい黄橙色	砂粒・長石・石英・角閃石	〃	〃	〃
	3	〃	胴部	—	—	9.1	—	褐～鈍い褐色	砂粒・長石・石英	〃	〃	〃
	4	〃	〃	—	—	10.0	25.7	暗褐色～にぶい黄褐色	砂粒・長石・角閃石・雲母	〃	〃	〃
	5	高坏	口縁部	波	21.2	3.3	14.4	にぶい黄橙色	砂粒・長石・角閃石・石英		〃	〃
	6	〃	〃	山	21.1	4.0	—	浅黄橙色	精選・角閃石わずか	普通	〃	〃

図版No.	土器No.	器種	部分	口縁種類	口径	器高	最大胴部	色調	胎土の特徴	焼成	調整	形式・備考
55	7	深鉢	口縁部	波	25.6	14.0	26.3	にぶい黄橙色	砂粒(約1.5mm大のもの含む)・長石・角閃石	良	(内)(外)磨き	太
	8	〃	〃	平	27.3	4.4	—	黒褐色	砂粒・長石・角閃石	〃	〃	三
	9	〃	〃	〃	27.6	5.9	—	にぶい黄橙色	砂粒	〃	〃	〃
	10	浅鉢	〃	〃	21.4	4.5	—	にぶい黄橙～暗褐色	砂粒・角閃石	〃	〃	鳥
	11	〃	〃	〃	15.9	4.4	—	にぶい黄橙色	砂粒(1.5mm以上のもの含む)・石英・角閃石	〃	〃	〃
	12	〃	胴部	—	—	4.6	34.7	褐色	砂粒・長石・角閃石	〃	〃	三
	13	深鉢	〃	—	—	5.5	28.9	にぶい橙色	砂粒	〃	(内)ナデ(外)磨き	御
	14	〃	〃	—	—	6.8	15.0	にぶい黄褐色	砂粒少	〃	(内)(外)磨き	太
	15	〃	〃	—	—	4.0	17.9	にぶい黄褐～黒褐色	砂粒	〃	〃	〃
	16	〃	口縁部	波	—	5.2	15.7	にぶい黄褐色	砂粒多	〃	(外)磨き	三
	17	浅鉢	〃	平	17.3	6.3	19.3	にぶい黄橙～黒褐色	砂粒・長石・角閃石・石英?	〃	(内)(外)磨き	鳥
	18	〃	〃	〃	17.2	2.5	—	にぶい黄橙色	砂粒・長石	〃	〃	〃
	19	深鉢	胴部	—	—	2.7	14.2	〃	砂粒・角閃石	〃	(外)磨き	三
	20	浅鉢	〃	—	—	2.7	22.0	〃	長石・くさり礫	やや悪	(内)(外)磨き	?
	21	〃	口縁部	平	17.2	4.5	18.6	〃	砂粒・長石・角閃石	良	(外)磨き	三
	22	〃	〃	〃	20.6	5.0	5.0	にぶい黄褐色	砂粒・長石・角閃石・金雲母	〃	(内)(外)磨き	〃
56	23	〃	〃	〃	29.1	5.1	—	にぶい黄褐～暗褐色	砂粒・長石・角閃石	〃	〃	〃
	24	深鉢	〃	〃	31.4	6.3	—	にぶい黄橙色	砂粒・角閃石	普通	〃	鳥
	25	〃	〃	〃	30.4	7.6	—	〃	砂粒・長石・角閃石・雲母	良	〃	三
	26	浅鉢	〃	〃	27.3	8.4	—	〃	砂粒	〃	〃	〃
	27	〃	〃	〃	17.2	2.9	—	明褐色	砂粒・長石・角閃石・石英	〃	〃	鳥
	28	〃	〃	〃	13.4	2.9	—	にぶい橙色	砂粒・長石・角閃石	〃	〃	?
	29	〃	〃	〃	34.3	3.8	—	にぶい黄橙色	〃	〃	〃	鳥
	30	〃	?	—	—	3.1	—	〃	〃	〃	〃	
	31	〃	口縁部	平	33.8	4.1	—	にぶい黄色	砂粒	普通	〃	鳥
	32	〃	〃	〃	31.8	3.4	—	にぶい黄橙色	砂粒・長石・角閃石・石英	良	〃	〃
	33	〃	〃	〃	30.5	3.7	—	にぶい黄褐色	砂粒・長石・角閃石	〃	〃	〃
	34	〃	〃	〃	14.9	5.2	16.0	灰黄褐色		〃	〃	三・煤付着
	35	深鉢	胴部	—	—	4.8	12.8	にぶい黄橙色	砂粒(2mm位のもの含)・角閃石・金雲母	〃	〃	天
	36	〃	口縁部	平	13.6	3.6	—	黒褐色	砂粒・長石・角閃石	〃	〃	御
57	37	〃	〃	〃	37.2	12.6	—	黒褐～褐色	〃	〃	〃	〃
	38	〃	〃	〃	37.8	8.0	—	にぶい黄褐色	砂粒・長石・角閃石・金雲母	普通	〃	?
	39	〃	〃	〃	27.0	6.1	—	〃	砂粒	良	〃	御
	40	〃	〃	〃	16.6	3.8	—	黒褐～暗褐色	砂粒少		〃	?
	41	〃	〃	〃	21.9	4.2	—	にぶい橙色	砂粒・角閃石	〃	〃	〃
	42	浅鉢	〃	〃	16.6	4.8	—	鈍い黄橙～黒	砂粒		〃	御
	43	〃	〃	〃	35.0	3.9	—	にぶい黄褐色	砂粒・金雲母多・長石・石英	〃	(内)(外)磨き	〃
	44	〃	〃	〃	33.1	4.1	—	〃	砂粒・角閃石	普通	(内)磨き・ナデ(外)ナデ	天
	45	〃	〃	〃	28.8	3.1	—	にぶい黄橙色	〃	〃	(内)(外)ナデ	〃

図版No.	土器No.	器種	部分	口縁種類	口径	器高	最大胴部	色　調	胎土の特徴	焼成	調　整	形式・備考
57	46	浅鉢	口縁部	平	37.8	4.0	—	にぶい黄褐色	砂粒・角閃石	良	(内)(外)磨き	天
	47	〃	〃	〃	28.6	4.0	—	にぶい黄橙色	砂粒	〃	〃	御
	48	〃	〃	〃	27.4	1.6	—	〃	砂粒・角閃石	〃	〃	黒
58	49	〃	〃	〃	38.0	2.3	—	灰黄褐色	精選・くさり礫	大変良	〃	〃
	50	〃	〃	〃	15.8	3.9	—	にぶい赤褐色	砂粒・長石・角閃石・金雲母	良	〃	〃
	51	深鉢	〃	波	—	—	—	灰黄褐色	精選	〃	〃	太・煤付着
	52	〃	〃	平	18.0	—	—	にぶい黄橙色	長石目立つ・金雲母	普通	〃	太
	53	〃	〃	波	—	—	—	にぶい黄褐色	長石目立つ	やや悪	〃	〃
	54	〃	〃	平	—	—	—	灰黄褐色	長石目立つ・金雲母	普通	〃	太・煤付着
	55	〃	〃	波	—	—	—	にぶい黄褐色		〃	〃	太
	56	〃	〃	〃	—	—	—	黒褐色		良	〃	太・煤付着
	57	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色		普通	〃	〃
	58	〃	〃	平	—	—	—	灰黄褐色	金雲母	〃	〃	〃
	59	〃	〃	波	—	—	—	黒褐色		良	〃	太
	60	〃	〃	平	—	—	—	にぶい黄褐色		〃	〃	太・煤付着
	61	〃	〃	波	—	—	—	浅黄橙色	精選	〃	〃	太？・煤付着
	62	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色		〃	〃	太・煤付着
	63	〃	〃	〃	—	—	—	〃		普通	〃	〃
	64	〃	〃	〃	—	—	—	暗褐色		〃	〃	太
	65	〃	〃	平	—	—	—	褐灰色	長石目立つ	良	〃	太・煤付着
	66	〃	〃	波	—	—	—	にぶい黄褐色	くさり礫	〃	〃	〃
	67	〃	〃	〃	—	—	—	灰黄褐色		普通	〃	太？
	68	〃	〃	〃	40以上	—	—	にぶい黄褐色	長石目立つ	良	〃	太・煤付着
	69	〃	〃	〃	—	—	—	灰黄褐色		〃	〃	太
	70	〃	〃	平	—	—	—	黒褐色	長石目立つ	普通	〃	〃
	71	〃	〃	波	—	—	—	にぶい黄橙色	精選	良	〃	〃
	72	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色	〃	〃	〃	〃
	73	〃	〃	〃	—	—	—	〃	くさり礫	〃	〃	太・煤付着
	74	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい赤褐色		〃	〃	〃
	75	〃	〃	〃	—	—	—	暗褐色		普通	〃	太
	76	〃	〃	〃	—	—	—	褐灰色	長石多	良	〃	太・煤付着
	77	〃	胴部	—	—	—	—	〃	精選	普通	〃	〃
	78	〃	〃	—	—	—	30.0	黒褐色	長石目立つ	良	〃	太
	79	〃	〃	—	—	—	—	にぶい黄橙色	金雲母	普通	(内)磨き	〃
	80	〃	〃	—	—	—	—	暗褐色	長石多	やや悪	(内)(外)磨き	〃
	81	〃	〃	—	—	—	—	にぶい黄橙色	長石目立つ	良	〃	〃
	82	〃	頸～胴部	—	—	—	—	灰黄褐色	長石多	〃	〃	〃
	83	〃	胴部	—	—	—	—	にぶい黄褐色	精選	〃	〃	〃
	84	〃	〃	—	—	—	—	黒色	〃	〃	〃	〃
	85	〃	〃	—	—	—	—	にぶい黄褐色		普通	〃	太・煤付着
59	86	〃	頸～胴部	—	—	—	—	褐色	精選	良	〃	太
	87	〃	胴部	—	—	—	26～28.0	にぶい黄褐色	〃	普通	〃	太・煤付着
	88	〃	〃	—	—	—	26.0	にぶい黄橙色	精選・金雲母	良	〃	太
	89	〃	頸～胴部	—	—	—	—	にぶい黄褐色	金雲母	〃	〃	〃
	90	〃	〃	—	—	—	頸径24.0	暗褐色		〃	〃	太・煤付着
	91	〃	胴部	—	—	—	—	にぶい黄褐色	金雲母	普通	〃	太
	92	〃？	〃	—	—	—	—	灰黄褐色		〃	〃	太？三？・煤付着
	93	深鉢	〃	—	—	—	—	暗褐色		普通	〃	太・煤付着
	94	〃	〃	—	—	—	26.0	にぶい黄褐色	金雲母	良	〃	太
	95	〃	〃	—	—	—	—	〃		悪	〃	？
	96	〃	〃	—	—	—	—	〃	長石多	普通	〃	太・煤付着

図版No.	土器No.	器種	部分	口縁種類	口径	器高	最大胴部	色　調	胎土の特徴	焼成	調　整	形式・備考
59	97	深鉢	胴部	—	—	—	—	灰黄褐色	角閃石多	やや悪	(内)(外)磨き	太？
	98	浅鉢	口縁部	平	30.0	—	—	にぶい黄褐色		良	〃	太
	99	〃？	〃	山	—	—	24.0	暗褐色		〃	〃	〃
	100	深鉢	〃	波	—	—	—	にぶい黄橙色	金雲母	やや悪	〃	？
	101	〃	〃	〃	—	—	—	褐色	角閃石目立つ	普通	〃	太？
	102	〃	〃	波？	—	—	—	灰黄褐色		良	〃	〃
	103	〃	〃	平	—	—	—	にぶい黄褐色	精選	〃	〃	太
	104	浅鉢	〃	〃	—	—	—	暗褐色	長石かなり含む	普通	〃	御？天？
	105	深鉢	〃	平？	—	—	—	黒褐色		〃	〃	太
	106	〃	〃	波	—	—	—	暗褐色	長石多	やや悪	〃	太・煤付着
	107	〃	〃	〃	—	—	—	〃		良	〃	御？・煤付着
	108	〃	〃	平	—	—	—	〃		〃	〃	？
	109	〃	〃	波？	—	—	—	褐灰色	長石目立つ・金雲母	〃	〃	太？・煤付着
	110	〃？	〃	平	23.0	—	—	褐色	長石目立つ	〃	〃	三
	111	鉢	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色		普通	〃	？
	112	深鉢	〃	〃	—	—	—	〃	長石かなり含む	良	〃	？・煤付着
	113	〃	胴部	—	—	—	—	〃	〃	やや悪	〃	太・西？・煤付着
	114	〃	口縁部	波	—	—	—	暗褐色	長石多	〃	〃	太・煤付着
	115	〃	胴部	—	—	—	—	にぶい黄褐色		普通	〃	三？
	116	〃	〃	—	—	—	—	浅黄橙色		〃		〃
	117	〃	〃	—	—	—	—	にぶい黄橙色		良	(内)(外)磨き	太・三？・煤付着
	118	〃	〃	—	—	—	—	〃		やや悪	〃	三？
	119	浅鉢	口縁部	平	—	—	—	灰黄褐色		良	〃	太・三？
	120	深鉢	〃	波	—	—	—	にぶい黄褐色		普通	〃	三・煤付着
	121	〃	〃	〃	—	—	—	灰黄褐色	長石多	〃	〃	三
	122	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色	くさり礫	良	〃	〃
	123	〃	〃	〃	—	—	—	黒褐色		〃	〃	〃
	124	高坏	坏部？	—	—	—	—	にぶい黄色	砂粒・長石・角閃石・石英・金雲母	〃	〃	
	125	深鉢	口縁部	波	—	—	—	明黄褐色	精選	〃	〃	三
	126	〃	〃	平	—	—	—	灰褐色		普通	〃	太
	127	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色	精選	良	〃	三？
	128	浅鉢	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色		〃	〃	〃
60	129	深鉢	〃	〃	—	—	—	〃		普通	(内)削り後ナデ (外)ナデ	？
	130	〃	〃	〃	—	—	—	〃	精選	良	(内)(外)磨き	三・煤付着
	131	〃	〃	〃	—	—	—	〃	精選・くさり礫	普通	〃	三？
	132	〃？	〃	〃	—	—	—	暗褐色		〃	〃	〃
	133	不明	？	—	—	—	—	黒褐色	精選・混和材少	良	〃	三
	134	浅鉢	口縁部	平	—	—	—	〃		〃	〃	〃
	135	深鉢	？	—	—	—	—	にぶい黄橙色		普通	〃	〃
	136	〃	口縁部	平	—	—	—	暗褐色		良	〃	三・煤付着
	137	？	？	—	18～20	—	—	明黄褐色	精選	普通	〃	三
	138	深鉢	口縁部	平	16.0	—	—	灰黄褐色		良	〃	〃
	139	浅鉢	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色	精選・くさり礫	〃	〃	〃
	140	深鉢？	〃	〃	—	—	—	黒褐色		普通	〃	三・煤付着 (X紋は)張付浮文
	141	浅鉢	口縁部	〃	22.0	—	—	にぶい黄褐色		良	〃	三・煤付着
	142	〃？	〃	〃	—	—	—	暗褐色		普通	〃	三
	143	浅鉢	〃	〃	10～15	—	—	明黄褐色	精選	〃	〃	〃
	144	〃？	〃	〃	—	—	—	黒褐色		良	〃	〃
	145	深・浅？	〃	〃	—	—	—	褐灰色		〃	〃	御・天？
	146	浅鉢	〃	〃	24.0	—	—	にぶい黄褐色		〃	〃	天？・煤付着

図版No	土器No	器種	部分	口縁種類	口径	器高	最大胴部	色　調	胎土の特徴	焼成	調　整	形式・備考
60	147	浅鉢	口縁部	平	12.0	—	—	暗褐色	長石目立つ	良	(内)(外)磨き	三
	148	〃	〃	〃	—	—	—	浅黄橙色	くさり礫	〃	〃	〃
	149	深鉢	胴部	—	—	—	—	灰褐色		普通	〃	三・煤付着
	150	〃	〃	—	—	—	—	にぶい黄褐色		良	〃	三・島？
	151	〃	頸～胴部	—	—	—	—	褐灰色	精選・長石目立つ	〃	〃	三・煤付着
	152	〃	胴部	—	—	—	18.0	褐色		〃	〃	三
	153	〃	肩部	—	—	—	—		角閃石・長石わずか	〃	〃	
	154	〃	〃	—	—	—	—	にぶい黄橙色	砂粒・長石 (2㎜大含む) 角閃石(〃)・石英	普通	(内)ナデ(外)磨き	三・深鉢か注口？ 外面に羽状文あり 上部に沈線3本
	155	？	胴部	—	—	—	—	灰黄褐色		〃	(内)(外)磨き	三
	156	高坏	？	—	—	—	—	暗褐色	長石・角閃石かなり含む	〃	〃	赤色顔料僅に付着
	157	〃	坏部？	—	—	—	—	明黄褐色	くさり礫	〃	〃	？
	158	深鉢	口縁部	平	—	—	—	浅黄橙色		良	〃	鳥
	159	〃	〃	〃	30.0	—	—	にぶい黄橙色	長石目立つ	やや悪	〃	？
	160	〃	〃	山？	—	—	—	〃	長石目立つ・くさり礫		〃	鳥？御？
	161	〃	〃	波	—	—	—	にぶい黄褐色		大変良	〃	太？三？・煤付着
	162	〃	〃	平	—	—	—	黒褐色	長石目立つ	良	〃	鳥
	163	〃？	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色		普通	〃	三？鳥？
	164	深鉢	〃	〃	22.0	—	—	にぶい黄橙色	くさり礫	〃	〃	鳥
	165	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色		悪	〃	〃
	166	浅鉢	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色		普通	〃	？
	167	深鉢	〃	〃	—	—	—	明赤褐色		やや悪	〃	鳥？
	168	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色	精選・くさり礫	良	〃	三？・煤付着
	169	〃	〃	〃	22.0	—	—	〃	精選	〃	〃	
	170	〃	〃	〃	30.0	—	—	〃	〃	〃	〃	鳥？
	171	〃	〃	〃	20.0	—	—	暗褐色	〃	普通	〃	天？・煤付着
	172	〃	〃	〃	—	—	—	褐灰色			〃	煤付着
	173	〃	〃	波	—	—	—	にぶい黄褐色		やや悪	〃	？
	174	〃	〃	〃	—	—	—	褐灰色	精選	普通	〃	鳥？・煤付着
	175	〃	〃	〃	—	—	—	黒褐色	長石目立つ・くさり礫	やや悪	〃	？
	176	〃	〃	〃	14.0	—	—	にぶい黄橙色		普通	〃	鳥？御？天？ 黒色顔料？
	177	〃	頸～胴部	—	—	—	—	にぶい黄褐色	精選	良	〃	鳥・煤付着
61	178	〃	口縁部	平	—	—	—	暗褐色	長石目立つ	〃	〃	三
	179	〃	〃	〃	28.0	—	—	黒褐色	精選	〃	〃	〃
	180	浅鉢	〃	〃	26.0	—	—	暗褐色		〃	〃	鳥
	181	〃	〃	〃	—	—	—	灰黄褐色		〃	〃	〃
	182	〃	〃	〃	30～34	—	—	にぶい黄褐色	角閃石目立つ	〃	〃	〃
	183	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色		やや悪	〃	三？鳥？
	184	〃	〃	〃	—	—	—			〃	〃	鳥
	185	〃	〃	〃	26.0	—	—	灰黄褐色	長石目立つ	〃	〃	〃
	186	深鉢	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色	精選	〃	〃	鳥？御？
	187	浅鉢	〃	〃	—	—	—	褐灰色		やや悪	〃	鳥・煤付着
	188	〃	〃	〃	—	—	—	灰黄褐色	くさり礫	良	〃	鳥
	189	深鉢	〃	〃	—	—	—	暗褐色	精選	〃	〃	〃
	190	浅鉢	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色	〃	普通	〃	三？鳥？
	191	〃	〃	〃	—	—	—	灰黄褐色		良	〃	鳥
	192	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色	くさり礫	やや悪	〃	〃
	193	〃	〃	〃	20.0	—	—	暗褐色	長石目立つ	普通	〃	？
	194	〃	〃	？	—	—	—	〃	精選	良	〃	鳥
	195	〃	〃	平	—	—	—	にぶい黄褐色	角閃石多	やや悪	〃	〃
	196	深鉢	〃	〃	24.0	—	—	にぶい黄橙色	くさり礫	良	〃	御？天？

図版No	土器No	器種	部分	口縁種類	口径	器高	最大胴部	色　調	胎土の特徴	焼成	調　整	形式・備考
61	197	浅鉢	口縁部	平	—	—	—	にぶい黄褐色			(内)(外)磨き	鳥
	198	注口	胴部	—	—	—	20.0	暗褐色	精選	良	〃	〃
	199	深鉢	口縁部	平	—	—	—	にぶい黄橙色	〃	〃	〃	御？鳥？
	200	〃	〃	〃	—	—	—	灰黄褐色		やや悪	〃	天
	201	〃	〃	〃	24～30	—	—	にぶい黄褐色	精選	大変良	〃	御
	202	〃	〃	〃	—	—	—	赤褐色	長石目立つ	良	〃	〃
	203	〃	〃	〃	—	—	—	灰黄褐色	精選	〃	〃	鳥？
	204	〃	〃	〃	24～26	—	—	黄褐色	長石かなり含む・金雲母	悪	〃	御？
	205	〃	〃	〃	—	—	—	褐色	くさり礫	普通	〃	天・煤付着
	206	〃	〃	〃	—	—	—	灰黄褐色		良	〃	御？
	207	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色	角閃石なし	〃	〃	御
	208	〃	〃	〃	—	—	—	〃	金雲母	普通	〃	御・天？・煤付着
	209	〃	〃	〃	—	—	—	暗褐色	精選	良	〃	〃
	210	〃	〃	〃	26.0	—	—	黒褐色	くさり礫	普通	〃	？・煤付着
	211	〃	〃	〃	24.0	—	—	暗褐色		〃	〃	御・天？
	212	〃	〃	〃	34.0	—	—	にぶい黄橙色	角閃石目立つ	良	〃	御・天？・煤付着
	213	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色		普通	(内)ナデ(外)磨き	御
	214	〃	〃	〃	—	—	—	褐灰色			(内)(外)磨き	御・天？
	215	〃	〃	〃	—	—	—	浅黄橙色	精選	普通	〃	？・煤付着
	216	〃	〃	〃	—	—	—	黒褐色		〃	〃	〃
	217	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色		〃	〃	御・天？・煤付着
	218	〃	〃	〃	—	—	—	〃	精選	良	〃	御・煤付着
	219	〃	〃	波	—	—	—	暗褐色		普通	〃	御？
	220	浅鉢	〃	山	—	—	—	〃	長石多	良	〃	御
	221	深鉢	〃	〃	—	—	—	黒褐色		〃	〃	〃
	222	〃	〃	平	—	—	—	にぶい黄褐色	長石目立つ	〃	〃	御？・煤付着
	223	〃	〃	〃	—	—	—	褐灰色			〃	鳥・御？
	224	浅鉢	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色		大変良	〃	御
	225	〃	頸～胴部	—	—	—	34.0	褐色	角閃石目立つ	普通	〃	御・煤付着
	226	〃？	口縁部	平	—	—	—	明黄褐色	精選	良	〃	御？
	227	浅鉢	〃	山？	30～40	—	—	にぶい黄橙色	精選・長石目立つ	〃	〃	〃
	228	深鉢	〃	平	—	—	—	にぶい黄褐色	くさり礫	〃	(内)(外)磨き・ナデ	天
	229	〃	〃	〃	36.0	—	—	にぶい黄橙色		やや悪	(内)磨き(外)ナデ	天・煤付着
	230	〃	〃	〃	30.0	—	—	にぶい黄褐色		良	(内)(外)磨き	天
	231	〃	〃	〃	24.0	—	—	黒褐色	長石目立つ	普通	〃	〃
	232	〃	〃	山	—	—	—	にぶい黄橙色		良	〃	天？
	233	浅鉢	口～胴部	？	26.0	—	—	にぶい黄褐色	長石目立つ	〃	〃	御？
62	234	深鉢	口縁部	平	—	—	—	〃		普通	〃	御・天？
	235	〃	〃	〃	—	—	—	褐色	くさり礫	良	〃	御
	236	〃	〃	〃	30.0	—	—	にぶい黄褐色	長石多	普通	〃	天
	237	〃	〃	〃	—	—	—	〃	長石目立つ	やや悪	〃	〃
	238	〃	〃	〃	—	—	—	〃		普通	〃	〃
	239	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色		〃	〃	天・煤付着
	240	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色		〃	〃	天
	241	〃	〃	〃	—	—	—	〃	角閃石目立つ	やや悪	〃	天・古？
	242	〃	〃	〃	24.0	—	—	灰黄褐色		良	〃	天
	243	〃	頸部	—	—	—	—	暗褐色		やや悪	(内)ナデ(外)磨き	天・煤付着
	244	〃	口縁部	平	—	—	—	黒褐色	くさり礫	良	(内)(外)磨き	天
	245	〃	〃	〃	—	—	—	浅黄橙色	〃	やや悪	〃	？
	246	〃	〃	〃	—	—	—	灰白色	長石目立つ	〃	〃	古？
	247	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色		普通	〃	天？
	248	〃	胴部	—	—	—	—	〃	くさり礫	〃	〃	〃

図版No.	土器No.	器種	部分	口縁種類	口径	器高	最大胴部	色　調	胎土の特徴	焼成	調　整	形式・備考
62	249	深鉢	頸～胴部	—	—	—	—	にぶい黄褐色		やや悪	(内)(外)磨き	天？・煤付着
	250	〃	胴部	—	—	—	—	褐灰色	くさり礫	普通	〃	天・煤付着
	251	〃	口縁部	平	—	—	—	明黄褐色	金雲母	〃	〃	天？
	252	〃	〃	〃	—	—	—	暗褐色		〃	〃	天・御・煤付着
	253	〃	〃	〃	20.0	—	—	〃		〃	〃	天・煤付着
	254	〃	〃	〃	—	—	—	黒褐色		やや悪	〃	天？・煤付着
	255	〃	〃	〃	26～28	—	—	暗褐色	角閃石目立つ	〃	〃	御？天？
	256	浅鉢	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色	精選	良	〃	古
	257	〃	〃	〃	—	—	—	褐灰色	〃	〃	〃	天？古？・煤付着
	258	〃	〃	〃	—	—	—	浅黄橙色	長石目立つ	〃	〃	古？
	259	〃	〃	〃	32.0	—	—	褐灰色		〃	〃	天？古？
	260	〃	頸～胴部	—	—	—	—	暗褐色	精選・長石目立つ	〃	〃	御？天？
	261	深鉢	口縁部	平	32.0	—	—	灰黄褐色	くさり礫	普通	(内)磨・ナデ (外)ナデ・磨き	天・煤付着
	262	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色		やや悪	(内)(外)磨き	古
	263	〃	〃	〃	28.0	—	—	褐色	長石目立つ	普通	〃	古・煤付着
	264	〃	〃	〃	—	—	—	暗褐色		やや悪	〃	古
	265	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色		普通	〃	天
	266	〃	〃	〃	—	—	—	黒褐色		〃	(内)ナデ (外)条痕・ナデ	？
	267	浅鉢	〃	〃	—	—	—	〃	長石目立つ	良	(内)(外)磨き	古
	268	鉢	〃	〃	20.0	—	—	にぶい黄褐色	〃	普通	〃	古・煤付着
	269	浅鉢	〃	〃	14.0	—	—	暗褐色	長石かなり含む	〃	〃	古
	270	〃	〃	〃	—	—	—	褐灰色	精選	良	〃	〃
	271	〃	〃	〃	—	—	—	鈍い灰黄褐色		〃	〃	〃
	272	深鉢？	胴部	—	—	—	—	褐灰色	金雲母	やや悪	〃	古？
59	273	浅鉢？	口縁部	平	—	—	—	にぶい黄橙色	精選	大変良	〃	太・彩色土器
63	274	深鉢	〃	波	—	—	—	にぶい黄褐色	砂粒(1.5mm以上含む)長石・角閃石	良	〃	
	275	？	胴部	—	—	—	—	灰黄褐色	砂粒・角閃石	〃	〃	
	276	〃	〃	—	—	—	—	にぶい黄橙色	砂粒多・角閃石	〃	〃	
	277	〃	〃	—	—	—	—	明褐色	砂粒	やや良	(内)磨き	
	278	〃	頸～胴部	—	—	—	—	灰黄褐色	砂粒・角閃石	良	(内)磨き	
	279	〃	胴部	—	—	—	—	にぶい黄橙色	〃	〃	〃	
	280	〃	頸～胴部	—	—	—	—	暗褐色	〃	〃		
	281	〃	口縁部	平	—	—	—	にぶい黄橙色	砂粒	〃		
	282	深鉢	〃	波	—	—	—	〃	砂粒少・石英・角閃石	〃	(内)(外)磨き	
	283	？	〃	平	—	—	—	暗灰黄色	砂粒	〃	〃	
	284	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色	〃	〃	〃	
	285	深鉢	〃	〃	—	—	—	〃	砂粒・石英	〃	(内)(外)ナデ	
	286	？	〃	〃	—	—	—	〃	砂粒・角閃石多	〃	(内)(外)磨き	
	287	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい褐色	砂粒少	〃	〃	
	288	〃	〃	波	—	—	—	にぶい橙色	砂粒・長石・角閃石	〃	〃	
	289	〃	〃	平	—	—	—	にぶい黄橙色	砂粒少	〃	〃	
	290	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄色	砂粒・角閃石・長石	〃	〃	
	291	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい橙色	砂粒少・角閃石多	〃	〃	
	292	〃	〃	〃	—	—	—	〃	砂粒・長石・角閃石	〃	〃	
	293	〃	〃	〃	—	—	—	灰黄褐色	砂粒	〃	〃	
	294	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい橙色	砂粒少	〃	〃	
	295	〃	〃	〃	—	—	—	鈍い黄橙～黒	砂粒少・角閃石	〃	(内)磨き	
	296	高坏	〃	波	—	—	—	にぶい黄橙色	砂粒	〃	(内)(外)磨き	
	297	〃	〃	〃	—	—	—	〃	砂粒・角閃石・金雲母僅か	〃		

図版No.	土器No.	器種	部分	口縁種類	口径	器高	最大胴部	色　調	胎土の特徴	焼成	調　整	形式・備考
63	298	?	胴部	—	—	—	—	にぶい黄橙色	砂粒・角閃石	良	(内)(外)磨き	煤付着
	299	〃	口縁部	平	—	—	—	にぶい褐色	〃	〃	〃	
	300	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色	砂粒・長石・角閃石・金雲母	〃	(内)ナデ・磨き (外)磨き	
	301	深鉢	〃	波	—	—	—	〃	砂粒・長石・角閃石	〃	(内)(外)磨き	
	302	浅鉢	〃	平	—	—	—	〃	〃	〃	(内)磨き (外)部分磨き	
	303	?	〃	〃	—	—	—	〃	〃	〃		
	304	〃	〃	〃	—	—	—	〃	砂粒	〃	(内)(外)磨き	
	305	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい橙色	〃	〃	〃	
	306	〃	〃	〃	—	—	—	黒褐～灰黄褐色	砂粒・角閃石	〃	〃	
64	307	浅鉢	〃	〃	—	—	—	黒褐色	砂粒・長石・角閃石	〃	(内)磨き (外)部分磨き	
	308	?	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色	砂粒	〃	(内)(外)磨き	
	309	注口?	胴部	—	—	—	—	〃	砂粒・長石?	〃	〃	
	310	深鉢	口縁部	波	—	—	—	にぶい黄橙～灰黄褐色	砂粒・角閃石	〃	〃	
	311	?	〃	平	—	—	—	にぶい黄褐色	砂粒少	〃	〃	
	312	〃	〃	〃	—	—	—	明赤褐色	〃	〃		
	313	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色	砂粒・長石・角閃石・金雲母	〃	〃	
	314	〃	〃	〃	—	—	—	〃	砂粒少	〃	〃	
	315	〃	〃	〃	—	—	—	褐色	砂粒・石英	〃	〃	
	316	浅鉢	〃	〃	—	—	—	浅黄橙色	砂粒・長石・角閃石	〃	〃	
	317	〃	〃	波	—	—	—	にぶい褐色	砂粒	〃	(内)ナデ・磨き (外)磨き	
	318	〃	〃	平	—	—	—	黒褐色	〃	〃	(内)(外)磨き	
	319	〃	〃	〃	—	—	—	黄灰色	砂粒・長石	〃	〃	
	320	〃	〃	波	—	—	—	にぶい黄橙色	砂粒・長石・角閃石	〃	(内)磨き	
	321	〃	〃	平	—	—	—	灰黄褐色	砂粒	〃	〃	
	322	〃	〃	ゆるい波	—	—	—	にぶい黄橙色	〃	〃	〃	
	323	〃	〃	平	—	—	—	灰黄褐色	〃	〃	〃	
	324	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色	砂粒少・角閃石	〃	(内)(外)ナデ	
D調査区出土遺物												
65	1	浅鉢	口縁部	平	—	—	—	にぶい黄橙色	精選・微粒子角閃石含む	良	(外)磨き	三
	2	深鉢	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色	砂粒	普通	(内)(外)磨き	鳥
	3	浅鉢	?	—	—	—	—	鈍い褐～黒褐	砂粒・長石・滑石	良	〃	〃
	4	深鉢	〃	—	—	—	—	灰黄～黒褐色	砂粒少	〃	〃	三
	5	浅鉢	口縁部	平	—	—	—	浅黄橙色	砂粒多・角閃石・石英	〃	〃	御
	6	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色	砂粒・長石・角閃石	〃	〃	〃
	7	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐～黒色	砂粒・長石・角閃石・石英	〃	〃	〃
	8	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色	砂粒・角閃石	〃	〃	天
	9	〃	〃	〃	—	—	—	鈍い黄橙～橙	砂粒・長石	〃	〃	御
	10	深鉢	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色	砂粒・角閃石	〃	(外)磨き	天
	11	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色	〃	普通	(内)磨き・ナデ (外)磨き	〃
	12	〃	〃	〃	—	—	—	〃	砂粒・長石・金雲母	良	(内)(外)磨き	〃
	13	〃	〃	〃	—	—	—	浅黄橙色	砂粒・長石・角閃石	普通	〃	古
	14	浅鉢	〃	〃	—	—	—	明黄色	砂粒・角閃石	良	(内)(外)磨き	天
66	15	深鉢	〃	〃	26.7	6.9	26.9	黒褐色	砂粒・長石・角閃石・石英	〃	(内)磨き(外)ヨコ後タテ・斜め磨き	御

図版No.	土器No.	器種	部分	口縁種類	口径	器高	最大胴部	色調	胎土の特徴	焼成	調整	形式・備考
66	16	浅鉢	口縁部	平	15.8	2.3	—	にぶい黄橙～黒褐色	砂粒・角閃石	良	(内)(外)磨き	御
	17	〃	〃	〃	37.4	6.1	33.4	浅黄色	〃	〃	〃	天
	18	〃	〃	〃	36.0	4.5	30.3	にぶい黄橙色	〃	〃	〃	御・内外に煤付着
	19	〃	〃	〃	30.4	4.1	—	黒褐色	砂粒・長石・角閃石	〃	(外)磨き	天
	20	〃	〃	〃	26.1	5.9	25.7	にぶい黄褐色	砂粒・角閃石	〃	(内)(外)磨き	古
	21	〃	〃	〃	20.1	3.0	18.0	灰黄褐色	砂粒	〃	(内)(外)丁寧な磨き	〃
	22	〃	〃	〃	29.8	5.9	29.6	にぶい黄褐色	砂粒少・角閃石	〃	(内)(外)磨き	〃
	23	〃	〃	〃	21.4	4.9	—	にぶい黄橙色	砂粒・長石	〃	〃	天
	24	〃	〃	〃	30.1	5.4	30.1	黄褐色	砂粒多	〃	〃	黒川
	25	深鉢	〃	〃	27.5	6.4	—	黒褐～暗褐色	砂粒・角閃石	〃	(内)(外)貝殻条痕	〃
67	26	〃	〃	波	—	—	—	灰黄褐色	にぶい黄橙色	〃	(内)(外)磨き	太
	27	〃	胴部	—	—	—	—	黒褐色～にぶい黄褐色	精選	普通	(内)磨き	〃
	28	〃	〃	—	—	—	—	灰黄褐～明褐		〃	(内)(外)磨き	太？疑似縄文(巻貝)
	29	〃	〃	平	—	—	—	にぶい黄橙色		〃	〃	太
	30	〃	肩部	〃	—	—	—	にぶい橙～明黄褐色		〃	〃	〃
	31	浅鉢	口縁部	波	—	—	—	灰黄褐～黒褐			〃	？
	32	深鉢	〃	〃	—	—	—	灰黄褐色～鈍い黄橙色	くさり礫	普通	〃	〃
	33	注口？	〃	〃	20.0	—	—	にぶい黄橙色	精選・くさり礫	〃	〃	三・煤付着
	34	注口	？	平	—	—	—	〃	くさり礫	〃	〃	鳥？三？
	35	深鉢	口縁部	？	24.0	—	—	暗褐色～褐色		良	〃	三？
	36	〃	〃	平	—	—	—	にぶい黄橙色		〃	〃	三
	37	〃	〃	？	28.0	—	—			やや悪	〃	三・煤付着
	38	浅鉢	〃	平	—	—	—	にぶい黄橙色		悪	〃	三
	39	〃	〃	〃	—	—	—	浅黄橙色		普通	〃	〃
	40	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色～灰黄褐色		〃	〃	三・煤付着
	41	深鉢	〃	山	—	—	—	明褐～黄褐色		良	〃	？
	42	浅鉢	〃	平	—	—	—	にぶい黄橙色	精選	〃	〃	御
	43	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色		普通	〃	西平？太？
	44	不明	〃	〃	—	—	—	浅黄橙～鈍い黄褐色		良	〃	？
	45	深鉢	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色	くさり礫	〃	〃	御？鳥？
	46	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色		普通	〃	鳥？
	47	〃	〃	〃	—	—	—	〃	くさり礫	〃	〃	〃
	48	〃	〃	？	—	—	—	にぶい黄褐色		〃	〃	〃
	49	〃	〃	平	20.0	—	—	〃		良	〃	御
	50	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色	くさり礫	やや悪	〃	鳥
	51	浅鉢	〃	〃	26.0	—	—	暗褐色	長石目立つ	普通	(内)磨き	〃
	52	〃	〃	〃	—	—	—	〃		良	〃	〃
	53	深鉢	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色		〃	〃	〃
	54	浅鉢	〃	〃	—	—	—	〃		〃	〃	〃
	55	〃	〃	〃	—	—	—	〃	精選	普通	〃	〃
	56	〃	〃	〃	—	—	—	〃		〃	〃	〃
	57	〃	〃	〃	—	—	—	〃		〃	〃	〃
	58	〃	〃	〃	—	—	—	〃		〃	〃	〃
	59	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色		〃	〃	？
	60	〃	〃	〃	—	—	—	〃	長石多	〃	〃	鳥？
	61	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色		〃	〃	鳥？御？
	62	深鉢	〃	〃	—	—	—	〃		〃	(内)磨き (外)磨き・口端削り	鳥・御

図版No.	土器No.	器種	部分	口縁種類	口径	器高	最大胴部	色調	胎土の特徴	焼成	調整	形式・備考
67	63	浅鉢	口縁部	平	—	—	—	にぶい黄橙色		普通	(内)(外)磨き	鳥
	64	〃	〃	〃	24.0	—	—	〃		良	〃	〃
	65	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色	精選	〃	〃	〃
	66	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色		やや悪	〃	〃
	67	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色		普通	〃	〃
	68	深鉢	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色		悪	〃	御
	69	浅鉢	〃	〃	—	—	—	褐灰色	精選	良	〃	鳥
	70	深鉢	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色	くさり礫	やや悪	〃	御？
	71	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色	精選	普通	〃	鳥？御？
	72	〃	〃	〃	—	—	—	灰黄褐色	長石目立つ	〃	〃	御
	73	〃	〃	〃	—	—	—	明褐色	長石多	良	〃	〃
	74	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色		普通	〃	御・煤付着
	75	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色		良	〃	御
	76	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色		〃	〃	〃
	77	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色	精選	やや悪	〃	鳥？御？
	78	浅鉢	胴部	〃	—	—	—	にぶい黄褐色	〃	良	〃	鳥
	79	注口	〃	〃	—	—	14.0	〃		〃	〃	〃
68	80	深鉢？	口縁部	〃	18.0	—	—	灰黄褐色		〃	〃	鳥・煤付着
	81	深鉢	〃	〃	—	—	—	黄褐色		普通	〃	御？
	82	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色		やや悪	〃	御
	83	〃	〃	〃	30.0	—	—	〃	精選・くさり礫	普通	〃	〃
	84	〃	〃	〃	28.0	—	—	にぶい黄褐色		やや悪	〃	御・煤付着
	85	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色	精選	良	〃	御
	86	〃	〃	〃	—	—	—	褐灰色	長石多	やや悪	〃	〃
	87	浅鉢	〃	〃	—	—	—	暗褐色	精選	良	〃	〃
	88	〃	〃	〃	—	—	—	明赤褐色	〃	〃	〃	〃
	89	〃	〃	山	—	—	—	にぶい黄橙色	〃	悪	〃	鳥・煤付着
	90	〃	〃	〃	—	—	—	〃		やや悪	(内)磨き (外)磨き・部分削り	御・鳥？
	91	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色		普通	(内)磨き(外)ナデ	御
	92	〃	〃	〃	16.0	—	—	褐色	長石多	良	(内)磨き (外)磨き・部分削り	〃
	93	〃	〃	〃	20.0	—	—	にぶい黄褐色	精選	〃	(内)(外)磨き	〃
	94	〃	〃	平	—	—	—	黄褐色	〃	〃	〃	〃
	95	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色	長石目立つ	やや悪	〃	〃
	96	〃	〃	〃	—	—	—	暗褐色	精選	良	〃	〃
	97	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色		〃	〃	〃
	98	〃	〃	〃	—	—	—	〃	精選	〃	〃	〃
	99	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色		〃	〃	御・煤付着
	100	〃	〃	〃	—	—	—	灰黄褐色	精選	〃	〃	御
	101	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色	長石目立つ	〃	〃	〃
	102	〃	〃	山	—	—	—	褐灰色		〃	(内)磨き・部分削り	〃
	103	深鉢	〃	平	—	—	—	にぶい黄橙色	くさり礫	普通	(内)(外)磨き	〃
	104	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色		良	〃	三
	105	〃	〃	〃	40.0	—	—	にぶい黄褐色		普通	(内外)磨き・ 部分削り後ナデ	天
	106	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色		〃	(内)磨き(外)ナデ	天？・煤付着
	107	〃	〃	〃	—	—	—	橙色		良	(内)(外)磨き	天
	108	〃	〃	〃	30.0	—	—	にぶい黄橙色	長石目立つ	やや悪	(内)(外)ナデ	〃
	109	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色	くさり礫	〃	〃	〃
	110	〃	〃	〃	—	—	—	灰黄褐色		普通	(内)(外)磨き	〃
	111	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色		良	〃	天・煤付着
	112	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色		〃	〃	天？

図版No.	土器No.	器種	部分	口縁種類	口径	器高	最大胴部	色　調	胎土の特徴	焼成	調　整	形式・備考
68	113	深鉢	口縁部	平	—	—	—	褐色		普通	(内)(外)磨き	天？
	114	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色	長石目立つ	〃	〃	〃
	115	〃	〃	〃	36.0	—	—	明黄褐色		〃	〃	〃
	116	〃	〃	〃	—	—	—	褐灰色		〃	(内)ナデ(外)磨き	〃
	117	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色	長石多	悪	(内)(外)削り	〃
	118	〃	〃	〃	24.0	—	—	浅黄橙色		普通	(内)(外)磨き	三？
	119	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色		やや悪	〃	天？
	120	？	〃	〃	—	—	—	〃	砂粒・長石・角閃石	良	(内)(外)丁寧な磨き	口縁部に朱
	121	浅鉢	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色	精選	普通	(内)(外)磨き	天・煤付着
	122	〃	〃	〃	30.0	—	—	にぶい黄橙色	〃	良	〃	〃
	123	〃	〃	〃	—	—	—	褐灰色	〃	〃	〃	天
	124	〃	〃	〃	—	—	—	灰黄褐色		〃	(外)磨き	天？
	125	〃	〃	〃	—	—	—	〃	精選	〃	(内)(外)磨き	天
	126	〃	〃	〃	—	—	—	明黄褐色	〃	〃	〃	〃
	127	〃	〃	山	—	—	—	灰黄褐色	金雲母	やや悪	〃	天・煤付着
	128	〃	〃	平	—	—	—	にぶい黄褐色	精選	良	〃	天
69	129	深鉢	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色		普通	(内)ナデ (外)条痕・ナデ・磨	古
	130	〃	〃	〃	35.0	—	—	浅黄橙色		良	(内)磨き (外)条痕後ナデ	古
	131	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色	金雲母	普通	(内)(外)ナデ	〃
	132	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色	くさり礫	やや悪	(内)(外)磨き	〃
	133	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色		普通	〃	〃
	134	〃	〃	〃	—	—	—	褐灰色	くさり礫	やや悪	(内)ナデ (外)ナデ・部分磨き	古・煤付着
	135	〃？	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色		〃	(内)(外)磨き	古？
	136	深鉢	〃	〃	—	—	—	〃		普通	〃	古・煤付着
	137	浅鉢	〃	〃	—	—	—	〃	精選	良	〃	古
	138	〃	〃	〃	—	—	—	黒色	長石かなり含む	普通	〃	〃
	139	〃	〃	〃	18.0	—	—	褐灰色	精選	良	〃	全体に赤色顔料
	140	〃	〃	〃	—	—	—	暗褐色	〃	普通	〃	古
	141	〃	〃	〃	—	—	—	橙色		〃	〃	〃
	142	〃	〃	〃	—	—	—	灰白色	精選	良	〃	〃
	143	〃	〃	〃	—	—	—	灰黄褐色		やや悪	〃	〃
	144	〃	〃	〃	—	—	—	明黄褐色		普通	〃	〃
	145	〃？	〃	〃	16.0	—	—	にぶい黄橙色	長石目立つ	〃	〃	〃
	146	浅鉢	〃	〃	30.0	—	—	黒褐色	長石目立つ・金雲母	良	〃	〃
	147	〃	〃	〃	—	—	—	〃		普通	〃	〃
	148	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色		〃	〃	〃
	149	〃	〃	〃	—	—	—	〃	精選	良	〃	〃
	150	〃	〃	〃	—	—	—	褐灰色	長石多	普通	〃	古・煤付着
	151	深鉢	〃	平・リボン状突起	34.0	—	—	暗褐色	角閃石多	〃	(内)磨き (外)削り・条痕	黒川・内外煤付着
	152	〃	〃	〃	—	—	—	褐灰色		良	(内)(外)磨き	黒川
	153	〃	〃	平突帯文	—	—	—	褐色	角閃石多	普通	〃	〃
	154	〃	〃	〃	—	—	—	〃	〃	〃	〃	〃
	155	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色	〃	〃	(内)(外)ナデ	〃
	156	〃	〃	〃	—	—	—	褐色		〃	(内)(外)磨き	〃
	157	〃	〃	〃	—	—	—	黄褐色		やや悪	〃	黒川・煤付着
	158	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色	角閃石多	〃	〃	黒川
	159	〃	〃	平	—	—	—	〃	〃	普通	(内)ナデ(外)削り	〃
	160	〃	〃	〃	—	—	—	灰黄褐色	〃	やや悪	(内)(外)ナデ	〃
	161	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色		普通	〃	〃

図版No.	土器No.	器種	部分	口縁種類	口径	器高	最大胴部	色調	胎土の特徴	焼成	調整	形式・備考
69	162	深鉢	口縁部	平	—	—	—	にぶい黄橙色		普通	(内)ナデ (外)ナデ・磨き	?
	163	〃	〃	〃	—	—	—	褐色	くさり礫	〃	(内)条痕後ナデ (外)条痕	黒川?
	164	〃	〃	〃	—	—	—	〃	長石多	やや悪	(内)ナデ(外)削り	黒川
	165	〃	〃	〃	—	—	—	褐灰色	角閃石多	良	(内)ナデ(外)条痕	〃
	166	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色		悪	(内)(外)ナデ	黒川?
	167	〃	〃	〃	—	—	—	灰黄褐色		良	(内)(外)磨き	古・黒川?
70	168	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色		普通	(内)(外)条痕	黒川?
	169	浅鉢	〃	〃	—	—	—	灰黄褐色	精選	良	(内)(外)磨き・ナデ	黒川・顔料付着
	170	〃	〃	〃	—	—	—	〃	〃	〃	(内)(外)磨き	黒川?
	171	深鉢	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色	長石目立つ	普通	(内)(外)ナデ・ 削り後ナデ	黒川
	172	浅鉢	〃	〃	—	—	—	灰褐色	精選・長石目立つ	良	(内)(外)磨き	〃
	173	深鉢	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色	精選	普通	(内)(外)条痕後ナデ	〃
	174	?	?	—	—	—	—	〃	くさり礫	良	(内)ナデ(外)磨き	黒川?
67	175	深鉢	〃	〃	—	—	—	灰黄褐色		〃	(内)(外)磨き	?・煤付着
64	176	浅鉢	〃	〃	—	—	—	褐色	長石多	〃	〃	三
	177	〃	?	—	—	—	—	にぶい黄橙色	砂粒・長石・角閃石	〃	〃	
	178	?	〃	—	—	—	—	〃	砂粒	〃	〃	
	179	〃	〃	—	—	—	—	灰黄褐色	砂粒少	〃	〃	
	180	〃	口縁部	波	—	—	—	にぶい黄橙色	砂粒・長石・角閃石	〃	〃	
E調査区出土遺物												
71	1	深鉢	胴部	—	—	5.5	24.3	褐灰色	砂粒・角閃石	良	(内)(外)磨き	太・煤付着
	2	〃	口縁部	波	45.1	10.6	—	にぶい黄橙～ 暗褐色	砂粒・長石・ 角閃石・石英	良		太
	3	〃	〃	〃	31.6	6.7	—	〃	砂粒・長石・ 角閃石・金雲母	〃	(内)(外)磨き	〃
	4	〃	〃	〃	31.4	12.9	—	にぶい黄橙～ 褐灰色	砂粒・長石・角閃石	〃	〃	〃
	5	〃	〃	〃	22.7	9.8	—	にぶい黄橙色	砂粒・角閃石・金雲母	〃	〃	〃
	6	〃	〃	〃	27.9	10.2	—	にぶい黄褐～ 黒褐色	砂粒・角閃石・ 石英・金雲母		〃	〃
	7	〃	〃	〃	20.1	10.0	—	にぶい黄橙色	砂粒・長石・角閃石	良		〃
	8	〃	〃	〃	12.8	8.3	—	〃	〃	〃	(内)(外)磨き	〃
	9	〃	〃	平	48.0	6.6	—	暗褐色	〃	〃	〃	〃
	10	〃	〃	〃	39.8	10.4	—	灰黄褐色	砂粒・角閃石・石英	〃	(内)削・ナデ (外)削・条痕	〃
72	11	〃	〃	〃	35.3	8.5	—	黄橙色	砂粒・長石・ 角閃石・石英	普通	(内)磨き・ナデ (外)ナデ	〃
	12	浅鉢	〃	〃	29.2	5.8	—	にぶい黄橙色	砂粒・長石・角閃石	良	(内)(外)磨き	〃
	13	深鉢	〃	〃	16.0	5.2	—	褐色	〃	〃	〃	三
	14	?	〃	〃	16.4	8.6	17.1	にぶい黄橙色	砂粒・長石・金雲母	〃	〃	?・煤付着
	15	深鉢	胴部	—	—	8.5	31.0	暗褐色	砂粒・角閃石・金雲母	〃	〃	太
	16	〃	〃	—	—	7.8	31.4	にぶい黄褐色	砂粒・角閃石	〃	〃	〃
	17	〃	〃	—	—	6.3	18.1	にぶい黄橙色	砂粒・長石・角閃石	〃	〃	太・煤付着
	18	〃	〃	—	—	7.0	17.6	褐色	〃	〃	〃	太
	19	〃	胴～底部	—	—	10.8	17.3	褐灰色	砂粒・角閃石・ 金雲母・石英	〃	〃	〃
	20	〃	胴部	—	—	6.9	—	黄褐色	砂粒・長石・角閃石・ 金雲母・石英	〃	(内)磨き・ナデ (外)磨き	〃
	21	〃	〃	—	—	4.2	19.0	にぶい黄橙～ 黒褐色	砂粒・長石・ 角閃石		(内)(外)磨き	太・煤付着

図版No.	土器No.	器種	部分	口縁種類	口径	器高	最大胴部	色　調	胎土の特徴	焼成	調　整	形式・備考
73	22	深鉢	胴部	—	—	12.9	34.4	にぶい黄橙色	砂粒・角閃石・石英	良	(内)(外)磨き	太
	23	〃	〃	—	—	9.3	19.3	黄橙色	砂粒・角閃石	〃	〃	〃
	24	〃	〃	—	—	4.2	27.9	にぶい黄褐色	砂粒・長石・角閃石	〃	〃	〃
	25	〃	〃	—	—	6.2	27.0	黒褐色	砂粒・長石・角閃石・石英	〃	〃	太・煤付着
	26	〃	〃	—	—	12.1	27.7	にぶい黄褐色	砂粒・角閃石	普通	〃	〃
	27	〃	〃	—	—	6.5	22.3	灰黄～灰黄橙	砂粒	〃	〃	三
	28	〃	肩～胴部	—	—	15.4	25.8	明黄褐色	砂粒・角閃石	良	〃	〃
74	29	〃	口縁部	波	—	3.5	—	にぶい黄褐色	精選・長石多く含む	〃	〃	三・黒斑あり
	30	?	?	—	—	—	—				〃	
	31	深鉢	口縁部	平	33.1	8.2	—	にぶい褐色	砂粒・角閃石・石英	良	〃	鳥
	32	〃	〃	〃	26.5	7.9	—	褐色	砂粒・長石・角閃石・石英	〃	〃	三
	33	〃	〃	〃	24.3	5.7	—	鈍い橙～黒色	砂粒・長石・角閃石	〃	〃	〃
	34	〃	〃	〃	22.6	6.2	—	にぶい黄褐色	〃	〃	〃	〃
	35	〃	〃	〃	19.7	6.9	—	黒褐色	砂粒・角閃石・石英	〃	〃	〃
	36	〃	〃	〃	17.8	5.5	—	にぶい黄色	砂粒少	〃	〃	〃
	37	〃	胴～底部	—	—	14.9	—	明赤褐色	砂粒・長石・角閃石	普通	〃	〃
	38	〃	肩～底部	—	—	7.1	18.0	にぶい黄橙色	砂粒少・角閃石	良	〃	〃
	39	浅鉢	胴部	—	—	3.9	17.9	黒褐色	砂粒・角閃石・石英	〃	〃	三?
	40	〃	〃	—	—	2.8	11.8	鈍い褐～黒色	砂粒・長石・角閃石	〃	〃	三
75	41	深鉢	〃	—	—	8.4	37.2	黄橙色	砂粒・角閃石・金雲母	〃	〃	〃
	42	〃	頸～胴上	—	—	3.4	—	にぶい黄色	砂粒・角閃石	〃	〃	〃
	43	〃	胴部	—	—	6.9	19.1	にぶい橙色	〃	〃	〃	〃
	44	短頸壺	口～胴	平	11.8	6.6	17.7	黒褐色	砂粒・角閃石多・長石	〃		太
	45	浅鉢	〃	〃	19.9	6.1	20.6	黒褐色	砂粒・角閃石	〃	(内)(外)磨き	三
	46	〃	口縁部	〃	33.9	4.4	—	橙色	砂粒・長石・角閃石	〃	〃	〃
	47	〃	〃	〃	27.4	5.3	—	黒褐色	〃	〃	〃	三・内外ツヤあり
	48	〃	〃	〃	13.4	4.3	—	褐色	砂粒・角閃石・石英	〃	〃	三
	49	〃	〃	〃	20.8	4.9	—	にぶい黄褐色	砂粒・角閃石・長石		〃	〃
	50	〃	〃	〃	15.8	13.6	—	黒色	砂粒・長石	良	〃	〃
	51	〃	〃	〃	18.7	2.7	—	暗褐～鈍い黄褐		〃	〃	〃
	52	〃	〃	〃	25.6	4.0	—	にぶい褐色	砂粒・長石	〃		〃
	53	〃	〃	〃	11.1	2.9	12.6	灰褐～黒褐色	微粒子長石をかなり含む	〃	(内)(外)磨き	三・煤付着
	54	深鉢	肩～胴部	—	—	6.8	14.1	橙色	砂粒・角閃石・石英	〃	〃	三
	55	浅鉢	口縁～胴	平	10.7	4.0	11.9	黒褐色	砂粒・長石・角閃石	〃	〃	〃
	56	〃	〃	〃	8.2	3.8	11.2	にぶい黄橙色	砂粒少・角閃石	〃	〃	〃
76	57	〃	口縁部	〃	25.4	6.1	—	鈍い橙～黒褐	砂粒・長石・角閃石	〃	〃	鳥
	58	〃	〃	〃	17.6	4.6	—	にぶい黄褐色～暗褐色	〃			〃
	59	〃	〃	〃	36.0	17.6	—	にぶい黄橙色	〃	良	(内)(外)磨き	〃
	60	〃	〃	〃	19.8	6.8	—	〃	砂粒・角閃石	普通	(内)ナデ後磨き (外)ナデ・部分磨き	〃
	61	?	胴部	—	—	3.9	14.0	黒褐色	砂粒・長石・角閃石・石英	良	(内)(外)磨き	?
	62	浅鉢	口縁部	平	36.0	3.6	—	明黄褐色	砂粒・角閃石	普通	〃	鳥・煤付着
	63	〃	〃	〃	26.6	3.3	—	灰黄褐色	〃	良	〃	鳥
	64	〃	〃	〃	18.5	2.3	—	にぶい赤褐～にぶい黄橙色	砂粒・長石・角閃石	〃	〃	〃
	65	深鉢	〃	〃	37.4	6.9	—	黒褐色	砂粒・角閃石・石英	〃	〃	御
	66	〃	〃	〃	30.2	5.1	—	明黄褐色	砂粒・角閃石	〃	〃	〃
	67	浅鉢	〃	〃	35.6	3.7	—	黒褐色	砂粒・長石・石英?	〃		天

図版No	土器No	器種	部分	口縁種類	口径	器高	最大胴部	色　調	胎土の特徴	焼成	調　整	形式・備考
77	68	浅鉢	胴部	—	—	3.9	—	明黄褐色	砂粒・角閃石・石英	良	(内)(外)磨き	天
	69	〃	口縁～胴	波	19.7	4.8	—	明赤褐～黒色	砂粒・長石・角閃石	〃	〃	御
	70	深鉢	口縁部	平	26.0	4.5	—	黒褐色	〃	〃	〃	天
	71	?	胴部	—	—	10.9	30.1	明黄褐色	砂粒・金雲母・角閃石・長石・石英?	〃	(内)ナデ(外)磨き	?
	72	深鉢	口縁～頸	〃	33.8	9.0	31.7	にぶい黄橙色	砂粒・角閃石・石英	〃	(内)(外)磨き	天
	73	浅鉢	口縁部	〃	36.4	2.1	—	〃	砂粒・長石・角閃石・金雲母	〃	〃	〃
	74	〃	口縁～胴	〃	31.0	4.7	—	にぶい黄橙～黒褐色	砂粒	〃	〃	〃
	75	〃	口縁部	〃	26.3	1.9	—	黒褐～暗褐色	砂粒・長石・角閃石	〃	(内)磨き (外)ナデ後磨き	〃
	76	〃	〃	山	20.0	3.9	17.1	褐灰～黒褐色	砂粒	〃	(内)(外)磨き	〃
	77	?	口縁～胴	平	16.9	7.3	18.1	にぶい黄褐色	砂粒・長石・角閃石	〃	(内)磨き (外)磨き・ナデ	?・煤付着
	78	〃	口縁部	〃	11.2	4.7	—	灰黄褐色	〃	普通	(内)(外)磨き	?
	79	浅鉢	口縁～胴	〃	16.1	5.7	—	橙色	〃	〃	〃	古
	80	〃	〃	〃	13.6	5.8	—	明褐色	砂粒・角閃石・金雲母	良	〃	〃
	81	〃	〃	〃	16.2	3.1	—	にぶい黄橙色	砂粒・長石・角閃石・石英・金雲母	〃	〃	〃
	82	〃	口縁部	〃	21.7	4.5	24.4	にぶい黄橙色	砂粒・角閃石	〃	〃	三
	83	〃	〃	〃	11.2	3.1	—	灰褐～鈍い褐	〃		〃	〃
78	84	深鉢	胴部	—	—	3.7	—	黄褐色	砂粒・角閃石・金雲母	良	〃	〃
	85	椀形	口縁～胴	平	18.0	6.6	—	橙色	砂粒・長石・角閃石・石英	〃	〃	?
	86	深鉢	底部	—	—	4.8	—	にぶい黄褐色	砂粒多・角閃石・金雲母	〃	〃	〃
	87	浅鉢	口縁部	平	29.2	6.8	—	黒褐色		〃	〃	古
	88	〃	〃	〃	16.5	4.1	—	褐色	砂粒・長石・角閃石	〃	〃	三
	89	深鉢	〃	平・リボン状突起	—	—	—	にぶい黄褐色	精選	〃	〃	西平?・煤付着
	90	〃	〃	波	—	—	—	褐灰色		普通	(内)磨き(外)ナデ	太?・煤付着
	91	〃	〃	〃	—	—	—	灰黄褐色	精選	良	(内)(外)磨き	太
	92	〃	〃	〃	—	—	—	褐灰色	くさり礫	普通	〃	太・煤付着
	93	〃	〃	〃	—	—	—	〃	長石多	やや悪	〃	〃
	94	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色	くさり礫	良	〃	〃
	95	〃	〃	〃	36～38	—	—	〃		普通	〃	〃
	96	〃	〃	〃	—	—	—	暗褐色		良	〃	〃
	97	〃	〃	〃	—	—	—	褐灰色		〃	〃	〃
	98	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色	長石少	普通	〃	太・煤・赤色顔料
	99	〃	〃	〃	—	—	—	暗褐色	砂粒・長石・角閃石	良	〃	?
	100	〃	〃	〃	—	—	—	浅黄褐色		普通	〃	太
	101	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色	くさり礫	良	(内)削り(外)磨き	太・煤付着
	102	〃	〃	〃	—	—	—	褐灰色		〃	(内)(外)磨き	〃
	103	〃	〃	〃	—	—	—	褐灰色	金雲母	普通	〃	〃
	104	〃	〃	〃	—	—	—	橙色		良	〃	〃
	105	〃?	〃	〃?	—	—	—	灰黄褐色		やや悪	〃	?
	106	深鉢	〃	波	—	—	—	〃		〃	〃	太・煤付着
79	107	〃	〃	〃	—	—	—	褐灰色	くさり礫	普通	〃	太
	108	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色		〃	〃	太・煤付着
	109	〃	〃	〃	—	—	—	褐灰色	精選	良	〃	太?

図版No.	土器No.	器種	部分	口縁種類	口径	器高	最大胴部	色調	胎土の特徴	焼成	調整	形式・備考
79	110	深鉢	口縁部	波	—	—	—	浅黄橙色	砂粒・角閃石	良	(内)(外)磨き	太
	111	〃	〃	〃	13.0	—	—	黒褐色		普通	〃	三？・煤付着 頸部に細線あり
	112	〃？	〃	〃？	—	—	—	にぶい黄褐色	くさり礫	〃	〃	太？・煤付着
	113	深鉢	〃	波	20.0	—	—	灰黄褐色	精選	良	〃	太・煤付着
	114	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色	くさり礫	普通	〃	太
	115	〃	〃	〃	—	—	—	〃		良	〃	〃
	116	〃	〃	〃	—	—	—	〃		〃	〃	太？
	117	〃	〃	〃	—	—	—	褐灰色		〃	〃	〃
	118	〃	胴部	—	—	—	35.0	にぶい黄褐色	精選・微粒子長石多	普通	〃	太・煤付着
	119	〃	〃	—	—	—	28.0	黒褐色		〃	〃	〃
	120	〃	〃	—	—	—	32.0	褐灰色		良	(内)磨き・削り・ナデ 後部分磨(外)磨き	〃
	121	〃	〃	—	—	—	26.0	暗褐色		普通	(内)(外)磨き	〃
	122	？	？	—	—	—	—				〃	
	123	深鉢	胴部	—	—	—	32.0	褐色	精選・くさり礫	良	〃	太・煤付着
	124	〃	〃	—	—	—	30.0	浅黄橙色	精選	普通	(内)磨き・ナデ (外)磨き	〃
	125	〃	頸～胴部	—	—	—	—	褐灰色		良	(内)(外)磨き	太
	126	〃	胴部	—	—	—	24.0	灰黄褐色		普通	〃	太・煤付着
	127	〃	〃	—	—	—	22.0	にぶい黄褐色	精選	良	〃	太
	128	〃	〃	—	—	—	20.0	黒褐色	長石目立つ		〃	太・煤付着
	129	〃	〃	—	—	—	38.0	褐灰色		普通	〃	太
	130	〃	〃	—	—	—	22.0	にぶい黄褐色		〃	〃	〃
	131	〃	〃	—	—	—	—	褐灰色		やや悪	〃	太・煤付着
	132	〃	〃	—	—	—	30.0	黒褐色		良	〃	太
	133	〃	〃	—	—	—	24.0	暗褐色	精選	普通	〃	太・煤付着
	134	〃	〃	—	—	—	20.0	〃	長石多	やや悪	〃	太
	135	〃	〃	—	—	—	—	〃		〃	〃	〃
	136	〃	〃	—	—	—	16.0	褐灰色		〃	(内)(外)ナデ	〃
	137	〃	〃	—	—	—	26.0	〃		普通	(内)(外)磨き	太・煤付着
	138	〃？	〃	—	—	—	14.0	にぶい黄褐色	精選	〃	〃	太
	139	深鉢	〃	—	—	—	28.0	暗褐色	〃	良	〃	太・煤付着
	140	〃	〃	—	—	5.1	17.4	オリーブ褐色	砂粒・角閃石	〃	〃	太
	141	〃	〃	—	—	—	26.0	にぶい黄褐色		やや悪	〃	太・煤付着
	142	〃	？	—	—	—	—	灰黄褐色		普通	〃	三？
	143	〃	胴部	—	—	—	—	暗褐色	金雲母	やや悪	〃	太
80	144	〃	〃	—	—	—	—	灰黄褐色		良	〃	〃
	145	〃	〃	—	—	—	32.0	にぶい黄褐色	くさり礫	やや悪	〃	太・煤付着
	146	〃	〃	—	—	—	26.0	暗褐色	精選	普通	〃	〃
	147	〃	〃	—	—	—	30.0	褐灰色	長石目立つ	やや悪	〃	太
	148	〃	肩～胴部	—	—	—	—	にぶい黄褐色	砂粒・長石・角閃石	普通	〃	〃
	149	〃	胴部	—	—	—	26.0	黒褐色	精選	良	〃	〃
	150	〃	？	？	—	—	—	褐色	長石・角閃石	〃	〃	辛川？
	151	〃	胴部	—	—	—	28.0	にぶい黄褐色	長石目立つ	やや悪	〃	西平？
	152	〃	〃	—	—	—	—	にぶい黄橙色	精選	普通	〃	西平・煤付着
	153	〃	〃	—	—	—	24.0	暗褐色	長石目立つ	良	〃	太
	154	〃	頸～胴部	—	—	—	30.0	灰黄褐色		普通	〃	太・煤付着
	155	〃	胴部	—	—	—	34.0	にぶい黄褐色		良	〃	〃
	156	〃	〃	—	—	—	20.0	〃		普通	〃	〃
	157	〃	〃	—	—	—	32.0	〃	精選	〃	〃	〃
	158	〃	〃	—	—	—	28.0	にぶい黄橙色	長石目立つ・ くさり礫	やや悪	(内)削り後磨き (外)磨き	太

図版No	土器No	器種	部分	口縁種類	口径	器高	最大胴部	色　調	胎土の特徴	焼成	調　整	形式・備考
80	159	深鉢	胴部	—	—	—	28.0	暗褐色	精選・くさり礫	良	(内)削り・磨き (外)磨き	?・煤付着
	160	〃	〃	—	—	—	15.0	にぶい黄橙色		〃	(内)(外)磨き	三?・煤付着
	161	〃	〃	—	—	—	30.0	明黄褐色		やや悪	〃	〃
	162	〃	〃	—	—	—	16.0	暗褐色		普通	(内)削り後磨き (外)磨き	太?・煤付着
	163	〃	口縁部	波	—	—	—	にぶい黄橙色	くさり礫	やや悪	(内)(外)磨き	太・煤付着
	164	〃	〃	〃	—	—	—	灰黄褐色	精選	普通	〃	〃
	165	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色	くさり礫	悪	〃	太?
	166	〃	〃	平	40.0	—	—	にぶい黄褐色		普通	(内)磨き (外)削り後ナデ	〃
	167	〃	〃	〃	—	—	—	褐灰色	くさり礫	〃	(内)(外)磨き	〃
	168	〃	〃	〃	30.0	—	—	にぶい黄橙色		良	〃	三?
	169	〃	〃	波	—	—	—	明黄褐色	くさり礫	やや悪	(内)ナデ (外)削り後ナデ	三?・煤付着
	170	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色	精選	普通	(内)(外)磨き	太・煤付着
	171	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色	長石多・金雲母	〃	〃	〃
	172	〃	〃	〃	—	—	—	褐灰色	金雲母	〃	〃	太
	173	〃	胴部	—	—	—	—	にぶい黄橙色		やや悪	〃	太?・煤付着
	174	〃	口縁部	平	20.0	—	—	黒褐色	長石多	普通	〃	辛川?・煤付着
	175	〃	〃	〃	20.0	—	—	灰黄褐色		〃	〃	太
81	176	〃	〃	〃	26.0	—	—	暗褐色		良	〃	御?
	177	〃	〃	〃	38?	—	—	褐灰色	精選・角閃石目立つ	やや悪	〃	三・太?
	178	〃	〃	〃	—	—	—	灰黄褐色		良	〃	太・三?
	179	〃	〃	〃	34.0	—	—	暗褐色	角閃石目立つ	普通	〃	太?・煤付着
	180	〃	〃	〃?	—	—	—	にぶい黄橙色		良	(内)ナデ(外)磨き	辛川
	181	深鉢?	〃	平	—	—	—	〃		やや悪	(内)(外)磨き	辛川?
	182	深鉢	〃	〃	25.0	—	—	暗褐色	長石目立つ	普通	〃	西平・煤付着
	183	浅鉢	〃	波	—	—	—	にぶい黄褐色	角閃石なし	良	〃	太
	184	〃	〃	平	30.0	—	—	灰黄褐色		〃	〃	三?
	185	深鉢?	〃	波?	22.0	—	—	〃		普通	〃	西平・太?煤付着
	186	深鉢	胴部	—	—	—	—	〃	精選	〃	〃	太?
	187	浅鉢?	口縁部	平	—	—	—	にぶい黄橙色	〃	良	〃	三・煤付着
	188	浅鉢?	〃	〃	30.0	—	—	明黄褐色	長石目立つ	〃	〃	三?
	189	〃	〃	波	—	—	—	にぶい黄橙色	精選	〃	〃	?
	190	深鉢?	〃	平?	—	—	—	灰黄褐色		普通	(内)磨き	太?煤・赤色顔料
	191	高坏	?	?	—	—	—		長石微粒子	良	(内)(外)ヘラ磨き	?
	192	深鉢	口縁部	平	—	—	—	にぶい黄橙色		普通	(内)(外)磨き	辛川?
	193	〃	〃	〃	36.0	—	—	にぶい黄褐色		〃	〃	天?・煤付着
	194	〃	〃	波	—	—	—	灰黄褐色		〃	〃	三
	195	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色	長石多・金雲母	〃	〃	〃
	196	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色		やや悪	〃	三・煤付着
	197	〃	〃	〃	—	—	—	明褐色	長石目立つ	〃	〃	三
	198	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色	くさり礫	良	〃	三?
	199	〃	〃	〃	—	—	→	にぶい黄橙色	長石目立つ	普通	〃	三
	200	〃	〃	〃	—	—	—	暗褐色	角閃石多	〃	〃	〃
	201	〃	〃	〃	—	—	—	〃	精選	良	〃	〃
	202	〃	〃	〃	—	—	—	灰黄褐色		〃	〃	〃
	203	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色		〃	〃	〃
	204	〃	〃	〃	—	—	—	〃	精選	〃	〃	三?鳥?・煤付着
	205	〃	〃	〃	30.0	—	—	にぶい黄橙色		普通	(内)削り後磨き (外)磨き	三・煤付着
	206	浅鉢	〃	平	38.0	—	—	暗褐色		〃	(内)ナデ・磨き(外)磨き	三

図版No.	土器No.	器種	部分	口縁種類	口径	器高	最大胴部	色調	胎土の特徴	焼成	調整	形式・備考
81	207	深鉢	口縁部	平	28.0	—	—	橙色		良	(内)(外)磨き	三・煤付着
	208	〃	〃	〃	—	—	—	褐色		〃	〃	三
	209	〃	〃	波	—	—	—	〃		〃	〃	〃
	210	〃	〃	平	30.0	—	—	にぶい黄褐色	長石(2～3㎜)	普通	(内)不明(外)磨き	三・煤付着
	211	〃	〃	〃	28.0	—	—	黒褐色	精選	〃	(内)(外)磨き	三
	212	〃	〃	〃	30.0	—	—	褐灰色		やや悪	〃	三・煤付着
	213	〃	〃	〃	22.0	—	—	暗褐色	くさり礫	良	〃	〃
	214	〃	〃	〃	30.0	—	—	褐色		〃	〃	三
82	215	〃	〃	〃	28.0	—	—	黄褐色	精選	普通	〃	三・煤付着
	216	〃	〃	〃	34.0	—	—	にぶい黄褐色		〃	〃	三?
	217	〃	〃	〃	30?	—	—	灰黄褐色		良	〃	三・煤付着
	218	〃	〃	〃	30.0	—	—	にぶい黄褐色	精選	〃	〃	三?・煤付着
	219	〃	〃	〃	—	—	—	橙色		普通	〃	三?
	220	浅鉢	〃	〃	28.0	—	—	黒褐色		良	〃	三
	221	深鉢	〃	〃	25.7	4.8	—	にぶい黄橙色	砂粒・長石・角閃石	〃	〃	〃
	222	深鉢?	〃	〃	20.0	—	—	灰黄褐色		普通	〃	?
	223	深鉢	〃	〃	21.0	—	—	にぶい黄褐色		良	〃	三
	224	〃	〃	〃	32.0	—	—	灰黄褐色		普通	〃	〃
	225	深鉢?	〃	〃	14.0	—	—	〃		やや悪	〃	三?
	226	浅鉢?	〃	平?	18.0	—	—	にぶい黄褐色		良	〃	三?・煤付着
	227	深鉢	〃	平	30.0	—	—	暗褐色		〃	(内)ナデ(外)磨き	三
	228	浅鉢?	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色		普通	(内)(外)磨き	〃
	229	深鉢	〃	波	—	—	—	明黄褐色	くさり礫・金雲母	良	〃	〃
	230	〃	胴部	—	—	—	—	にぶい黄褐色	長石多	普通	〃	〃
	231	〃	〃	—	—	—	35.0	にぶい黄橙色	くさり礫	〃	〃	〃
	232	〃	肩部	—	—	—	22.0	灰黄褐色		良	〃	〃
	233	〃	胴部	—	—	—	—	〃	精選	〃	〃	三・煤付着
	234	〃	〃	—	—	—	—	〃	精選・くさり礫	やや悪	〃	三
	235	〃	〃	—	—	—	—	黒褐色	精選	良	〃	〃
	236	浅鉢	〃	—	—	—	22.0	にぶい黄褐色	くさり礫	〃	〃	〃
	237	不明	〃	—	—	—	—	灰黄褐色	長石多	普通	〃	三・煤付着
	238	浅鉢	口縁部	平	—	—	—	褐灰色	長石目立つ	良	〃	三
	239	浅鉢?	〃	〃	22.0	—	—	にぶい黄橙色		普通	〃	〃
	240	深鉢?	〃	〃	—	—	—	黒褐色		良	〃	〃
	241	浅鉢	〃	〃	28?	—	—	褐灰色		〃	〃	〃
	242	〃	〃	〃	26.0	—	—	にぶい黄橙色	くさり礫	普通	〃	〃
	243	浅鉢?	〃	〃	30?	—	—	にぶい黄褐色		〃	〃	三・煤付着
	244	浅鉢	〃	〃	30.0	—	—	褐色		良	〃	〃
	245	〃	〃	〃	22.0	—	—	にぶい黄橙色		普通	〃	三
	246	〃	〃	〃	20.0	—	—	にぶい黄褐色		良	〃	〃
	247	深鉢	〃	〃	—	—	—	灰黄褐色	長石目立つ	やや悪	〃	三?
	248	〃	〃	〃	31.0	—	—	褐色		〃	〃	三
	249	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色		普通	〃	三?
	250	浅鉢	〃	〃	14.0	—	—	にぶい黄褐色	精選	良	〃	三
	251	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色	砂粒・角閃石	〃	〃	〃
	252	深鉢	〃	〃	26.0	—	—	褐色	長石目立つ	〃	〃	〃
	253	浅鉢	胴部	—	—	—	26.0	暗褐色	精選	〃	〃	〃
	254	深鉢	口縁部	平	30.0	—	—	浅黄橙色		やや悪	〃	〃
	255	浅鉢?	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色		〃	(内)ナデ(外)磨き	〃
	256	注口?	胴部	—	—	—	14.0	灰白色	精選・くさり礫	〃	〃	〃
	257	浅鉢	〃	—	—	—	16.0	にぶい黄橙色	精選	良	(内)(外)磨き	三?
	258	〃	?	—	—	—	—	〃	長石多	やや悪	(外)磨き	?
83	259	〃	口縁部	平	21.0	—	—	褐灰色	精選	良	(内)(外)磨き	?(晩期)煤付着

図版No	土器No	器種	部分	口縁種類	口径	器高	最大胴部	色調	胎土の特徴	焼成	調整	形式・備考
83	260	浅鉢	口縁～胴	平	16.0	—	—	明黄褐色		良	(内)(外)磨き	三
	261	不明	口縁部	〃	20.0	—	—	暗褐色	長石多	〃	〃	三？
	262	〃	〃	〃	22.0	—	—	にぶい黄褐色	くさり礫	普通	〃	？・煤付着
	263	深鉢	〃	〃	24.0	—	—	褐灰色	長石目立つ	〃	〃	三・煤付着
	264	浅鉢	〃	〃	30.0	—	—	暗褐色		〃	〃	御？・煤付着
	265	把手付浅鉢？	？	—	—	—	—	にぶい黄橙色	砂粒少・黒色石(1㎜)	良		？
	266	深鉢？	口縁部	平	20.0	—	—	灰黄褐色		普通	〃	三？
	267	把手付浅鉢？	？	—	—	—	—	暗褐色	微細な長石を含む	良	〃	？
	268	深鉢	口縁部	平	30.0	—	—	にぶい黄褐色	長石多・金雲母	普通	〃	御・鳥？・煤付着
	269	〃？	〃	〃	22.0	—	—	黄橙色	くさり礫	〃	〃	鳥
	270	深鉢	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色	長石目立つ	やや悪	〃	〃
	271	浅鉢	〃	山	—	—	—	灰黄褐色		普通	〃	〃
	272	深鉢	〃	平	18.0	—	—	明黄褐色	長石目立つ	〃	〃	鳥・御？
	273	浅鉢	〃	〃	28.0	—	—	にぶい黄橙色		〃	〃	御・鳥？・煤付着
	274	浅鉢？	〃	〃	24.0	—	—	〃	精選	〃	〃	鳥
	275	浅鉢	〃	〃	—	—	—	灰黄褐色	〃	〃	〃	〃
	276	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色		良	〃	〃
	277	深鉢	〃	〃	—	—	—	〃		やや悪	〃	三
	278	浅鉢	〃	〃	28.0	—	—	〃	くさり礫	普通	〃	鳥
	279	深鉢	〃	〃	26.0	—	—	褐灰色		〃	〃	三？・煤付着
	280	浅鉢？	〃	〃	22.0	—	—	にぶい黄褐色		良	〃	鳥
	281	浅鉢	〃	〃	32.0	—	—	明褐色		〃	〃	〃
	282	〃	〃	〃	31.0	—	—	黒褐色		〃	〃	〃
	283	〃	〃	〃	22.0	—	—	〃	長石目立つ	〃	〃	〃
	284	〃	〃	〃	26？	—	—	にぶい黄褐色	角閃石目立つ	〃	〃	鳥・煤付着
	285	〃	〃	〃	—	—	—	褐色	長石多	〃	〃	〃
	286	〃	〃	〃	—	—	—	褐灰色		〃	〃	鳥
	287	〃	〃	〃	22.0	—	—	にぶい黄橙色		〃	〃	〃
	288	〃	〃	〃	—	—	—	褐灰色	長石多	やや悪	〃	〃
	289	〃	〃	〃	22.0	—	—	浅黄橙色		〃	〃	〃
	290	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色		普通	〃	鳥・黒色顔料？
	291	〃	〃	〃	30.0	—	—	暗褐色		〃	〃	鳥
	292	注口？	胴部	—	—	—	12.0	明黄褐色		良	〃	三
	293	〃	〃	—	—	—	28.0	暗褐色	精選	〃	(内)ナデ(外)磨き	鳥
	294	浅鉢	〃	—	—	—	—	にぶい黄橙色		普通	(内)(外)磨き	御
	295	注口	〃	—	—	—	—	にぶい黄褐色	精選	良		鳥
	296	深鉢	口縁部	平	—	—	—	〃		〃	(内)(外)磨き	太
	297	〃	〃	〃	40.0	—	—	浅黄橙色	くさり礫	〃	〃	鳥
	298	〃	〃	〃	28.0	—	—	にぶい黄橙色	精選	〃	〃	〃
	299	〃	〃	〃	24.0	—	—	褐灰色	〃	〃	〃	鳥？
	300	〃	〃	〃	36？	—	—	にぶい黄橙色	〃	〃	(内)(外)磨き・削り後ナデ	鳥
	301	〃	〃	〃	—	—	—	褐灰色		普通	(内)磨き・ナデ(外)磨き	太？三？鳥？
	302	〃	〃	〃	36？	—	—	にぶい黄橙色		〃	(内)磨き (外)磨・削り後ナデ	鳥？
	303	〃	〃	〃	22.0	—	—	褐灰色		良	(内)(外)磨き	鳥・煤付着
	304	深鉢？	〃	〃	—	—	—	灰黄褐色		やや悪	(内)(外)ナデ	？・煤付着
	305	深鉢	口縁～胴	〃	20？	—	—	明黄褐色		普通	(内)(外)磨き	鳥？・煤付着
	306	浅鉢	口縁部	〃	24.0	—	—	にぶい黄橙色		良	〃	鳥
	307	？	？	—	—	—	—	黒褐色	砂粒・長石・角閃石	普通	(内)(外)ナデ後部分磨き	

図版No.	土器No.	器種	部分	口縁種類	口径	器高	最大胴部	色調	胎土の特徴	焼成	調整	形式・備考
84	308	深鉢	口縁部	平	26.0	—	—	にぶい黄橙色	精選	良	(内)(外)磨き	御・煤・赤色顔料
	309	〃	〃	〃	〃	—	—	灰黄褐色	長石かなり多	〃	〃	御？
	310	〃	〃	〃	32.0	—	—	褐灰色		普通	〃	御？鳥？
	311	〃	〃	山？	22.0	—	—	暗褐色		良	〃	御？・煤付着
	312	〃	〃	平	—	—	—	灰黄褐色		やや悪	(内)(外)磨き (口端)ナデ	鳥？
	313	〃	〃	〃	30.0	—	—		くさり礫	良	(内)(外)磨き	御？鳥？・煤付着
	314	〃	〃	〃	20.0	—	—	灰黄褐色	〃	〃	〃	御？・煤付着
	315	〃	〃	〃	28.0	—	—	にぶい黄橙色	長石目立つ	普通	〃	御？
	316	浅鉢	〃	〃	26.0	—	—	にぶい黄褐色	〃	良	〃	？・煤付着
	317	〃	〃	〃	30.0	—	—	にぶい褐色		〃	〃	御？
	318	〃	〃	山	—	—	—	黒褐色		〃	〃	御
	319	〃	〃	〃	24.0	—	—	灰黄褐色		やや悪	(内)磨き(外)ナデ	〃
	320	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色	くさり礫	〃	(内)(外)磨き	〃
	321	〃	〃	平	42.0	—	—	褐色	長石多・金雲母	普通	(内)(外)ナデ	御？
	322	深鉢	〃	〃	30.0	—	—	灰黄褐色		良	(内)(外)磨き	〃
	323	浅鉢	〃	山	—	—	—	にぶい黄褐色	角閃石目立つ	〃	〃	御
	324	〃	〃	〃	—	—	—	〃	精選	〃	〃	〃
	325	〃	〃	平	32.0	—	—	〃		〃	〃	〃
	326	〃	〃	〃	28.0	—	—	にぶい黄橙色		〃	〃	〃
	327	〃	〃	〃	26.0	—	—	暗褐色	精選	〃	〃	御・煤付着
	328	〃	〃	〃	33.6	4.6	—	黄橙色	砂粒・角閃石	〃	〃	御
	329	〃	〃	山	—	—	—	にぶい黄橙色	精選	普通	〃	〃
	330	〃	〃	平	32.0	—	—	灰黄褐色	〃	良	〃	〃
	331	〃	〃	〃	—	—	—	褐灰色		普通	〃	〃
	332	〃	〃	〃	40.0	—	—	灰黄褐色	精選・長石目立つ	良	〃	〃
	333	深鉢	〃	〃	—	—	—	暗褐色	長石目立つ	普通	〃	御・鳥？・煤付着
	334	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色	くさり礫	良	(内)磨き(外)ナデ	天
	335	〃	〃	〃	—	—	—	灰黄褐色		普通	(内)(外)ナデ	〃
	336	〃	〃	〃	—	—	—	褐灰色		良	(内)(外)磨き	天・煤付着
	337	〃	〃	〃	32.0	—	—	にぶい黄褐色		普通	(内)(外)磨き・削り	天
	338	〃	〃	〃	30.0	—	—	灰黄褐色	くさり礫	良	(内)(外)磨き	〃
	339	〃	〃	〃	34.0	—	—	にぶい黄橙色	長石多・金雲母	〃	(内)磨き (外)磨き・ナデ	〃
	340	〃	〃	〃	20.0	—	—	褐灰色		〃	(内)(外)ナデ？	〃
	341	〃	〃	〃	28.0	—	—	にぶい赤褐色		普通	(内)条痕後磨き (外)磨き・ヘラ削り後磨き	〃
	342	〃	〃	〃	—	—	—	灰黄褐色	精選・くさり礫	良	(内)(外)磨き	〃
	343	〃	〃	〃	28.0	—	—	にぶい黄褐色		〃	(内)(外)ナデ	天・煤付着
	344	〃	〃	〃	30.0	—	—	にぶい黄褐色		普通	(内)(外)磨き	〃
	345	〃	〃	〃	—	—	—	外・鈍い黄橙 口縁・黒褐色		〃	〃	天
	346	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色		やや悪	〃	天？
	347	〃	〃	〃	32.0	—	—	〃	長石目立つ	普通	〃	三
	348	〃	〃	〃	34.0	—	—	浅黄橙色	長石多	やや悪	〃	天
	349	〃	〃	〃	30.0	—	—	にぶい黄橙色		普通	〃	〃
	350	〃	〃	〃	32.0	—	—	〃		やや悪	〃	〃
85	351	〃	〃	〃	28.0	—	—	褐灰色		普通	(内)磨き (外)ナデ・磨き	天・煤付着
	352	〃	〃	〃	40以上	—	—	暗褐色		〃	(内)(外)磨き	天
	353	〃	〃	〃	40.0	—	—	にぶい黄橙色	くさり礫	〃	(内)磨き (外)磨・削り後ナデ	天？
	354	〃	〃	〃	20.0	—	—	〃		やや悪	(内)(外)ナデ	天？・煤付着

図版No	土器No	器種	部分	口縁種類	口径	器高	最大胴部	色　調	胎土の特徴	焼成	調　整	形式・備考
85	355	深鉢	胴部	平	—	—	32.0	にぶい黄褐色		良	(内)(外)磨き	鳥
	356	〃	口縁部	山	—	—	—	灰黄褐色		〃	〃	御？天？・煤付着
	357	浅鉢	〃	平	34.0	—	—	〃	精選	〃	〃	天
	358	〃	〃	山	〃	—	—	褐灰色	〃	〃	〃	〃
	359	〃	〃	平	28.0	—	—	にぶい黄褐色		〃	〃	〃
	360	〃	〃	〃	32.0	—	—	にぶい黄橙色	精選	〃	〃	〃
	361	〃	〃	〃	34.0	—	—	黒褐色	〃	〃	〃	古
	362	〃	〃	〃	23.0	—	—	にぶい黄色	〃	〃	〃	〃
	363	〃	〃	〃	30.0	—	—	にぶい黄橙色		普通	〃	天？・煤付着
	364	〃	〃	〃	34.0	—	—	〃	精選	良	〃	古
	365	〃	〃	〃	30.0	—	—	黒褐色	長石目立つ	〃	〃	古・煤付着
	366	深鉢	〃	〃	—	—	—	浅黄橙色	くさり礫	〃	(内)削り後ナデ (外)条痕・部分磨き	古
	367	〃	〃	〃	38.0	—	—	〃	〃	〃	(内)磨き(外)条痕	〃
	368	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄褐色		普通	(内)削り後ナデ (外)条痕後部分磨き・ナデ	〃
	369	浅鉢	〃	〃	32.0	—	—	〃	金雲母	〃	(内)(外)磨き	〃
	370	浅鉢？	？	？	—	—	—	浅黄橙色	長石目立つ	良	〃	古？
	371	浅鉢	口縁部	平	24.0	—	—	にぶい黄褐色	精選・角閃石	〃	〃	天？・煤付着
	372	〃	〃	〃	32.0	—	—	灰黄褐色	くさり礫	〃	〃	古
	373	〃	〃	波	—	—	—	褐灰色	精選	〃	〃	〃
	374	〃	口縁部・リボン状突起	平	—	—	—	にぶい黄橙色	〃	普通	(内)磨き (外)磨き・部分削り	？
	375	〃	口縁部	波	—	—	—	褐灰色	〃	良	(内)(外)磨き	古
	376	深鉢	〃	平	32.0	—	—	にぶい黄褐色		普通	(内)磨き(外)条痕	黒川
	377	〃	〃	〃	34.0	—	—	灰黄褐色	長石多	やや悪	(内)(外)削り	黒川？山の寺？
	378	〃	胴部	〃	—	—	—	〃		〃	(内)磨き(外)条痕	黒川？
86	379	？	口縁部	〃	—	—	—	橙色	砂粒・角閃石・金雲母	良	(内)ナデ (外)削り後ナデ・磨	
	380	〃	胴部	—	—	—	—	にぶい黄橙色	砂粒多・角閃石・金雲母	〃	(内)(外)磨き	
	381	〃	〃	—	—	—	—	にぶい黄褐色	砂粒少・角閃石・金雲母	〃	〃	
	382	〃	口縁部	波	—	—	—	にぶい黄橙色	砂粒・角閃石	〃	(内)磨き	
	383	〃	胴部	—	—	—	—	にぶい黄褐色	砂粒少・長石・角閃石・石英	〃	(内)(外)磨き	
	384	〃	〃	—	—	—	—	にぶい黄橙色	砂粒多・長石・石英・金雲母	〃	〃	
	385	〃	〃	—	—	—	—	〃	砂粒・角閃石	〃	〃	
	386	〃	口縁部	波	—	—	—	浅黄橙色	砂粒・長石・角閃石			
	387	〃	〃	平	—	—	—	にぶい黄褐色	砂粒多・角閃石	〃	(内)(外)磨き	
	388	〃	〃	波	—	—	—	〃	砂粒・長石・角閃石	〃	〃	
	389	〃	〃	〃	—	—	—	鈍い橙～黒褐	〃	〃	〃	
	390	〃	〃	〃	—	—	—	灰黄褐～黒褐	砂粒	〃	〃	
	391	〃	〃	平	—	—	—	にぶい黄橙色	砂粒少・長石・金雲母	〃	〃	
	392	〃	〃	〃	—	—	—	〃	砂粒・角閃石	〃	〃	
	393	〃	〃	〃	—	—	—	不明	砂粒・金雲母	〃	〃	煤付着
	394	〃	〃	〃	—	—	—	黒褐色	砂粒・角閃石・金雲母	〃	〃	
	395	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色	砂粒少・角閃石	〃	〃	
	396	〃	胴部	—	—	—	—	にぶい橙色	砂粒・角閃石・金雲母	〃	〃	
	397	〃	〃	—	—	—	—	にぶい黄橙色	〃	〃	〃	
	398	〃	口縁部	平	—	—	—	〃	砂粒少・角閃石	〃	〃	

図版No	土器No	器種	部分	口縁種類	口径	器高	最大胴部	色　調	胎土の特徴	焼成	調　整	形式・備考
86	399	?	口縁部	平	—	—	—	にぶい黄橙色	砂粒少・長石・角閃石	良	(内)(外)磨き	
	400	〃	〃	〃	—	—	—	浅黄橙色	砂粒少	〃	(内)磨き	
	401	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色	砂粒少・角閃石	〃	〃	
	402	〃	〃	〃	—	—	—	〃	〃	〃	〃	
	403	〃	〃	〃	—	—	—	〃	砂粒多・長石・角閃石・石英	〃	〃	
	404	〃	〃	〃	—	—	—	にぶい黄橙色	砂粒	〃	〃	
	405	〃	〃	〃	—	—	—	〃	砂粒少	〃	〃	
	406	〃	〃	〃	—	—	—	〃	砂粒・角閃石	〃	〃	
	407	〃	〃	〃	—	—	—	〃	砂粒やや多・角閃石	〃	〃	
	408	〃	〃	波	—	—	—	〃	砂粒・石英	〃	〃	
	409	〃	〃	平	—	—	—	〃	砂粒少・金雲母	〃	〃	
	410	〃	〃	〃	—	—	—	〃	砂粒・角閃石・金雲母・石英	〃	〃	
	411	浅鉢	〃	山	—	—	—	灰褐～黒褐色	砂粒・角閃石	〃	〃	
	412	?	〃	平	—	—	—	にぶい黄橙色	砂粒・角閃石・金雲母	〃	〃	
	413	把手?	?	—	—	—	—	浅黄・一部橙	砂粒・石英			
組織痕土器												
93	1	深鉢	胴部	—	—	—	—	黒色		良		
	2	〃	〃	—	—	—	—	黒褐色		〃		
	3	〃	〃	—	—	—	—	〃		〃		
	4	〃	〃	—	—	—	—	にぶい黄橙色		普通		
	5	〃	〃	—	—	—	—	にぶい褐色		〃		
	6	〃	〃	—	—	—	—	〃		〃		
	7	〃	〃	—	—	—	—	にぶい黄橙色		〃		
	8	〃	〃	—	—	—	—	にぶい黄褐色		〃		
	9	〃	〃	—	—	—	—	黒色		悪		
	10	〃	〃	—	—	—	—	にぶい橙色		普通		
	11	〃	〃	—	—	—	—	にぶい黄橙色		良		
	12	〃	〃	—	—	—	—	灰黄褐色		普通		
	13	〃	〃	—	—	—	—	にぶい赤褐色		〃		
	14	〃	〃	—	—	—	—	にぶい橙色		〃		
	15	〃	〃	—	—	—	—	〃		〃		
	16	〃	〃	—	—	—	—	暗褐色		〃		
					(cm)	(cm)	(cm)					

(形式欄：天一天城式、三一三万田式、御一御領式、鳥一鳥井原式、古一古閑式、太一太郎迫式)

図版No.	土器No.	器種	部分	口縁種類	口径	器高	最大胴部	色調	胎土の特徴	焼成	調整	形式・備考
古墳時代から奈良時代の遺構出土土器												
170	1	甕				8.05残		赤褐色	微粒子小量含む	良好	内／ナデ 外／ナデ・ケズリ	(拓本)須恵器
	2	〃				4.7 残		灰オリーブ色	砂粒含む	〃	内外／タタキ	〃
	3	平瓶				3.3 残		灰色	〃	〃	内／タタキ後ナデ 外／ナデ	(拓本)内面に車輪文、須恵器
	4	甕				8.0 残		黄灰色	〃	〃	〃	(拓本)須恵器
	5	〃				8.0 残		鈍い黄橙色	砂粒・金雲母含む	〃	内／ナデ外／ナデ	土師器
	6	〃				4.45残		鈍い橙色	砂粒・角閃石	〃	内／ケズリ外／ナデ	〃
	7	坏蓋				2.3 残		灰褐色	砂粒含む	〃	内外／ナデ	(拓本)須恵器・赤焼き
	8	甕				—		灰黄色	微砂粒含む	良	内／タタキ外／ナデ	須恵器
	9	皿	(底径 9.4)			1.85残		橙色	〃	〃	内外／ナデ	土師器
	10	〃	(底径10.0)			2.8 残		〃	砂粒含む	〃	内外／ヘラミガキ	〃
	11	甕			復元23.2	6.0 残		灰赤色	角閃石・金雲母	〃	内／ケズリ外／ナデ	〃
	12	壺			復元17.2	3.6 残		灰色	砂粒含む	良好	内／ナデ	須恵器
	13	?				—		灰白色	細砂粒微量	〃	内／タタキ後ナデ 外／タタキ	〃
	14	皿			復元13.6	2.3		鈍い橙色	長石・金雲母	良	外／ナデ 後ヘラミガキ	土師器
	15	坏			復元14.6	4.3		鈍い黄橙色	角閃石・金雲母	〃	外／ヘラミガキ	〃
	16	坏蓋			復元13.6	2.1 残		灰黄色	微細砂粒含む	良好	内外／ナデ	須恵器
	17	〃			復元13.4	2.2 残		灰黄褐色	砂粒・石英	〃	〃	〃
147	1	甕			17.0	7.7 残		浅黄橙色	砂粒・角閃石	〃	〃	土師器
	2	〃			復元20.3	23.7 残	復元24.5	鈍い黄橙色	〃	〃	内／ヘラケズリ 外／ナデ	〃
	3	〃			復元19.0	24.0 残	復元26.3	〃	砂粒・金雲母粒	〃	内／ケズリ・ナデ 外／ナデ	土師器・赤彩か？
	4	〃			復元1.59	7.9 残		明黄褐色	砂粒・角閃石	〃	内ナデ・ケズリ 外／ナデ	土師器
	5	〃			復元17.5	6.3 残		鈍い黄橙色	〃	〃	内外／ナデ	〃
	6	高坏			復元16.2	5.1 残		橙色	砂粒・金雲母	〃	〃	土師器・暗文
	7	〃	(底径11.4)			9.3 残		〃黒褐色	〃	〃	内／ケズリ外／ナデ	土師器
	8	〃	(底径10.6)			8.0 残		浅黄橙色	砂粒・角閃石	〃	内外／ケズリ・ナデ	〃
	9	〃				9.95残		鈍い橙色	〃	〃	内／ケズリ外／ナデ	〃
153	1	〃			16.9	4.6 残		明赤褐色	砂粒小量	〃	内／ミガキ 外／ナデ・ミガキ	〃
	2	坩			復元12.4	9.0 残		鈍い黄橙色	大粒砂粒・角閃石	〃	内外／ナデ	土師器・赤彩
	3	甕			22.4	16.8 残	24.2	鈍い褐色	砂粒・角閃石	良	内／ナデ・ケズリ 外／ナデ	土師器
	4	〃			16.5	5.8 残		灰白色	微砂粒	〃	内外／ナデ	〃
	5	〃			17.5	7.2 残		鈍い橙色	砂粒・金雲母	〃	内／ナデ・ケズリ 外／ナデ	〃
	6	壺			15.2	10.0 残		灰白色	砂粒	〃	内／ナデ 外／ハケメ後ナデ	〃
	7	甕			16.0	24.1 残	20.4	鈍い黄橙色	白い砂粒・角閃石	良好	内／ケズリ 外／ハケメ後ナデ	〃
	8	高坏			14.2	5.4 残		橙色	〃	〃	内外／ハケメ・ナデ・ミガキ	〃
	9	甕			復元17.1	5.7 残		〃	砂粒・角閃石	〃	内／ケズリ 外／ナデ・ハケメ	〃
	10	壺			復元18.0	5.2 残		鈍い黄橙色	角閃石・石英	良	内／ハケメ 外／ハケメ後ナデ	土師器・赤彩？

図版No.	土器No.	器種	部分	口縁種類	口径	器高	最大胴部	色調	胎土の特徴	焼成	調整	形式・備考
153	11	壺				4.7 残		鈍い黄橙色	角閃石・石英	良好	内外／ナデ	土師器
	12	〃				4.6 残		鈍い赤褐色	〃	良	内／ナデ 外／ナデ・ミガキ	〃
	13	〃				6.3 残		鈍い黄橙色	砂粒	良好	内／ナデ 外／ナデ・ハケメ	〃
159	1	甕			18.1	25.5	23.3	褐色	角閃石・砂粒	〃	内／ケズリ 外／ハケメ後ナデ	〃
	2	高坏		(裾部径12.7)		9.4 残		明赤褐色	〃	〃	内/ケズリ外/ミガキ	〃
	3	甕			13.7	22.0	18.7	鈍い黄橙色	白い砂粒・角閃石	〃	内/ケズリ外/ナデ	〃
	4	〃			17.6	12.0 残		鈍い褐色	砂粒粒・角閃石	良	内／ケズリ・ナデ 外／ナデ	〃
	5	壺			11.3	11.9 残	10.8	明黄褐色	〃	〃	内外／ナデ	〃
	6	高坏				9.4 残		橙色	砂粒	〃	内/ケズリ外/ハケメ	〃
	7	壺			11.4	15.4 残	13.8	〃	砂粒・角閃石	〃	内/ナデ外/ハケメ	〃
	8	高坏			17.8	5.6 残		〃	〃	〃	内外／ナデ	土師器・内面赤彩
	9	壺			6.8	8.8 残		鈍い黄橙色	〃	〃	内／ナデ 外ナデ・ハケメ	土師器
173	1	甕			復元16.6	5.0 残		浅黄橙色	砂粒・金雲母	良好	内／ナデ・ケズリ 外／ナデ	土師器
	2	〃				17.3 残	復元24.0	鈍い褐色	砂粒・小石	〃	内/ケズリ外/ナデ	〃
	3	〃				17.9 残		橙色	砂粒・角閃石	良	内／ケズリ・ナデ 外／ナデ	〃
163	1	壺			16.3	32.6	27.8	〃	〃	〃	内／ナデ・ケズリ 外／ナデ	〃
	2	埦			復元16.0	4.5		〃	〃赤褐色砂粒	良好	内外／ミガキ	土師器・内底面にヘラ記号
	3	壺			12.0	8.9 残		浅黄橙色	砂粒・金雲母	〃	内／ナデ 外／ナデ・ハケメ	土師器・刻み目
	4	〃			8.2	7.8 残		鈍い橙色	〃	〃	内／ハケメ・ナデ 外／ハケメ	土師器
	5	高坏			復元11.5	11.2 残		鈍い黄橙色	砂粒・金雲母	良好	内外／ハケメ	土師器・坏部に赤彩
	6	甕			復元18.4	12.6 残		明黄褐色	砂粒・角閃石	〃	内／ナデ・ケズリ 外／ハケメ	土師器
	9	〃			復元17.4	5.4 残		鈍い黄橙色	砂粒	〃	内／ハケメ・ナデ 外／ハケメ	〃
	7	高坏			復元16.4	16.0	(裾部径12.0)	灰白色	微砂粒	〃	内外/ナデ・ミガキ	〃
	8	〃			復元14.6	13.7	(裾部径10.8)	橙色	精砂粒	〃	内外／ナデ	〃
177	1	甑			24.5	19.0 残		〃	砂粒・角閃石	良	内／ケズリ・ナデ 外／ハケメ	〃
	2	甕			19.3	29.9	28.1	明赤褐色	砂粒	良好	内/ケズリ外/ナデ	土師器・赤彩
	3	〃			25.5	11.2 残		浅黄橙色	砂粒・角閃石	良	内／ナデ・ケズリ 外／ナデ	土師器
	4	〃			23.8	6.4 残		灰白色	〃	〃	内/ケズリ外/ナデ	〃
178	5	〃			20.8	17.2 残		鈍い黄橙色	砂粒	良好	内/ケズリ外/ハケメ	〃
	6	〃			19.0	5.0 残		橙色	砂粒・角閃石	良	内／ケズリ・ナデ 外／ナデ	〃
	7	鍋			23.2	7.4 残		鈍い黄橙色	〃	〃	内／ナデ・ケズリ 外／ナデ	〃
	8	甕			24.7	6.5 残		灰色	微砂粒	〃	内外／ナデ	須恵器
	9	皿			14.4	3.7 残	(底径10.0)	橙色	〃	〃	〃	土師器
	10	蓋			14.1	2.0		灰色	砂粒	良	内外／ナデ	須恵器
	11	埦				1.9 残	(底径 6.5)	灰色	微砂粒	〃	内ナデ 外／ケズリ・ナデ	〃

図版No.	土器No.	器種	部分	口縁種類	口径	器高	最大胴部	色調	胎土の特徴	焼成	調整	形式・備考
178	14	甕			—	—		黄灰色	砂粒	〃	内／ナデ・ケズリ 外／タタキ	須恵器・(拓本)
	15	〃			—	—		灰色	微砂粒	〃	内外／タタキ後ナデ	〃
	16	〃			—	—		〃	砂粒	〃	内／タタキ後ナデ 外／ハケメ	〃
	17	〃			—	—		黄灰色	〃	〃	内外／タタキ後ナデ	〃
					(cm)	(cm)	(cm)					

ワクド石遺跡出土　石器計測表

図版No.	No.	器　種	たて	よこ	厚さ	重さ	色　調	石　材	出土地点
玉　類									
88	1	勾　玉	3.0	2.2	0.6	—	—	翡翠	表採
	2	〃	2.0	1.2	0.8	2.3	灰オリーブ	軟玉	B-16 SX01
	3	垂　玉	2.3	1.0	0.5	1.2	〃	軟玉(滑石？)	V-19
	4	菅　玉	1.7	1.3	?	1.2	オリーブ黒	軟玉(滑石)	A-13 SI08
	5	〃	1.8	1.1	1.1	2.3	〃 灰色	軟玉？	D-11·12 SI10
	6	勾　玉	2.9	1.8	0.7	0.7	灰オリーブ	〃	B-14 SX01 上部
	7	勾玉未製品	2.3	1.4	0.4	2.7	オリーブ灰	〃	E-16 PitNo.14
	8	〃	1.9	1.3	0.6	2.1	緑灰色	〃	U-19
	9	菅玉未製品	1.8	0.65	0.65	0.8		翡翠	C区 SX01
	10	〃	1.0	0.6	0.5	0.1		〃	C-18 No.80
	11	〃	1.8	0.8	0.65	1.05		〃	U-20 E区 西側段落ち
	12	〃	2.1	0.9	0.7	2.4		〃	D-18 No.24
	13	未 製 品	2.1	1.3	?	1.7	オリーブ黒	軟玉	D区 E-19 No.49
	14	小玉未製品	1.2	1.2	0.6	1.05		翡翠	V-18 耕作土中
31	(1)	勾　玉	2.1	0.7	0.6	3.0	灰オリーブ	軟玉	V-18 縄文住4
打製石斧									
95	1	打製石斧	11.0	5.20	1.40	117.0		緑色片岩	E·U-20
	2	〃	11.8	6.21	1.12	110.1		玄武岩質安山岩	D-15 SI16(埋土一括)
	3	〃	9.30	6.50	1.84	147.5		安山岩	C-15 SX05
	4	〃	6.48	4.00	1.36	46.8		玄武岩質安山岩	V-19
	5	〃	11.34	3.70	1.60	102.9		緑色片岩	V-20 遺構面掘り下げ一括
	6	〃	8.74	4.35	1.12	61.7		〃	E·U-19
	7	〃	8.56	4.20	1.21	50.7		石ぼく石英片岩	E·U-18
96	8	〃	10.00	4.45	1.30	75.7		緑泥片岩？	B·C-15 SI15
	9	〃	8.60	4.50	1.10	61.2		〃	E区 V-20 北壁溝 埋土一括
	10	〃	9.66	4.44	1.00	67.1		緑色片岩	V-19 Pit16
	11	〃	13.8	5.21	1.54	158.6		玄武岩質安山岩	V-20
	12	〃	12.63	6.16	2.2	216.2		〃	D·A-17 No.58
	13	〃	10.37	8.15	1.62	161.2		〃	A-15 SI09 埋土一括
97	14	〃	11.46	4.88	1.46	105.0		緑色片岩	縄文土器包含層B，D-10，No.65
	15	〃	12.00	5.81	1.95	208.6		蛇紋岩	E·U-18，No.67
	16	〃	10.45	4.62	1.04	58.3		玄武岩質安山岩	D·E-19
	17	〃	12.55	6.57	1.93	220.8		凝灰質安山岩？	A-17 集石部No.5
	18	〃	10.16	5.32	2.13	166.2		緑色片岩	E-17 SI22
	19	〃	10.11	5.38	1.91	130.4		凝灰質安山岩	C-6 SX01
98	20	〃	8.40	5.05	1.63	84.2		凝灰質安山岩？	E-16 遺構面掘り下げNo.13
	21	〃	11.35	5.00	1.90	109.8		〃	D-18·SK1076
	22	〃	8.65	5.40	1.80	98.9		河原石石材不明	D-6 SI01C
	23	〃	10.94	5.64	1.44	122.9		玄武岩質安山岩	D-19 No.97
	24	〃	8.64	4.16	1.65	72.4		〃	D-19 No.94
	25	〃	9.15	5.27	1.45	82.8		?	B-12 道路2 埋土一括
	26	〃	11.6	5.55	2.0	202.1		石材不明	E-15 Pit31
99	27	〃	13.89	6.71	2.37	212.0		凝灰岩？	U·V-19 SI25 埋土一括
	28	〃	10.23	4.9	2.5	147.3		安山岩？	V-20 西側段落ち
	29	〃	9.8	5.94	1.89	145.4		凝灰質安山岩？	C-18 SK1056
	30	〃	10.79	4.96	1.29	100.0		緑泥片岩？	A-14 PitNo.8
	31	〃	11.50	5.45	1.65	140.5		凝灰質安山岩？	B-10 道路2
100	32	〃	12.2	6.8	1.78	153.5		〃	V-19 No.44
	33	〃	10.39	7.4	1.38	108.0		玄武岩質安山岩	D-14 SK620
	34	〃	10.73	5.18	2.13	116.0		安山岩	D-19 井戸状遺構 埋土一括
	35	〃	11.0	5.52	1.53	150.6		緑泥片岩？	B-16 SX01

図版No.	No.	器　種	たて	よこ	厚さ	重さ	色　調	石　材	出土地点
101	36	打製石斧	10.43	7.82	1.67	211.5		玄武岩質安山岩	E・V-19 No.5
	37	〃	8.0	3.2	0.8	27.2		緑泥片岩？	C-13 S I 14
	38	〃	8.3	4.55	1.0	49.7		〃	C-5 Pit 4
	39	〃	8.05	5.5	0.8	40.4		〃	B-5 道路2
	40	〃	8.53	5.8	1.38	81.6		〃	B-15 埋土一括
	41	〃	8.7	5.4	0.95	54.3		玄武岩質安山岩	D-15 PitNo.17
	42	〃	8.3	5.95	0.8	61.4		緑泥片岩？	E区 西側段落ち
102	43	〃	11.25	6.1	1.5	136.4		〃	V-20 西側段落ち
	44	〃	9.5	5.45	1.0	50.8		凝灰質安山岩？	E-19 遺構面掘り下げNo.3
	45	〃	10.8	5.9	1.8	145.0		？	E・V-18 No.52
	46	〃	9.4	5.0	1.1	68.9		緑泥片岩	V-19 No.65
	47	〃	12.67	5.13	1.87	120.0		玄武岩質安山岩	E・V-20
	48	〃	11.79	5.47	1.29	102.4		緑色片岩	D-19
103	49	〃	8.68	7.88	1.42	140.0		角閃石安山岩	D-19 遺構面掘り下げ一括
	50	〃	9.16	6.02	1.40	83.0		凝灰質安山岩	U-18 No.21
	51	〃	10.23	6.14	2.03	123.0		粘板岩	U-19
	52	〃	9.0	5.6	1.3	90.0		緑色片岩	V-19
	53	〃	9.71	6.15	1.62	105.0		玄武岩質安山岩	V-19
104	54	〃	12.95	8.64	2.09	265.0		角閃石安山岩	D-15 S I 16
	55	〃	14.25	6.4	1.9	189.0		凝灰質安山岩	V-17・18 縄文住4掘り下げ
	56	〃	8.5	6.4	1.3	181.0		緑色片岩	C-13 S I 24 埋土一括
	57	〃	10.34	7.37	1.62	142.5		角閃石安山岩	E-16 No.39
105	58	〃	12.36	7.18	2.38	285.0		緑色片岩	D-17 No.38
	59	〃	9.7	5.3	1.2	80.0		緑泥片岩？	V-18,19 S I 24
	60	〃	11.42	5.19	1.39	95.5		緑色片岩	C-16 No.94
	61	〃	13.91	4.62	1.195	105.0		玄武岩質安山岩 (二子山)	カードなし
	62	〃	14.84	5.04	1.5	141.5		緑色片岩	C-5 S D04
106	63	〃	12.06	8.49	1.89	160.5		玄武岩質安山岩	E・U-20
	64	〃	9.38	4.92	1.09	69.5		〃	C-5 No.206
	65	〃	7.4	6.4	1.2	90.1		緑色片岩	V-17 S I 26 埋土一括
	66	〃	10.33	5.3	1.19	88.0		〃	E西側段落ち
	67	〃	14.81	6.8	1.6	190.5		玄武岩質安山岩	C-14 No.62
	68	〃	10.23	5.0	1.15	86.6		不明	C-8 S D102
107	69	〃	8.09	7.9	0.68	56.6		緑色片岩	C-D15 S I 16 埋土一括
	70	〃	8.06	4.57	1.16	56.3		凝灰岩質	B-15 道路2
	71	〃	11.6	6.7	1.8	125.0		玄武岩質安山岩	B-15,16 S X01
	72	〃	10.4	4.97	0.85	70.0		緑色片岩	B-13 S X01 埋土一括
	73	〃	9.6	6.4	1.8	75.7		玄武岩質安山岩	C・E-15 No.21
	74	〃	11.71	4.81	1.3	89.0		〃	E-18,19 S I 23
	75	〃	6.2	7.3	1.0	69.0		角閃石安山岩	E・V-19 No.29
108	76	〃	9.76	6.53	0.92	71.0		粘板岩系？	C-15 掘り下げ一括
	77	〃	7.3	7.44	1.35	90.0		玄武岩質安山岩	V-19
	78	〃	10.59	6.82	1.01	58.1		緑泥片岩	V-18 PitNo.10
	79	〃	5.58	5.35	1.43	50.5		〃	V-19 表土ハギ後一括
	80	〃	6.31	5.17	0.81	26.0		緑泥片岩	V-19,20 北壁掘り下げ一括
	81	〃	4.0	4.72	0.98	27.4		凝灰質安山岩 (二子山？)	B-16 S X01
	82	〃	11.7	7.32	1.48	128.0		玄武岩質安山岩	E・U-20
109	83	〃	11.5	8.0	0.8	90.5		緑色片岩	C-5 S X01
	84	〃	9.42	7.18	2.3	210.4		玄武岩質安山岩	B-10 S D107
	85	〃	9.65	6.42	1.27	114.0		〃	V-18,19 S I -24 埋土一括
	86	〃	9.5	5.56	1.78	126.0		〃	B-7 道路2

図版No.	No.	器　種	たて	よこ	厚さ	重さ	色　調	石　材	出土地点
110	87	打製石斧	12.5	8.0	1.33	207.0		石英片岩	E区 西側段落ち
	88	〃	6.72	4.7	1.27	66.0		緑色片岩	C・D-14 No.23
	89	〃	8.21	6.92	1.67	119.5		凝灰質安山岩	B-14 SX01 埋土一括
	90	〃	7.0	5.2	1.15	43.4		〃	E区 西側段落ち
	91	〃	9.55	5.78	7.5	58.4		?	D-15 SI16 埋土一括
	92	〃	10.15	6.48	0.71	81.0		緑泥片岩	C・D-15 SI16
	93	〃	6.90	5.60	1.20	63.6		?	V-19 No.38
111	94	〃	8.21	6.92	1.67	119.5		玄武岩質安山岩	B-14 SX01 埋土一括
	95	〃	9.98	5.81	0.96	87.5		?	V-18,19 SI24
	96	〃	9.33	8.7	2.14	227.4		玄武岩質安山岩	B-15,16 SX01 埋土一括
	97	〃	6.95	6.03	2.43	123.4		?	E・V-19 埋土一括
	98	〃	8.25	7.70	1.35	117.4		砂岩	D-18 No.32
	99	〃	7.32	8.98	1.14	136.0		角閃石安山岩	V-20
112	100	〃	8.75	8.33	2.03	182.0		緑色系安山岩	V-19 Pit16
	101	〃	7.87	6.85	0.81	54.1		緑色片岩	E区 西側段落ち
	102	〃	5.6	6.1	1.0	48.2		堆積岩系か？	C・D-15 SI16
	103	〃	9.4	4.8	1.2	64.3		緑色片岩	V-18
	104	〃	4.57	7.05	0.43	21.0		?	C-5 SD04
	105	〃	8.97	5.44	0.9	53.1		凝灰質安山岩	D-15 SI16
	106	〃	8.76	4.59	0.73	41.2		緑色片岩	C-5 No.63
	107	〃	6.5	4.25	0.9	37.5		緑泥片岩	E区 西側段落ち 埋土一括
113	108	〃	9.19	4.36	0.5	28.0		〃	不明
	109	〃	7.43	4.0	0.85	39.0		〃	D-15 SI16
	110	〃	9.0	5.6	1.0	69.0		粘板岩	E・V-20
	111	〃	7.89	2.67	0.66	18.2		緑泥片岩	道路遺構上埋土
	112	〃	5.52	2.45	0.62	11.8		緑泥片岩系	A-15 SI09床に近い
	113	〃	7.4	2.88	0.85	24.1		緑泥片岩	E区 遺構面掘り下げ
	114	〃	3.96	2.23	0.43	4.0		緑泥片岩？	D-17 SI21
	115	〃	4.03	2.14	0.69	5.8		?	E-18,19 SI23 埋土一括
	116	〃	6.39	3.32	0.58	11.8		緑泥片岩	V-19 遺構面掘り下げNo.33
	117	〃	3.92	3.92	0.45	11.1		〃	D-19
	118	〃	11.6	4.6	0.7	66.5		緑泥片岩？	V-19 Pit 2
	119	〃	8.86	3.35	0.68	26.6		〃	V-18 PitNo.7
	120	〃	4.11	3.5	0.53	13.1		石英片岩	V-20 遺構面掘り下げ
114	121	〃	6.77	2.9	0.6	15.6		緑泥片岩	E・V-17
	122	〃	7.39	3.86	0.34	12.4		緑泥片岩？	D-7 SI02 一層一括
	123	〃	7.79	9.98	1.44	155.2		凝灰質安山岩	C-11・SI-11 埋土一括
	124	〃	7.3	9.49	2.17	207.4		玄武岩質安山岩	B-11 SX01 埋土一括
	125	〃	8.68	11.47	2.03	256.2		〃	A-15 SI09
115	126	〃	7.54	7.92	2.34	234.7		安山岩	E-18 No.33
	127	〃	5.75	10.42	0.7	62.4		緑色片岩	D・E-17 No.49
	128	〃	7.79	9.98	1.44	155.2		玄武岩質安山岩	C-11 SI-11 埋土一括
	129	〃	7.21	10.86	1.97	152.5		角閃石安山岩	C-19 SK1061
116	130	〃	8.15	10.74	1.63	176.5		玄武岩質安山岩	C・D-12 No.88
	131	〃	15.25	7.6	1.87	252.7		緑色片岩	D-17 SK1071
	132	〃	13.53	8.3	2.55	325.0		玄武岩質安山岩	V-18 表土一括
117	133	〃	15.7	8.08	2.31	439.4		〃	D-18 No.30
	134	〃	14.8	8.93	2.63	335.0		〃	V-17 SI26 埋土一括
	135	〃	5.9	9.4	1.0	70.3		〃	V-19・20 十字型石器④
118	136	〃	9.7	7.6	0.9	71.7		輝石片岩	V-19 No.32 十字型石器③
	137	〃	8.7	8.6	1.9	116.9		玄武岩質安山岩	U-20 十字型石器②
	138	〃	7.2	5.9	0.8	48.8		緑色片岩	V-20 十字型石器①

図版No.	No.	器　種	たて	よこ	厚さ	重さ	色　調	石　材	出土地点
磨製石斧									
119	1	磨製石斧	11.4	5.58	2.48	218.0		不明	B-19 道路遺構2
	2	〃	9.7	4.82	2.63	210.0		蛇紋岩	E・V-19
	3	〃	7.78	6.55	—	140.5		不明	B-16 SX01 埋土一括
	4	〃	11.93	3.72	2.96	170.2		砂岩系	V-20 No.29
	5	〃	12.2	5.24	3.66	340.5		不明	V-17 SI26
	6	〃	6.16	4.95	2.69	120.0		〃	V-19 No.44 遺構面掘り下げ
120	7	〃	11.5	5.72	2.76	180.0		角閃片岩	C-5 SD04
	8	〃	6.72	4.53	2.76	99.0		?	C・B-15 No.14
	9	〃	5.88	4.67	0.42	15.0		緑泥片岩?	V-18・19 SI24
	10	〃	8.45	6.7	0.88	84.0		緑色片岩	D-16 No.37
	11	〃	6.33	6.29	1.19	71.0		玄武岩質安山岩	D・C-18 No.93
	12	〃	8.0	4.74	1.08	65.0		不明	E-17
	13	〃	8.6	5.5	1.1	101.0		〃	C-15・16 JSI03 溝中
	14	〃	7.12	5.33	0.83	60.0		砂岩?	B・D-19
121	15	〃	12.6	5.32	2.27	230.0		?	C-7 No.32 縄文土器包含層
	16	〃	9.25	4.54	2.08	109.0		砂岩系	A-13 SI08 埋土一括
	17	〃	8.255	3.99	1.1	56.5		堆石岩系?	B-8 SD101 内一括
	18	〃	6.64	7.7	1.87	170.0		安山岩二子山?	B-16 SX01
	19	〃	7.71	4.81	1.44	140.0		玄武岩質安山岩	U-20
	20	〃	9.6	5.8	2.1	188.0		蛇紋岩	C-5 No.301
	21	〃	6.24	5.25	1.885	68.7		粘板岩?灰色	C-9 PitNo.17
	22	〃	5.76	4.84	1.37	51.3		緑色片岩	V-19
122	23	〃	8.24	5.42	1.33	111.4		不明	B-7 SX01
	24	〃	7.95	3.91	—	74.0		蛇紋岩	B-9 SX01 3層
	25	〃	7.25	6.90	1.00	76.6		不明	不明
	26	〃	5.83	1.69	0.71	8.7		安山岩	E・U-20 西側段落ち
石　鏃									
123	1	石　鏃	2.15	1.5	0.5	1.3		粘板岩	C・B-6 SX01
	2	〃	2.4	1.9	0.5	2.1		サヌカイト	V-19 No.5
	3	〃	2.8	1.4	0.4	1.5		腰岳Ob	D-8 SI04
	4	〃	2.55	2.25	0.7	3.6		サヌカイト	U-19 No.33
	5	〃	2.4	1.7	0.6	1.7		〃	E区 U-19
	6	〃	2.0	1.6	0.3	0.8		姫島Ob	D-16
	7	〃	1.7	1.5	0.3	0.5		サヌカイト	V-19 No.56
	8	〃	2.1	1.9	0.7	1.9		〃	C・D-11 No.64
	9	〃	2.6	2.0	0.5	2.4		〃	B-4 道路2
	10	〃	2.7	1.9	0.4	2.0		〃	C・A-14 No.74
	11	〃	2.3	1.8	0.6	2.1		〃	D-15 SI16
	12	〃	2.2	1.8	0.25	1.1		〃	C-14 SK589
	13	〃	2.2	1.8	0.55	1.9		〃	C-14 SK583
	14	〃	2.0	1.5	0.4	0.6		〃	A・C-4 一括
	15	〃	1.9	1.1	0.35	0.3		透明Ob	B-7 SX01
	16	〃	2.0	1.7	0.30	0.6		サヌカイト	A,C-5 288 縄文土器包含層
	17	〃	1.9	1.3	0.35	0.4		姫島Ob	E-16 SI20 一層D
	18	〃	3.0	1.7	0.5	1.9		チャート(灰色)	U-20
	19	〃	1.9	1.5	0.3	0.5		姫島Ob	C-7 SK1051
	20	〃	2.1	1.5	0.4	0.8		腰岳Ob	D-11・12 SI10
	21	〃	1.9	1.5	0.4	0.9		〃	E・V-19
124	22	〃	2.2	1.6	0.3	0.7		姫島Ob	D-15 SI16
	23	〃	2.0	1.6	0.3	0.7		〃	E-16 SI20
	24	〃	2.0	1.8	0.35	0.9		サヌカイト	E区 西側段落ち
	25	〃	1.9	1.4	0.25	0.4		腰岳Ob	C区 D-14 No.40

図版No.	No.	器　種	たて	よこ	厚さ	重さ	色　調	石　材	出土地点
124	26	石　鏃	2.1	1.7	0.4	0.9		腰岳Ｏｂ	Ｖ-20 No.7
	27	〃	2.0	1.9	0.3	0.7		緑色片岩	Ｖ-19 No.49
	28	〃	1.8	1.5	0.25	0.4		サヌカイト	Ｖ-19
	29	〃	1.9	1.4	0.3	0.6		〃	Ｃ-5　ＳＸ01
	30	〃	1.9	1.4	0.3	0.6		〃	Ｄ-11･12　ＳＩ10
	31	〃	1.9	1.5	0.5	1.2		粘板岩	Ｄ-17
	32	〃	1.8	1.4	0.4	0.4		姫島Ｏｂ	Ｅ・Ｖ-19
	33	〃	1.8	1.5	0.3	0.4		腰岳Ｏｂ	Ｖ-18･19　ＳＩ25
	34	〃	2.0	1.5	0.25	0.4		チャート(灰)	Ｖ-18 Pit18
	35	〃	2.9	2.1	0.4	1.4		〃	Ｂ-14　ＳＤ05
	36	〃	2.4	1.8	0.45	1.1		姫島Ｏｂ	Ｖ-19
	37	〃	2.6	1.8	0.45	1.4		サヌカイト	Ｕ-15 No.30
	38	〃	1.8	1.5	0.3	0.5		〃	Ｃ-3　ＳＸ01
	39	〃	2.0	1.5	0.3	0.3		姫島Ｏｂ	〃
	40	〃	2.0	1.7	0.5	1.1		サヌカイト	Ｕ・Ｖ-19　ＳＩ25
	41	〃	2.6	1.7	0.3	0.8		〃	Ｅ区　西側段落ち
	42	〃	2.4	1.3	0.35	0.5		腰岳Ｏｂ	Ｖ-19
	43	〃	1.5	1.5	0.3	0.4		〃	Ａ-15･16･17　道路
125	44	〃	3.6	1.5	0.5	2.0		〃	Ｄ-12 No.69
	45	〃	2.5	1.9	0.4	1.4		〃	Ｂ-16　ＳＸ01
	46	〃	2.5	1.4	0.4	1.1		〃	Ｖ-20
	47	〃	2.3	1.4	0.3	0.6		〃	Ｃ区　Ｄ-15 No.37
	48	〃	2.5	1.4	0.5	1.1		〃	Ｅ-16 Pit13
	49	〃	1.9	1.4	0.3	0.7		サヌカイト	Ａ・Ｃ-2　No.239
	50	〃	2.1	1.5	0.3	0.7		〃	Ｅ区　Ｕ-18
	51	〃	1.95	0.80	0.30	0.4		?	Ｃ-18 Pit 4
	52	〃	1.8	1.2	0.4	0.8		姫島Ｏｂ	Ｄ-16
	53	〃	2.0	1.1	0.4	0.6		サヌカイト	Ａ区　Ｃ-4
	54	〃	2.0	1.1	0.25	0.3		姫島Ｏｂ	Ｃ区　Ｅ-16 No.6
	55	〃	2.0	1.2	0.3	0.6		腰岳Ｏｂ	Ｂ-16 Pit 5
	56	〃	1.8	1.2	0.3	0.4		姫島Ｏｂ	Ｖ-18･19　ＳＩ24
	57	〃	1.6	1.2	0.4	0.4		頁岩	Ｖ-19･20　北壁トレンチ
	58	〃	1.6	1.2	0.25	0.4		姫島Ｏｂ	Ｄ区　Ｅ-18 No.49
	59	〃	1.9	1.2	0.25	0.4		〃	Ｃ-5　ＳＸ01
	60	〃	1.8	1.2	0.4	0.8		〃	Ｂ-16　ＳＸ01
	61	〃	2.1	1.3	0.4	0.8		サヌカイト	Ｄ-19 Pit25
	62	〃	4.3	2.2	0.6	4.4		姫島Ｏｂ	Ｂ-5　道路状遺構２　硬化面上
	63	〃	3.5	2.2	0.45	2.1		腰岳Ｏｂ	Ｃ-4　ＳＸ01
	64	〃	2.5	1.5	0.5	1.1		サヌカイト	Ｂ-13　ＳＸ01　埋土一括
	65	〃	3.0	1.7	0.35	1.7		〃	Ｃ-16　ＳＩ17
126	66	〃	3.2	2.5	0.7	3.0		〃	Ｂ-8　ＳＤ102　一層一括
	67	〃	3.4	1.8	0.5	1.6		〃	Ｖ-18　ＳＩ28
	68	〃	2.2	1.8	0.5	1.1		腰岳Ｏｂ	Ｖ-19　Ⅲ層上面までの掘り下げ
	69	〃	2.0	1.8	0.5	0.9		サヌカイト	ＳＫ02
	70	〃	2.0	1.6	0.5	1.1		〃	Ｃ・Ａ-16 No.65
	71	〃	2.3	1.7	0.5	1.5		チャート(灰)	Ｕ-17　ＳＫ-1086
	72	〃	3.3	1.5	0.3	1.4		〃	Ｅ-17　ＳＩ22 No.3
	73	〃	2.6	1.4	0.25	0.6		腰岳Ｏｂ？	Ｅ-15 Pit25
	74	〃	2.8	1.3	0.35	1.1		チャート(緑)	Ｖ-19
	75	〃	1.7	1.4	0.3	0.3		腰岳Ｏｂ	Ｅ区　西側段落ち
	76	〃	1.5	1.5	0.25	0.5		姫島Ｏｂ	Ｖ-20　縄文埋甕３
	77	〃	1.6	1.6	0.3	0.6		安山岩	Ｂ-4　道路状遺構２　硬化面上
	8	〃	1.9	1.7	0.4	0.3		腰岳Ｏｂ	Ｖ-19 No.25

図版No.	No.	器　種	たて	よこ	厚さ	重さ	色　調	石　材	出土地点
126	79	石　　鏃	1.5	1.6	0.4	0.4		腰岳Ｏｂ	Ｖ-18 Pit 8
	80	〃	1.5	1.8	0.25	0.2		サヌカイト	Ｖ-19 No.43
	81	〃	1.1	1.3	0.2	0.1		〃	Ｅ区 西側段落ち
	82	〃	2.5	1.3	0.4	0.8		姫島Ｏｂ	Ｅ・Ｖ-20
	83	〃	2.5	1.4	0.3	0.5		〃	Ｅ区 西側段落ち
	84	〃	2.4	1.3	0.35	0.6		腰岳Ｏｂ	Ｖ-19 北壁トレンチ
	85	〃	3.5	2.3	0.4	1.9		サヌカイト	Ｖ-19 Pit 9
	86	〃	2.9	1.6	2.5	0.7		腰岳Ｏｂ	Ｅ・Ｖ-19
クサビ形石器									
127	1	クサビ形石器	2.58	4.56	1.09	2.9		安山岩	Ｖ-19 Ｅ区
	2	〃	2.50	4.50	0.70	7.0		サヌカイト	ＳＩ25 Pit 1
	3	〃	3.70	4.70	0.95	18.6		〃	ＳＩ19
	4	〃	2.00	2.25	0.90	6.5		〃	Ａ-16 No.77 Ｃ区
	5	〃	3.00	3.55	0.75	9.9		〃	Ａ-17 No.48 Ｄ区
	6	〃	1.79	2.38	1.07	4.1		腰岳Ｏｂ	Ｄ-15 No.4 Ｃ区
	7	〃	2.00	2.35	0.55	3.9		サヌカイト	Ｖ-19
	8	〃	2.40	2.30	0.95	4.6		腰岳Ｏｂ	Ｃ-16
	9	〃	2.00	1.80	0.70	2.2		〃	Ｃ-14 No.61 Ｃ区
	10	〃	2.10	2.01	0.50	2.2		〃	Ｖ-20
	11	〃	3.70	4.60	1.30	23.7		サヌカイト	Ｂ-8 道路２
	12	〃	2.20	4.35	0.85	9.4		〃	Ｖ-19 Ｅ区
	13	〃	2.20	3.30	0.80	5.4		腰岳Ｏｂ	〃
	14	〃	2.20	2.85	0.70	4.4		サヌカイト	Ｃ・Ｄ-９,10 Ｂ区
	15	〃	3.90	4.10	0.85	13.4		〃	Ｖ-20 No.59
	16	〃	4.48	2.65	1.30	19.4		〃	Ｂ-11 ＳＫ512 Ｃ区
	17	〃	1.77	2.50	0.58	2.3		腰岳Ｏｂ	Ｖ-19 Ｅ区
	18	〃	2.60	2.00	0.90	5.2		チャート	Ｄ-12 No.64 Ｃ区
	19	〃	2.60	2.40	0.70	5.0		サヌカイト	Ｖ-19 Ｅ区
	20	〃	2.62	2.17	1.05	5.7		〃	Ｖ-19 No.48
	21	〃	2.17	2.63	0.80	4.9		腰岳Ｏｂ	Ｖ-19 Ｅ区
	22	〃	2.13	3.30	0.83	5.6		サヌカイト	Ｃ-４ Ａ区
128	23	〃	3.30	4.30	1.65	29.0		〃	不明
	24	〃	3.60	2.20	1.00	8.4		〃	Ｖ-17 ＳＩ26
	25	〃	2.10	1.75	1.00	2.8		腰岳Ｏｂ	Ｕ-20 Ｅ区
	26	〃	3.76	4.67	1.32	3.9		サヌカイト	Ｖ-18 Pit 7
	27	〃	2.60	2.67	0.47	3.1		腰岳Ｏｂ	Ｅ-18,19 ＳＩ-23 埋土一括
	28	〃	2.30	2.14	0.74	3.8		サヌカイト	Ｕ,Ｖ-19 ＳＩ25 Ｅ区
	29	〃	2.60	2.25	0.70	4.5		腰岳Ｏｂ	ＳＫ206 Ｂ-10
	30	〃	3.00	2.22	1.00	7.4		サヌカイト	Ｖ-17 Ｅ区
	31	〃	3.23	2.25	0.58	3.9		腰岳Ｏｂ	Ｅ区 西側段落ち
	32	〃	2.64	2.50	0.91	5.7		サヌカイト	Ｃ-18 ＳＫ1078
	33	〃	3.80	5.50	1.40	29.0		〃	ＳＩ20 Ｅ-16
	34	〃	2.50	4.45	0.90	12.5		〃	Ｕ-18 Ｅ区
	35	〃	2.20	3.60	0.60	6.7		〃	Ｄ-17
	36	〃	2.60	3.80	0.60	7.5		〃	Ｖ-19 No.77
	37	〃	2.23	2.00	0.93	3.5		白色チャート	Ｖ-19 Ｅ区
	38	〃	2.40	2.00	0.80	3.9		サヌカイト	Ａ-15 縄文住１
	39	〃	2.70	2.30	1.20	6.8		腰岳Ｏｂ	Ｖ-19 Ｅ区
	40	〃	3.30	2.70	0.80	9.5		サヌカイト	Ｕ-18 Ｅ区
ドリル・スクレイパー							錐部		
129	1	ド　リ　ル	2.1	0.6	0.35	0.45	MT0.4	腰岳Ｏｂ	Ｕ-18・19 縄文住５
	2	〃	2.7	1.0	0.37	2.1		サヌカイト	Ｖ-20 Ⅲ層上面掘り下げ
	3	〃	3.4	1.3	0.8	3.1	MT0.3	腰岳Ｏｂ	Ｕ-19

図版No.	No.	器　種	たて	よこ	厚さ	重さ	色　調	石　材	出土地点
129	4	ド　リ　ル	5.1	2.8	—	5.1	MT0.45 MW0.7	サヌカイト	D-6 遺構面掘り下げ一括
	5	〃	3.0	0.55	0.35	0.7		〃	E-18,19 S I 23 埋土一括
	6	〃	3.4	1.2	0.6	2.6	MT0.3	〃	S I 19
	7	〃	2.6	2.1	?	3.6		〃	A区 C-4
	8	〃	2.7	2.0	—	2.1	MT0.18	腰岳Ob	C区 D-15 No.37
	9	スクレイパー	6.7	3.65	0.50	22.6		?	D-6 遺構面掘り下げ一括
	10	〃	5.20	2.95	0.80	9.6		サヌカイト	E-18・19 埋土一括
	11	〃	6.05	3.50	0.40	18.0		〃	V-20 Ⅲ層上面一括
	12	〃	2.45	1.15	0.25	0.7		乳白色チャート	U-12 Pit 2
	13	〃	1.75	1.80	0.35	0.6		チャート	U-19 Pit 4
	14	〃	3.65	5.20	1.15	4.7		サヌカイト	U-20 E区 西側落ち込み溝内
	15	〃	2.75	5.0	0.95	6.8		〃	A-16 No.16
	16	〃	8.70	3.25	0.90	27.8		〃	U-20 No.88
	17	〃	2.55	1.75	0.50	1.7		黒曜石	E・V-20
	18	〃	2.80	1.20	1.0	1.8		〃	C-8 SD101 一層一括
	19	〃	2.45	2.35	0.45	2.0		〃	V-18・19 S I 24
	20	〃	3.90	3.55	0.90	15.2		サヌカイト	V-20
130	21	〃	7.85	9.0	2.50	128.0		〃	B・C-7 SX01 2層
	22	〃	5.0	3.30	1.05	17.3		〃	E・V-20
	23	〃	5.45	6.20	1.30	43.7		〃	U-19
	24	〃	8.05	4.30	1.20	38.3		〃	V-17 S I 26
	25	〃	7.1	5.0	1.2	38.8		〃	A・C-5
	26	使用痕のある剝片	6.21	5.66	0.77	11.4		〃	A・C-5 No.5
131	27	〃	8.0	5.3	0.7	41.0		〃	V-18
	28	〃	6.40	3.05	1.0	25.1		〃	D-13 No.34
	29	〃	7.8	4.7	1.5	47.6		〃	A・B-5
	30	〃	7.45	2.90	0.90	22.0		〃	D-5 S I 01
	31	〃	6.80	5.70	1.10	39.0		〃	E-16 S I 20 一層一括
	32	〃	7.40	3.95	1.20	32.4		黒曜石	E・V-20
132	33	〃	6.6	6.3	0.9	36.1		サヌカイト	B-7 SX01一括
	34	〃	6.13	2.4	0.73	8.8		腰岳Ob	SK02
	35	〃	5.5	6.5	1.5	37.4		サヌカイト	B・V-17
	36	〃	5.0	2.90	0.06	8.5		黒曜石	C・B-16 No.90
	37	〃	5.88	2.09	0.51	6.3		腰岳Ob	道路遺構上部埋土
	38	〃	5.30	1.58	0.67	5.5		〃	V-19
	39	〃	5.48	1.77	0.64	6.1		〃	西側段落ち
	40	〃	4.90	1.70	0.40	2.2		黒曜石	V-18,19 S I 24 埋土一括
	41	〃	6.85	1.50	0.50	4.7		〃	B-10 SX01 2層
	42	〃	5.25	2.15	0.75	5.9		〃	V-18 Pit14
	43	〃	4.50	1.95	0.50	2.7		〃	V-8 遺構面掘り下げ No.92
	44	〃	4.75	1.55	0.70	5.5		〃	C・VABC-16
133	45	〃	2.40	2.35	0.85	4.9		〃	V-18,19 S I 24 埋土一括
	46	〃	4.25	1.45	0.35	2.1		〃	C-4 SX01
	47	〃	4.20	1.25	0.40	2.3		〃	B-16 SK1029
	48	〃	3.65	1.30	0.40	1.9		〃	U-16 SK1005
	49	〃	3.40	1.55	0.50	2.4		〃	D-11・12 S I 10
	50	〃	3.20	2.40	0.95	5.3		〃	D-15 Pit103
	51	〃	3.05	1.35	0.30	1.4		〃	C-16
	52	〃	3.80	1.80	0.40	2.8		〃	C-14 SK587
	53	〃	3.75	2.50	0.85	8.2		〃	E・U-20
	54	〃	2.90	1.90	0.60	3.9		〃	C-18 SK1053
	55	〃	4.85	1.65	0.70	5.5		〃	U-16 集石部カクラン土器一括

図版No.	No.	器　種	たて	よこ	厚さ	重さ	色　調	石　材	出土地点
133	56	使用痕のある剝片	3.65	1.75	0.55	3.6		黒曜石	C-5　SX01
	57	〃	3.70	14.5	0.65	2.7		〃	E・U-20
	58	〃	3.40	12.5	0.45	1.5		〃	E・U-18 掘り下げ一括
	59	〃	5.60	1.95	1.05	11.3		〃	D-17　SI21
	60	〃	4.05	1.95	0.70	5.1		〃	SI17 Pit6
	61	〃	4.00	2.15	0.60	3.8		〃	E・V-20
	62	〃	3.95	1.76	0.55	4.0		腰岳Ｏｂ	U-18 No.2　遺構面掘り下げ一括
石　核									
134	1	石　核	5.81	4.60	2.65	100.2		サヌカイト	E・U-19
	2	〃	8.22	4.90	2.15	70.8		〃	B-10　SX01 2層
	3	〃	7.78	4.85	1.52	82.57		〃	D-9　Pit11
	4	〃	3.05	3.89	1.35	74.4		〃	E・V-19・20
	5	〃	3.0	4.78	1.72	15.9		〃	E・V-19
	6	〃	4.30	4.68	3.19	22.0		〃	B-9　道路遺構2　硬化面中
	7	〃	3.18	5.52	2.98	74.6		〃	D-17　SI21　埋土一括
	8	〃	4.58	2.85	1.35	25.5		〃	V-19　No.26
135	9	〃	5.1	3.02	1.45	13.6		腰岳Ｏｂ	C-16　No.68
	10	〃	4.32	2.50	0.95	7.7		〃	C-16　SI17 Pit24
	11	〃	3.68	2.45	1.32	21.15		〃	C・B-15　No.58
	12	〃	2.55	3.50	2.38	18.8		〃	C-18　Pit26
	13	〃	4.92	2.80	4.45	5.5		黒曜石	B-13　SX01　白い斑点有
	14	〃	3.80	2.50	1.52	8.9		〃	U,V-19　SI25　白い斑有
	15	〃	3.48	2.60	0.8	10.6		腰岳Ｏｂ	V-19　遺構面掘り下げ
	16	〃	2.78	3.18	2.45	5.4		〃	D-19　Pit32
	17	〃	2.35	3.50	2.35	17.8		〃	B-10　道路遺構2硬化面中
	18	〃	2.22	2.80	1.88	10.6		黒曜石	E・V-19　白い斑有り
	19	〃	3.75	2.98	2.45	9.4		〃	U-11　SI13　埋土一括〃
	20	〃	7.0	7.18	2.25	14.6		サヌカイト	SI19
	21	〃	9.05	3.60	2.62	37.5		〃	D・E-19
136	22	〃	3.19	3.15	2.40	9.4		姫島Ｏｂ	D・E-18　No.37
	23	〃	2.35	3.10	1.95	32.2		黒曜石	C・D-12　濁った灰色
	24	〃	2.49	3.10	2.23	67.8		姫島Ｏｂ	C-16　No.83
	25	〃	3.91	2.70	3.25	18.25		頁岩	A・C-4　No.6
	26	〃	2.70	2.92	2.35	13.6		姫島Ｏｂ	V-19
	27	〃	3.85	5.90	3.20	17.05		〃	C-16　No.68
石　錘									
137	1	石　錘	3.2	3.1	1.7	25.0		角閃石安山岩？	E区
	2	〃	3.3	3.0	1.8	23.0		角閃石輝石凝灰岩？	C-18　No.26
	3	〃	3.6	2.5	1.3	20.0		角閃石凝灰岩？	A-15　SI09
	4	〃	3.1	4.2	1.7	28.0		角閃石安山岩（河原石）	V-20
	5	〃	6.2	4.6	2.4	90.0		〃	C・A-14　No.73
	6	〃	4.5	4.9	1.3	45.0		〃	C-18　SK1053
	7	〃	7.2	6.4	1.8	100.0		〃	V-19　No.25
	8	〃	6.9	5.3	1.9	98.0		輝石片岩（河原石）	E・U-19
	9	〃	6.6	6.1	1.2	75.0		砂岩	D・C-18　No.63
	10	〃	8.9	7.9	2.7	246.0		角閃石安山岩	不明
砥　石									
138	1	玉　砥　石	3.7	5.8	1.7	35.8		？	C区・E-15
	2	〃	7.3	4.5	1.5	58.6		砂岩	D区・C-19
	3	〃	6.7	3.9	2.6	56.9		〃	D区・E-17
	4	〃	4.0	4.3	1.2	20.7		〃	C-18　No.37

図版No.	No.	器　種	たて	よこ	厚さ	重さ	色　調	石　材	出土地点
138	5	砥石(石斧用？)	4.5	2.8	2.8	68.9		砂岩	C-19 No.38
	6	〃	7.3	5.7	1.4	28.1		〃	V-19 Ⅲ層上面掘り下げ
磨　石									
139	1	磨　石	9.7	12.9	8.0	1590.0		角閃石安山岩	SX01
	2	〃	12.9	6.9	7.9	980.0		〃	B-15・16 SX01
	3	〃	14.6	6.3	6.9	885.0		〃	B-14 No.373
	4	〃	9.1	12.6	8.2	1395.0		〃	V-17 SI26
	5	〃	12.6	9.4	6.0	980.0		〃	SI20
	6	〃	10.2	8.4	5.9	715.0		〃	C-15 SX05①
	7	〃	11.9	8.5	5.5	1040.0		〃	U-19 No.21
	8	〃	10.6	8.3	5.6	725.0		〃	B-15・16 SX01
	9	〃	10.1	10.5	5.3	900.0		〃	SI21
	10	〃	11.0	9.1	4.7	640.0		〃	〃
	11	〃	7.6	7.9	5.6	470.0		〃	〃
	12	〃	12.1	10.3	6.5	1250.0		凝灰岩	D-17 SI21
	13	〃	12.1	11.2	4.8	760.0		角閃石安山岩	不明
	14	〃	10.2	8.9	4.2	670.0		〃	B-12 No.208
	15	〃	9.7	9.1	4.3	405.0		〃	SI15
140	16	〃	13.5	10.2	5.5	900.0		〃	E区
	17	〃	9.7	7.7	3.9	450.0		砂岩	D-17
	18	〃	9.2	7.5	2.7	125.0		凝灰岩	D・C-18 No.36
	19	〃	12.5	9.8	4.1	590.0		砂岩	V-19③上
	20	〃	12.0	14.0	3.9	615.0		角閃石安山岩	U-17
	21	〃	8.4	6.4	3.1	255.0		凝灰岩	V-18 SI28
	22	〃	8.5	7.4	3.2	305.0		角閃石安山岩	D-15 SI16
	23	〃	9.1	6.5	2.8	230.0		〃	B-15・16 SX01
	24	〃	5.1	7.7	2.4	110.0		凝灰岩	〃
	25	〃	10.5	7.7	7.3	780.0		〃	C-15
	26	〃	10.3	7.6	6.5	555.0		角閃石安山岩	B-13 SX01
	27	〃	12.1	9.3	7.9	1160.0		〃	B-8 SD101
	28	〃	9.5	7.6	7.1	700.0		凝灰岩	U-19 No.36
	29	〃	7.4	6.4	4.3	250.0		角閃石安山岩	B-13・14 SX01
	30	〃	6.9	6.2	5.1	300.0		〃	C-5 No.331
	31	〃	5.2	4.5	3.3	100.0		凝灰岩	D-9
	32	〃	10.9	4.9	3.4	270.0		角閃石安山岩	B-15・16 SX01
	33	〃	4.8	4.8	2.8	95.0		〃	C・D-17・19
	34	〃	8.9	7.6	5.6	450.0		凝灰岩	V-19 No.15
	35	〃	7.9	8.0	4.3	320.0		角閃石安山岩	V-17 SI26
石　皿									
141	1	石　皿	19.7	19.6	5.6	3220.0		角閃石安山岩	E-17
	2	〃	19.0	14.6	4.4	1250.0		〃	B-18 SX01①
	3	〃	12.7	18.5	9.6	3000.0		〃	B-11 SX01
	4	〃	21.8	16.5	5.1	1800.0		溶結凝灰岩	D-5 No.82
	5	〃	17.9	11.4	3.1	970.5		角閃石安山岩	E-19 SI23 No.3
	6	〃	15.6	7.8	6.3	1320.0		〃	V-19 北壁縄文道路
	7	〃	17.0	10.1	5.7	1570.0		〃	C-7 No.43 縄文包含層③上
	8	〃	14.3	7.5	3.0	559.7		〃	U・V-19 SI25
石製品									
142	1	石製品	11.2	10.5	3.0	194.4		阿蘇溶結凝灰岩	A Pit内
	2	〃	8.1	5.4	1.2	66.1		砂岩	D・E-18 No.46
	3	〃	3.9	4.3	2.9	17.5		赤色凝灰岩	V-19 No.12
	4	〃	8.0	6.2	2.7	55.0		〃	出土地点不明
	5	〃	1.8	1.5	0.9	5.0		〃	E-18 SI27
			(cm)	(cm)	(cm)	(g)		(Obは黒陽石)	

あ と が き

ワクド石遺跡を発掘調査する原因になったのは、県営畑地帯総合土地改良事業という開発行為である。菊池川の支流である迫間川に建設される竜門ダムから、巨大な導水管で菊池台地上に水を送り、水田を含めた多角的な営農がおこなえるようにする事業である。このような大きな事業は有史以来、条里制に勝とも劣らない歴史的な出来事と言えよう。開発行為も立派な文化であり、その行為には人類が築き上げてきた英知が生かされている。

ただ、その評価となるとなかなか難しい問題となる。すなわち、未来の人々からこの開発行為がどう評価されるかである。必ずしも称賛ばかりではないだろう。未来の人間はどのような評価をするのだろう。知りたいものである。

実は、未来にいかなくてもその評価ができるのが歴史である。当然、現在がその未来になり、過去がその現在になる。そして、今回の発掘調査は過去の菊池台地に対して行われた開発行為への一つの評価を下すことになった。

「菊池台地に対する現在の開発行為に先立つこと3000年前に、菊池台地をはじめとする熊本県に特有のそれまで動物の狩猟、有用植物の採集をする場であった広大な火山灰台地を利用して生活の基盤にしようとした人々がいた。ワクド石遺跡に住みついた人々である。彼らは自然の動植物の生態に精通し、動植物と共生しながら生み出される動植物の恵みを生きる糧とする生活に、自ら食料を生産する方法を身につけ、しだいにそれを主とする生活に移り変わっていった。そのきっかけとなったものが陸稲である。保水能力のない火山灰土壌で育成できる最良の作物であったろう。この陸稲がなぜ当地方にもたらされ、誰が技術の指導を行ったのかはいまだ謎に包まれている。

この生活基盤の変化は、人々に生活の安定をもたらすとともに、文化的な発展をもたらしただろう。この時期の遺跡数の顕著な増加と豊富な遺物群の存在は、九州でも特異な現象として評価されている。

しかし、このような当地方の繁栄はしだいに陰りが射していった。おそらく、陸稲を中心とする食料生産に破綻が生じたのであろう。その原因は、おそらく、陸稲を作る際の圃場となる焼き畑にあったと思われる。焼き畑耕作は連作が不可能で、一定の人口を養うための焼き畑面積はかなりの面積になる。しだいに新たな焼き畑を行う適地がなくなり、他地域への分散を強いられる結果となったと思われる。つまり、自然界の動植物との共生ができる限度を越えた自然の利用が行われたと考えることができる。」

以上の評価が正しいか、間違いか、言い換えればこのような歴史叙述が妥当かどうかはあまり問題ではない。それは読者諸氏が報告書にある情報を生かして自分なりの叙述を考えればいいことなのである。

問題は二つある。一つは、現代の開発行為が現代における立派な文化であるなら、過去の文化を現代に蘇らせる遺跡の調査に対して十分な体制で望まなければならないということであり、もう一つはその調査成果を市民に情報として提供する書物と展示場の整備を行わなければならないということであろう。

最後になったが、発掘調査にあたって、筆者の独りよがりの理想主義から事業との調整を余儀なくされ、多大の仕事量を強いてしまった県農政部、菊池事務所耕地課の皆様には心より感謝申し上げたい。

また、報告書作成にあたっては、その体制が整わない現状のなか、期間に間に合わせるため、収蔵庫作業員の皆様には通常の能力を越える仕事をこなしてもらった。結果はこの報告書が表しているとおりであり、筆者の予想を越えたものであった。心よりその労をねぎらいたい。

図　　版

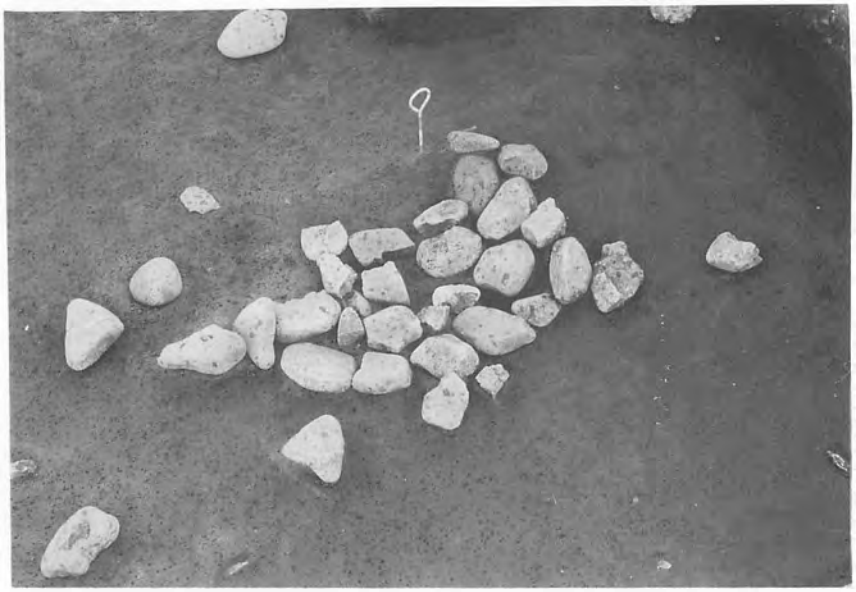
A・U-16・17区（東より）

A・U-16・17区（南より）

縄文時代早期礫群

PL2

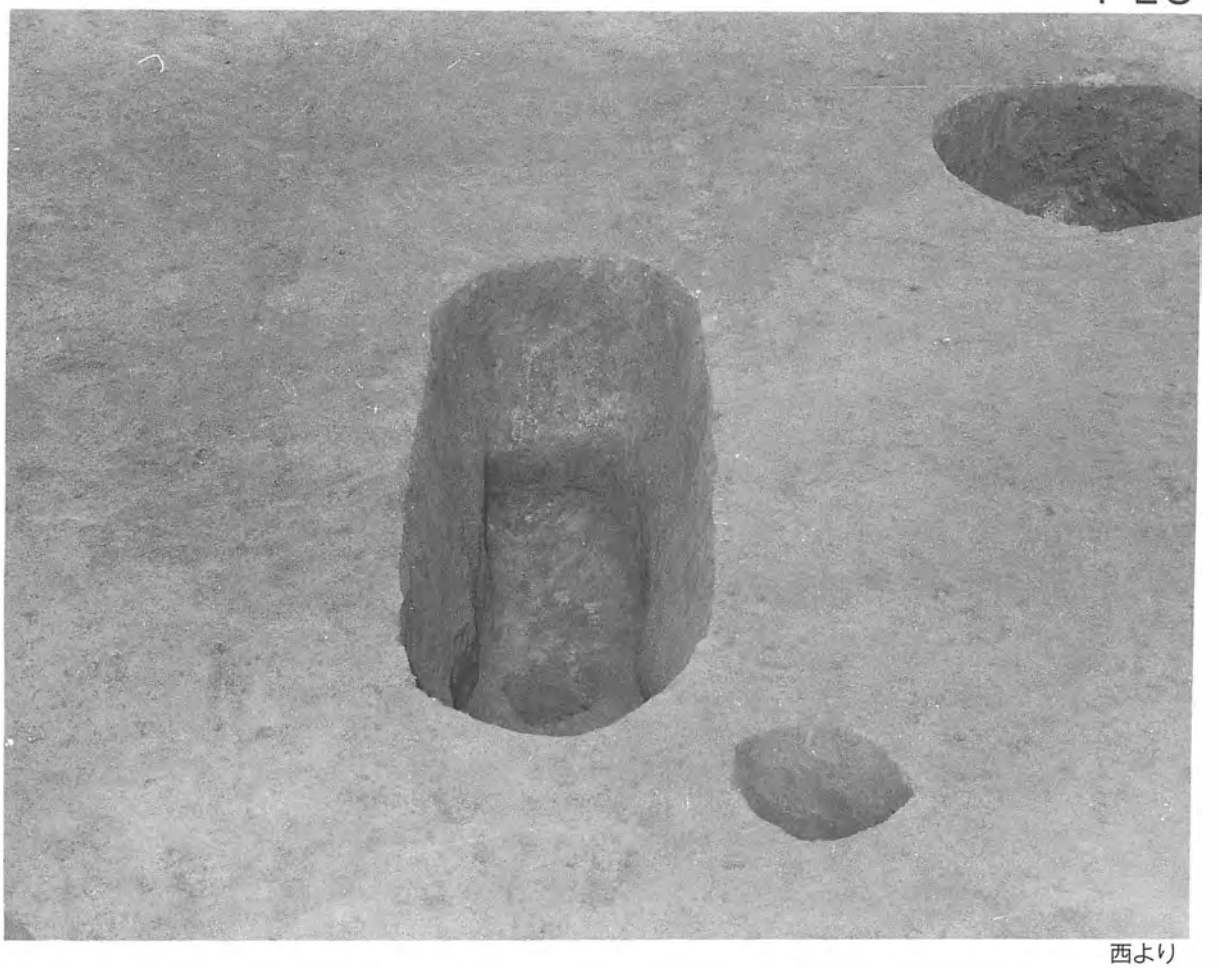
東より



南より

接　写

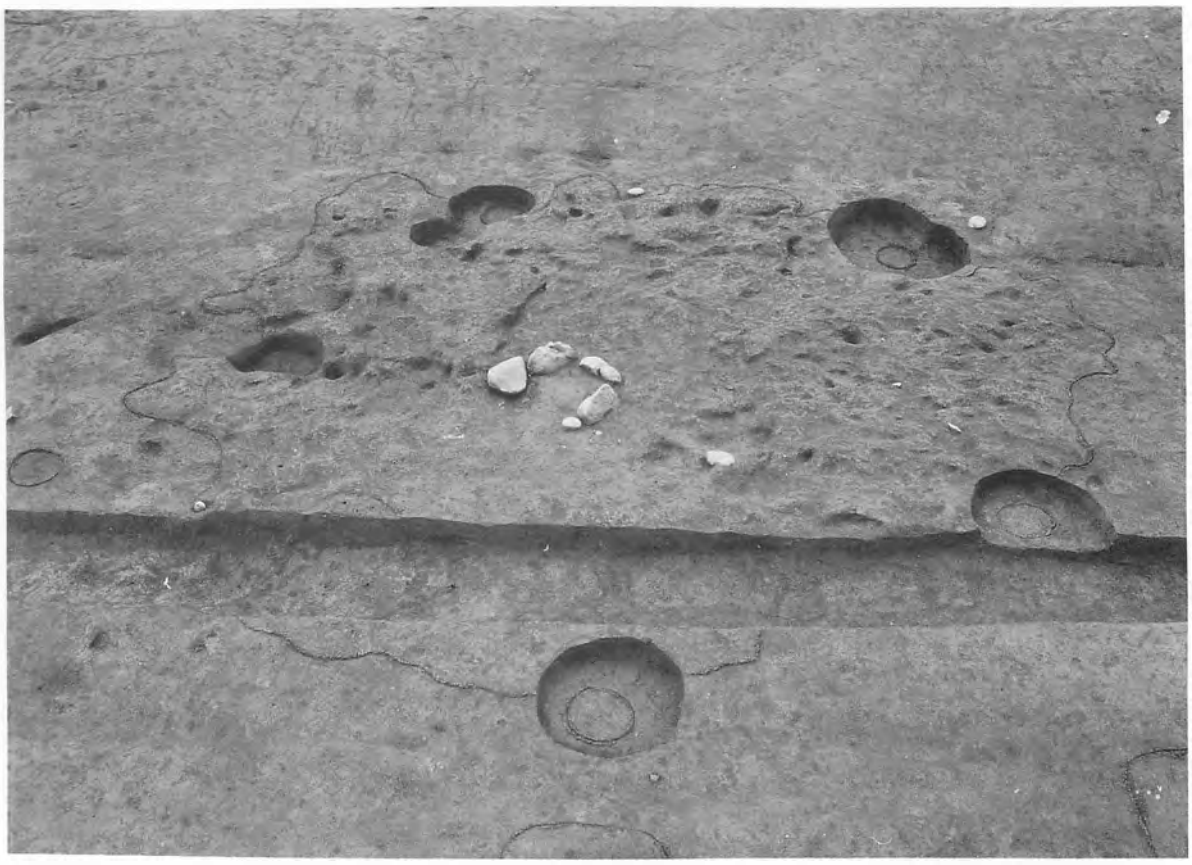
縄文早期集石



西より

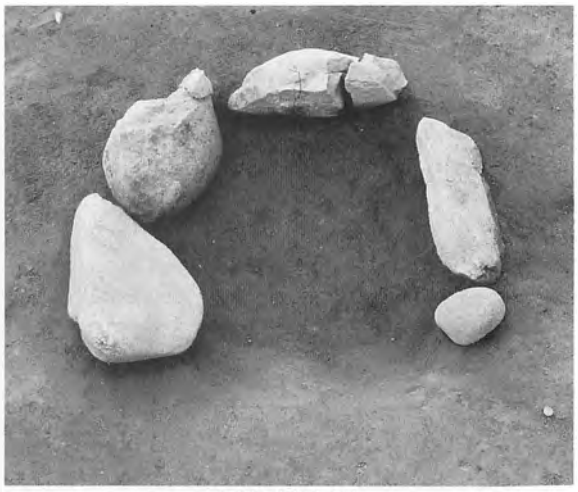
西より

縄文時代早期土坑



北より

炉跡（東より）



炉跡（東より）

有孔土製品出土状態

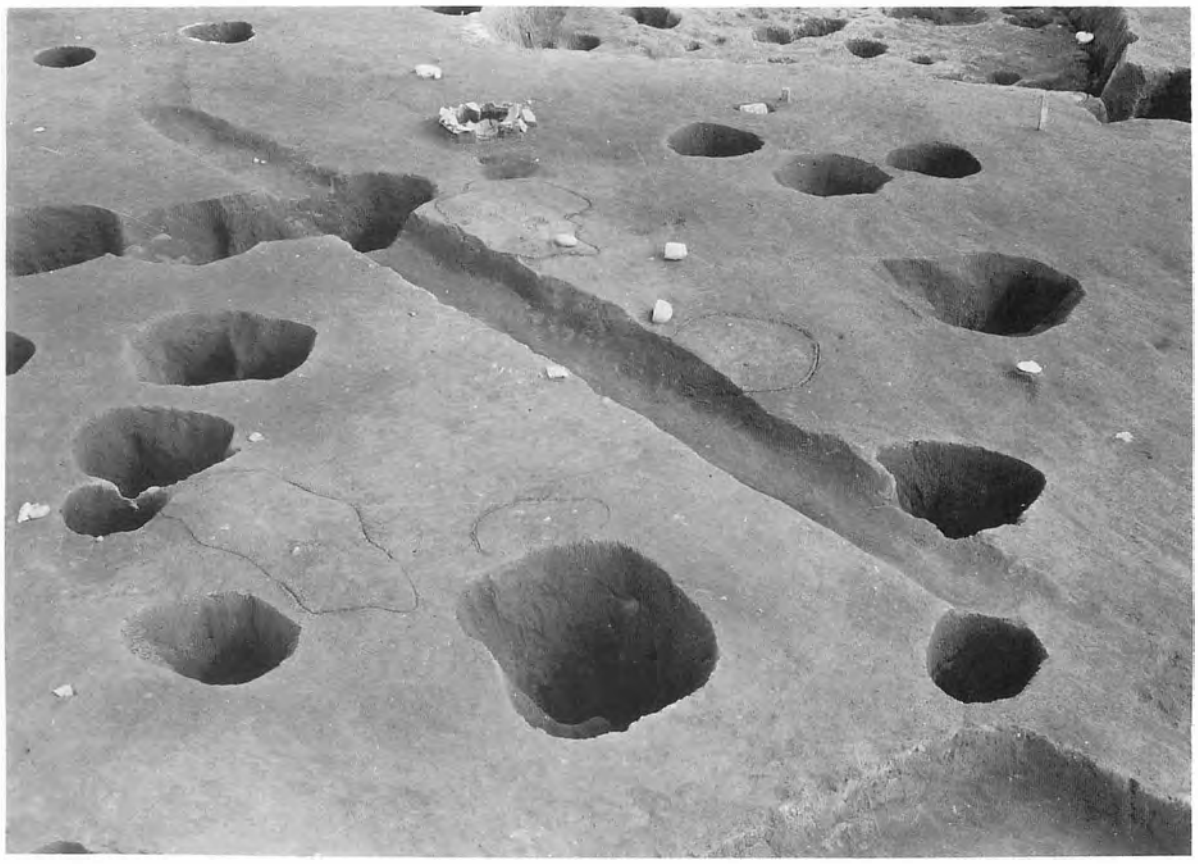
縄文時代１号住居跡

南より

西より

縄文時代２号住居跡（北側は古墳時代13号住居跡）

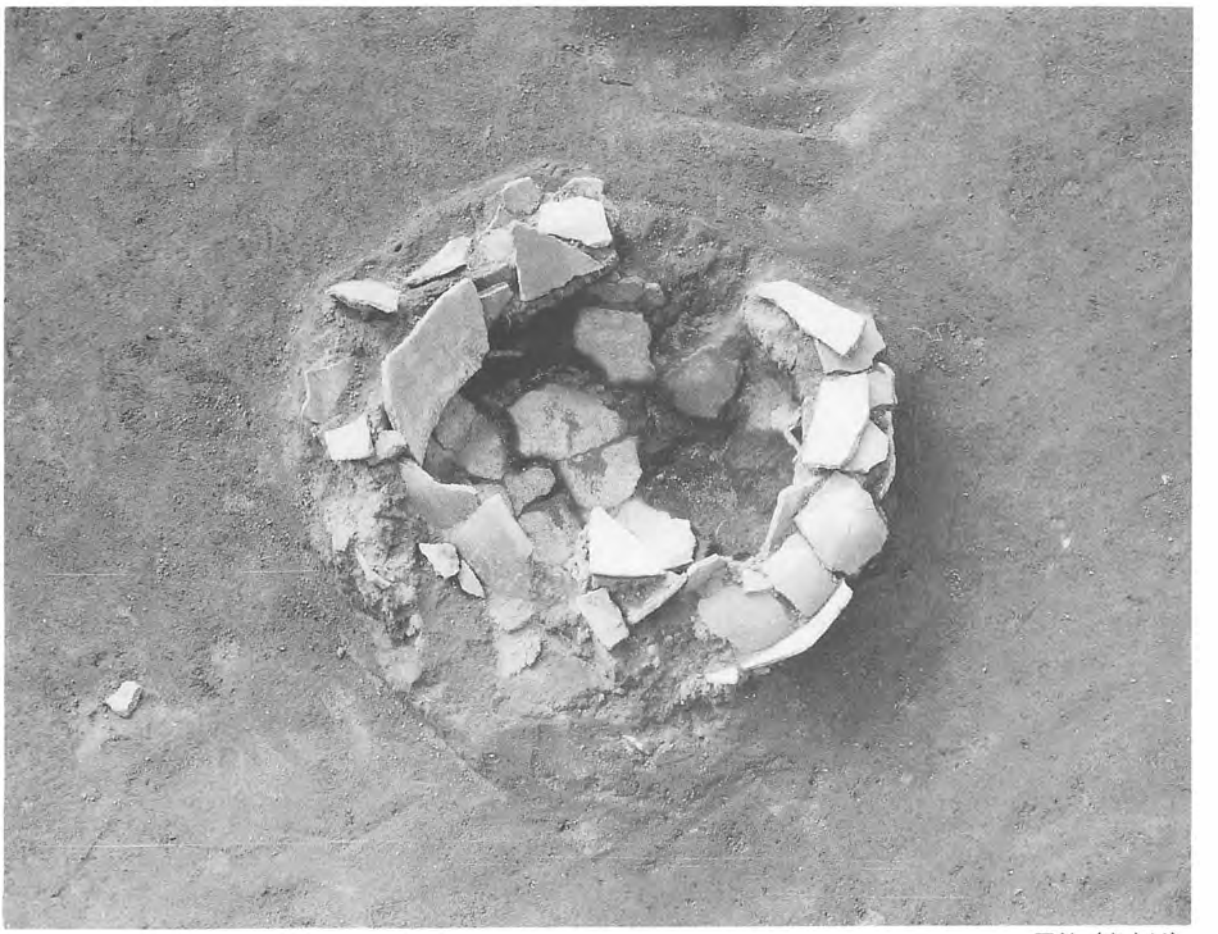
東より



北より

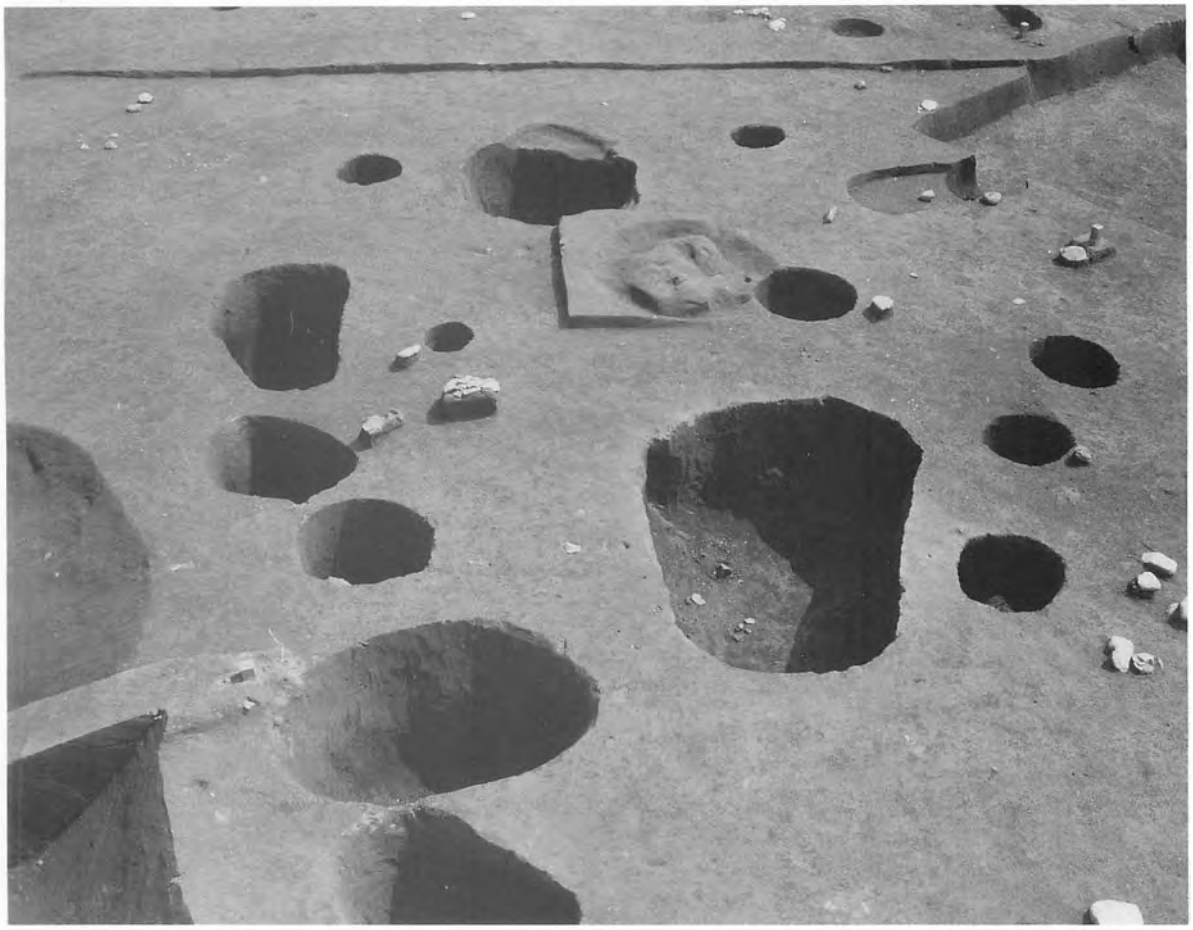
縄文時代３号住居跡

炉跡（東より）



置鉢（南より）

縄文時代３号住居跡



南より

東より

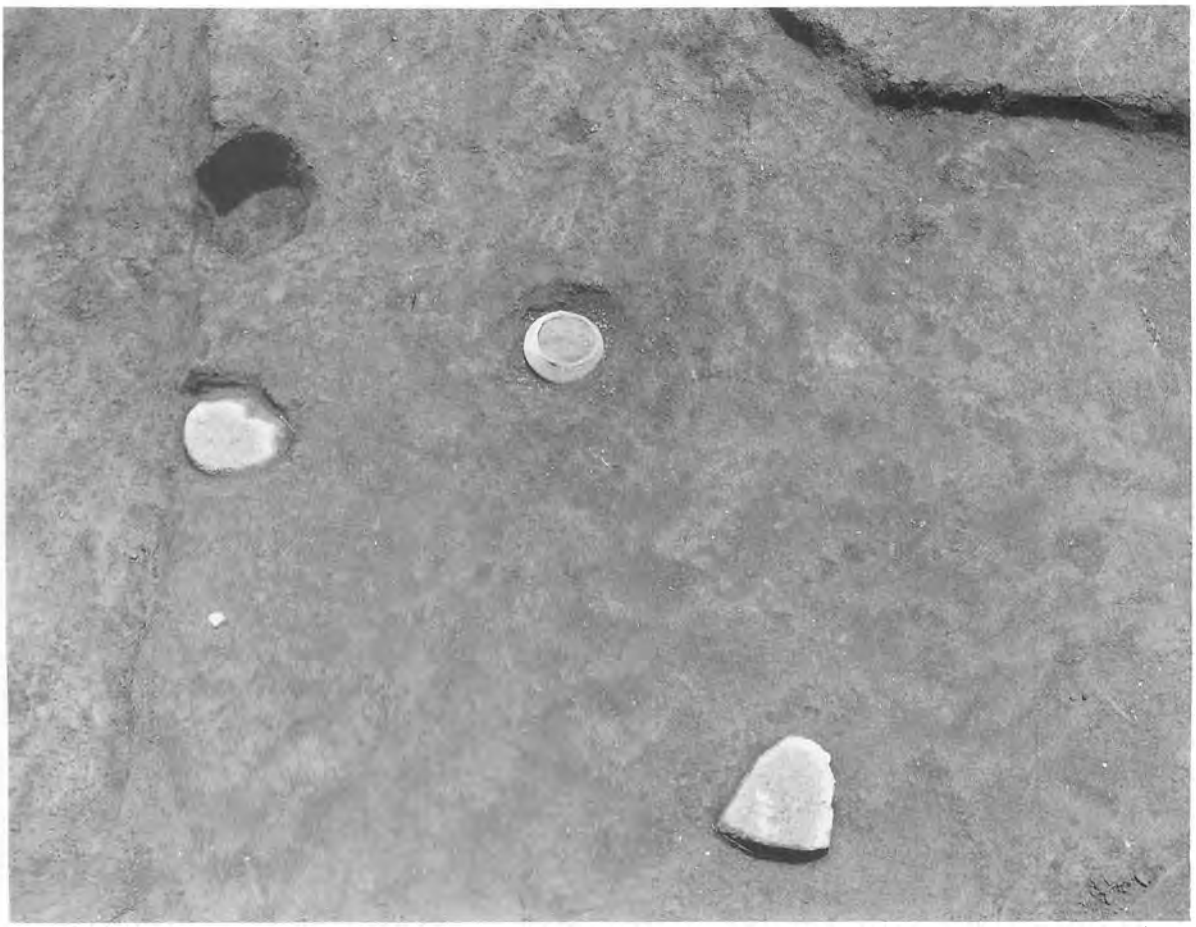
縄文時代4号住居跡(上)・5号住居跡(下)

北より

南より

縄文時代6号住居跡 置鉢

北より



西より

縄文時代10号住居跡 遺物出土状態

西より

南より

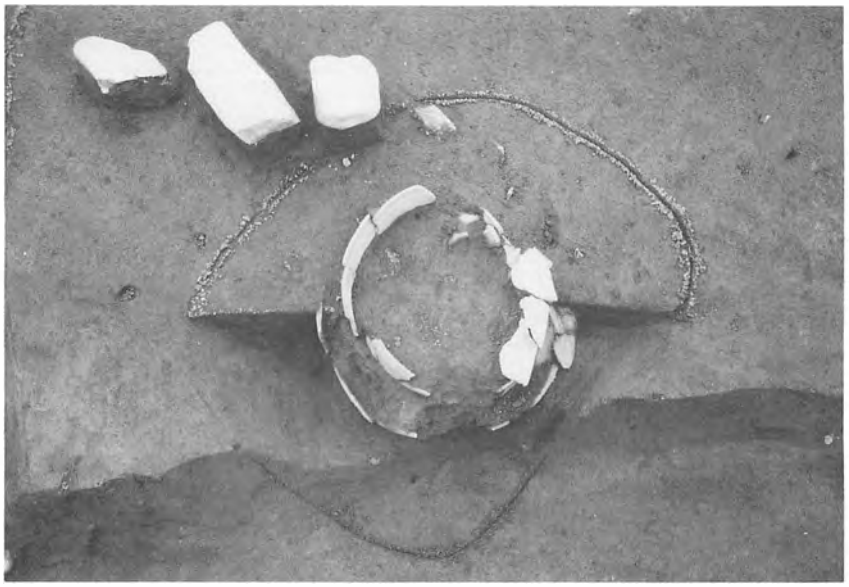
埋　鉢　1

南より

北より

北より

埋　鉢　2



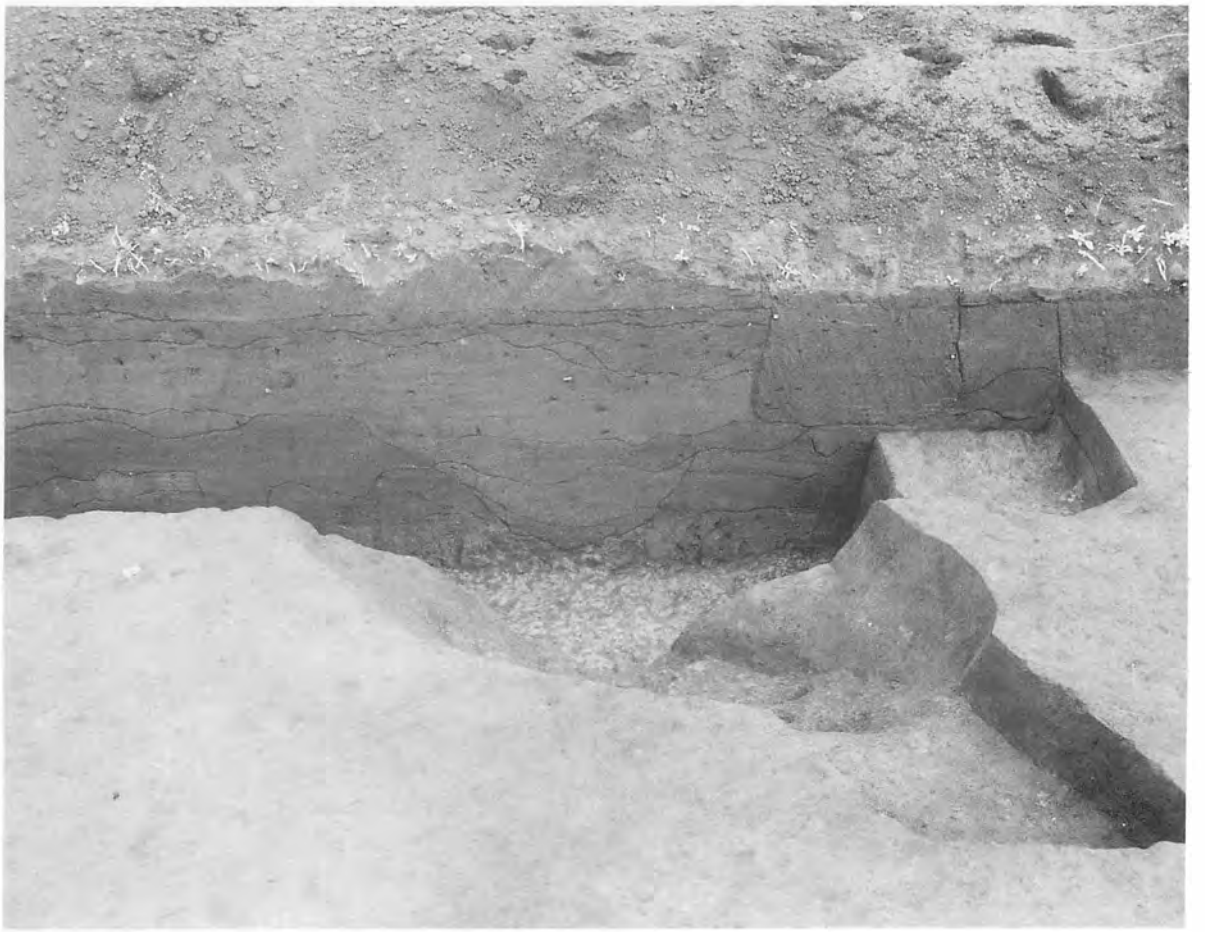
北より

北より

東より

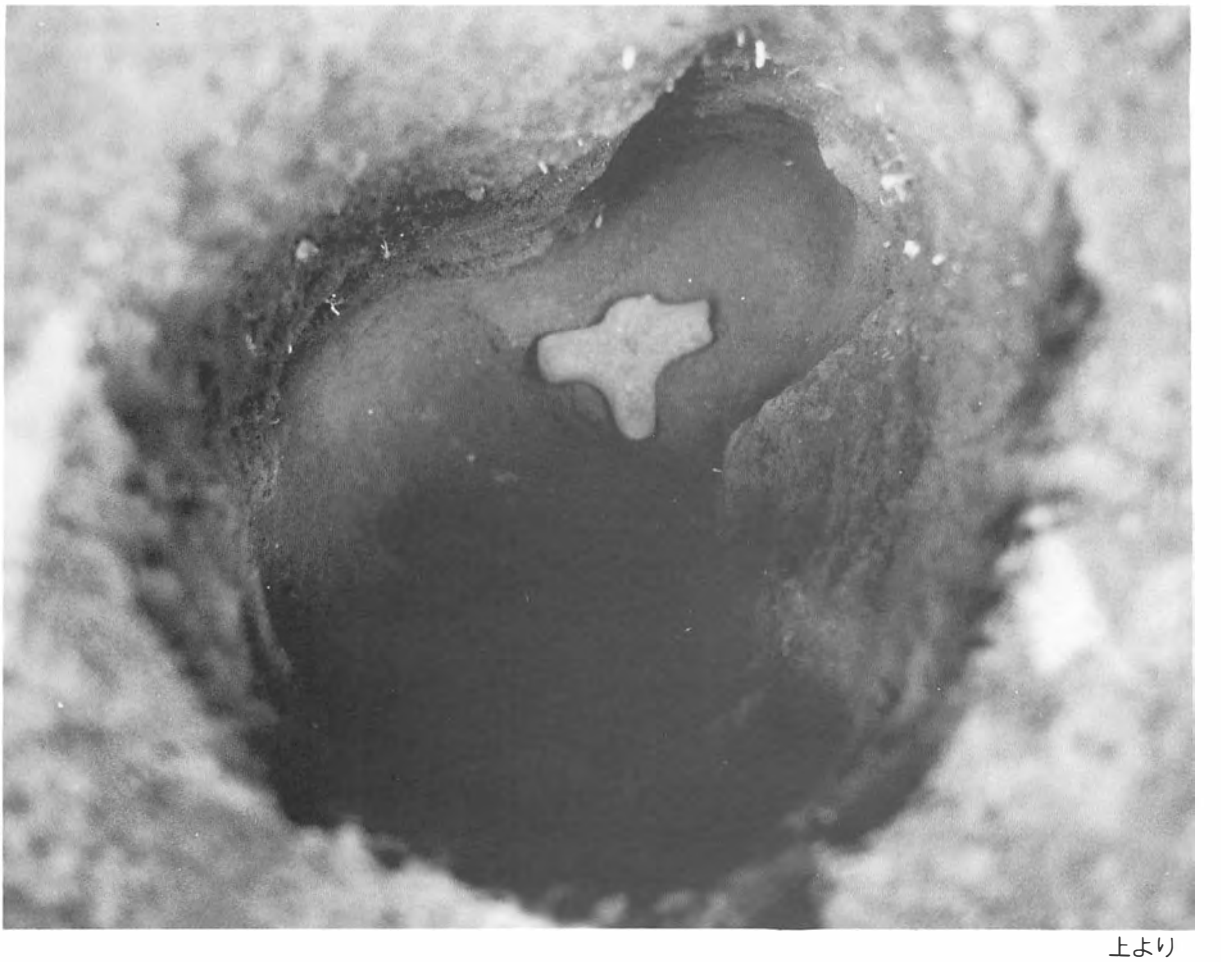
埋　鉢　3

西より



南より

縄文時代階段状落ち込み



上より

断面（西より）

十字形石製品出土状態

西より

遺物出土状態（北より）

7号住居跡(上)・8号住居跡(下)（古墳時代）

完掘（北より）

完掘（東より）

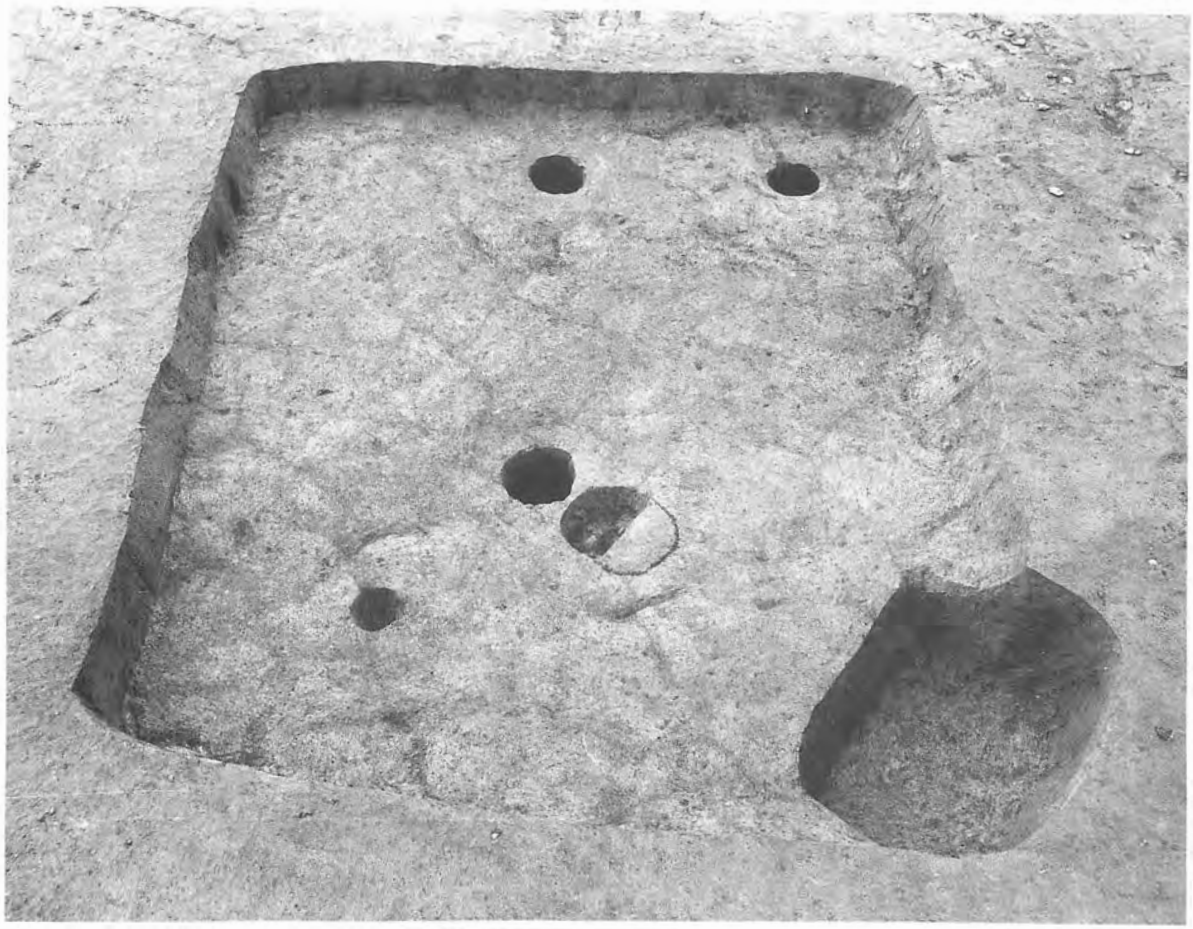
8 号住居跡（古墳時代）

遺物出土状態（北より）

遺物出土状態（北より）

9 号住居跡（上）・10号住居跡（下）（古墳時代）

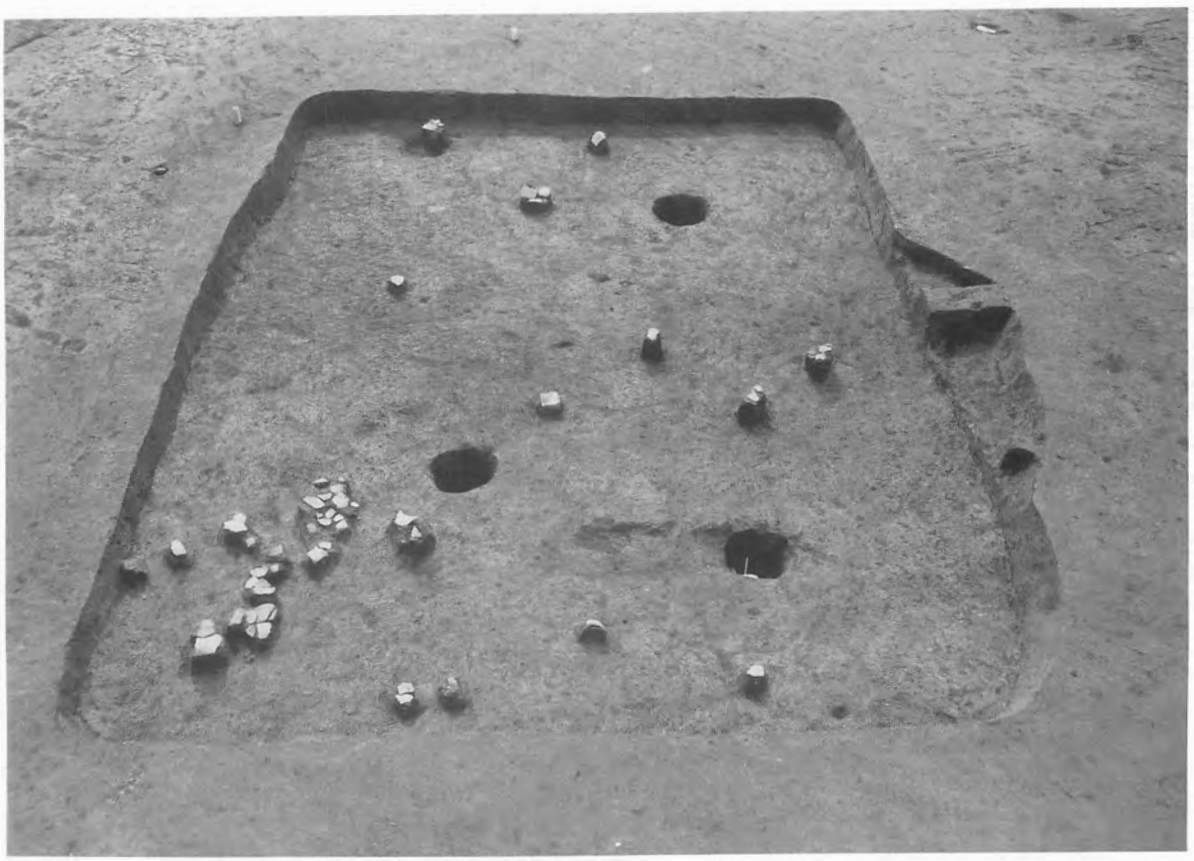
遺物出土状態（北より）



完掘（北より）

12号住居跡（古墳時代）

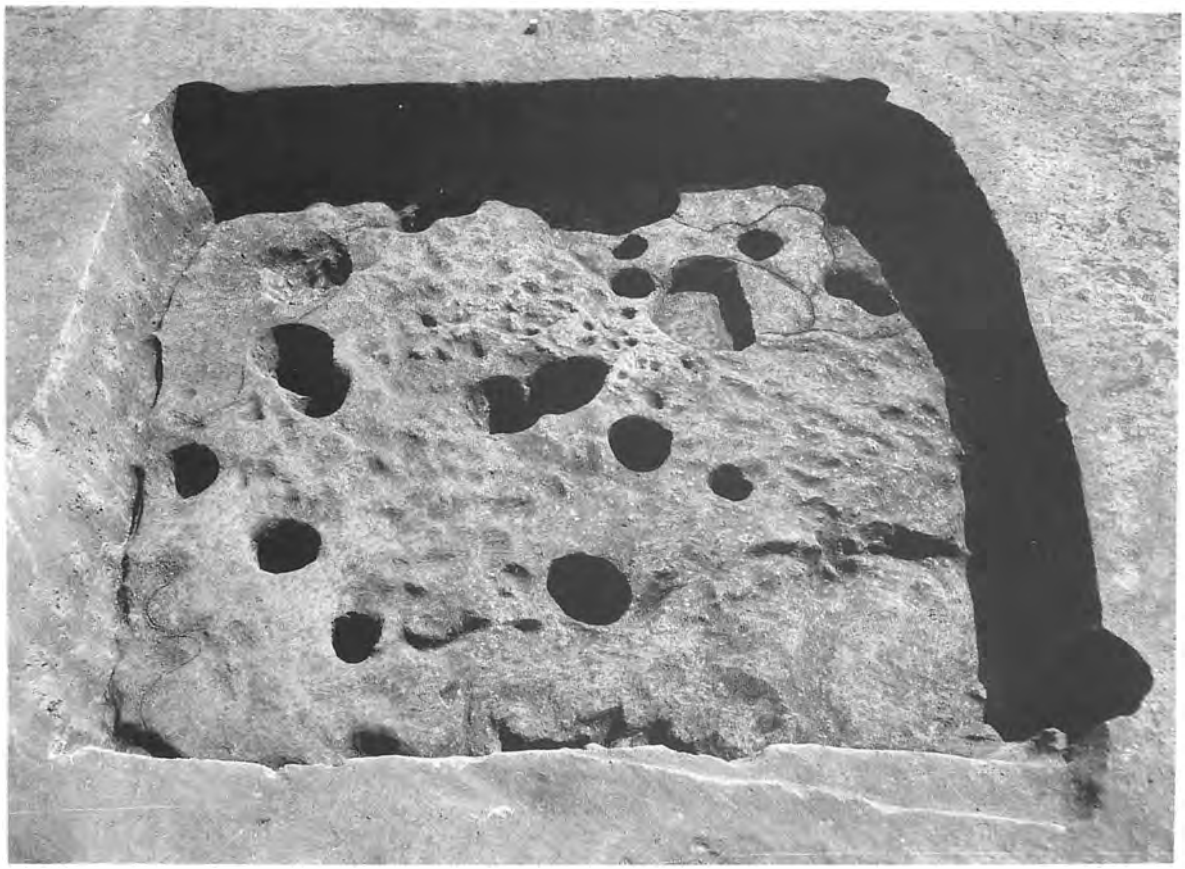
遺物出土状態（西より）



遺物出土状態（北より）

13号住居跡（上）・14号住居跡（下）（古墳時代）

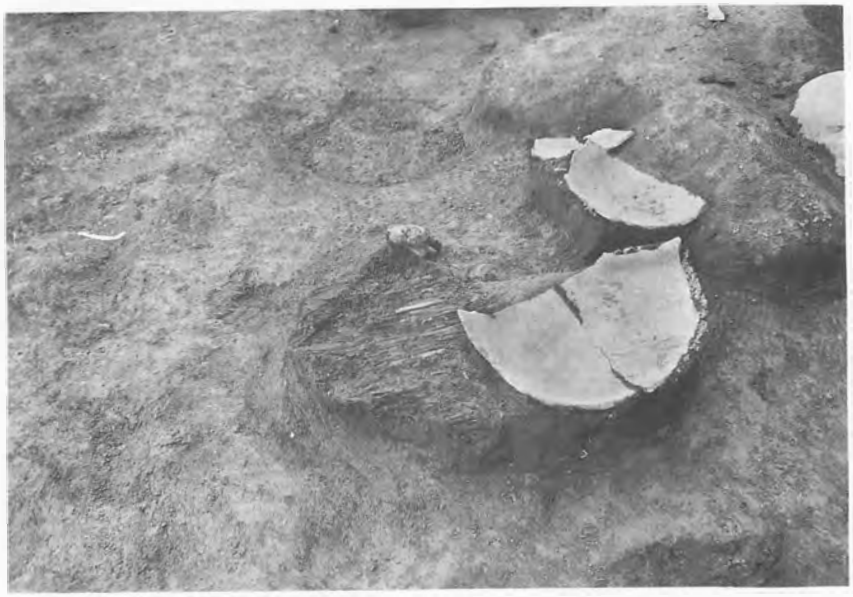
遺物出土状態（北より）



完掘（北より）

15号住居跡（古墳時代）

貯蔵穴内甕出土状態(南より)



尾根材出土状態（北より）

尾根材出土状態（南より）

15号住居跡出土遺物（古墳時代）

遺物出土状態（北より）

遺物出土状態（北より）

完掘（北より）

16号住居跡（上）・19号住居跡（中・下）（古墳時代）

遺物出土状態（東より）

完掘（南より）

20号住居跡（上）・21号住居跡（下）（古墳時代）

遺物出土状態（北より）

遺物出土状態（東より）

23号住居跡（古墳時代）

遺物出土状態（西より）

遺物出土状態（北より）

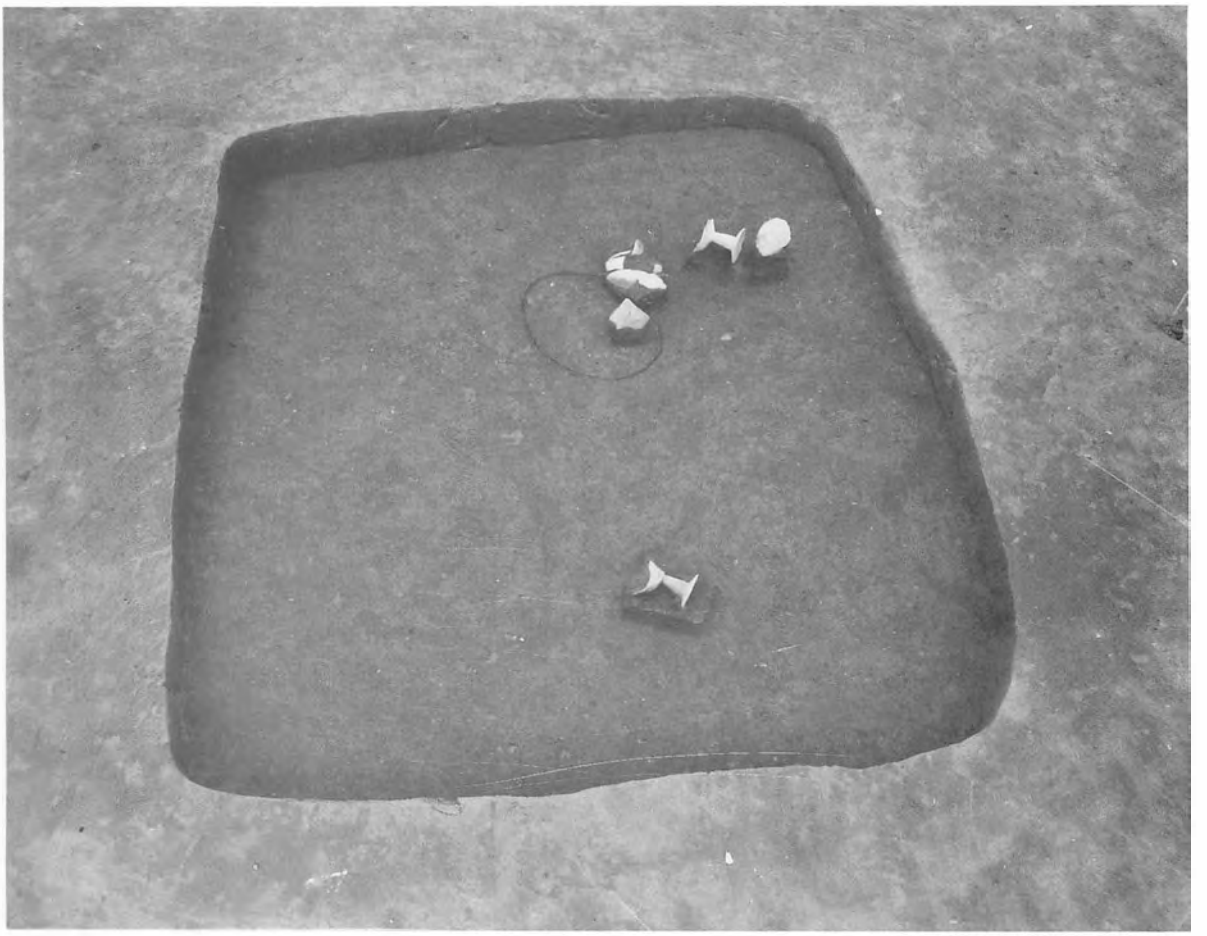
西東陽壺出土状態（東より）

24号住居跡　（古墳時代）

遺物出土状態（北より）

遺物出土状態（南より）

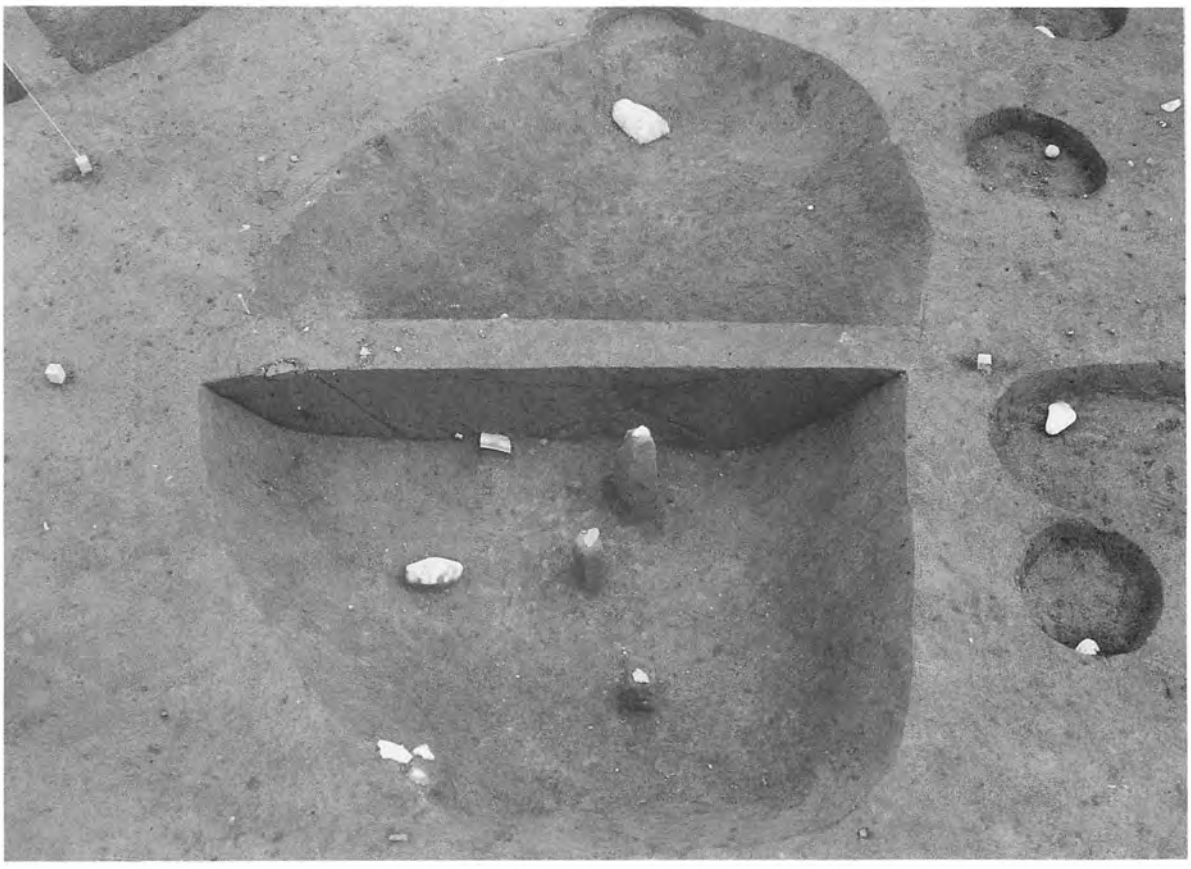
25号住居跡(上)・26号住居跡(下)（古墳時代）



遺物出土状態（東より）

遺物出土状態（南より）

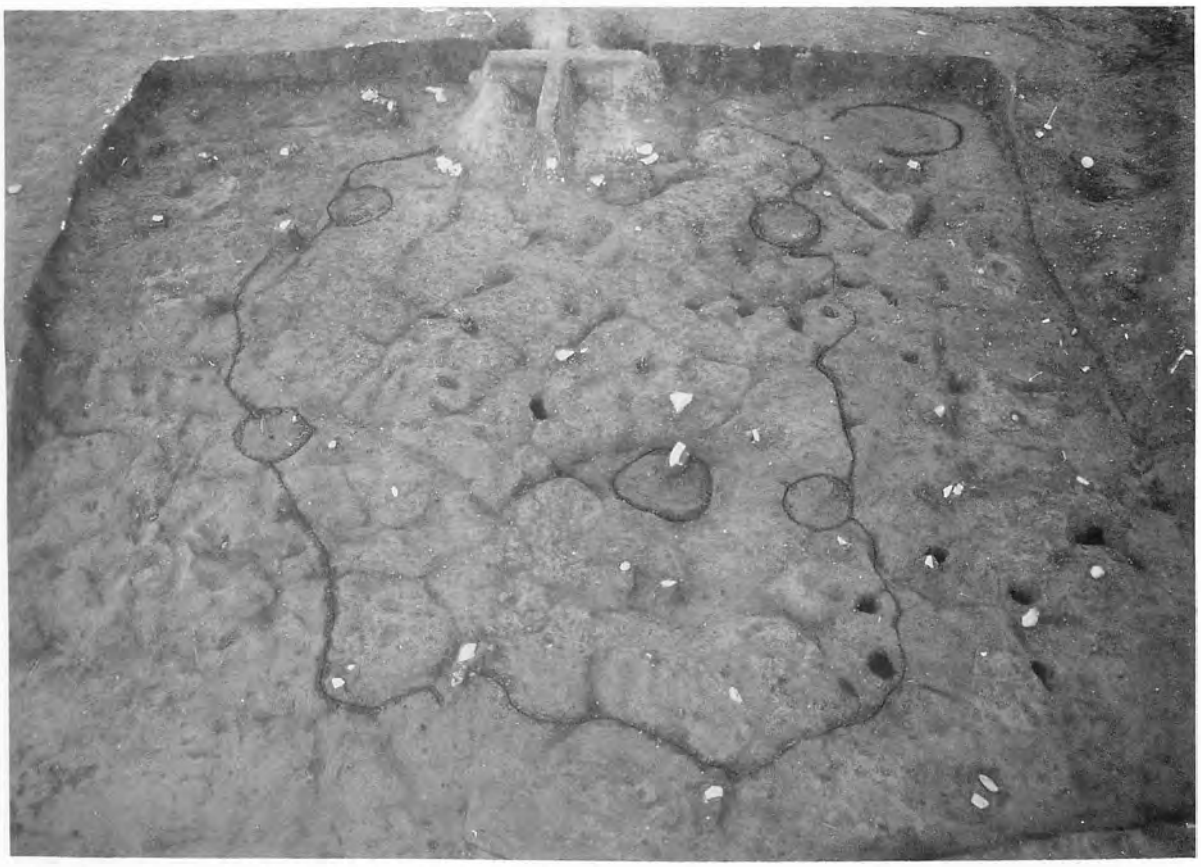
27号住居跡（古墳時代）



遺物出土状態（南より）

完掘（南より）

28号住居跡　（古墳時代）

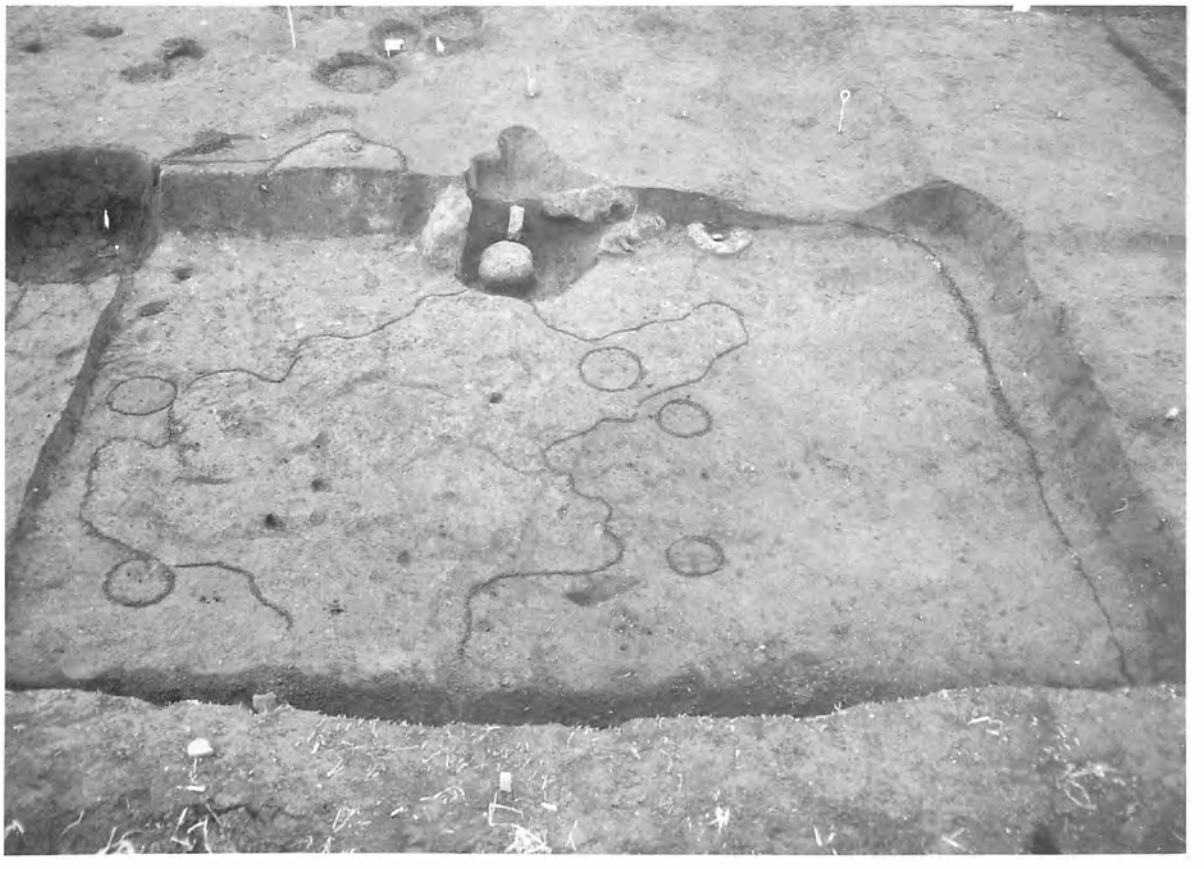


遺物出土状態（南より）

遺物出土状態（東より）

1号住居跡（奈良時代）

完掘（西より）



遺物出土状態（南より）

奈良時代２号住居跡（上）・３・４号住居跡（下）

4号住カマド（南より）

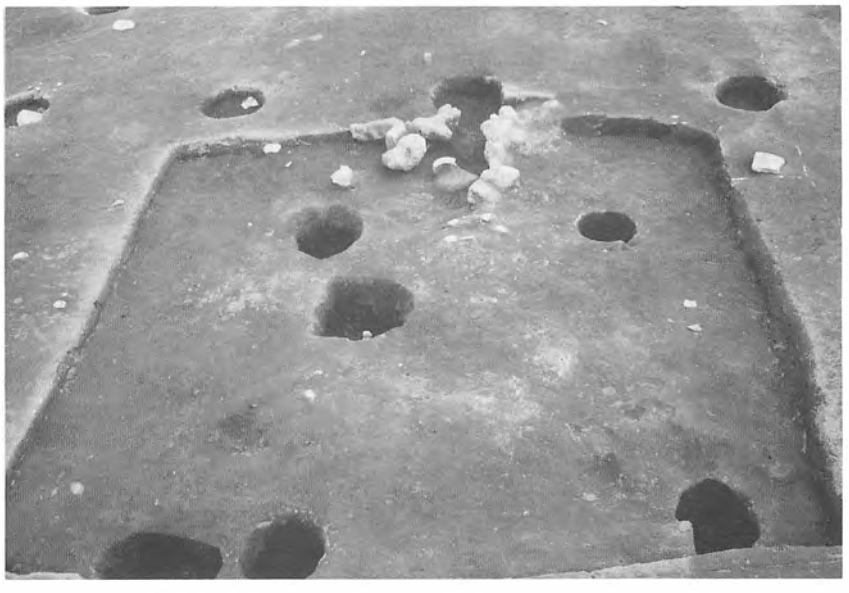
4号住カマド（東より）

3号住カマド（南より）

3・4号住居跡（奈良時代）

完掘（東より）

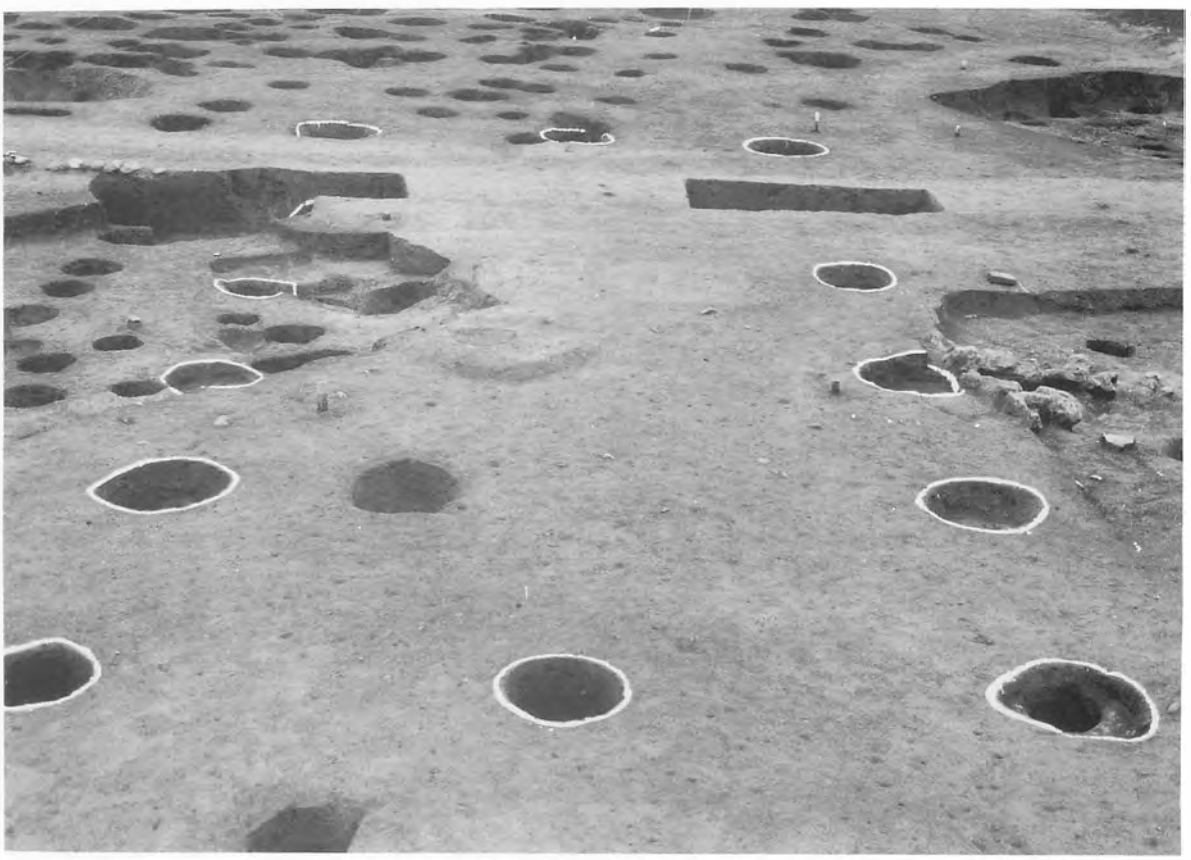
完掘（東より）



完掘（南より）

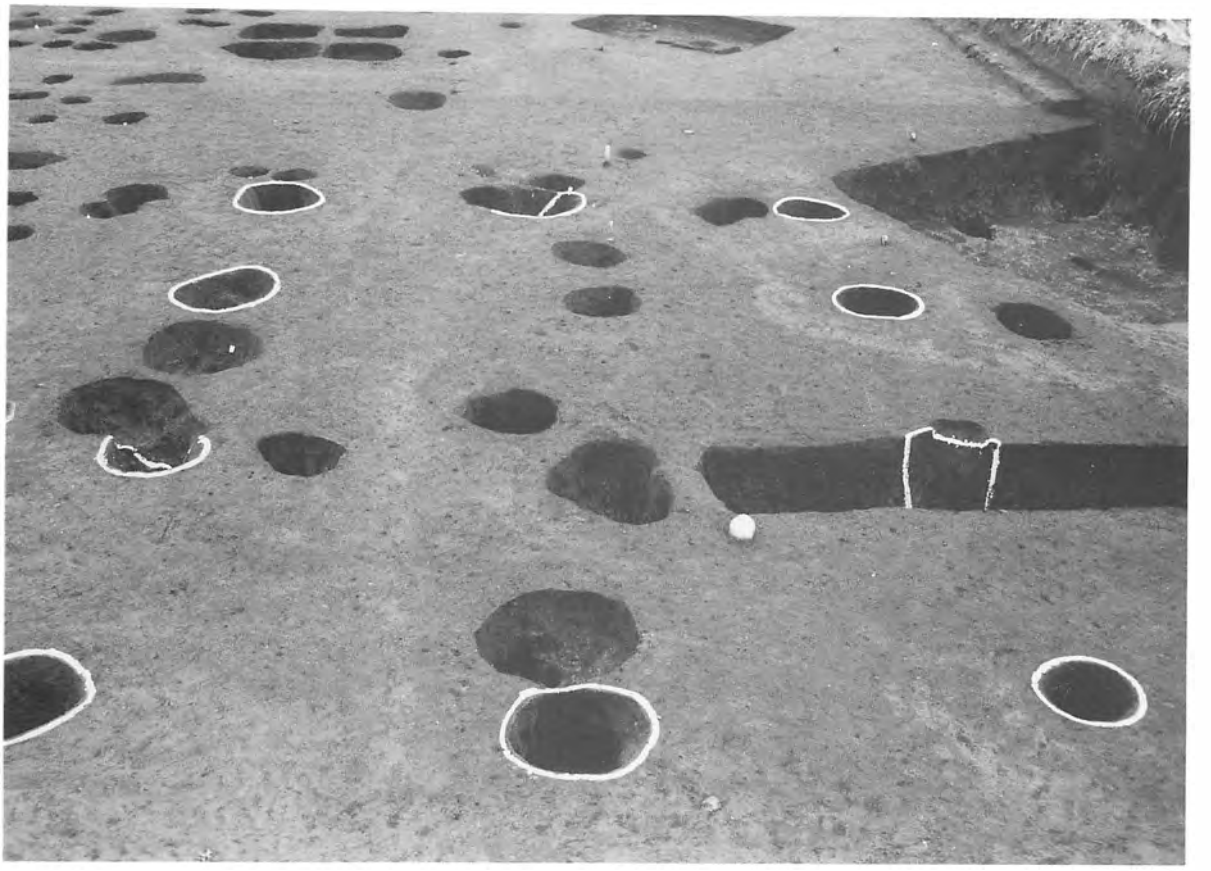
17号住居跡（上）・22号住居跡（中・下）（奈良時代）

北より



東より

掘立柱建物１号



東より

北より

掘立柱建物２号

B調査区（西より）

B-14区甕出土状態（北より）

溝（SX 01）

B-14区甕出土状態（南より）

B-14区甕出土状態（西より）

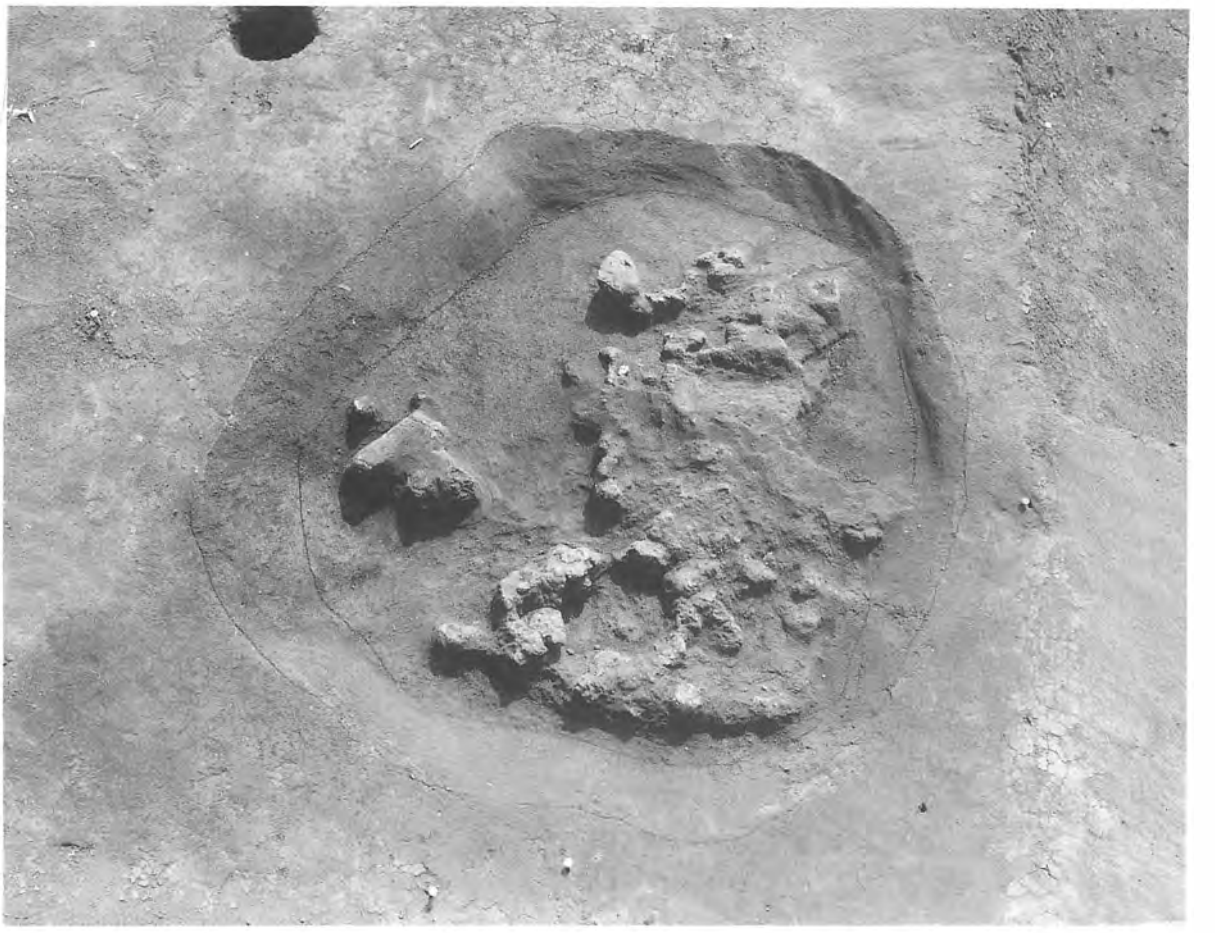
溝（SX01）出土土器

B調査区検出状況（西より）

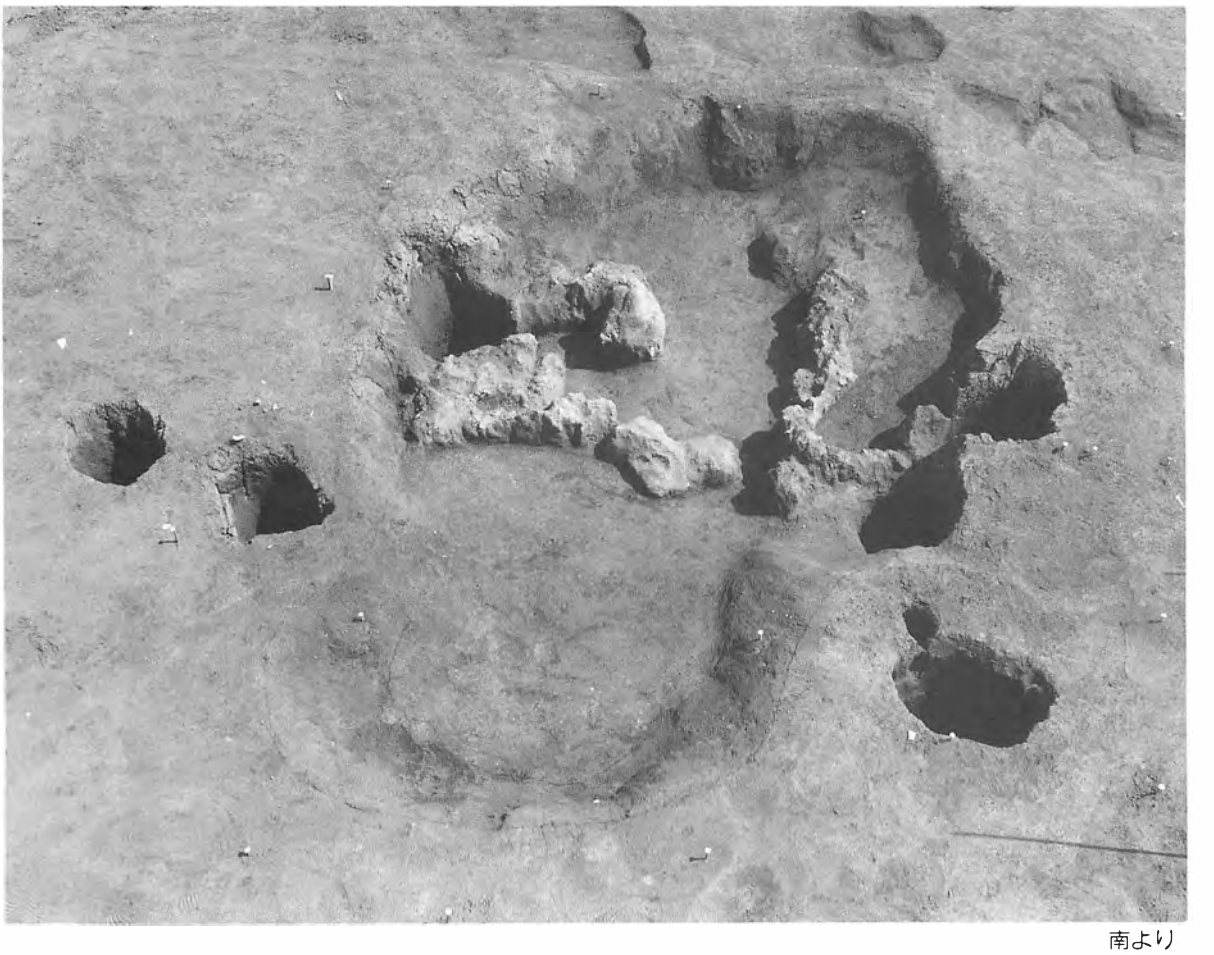
B調査区（東より）

B調査区完掘（東より）

道路遺構

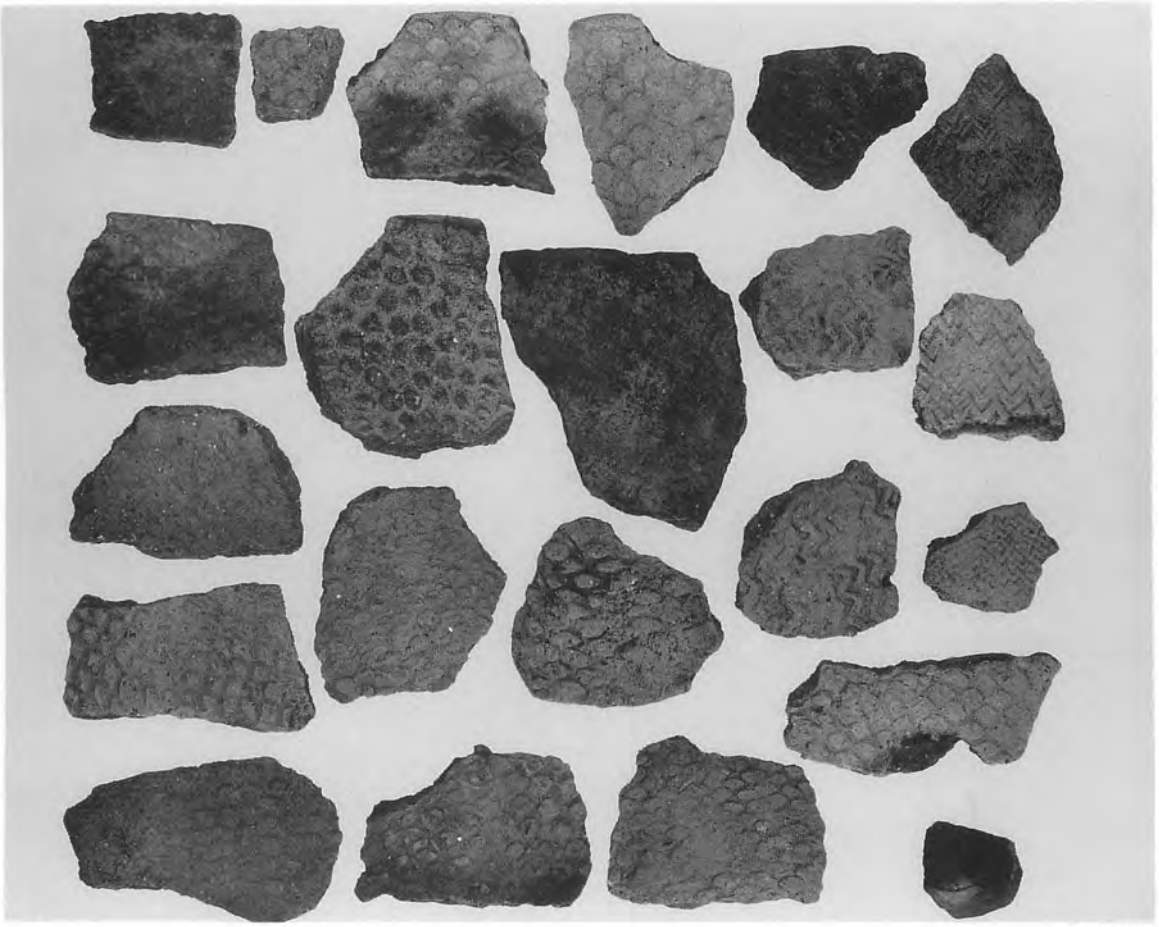


西より

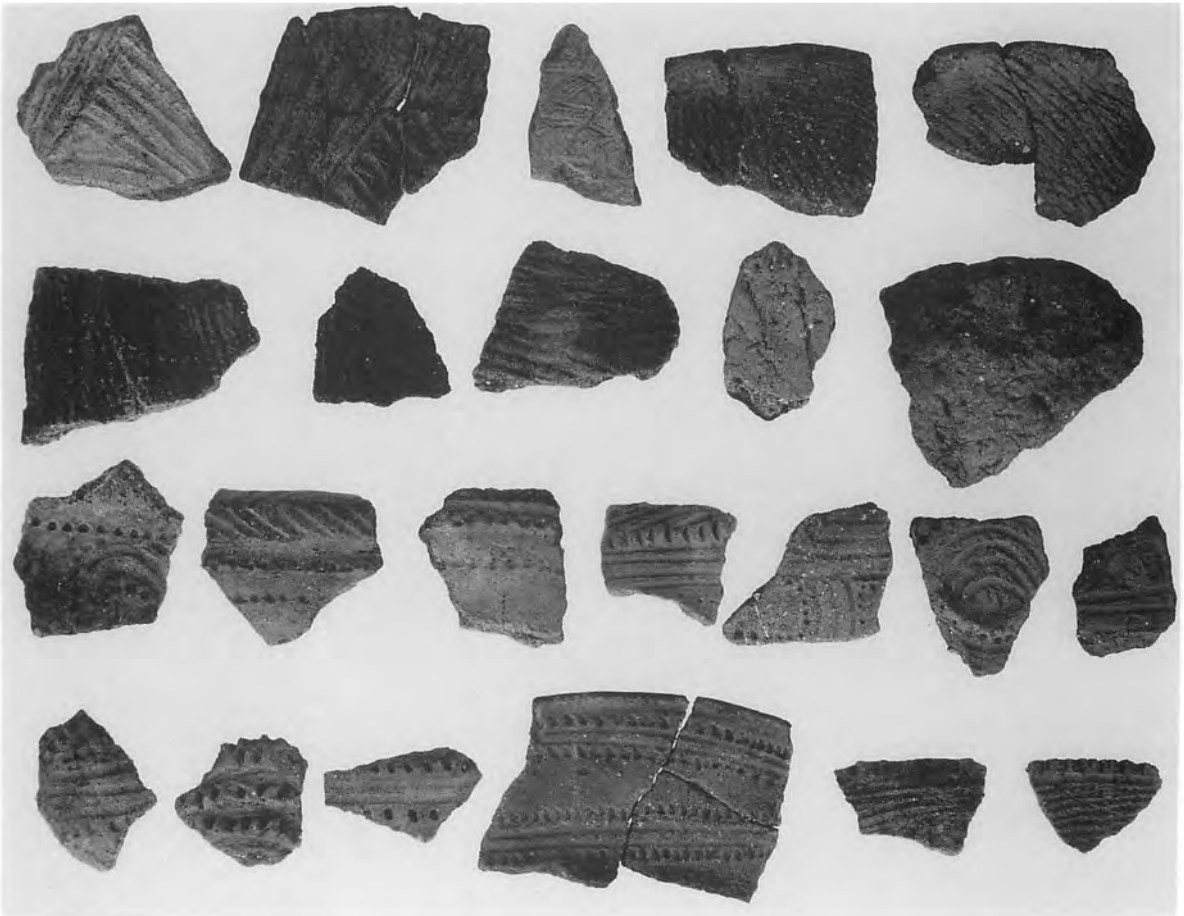


南より

鍛冶遺構1（上）・2（下）

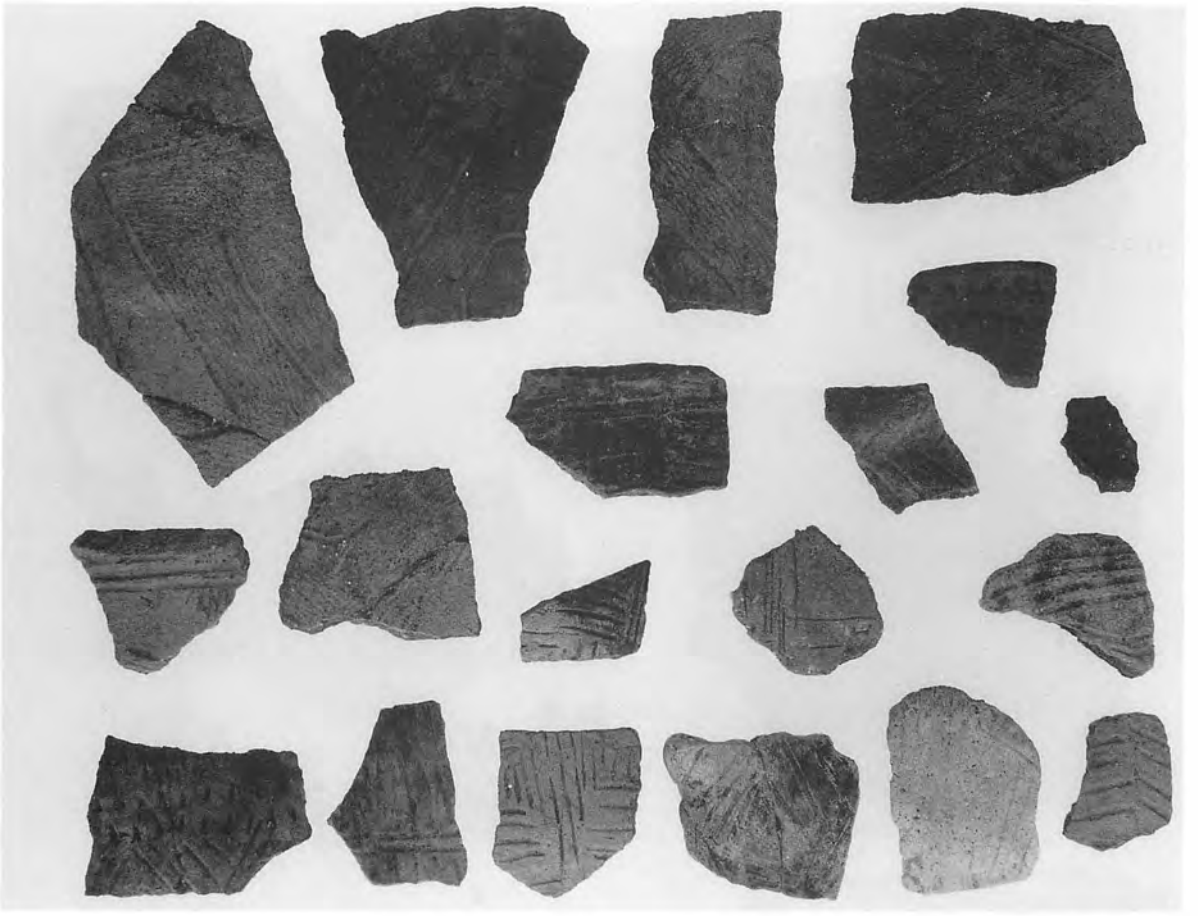


押型文



手向山式・撚糸式・塞ノ神式など

縄文時代早期土器

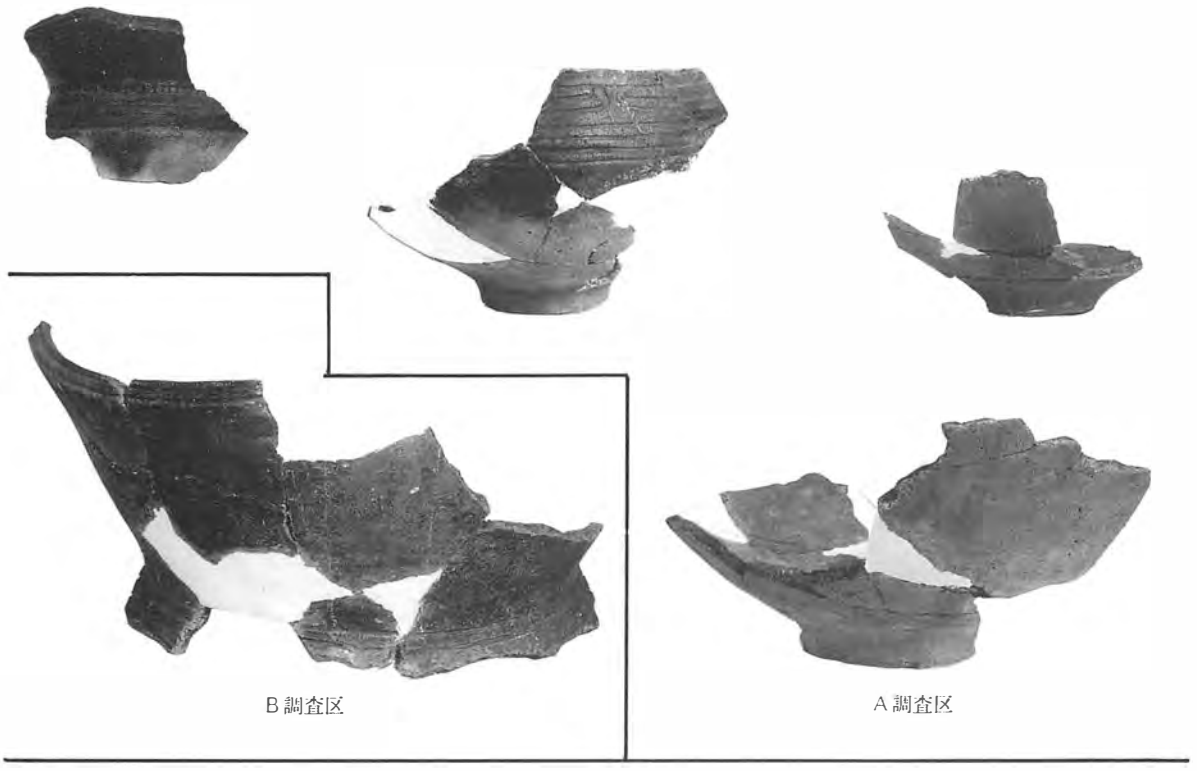


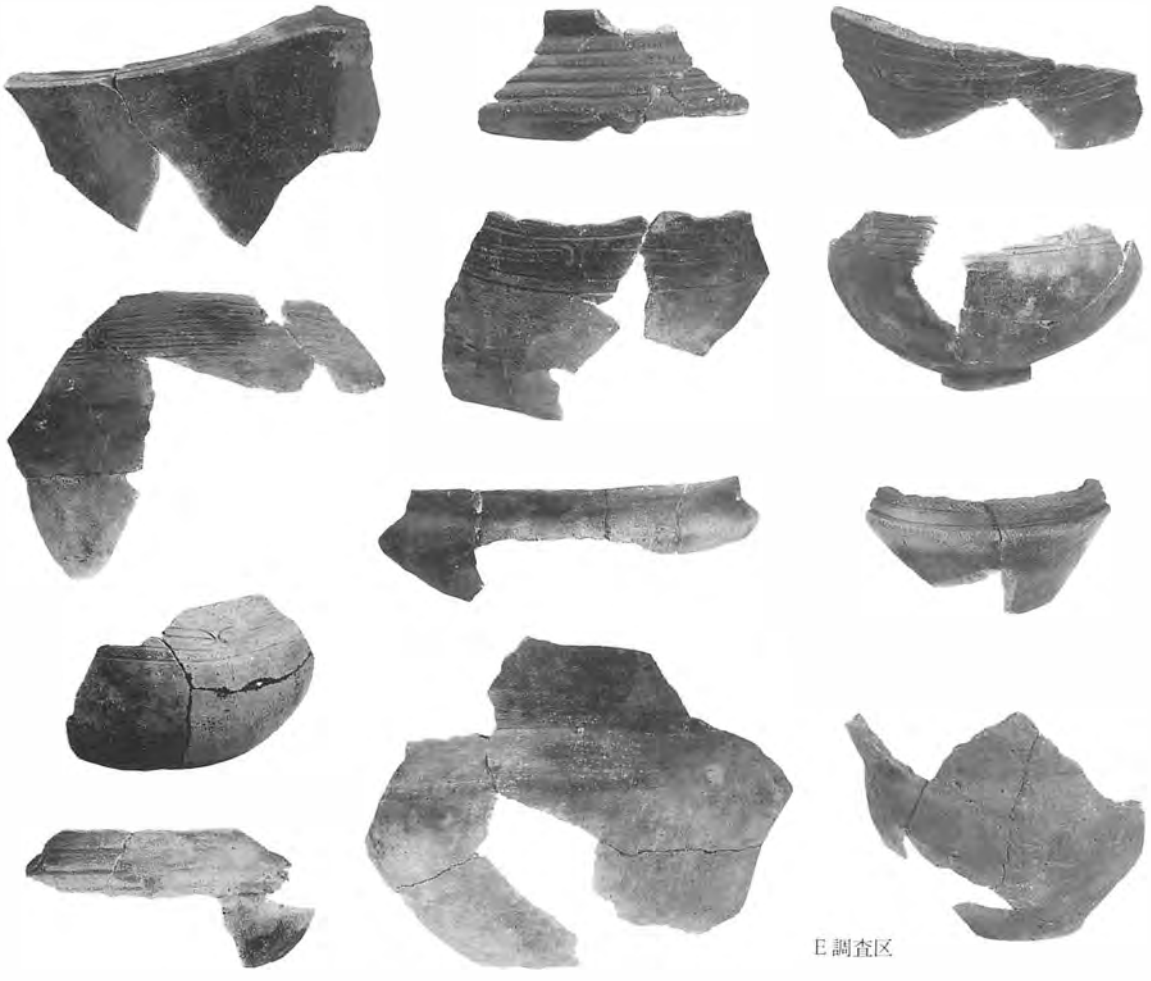
塞ノ神式・曽畑式

竹崎式・阿高式など

縄文時代早期～後期の土器

縄文住居出土遺物及び埋鉢　（1．1号住出土有孔土製品，2～4．10号住出土土器，5．6号住置鉢，6．3号住置鉢，7．1号埋鉢，8．2号埋鉢，9．3号埋鉢）





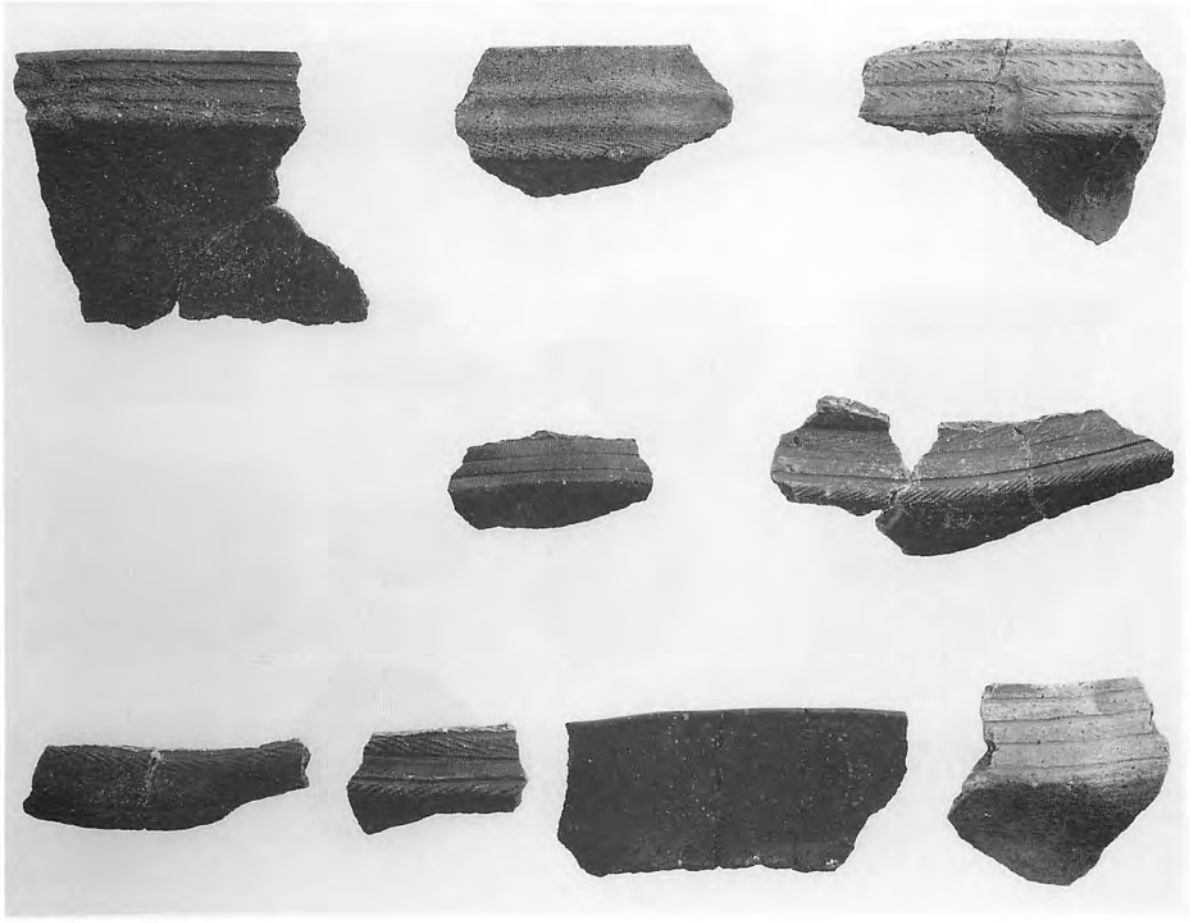
A・B・E 調査区出土土器（縄文時代後期～晩期）

太郎迫式

太郎迫式など

A調査区　縄文時代後期～晩期の土器（反転復原分）

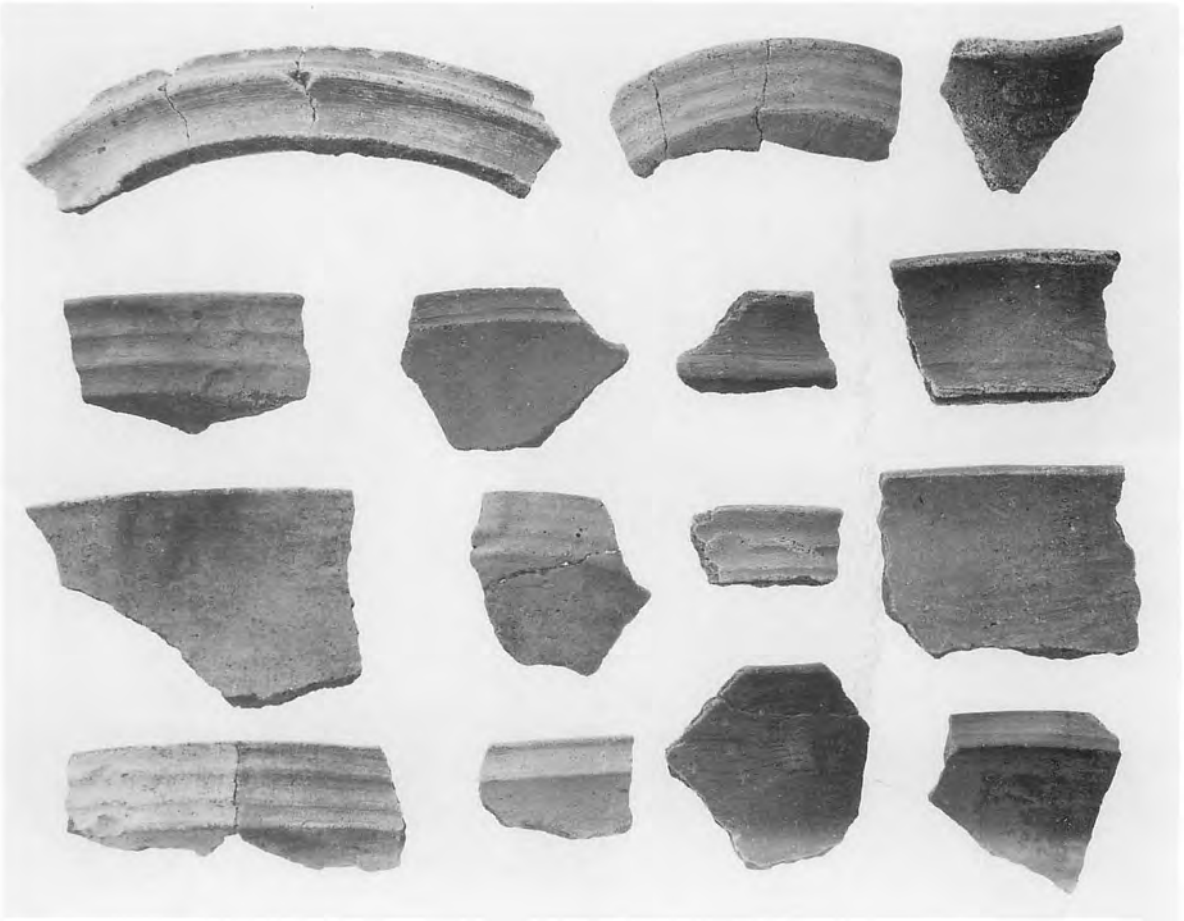
太郎迫式



三万田式

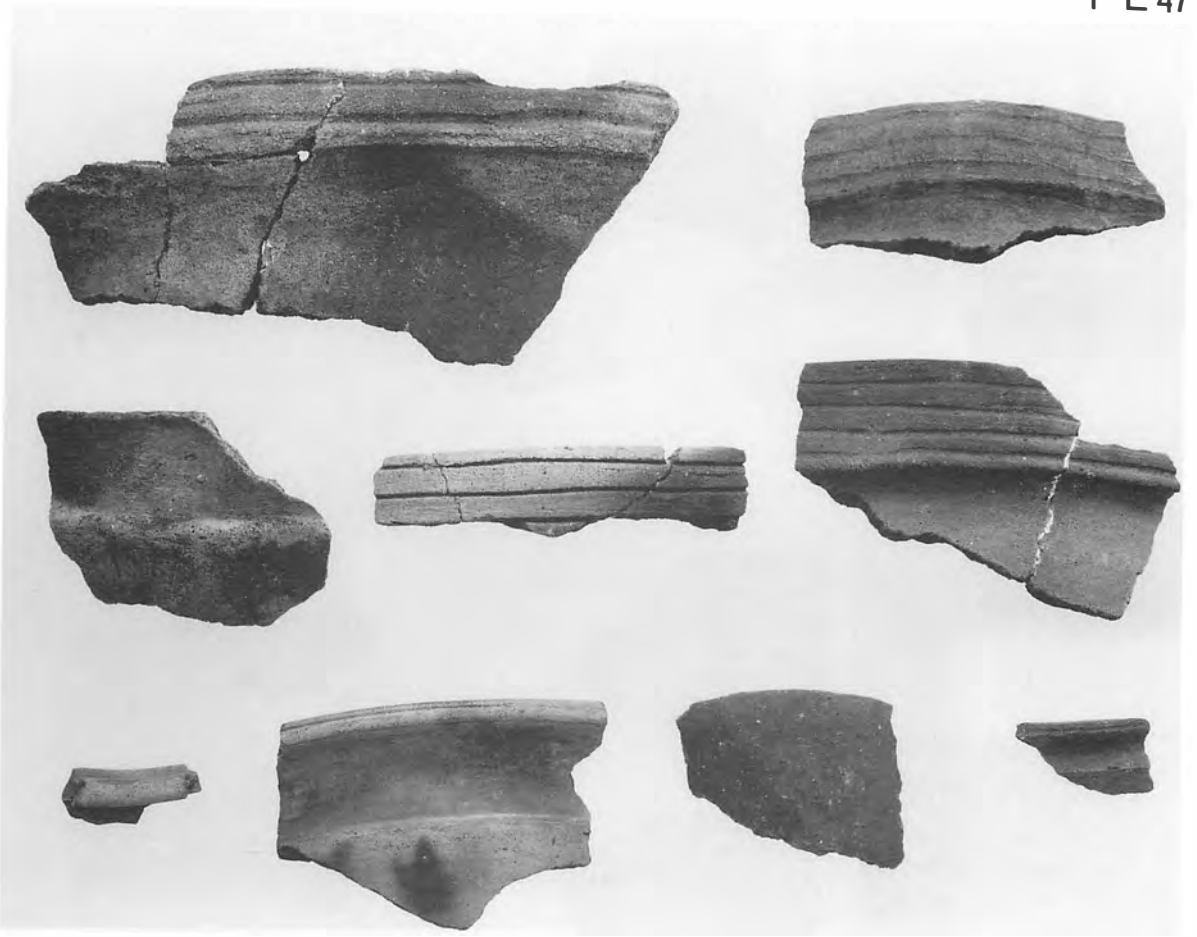
C調査区 縄文時代後期～晩期の土器（反転復原分）

鳥井原式

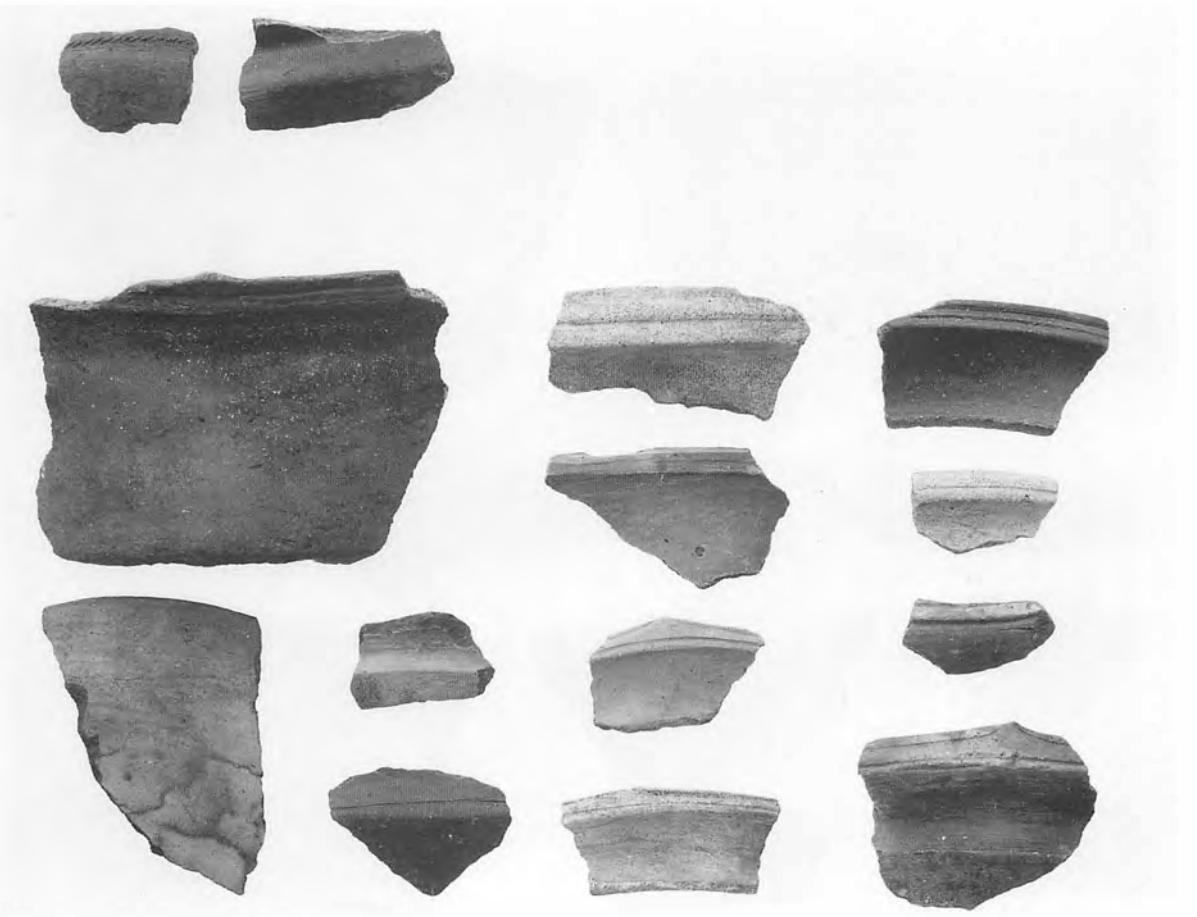


御領式

C調査区 縄文時代後期～晩期の土器（反転復原分）

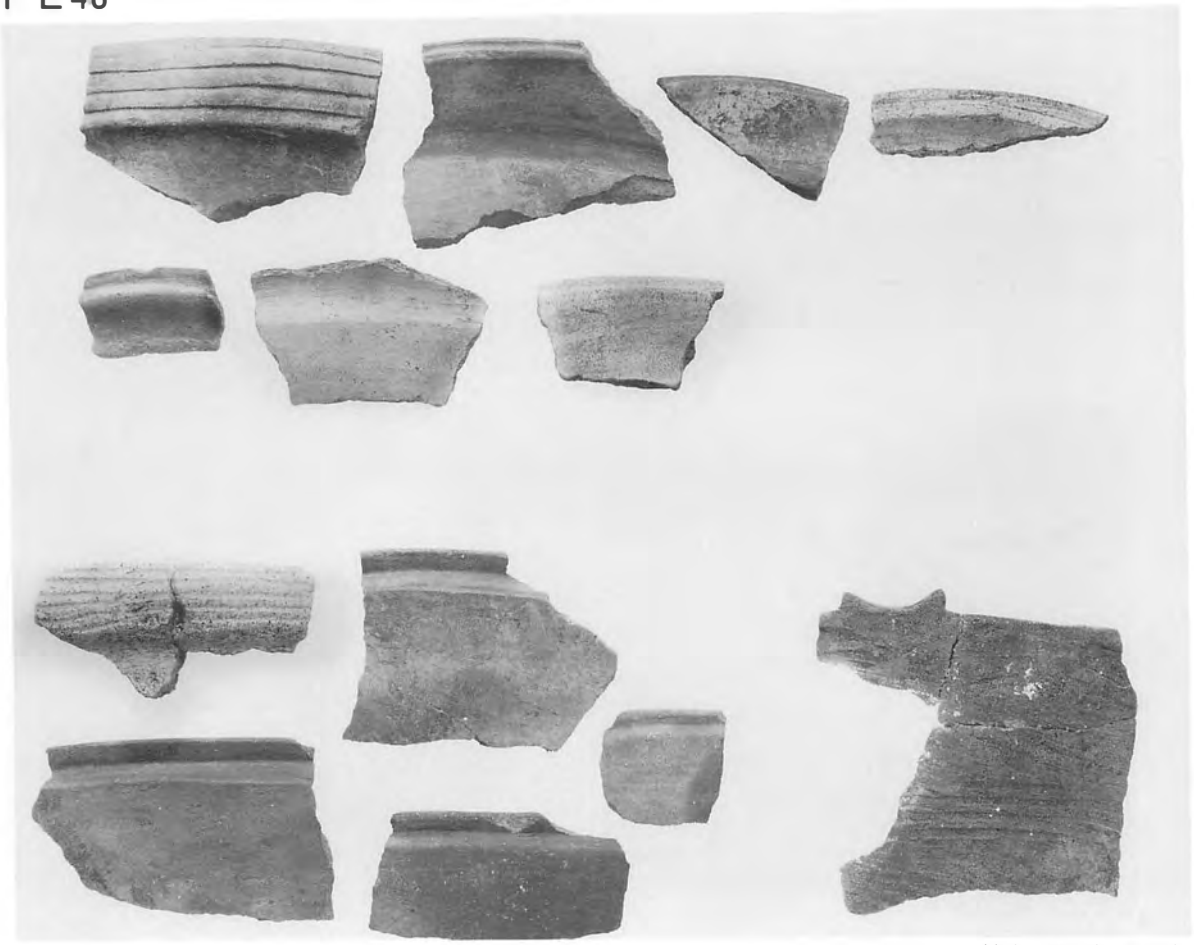


天城式



三万田式・御領式など

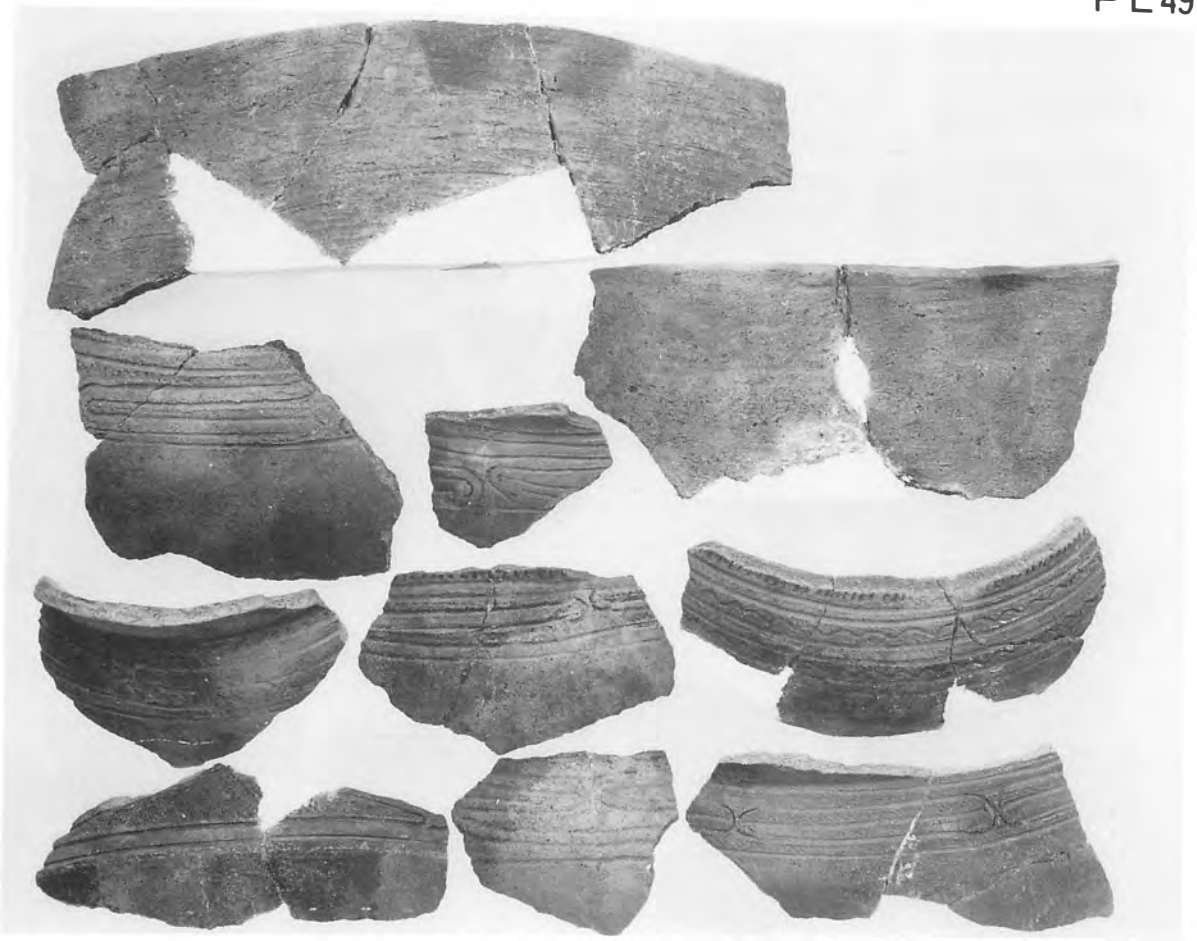
C調査区（上）・D調査区（下） 縄文時代後期～晩期の土器（反転復原分）



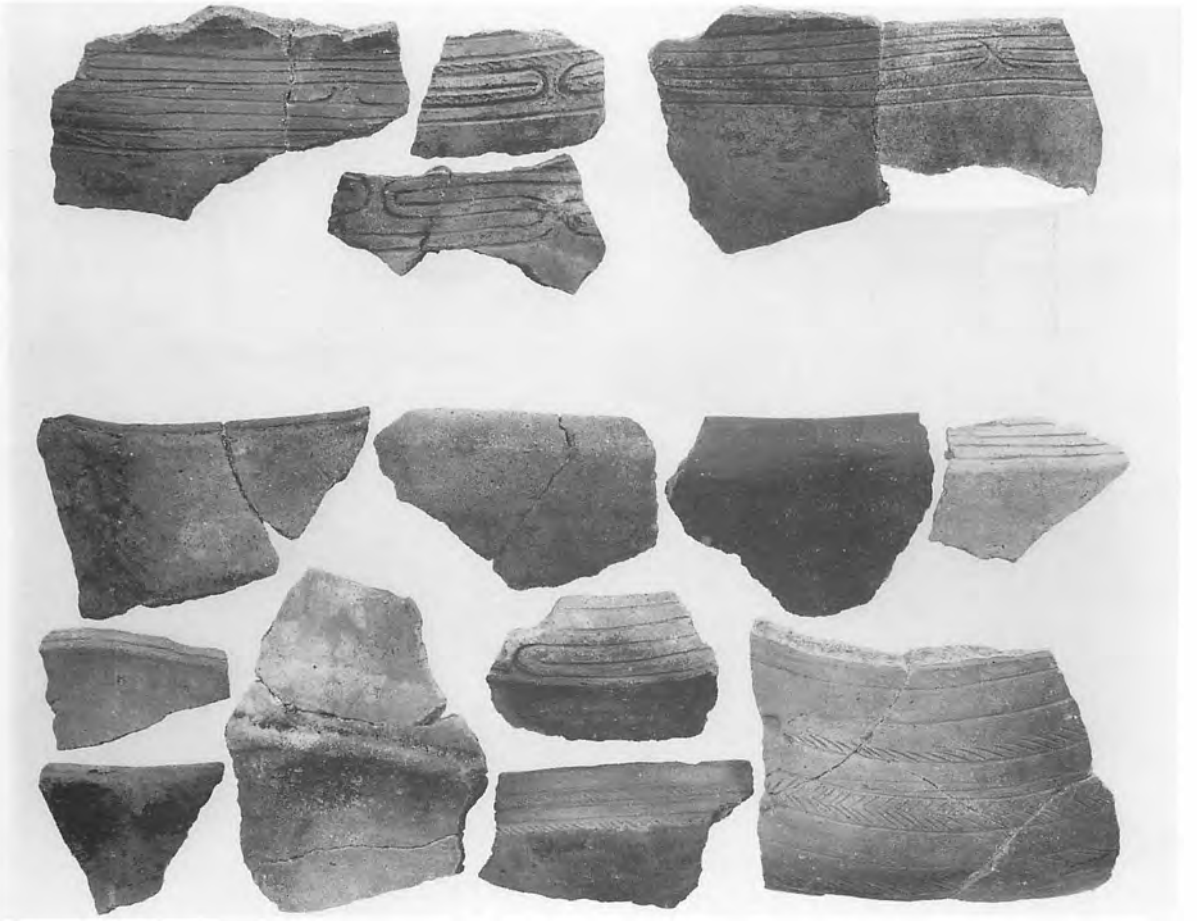
天城式・古閑式・黒川式

太郎迫式

D調査区(上)・E調査区(下) 縄文時代後期～晩期の土器 (反転復原分)

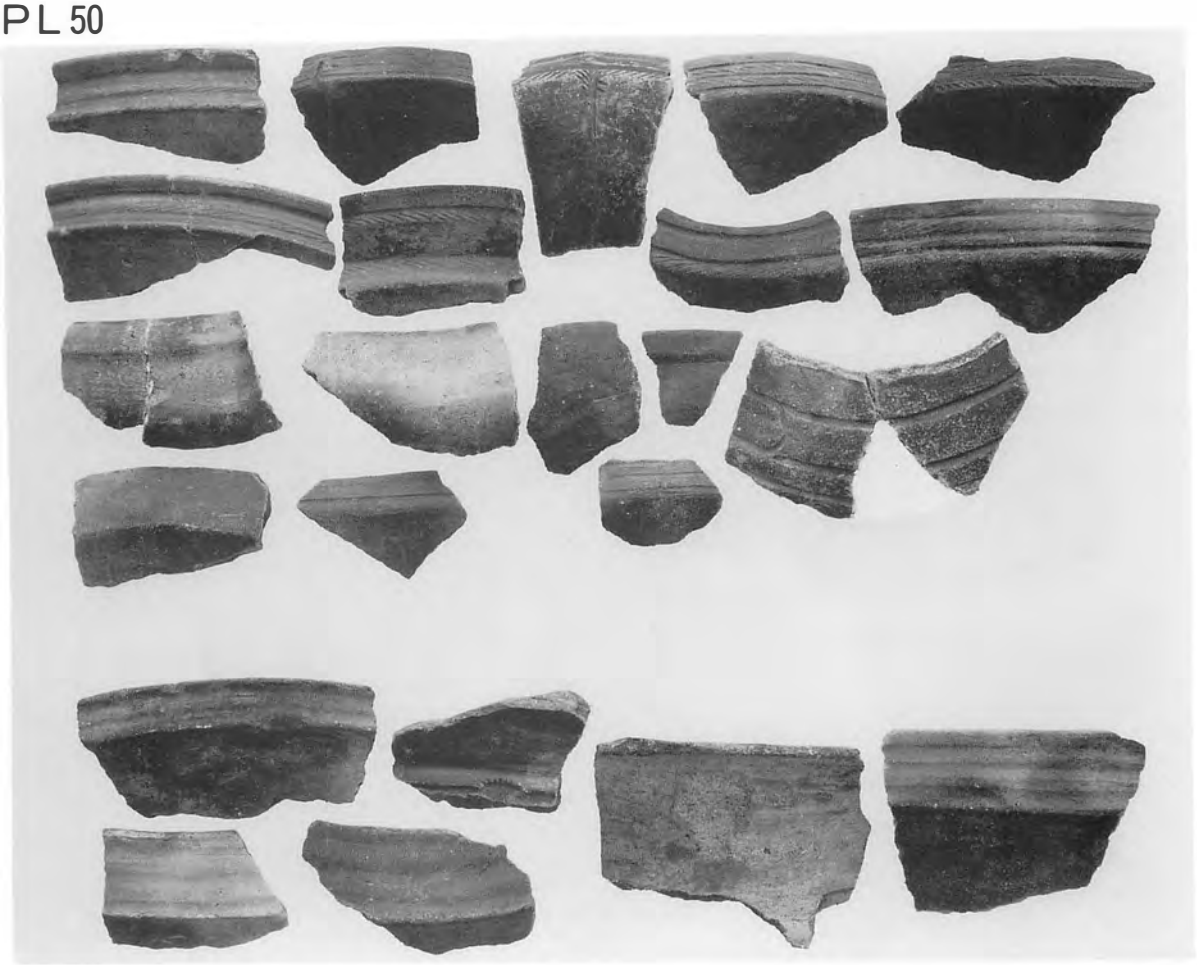


太郎迫式



太郎迫式・三万田式

E調査区 縄文時代後期～晩期の土器（反転復原分）



三万田式・鳥井原式

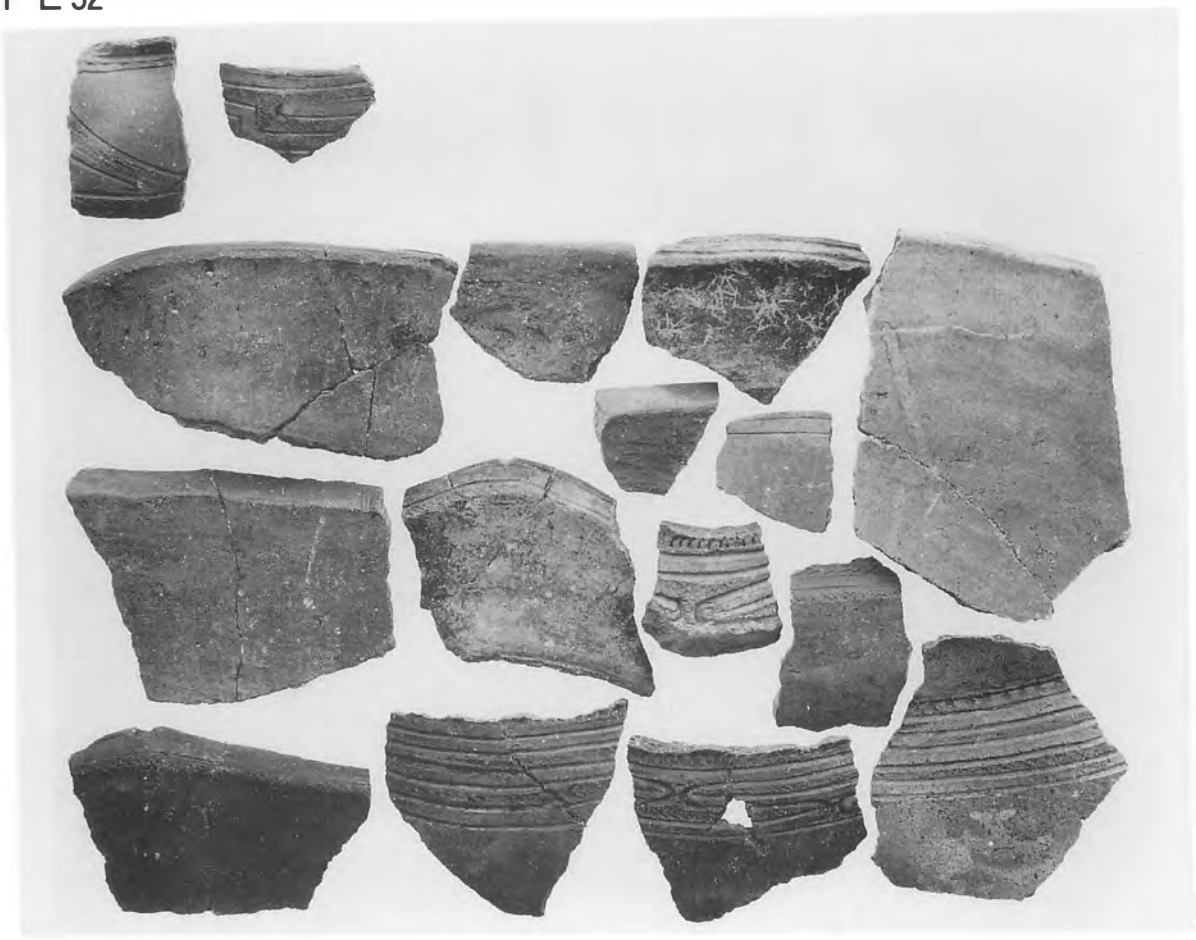
御領式

E調査区 縄文時代後期～晩期の土器（反転復原分）

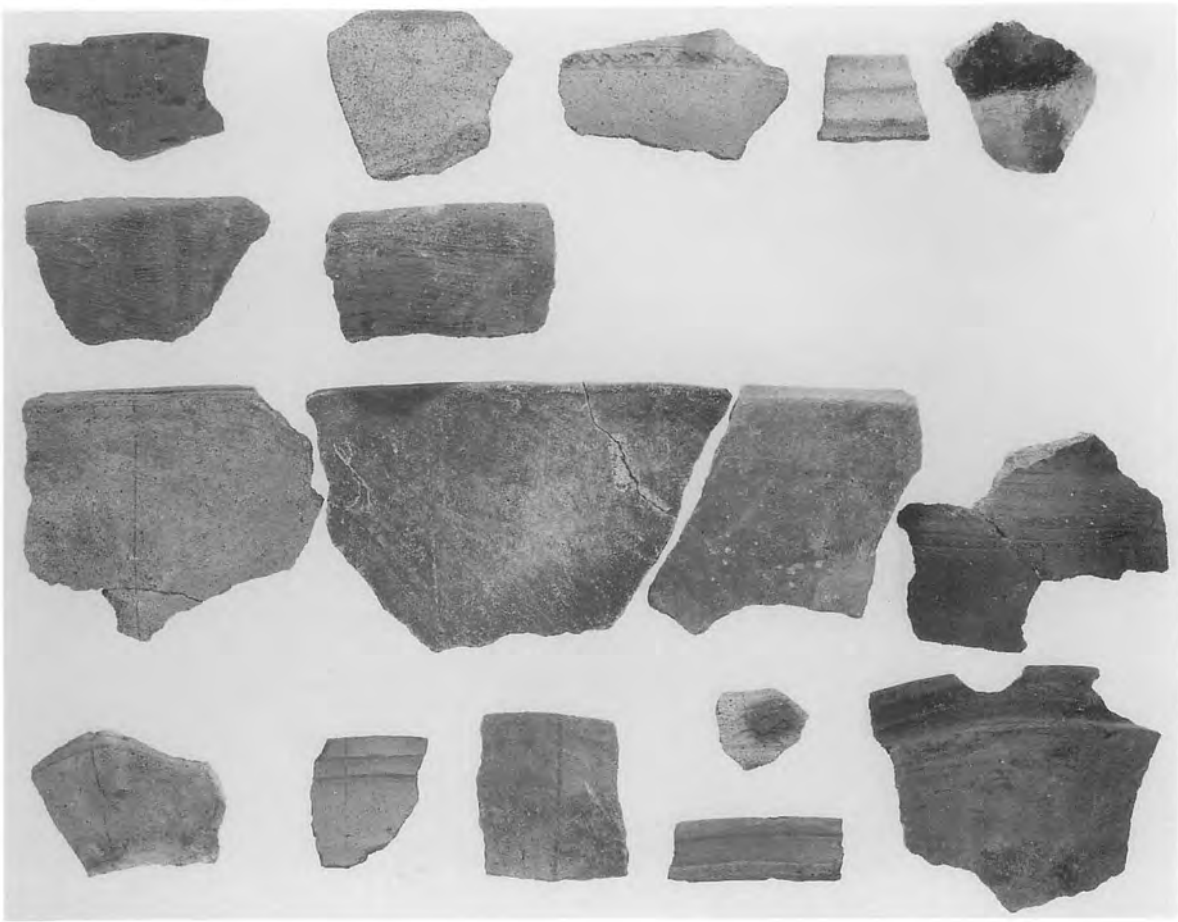
天城式

古閑式

E調査区 縄文時代後期～晩期の土器（反転復原分）

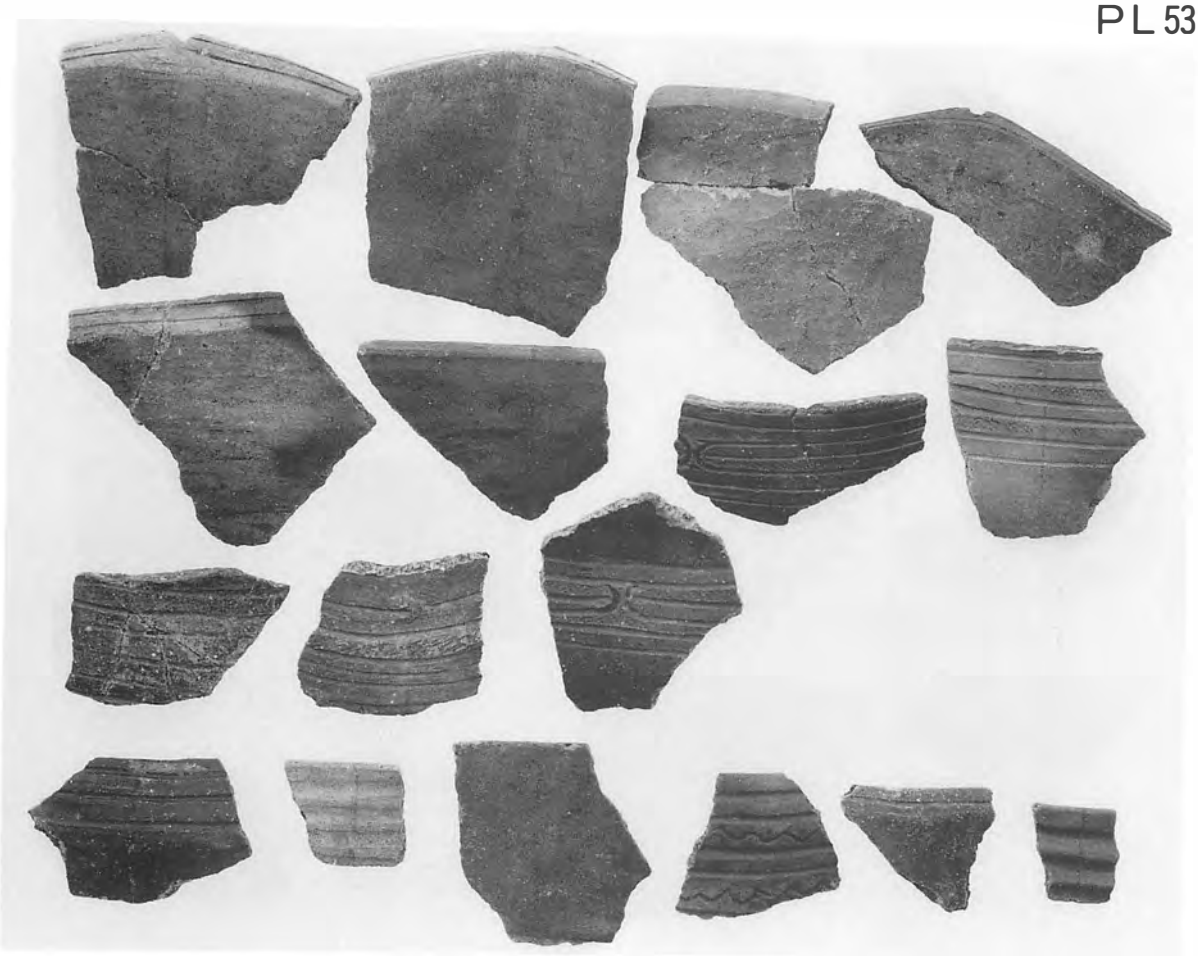


太郎迫式

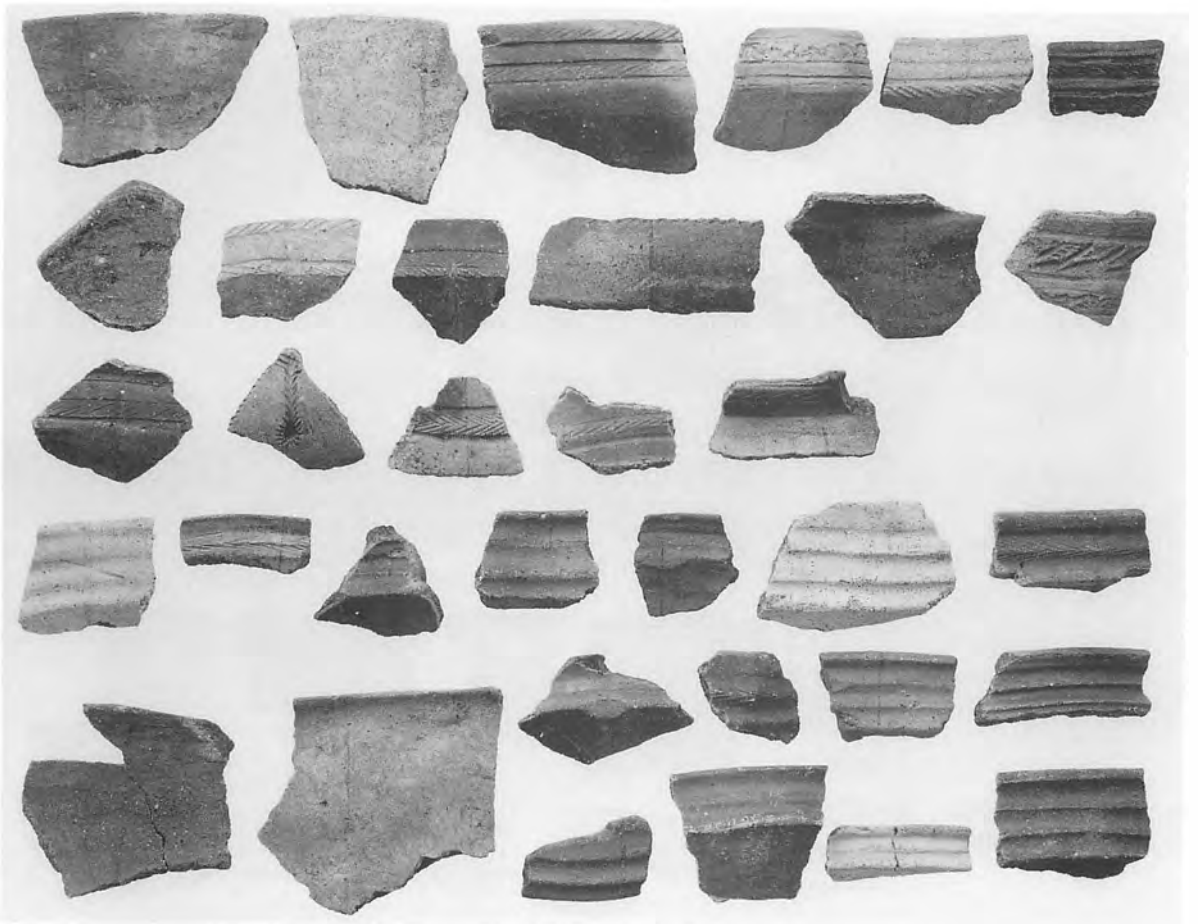


太郎迫式など

A調査区 縄文時代後期～晩期の土器

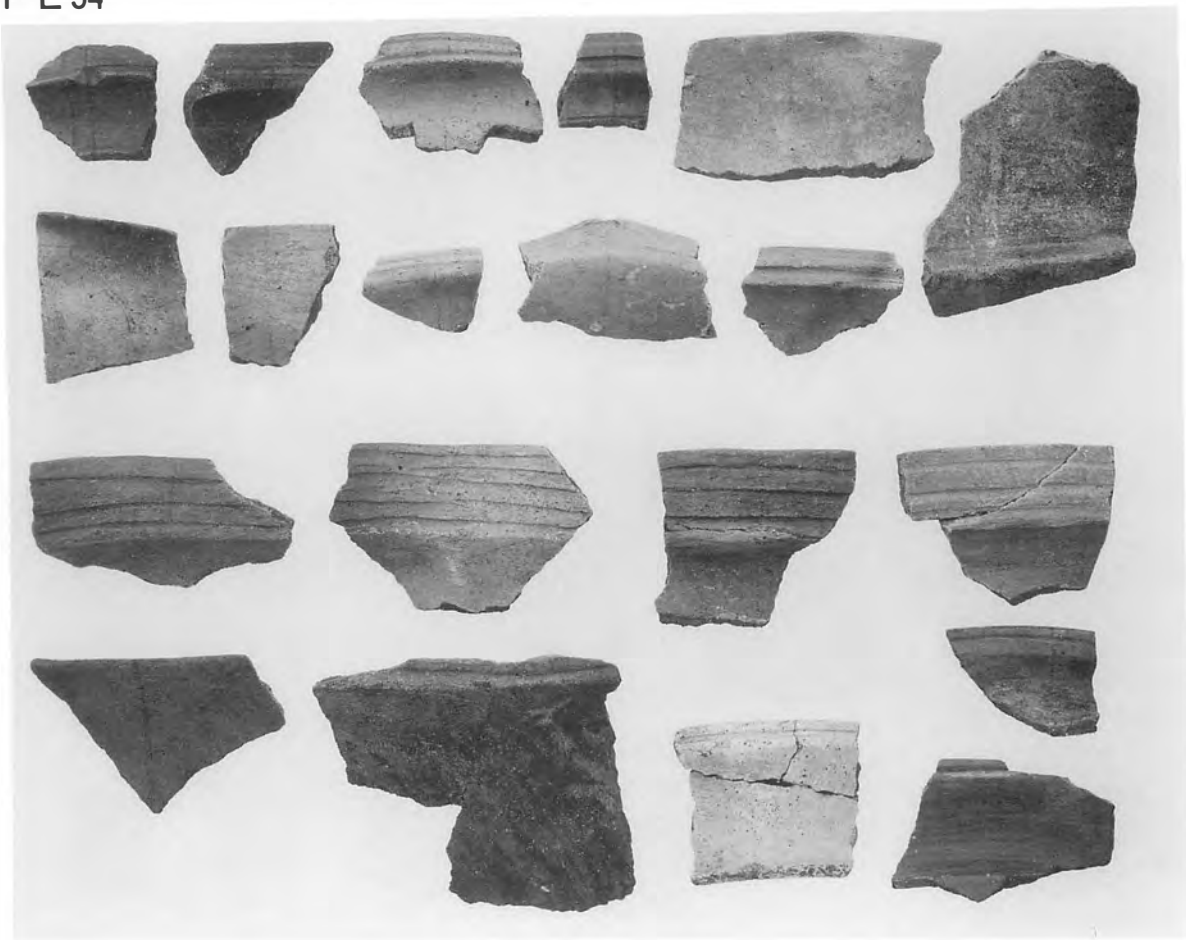


太郎迫式・三万田式など

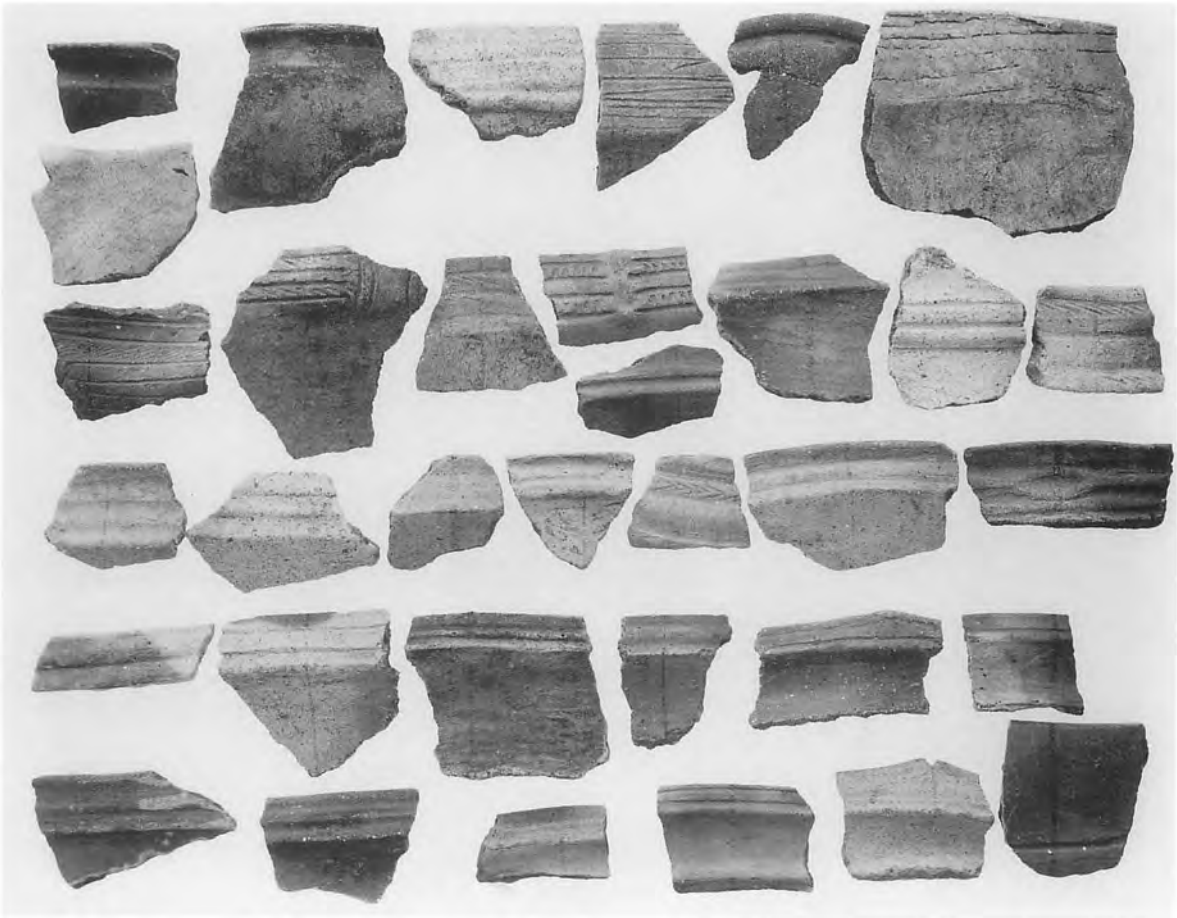


太郎迫式・三万田式・鳥井原式など

C調査区　縄文時代後期～晩期の土器

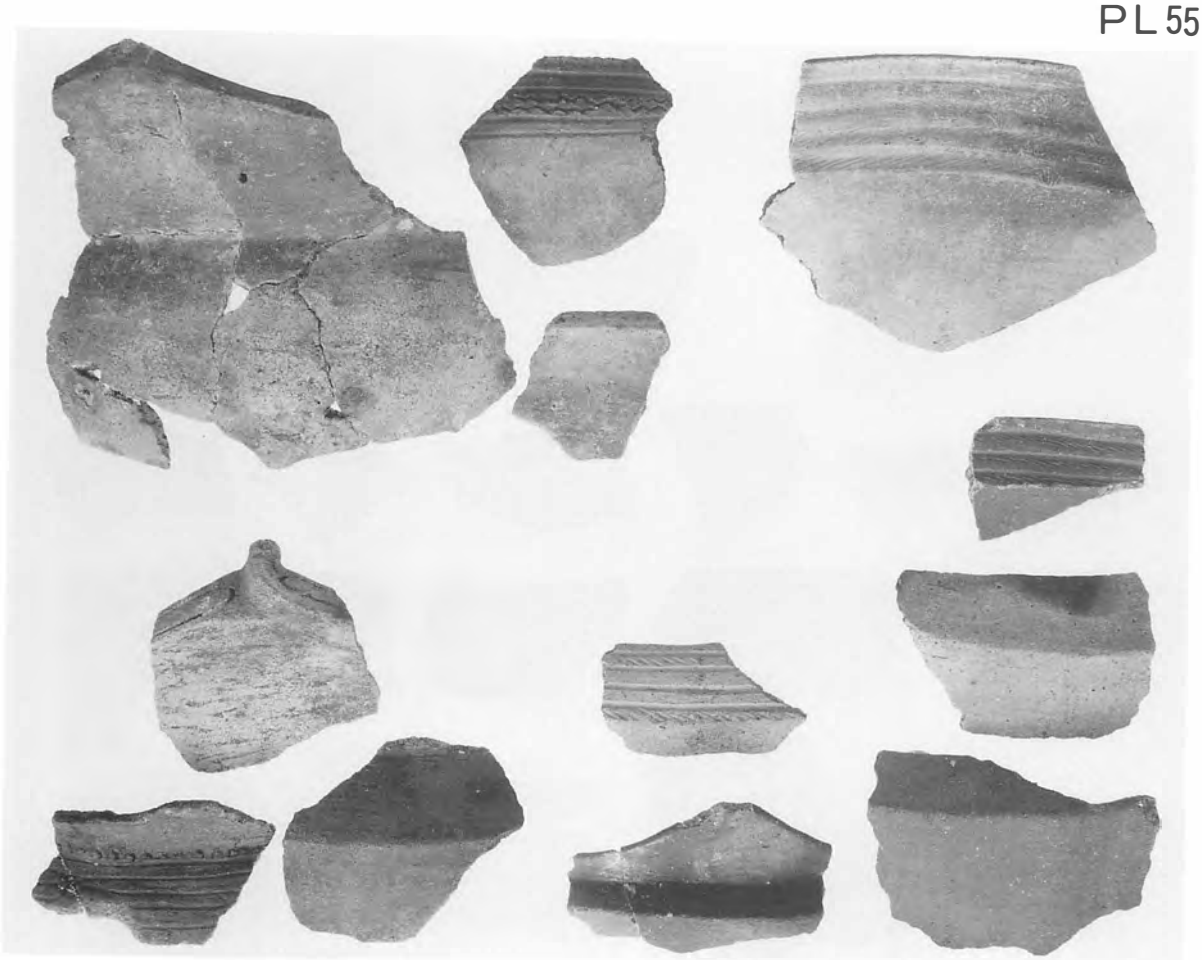


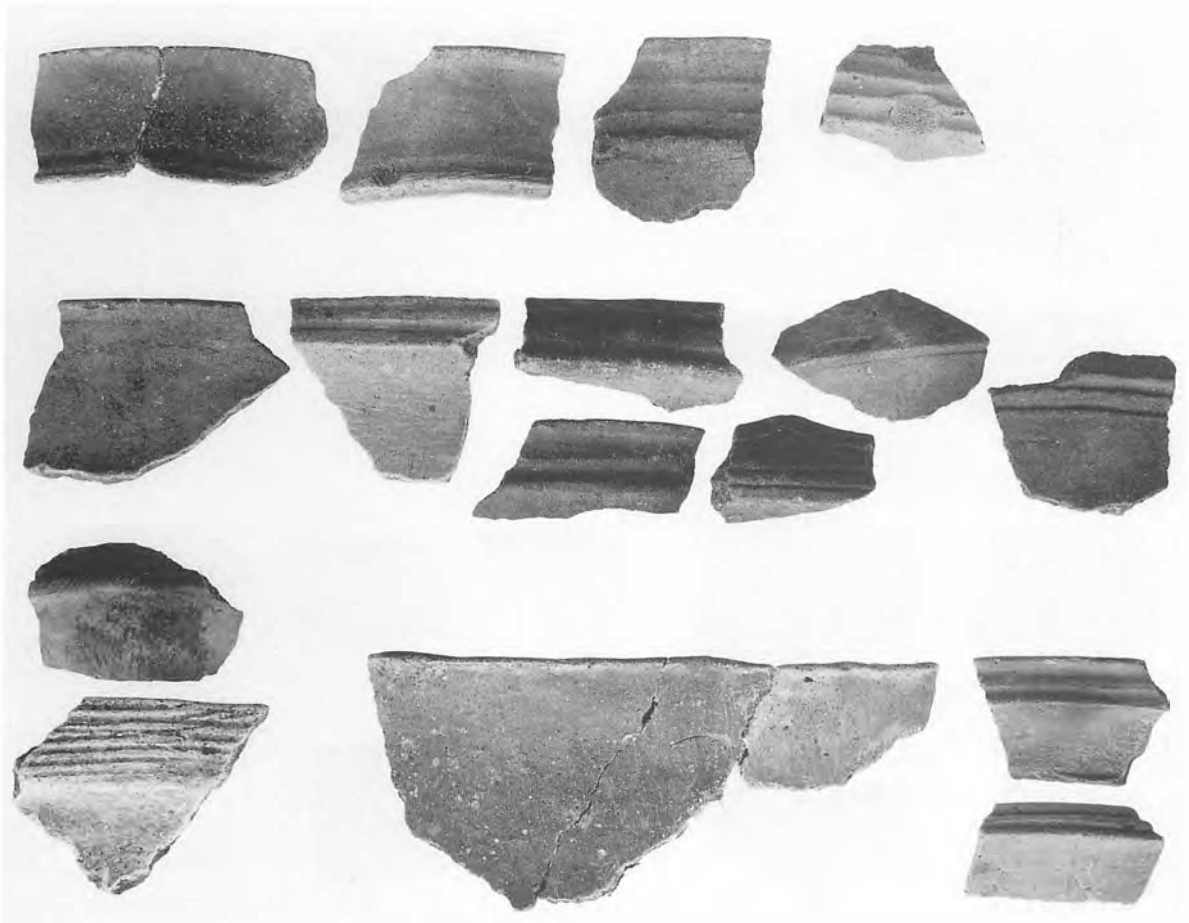
御領式・天城式など



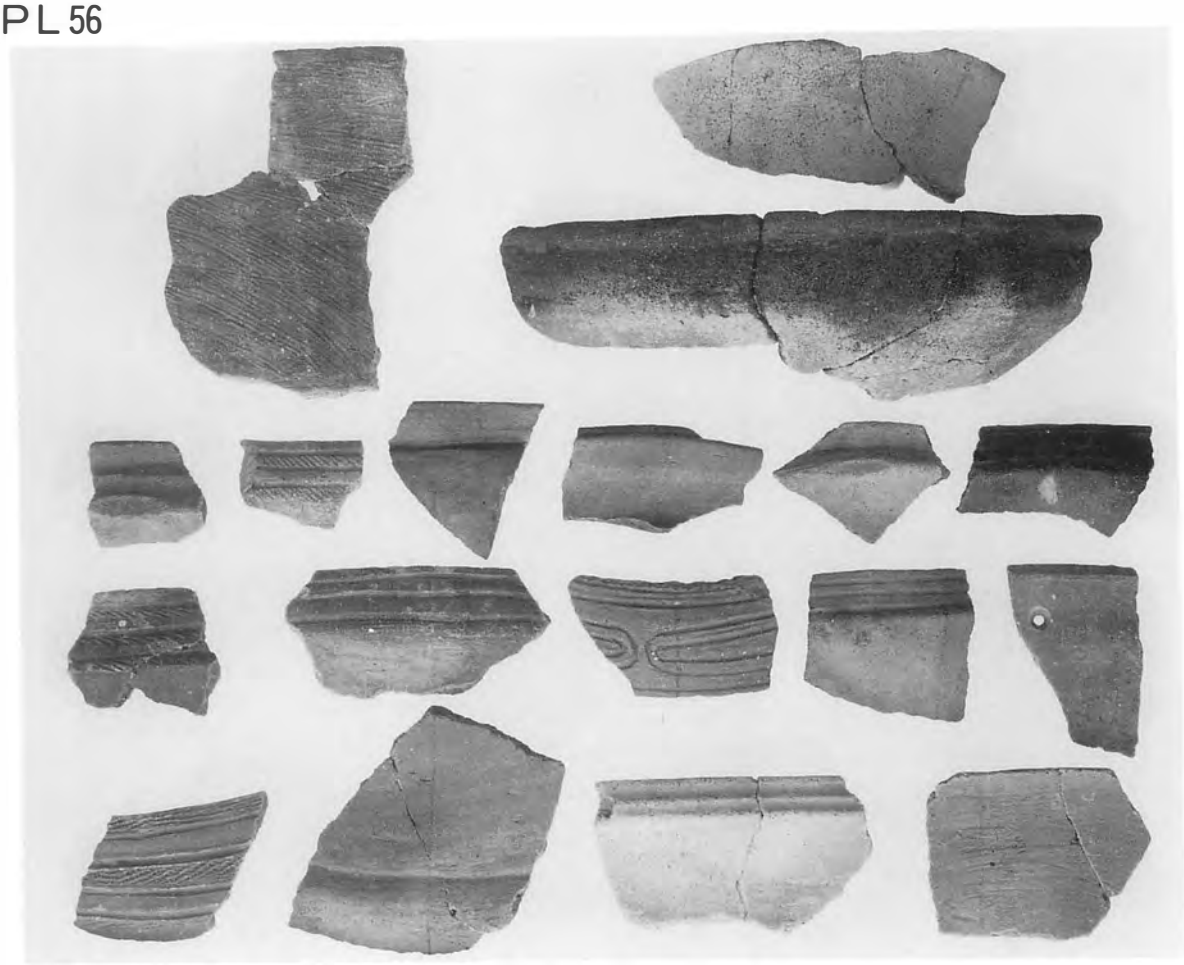
C区 古閑式・D区 三万田式・御領式など

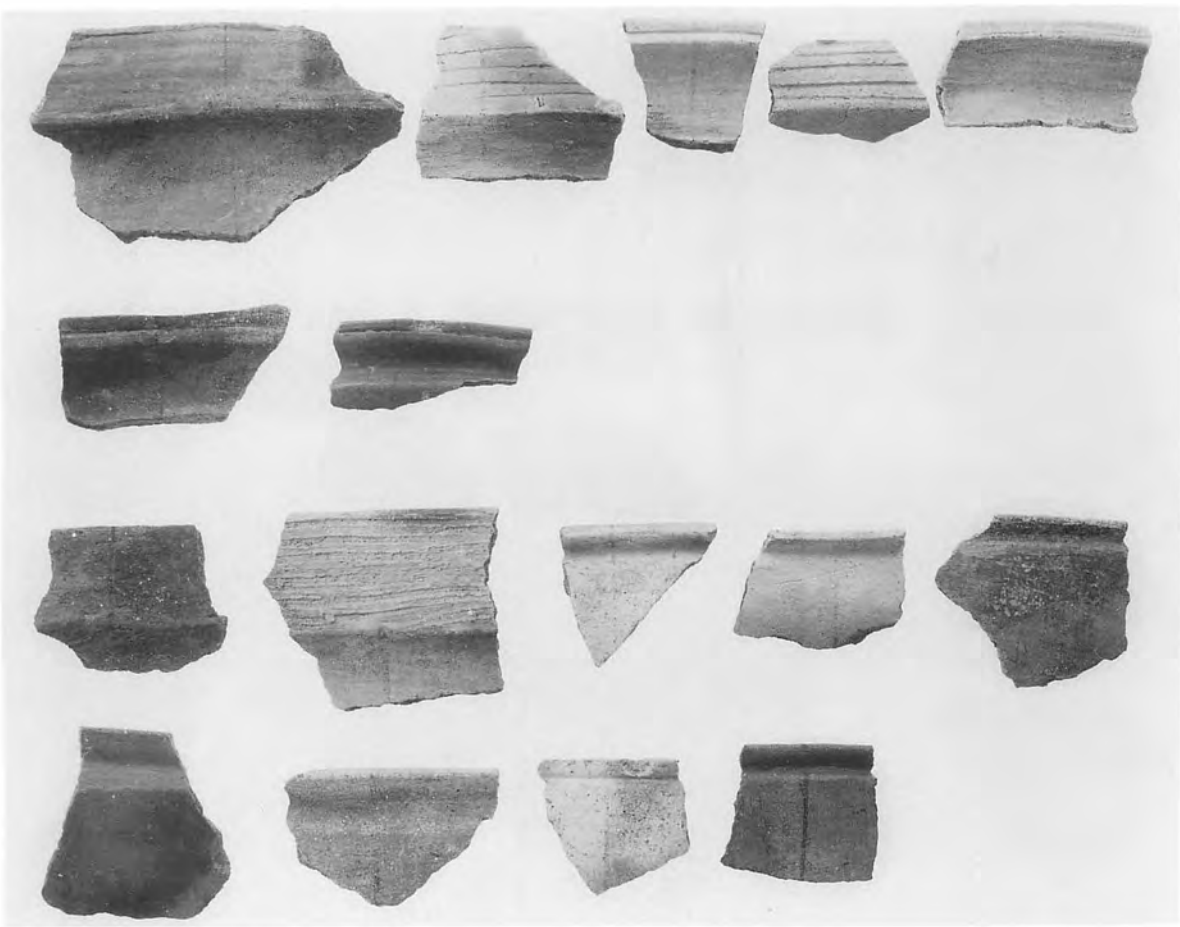
C・D調査区 縄文時代後期～晩期の土器





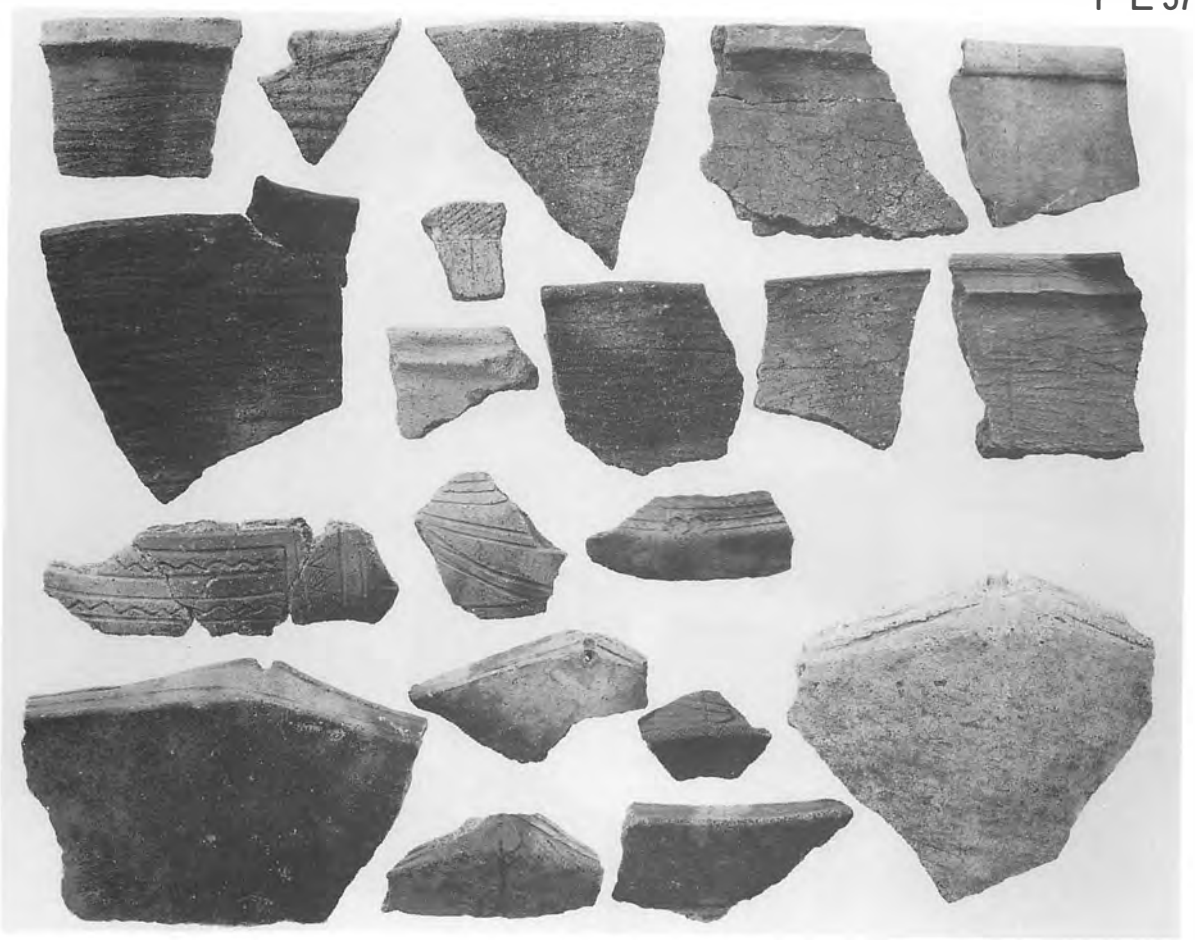
C調査区住居跡出土 縄文時代後期～晩期の土器



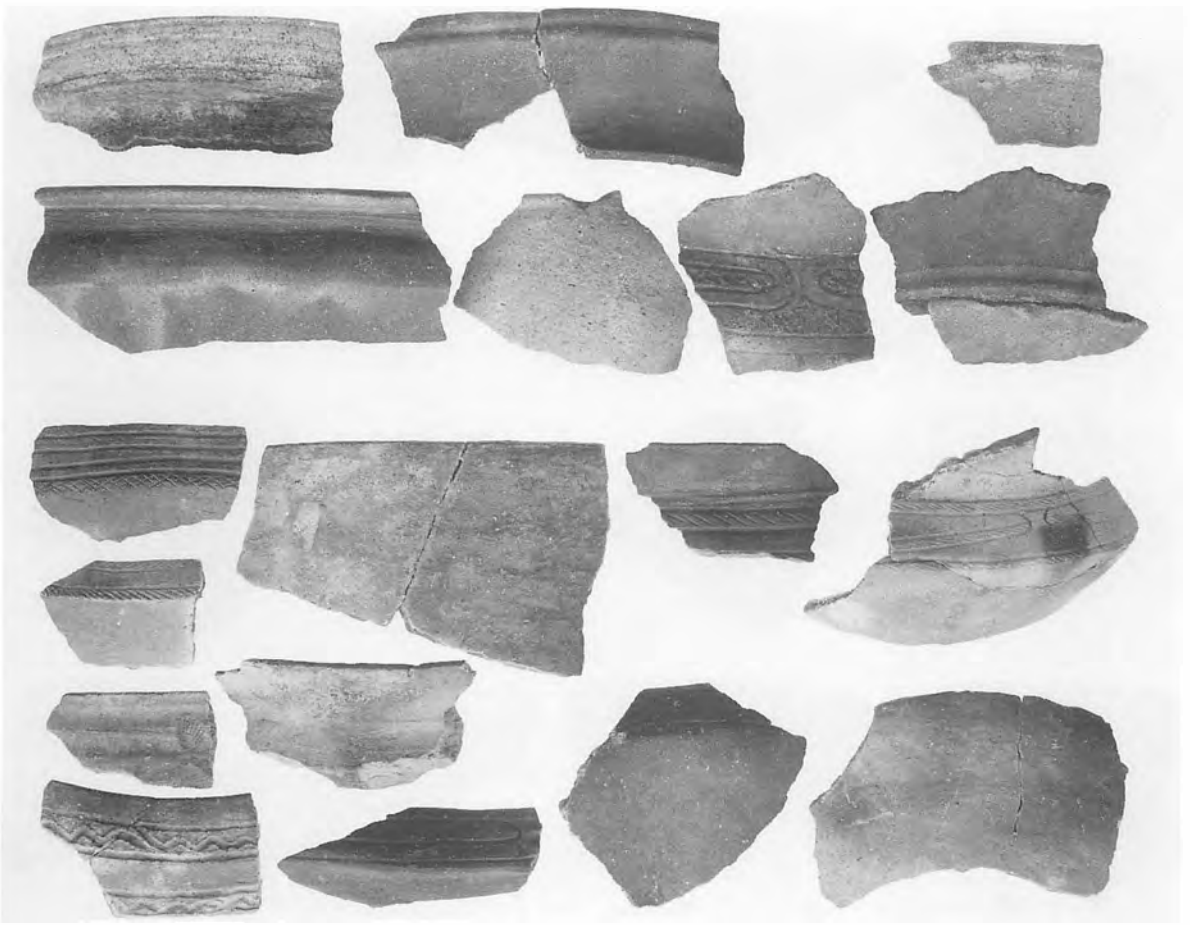


天城式・古閑式など

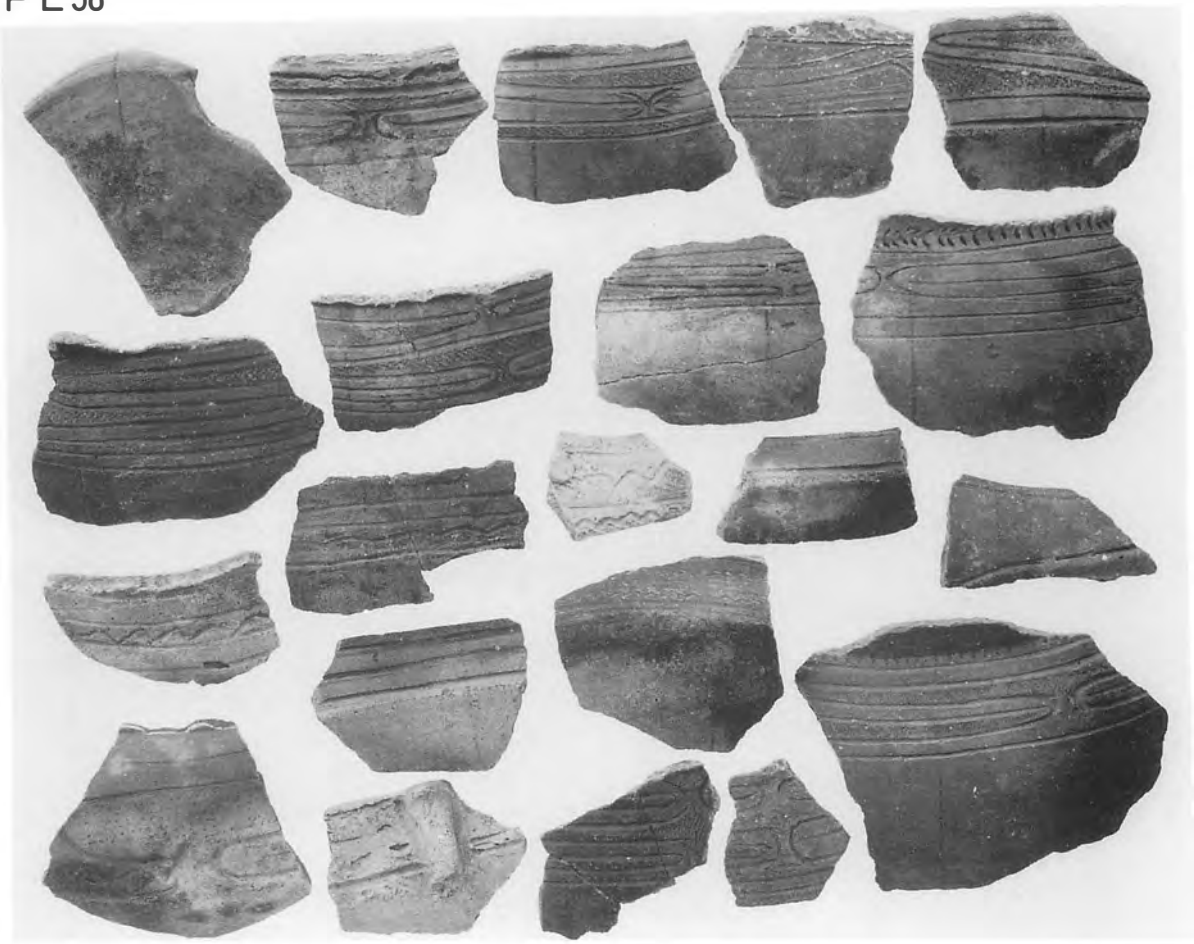
A・B・C調査区イモ穴(上)及びD調査区(下) 縄文時代後期～晩期の土器



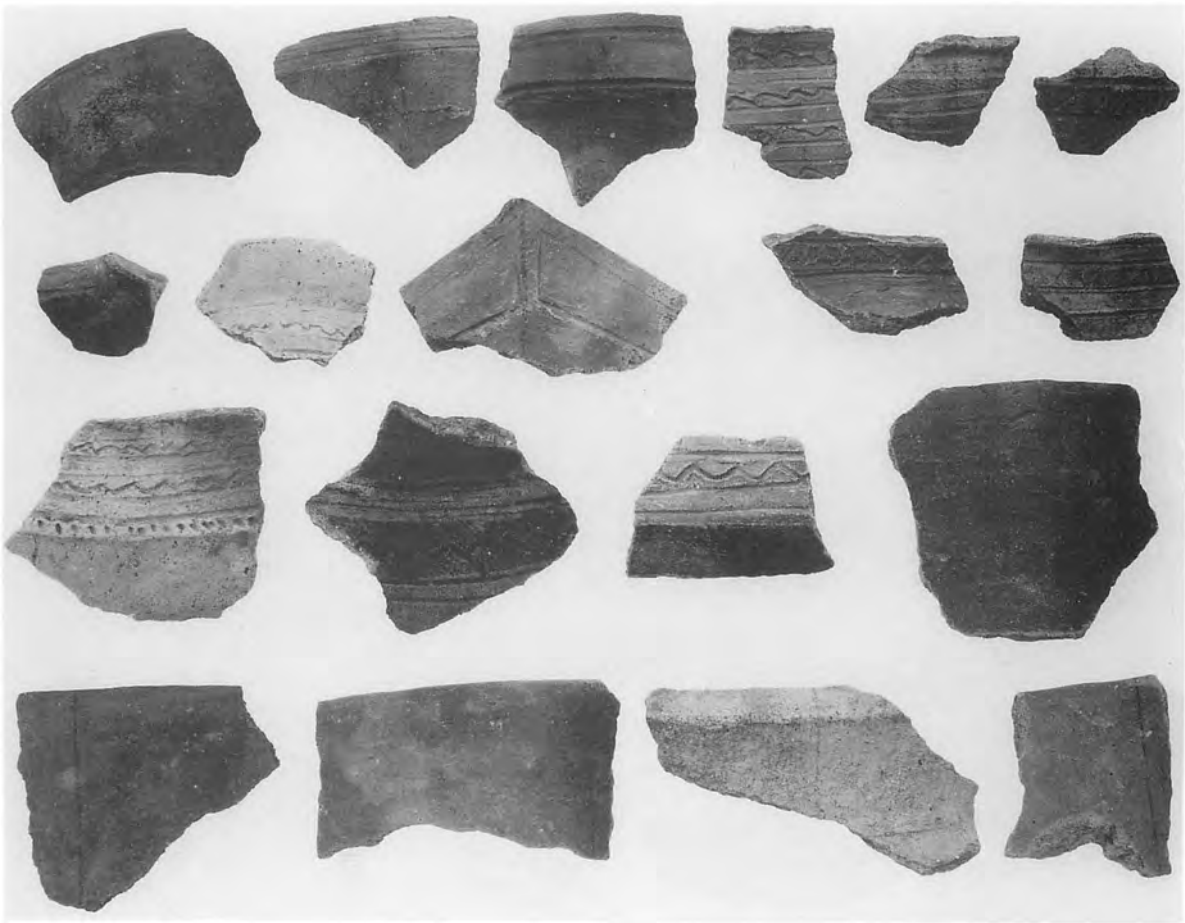
D区 黒川式・E区 太郎迫式など



D・E調査区(上)及びD・E調査区住居跡(下)出土 縄文時代後期～晩期の土器

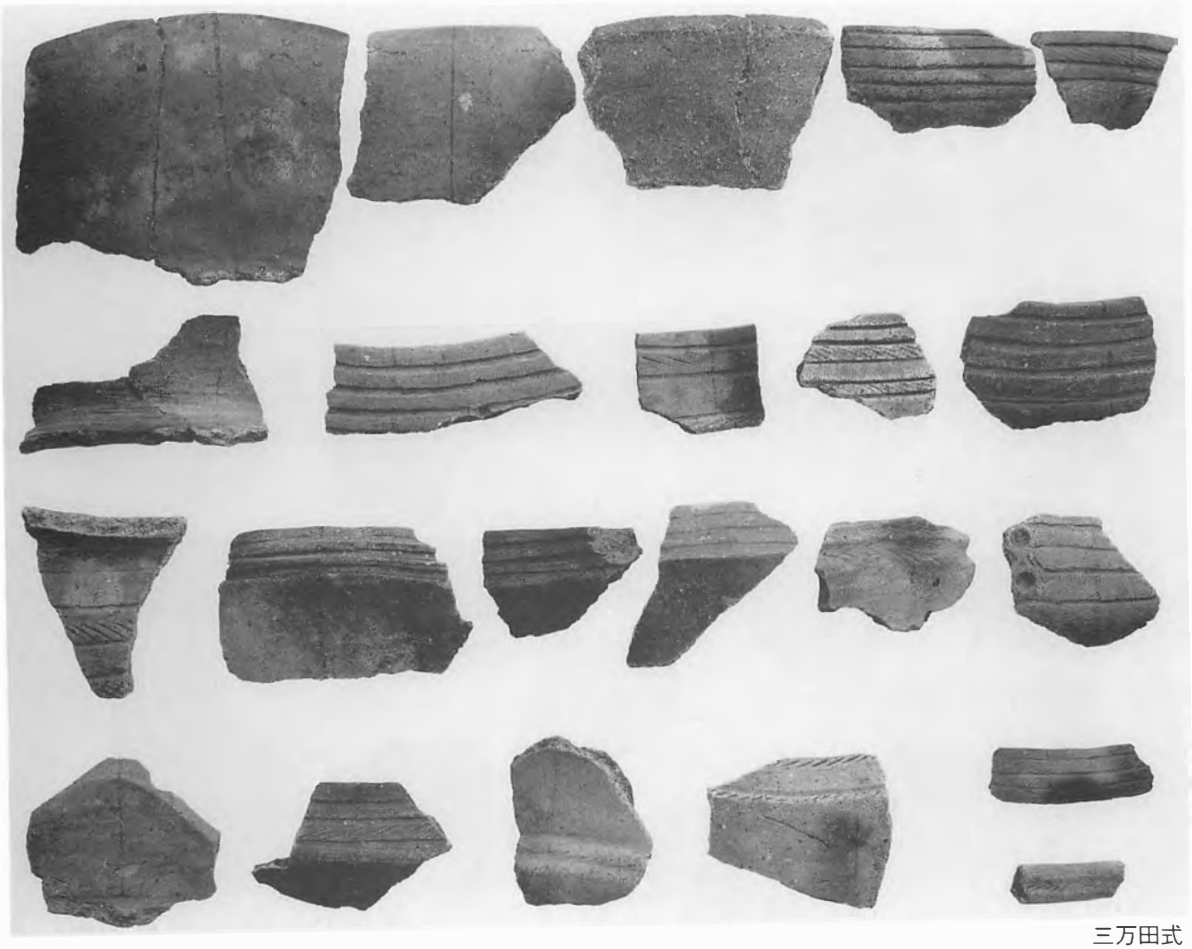


太郎迫式など

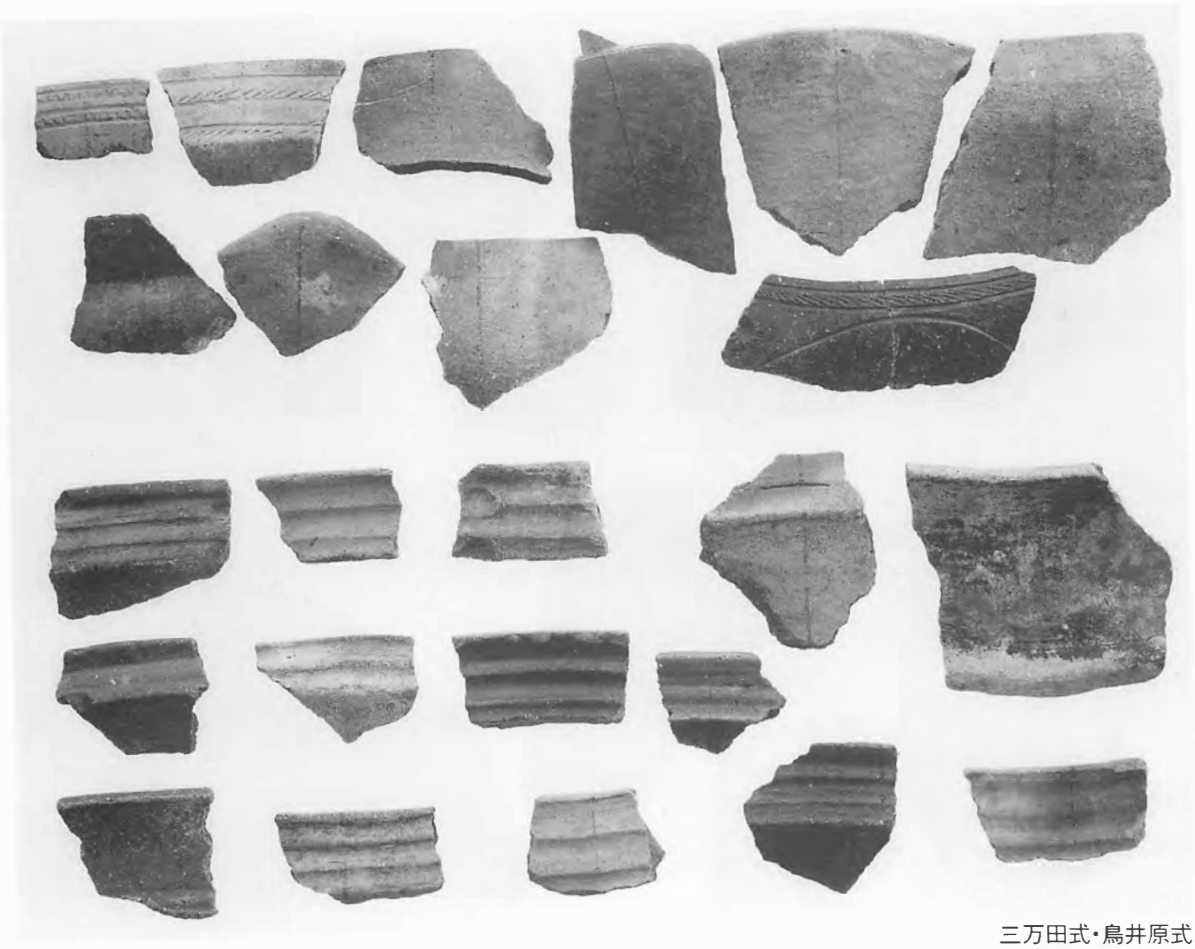


太郎迫式など

E調査区 縄文時代後期～晩期の土器

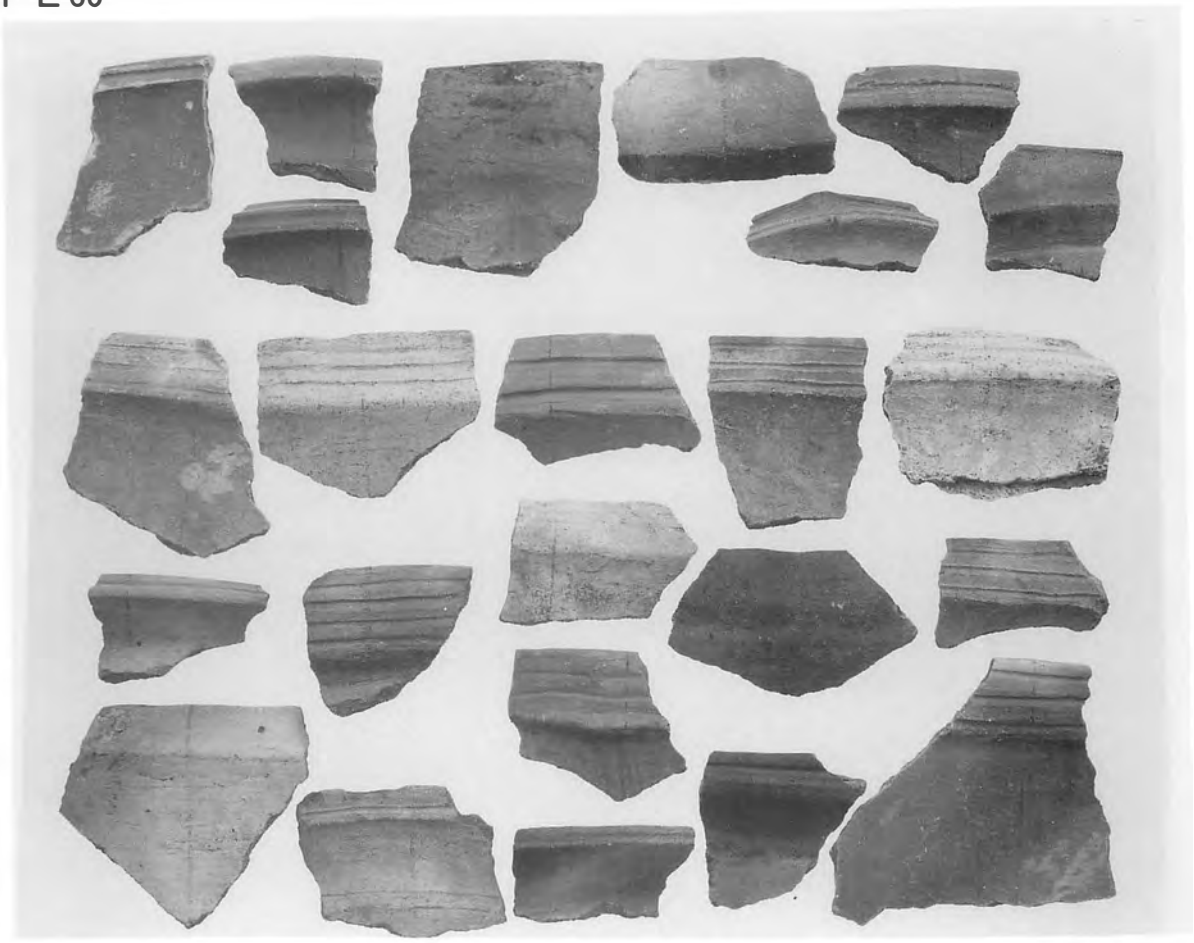


三万田式

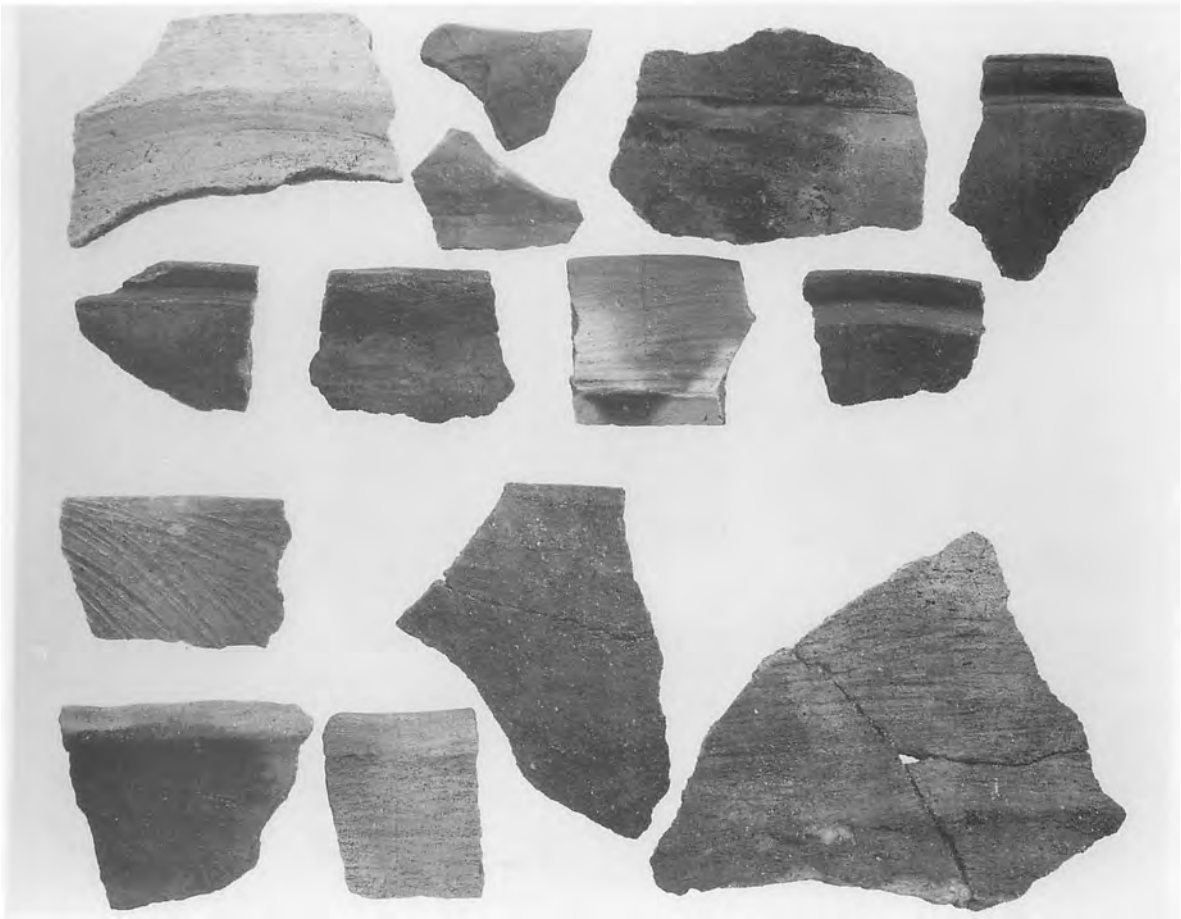


三万田式・鳥井原式

E調査区 縄文時代後期～晩期の土器

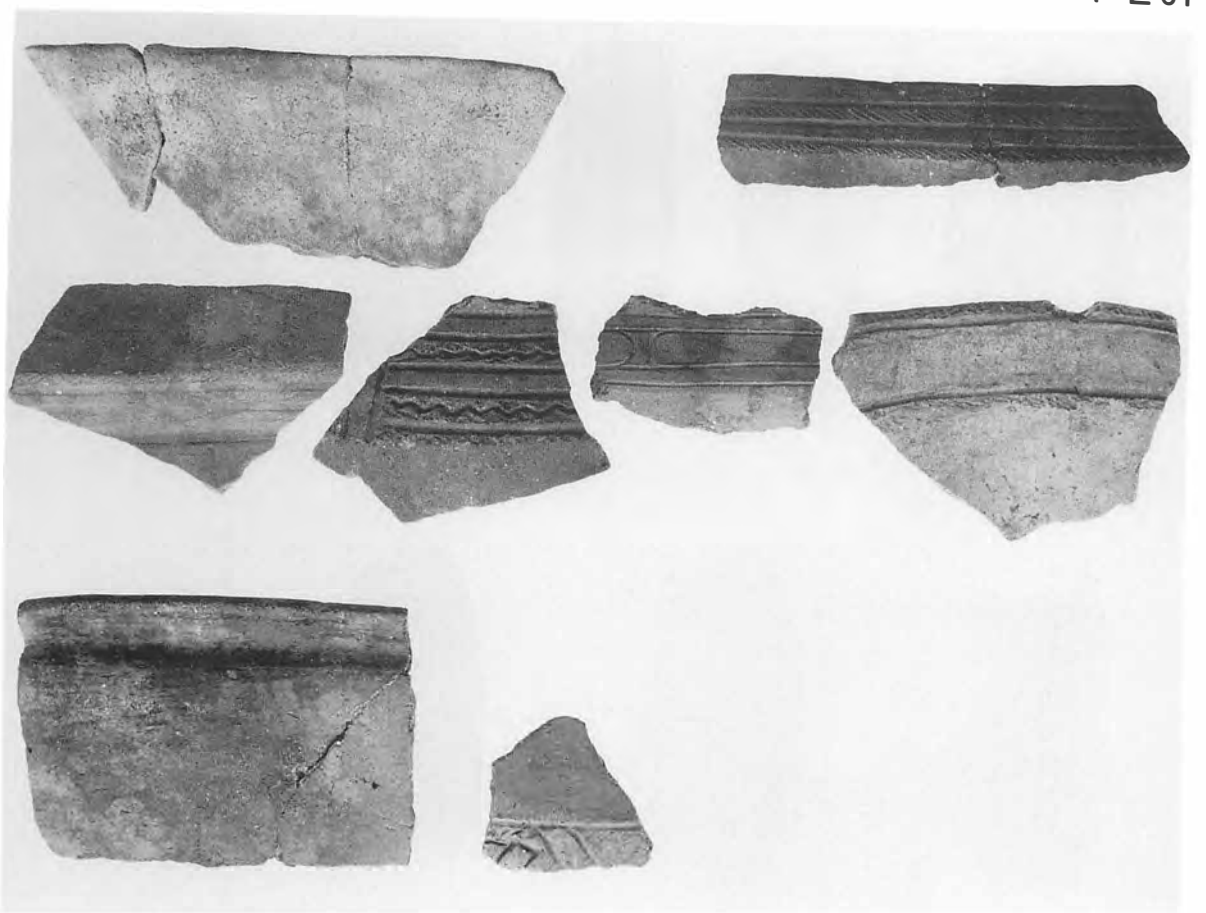


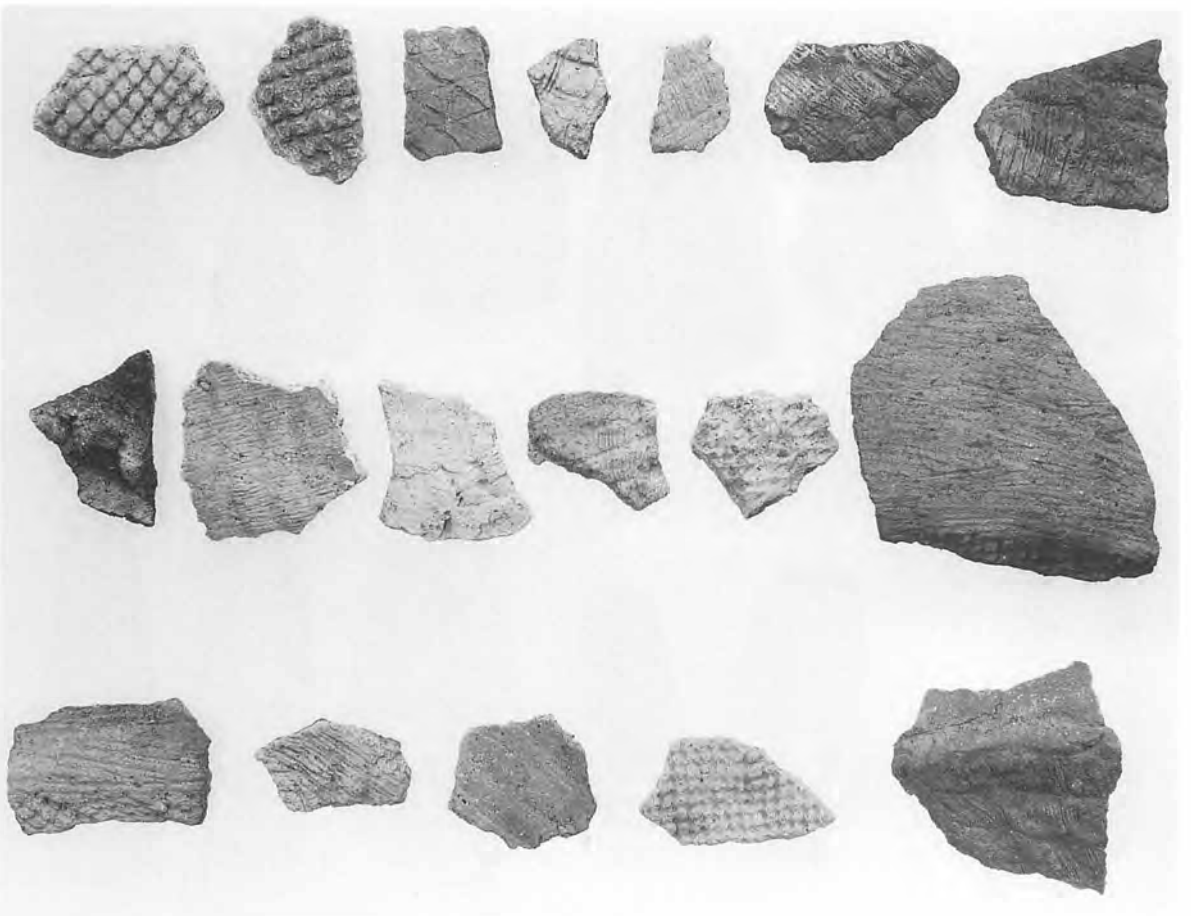
御領式・天城式



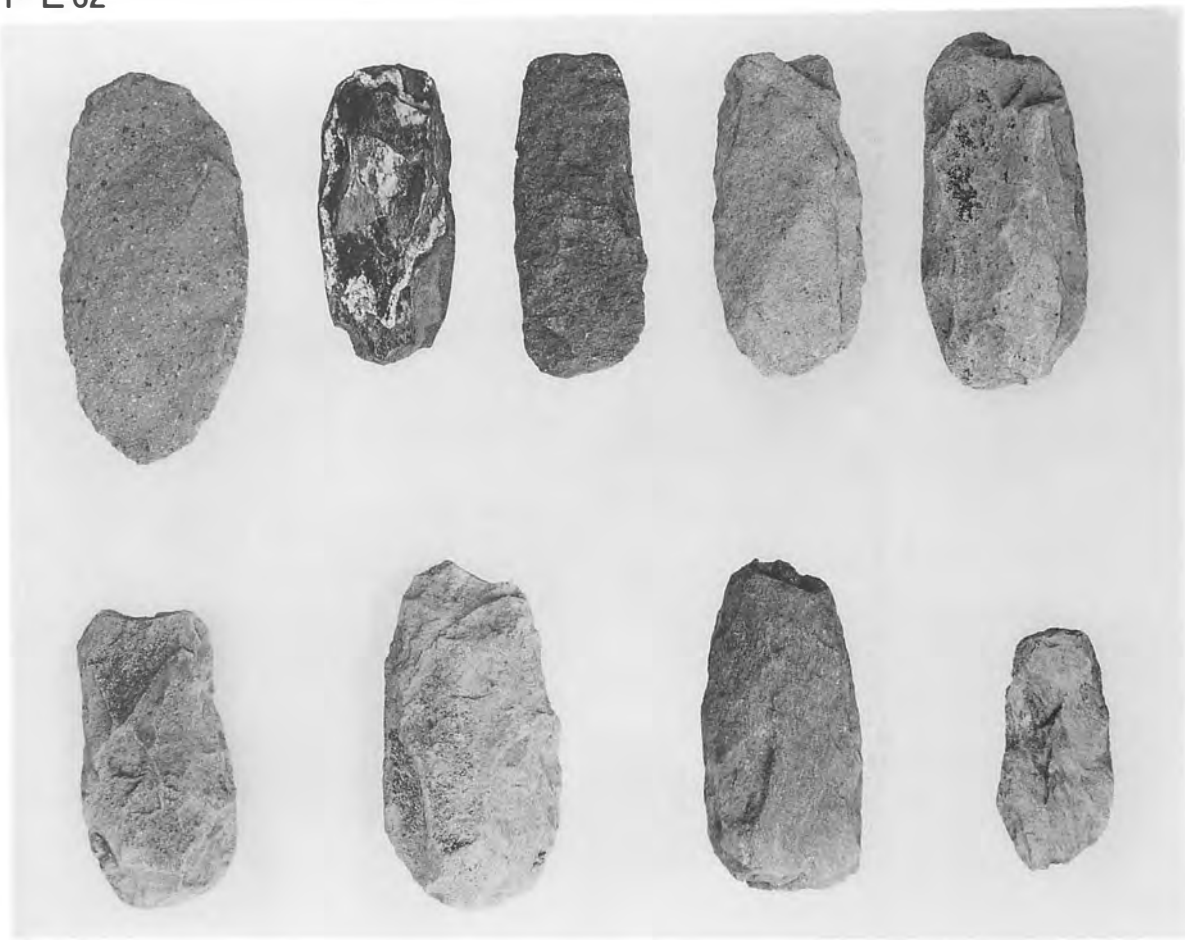
古閑式・黒川式

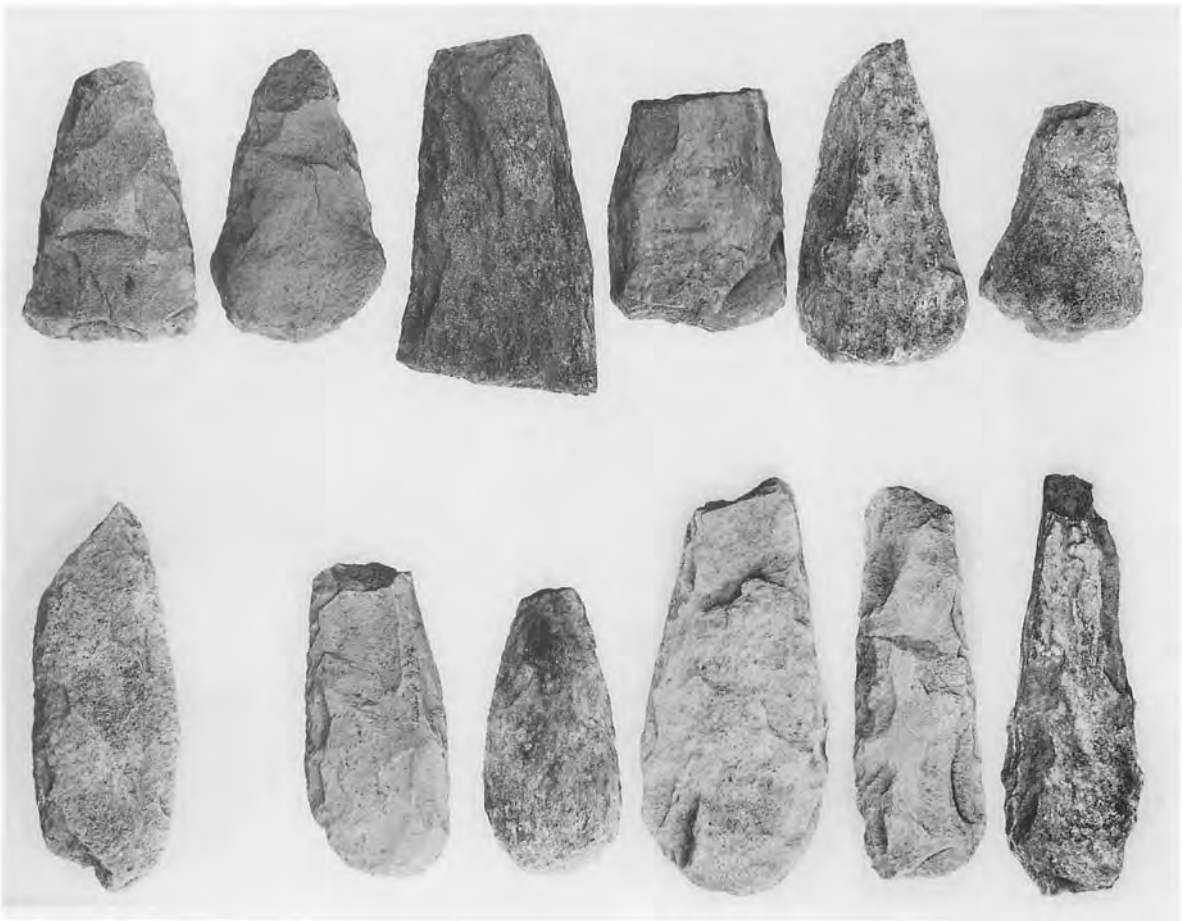
E調査区 縄文時代後期～晩期の土器



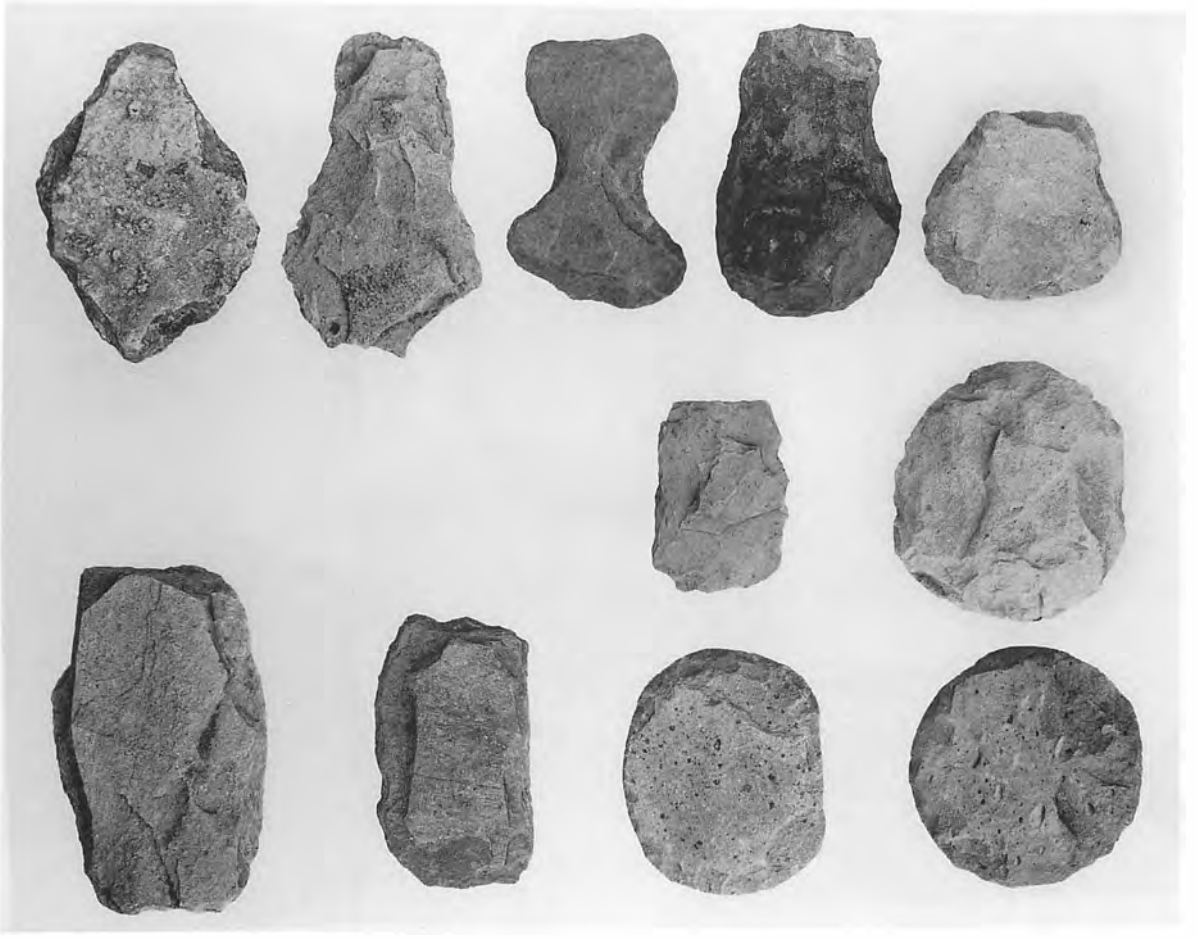


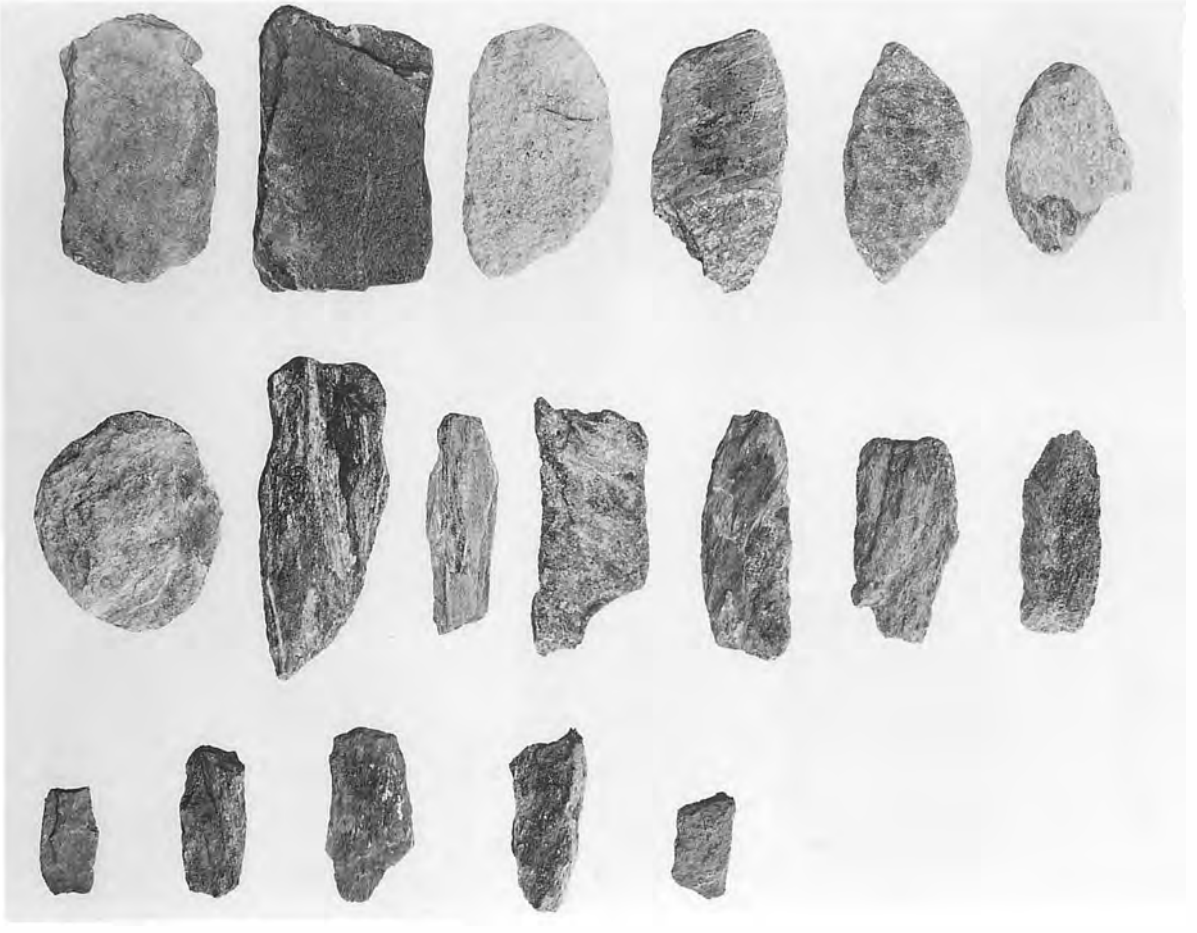
E調査区住居跡(上)出土 縄文時代後期～晩期の土器及び組織痕土器(下)



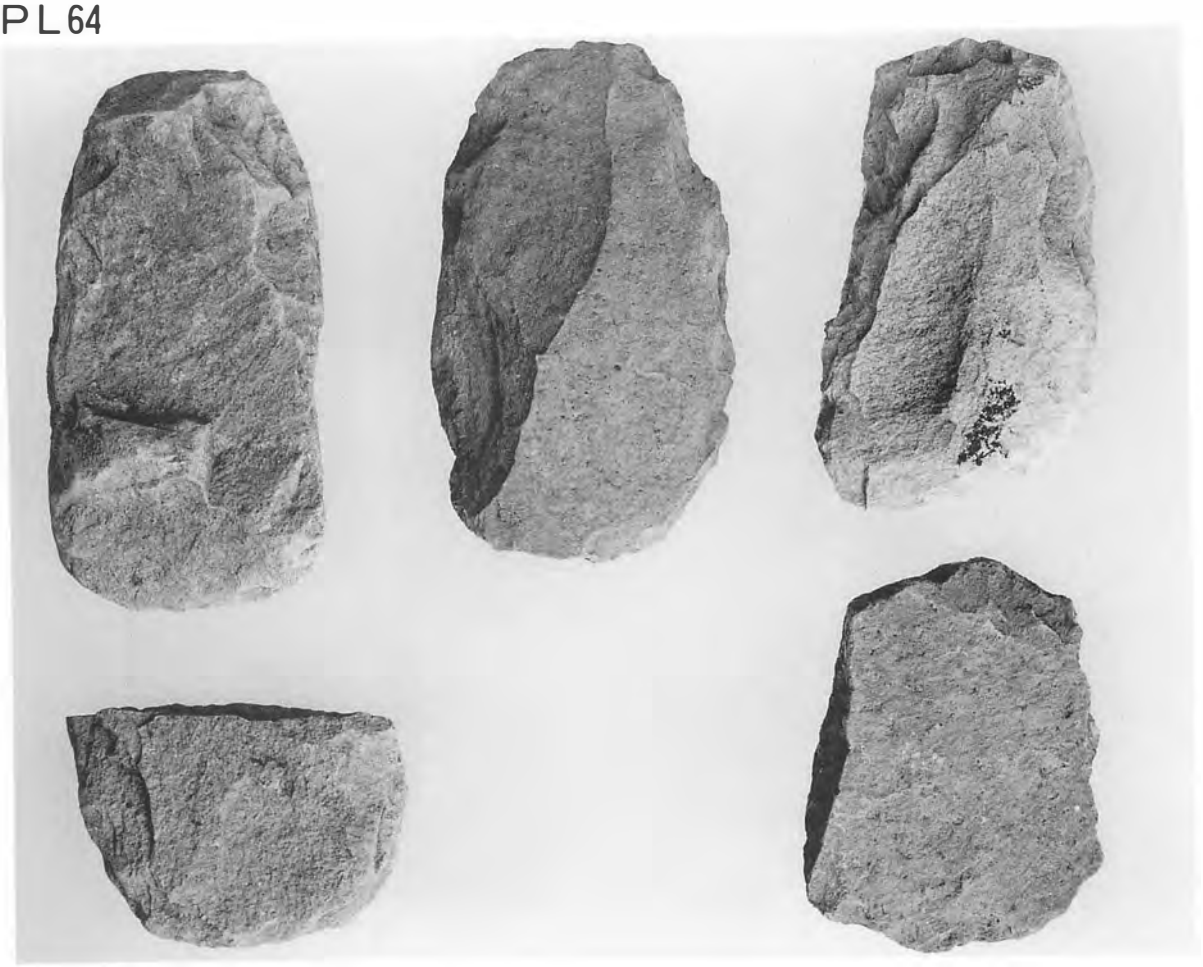


各調査区出土 打製石斧

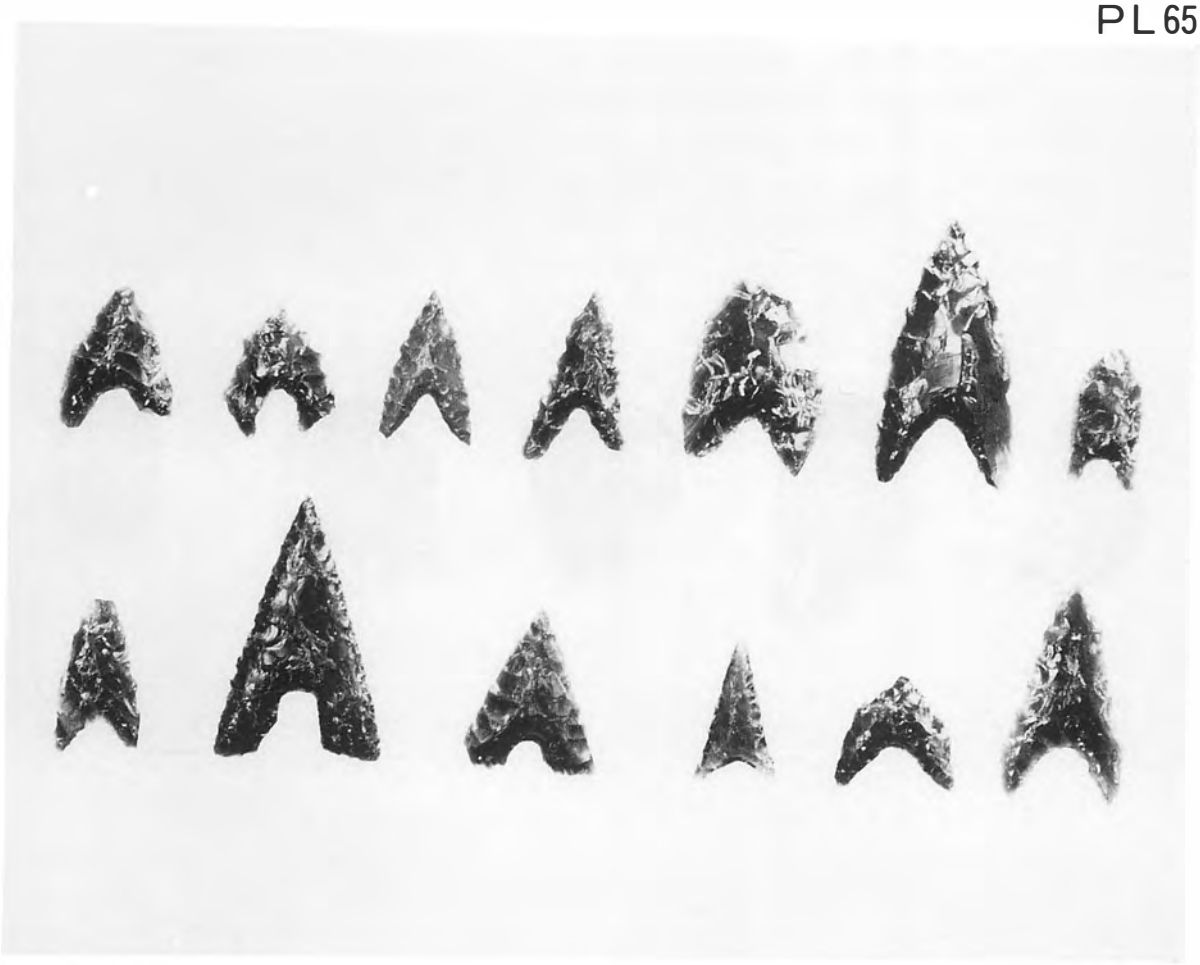


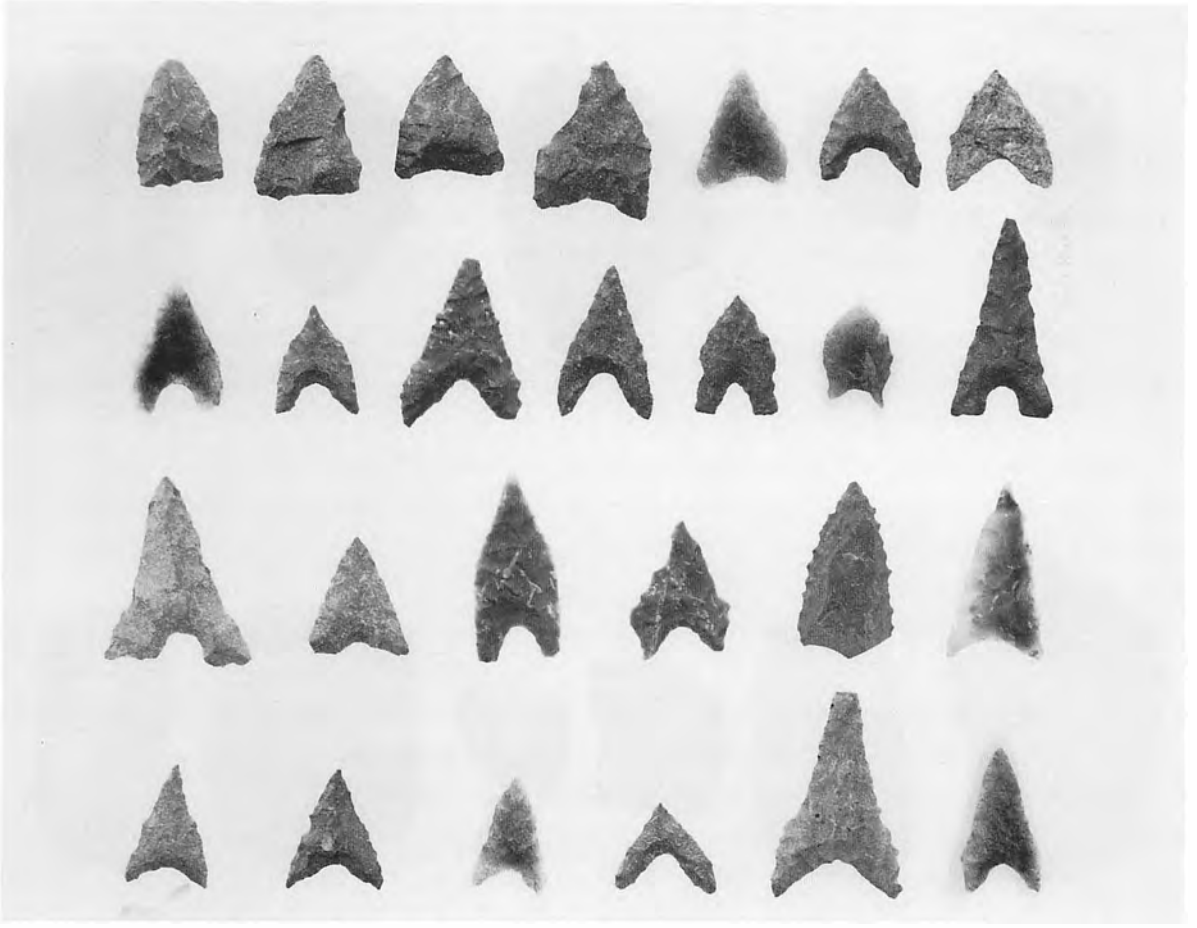


各調査区出土 打製石斧

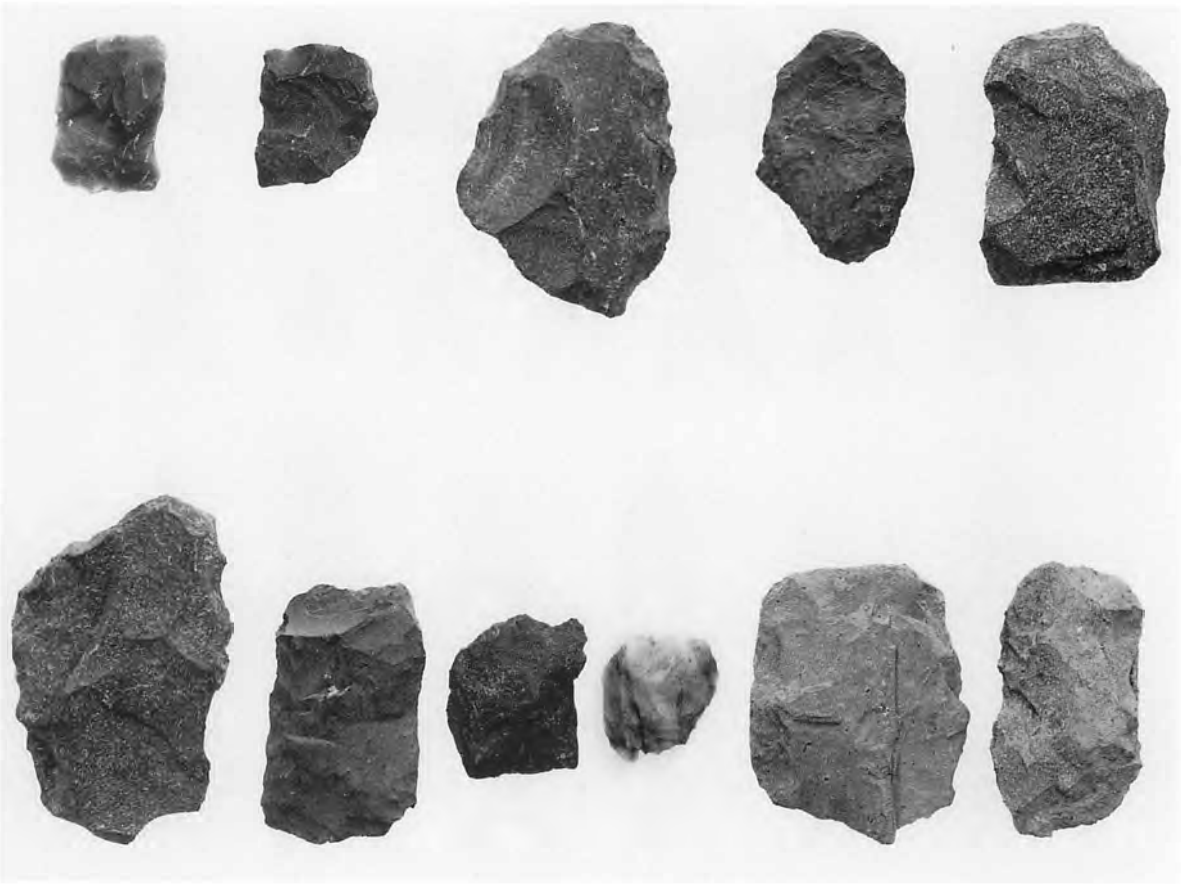


各調査区出土 打製石斧(上)及び磨製石斧(下)



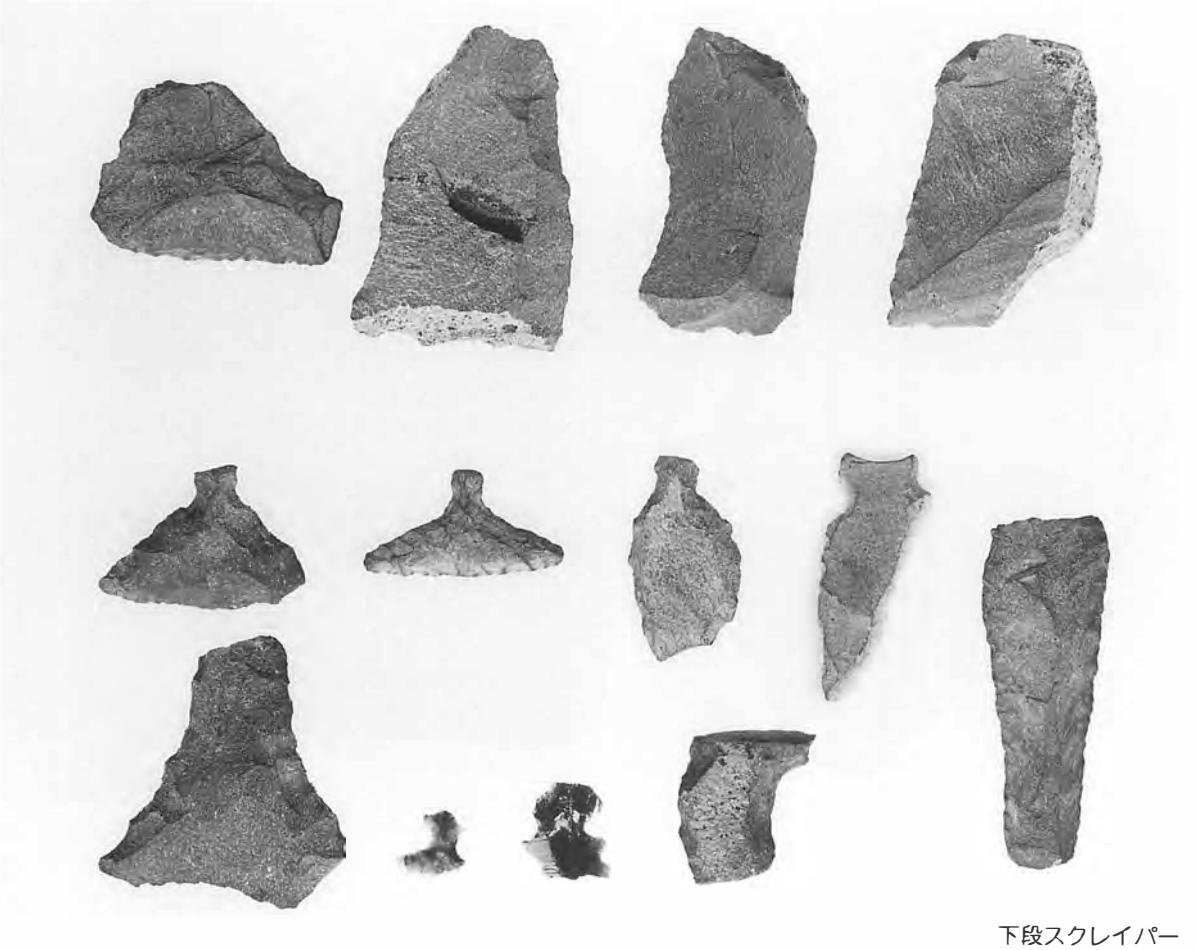


各調査区出土 石鏃



各調査区出土 クサビ形石器

使用痕のある剥片



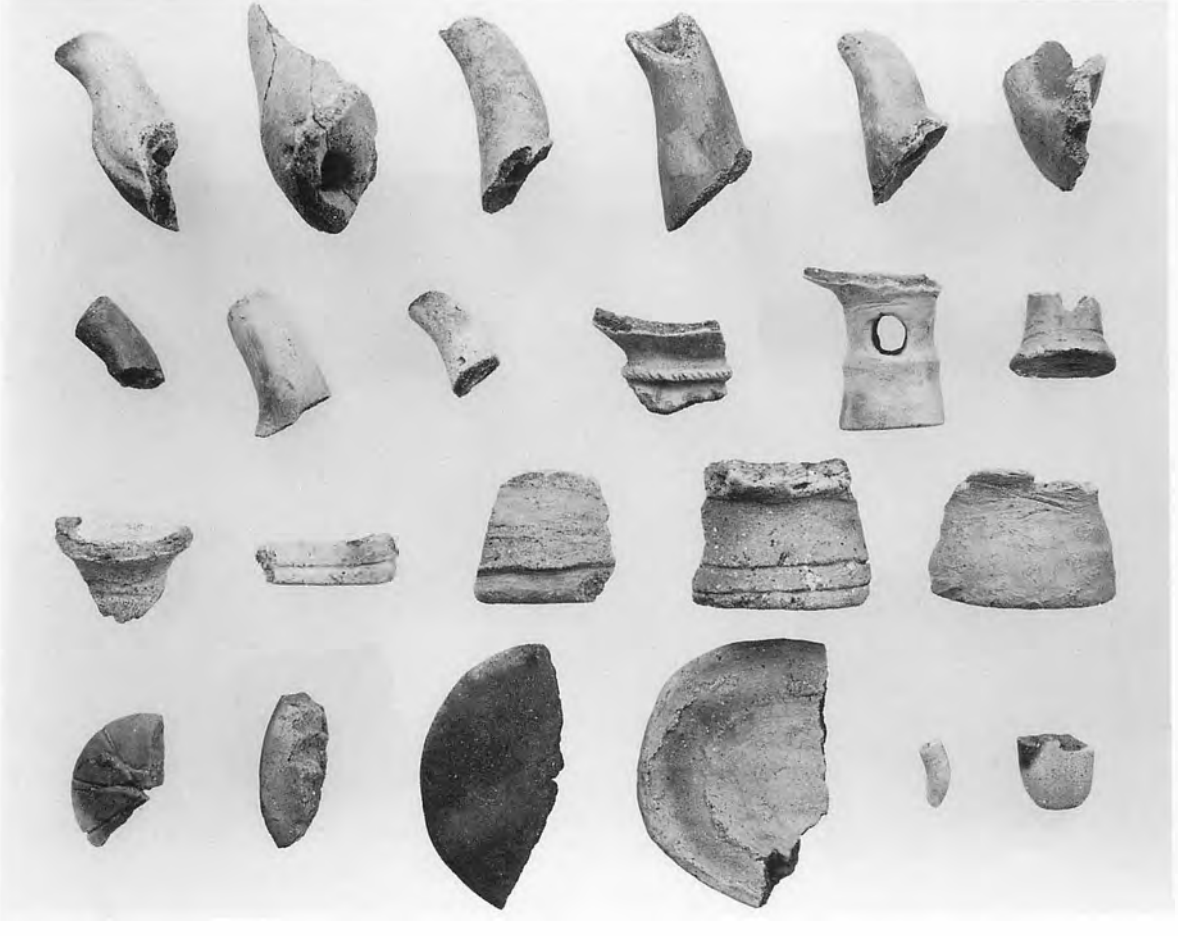
下段スクレイパー

各調査区出土 使用痕のある剥片及びスクレイパー

各調査区出土 黒曜石原石(上)及び石皿(下)

各調査区出土 石皿(上)及び磨石(下)

各調査区出土 磨石(上)及び有溝砥石(下)



各調査区出土 石製品(上)及び注口土器、高坏、土製品(下)

PL72

弥生時代の遺物

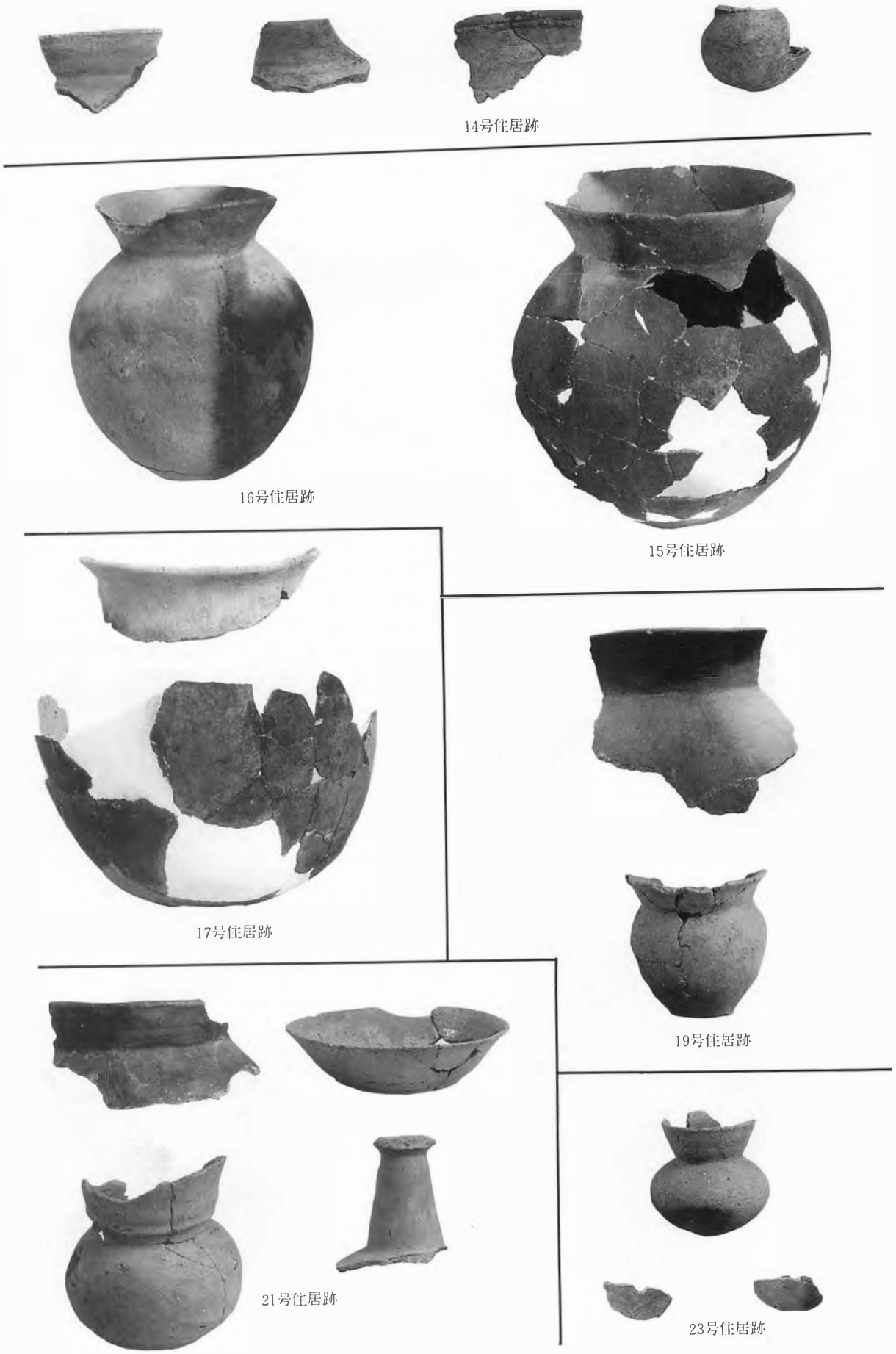
8 号住居跡

9 号住居跡

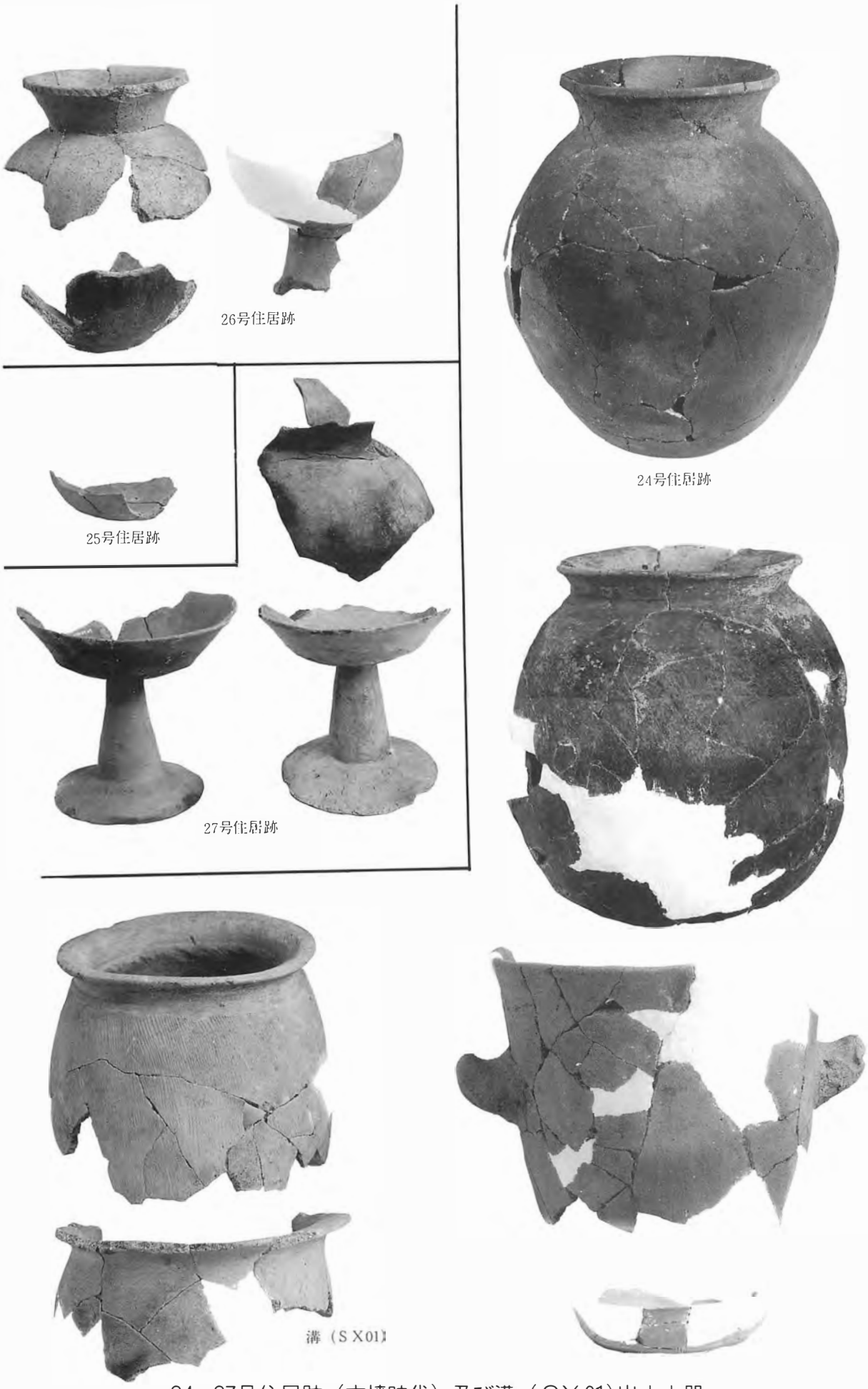
13号住居跡

12号住居跡

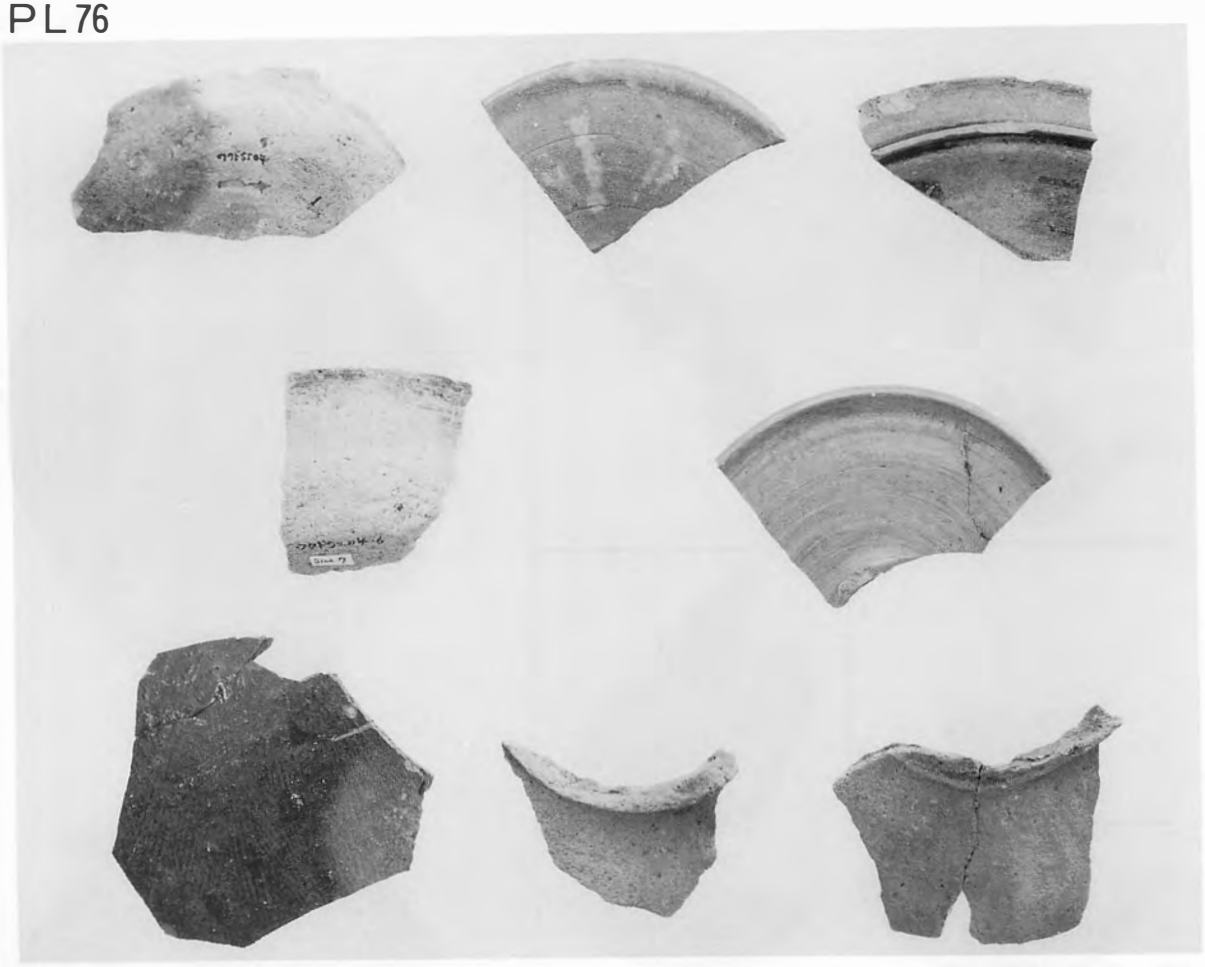
8・9・12・13号住居跡（古墳時代）出土土器



14～16・19・21・23号住居跡（古墳時代）出土土器



24～27号住居跡（古墳時代）及び溝（SX01）出土土器



1～6　4号住　10･11 14号住

7～9 溝（SX 01）

4･14号住居跡及び溝（SX 01）出土土器

熊本県文化財調査報告第144集

ワクド石遺跡

熊本県菊池台地における縄文時代後期集落の調査
県営畑地帯総合土地改良事業に伴う文化財調査

平成6年3月31日

編集
発行　熊本県教育委員会
〒860 熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷　敷島印刷株式会社

05 教委 教文
② 009

05 教委　教文
② 009

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 144 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：ワクド石遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日